

瑞穂町文化財調査報告書 第3集

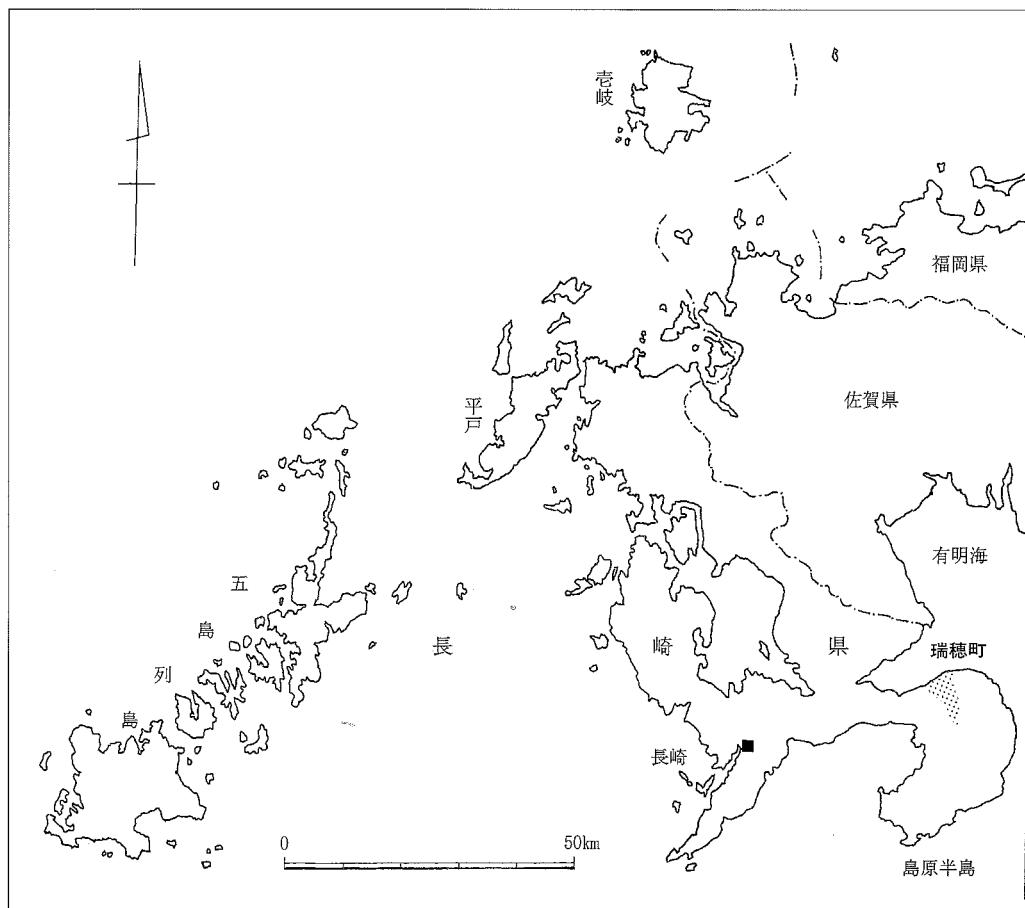
陣ノ内遺跡

1998

長崎県瑞穂町教育委員会

瑞穂町文化財調査報告書 第3集

陣ノ内遺跡



ごあいさつ

このたび本町にあります陣ノ内遺跡に関する調査報告書を刊行することになりました。中山間地総合整備事業（夏峰地区圃場整備事業）に当該遺跡がかかる虞れが生じましたため、平成七年度から八年度にかけて試掘調査と発掘調査を実施したものであり、本書はその詳細を報告書にまとめたものであります。

近年、全国で年間に行われる埋蔵文化財の発掘調査件数は優に一万件を超えると聞き及んでおりますが、その大半は各種の開発事業に関して緊急に行われるものといわれております。これらの埋蔵文化財、つまり遺跡は私たちの遠い祖先が現代に残してくれた遺産であり、本来は子々孫々に継承していくべきものであります。が開発事業に関して発掘調査を余儀なくされる例も少なくないのが実情であります。陣ノ内遺跡の発掘調査もその一例であります。

今回の発掘調査によって縄文時代から古墳時代、さらに中世にいたる多くの資料が出土しており、三万点をこえる資料が得られております。これらの資料は広く活用をはかるべく庁舎の一部に展示公開いたしておりますが、これらの出土資料とともに本書が文化財の保護顕彰に役立つことを願うものであります。

最後になりましたが、陣ノ内遺跡の試掘調査段階から本調査にいたるまで、直接間接にご指導いただきました長崎県文化課の諸先生方、発掘調査から整理作業と報告書作成にいたるまで直接ご担当いただきました長崎県考古学会長正林 譲先生と永嶋 豊先生に深く感謝いたします。

平成10年3月

瑞穂町教育長 小 峰 辰 雄

例　　言

1. 本書は、長崎県南高来郡瑞穂町岡名字前田に所在する陣の内遺跡に関する緊急発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査は中山間地総合整備事業（夏峰地区圃場）にさきだって、瑞穂町教育委員会が下記のとおり実施した。

- | | | | | | | |
|---|-------------|---------|-------------|---|----------|--------|
| ① | 1995（平成7）年度 | 試掘調査 | 1995年1月8日 | ～ | 1月17日 | (10日間) |
| ② | 〃 | 第一次発掘調査 | 1996年2月26日 | ～ | 4月2日 | (23日間) |
| ③ | 1996（平成8）年度 | 試掘調査 | 1996年7月8日 | ～ | 7月23日 | (11日間) |
| ④ | 〃 | 第二次発掘調査 | 1996年10月14日 | ～ | 97年2月19日 | (84日間) |

3. 発掘調査関係者は次のとおりである。(括弧内数字は調査回次)

小峰　辰雄	瑞穂町教育長
鈴木　稔	〃 教育委員会
本田　雅之	〃 農村整備室長
福田　一志	長崎県教育庁文化課 (①、②、③)
東　貴之	〃 〃 〃 (①、②、③)
正林　護	長崎県考古学会会長 (④)
永嶋　豊	調査員（現、長崎県文化課）(④)
小松　旭	長崎県文化課 (④)
矢津田英夫	㈱菱重興産 (④)

4. 本書の執筆は、第一次調査（①、②、③）に関しては福田と東があたり、第二次調査（④）については正林と永嶋が担当した。

5. 発掘調査において長崎大学助教授長岡信治氏から地形・地質について教示を受けた。記して感謝申し上げる。

6. 調査の整理段階で次の方々の協力を受けた。

前田ちい・園田美鈴・本田加代美・相内すみ子・酒井美穂・酒井　恵・池浦和恵

7. 本書の編集は正林　護・福田一志・永嶋　豊が担当した。

8. 本遺跡の出土遺物は瑞穂町教育委員会に保管してある。

本文目次

瑞穂町の地理的歴史的環境	1
第1章 第1次調査	4
第2章 第2次調査	24

表 目 次

第1表 陣の内遺跡陶磁器層位別出土一覧表	8
第2表 坏・皿の法量	14

図版目次

第1図 瑞穂町内遺跡分布図	2
第2図 南側セクション図(S=1/80)	4
第3図 遺構図(S=1/100)	6
第4図 遺構図(S=1/100)：自然流路と製鉄関連遺構？	7
第5図 繩文・弥生時代の遺物(1/3)	9
第6図 中世の遺物(1/3)	10
第7図 中世の遺物(1/3)	11
第8図 中世の遺物(1/3)	12
第9図 その他の遺物(1/3)	13
第10図 陣の内遺跡坏の形態	15
第11図 陣の内遺跡小皿の形態	15
第12図 陣の内遺跡調査区図	25
第13図 I-A～C区南壁断面図	26
第14図 I-C～D区南壁断面図	27
第15図 I-A区II層柱穴群検出状況実測図	28
第16図 I-A区I層遺物実測図	29
第17図 I-A区II層遺物実測図	30
第18図 I-A区遺物実測図	31
第19図 I-A・B区間畦畔部II層遺物実測図①	32
第20図 I-A・B区間畦畔部II層遺物実測図②	33
第21図 I-B区I層遺物実測図	33
第22図 I-B区II層遺物実測図①	35
第23図 I-B区II層遺物実測図②	36
第24図 I-B区II層遺物実測図③	37
第25図 I-B区II層遺物実測図④	38
第26図 I-B区北東部II層土器集中域遺物実測図	39

第27図	I—B区南西部・II層 Pit 関連遺物実測図	40
第28図	I—B区III層遺物実測図①	41
第29図	I—B区III層遺物実測図②	42
第30図	I—B区IV層遺物実測図	43
第31図	I—B区遺物実測図	44
第32図	I—C区II層遺物実測図①	45
第33図	I—C区II層遺物実測図②	46
第34図	I—C区III層遺物実測図①	47
第35図	I—C区III層遺物実測図②	48
第36図	I—C区III層遺物実測図③	49
第37図	I—C区III層遺物実測図④	50
第38図	I—C区III層遺物実測図⑤	51
第39図	I—C区IV層遺物実測図①	52
第40図	I—C区IV層遺物実測図②	53
第41図	I—C区V層遺物実測図	54
第42図	I—C区VI層遺物実測図	55
第43図	I—C・D区間1号住居跡実測図	56
第44図	I—C・D区間畦畔部南拡張区1号住居跡遺物実測図	57
第45図	I—C・D区間畦畔部1号住居跡床面遺物実測図	57
第46図	I—C・D区間畦畔部遺物実測図	58
第47図	I—C・D区間畦畔部南拡張区遺物実測図	58
第48図	I—D区遺物実測図	59
第49図	I—D区III層遺物実測図①	61
第50図	I—D区III層遺物実測図②	62
第51図	I—D区III層遺物実測図③	62
第52図	I—D区IV層遺物実測図①	63
第53図	I—D区IV層遺物実測図②	64
第54図	I—D区IV層遺物実測図③	65
第55図	I—D区V層遺物実測図①	66
第56図	I—D区V層遺物実測図②	67
第57図	I—D区V層遺物実測図③	68
第58図	I—D区V層遺物実測図④	68
第59図	I—D区III層長方形遺構関連遺物実測図①	69
第60図	I—D区III層長方形遺構関連遺物実測図②	69
第61図	I—D区南西部III・V層遺物実測図①	70
第62図	I—D区南西部III・V層遺物実測図②	70
第63図	I—D拡張区2号住居跡実測図	71
第64図	I—D区2号住居跡関連遺物実測図①	72
第65図	I—D区2号住居跡埋土出土遺物実測図②	73
第66図	I—D区2号住居跡床面出土遺物実測図	75

第67図	I—D区 2号住居跡貼床土壤遺物実測図	75
第68図	I—D区北拡張区出土遺物実測図	76
第69図	I—G区 I層遺物実測図	77
第70図	I—F区柱穴分布状況実測図	77
第71図	I—G区柱穴分布状況実測図	78
第72図	I—I区 I・III層遺物実測図	79
第73図	I—I区豎穴状遺構実測図	80
第74図	I—I区豎穴状遺構関連遺物実測図	81
第75図	I—O・P・Q・R・S区北壁実測図	82
第76図	I—M区V層集石遺構実測図	83
第77図	I—M・N区間畦畔部III層遺物実測図	83
第78図	I—N区遺物実測図	84
第79図	I—O区IV層遺物実測図	85
第80図	I—P区III層遺物実測図	85
第81図	I—P・Q区間畦畔部II層遺物実測図	85
第82図	I—P・Q区間畦畔部III層遺物実測図	86
第83図	I—Q区II層遺物実測図	86
第84図	I—Q区III層遺物実測図①	87
第85図	I—Q区III層遺物実測図②	88
第86図	I—Q区埋設土器（中世）実測図	89
第87図	I—Q区遺物実測図	90
第88図	I—Q・R区間畦畔部集石遺構実測図	91
第89図	I—Q・R区間畦畔部遺物実測図	92
第90図	I—R区遺物実測図	92
第91図	I—R区層IV遺物実測図	93
第92図	I—R区V層遺物実測図	94
第93図	I—S区層遺物実測図	95
第94図	I—S区IV層遺物実測図	96
第95図	I—S・T区間畦畔部遺物実測図	96
第96図	I—T・V・W・Y区北壁断面図	97
第97図	I—T区遺物実測図	98
第98図	I—T区III層遺物実測図	99
第99図	I—T区IV層遺物実測図①	100
第100図	I—T区IV層遺物実測図②	101
第101図	I—T区IV層遺物実測図③	102
第102図	I—T区V層遺物実測図	103
第103図	I—T・U区畦畔部遺物実測図	104
第104図	I—U区III層遺物実測図①	105
第105図	I—U区III層遺物実測図②	106
第106図	I—U区III層遺物実測図③	107

第107図	I—U区1号集石遺構関連遺物実測図①	108
第108図	I—U区IV層遺物実測図（折り込み①）	109
第109図	I—U区1号集石遺構実測図（折り込み①）	110
第110図	I—U区1号集石遺構関連遺物実測図②	111
第111図	I—U区2号集石遺構実測図	111
第112図	I—V区III層遺物実測図	112
第113図	I—V区IV層遺物実測図	112
第114図	I—V・W区間畦畔部II層・集石遺構遺物実測図	112
第115図	I—U・V区間畦畔部遺物実測図（折り込み②）	113
第116図	I—V区遺物実測図①（折り込み②）	114
第117図	I—V・W区間畦畔部集石遺構実測図（折り込み③）	115
第118図	I—W区III層遺物実測図①（折り込み③）	116
第119図	I—W区III層遺物実測図②	117
第120図	I—W区III層遺物実測図③	118
第121図	I—W区遺物実測図	118
第122図	I—W・X区間畦畔部II層遺物実測図	119
第123図	I—W・X区間畦畔部III層遺物実測図	119
第124図	I—X区III層遺物実測図	120
第125図	I—X区IV層遺物実測図①	121
第126図	I—X・Y区間畦畔部III層遺物実測図	122
第127図	I—X区IV層遺物実測図②（折り込み④）	123
第128図	I—X区V層遺物実測図（折り込み④）	123
新129図	I—X区石組遺構実測図（折り込み④）	124
第130図	I—Y区III層上面遺物出土状況図	125
第131図	I—Y区III層遺物実測図①	126
第132図	I—Y区III層遺物実測図②	127
第133図	I—Y区III層遺物実測図	128
第134図	I—Y区IV層遺物実測図	128
第135図	I—Y区V層遺物実測図	128
第136図	II—B・D・E・G・H・I・K区東壁断面図	133
第137図	II—L・M・O・P・Q区東壁断面図	134
第138図	II—R区東壁断面図	135
第139図	II—S・T・V区東壁断面図	135
第140図	II—X区東壁断面図	136
第141図	II—B区II層遺物実測図	136
第142図	II—B区III層遺物実測図①	137
第143図	II—B区III層遺物実測図②	138
第144図	II—B区III層遺物実測図③	139
第145図	II—B・C区間畦畔部I層遺物実測図	140
第146図	II—B・D区間畦畔部遺物実測図	141

第147図	II—D区遺物実測図	142
第148図	II—E区IV層集石遺構実測図	143
第149図	II—E区土壙墓副葬高坏実測図	144
第150図	II—G区II層遺物実測図	144
第151図	II—G・K区間畦畔部遺物実測図	145
第152図	II—H区III層遺物実測図	145
第153図	II—H区IV層遺物実測図	146
第154図	II—H区甕棺墓出土状況実測図	146
第155図	II—H区甕棺実測図	147
第156図	II—J区III層遺物実測図	147
第157図	II—K区II層遺物実測図	147
第158図	II—K・L区間畦畔部III層遺物実測図	148
第159図	II—K・O区間畦畔部遺物実測図	148
第160図	II—L区II層遺物実測図	149
第161図	II—L区II層面集石遺構実測図	149
第162図	II—L区集石遺構関連遺物実測図	150
第163図	II—L・P区間遺物実測図	150
第164図	II—N・R区間畦畔部堅穴埋土遺物実測図	150
第165図	II—O区IV層遺物実測図	151
第166図	II—O区弥生土器出土状況実測図	152
第167図	II—O区V層遺物実測図	152
第168図	II—O・P区間畦畔部IV層遺物実測図	154
第169図	II—O・S区間畦畔部II層遺物実測図	154
第170図	II—P区IV層遺物出土状況図	155
第171図	II—P区IV層遺物実測図	156
第172図	II—P区溝関連遺物実測図	156
第173図	II—P・Q区間畦畔部遺物実測図	156
第174図	II—P・T区間畦畔部遺物実測図	156
第175図	II—Q・U区間畦畔部IV層遺物実測図	157
第176図	II—R区住居跡遺物実測図	157
第177図	II—T区遺物実測図	157
第178図	II—T・U間畦畔部II層遺物実測図	157
第179図	II—T・W区間畦畔部III層遺物実測図	157
第180図	II—U区V層遺物実測図	158
第181図	II—V区III層遺物実測図	158
第182図	II—V区IV層遺物実測図	159
第183図	II—V・W・X・Y区VI層上面縄文時代遺構遺物出土状況図	160
第184図	II—V・W・X・Y区VI層上面炉跡状遺構硬化面範囲図（折り込み⑤）	161
第185図	II—V区VI層遺物実測図①（折り込み⑤）	162
第186図	II—V区VI層遺物実測図②	163

第187図	II—V区VI層遺物実測図③	163
第188図	II—V区VI層遺物実測図④	164
第189図	II—V区VI層遺物実測図⑤	165
第190図	II—V区VI層遺物実測図⑥	166
第191図	II—V区VI層遺物実測図⑦	167
第192図	II—V区VI層遺物実測図⑧	168
第193図	II—V区VI層遺物実測図⑨	169
第194図	II—V区VI層遺物実測図⑩	170
第195図	II—V・W区間畦畔部IV層遺物実測図	171
第196図	II—W区III層遺物実測図	171
第197図	II—W区IV層遺物実測図	172
第198図	II—W区V層遺物実測図	172
第199図	II—X区IV層遺物実測図（折り込み⑥）	173
第200図	II—X区V層遺物実測図（折り込み⑥）	173
第201図	II—X区IV層下面遺構遺物出土状況図（折り込み⑥）	174
第202図	II—X・Y区間畦畔部遺物実測図	175
第203図	II—X・Z区間畦畔部IV層遺物実測図	175
第204図	II—Y区遺物実測図	176
第205図	II—Z区遺物実測図	177

写 真 図 版

【第1次調査】

写真図版1	土層と遺構検出状況	16
写真図版2	遺構検出状況	17
写真図版3	弥生時代の遺物	18
写真図版4	搬入磁器	19
写真図版5	土師質土器(1)	20
写真図版6	土師質土器(2)	21
写真図版7	上段：瓦質土器、下段：砥石・羽口	22
写真図版8	その他の遺物・遺物出土状況	23

【第2次調査（I区）】

写真図版9	遺跡・土層	187
写真図版10	土層・遺構	188
写真図版11	I—D区住居跡	189
写真図版12	住居跡状遺構・集石遺構	190
写真図版13	U・X区の集石遺構	191
写真図版14	Q・Rの区遺物出土状況	192
写真図版15	I区の遺物(1)	193
写真図版16	I区の遺物(2)	194

写真図版17	I 区の遺物(3)	195
写真図版18	I 区の遺物(4)	196
写真図版19	I 区の遺物(5)	197
写真図版20	I 区の遺物(6)	198
写真図版21	I 区の遺物(7)	199
写真図版22	I 区の遺物(8)	200
写真図版23	I 区の遺物(9)	201
写真図版24	I 区の遺物(10)	202
写真図版25	I 区の遺物(11)	203
写真図版26	I 区の遺物(12)	204
写真図版27	I 区の遺物(13)	205
写真図版28	I 区の遺物(14)	206
写真図版29	I 区の遺物(15)	207
写真図版30	I 区の遺物(16)	208
写真図版31	I 区の遺物(17)	209
写真図版32	I 区の遺物(18)	210
写真図版33	I 区の遺物(19)	211
写真図版34	I 区の遺物(20)	212
写真図版35	I 区の遺物(21)	213
写真図版36	I 区の遺物(22)	214
写真図版37	I 区の遺物(23)	215
写真図版38	I 区の遺物(24)	216
写真図版39	I 区の遺物(25)	217
写真図版40	II 区の遺跡と土層(1)	218
写真図版41	土層(2)	219
写真図版42	遺構(1)	220
写真図版43	遺構(2)	221
写真図版44	遺構(3)	222
写真図版45	II 区の遺物(1)	223
写真図版46	II 区の遺物(2)	224
写真図版47	II 区の遺物(3)	225
写真図版48	II 区の遺物(4)	226
写真図版49	II 区の遺物(5)	227
写真図版50	II 区の遺物(6)	228
写真図版51	II 区の遺物(7)	229
写真図版52	II 区の遺物(8)	230

陣の内遺跡の位置と地理的環境

陣の内遺跡のある瑞穂町は長崎県の南部、島原半島の北麓にある。行政区画上は長崎県南高来郡に属し有明海に北面するが、1991年（平成3）の噴火によって生じた大火碎流が多くの人命財産を奪った「普賢岳」の北麓、とした方が位置の理解には早いかもしない。

島原半島は諫早地峡いさはやによって九州西北部に連なるが、東は有明海をはさんで熊本県西海岸長州港との海上距離は14kmを測る。南は熊本県天草島北部を7kmの海上に望む。島原半島の北岸一帯は有明海西部（諫早湾）を介して8kmの彼方に長崎県北高来郡一帯と多良岳（1058m）を遠望することができる。

島原半島は有馬川以南の南島原火山体と、普賢岳（1359m：現在はドーム隆起によってこれより約100m高い）を主峰とする雲仙火山体からなり、雲仙岳の東部と北部には大小の扇状地が見られる。島原半島における行政境界はおおむねこれらの扇状地形によっており、海岸線を底辺とした二等辺三角形の平面形を呈するところが多い。

陣の内遺跡のある瑞穂町は雲仙の北部にあたり、吾妻岳（868m）を頂点とした、南北約9km、東西約5kmの扇状地形にある。町の南部は大峰（507m）と吾妻岳があり標高300m以上の急峻な地形が見られる。この標高100m付近までは洪積層で表土の下には礫層が見られる。この標高域から海岸近くまで現在耕作地帯になっているが、沖積層は河川が小規模なこともあって河口近くにわずかに認められる程度である。

瑞穂町を含めた島原半島北岸は有明海の西部にあたる。有明海は潮汐差が6.6mに達する内湾で、干潮時には広大な干潟が現れる。干潟は白川・緑川・六角川・本明川などの河川が大量の土砂を供給したことによってヘドロの堆積がすんで形成されたといわれる。したがって、5～6kmにも達する広大な干潟も前記諸河川の河口部位にあたる有明海北部から「泉水海」の名称で呼ばれる諫早湾に顕著である。これらの干潟には有明海独特の魚介類も多種類が生息し、これらを対象とした漁業形態にも独特のものがあり、タイラギ漁・カニ漁・タコ壺漁などが現在も行われている。

これらの干潟を干拓によって陸地化したのが「諫早干拓地」であり、瑞穂町西隣の吾妻町海岸にまで及んでいる。瑞穂町の場合、かつて干潟が形成された痕跡はなく、現在も粗い砂地の海岸になっている。したがって有明海干潟の魚介類を対象とした漁撈も瑞穂町と西隣の吾妻町以西の諫早湾では異なっている。有明海魚種の中でも著名なムツゴロウも瑞穂町海域には生息せず、漁民はムツゴロウ漁を行わない。したがって住民も珍味に馴染みがほとんどない。一方、瑞穂町以東の島原半島北岸ではイイダコが生息し、独特の「タコ壺漁」の伝統がある。殻頂に穴を開けた2個のアカガイの殻を紐で合わせたものや、コウカイ・アカニシなど大型の巻き貝の殻に穴を開け紐をつけたものを、一連の縄に垂架してタコが「入居」したところを捕獲する漁法である。今のところこの漁撈方法がいつまで遡るか明らかでないが、今後この海域における貝塚の発見と調査に期待する以外にない。

陣の内遺跡は瑞穂町の西側にあり、船津川の河口に近い東岸の狭小な水田地帯にある。水田地帯東側の緩やかな丘陵部を前田、西側の丘陵一帯を夏峰といい、陣の内遺跡のある標高11～15mの三段からなる段丘になっている。この一帯は中世以降耕作に利用されていたことは確かで、それ以前は火山性土壌が地形形成に深くかかわっていたが、このことについては土層の項で触ることにする。

遺跡の北側約500mは海岸線になっており、国道57号線と島原鉄道が並行して東西に走っている。西は諫早市方向、東は島原市方向、遺跡に最も近い島原鉄道駅は「古部（こべ）」、島原鉄道バスの停留所は「古部駅前」である。



第1図 瑞穂町内遺跡分布図

陣の内遺跡の歴史的環境

長崎県教育委員会が1987年（昭和62）に刊行した『長崎県遺跡地図』によれば、瑞穂町内には20カ所の遺跡が収録されており、縄文時代6、弥生時代4、古墳時代6、中・近世4の内訳になっている。

旧石器時代遺跡は現時点で確認されていないが、西隣吾妻町の弘法原遺跡ではナイフ形石器が出土しており、東隣の国見町では百花台遺跡ほか13カ所の旧石器時代遺跡が確認されている。これらの遺跡は2～300mの比較的高い標高域にあり、多くは縄文時代早期の押型文土器の遺跡と複合している事が知られている。瑞穂町でも南辺300m台の西原遺跡では押型文土器が採集されており、吾妻・国見両町の旧石器時代遺跡と距離的に近接し、立地条件も酷似していることから、将来旧石器時代遺跡が確認される可能性が高い。

縄文時代には京ノ坪遺跡（晚期）・桑田遺跡（同）・西原遺跡（早期？）・コウモリ穴岩陰遺跡・バクチ穴岩陰遺跡と本報の陣の内遺跡（晚期）がある。瑞穂町資料館には西原遺跡の表面採集資料が収蔵されており、横型石匙・石鏸・扁平打製石斧などがある。また、岩戸神社周辺の洞窟では昭和40年ごろ地元の園田利徳氏によって土器が採集され氏の記憶では「縄目のような模様があった」といわれるが実態は定かではない。京の坪遺跡は1993年（平成5）土地改良事業に関して発掘調査が瑞穂町教育委員会によって行われている。報告書によれば京の坪遺跡は標高20m前後の水田にある遺物包含地で、押型文土器・塞ノ神式土器・磨消縄文土器・縄文晚期II式甕棺・晚期突帯文土器・石器類が出土している。これらも瑞穂町教育委員会（資料館）に保管されている。京の坪遺跡において、従前2～300mの標高域に集中的にみられることが指摘されてきた押型文土器が海岸に近い低い標高域においてもまとまって出土することが確認されたわけで、陣の内遺跡における押型文土器の出土状況と併せて、新しい視点が要求されることになった。

古墳時代には古路松塚古墳と柿ノ本古墳がある。古路松塚古墳は、守山大塚古墳（吾妻町）・三会大塚とともに島原半島における数少ない前方後円墳の一つと考えられてきたが、守山大塚以外は墳丘が損壊してしまい、原状を確認できない。島原半島の後期古墳は主に北部に分布しているが発掘調査の事例は少なく柿ノ本古墳（瑞穂町）・高下古墳（国見町）・一本松古墳（愛野町）があるにすぎない。柿ノ本古墳は、陣の内遺跡のある前田地区東隣の松江地区にあり、国道57号線沿いの丘陵上にある。1970年（昭和45）採土工事に関連して瑞穂町教育委員会が主催して緊急発掘調査が行われた。墳丘は失われていたが、径12m程度の円墳であったと考えられている。石室は单室構造で、高台付きの高環・平瓶・蓋付無頸壺・鉄刀・多数各種の鉄鏸・金銀環・水晶切子玉・瑪瑙製曲玉・碧玉製管玉などが出土した。柿ノ本古墳の時期は7世紀前半とされているが、6世紀末にさかのぼる可能性がある。島原半島には古墳時代の遺跡が75カ所、内高塚古墳41カ所が『長崎県遺跡地図』（長崎県教育委員会1987）に記載されている。この中で、愛野・吾妻・国見・有明の各町と島原市（島原半島北部・東北部）に51遺跡があり、半島全体の高塚古墳は70%がこの地域に分布していて、政治的に優位にたっていたことを物語る。527年、朝鮮半島問題をめぐって九州の豪族磐井とヤマトの繼体政権との間に紛争がおきる。一連の戦乱の後に磐井は敗死し、柏屋の屯を磐井の子は差し出して死を免れ一段落する。一方、繼体政権と磐井は朝鮮半島においても対立し、繼体側についていた壱岐直（壱岐の豪族）の配下が新羅で磐井の配下を殺す事件も発生した。壱岐島で6世紀後半になって巨大な石室古墳が増大することが知られているが、繼体側に立っていた壱岐の豪族が政治力を伸長させたことを反映したものと解することができよう。また同じころ北松浦郡の玄界灘沿岸と離島さらに五島列島小値賀島に小型ながら円墳が突如として出現する。この地域でも景行天皇による五島支配の伝承が『肥前風土記』に見え、

平戸島と小値賀に伝世された三本の環頭太刀に関する神功皇后の朝鮮半島出兵の伝承がある。これら離島群の古墳群は航海術にたけた水人集団の長の墳墓と考えられ、朝鮮半島との国際問題にのめりこんでいくヤマト政権の姿と、その枠組みに組み込まれて行く水人集団の姿を暗示している。島原半島北部の豪族たちが国内の動乱や国際関係にかかわっていたかどうか不明だが、『肥前風土記』に、景行天皇が熊本県長州の浜に来て島原半島に興味を示した際に山（雲仙）の神「高来津座」^{たかくつくら}が臣従的な態度を示した記事が見え、島原半島の豪族「神代直」^{かむしろのあたえ そのきのこおり}が彼杵郡まで景行天皇につきしたがったという記事も見える。多くの武器を副葬した柿ノ本古墳をはじめ島原半島北部の後期古墳群の被葬者は、ヤマト政権に従属することによって生存を図った地方豪族の姿を示すものかも知れない。

【参考文献】

1. 長崎県教育委員会『長崎県遺跡地図』「長崎県文化財調査報告書第87集」1987
2. 麻生 優・白石浩之「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』三 雄山閣1976ほか
3. 町田利幸外「京ノ坪遺跡」『瑞穂町文化財調査報告書第2集』瑞穂町教育委員会1994
4. 正林 譲ほか「柿ノ本古墳」『長崎県文化財調査報告書第35集』長崎県教育委員会1978
5. 平戸市七郎神社・同志々伎神社・小値賀町神島神社に各1口環頭太刀が伝世されていた。これらは神功皇后の朝鮮半島出兵に従った、七郎氏広・十城別王・鴨一速の佩刀とする伝承が平戸市七郎神社社伝にある。これらは戦前国宝に指定されていたが、志々伎神社分は戦前盗難にあり、神島神社分は1945年（昭和45）米軍の接収によって現存せず、七郎神社分のみが重要文化財として平戸市亀岡神社に保存されている。志々伎神社分は平戸市松浦歴史資料館に彩色の実測図が残り、神島神社分は小値賀島の故近藤政英氏による実測図がある。

第1章 第1次調査

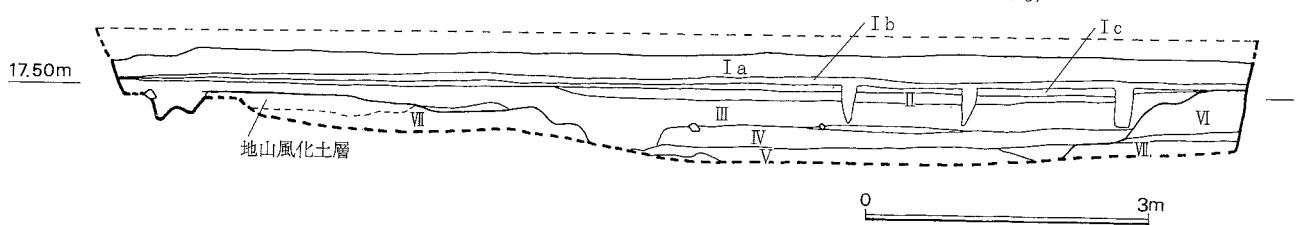
1次調査については、第12図陣の内遺跡調査区図に示した区域約325m²を平成7年2月26日～4月2日まで調査を実施した。調査区周辺は範囲確認により、中世のピットが検出されていたため、中世の遺物・遺構の検出が期待されていた。ここでは土層・遺構・遺物の順に出土遺物の説明をし、最後に考察することとする。

土層（第2図）

陣の内地区は本調査に入る前に試掘調査を広範囲におこなったが、どの調査区でも土層に変化がみられ、調査の当初、相互の堆積状況については擱むことができなかった。ただ、どの調査区も火山性の小礫が堆積し、水性作用をかなり受けたことが予想された。以下、1次調査区における層位について説明を加える。

I a層 灰褐色耕作土層（水田の床土層）

I b層 灰白色粘性土層（水田の床土みられるが、1cm内外の小礫を含みやや締まっている。）



第2図 南側セクション図(S=1/80)

セクション図中の3つの柱痕はこの土を覆土としている。

I c層 黄橙色硬質土（水田床土下に生ずる鉄分の沈着土とみられ、硬く締まっている。この層の下は確実に中世の包含層であるため鍵層となる。）

- II 層 暗灰色粘質土層（I b層に色調は似ているが、粘性をもち、小礫を含まない。本遺跡の遺構の覆土のほとんどがこの土を充填している。中世遺物包含層）
- III 層 暗黒褐色粘質土層（遺物を多量に含む層である。この層でいくつかに分類することも可能であろうが、土色そのものが黒を基調とするためここでは細分していない。ただ下層はやや黒みが強く、粘性があり、遺物もやや古いものが認められたため、遺物取り上げの際III層下として遺物取り上げをしたが、明確な一線は引けない。）III層は中世のある時期に自然流路を埋めた際の埋土であると考えられる。従って自然流路に沿った地区にのみ存在する。古代・中世遺物包含層）
- IV 層 灰褐色混礫砂質土層（粗い砂質土に5～10cm大の火山礫を含み、この中に磨滅した弥生土器が含まれている。遺跡中央部を通る自然流路中の堆積物で、水成堆積物である。弥生遺物包含層）
- V 層 灰白色砂質土層（礫の混入は無く、やや粗い砂層）IV層と同様に水成堆積物である。
- VI 層 灰白色粘質土層（西側にのみ存在する。）
- VII 層 乳白色粘質土層（基盤岩である玄武岩の風化土層である。この層が浸食されて自然流路を形成しており、遺跡の中央部を南北に縦断して検出されている。）（第4図）

遺構（第3・4図）

建物遺構（第3図）

II層を剥いた段階で、III層上面に柱穴・土壙等が多数検出された。柱穴については4～5棟の建物址を考えてみた。柱穴については柱穴間の長さが1,40m前後と3,20m前後の間隔のものとに大方集中しており、これを基本として建物跡の復元をおこなった。柱穴の大きさについては中央から北西側にやや大きな一群が存在し、このピットが建物の一つの基本となる。ピットの深さもかなりあることから調査区を南北に走る自然流路の埋め立てにより、基盤が軟弱であることからの対応であったことも考えられる。調査区南側では直径10cm内外の比較的小さなピットの一群が検出されている。東側に一棟の建物復原をおこなったが、南北に軸を持つ細長いもので倉庫等の建物址と考えられる。なお遺物が出土したものについてピット番号、土壙番号を附している。

土壙（第3図）

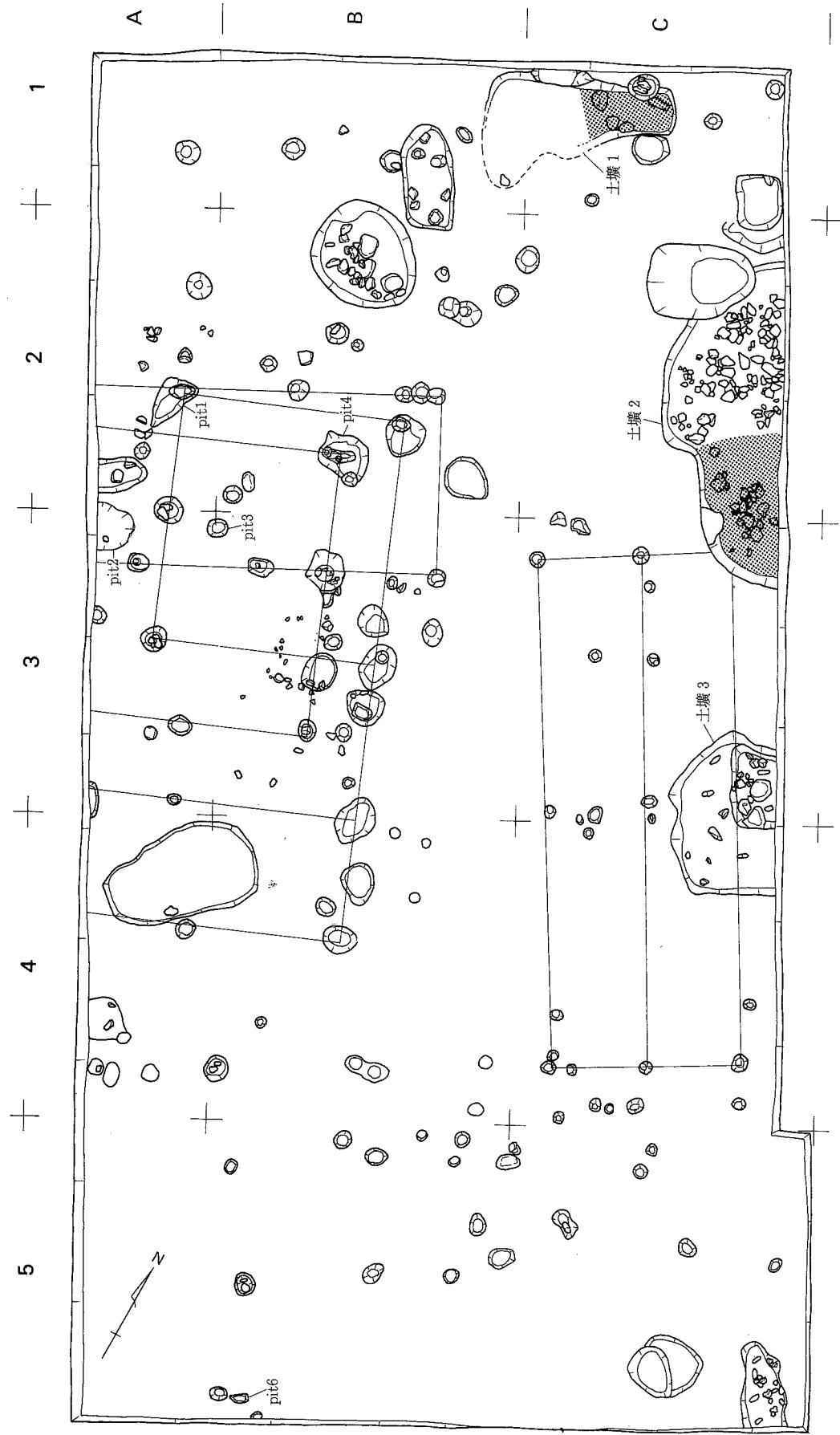
調査区のピット群を取り巻くように土壙群が検出された。第3図の土壙のなかでも土壙1・2は炭化物や焦土、土壙の底部が赤く変色するなど鍛冶関連の工房址であろうことが予想される。土壙1は東西に長く東側の底部が赤く変色しており、側面の2つのピットのうち、北側のピットは炭が充填していた。この土壙からはベトナム産の磁器碗が出土しており、15世紀代の遺構であろうことが予想される。土壙2からは羽口片6片や鉄滓などが出土しており、土壙南側が赤く変色していた。第6図4、10、29、30、59などが出土しており、時間的にはかなり幅をもっている。土壙3は土の変色はないが鉄滓数点が出土している。第7図37、76が出土しており15世紀代の遺構であろうことが予想される。

土壙（第4図）

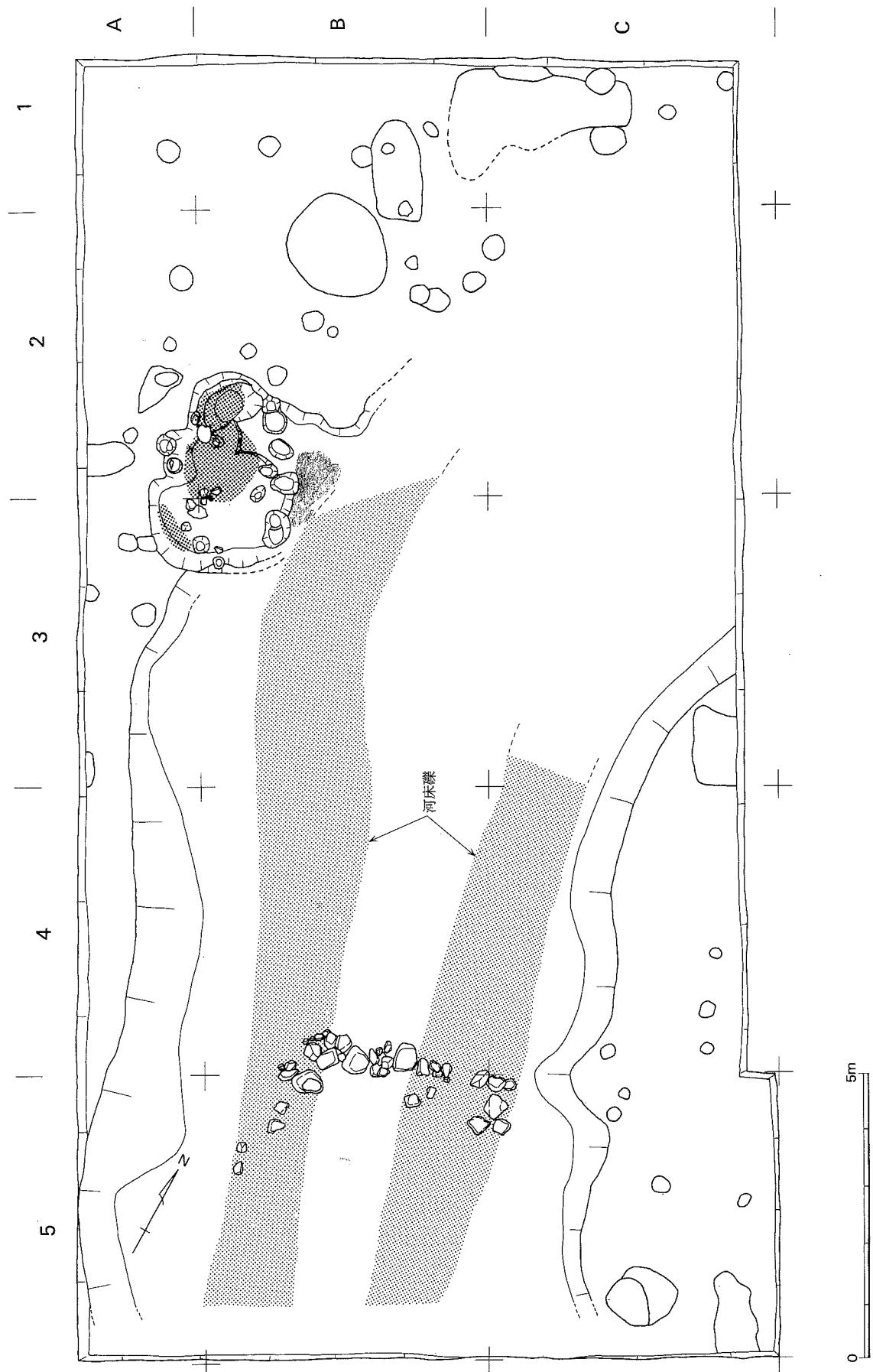
自然流路と土壙4を第4図に示した。ほぼ南北に幅7m、深さ50cmで自然流路が形成され、北側でやや蛇行するが、北側でははっきりとしたラインは掘めなかった。自然流路内の底部は、小礫が2列に南北に堆積しており、この遺構が水成作用による自然流路であることことが予想された。この自然流路内に3層が堆積している。この流路内からは、鉄滓や陶磁器が多量に出土しており、流路への埋土を行った際に入り込んだ物と、流路が存在した段階で投棄されたものなどが混在しているものと考えられる。自然流路の壁を削り、製鉄遺構を構築している。遺構の底部は赤く変色し、被熱したことが十分考えられる。この遺構そのものは、南側のラインが明確でなく、第3図の遺構群と同時期の可能性ある。

このように陣の内遺跡では、製鉄に関連するであろうと思われる遺構が数多く検出され、土壙1・3の遺物からおよそ15世紀代の時期が主体であろうこと予想される。

第3図 遺構図 ($S = 1/100$)



第4図 遺構図($S = 1/100$)：自然流路と製鉄関連遺構？



遺物

弥生時代の遺物（第5図）

IV層より弥生時代の遺物が若干出土している。石器としては石鏃、石槍などの狩猟用のもの、収穫用として搔器、石庖丁、扁平打製石斧等が出土しており、この地で水田耕作がおこなわれていたことは確かであろう。この中で石庖丁については2点出土しているが、2点とも非常に小形であることに特徴をもつ。土器は弥生後期終末の遺物で占められ台付甕などの肥後系の弥生土器を主体にする。このような状況は今福遺跡（宮崎1986）や、口之津三軒屋貝塚（吉田・他1975）など島原半島全域において看守でき、この時期の島原半島における一般的な様相と思われる。またこの時期の遺物については2次調査で多くの資料が出土しているので項をゆずることとする。

中世の遺物（第1表、第6図～8図）

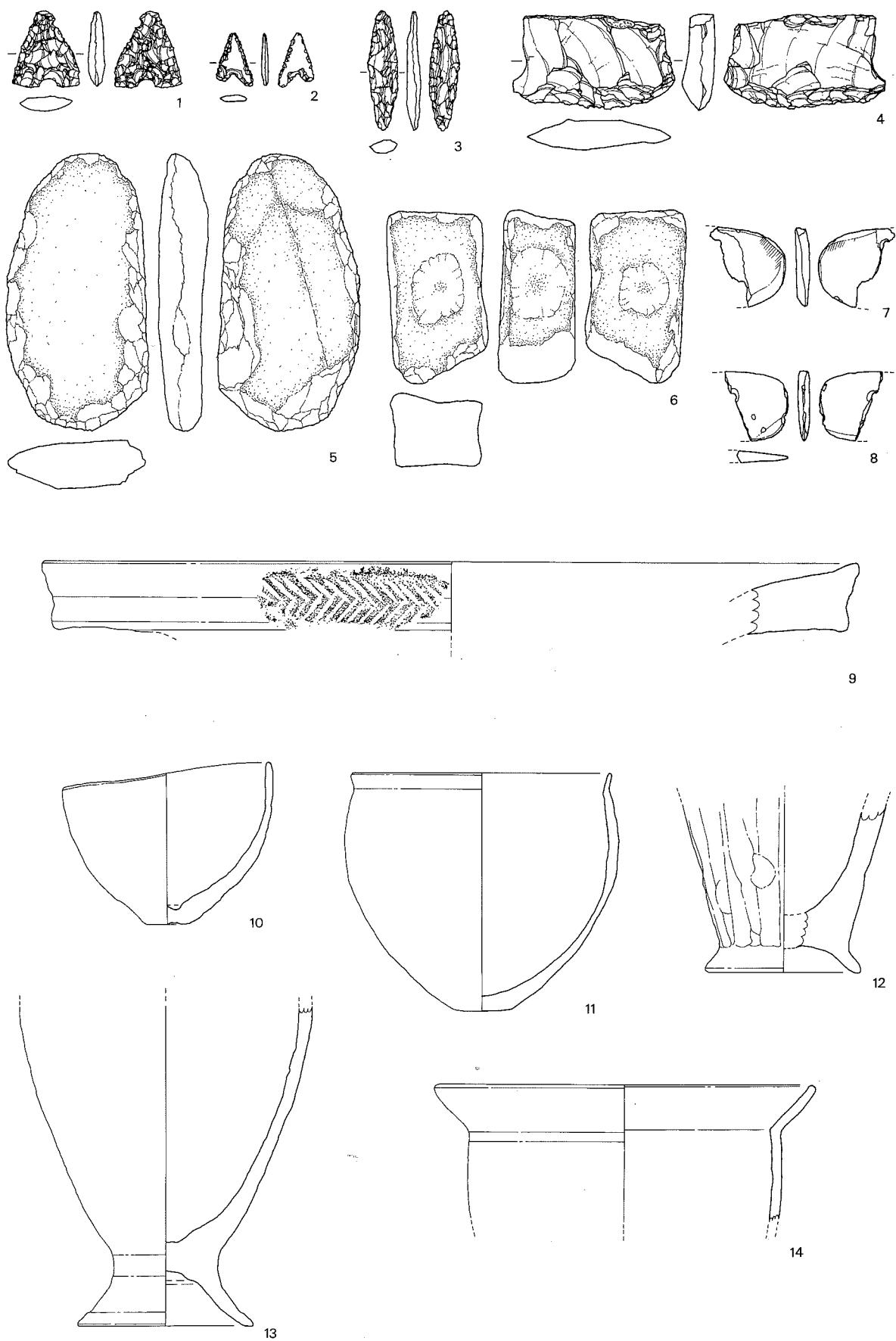
中世の陶磁器について層位ごとに第1表にあらわした。この表より、表土・II層・III層について概観してみたい。表土・II層における遺物とIII層の遺物の比較のなかで特筆されるのは、瓦質土器が表土とII層あわせて72点出土しているのに対して、III層では出土がないこと、また明染付・李朝陶器の出土もIII層では出土がないことなど、ある程度の整層状態を保っていることが予想される。またこの状況から、表土とII層はある程度近似しており、表土・II層とIII層との比較としたほうがより明確な差異を見出すことができそうである。またIII層における舶載陶磁器に対する土師質土器の比率が群を抜いていることなどがこの表より理解できる。これについては宮崎により、島原地区の様相として、輸入陶磁器の割合より土師器類が多いことが指摘されており（宮崎1988）、陣の内遺跡もこの在り方を踏襲しているといえよう。表からは、瓦質土器の出土がIII層にないことも特質され、瓦質土器の搬入時期などに関連してくるのであろう。ただ、III層の遺物はある程度の時間幅をもっており、III層出土の土器・陶器の帰属時期についてはおおまかに捉え方しかできないのが現状である。

第1表 陣の内遺跡陶磁器層別出土一覧表

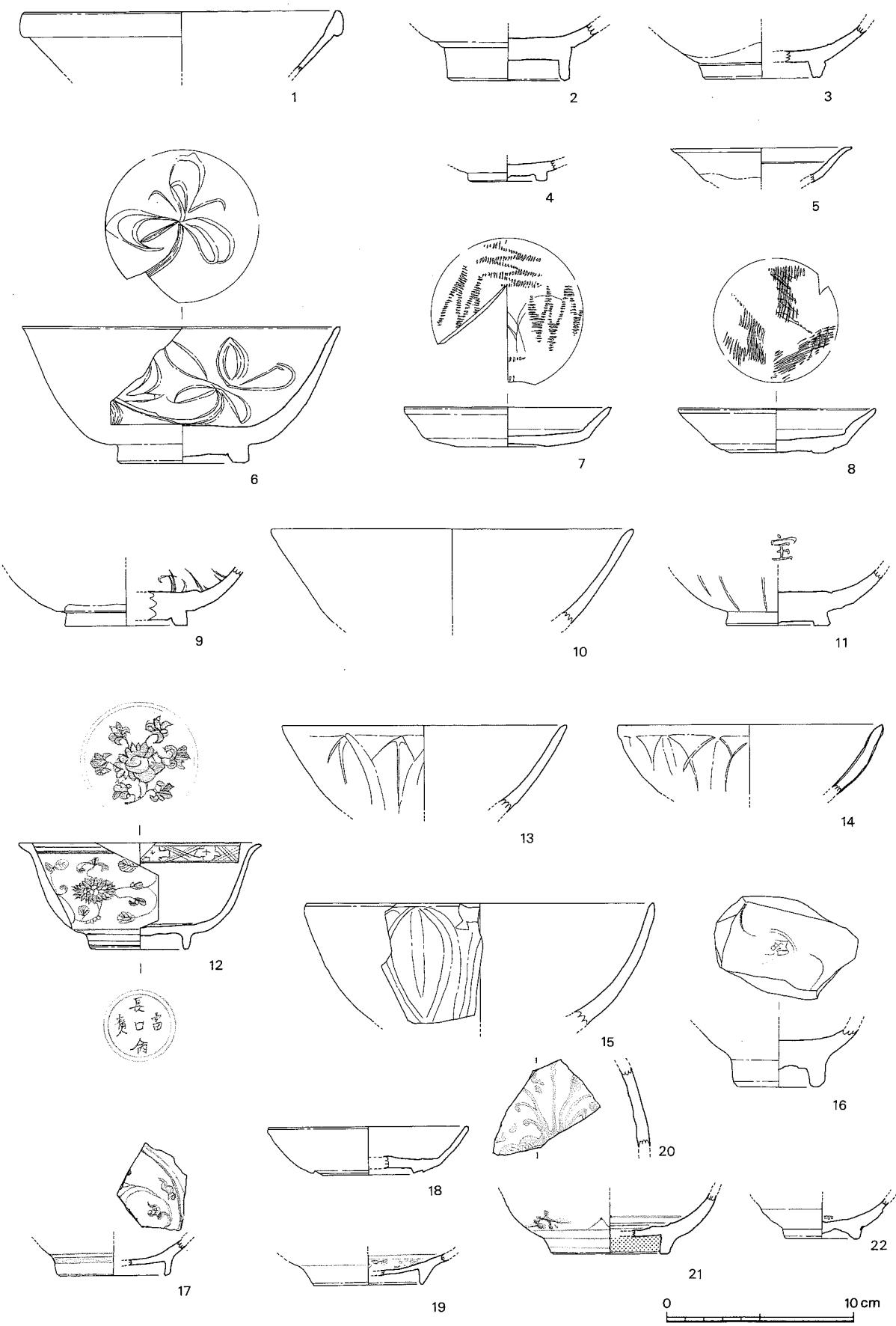
	黒 A	黒 B	土師碗	土師質	瓦器碗	瓦 質	須恵質	青 磁	白 磁	明 染	李 朝	計
表 土	2	3	0	61	0	33	11	84	32	62	2	290
II 層	23	19	13	288	17	42	14	49	17	13	5	500
III 層	84	178	166	2497	75	0	48	53	52	0	0	3153
計	109	200	179	2846	92	75	73	186	101	75	7	3943

出土磁器について（第6図）

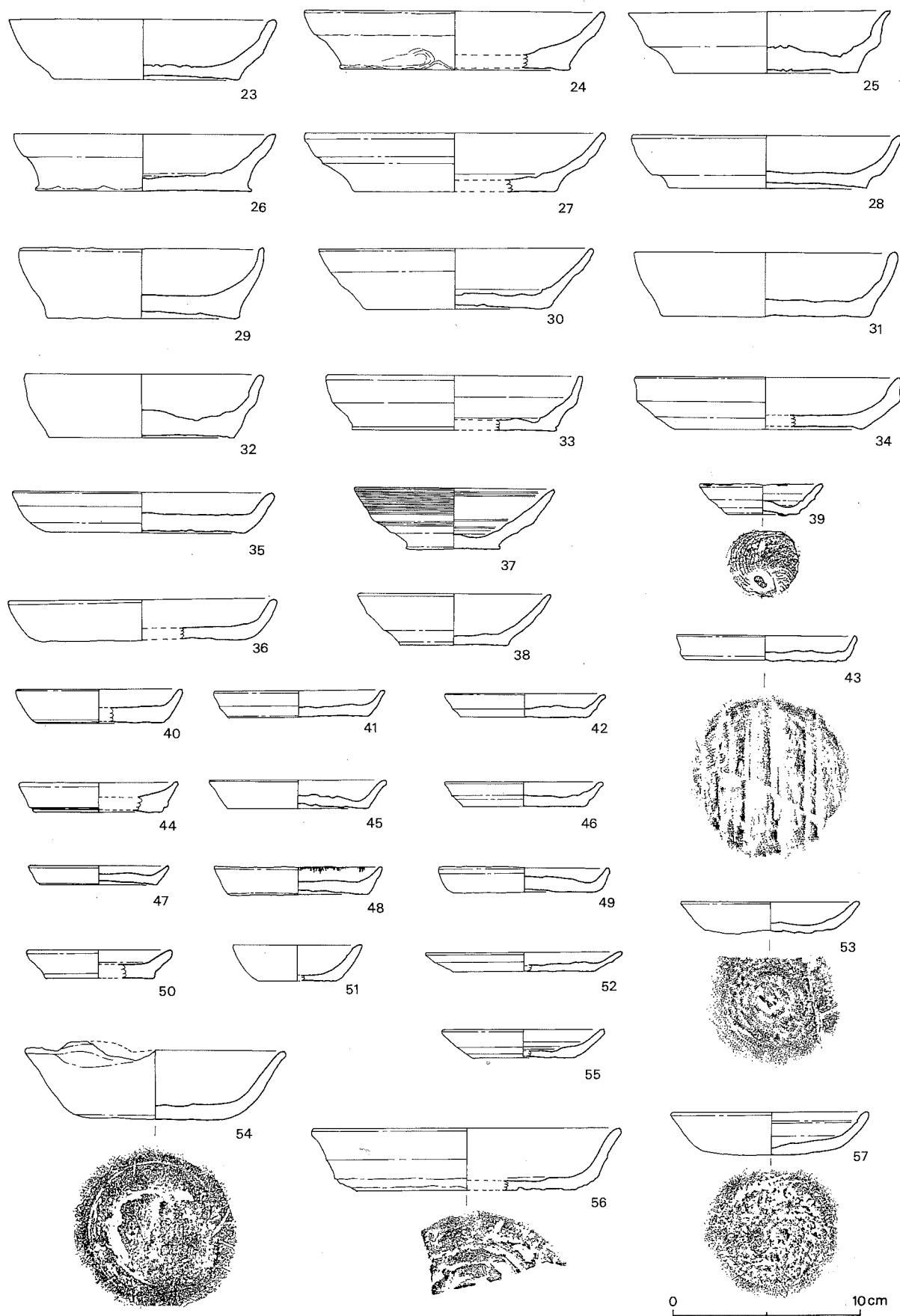
1・2は白磁碗IV類、3は白磁碗IIで類ある。全体における遺物数としては数も少なく、III層からはこの3点だけの出土である。III層の主体は、13・14の龍泉窯系青磁碗I-5 b、6・9のI-2 a類、7・8の同安窯系青磁であり、III層出土の搬入磁器は宮崎編年（宮崎1994）の2期（12世紀中頃～後半）～3 b期（13世紀初頭～14世紀初頭）に属するものである。II層出土のものとして12・17・19の小野編年（小野1982）染付碗E群・C群を主体とし、16の青磁碗についてもほぼ15世紀代の時期として押さえられる。18の暮筈底の白磁皿については16世紀代の年代でおさえられよう。特質すべきことは、表土資料であるが、20のスコータイ産磁器や、土壌1から出土した21のベトナム産の磁器などの出土である。20の資料は鉄絵唐草文と思われ、袋物の可能性が高い。表面は一度白化粧をしたのに鉄絵で唐草条の文様を書き、その上に黄白色の釉をかけている。内面は露胎で胎土はザックリした感じで白や黒の微細な鉱物が入る。21は見込みが蛇目剥ぎで内側と外側に圈線を入れている。表面は光沢があり蕨状の文様を群青色の釉で描く。高台豊付のみ露胎であり、高台内は鉄釉を施す。いわゆるチョコレートボトムといわれるベトナム磁器で、15世紀代のものとして捉えられよう。東南アジア産の磁器の出土は、県内では毫岐しか知られていないが、今後類例は増加するものと予想され、これ



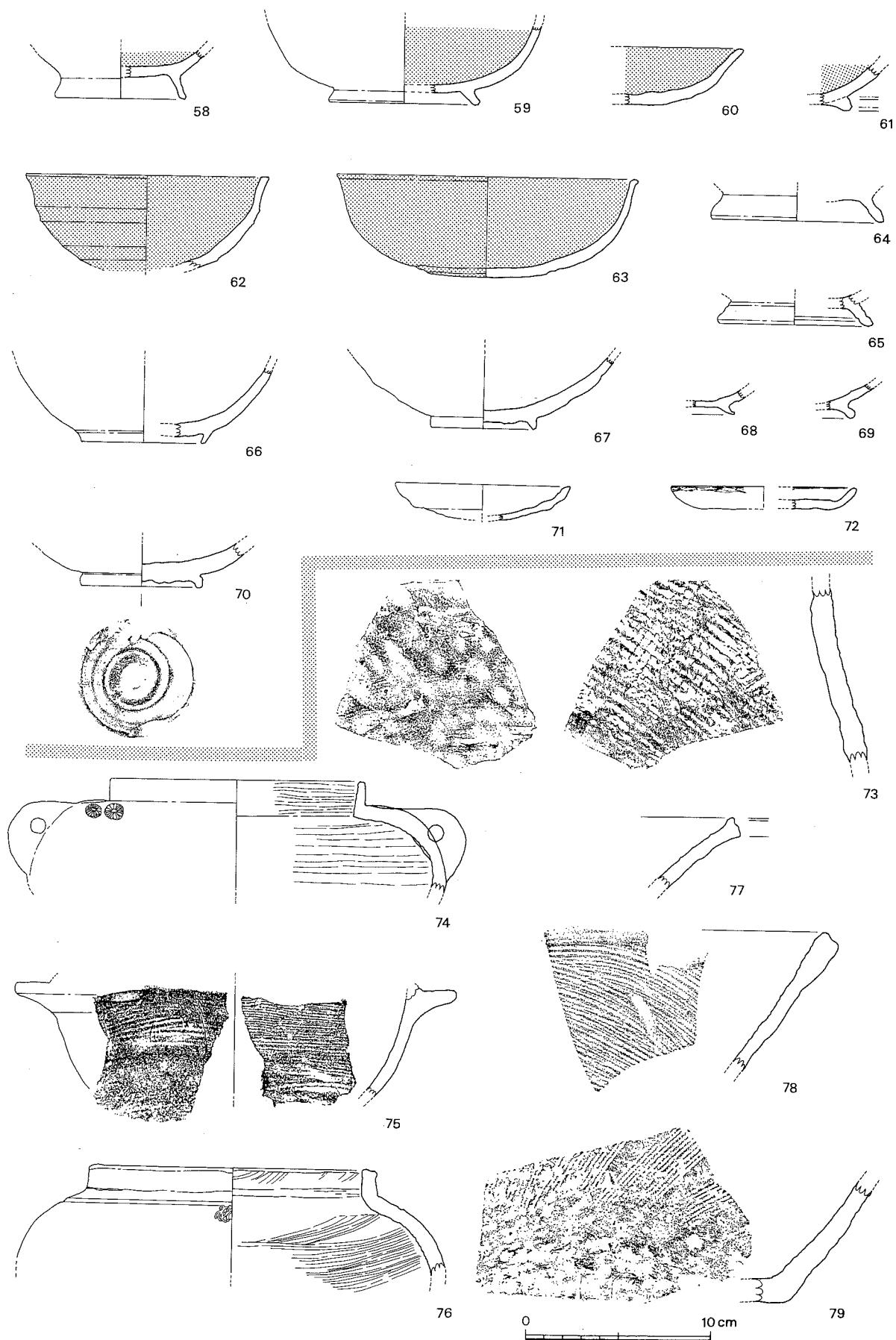
第5図 繩文・弥生時代の遺物(1/3)



第6図 中世の遺物(1/3)



第7図 中世の遺物(1/3)



第8図 中世の遺物(1/3)



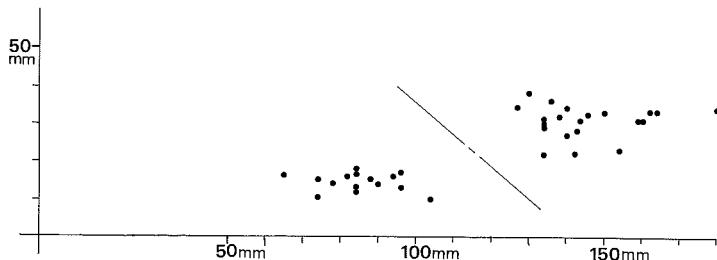
第9図 その他の遺物(1/3)

らの遺物の搬入経路を考える必要があろう。以上のように、おおまかにII層は15~16世紀を主体とし、それより古い遺物がIII層の主体と考えられる。

土師器壺・皿（第2表、第7図）

土師器壺・皿はIII層を主体に大量に出土している。この出土量は磁器の出土が少ない当地においては磁器の補完的な意味を持つと思われる。壺は第2表からほぼ口径13~16cm内外、器高2.5~3.5cmに納まり、皿は口径10~7cm内に納まる傾向にある。壺30と皿42・43・46は2次調査で一括出土したものを掲載した。壺30は27・24と同様に口径に対し器高が低く、口縁が開きぎみの一群である。これに対し23・26・29などは口径に対し器高が高い一群である。26と27は土壙2からの一括出土資料であるが、土壙2は遺構の項で記したように、新旧の遺構が切り合っていることも考えられるため即同時期と判断するのは難しい。37~39は15世紀代のものであろう。37は土坑3から瓦質土器76と一緒に出土したもので、38・39はpit2からの出土である。37の特徴として体部が底部より直線状に開き、見込み部中央がやや盛り上がるよう整形されていることである。皿については先に述べたように42・43・46については基準資料となり得るもので、他の皿についてもほぼ同じ傾向をもつが、44・50・51については別系統のものと判断される。44は底部がかなり肥厚し、口縁部から見込みの高さが低い。また、胴部が口縁部に向かって垂直に立ち上がる。50は底部が円板張付け状で口縁部が開くもので今福遺跡

第2表 壺・皿の法量



跡は、有明海を隔てて肥後に面する地域であり、中世豪族菊池氏との密接な関係が知られており、中世陶磁器においてもその影響大であることは間違いない。土師器についても先の宮崎の今福遺跡の編年で取り上げられるとともに、熊本では美濃口により中世前期の土師器編年が考えられている（美濃口1994）が、島原半島の土師器編年については今後の資料の蓄積が必要となろう。

陣の内遺跡は磁器からみるとおおむね次の1期～3期を主体とする。

1期 黒色土器・ヘラ切り坏・皿を主体とする一群

……白磁碗II・IV類……（少數）

2期 青磁碗I 2—a類、同安窯系青磁・青磁碗I—5 b類 白磁皿IX類

……小野白磁皿B群、小野鎧蓮弁文碗B群……（少數）

3期 小野染付碗B群、李朝陶器、東南アジア系陶磁器

……小野染付皿C群、森田白磁皿E—3類……（少數）

数量的なものから考えると、1期～3期に主体があり、遺物からは古代から中世全般にわたって出土しているが、中世陣の内遺跡のなかでも該期があることが知られる。

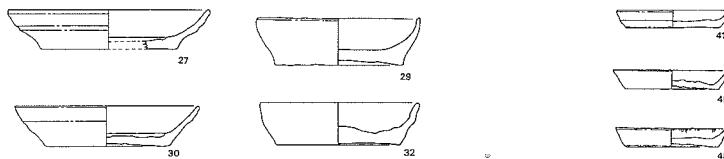
陣の内遺跡、土師器坏・皿の特徴

本遺跡における土師器坏・皿の出土はIII層を主体とし、II層からは希薄であるためほとんどの坏・皿はIII層に帰属するものとして考えてよからう。III層は陣の内遺跡における1期～2期を主体とする一群であり、糸切り底の土師質土器が主体ということから考えると1期を除く2期とその直後に土師器も納まるものとして差し支えないと考える。ただし、ここにおける2期は時間的に幅が広く、その意味では12世紀後葉～14世紀代前後の陣の内遺跡の土師器ということで土師器の特徴を明確にし、今後さらに土師器の編年を確率していく上での一資料としてその特徴を提示しておきたい。

坏

- 法量的に器高は2～3.5cm、口径が16cmにピークをもつ一群と、器高は変わらず口径が13cm内外にピークを持つ一群がある。

- 整形の特徴として、体部と胴部の接合時に回転台を使用するときに、見込み内部に圈線状の段が残される。
- 底部はすべて糸切り底
- 胎土は砂質が強く軟質である。（黄白色の軟質、茶褐色を呈するやや硬質のものもある）
- 見込み部は指頭による整形痕が認められるものと、指撫で整形痕をもつものがある。



第10図 陣の内遺跡坏の形態

第11図 陣の内遺跡小皿の形態

註1 ベトナム・タイの磁器については、福岡市美術館学芸員の尾崎直人氏の御教示を得た。

小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

森田 勉1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

宮崎貴夫1994「長崎県における貿易陶磁研究の現状と課題」『長崎県の考古学』一中・近世特集—長崎県考古学会

宮崎貴夫1986『今福遺跡』長崎県文化財調査報告書 第84集

山本信夫1988「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』IV 中世土器研究会

尾崎直人編1992『ベトナムの陶磁』福岡市美術館

尾崎直人編1996『タイ・カンボジアの陶磁』福岡市美術館

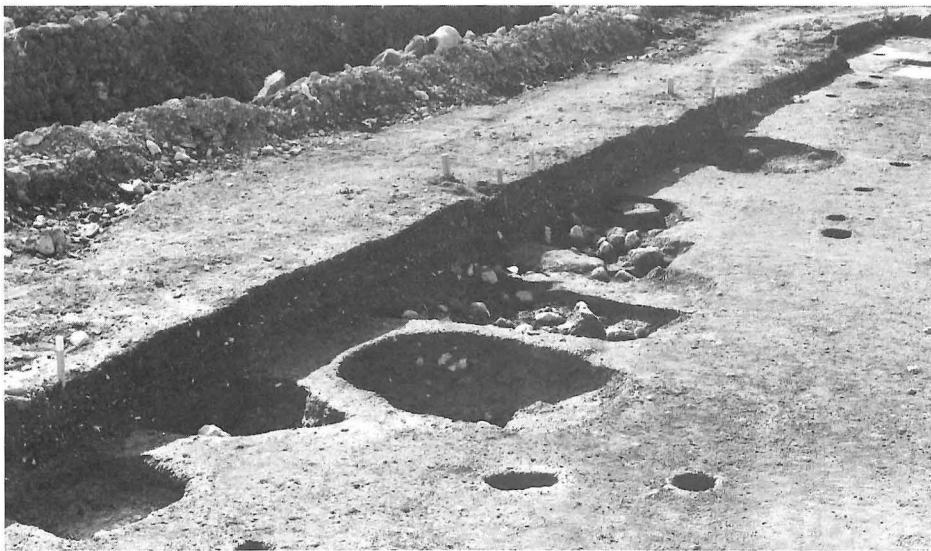


黒色の部分がⅢ層
Ⅲ層の下がⅦ層で
階段状に侵食され
ている。

南側セクション



遺構出土状況
(北より撮影)



遺構出土状況

写真図版 1 土層と遺構検出状況



自然流路内に堆積したⅢ層を調査中

自然流路検出状況



Pit 内出土の小皿

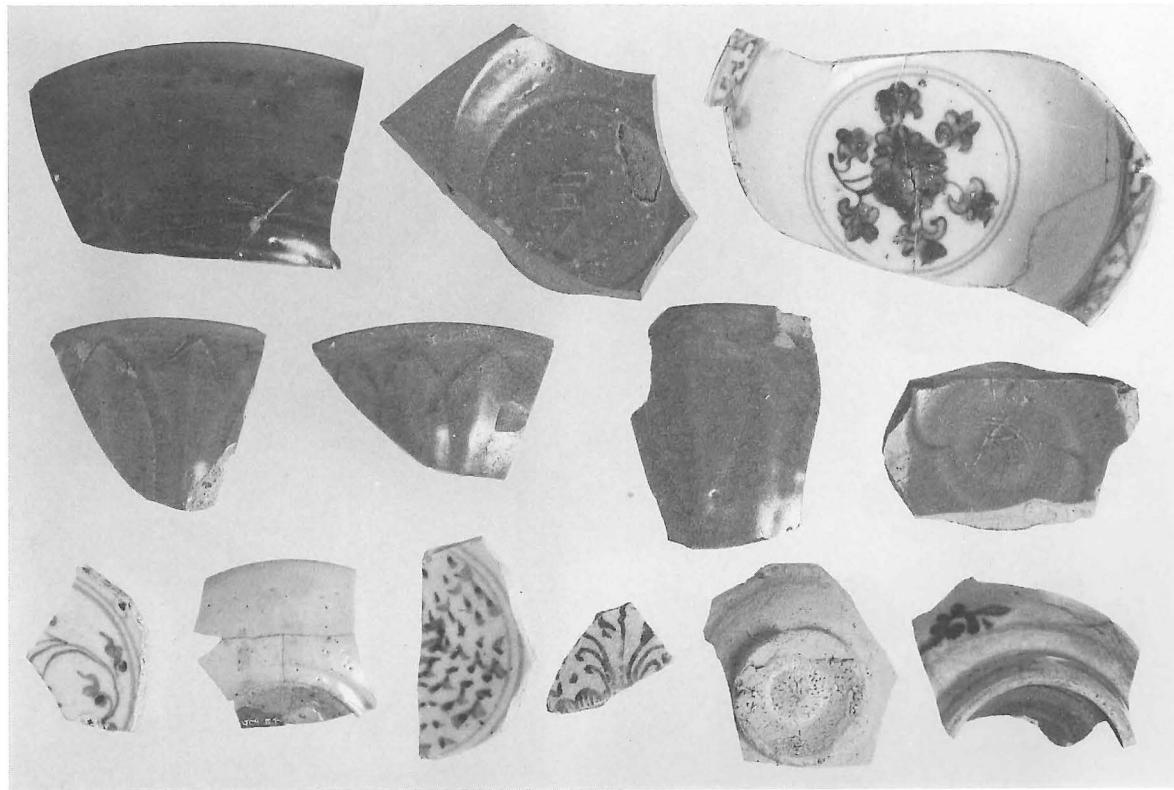
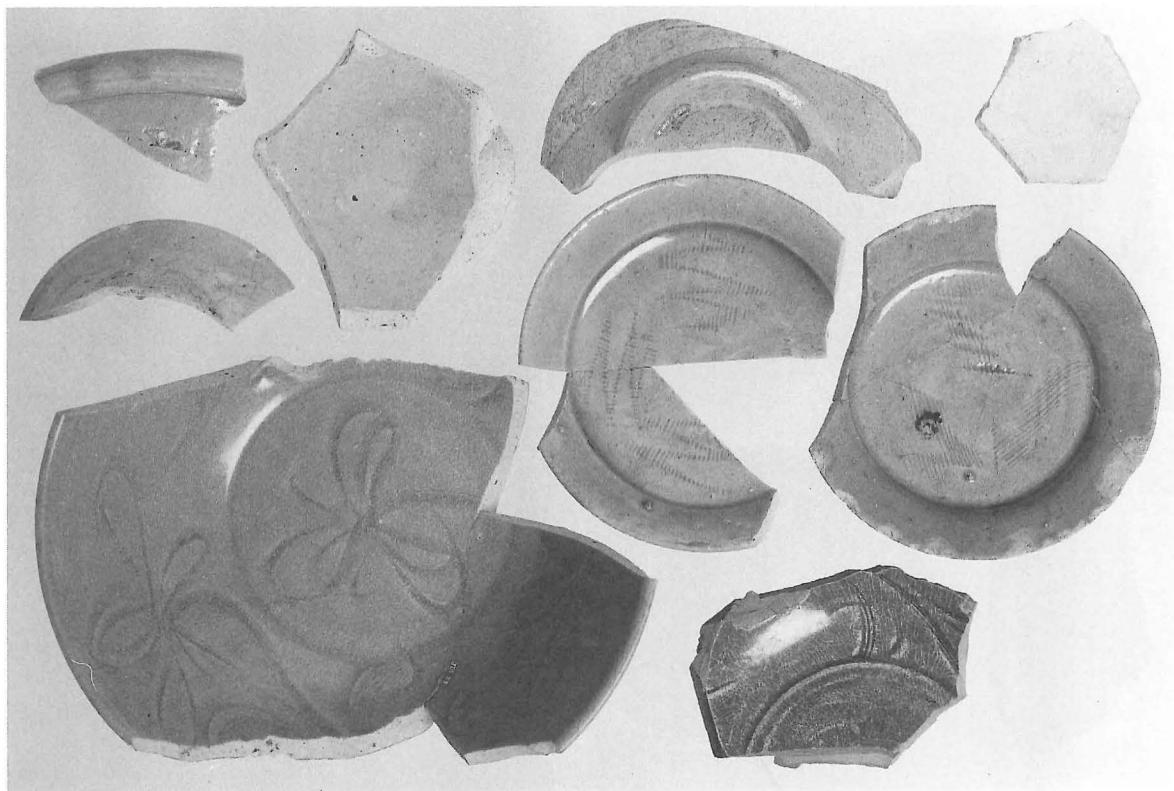


土壤 2 内の遺物出土
状況

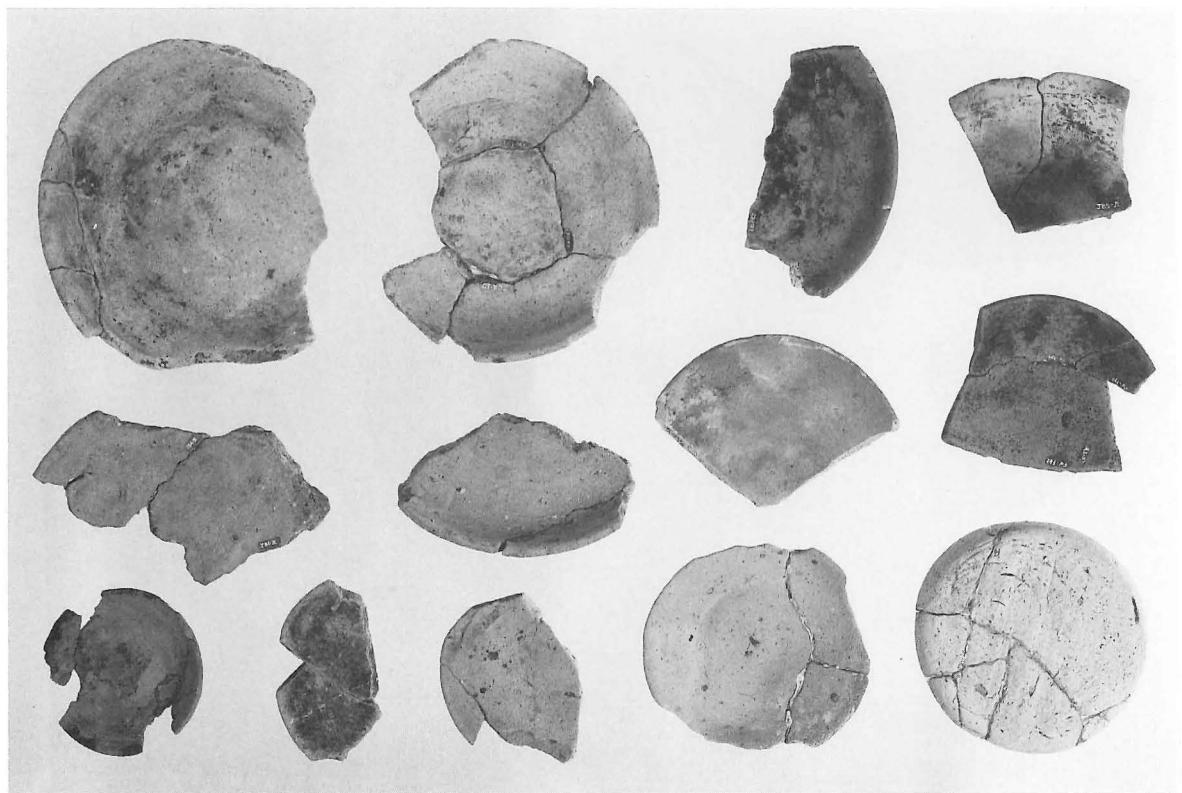
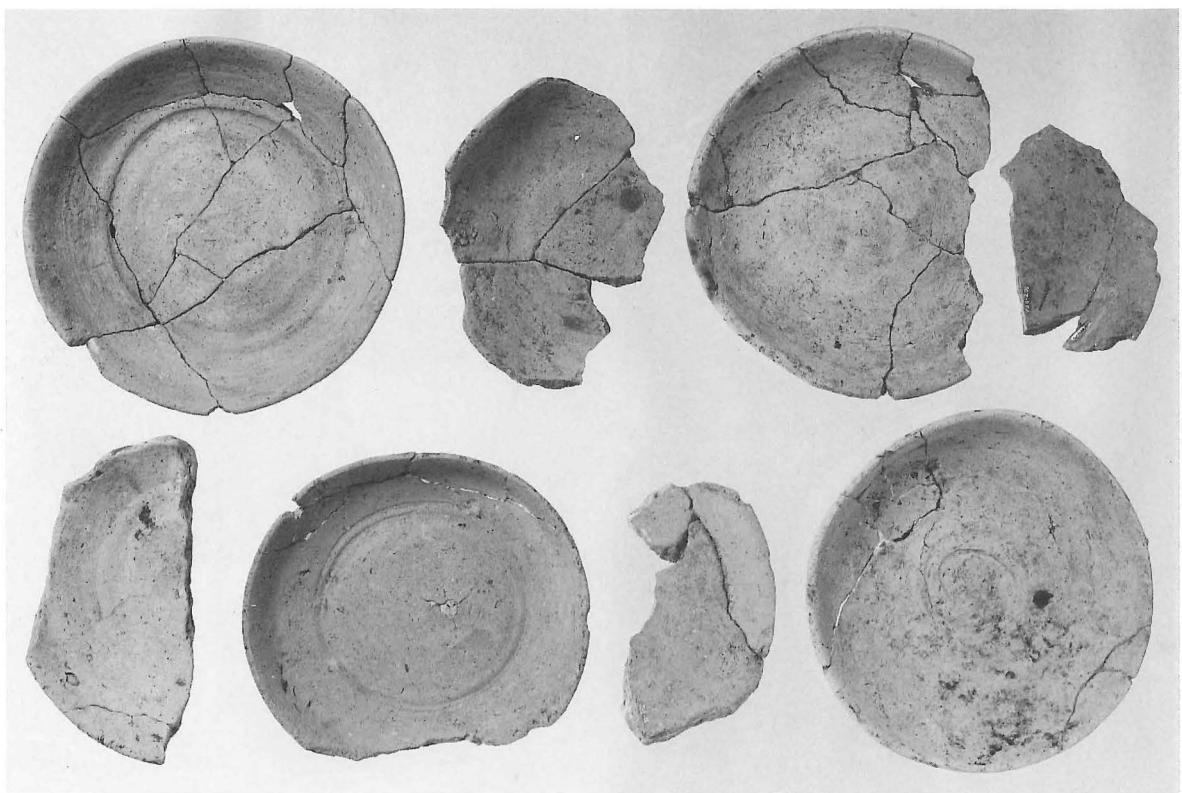
写真図版 2 遺構検出状況



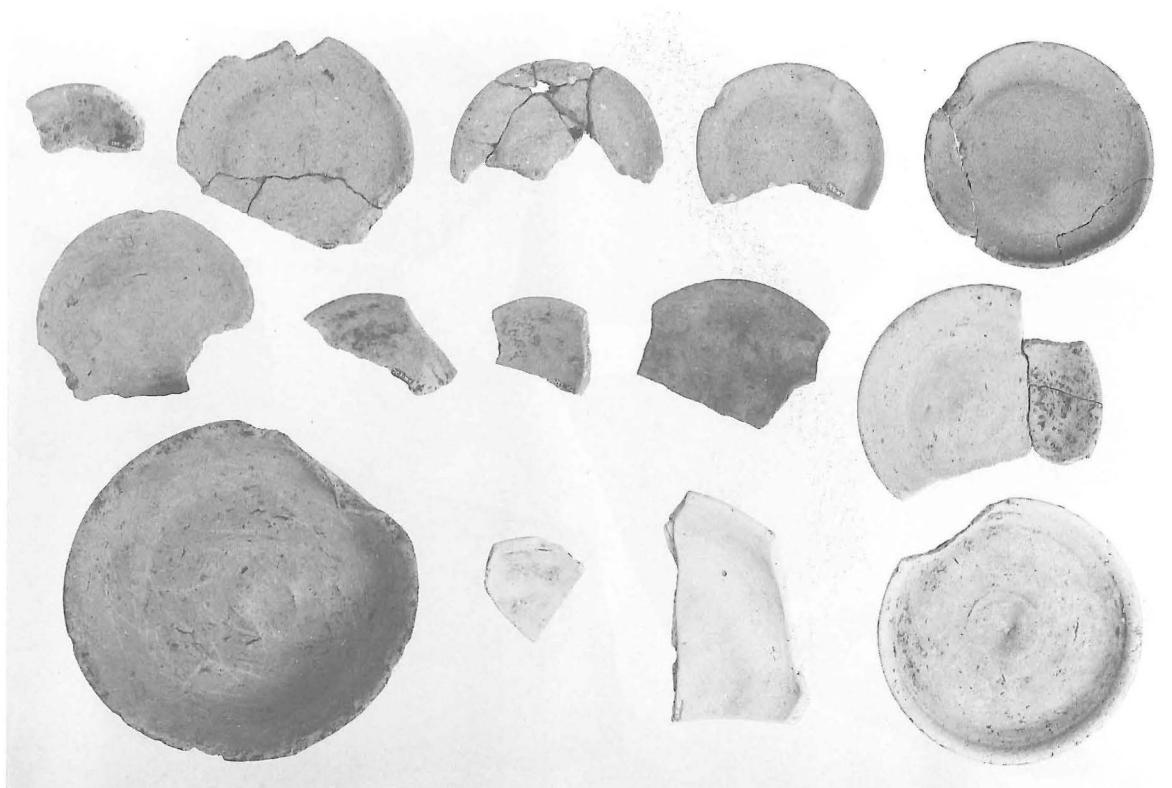
写真図版3 弥生時代の遺物



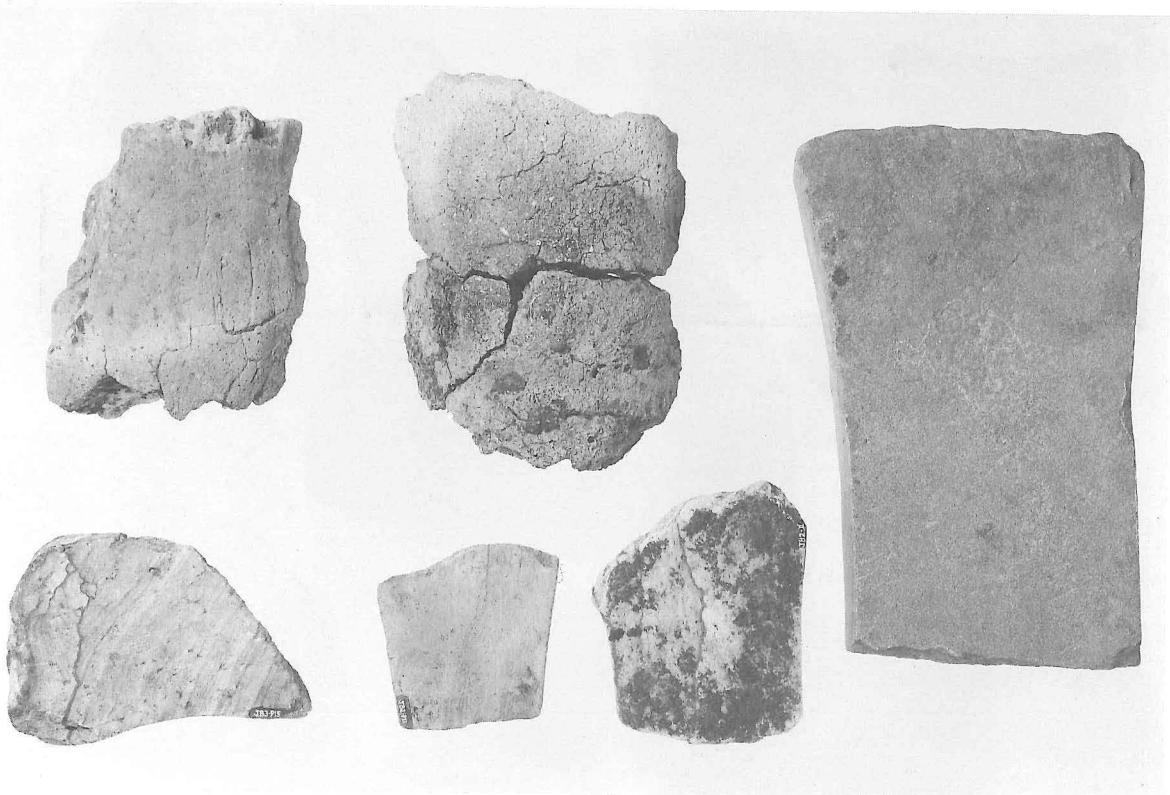
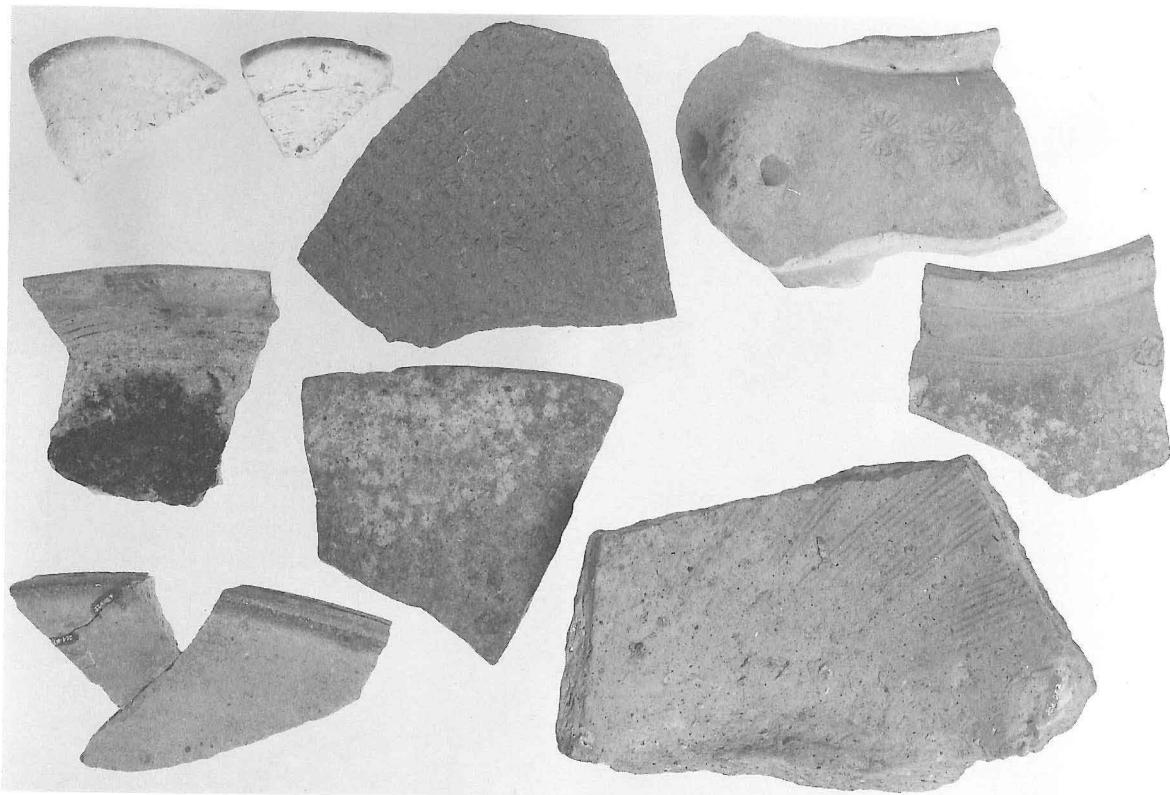
写真図版 4 搬入磁器



写真図版 5 土師質土器(1)



写真図版 6 土師質土器(2)



写真図版 7 上段：瓦質土器、下段：砥石・羽口



写真図版 8 その他の遺物・遺物出土状況

第2章 第2次調査

調査区の設定

1996年（平成8）の試掘調査によって、瑞穂町が計画した「中山間地総合整備事業」（夏峰地区内）で遺跡包含地が確認されたのは次の通りである。（第12図）

- ①町道前田線から分岐する第7号道路（L=100m）と、これに沿う第8号用水路（40m×10m）の一部。
- ②町道前田線に沿う第10号用水路（L=50m×2m）の一部分。
- ③町道前田線から分岐する第8号道路（L=100m）と、これに沿う第7号排水路の内4m×100m部分。
- ④町道前田・下夏峰線から分岐する第10号道路（L=90m）これに沿う第14号用水路の一部および415圃場の一部

発掘調査地の内、近接した①～③の調査区をI区、ここから離れた④の調査区をII区とした。さらに各調査区は、I-A～Y、II-A～Z区に小区分した。

- ①については、幅7m×40mの範囲をほぼ7m×10mに分け、東からI-A～D区とし計280m²を発掘したが、I一区において住居跡を検出したため、約20m²を拡張して調査した。
- ②については、現在の町道前田線に並行する既存の用水路に沿ってI-E～K区を設定したが、この区域についてはI-E～F（2m×10m×2=40m²）、I-G区の南半部（2m×5m）、I-H区の北半部（2m×10m=20m²）、I-k区の北半（2m×5m=10m²）の合計70m²を発掘した。
- ③については、東から順にI-L～Y区を設定し、5m×4m×14箇所、合計280m²を発掘した。
- ④については、5m×5mの方眼に割り付けてII-A～Z区とし、合計約625m²を発掘した。

I・II区全体の発掘調査面積は1,255m²である。

土層

陣の内遺跡一帯の土層は全体的に不安定である。段丘地形と水性堆積層のためと考えられ特にI区のある町道前田線の西側一帯は小規模な「沢」状の微地形が錯綜していて整層状態の把握しにくいところが多い。

陣の内遺跡のある船津川河口域は、夏峰丘陵と前田丘陵にはさまれた狭長な段丘上に形成された沖積地になっており、河口近くでは幅が400m程度あるものの河口から600m付近では幅が200m程度に狭くなっていて河谷状の景観を呈している。また、町道前田線の標高が14～15mあるが、船津川の河床では標高7m程度と低くなっている。以上のような基盤の上に水性の堆積土が乗り、小規模な「沢」状の微地形が交錯していて整層状態を保ちにくくしている。遺物包含状態が不安定にもかかわらず、遺物の保存状態が良好なのは至近距離を動いたためと考えられる。

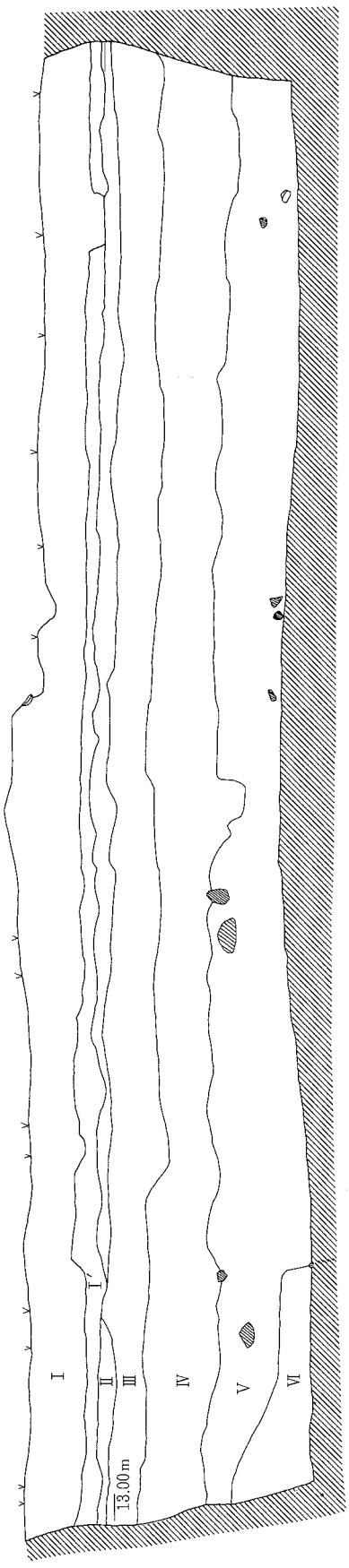
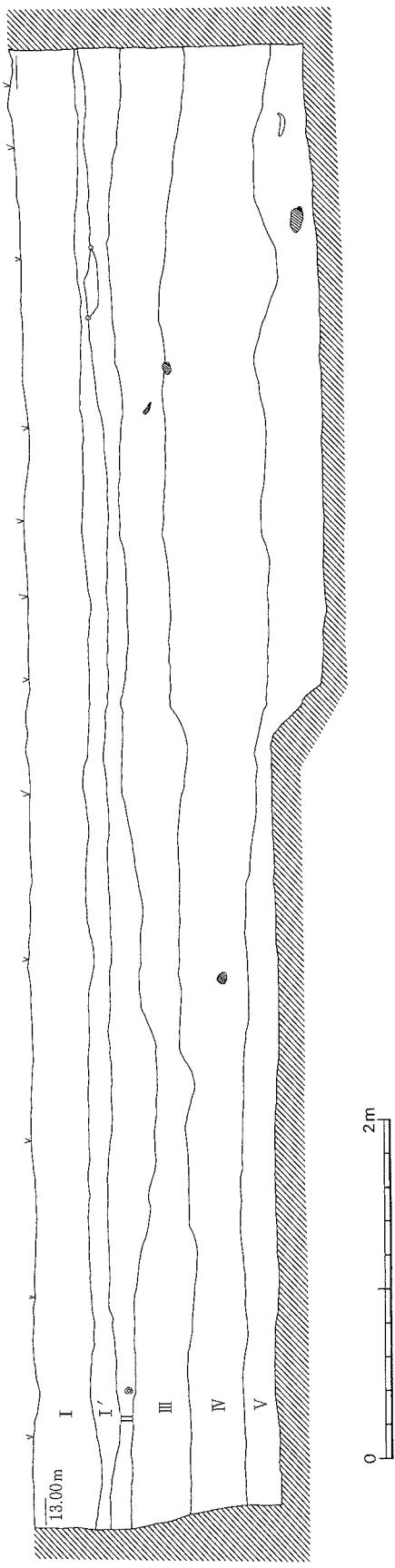


第12図 陣の内遺跡調査区図

第13図 I—A～C区南壁断面図



第14図 I-C~D区南壁断面図



第3章 遺構と遺物

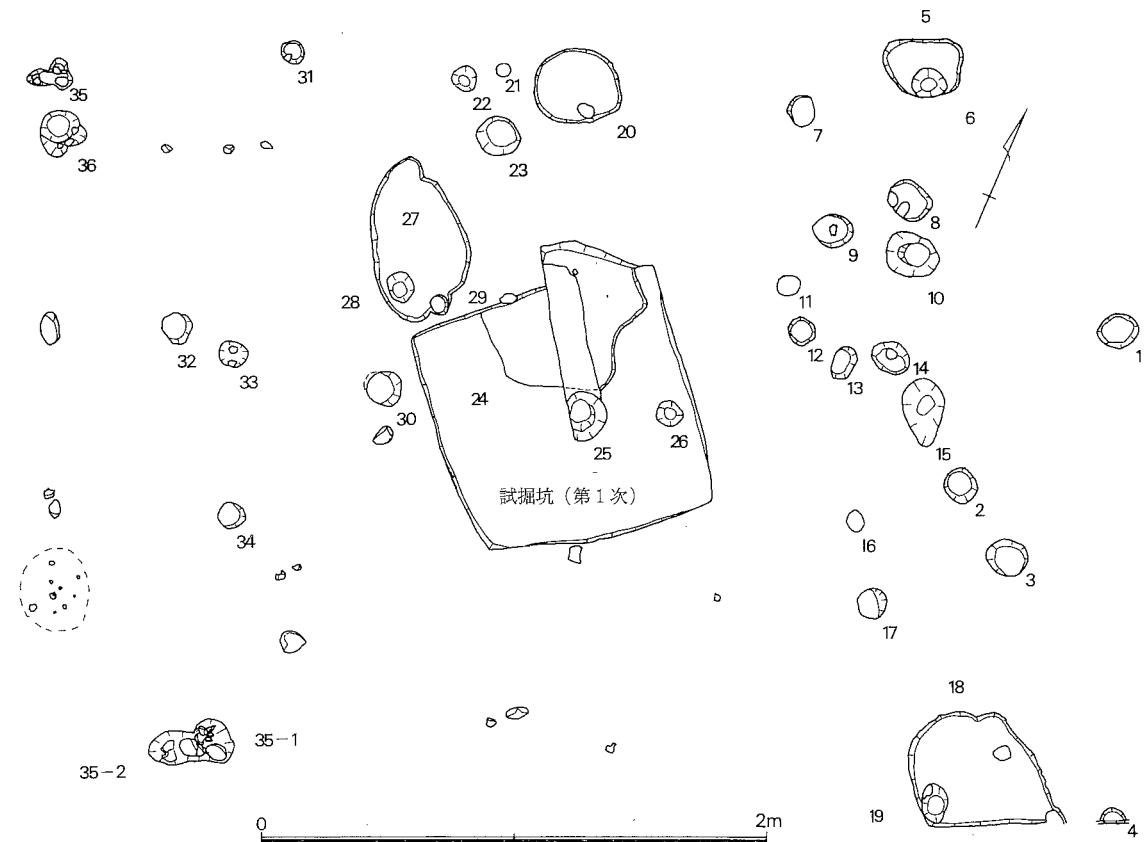
本章では各調査区・各層ごと遺構・遺物について略述する。各遺構については正林・永嶋が、土器については永嶋が記述する。石器については正林が記述する。

第1節 I 区の遺構・遺物

[I-A区 柱穴群] (第15図) 表土下のII層上面で46基の土坑が、確認された。土坑埋土または底面から中世土師質土器の完形品や破片が出土しており、遺構掘り込み時期の帰属も中世と考えられる。掘立柱建物跡として明確にまとまるものは認められないが、直線上に並ぶひとまとまりの柱穴列と考えられるものが幾通りもあり、ここに呈示する。なお土坑が密集して分布しているために、同一の土坑を複数の柱穴列に帰属させることも有り得る。

【柱穴列1】 土坑6.8.10.14.17—両端の土坑の中心間の長さは、約2.2mである。土坑8と14は共に10cmの礫を土坑底面に有することやその大きさ（長軸・短軸の長さや深さ）で共通する。他との位置関係から土坑10はこのまとまりから除外するべきかもしれない。方向N21°W。

【柱穴列2】 土坑9.14.15.2.3・両端の土坑の中心間の長さは、約3.0mである。土坑9の埋土中より中世土師質土器の破片が出土している。土坑14は前述したとおり、礫が土坑底面から出土している。土坑15を除いて、確認プランはほぼ同じ大きさである。方向N56°W。



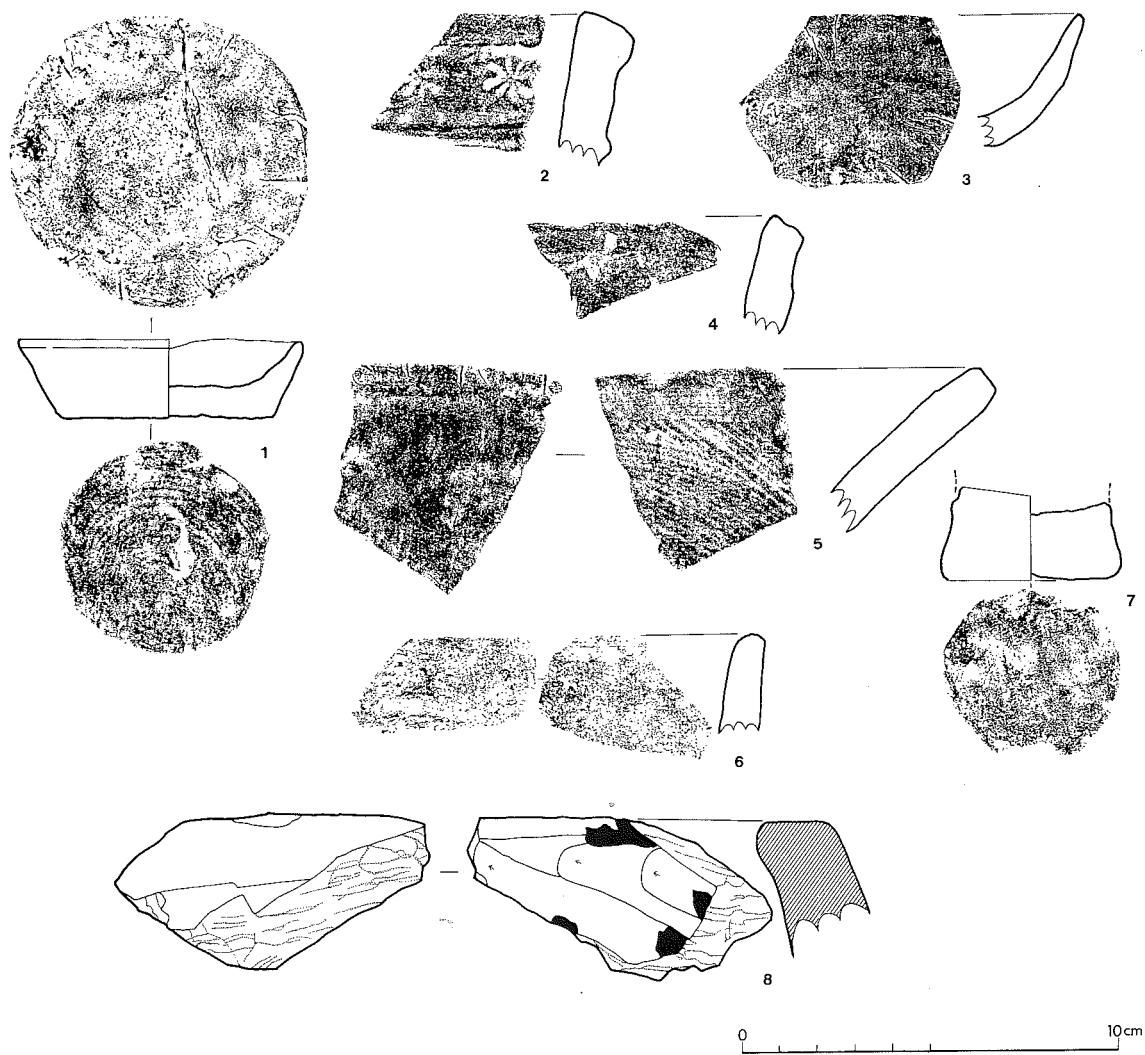
第15図 I-A区II層柱穴群検出状況実測図

【柱穴列3】 土坑7.9.13.16.17・両端の土坑の中心間の長さは、約4.0mである。方向N36°W。

【他の柱穴】 35-1・35-2は、二つの土坑が重複したような形で検出された。土坑35-1中からは、中世土師質土器の完形品1点と1個体分の破片が出土している。F区・G区の柱穴群も同一層に掘り

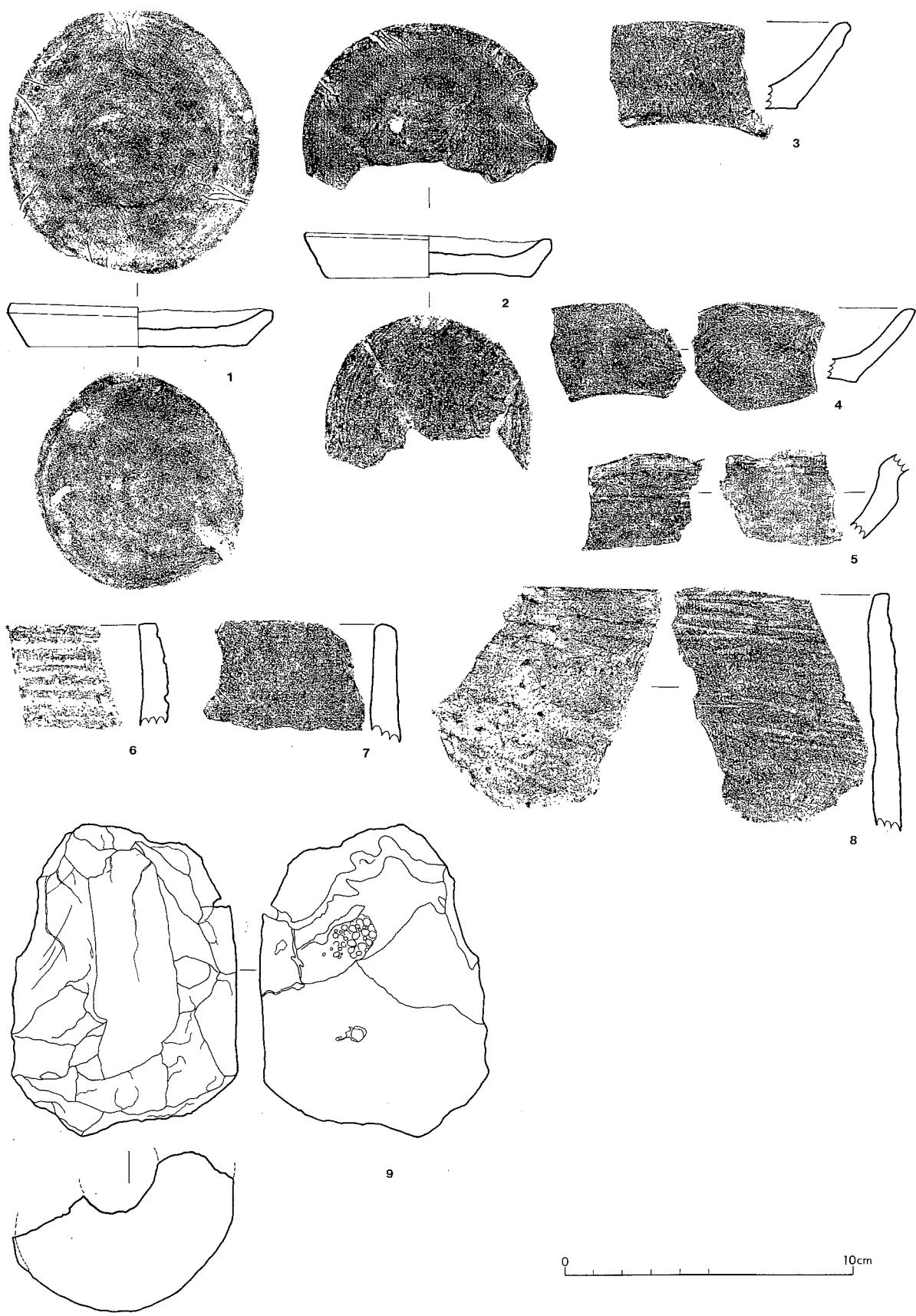
込まれており同一時期と思われ、1次調査区を含めると中世における当地の利用が広範囲に及ぶことがわかる。

【I層】(第16図) 1は中世土師質土器で内外面ともにロクロナデ・底部糸切り・色調橙色(7.5YR7/6)・直径7.5cm・器高2.1cm。2は中世の瓦質土器火鉢の口縁部で、外面口縁部直下の凸帯の間に花文のスタンプを押捺している。器表面は、内外共に風化しているが、内面にはかすかに左上→右下のハケメ状調整痕が確認できる。3は中世土師質土器の口縁部で、底部から内湾気味に立ち上がるが、体部中位の稜より上方は薄手となる。色調はにぶい橙色である。4は中世須恵器である。口縁端部に沿ってナデ痕、口縁部直下は横方向のナデ。5は甕の口縁部。外面は縦方向のハケメの後口縁部ヨコナデ。内面は左上→右下のハケメの後口縁部のみヨコナデ。内面のハケメの原体の横幅は12mm。6は縄文晩期初頭の口縁部が直立する深鉢もしくは鉢の口縁部。砂粒が多く、内外面の調整痕は確認できず。口唇部にナデによる擦痕あり。口唇部と口縁内部の境目に面取りしている。7は底面径が4.5cm、器高1.8cmの台部。色調橙色。



第16図 I-A区 I層遺物実測図(1/2)

【II層】(第17図・第19図) 第19図の3は中世の土師質土器で器高は3cm。底部から内湾気味に立ち上がる。砂粒を多く含む。色調橙色。4も中世土師質土器で器高2.6cm。内外面調整共にナデ。底部

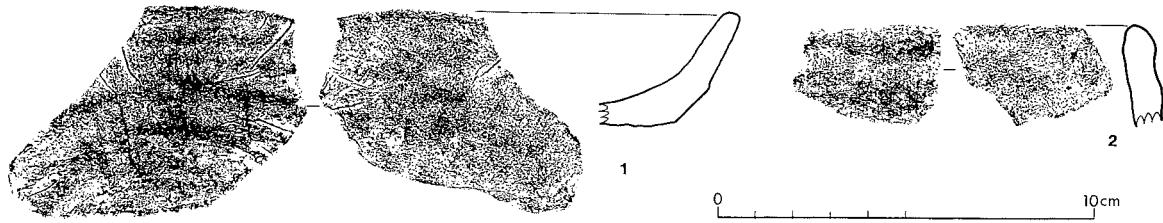


第17図 I—A区II層遺物実測図(1/2)

から僅かに直立し、内湾氣味に立ち上がる。砂粒を多く含むが、器表面では調整で隠れている。色調はにぶい橙色。5～8は縄文後期終末～晩期前葉の土器である。5は鉢または浅鉢形土器の頸部と体部上半の屈曲部。内外面調整共ナデ+ミガキであるが、ミガキによる光沢は失われている。6はタガ

状口縁の深鉢の口縁部で、内湾気味に立ち上がり現存部だけで8本の平行沈線が確認できる。沈線は最深部で2mmほどのしっかりしたものであるが、所々粘土でふさがり土器を周回するものはない。沈線の断面形は三角形で下方から上方に向けて施文具を押し当てている。口唇部は平坦に作られる。微細な砂粒を多く含み内外面共にナデ。7は体部中位付近で屈曲し口頸部が長く緩やかに外反しながら立ち上がる深鉢の口縁部である。内面の一部にナデの跡を残すが器表面が風化しているので全体の調整は不明。8は深鉢の口縁部である。外面は粗いナデ、内面は籠状工具によるナデの後に沈線状の引っ搔き跡が認められる。色調はにぶい橙色。9はフイゴの羽口である。割れ口に平坦な部分があり、接合部のように見える。第21図の1は中世土師質土器で器高3cm。体部中位よりやや下で、傾きを変えて立ち上がる。外面ロクロナデ、内面ナデ。底面糸切り。第21図2は縄文後期終末～晩期前葉の土器の緩やかな波状口縁部。

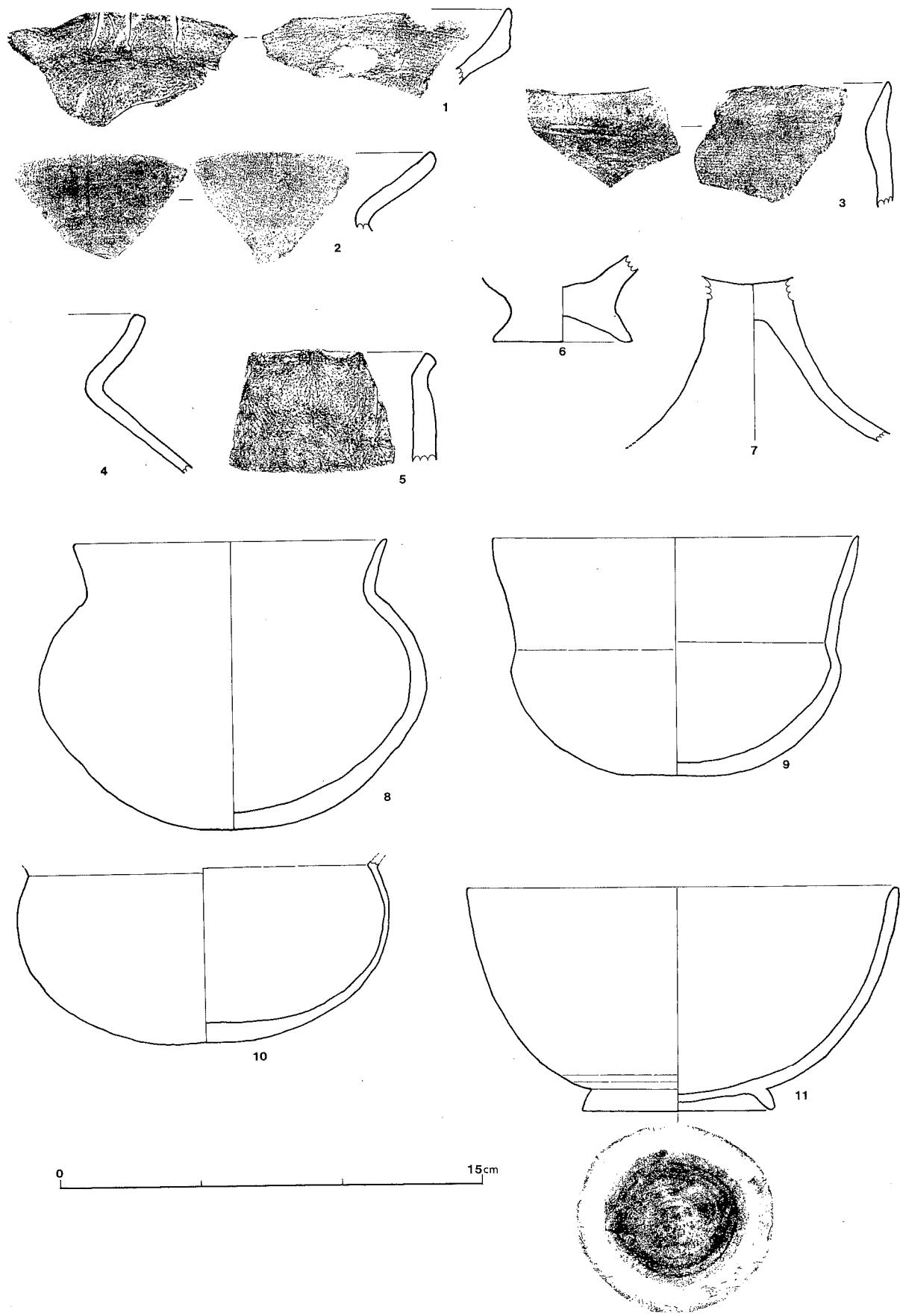
【ピット関連】(第17図) 1はピット35-1から出土した中世土師質土器の完形品。橢円形を呈し、口径は長径8.8cm・8.4cm、底径は長径7.6cm・短径7.1cm、器高1.2cm。内外面共にナデ調整。底部糸切り。色調は鈍い橙色。2もピット35-1から出土した中世土師質土器で推定口径8.4cm・推定底径7.0cm・器高1.4cm。外面はロクロナデの後、一部のみ縦方向のナデ。内外面外周部ロクロナデ、中心部周辺のみナデ。底部糸切り。色調鈍い橙色。体部下半で稜を境に角度を変えて立ち上がる。金雲母を多く含む。内外面共にナデ。色調浅黄色。



第18図 I-A区遺物実測図(1/2)

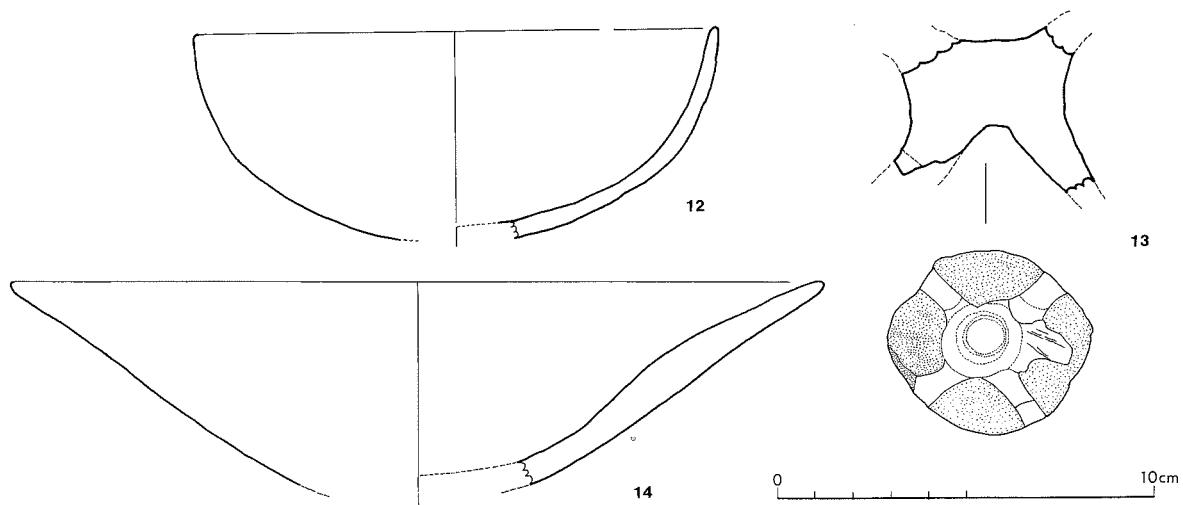
『I-A・B区間』

【II層】(第19・20図) 第22図1は縄文後期終末期の深鉢口縁部である。内外面共に横方向の丁寧なナデ調整。胎土に金雲母を含む。3も同一時期と考える。外面はナデの後に幅2mmの沈線状の傷を施す。同様に金雲母を含む。11は古代黒色土器B。底径6.7cm。高台の高さ6mm。内面調整は丁寧なナデ。外面は成形時の水平方向の約7mm幅の稜が数段巡り、その上から丁寧なナデが施される。高台は貼り付けされ、高台内は幅3mm程度の籠により同心円状に丁寧に調整されている。第22図2・4~10と第23図12~14は布留式古段階を中心とする資料である。B区II層の北東部の集中して出土した土器も同一期のものを含む。第22図2は甕の頸部で「く」字状に外反し、内湾気味に口縁部が立ち上がる。口縁部内外面調整共に丁寧なヨコナデであるがケズリ痕は不明。色調はにぶい黄橙色。口縁外面に炭化物付着。4も甕の頸部で「く」字状に外反し、内湾しながら立ち上がる。唇部内側をつまみ上げるのが特徴的である。頸部内面の外反部は稜をもたない。 ϕ 1mm程度の砂粒を多く含み、金雲母を含む。口縁部内外面共にヨコナデであるが体部上半内面にはケズリの後に縦方向のナデ痕が認められ、外来系の土器であろう。体部上半は器厚が他に比して薄い。色調は浅黄橙色。(諫早市平山遺跡B地点出土土器群中に類例あり)。5は頸部で緩やかに外反し短い口縁部を有する。口縁部内面は横方向のナデ。6は台付甕の台部。甕内面はナデ、甕外面は縦方向の線状痕を伴う調整である。台部内外面共にナデ。7は高壙の脚部である。脚部内面は縦方向と横方向のナデ、外面は横方向と斜め方向のナデ。 ϕ 1mm以下の砂粒を非常に多く含む。8は丸底の小形広口壺。推定口径11.0cm・体部の推定最大径13.6



第19図 I-A · B区間畦畔部II層遺物実測図①(1/2)

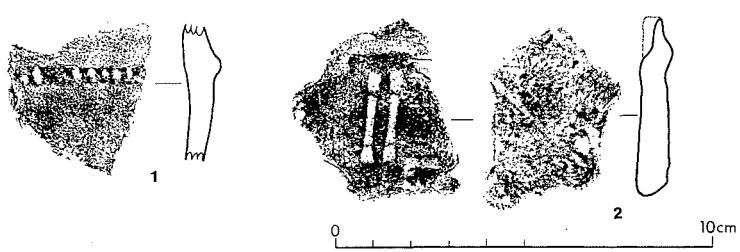
cm・器高10.1cmである。体部中位やや上に最大径があり、頸部で外反氣味に短い口縁部が立ち上がる。口縁部外面と体部上半外面は横方向のナデ調整。体部下半外面から丸底にかけては不定方向のナデ調整痕あり。口縁部内面は斜め方向のナデ、体部上半内面はケズリの後に横方向のナデ。9は畿内系小形丸底鉢。推定口径13cm・推定肩部径11.8cm・器高8.5cmである。丸底から頸部の屈曲部までの高さが4.5cm・屈曲部より上の高さが4.0cmでほぼ同じ数値となる。頸部内面は明瞭な稜を有して立ち上がる。器形は丸底から扁球形に立ち上がり、体部上半及び頸部で屈曲し外方にひろがる。口唇部がやや尖り氣味。外面の調整は口縁部はヨコナデ、頸部は横方向と左上→右下方向のハケメ、体部上半及び体部上半は横方向のハケメ、体部下半と丸底は左上→右下方向のハケメが施される。内面の調整は口縁部はヨコナデ、頸部は横方向と左上→右下方向のハケメ、体部上半以下は丁寧なナデが施されている。器厚は全体にわたって3mm程度である。10は口縁部で屈曲する小形の丸底の鉢。口縁部を欠損する。頸部内面で明瞭な稜を有し外反する。推定体部最大径13.0cm、現存部高さ6.5cm、器厚は全体にわたって3mmであるが底部付近のみ7mm程度の肥厚が認められる。内面の色調は明るい橙色。内面調整は体部上半はケズリの後ナデ、体部下半と底部付近内面は丁寧なナデ。外面調整は体部は横方向のナデ痕が一部認められ、底部付近もナデ。13は碗形の鉢。器厚は体部で4mm程度で口縁部でやや薄くなり、底部付近で5~6mm程度に肥厚する。内外面共にナデ。色調橙色。13は4方向からの焼成前刺突孔を有する高壺の脚柱部である。脚柱部の真下からも先の丸い棒状の工具で押圧している。細砂粒を多く含むが現存している脚柱部下半は、横方向の丁寧なミガキが施され器表面では砂粒は目立たない。14は畿内系高壺の低脚の大きく開く裾部である。第26図25は同一個体。推定底径21.4cm・現存部高さ5.4cm。色調橙色。外面はハケメの後ナデ。裾部末端付近はナデが施されず、左上→右下のハケメの痕跡が明瞭に残る。内面もハケメの後ナデ。外面同様に裾部末端は明瞭にハケメの痕跡が明瞭に残る。



第20図 I-A・B区間畦畔部II層遺物実測図②(1/2)

『I-B区』

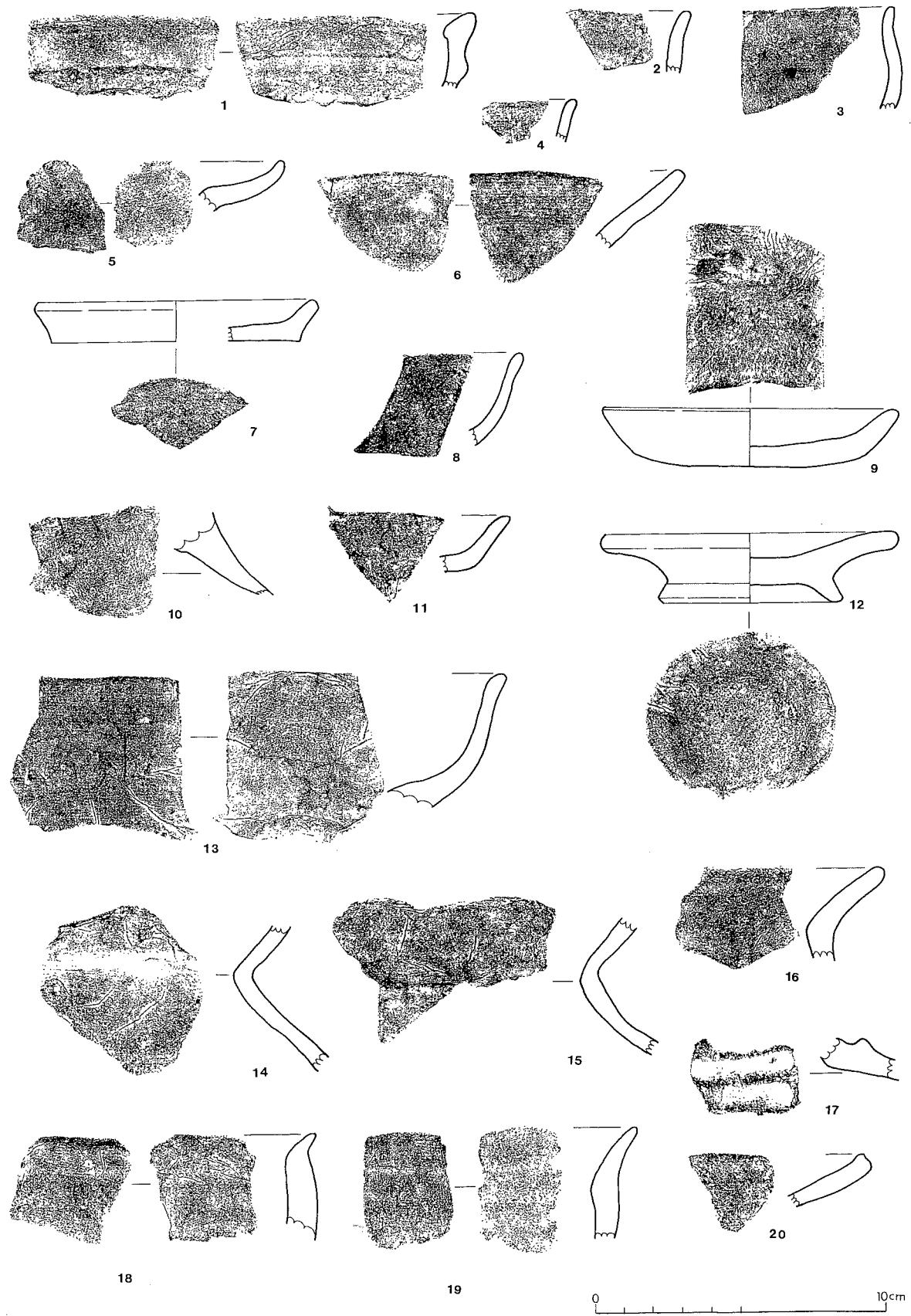
【I層】(第21図) 1は刻目突帶文が一条残る甕の体部上半。突帶の断面形は丸みを帯びた台形状。突帶上端先端部幅約3mm。刻みの幅は2~3mmで縦方向に細長く、



第21図 I-B区 I層遺物実測図(1/2)

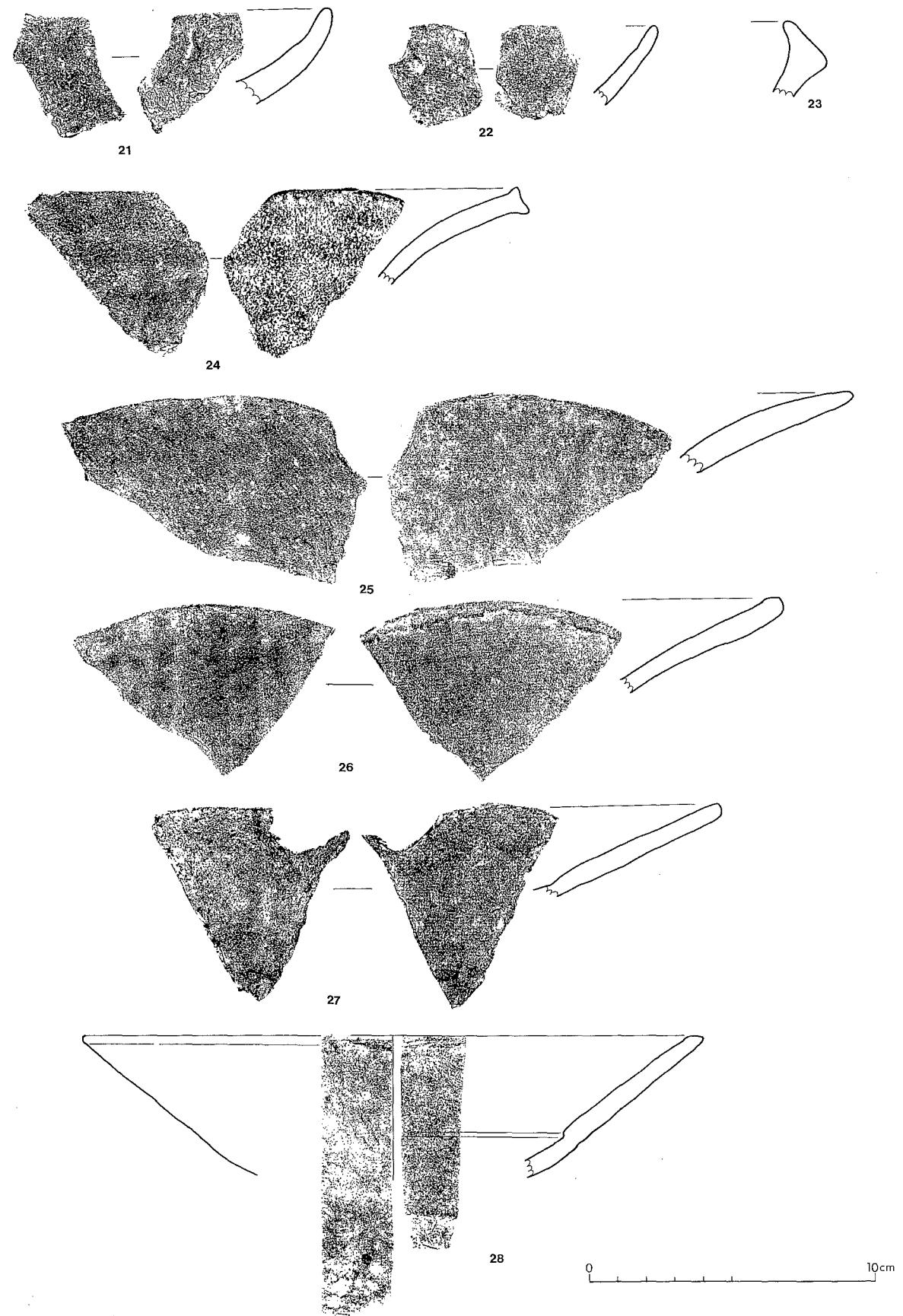
現存部だけで観察すると2.5個/cmの割合で施されている。突帯の上下の基部付近は横方向のナデ。 ϕ 1 mm以下の砂粒の混入が目立つ。2は上下二条の貼付け隆帯を有する土器である。左右一対の沈線文が隆帯間に施される。時期不明。

【II層】(第22・23・24・25図) 1は中世の瓦質土器の口縁部。口頸部が外反する鉢状の器形か。口唇部で肥厚し内側で突出する。内外面共に丁寧なロクロナデ。5は小形の布留系甕の口縁部。内湾しながらひろがり、口唇部が内側に肥厚する。内面はヨコナデ。外面の色調黒色。6は甕の口頸部。外面調整は丁寧なヨコナデ・内面調整は横方向のハケメとナデ。7と8は中世の土師質土器。7は外反しながら立ち上がる。推定口径9.4cm・推定底径8.4cm・器高1.4cm。内外面共にロクロナデ。9と12は10世紀代と考えられる壺と小皿である。9は推定口径10.0cm・器高2.0cm。底部はなだらかな丸底であるが、屈曲部から底部を考えると、推定底径7.8cmとなる。内外面共にロクロナデ。色調橙色。12の小皿は肥後地方からの搬入品と考えられ、長崎県域での類例を見ない。皿部が明瞭に外反する。推定口径10.0cm・器高2.5cm・高台高7mm・推定底径6.0cm・皿部の深さ8mm。微細な砂粒を含むが胎土は精良であり、色調灰白色。右回りの轆轤回転によるナデが内外面共に施される。高台内面はナデ。9は高壺の脚部。11と13は中世土師質土器。2点とも8と同様に体部下半で内湾し、口頸部で外反する器形。13は内外面共に丁寧なナデ。角閃石を多く含む。14は布留系甕の頸部。頸部屈曲部以上が内湾しながら立ち上がる。胎土中に金雲母を多く含み、搬入品と考えられよう。内面調整は屈曲部以下はケズリ+ヨコナデ。屈曲部以上丁寧なヨコナデ。33と同一個体の可能性が高く、口唇部のつくりから布留式新段階の資料か。33は口縁部内外面共にナデ。口唇部は平坦で内外面からの調整で肥厚する。15は5世紀半ば以降の土師器の壺の頸部。頸部で直立し、その後外反する器形。内面屈曲部以下は横方向のナデ。外面も丁寧なヨコナデ。16は甕の口縁部。内外面共にヨコナデ。17は弥生時代の壺の肩部。18と19は甕の口頸部。18は口縁部で短く外反し口唇部が薄くなる。口縁部外面ヨコナデ。19は頸部で緩やかに外反し、屈曲部内面が肥厚する。外面調整ヨコナデ。20は布留系甕の口縁部。内外面調整不明であるが、口唇部内側は調整による肥厚が見られる。第23図21は内湾しながら立ち上がる鉢の口頸部。内面調整は丁寧なヨコナデ。外面もナデ。22は中世土師質土器の口縁部。内外面共にナデ。23は弥生後期の複合口縁壺の口縁部。頸部で外反しながら立ち上がり、口縁部で反転し短く内傾または内湾気味に直立する。反転部内面はなだらかに移行する。口縁部外面はヨコナデ。24は弥生後期後葉の鼓形の器台の口縁部か。長崎県及び周辺地域の鼓形の器台は、宮崎貴夫によってその類例・編年的位置について論じられている(長崎県教育委員会1985 「西ノ角遺跡」p86)。25は第23図14と同一個体で畿内系高壺の低脚の大きく開く裾部である。26も同様に畿内系高壺の低脚の大きく開く裾部である。外面は最終調整として縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のナデ。色調橙色。28は内面で段を持つ古墳時代前期の高壺である。口径20.8cm・現存部高さ6.3cm。内面有段部は幅4mm程度の沈線状の調整が施される。内面有段部以下は縦方向のハケメがナデによって消され、有段部以上は左上→右下と横方向のハケメの後口縁部のみヨコナデ、他は縦方向のナデであるがハケメ痕が明瞭に残る。外面有段部以上は左上→右下方向のハケメの後口縁部のみヨコナデ、他はナデ。有段部以下の外面は接合部が剥落した状態であり接合面は凹凸が激しい。壺部の現存部(口縁上端から割口まで)の長さ9.5cm、接合面の長さが4.2cmであり、接合部の割合が非常に大きい。壺部とその底部または脚部の製作手順を考えるうえで重要な資料である。29は台付甕の台部で、外反しながら丸みを帯びた下端部で着地する。 ϕ 0.5mm以下の砂粒を多く含む。30も台付甕の台部であるが直線的または内湾気味に開く器形である。外面調整は横方向のナデ。31は縄文晚期前葉～中葉の深鉢の底部である。底面に3本一単位の明瞭な調整痕を残す。32も同時期の鉢および浅鉢の口縁部。内傾接合面から割れている。33は14

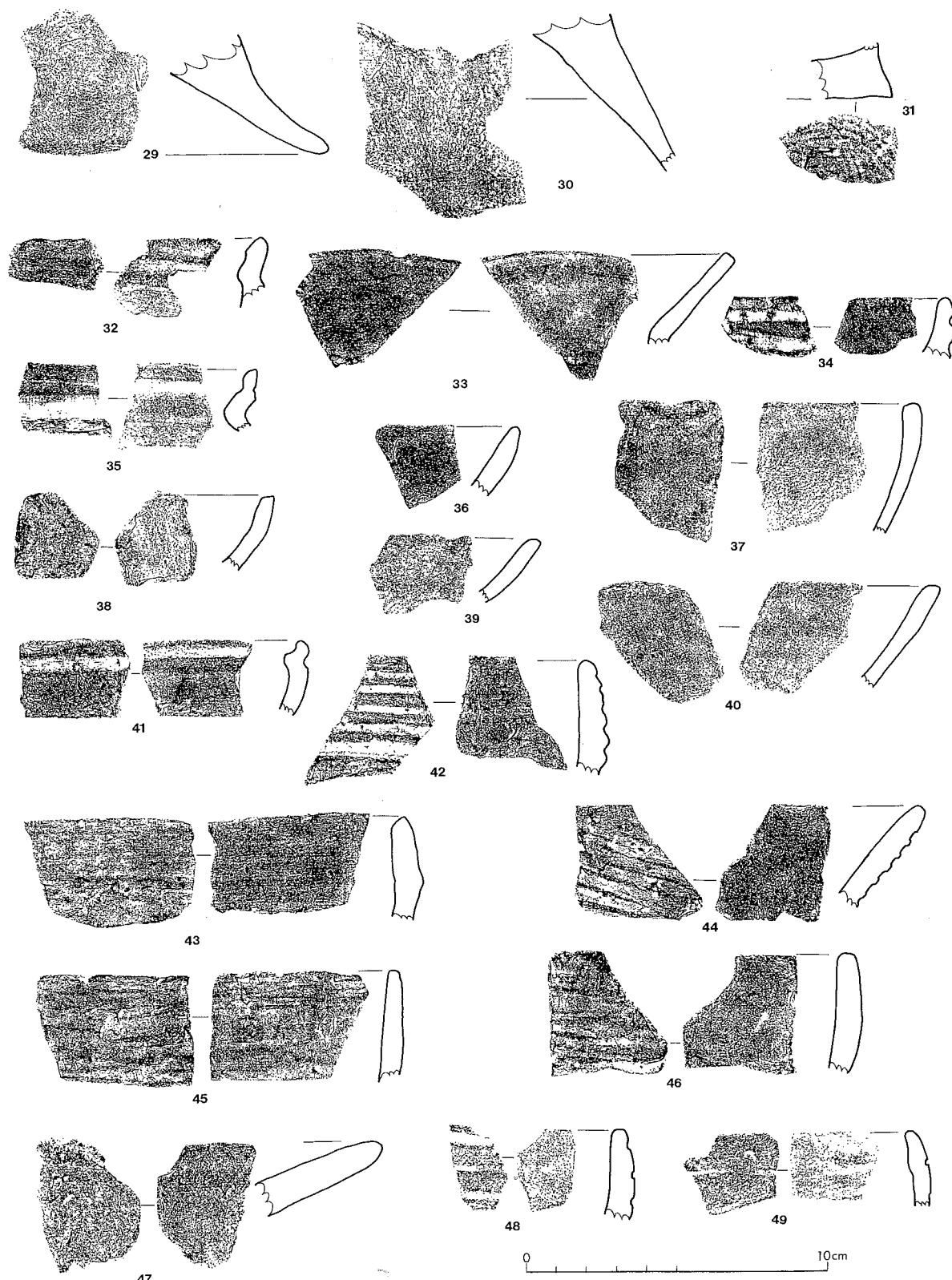


第22図 I—B区II層遺物実測図①(1/2)

と同一個体と考えられる布留式新段階の甕口縁部で金雲母を多く含む搬入品。頸部から内湾氣味に立ち上がり口唇部が内外面の調整によって肥厚する。34は縄文晩期前葉～中葉の深鉢のタガ状の口縁部。口縁部がやや外傾し新しい様相を示す。沈線断面は半円形。35は縄文晩期前葉の浅鉢の口縁部。口縁

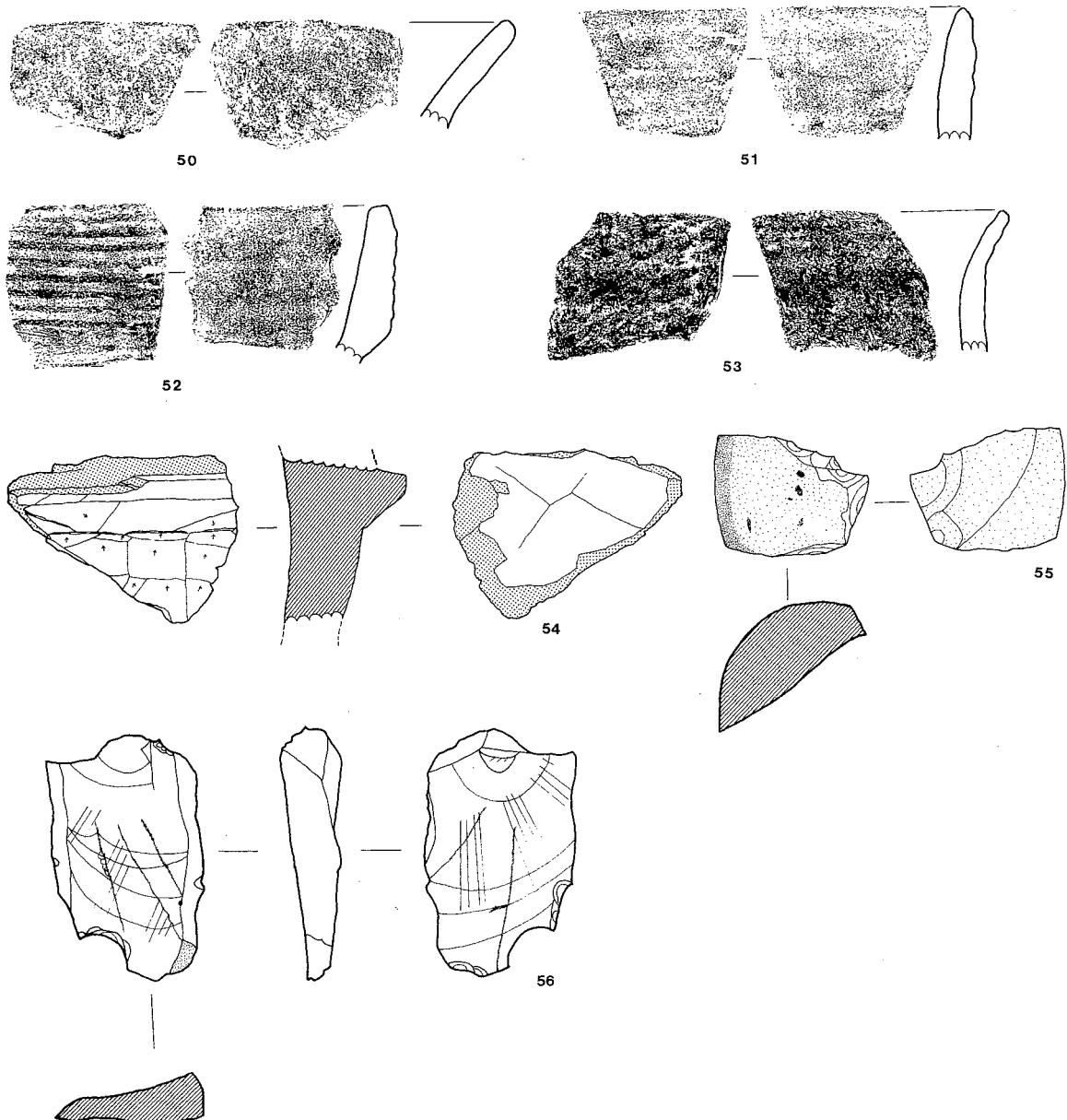


第23図 I—B区II層遺物実測図②(1/2)



第24図 I-B区II層遺物実測図③(1/2)

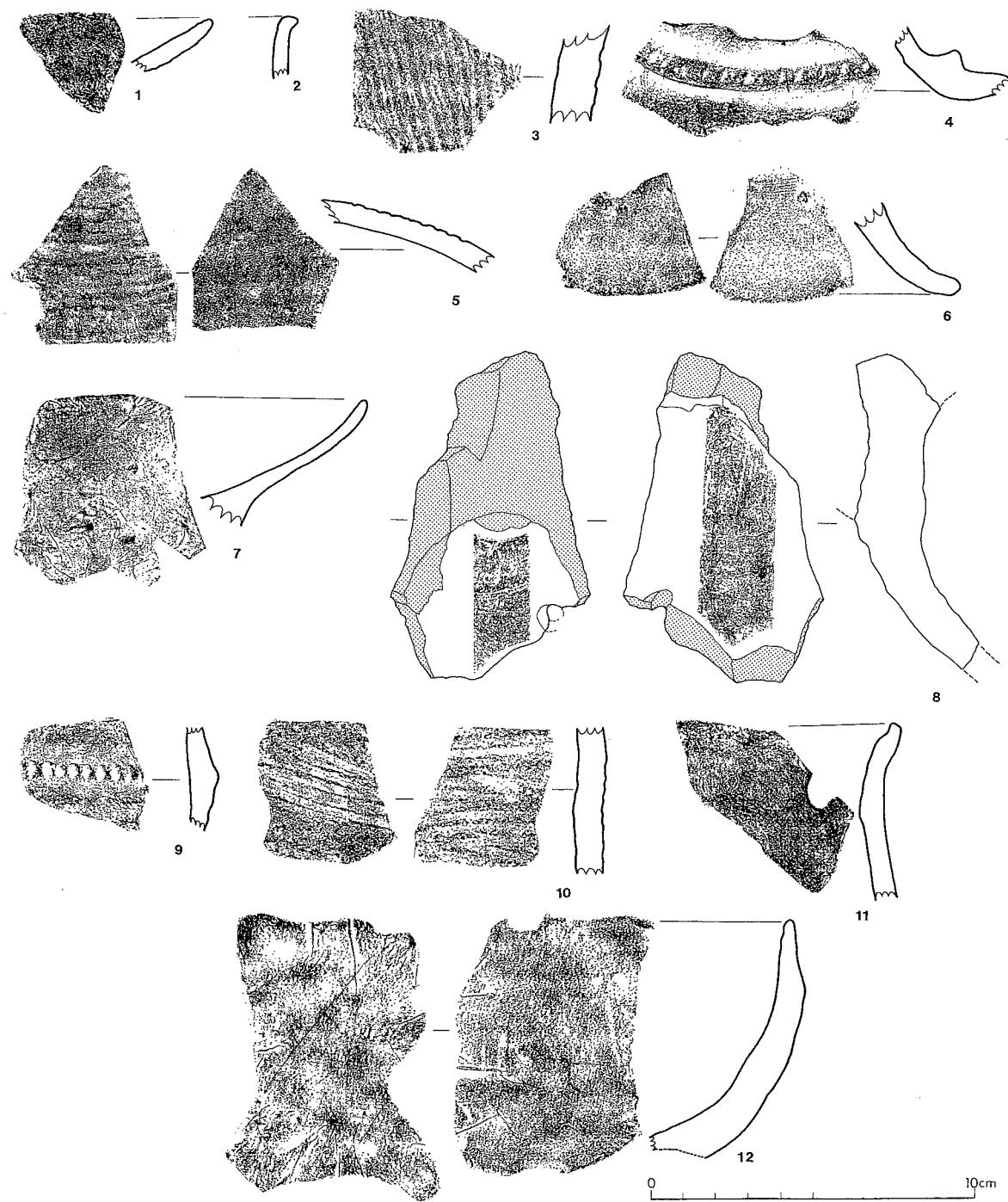
部が短く頸部の屈曲が強い。内外面共にミガキ。36は中世土師質土器の口縁部。内湾しながら立ち上がり口唇部が若干肥厚する。38と39は甕の口縁部で内湾しながら立ち上がる。38は内外面共にヨコナデ。39は外面ヨコナデ・内面は左上→右下方向のナデ。40も甕の内湾しながら立ち上がる口縁部。口唇部は平坦。内外面共にヨコナデ。41は縄文晚期前葉の浅鉢の口頸部。内外面共に丁寧なミガキ。42は5条の平行沈線が施される縄文晚期前葉の深鉢のタガ状の口縁部である。内外面ともにナデ痕が



第25図 I-B区II層遺物実測図④(1/2)

認められる。43は縄文晚期前葉の深鉢または鉢のタガ状の口縁部である。口縁部内外面共に丁寧なナデ。44も同時期の条痕による調整が施される深鉢の口縁部。条痕原体は板目か。条線の幅は3mm程度。口縁部直下は横方向のナデ、内面もナデ。45も同時期の深鉢の口縁部。内外面共に、調整による明瞭な線状痕を残す。46も同時期の深鉢のタガ状の口縁部で内湾しながら立ち上がる器形。口縁部に条痕が施される。47は台付甕の直線的な台部。48は縄文晚期前葉の深鉢の口縁部。現存部で3条の平行沈線が認められ、口縁部で直立する。49は深鉢の口縁部外面に浅く細い沈線が2条入るが、装飾を意図したものかどうかは不明。内面にも同様の浅く細い沈線が1条入る。50は古式土師器の甕口縁部。内外面共にヨコナデ。51は深鉢の口縁部。内外面共に横方向のナデ。52は縄文晚期前葉のタガ状の口縁部。7条の横方向の条線が施される。外側に傾いてひろがる。内外面共に横方向のナデ。53は頸部で外反する縄文早期の押型文土器。外面は橢円押型文・内面は4条のだらしなく横走する押型文が施される。砂粒を非常に多く含み器表面は脆い。

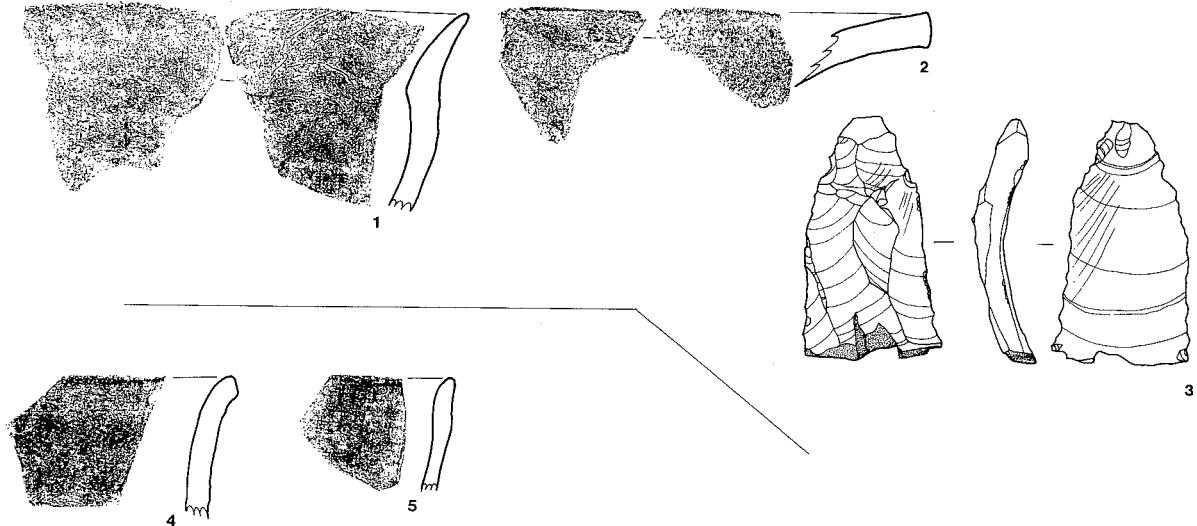
【II層北東部】(第26図) 1は器厚が薄い甕の口縁部。内湾気味に立ち上がる。1は頸部が外反気味に直立し、丸みをもった口唇部で短く外方に突出する。内外面共にナデ。3は縦方向の条線が施さ



第26図 I-B区北東部II層土器集中域遺物実測図(1/2)

れた土器体部。4は弥生後期の刻目の突帯を有する壺の頸部である。外面横方向のナデ。5は縦走する条線が施された甕の体部下半である。砂粒の混入が多いが、焼成は堅緻である。6は台付甕の台部で外反しながら下端へ向かう。台内部上半は横方向のナデ。7は布留式古段階の搬入品と考えられる器台の上半部。脚柱部からスムーズに外反気味にひろがり、口縁部で内湾しながら立ち上がる。器厚が非常に薄く胎土も精良。内外面共に丁寧なナデ。器厚は約3mmと薄く全体に丁寧なつくりである。8は弥生後期終末～古墳時代前期初頭の高坏の脚柱部で、焼成前に外部→内部にむけて穿孔されている。中実の脚柱部以下では広く開く器形である。内面横方向のナデ・外面は縦方向に線状痕が残る調整。色調橙色。9は甕の体部上半の屈曲部の低い突帯に2.3個/cmの割合で刻みが施されるもの。10は内外面に条線がのこる縄文後期終末～晩期前葉の深鉢。11は緩やかに外反する甕の口頸部。外面下方

向から焼成後に穿孔されている。内外面ともナデ。口唇部を指でつまんで成形しており低い波状口縁を呈する。12は碗形土器の口縁部から体部付近である。11と同様に口唇部を指でつまんで成形しており波状口縁を呈する。内面は縦方向のナデ・外面はナデであるが外面はあまり丁寧ではない。角閃石及び絹雲母を非常に多く含む。

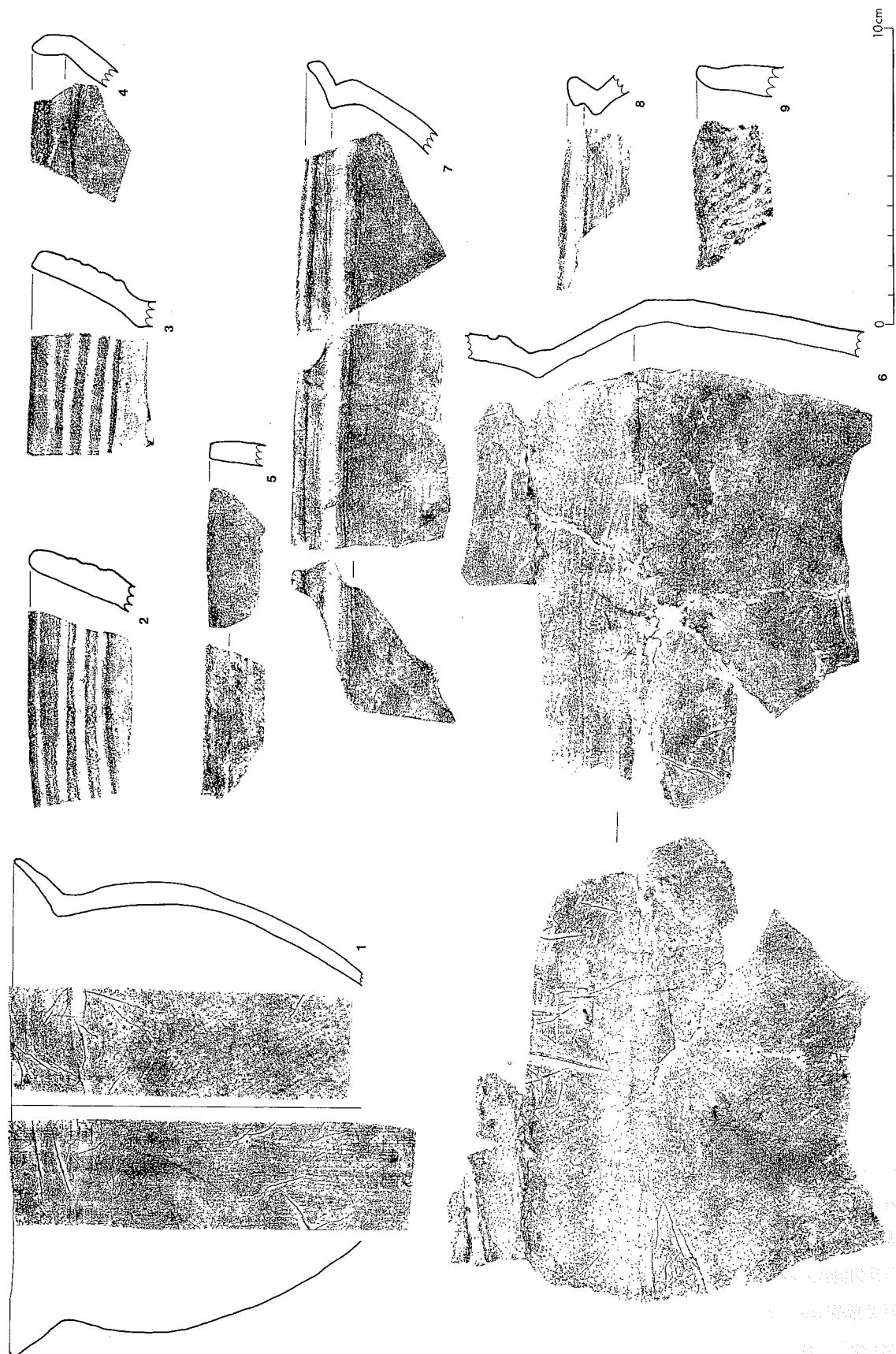


第27図 I—B区南西部(1～3)・II層Pit関連遺物(4～5)実測図(1・2・4・5:1/2、3:1/1)

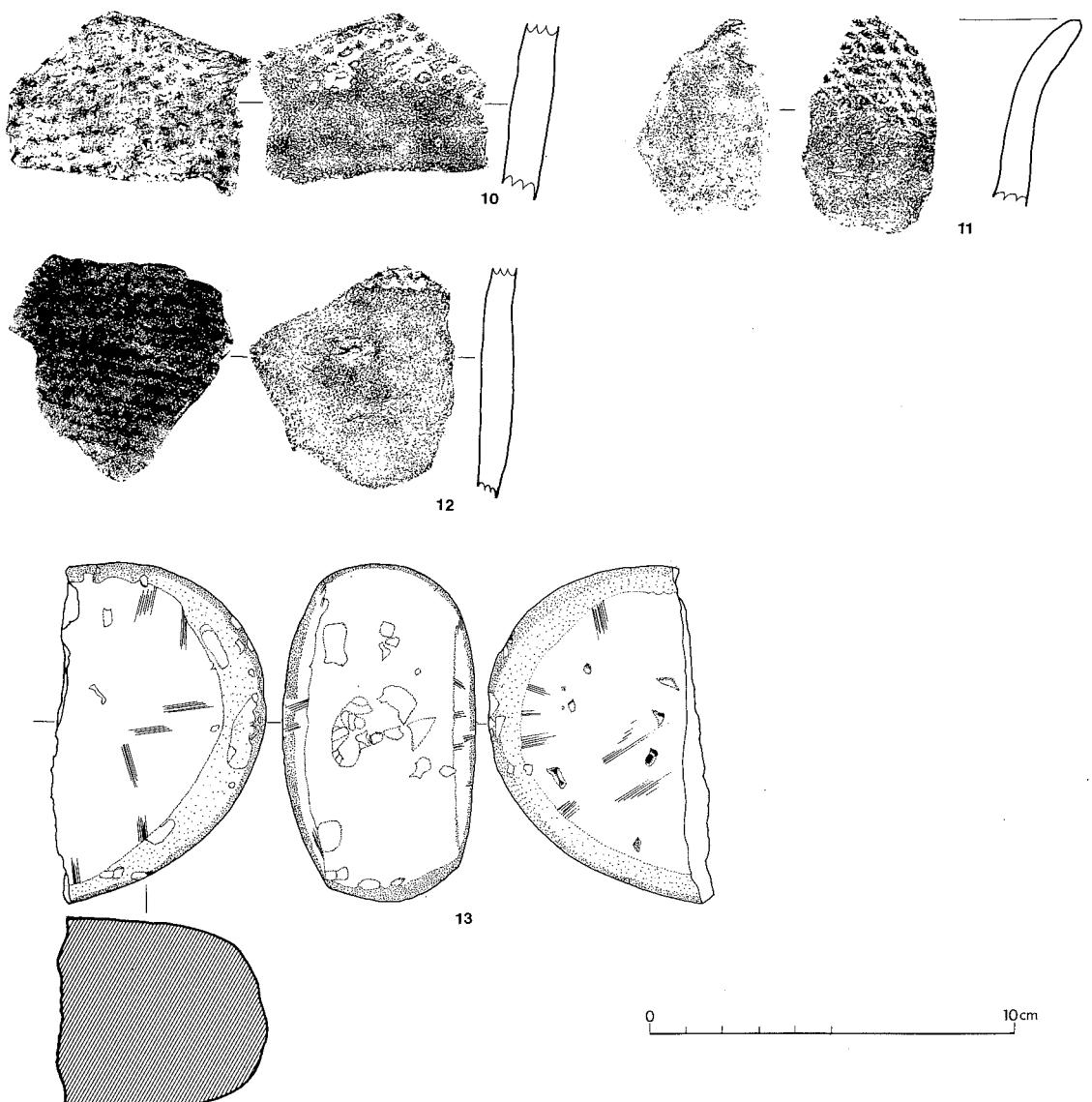
【南西部・II層ピット関連】(第27図) 1は頸部で緩やかに外反し、屈曲部内面が肥厚する。外面調整ヨコナデ。25図19と同一個体か。2は甕の口縁部で内外面共にヨコナデ。4も甕の口縁部と思われ、金雲母を多く含む。5は25図2・3・4と同一個体の黒色土器Bで口頸部で外反する器形。

【III層】(第28・29図) 1は土師器の大形破片である。口径16.4cmで最大径となる。胴部最大径15.2cm。現存部高さ11.8cm。頸部内面は稜をもって屈曲し内湾しながら外上に開く。口縁部内外面共に横方向のケズリの後ヨコナデ。頸部も同様にヨコナデ。体部は全面に浅い刷毛目が上下方向に施される。頸部内面は横方向のケズリの後ヨコナデ。体部上半は左上→右下方向に浅い刷毛目。体部下半は上下方向の浅い刷毛目。2～7は縄文晩期前葉～中葉の資料である。同時期の資料は島原市畠中遺跡で出土している。2・3は同一個体でタガ状口縁深鉢の口縁部で4条の平行沈線が施されている。口縁部内外面共に横方向の丁寧なナデ。4は黒色磨研の浅鉢の口頸部。頸部で直立する器形。5は深鉢の口縁部か。内面は口縁直下は左上→右下方向のナデ。それ以下では横方向のナデ。6は深鉢の頸部～体部上半である。体部上半で稜をもって内傾しタガ状口縁へとつづく。内外面共頸部および肩部は横方向のケズリの後ナデ、肩部の張り出し以下は左上→右下方向のケズリの後、同方向のナデ。タガ状口縁の現存部には1状の沈線が残る。角閃石と金雲母を含む。7と8は鉢形または浅鉢形土器。共に胎土に角閃石を非常に多く含む。7は内外面共にナデの後、横方向のヘラミガキ。8は内外面と口唇部の横方向のナデ。9は楕円押型文が施されたもの。10は内外面に楕円押型文が、11は外面口頸部無文で口縁部内面に楕円押型文が横方向に、12は反転部が丸みを帯びた山形押型文が外面は上下方向・口縁部内面に同じ文様が横方向に施される。

【IV層】(第30図) 1～4は縄文晩期前葉～中葉の土器で、上層でも同時期のものが出土している。1は深鉢口縁部。胎土に金雲母を含む。2は深鉢のタガ状の口縁部。内外面共に横方向のナデ。3は深鉢の体部であるが9条の沈線が見られる。4は深鉢の大型破片で、外面調整は左上→右下の貝殻条痕である。5～9は楕円押型文が施される土器。7を除いて角閃石を非常に多く含む。5～7は小形で密度の高い横長の楕円文であるが、9は隅丸方形で一辺5～6mmの大きな押型文である。



第28図 I-B区III層遺物実測図①(1/2)



第29図 I—B区III層遺物実測図②(1/2)

【V層】(第31図) 資料化できたものは、すべて縄文早期の押型文土器である。1と2は同一個体でIII層にもみられた反転部が丸みを帯びた山形押型文が施される。32図12とも同一の可能性がある。3~5は橢円押型文が施される。すべて角閃石を多く含む。

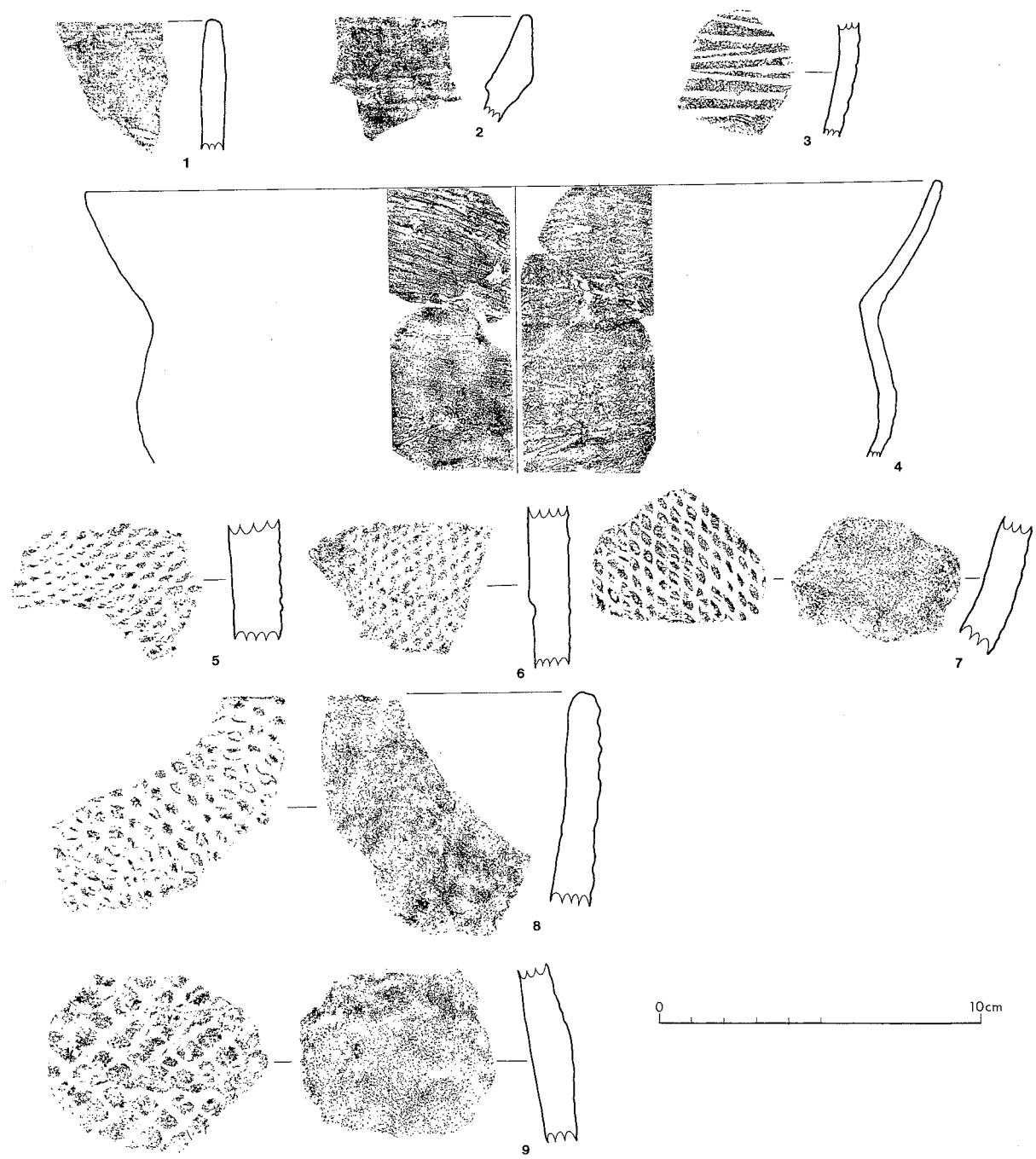
【VI層】(第31図) 最下層のVI層でも橢円押型文土器2点が図化できた。どちらも押型文施文に関しては丁寧ではない。6は角閃石を非常に多く含む。

『I—C区』

【II層】(第32図) 2は布留系直後(1990 柳田)の甕の口縁部である。口縁部外面は炭化物の付着が著しい。口縁部外面は横方向のナデ。口縁部内面は刷毛目の後にナデ。3は中世土師質土器。内外面共に横方向のナデ。4は鼓形の器台の脚部か。鼓形の器台はB区II層でも出土している。脚部末端は平坦に面取りされる。内外面共に調整は刷毛目の後ナデ。5は断面台形状の突帯を有する弥生土器。7は縄文晚期前葉の浅鉢口縁部か。8は深鉢の肥厚した屈曲部。屈曲部上半に沈線様の横走する線が2条認められる。9は内外面に橢円押型文が施されるもの。

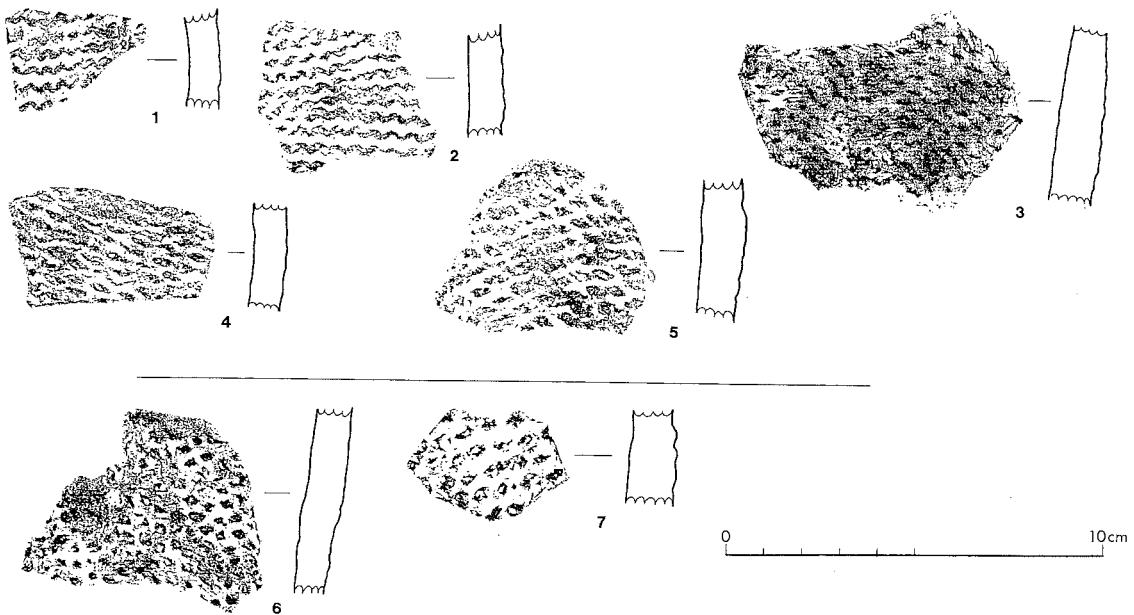
【III層】(第34・35・36・37図)

1は13世紀の鎧蓮弁が施された龍泉窯系青磁。2は中世土師皿で推定口径9.0cm。推定底径3.2cm。



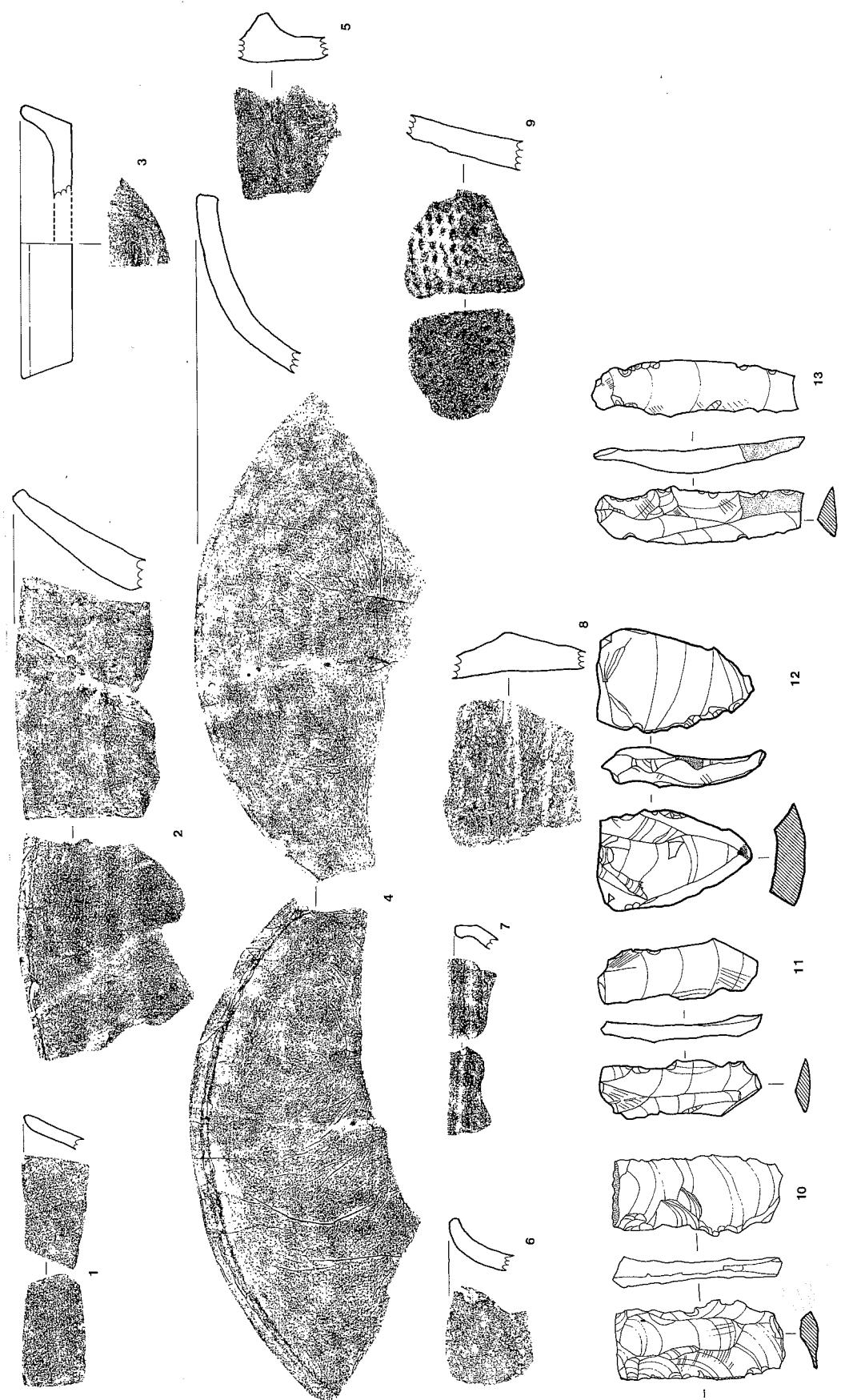
第30図 I—B区IV層遺物実測図(4:1/4、その他:1/2)

現存部高さ1.0cm。底部は籠切りで1よりは古手で、胎土は精良で搬入品である。3は須恵器のハソの口頸部である。5は古墳時代土師器の小型壺で絹雲母を多量に含む。7は頸部に沈線状の横走線をもつ。内外面共に横方向のナデ。8は中世土師質土器の蓋。9は弥生後期の複合口縁壺の口頸部。口縁部と頸部との接合部で下に飛び出す。細砂粒を多く含み、内外面共にヨコナデ。11は若干外反気味の口縁部直下に刻目突帯文を有する深鉢口縁部。突帯の断面は三角形で刻目は先端が平坦な縦長の工具によるものである。12はその胎土・焼成・器形から押型文土器の底部破片と考えられる。底部から内側に抉れながら外反し立ち上がる。底部圧痕は認められない。14は縄文晩期前葉深鉢のタガ状の口縁部。口縁部には3条の横走沈線が認められる。沈線幅3mm程度。弥生後期の16は突帯が付された甕の体

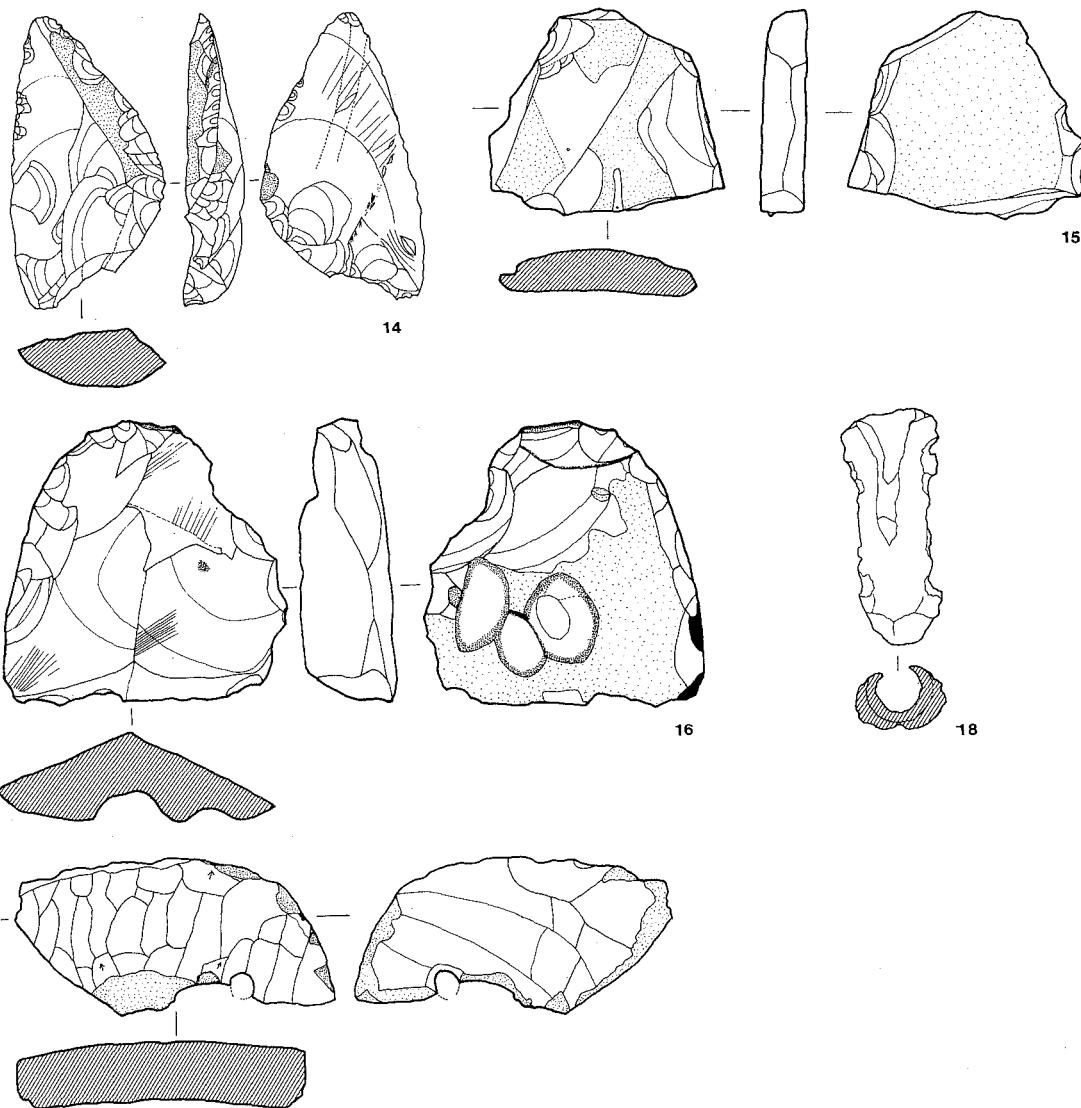


第31図 I—B区遺物実測図(1/2)(1～5：V層、6～7：VI層)

部。突帯間は横方向のナデ。17も16の似た突帯が施される体部。18は刻目突帯文を有する深鉢体部。突帯断面は台形状で $2.1\text{個}/\text{cm}$ の割合で刻みが施される。19は弥生後期の複合口縁壺の口縁部。器厚は非常に薄く頸部で $4\sim 5\text{mm}$ である。口縁部は下外方へ稜をもって張り出す。20は畿内系の器台の口縁部。焼成前穿孔が認められる。22は台付甕台部。23は古式土師の甕口縁部か。内外面共に刷毛目痕が明瞭に残る。24も古式土師の甕口縁部。砂粒を多く含み内外面共にヨコナデ。図38の25・27・28は弥生後期の土器で器種不明であるが口唇部が平坦で肥厚する。外反しながら開く器形。26は壊の口縁部か。内外面共にヨコナデ。29は突帯が付される壺の肩部か。突帯頂部は丸みをもって仕上げられる。30は口唇部に $1.7\text{個}/\text{cm}$ で刻目が施される。その下には2条の横走沈線が認められる。31は弥生中期終～後期前葉の突帯が施される大形壺の体部破片。2条の断面長方形を呈する突帯に $1.4\text{個}/\text{cm}$ で刻みが施される。外面は縦方向の刷毛目痕がナデによって消され、内面は斜め方向の刷毛目痕が明瞭で、刷毛目工具の幅は2 cm程度である。金雲母と $\phi 1\text{mm}$ 以下の砂粒を非常に多く含み搬入品と考えられる。32～57は縄文晩期前葉～中葉の土器群。32は沈線状の条線が認められる深鉢口縁部。33は器種不明であるが横走沈線が2条走る。34は横方向に条線が施される深鉢のタガ状の口縁部。内外面共に横方向のナデ。35は無文の鉢の口縁部か。口縁部直下で屈曲する器形。内外面共にナデ。37は無文の深鉢の肥厚する口縁部。38は無文の鉢。口縁部内外面共にナデ。39も深鉢の口縁部。外面は横方向の条線がナデで消され、内面は横方向の線状痕が明瞭なナデ。40・42・44は深鉢のタガ状の口縁部。41・43は外面横方向の条線の後ナデが施される深鉢の口縁部。45は浅鉢の口縁部で、頸部で緩やかに外反し口縁部がごく短い。46は鉢の口縁部で、他のものに比べてやや古手の三万田式期前後のものか。47は縄文晩期前葉の浅鉢で肩部で稜をもって張り出す。内外面共に横方向の丁寧なナデ。48も同時期の浅鉢の口縁部。外面はヘラミガキ。口縁部に1条の沈線が施される。49は器種不明であるがミニチュア土器か。内外面共に横方向のナデ。50は45と同様の器形の浅鉢の口縁部。51は無文の深鉢のタガ状の口縁部。砂粒を多く含むが焼成良好。内外面共に横方向のナデ。52は中世の土師質土器か。胎土に赤色の粒子を含む。53は弥生後期の甕の口縁部。口唇部が外側に肥厚する。54は頸部で稜をもって屈曲する無文の鉢。口縁部内外面共に横方向のナデ。55は丸底の浅鉢。内外面共に横方向のナデ。56も浅鉢の破片。外面器表面が脆く、細砂粒の混入が目立つ。内外面共に横方向のナデ。57は横方向の条線が



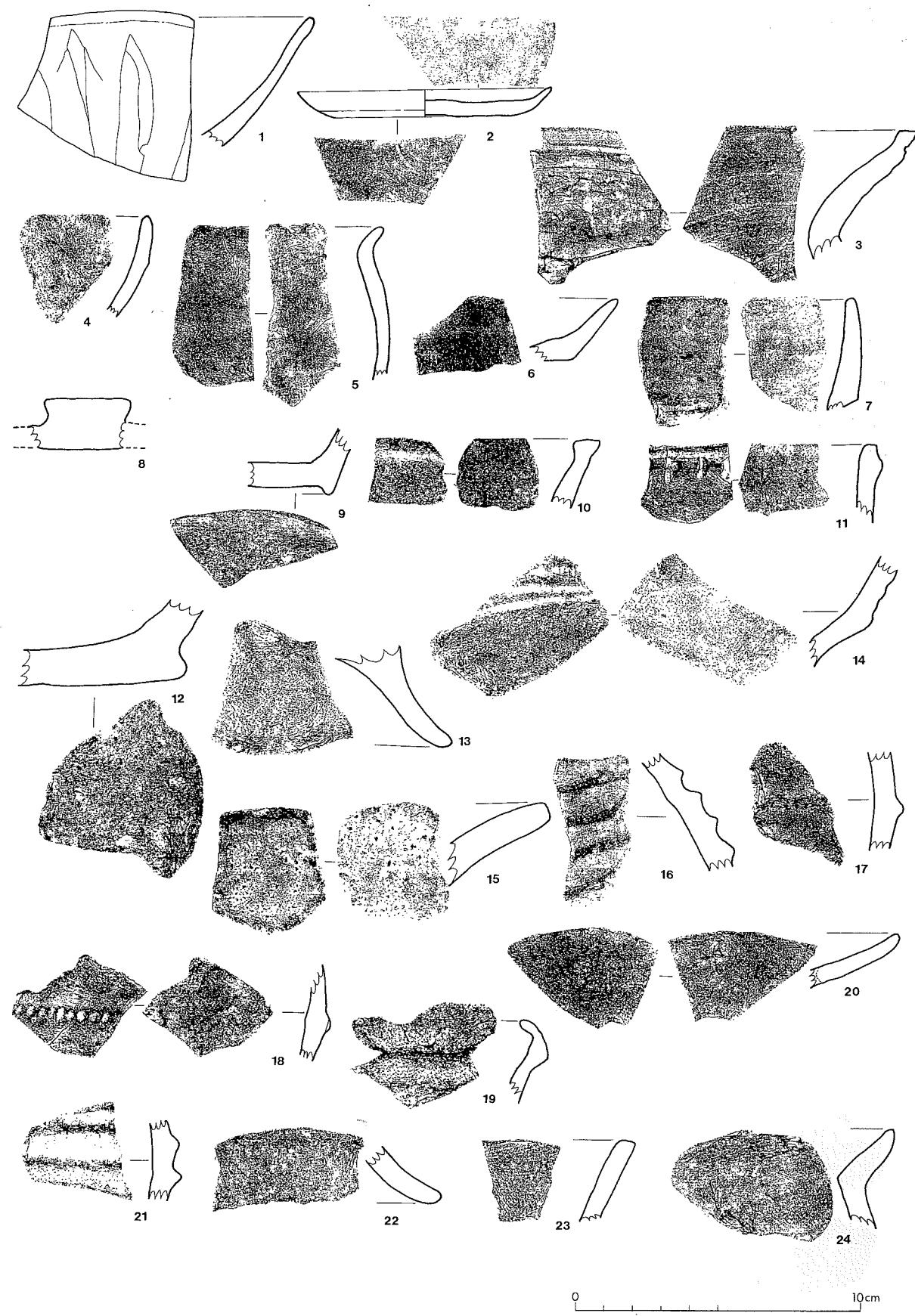
第32図 I—C区II層遺物実測図①(1~9:1/2、10~13:1/1)



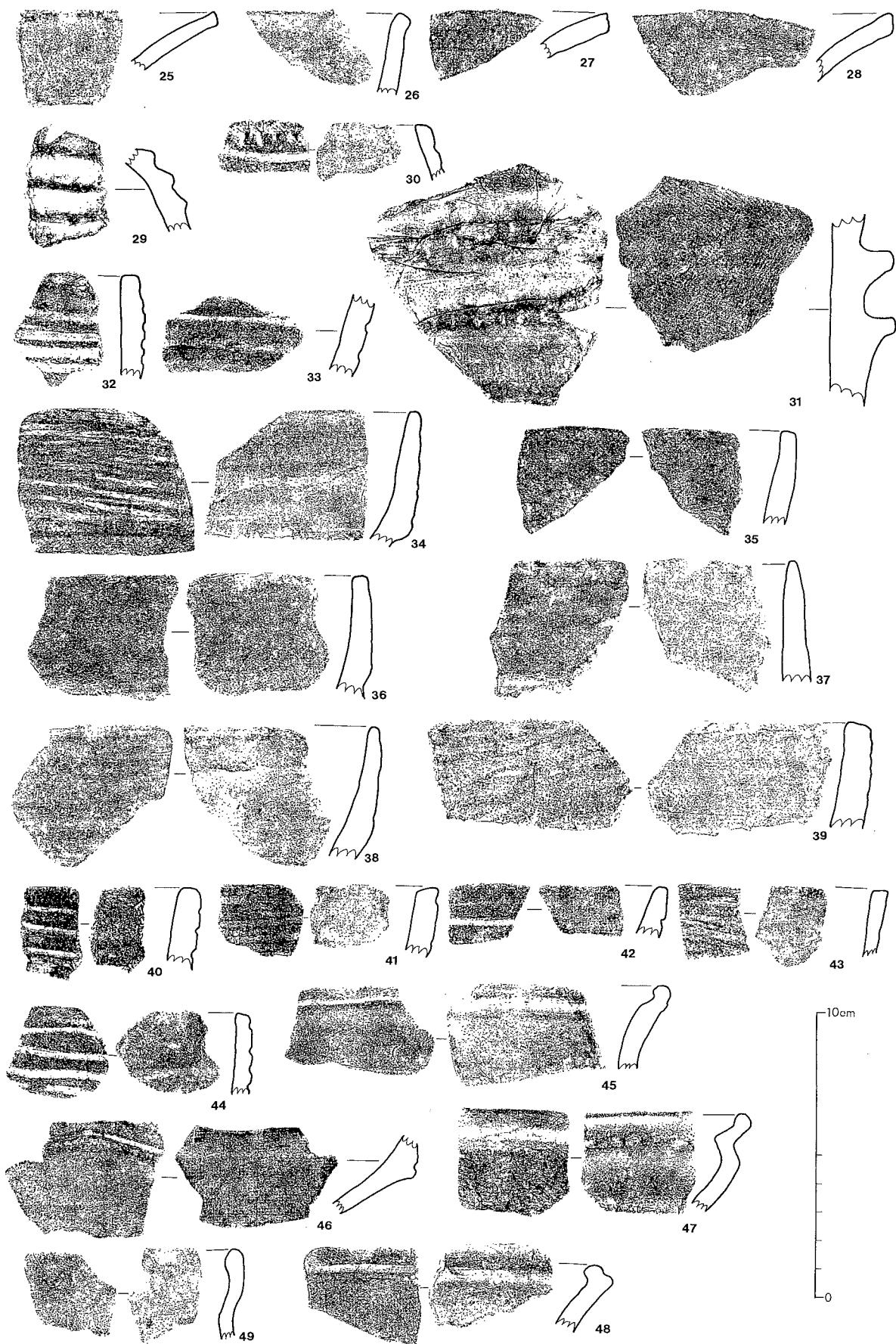
第33図 I—C区II層遺物実測図②(14:1/1、15~18:1/2)

施される深鉢の頸部。58は外反気味に立ち上がる器形で橢円押型文が施される深鉢。口縁部内面は縦方向の原体条痕と橢円押型文が施される。59は左上←→右下方向に山形押型文が施される深鉢。口縁部を欠損しているが内面は横方向に山形押型文が施される。頸部で緩やかに外反することが伺われる。外面施文方向が斜位であることが特徴的で東九州の田村式に多く認められる施文手法で隣接する吾妻町の弘法原遺跡出土土器群の中にも少数であるが認められる。内外面共に器表面が脆く文様の観察が困難である。

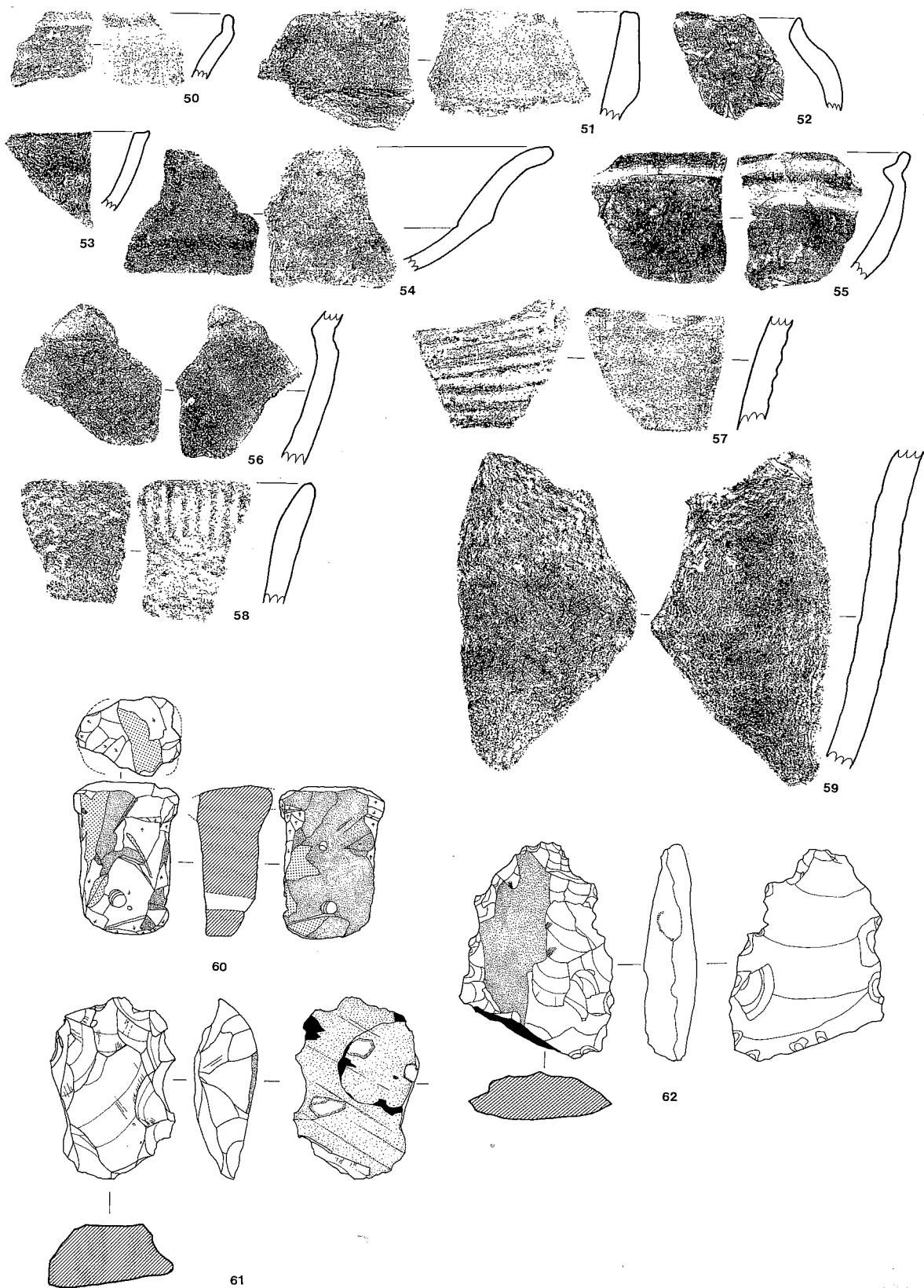
【IV層】(第39・40図) この層でも縄文晩期前葉～中葉の土器群が出土している。1は肩部に最大径を有する無文の鉢の口頸部。内外面共に横方向のナデ。3・4は深鉢のタガ状の無文の口縁部。3は口縁部に横走する沈線状の凹線が2～3条認められる。内外面共に横方向のナデ。角閃石を非常に多く含む。4は内湾気味に口縁部が立ち上がる。内外面共に横方向のナデ。5は横走および斜行する条線が残される深鉢の口縁部。6はタガ状口縁が退化もしくは口縁帯をもたない土器の口縁部が肥厚した深鉢。肩部が最大径となる。口縁部は板目工具による横方向の調整痕が明瞭に残るナデ。頸部以下は左上←→右下方向のナデ。内面は横方向のナデ。角閃石を非常に多く含む。7はやや古手の鉢の口縁部か。横走沈線が2条認められる。8は底部から直線的に開く深鉢か。口縁部内外面共に横方向



第34図 I-C区III層遺物実測図①(1/2)

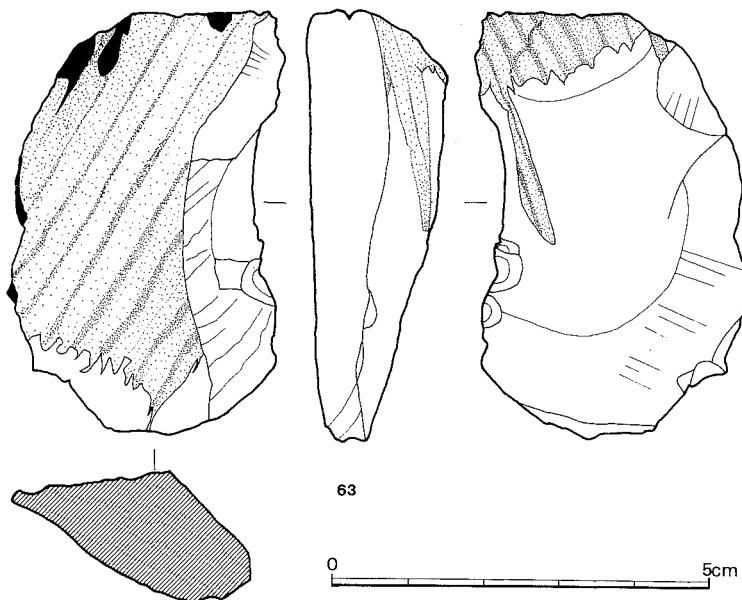


第35図 I—C区Ⅲ層遺物実測図②(1/2)



第36図 I—C区III層遺物実測図③(50~61:1/2、62:1/1)

のナデ。外面の色調橙色。9~23は早期押型文期の土器群。9は口縁部で緩やかに外反する深鉢。外面器表面は剥落している。10は口頸部で緩やかに外反しながら立ち上がる深鉢。外面に橢円押型文・内面には縦の原体条痕+橢円押型文が施される。11も内外面に橢円押型文が施されるものであるが、口縁部を欠損しているので内面原体条痕は確認できない。12~17はいずれも外面に橢円押型文が施さ



第37図 I-C区III層遺物実測図④(1/1)

内面も横方向のナデ。2・3は浅鉢の口縁部。3は内外面共ミガキ。4は三万田式期前後の鉢の口縁部。32図7と同一の可能性あり。5は現存部が無文の浅鉢の胴部の屈曲部。外面の最終調整ミガキ。7は頸部で屈曲する浅鉢。屈曲部以下は直線的に底部へむかう。 $\phi 1\text{mm}$ 以下の砂粒を非常に多く含む。8と9は外面に橢円押型文が施される。6は時期不明の深鉢の底部で底径7.0cm。 $\phi 1\text{mm}$ 以下の砂粒を非常に多く含む。

【VI層】(第42図) 1は無文であるがその胎土・焼成から見て縄文早期押型文期の深鉢の底部と考える。推定底径11.5cm。 $\phi 1\text{mm}$ 以下の砂粒と角閃石を非常に多く含む。

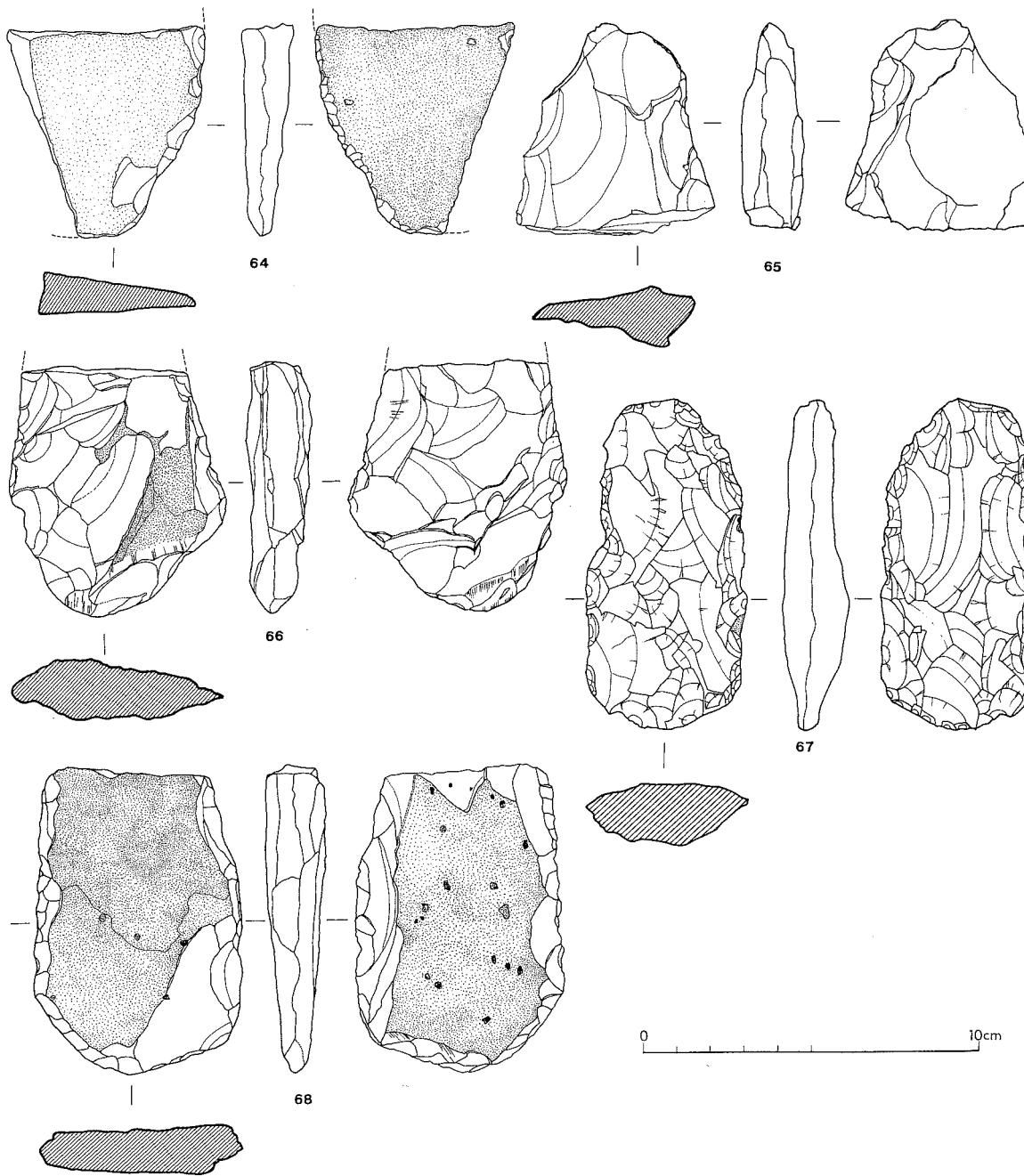
『I-C・D区間』

【I-C・D区間 1号住居址(弥生時代後期)】(第43図) C区西断面に、北から南に向かって落ち込む竪穴状の断面が確認されたため、C-D区間ベルトにおいての竪穴状遺構の検出が予想された。ベルトの北側で竪穴状の掘り込みプランの一部を確認したが、検出されたプラン以外の部分は、既にC区とD区の発掘作業の進行によって破壊された。当遺構の規模から見て、C区またはD区の南断面に、竪穴状遺構の落ち込みの存在を予想したが、明瞭なものは確認できなかった。また掘り込みプランの検出を期待して、C-D区間の南側に1.5mほどの拡張区を設けたが、遺構南端部の状況は不明であった。当遺構の北側縁辺部には、幅50~80cm程度のベッド状の高まりが認められ、床面との比高差は8~15cm程度である。長崎県内では、島原半島の今福遺跡でベッド状遺構を有する円形の竪穴式住居跡(報告では弥生後期終末~古墳時代初頭)が確認されている。土坑は、不規則な分布で大小7個が確認された。大形の土坑は長橢円形を呈し、15~20cmの礫が2個検出されている。またこの長橢円形の北側及び北東側の床面からは20cm程度の礫が4個、その北側には木片が変容したような細長い粘土塊が認められた。1号住居址は大部分が破壊されており、炉跡や柱穴の配列などの竪穴住居址全体の構造は不明である。住居の帰属時期は床面出土の壺の口縁部より弥生後期後葉前後と考える。(1号住居址埋土)第44図1は無頸壺の口頸部か。口唇部が肥厚し平坦に作られる。内外面共にナデ。2は断面三角形状の突帯が付される体部破片。突帯部は横方向のナデ。突帯より下は縦方向の刷毛目の後にナデ。3は口縁部が外反気味に開く弥生時代の壺口縁部。色調橙色。5は横走する条線が施される深鉢の口縁部。6は頸部に1.4個/cmで刺突が1条施される壺。

【1号住居址床面遺物】(第45図) 1は弥生後期後葉の壺の口頸部で口径15.0cm。口頸部で緩やか

れる体部破片である。18~20はいずれも外面および内外面に山形押型文が施される体部破片。18は外面口縁部に縦方向に施文しその下に無文帯を有する。内面は横方向に施文されるが原体条痕は不明。22は外面に格子目押型文が施される。当遺跡出土の押型文土器では格子目文は非常に少ない。内面に指頭押圧痕が残る。

【V層】(第41図) V層でも縄文後期終末~晚期前葉の土器が出土している。1は深鉢または壺の頸部。外面は丁寧な横方向のナデ。

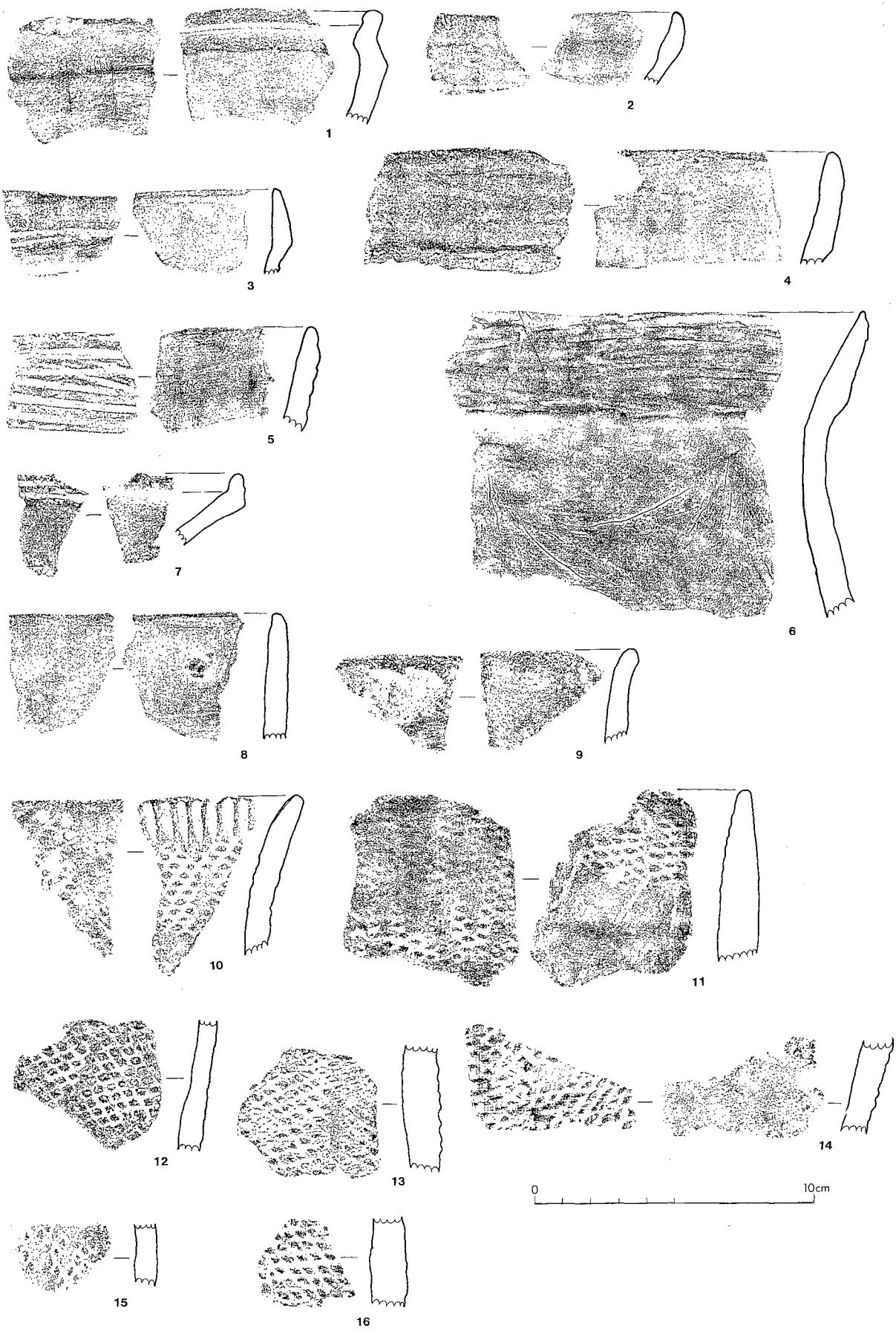


第38図 I-C区III層遺物実測図⑤(1/2)

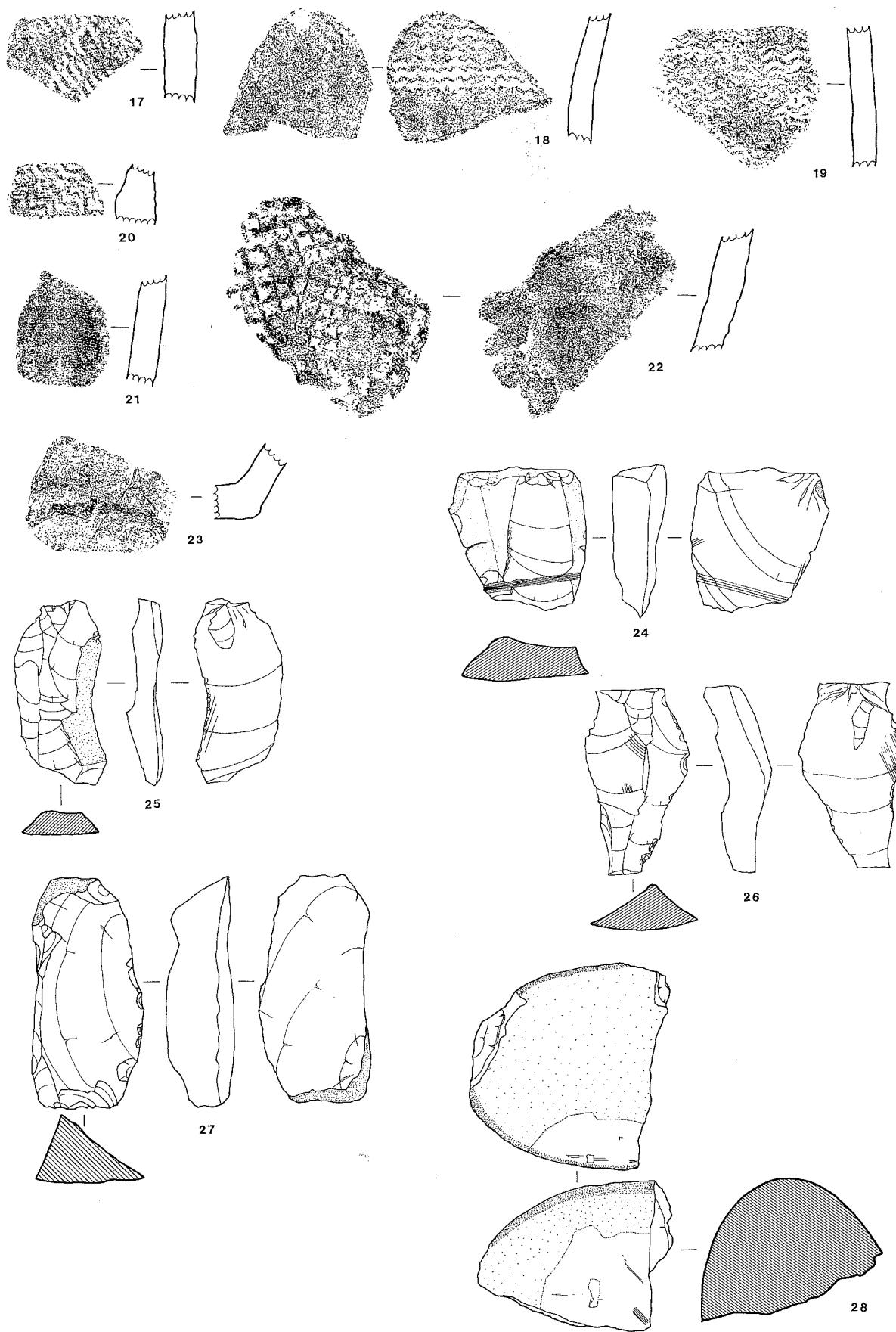
に外反し立ち上がる。口唇部はナデ。口縁部外面は横方向の丁寧なナデ。明瞭な線状痕が認められ板状工具によるものである。内面も同様の調整がなされるがナデによってその痕跡は目立たない。 ϕ 1 mm前後の砂粒が多く含まれるが器表面では調整によって目立たない。2は弥生後期後葉～終末期の甕の口縁部である。内湾気味に外上方に開く。3は深鉢または甕の頸部。第44図1と同一個体。内面で屈曲し内湾気味に立ち上がる。いずれも外面に施された沈線部で破損している。4は縄文晚期前葉の深鉢の口縁部。口縁部が内湾気味に外上方に立ち上がる。内外面共にナデ。砂粒を非常に多く含む。

【II層】(第46図) 1は弥生後期終末の甕の口頸部。内面は稜をもって屈曲し、外面は緩やかに外反する。色調橙色。2は縦方向の刷毛目痕が明瞭に認められる平底の破片。3と4は台付甕の台部。3は外面は縦方向の刷毛目痕がわずかに残る。台部内面の下端付近は横方向のナデ。

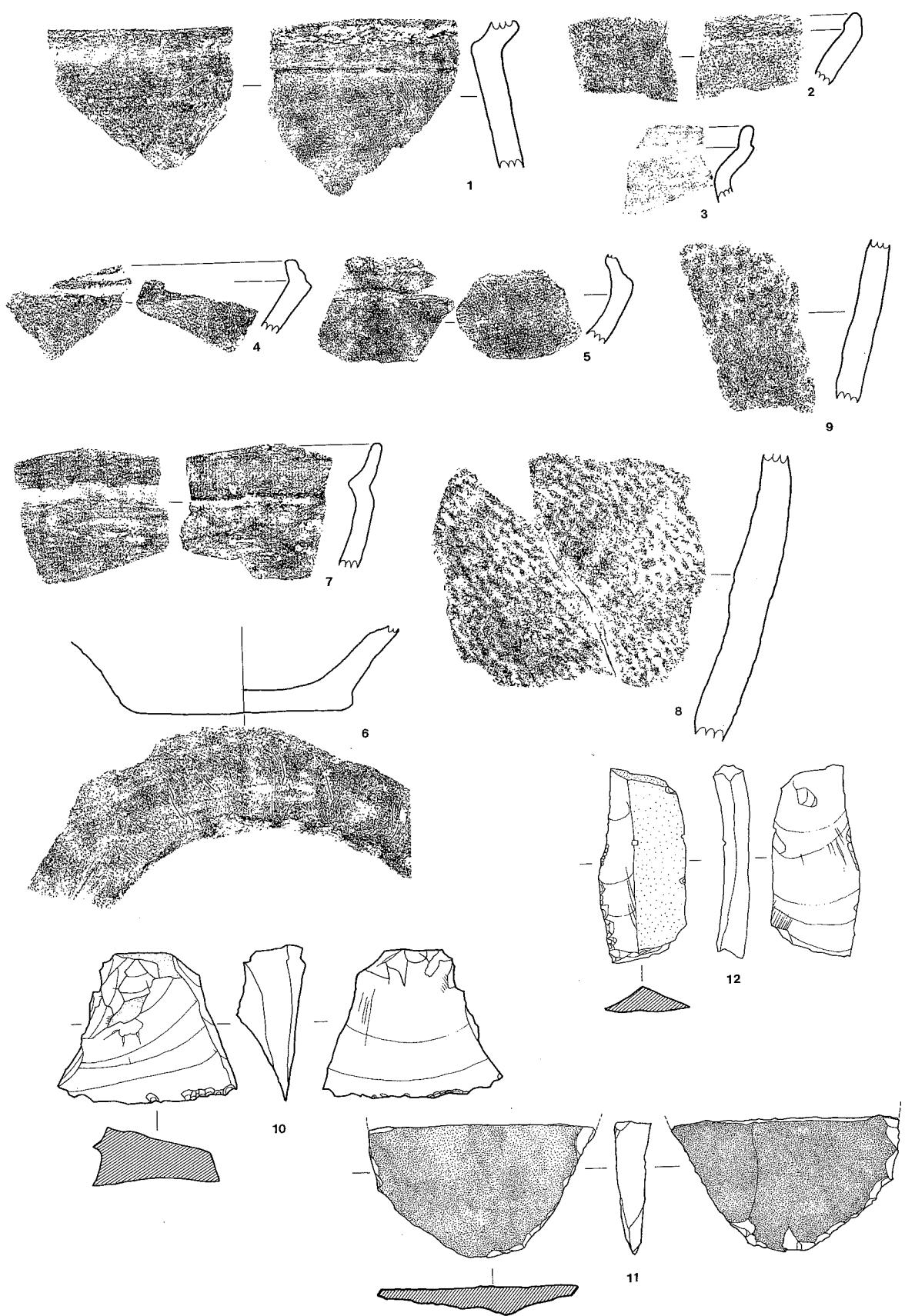
【IV層】(第46図) 縄文後期終末～晩期初頭の土器が2点出土している。5は肩部に文様が施された鉢か。内外面共に横方向のナデ。色調橙色。6は横方向の貝殻条痕が施される深鉢の屈曲部。内外面共に横方向のナデ。



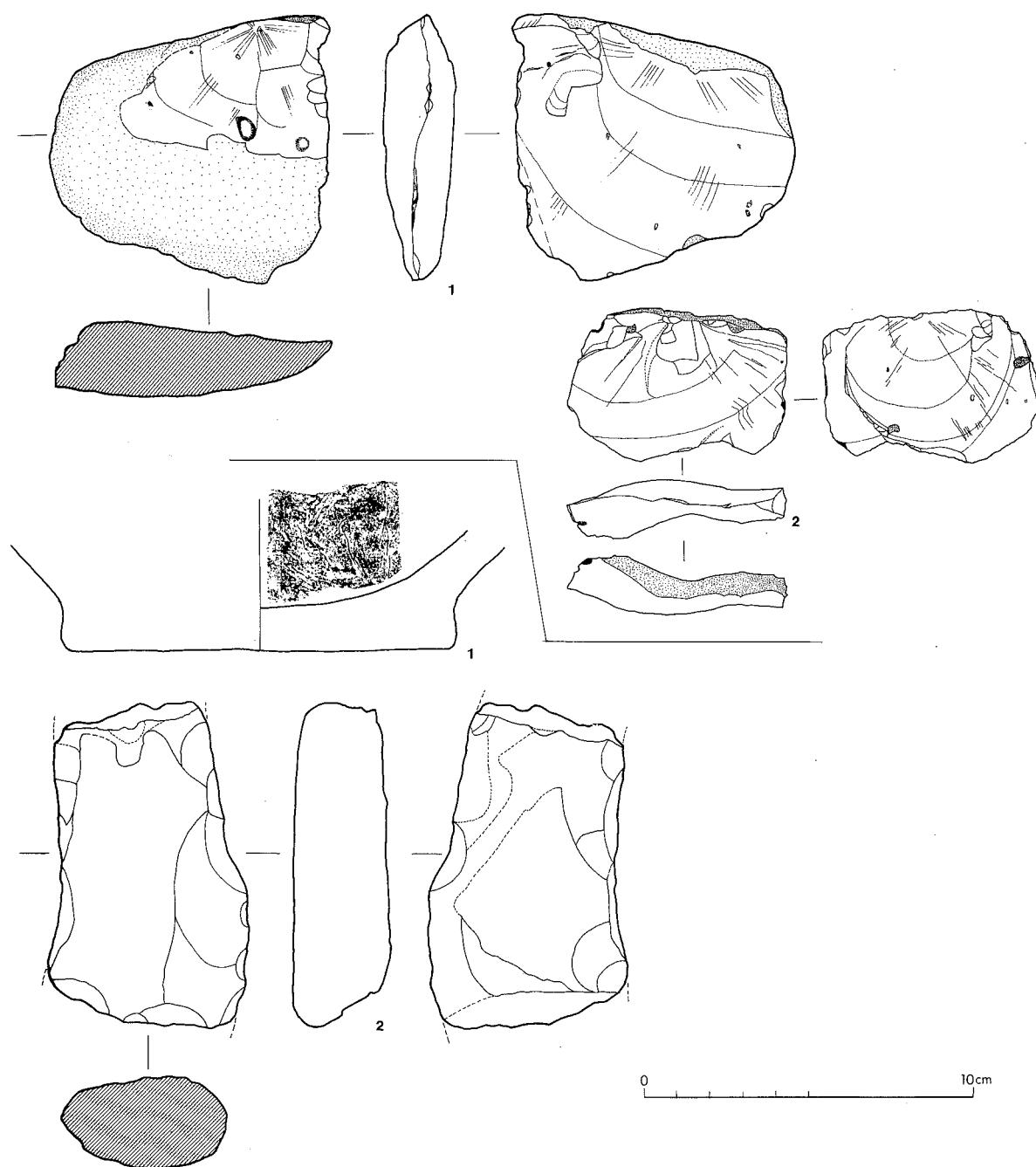
第39図 I-C区IV層遺物実測図①(1/2)



第40図 I-C区IV層遺物実測図②(17~23・27・28 : 1/2、24~26 : 1/1)



第41図 I-C区V層遺物実測図(1~11:1/2、12:1/1)



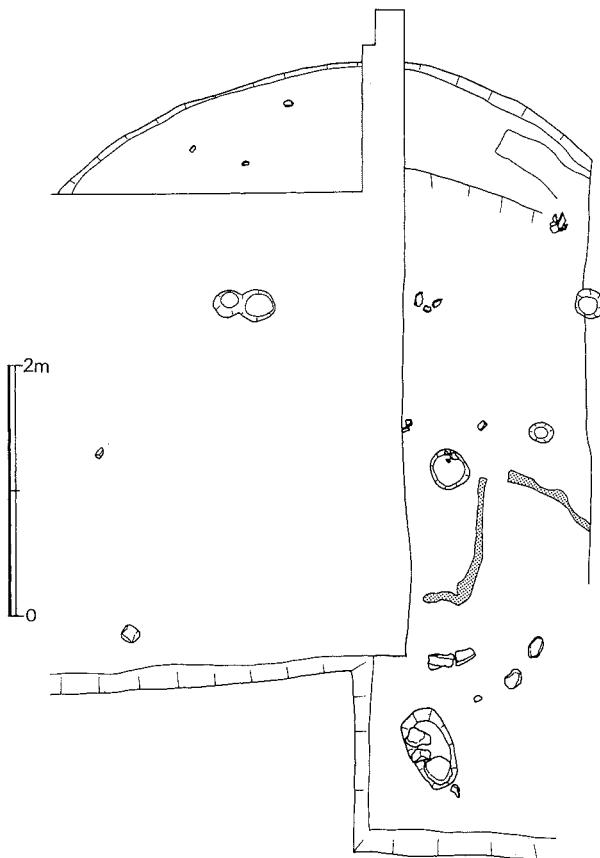
第42図 I—C区VI層遺物実測図(1/2)

【南拡張区】(第47図) 1は土師質の壺。口径12.4cm・底径9.2cm・器高2.0cm。底部籠切り。内外面共に横方向のナデ。2は外面に格子目・内面に青海波叩き目が残る須恵器片。

『I—D区』

【I—D区・北拡張区 2号住居址 (弥生時代後期後半火災竪穴住居)】(第63図)

I—D区とI—D北拡張区で、弥生時代の火災住居が検出された。北側と東側のプランのみが確認され、一辺4.5~5.0m前後の隅丸方形と考えられる。西側のプランは若干の掘り過ぎにより消滅し、また南側のプランは一部しか確認できなかった。そのため西側と南側のプランは推定によるものである。東側のプランを住居址の方向と考えると、N52°Wとなる。弥生時代の平底の長胴甕は、住居址床面上西側で潰れた状態で出土した。この甕形土器の帰属時期が住居址が営まれた時期と考えられ弥生後期後半とする。試掘調査時に、I—D区内の北寄りの位置で、弥生後期の甕形土器の底部と2本の



第43図 I—C・D区間1号住居跡実測図
【側面図】(第63図) 炭化柱1の現存部直径は10cm程度で柱穴の深さは住居址床面より40cm下、直径は15cm程度。炭化柱2の現存部直径は15cm程度で柱穴は床面下40~45cmで直径は15~20cm。炭化柱2は、断面図を見ると意図的に住居址の内部側に傾斜して埋められている。確認時には、長軸70cm、短軸40cmである。炉跡より出入

口施設に関する可能性を考えている。

炭化木が検出されており、この区に於ける生活面の存在が予想された。試掘時にはこの遺物類は、取り上げずに埋めもどした。本調査において、試掘時検出の甕形土器底部と2本の炭化木が出土し、さらに同一レベルからこの底部と同一個体の破片と多数の炭化木片が密集して出土した。また床面中央からやや南寄りに炉跡が検出されたが、半分は掘り過ぎにより南側に炭化材が多く分布している。炉跡の周りに3個の主柱穴と思われるピットが検出された。その配置から見て、恐らく炉跡南側にももう1個の存在が考えられ、4本主柱の住居址を想定している。主柱穴1と主柱穴2の中心間の距離は、1.25m。主柱穴2と主柱穴3の中心間の距離は2.10m。

主柱穴と住居址プランの南側推定ラインの近くに柱状に垂直に立つ炭化木が2本存在している。

【側面図】(第63図) 炭化柱1の現存部直径は10cm程度で柱穴の深さは住居址床面より40cm下、直径は15cm程度。炭化柱2の現存部直径は15cm程度で柱穴は床面下40~45cmで直径は15~20cm。炭化柱2は、断面図を見ると意図的に住居址の内部側に傾斜して埋められている。確認時には、長軸70cm、短軸40cmである。炉跡より出入

口施設に関する可能性を考えている。

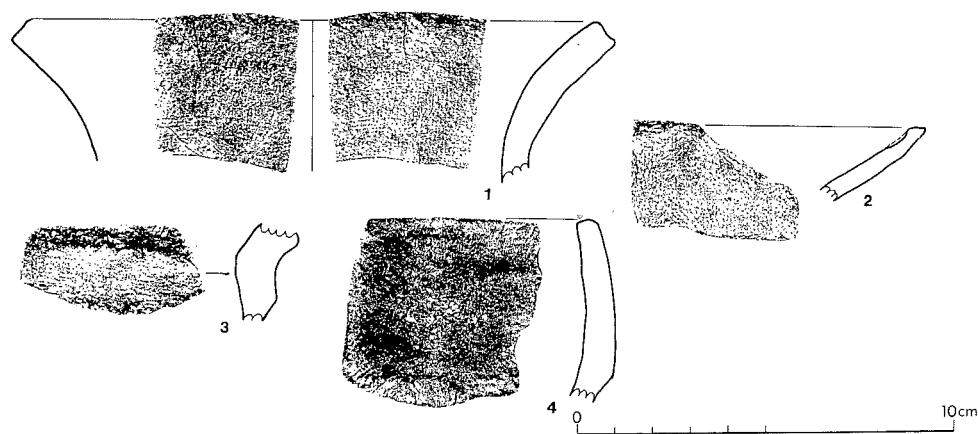
炭化木の状態・分布から建築材が焼け落ちた状況であり、石野博信の火災住居の分類（1990「日本原始・古代住居の研究」）では、外炭？焼B型（炭化材が主柱穴の外側と壁面の間に多く残存し、土器および日常用具が少ないタイプ）に相当しよう。石野の火災住居の分類では、外炭B型は、火元が内区（主柱穴の内側）にあり、内区の建築材が燃焼し、日常用具を運び出した後の消失で、住居内中央部を火元とする意図的放火を想定している。焼土は確認できなかった。炉跡南側の大きな炭化材が棟木でその周辺の炭化材は垂木の一部であろうか。上屋構造の若干の推定が可能かもしれない。

火災を受けた竪穴住居は長崎県内では、東彼杵郡東彼杵町白井川遺跡で1軒、芦辺町原ノ辻遺跡で1軒確認されている。白井川遺跡の火災住居址は、床面ほぼ中央から放射状に多量の炭化物（材）が分布している。約5m×約7mの隅丸長方形のプランであるが、二棟の重複が考えられている。出土遺物よりその帰属時期は弥生後期終末と報告されている。原ノ辻遺跡12号住居（1995 芦辺町教育委員会）は直径6mの円形で、放射状に炭化物（材）が分布し、焼土塊、2次的加熱を受けた土器片が出土している。他に、紡錘車・砥石片・タタキ台石・磨製石斧・石包丁片・炭化米・サメ歯などが出土しており、これらが床面出土であれば、日常用具を運び出すゆとりがなかった火災を想定できよう。

【2号住居址床面出土土器】(第66図) 床面出土土器は甕1点のみである。潰れた状態であったが接合作業でほぼ完形の資料となった。口径は最長部分で26.8cm最短部分で25.0cm程度・胴部最大径27.4cm・底径7.6cm・器高39.6cmである。口径と胴部最大径はほぼ等しく、胴部最大径はほぼ器高の中位付近に位置する長胴甕である。口縁部は直線的またはやや外反気味に開く。口唇部はやや肥厚し平坦に仕上げられ、口唇外端部の下方向への突出が認められる。口縁部外面は横方向のナデ。頸部以下は縦方向の刷毛目が最終調整のナデによって目立たなくなっている。胴部中位付近にのみ間隔5mmの引っ



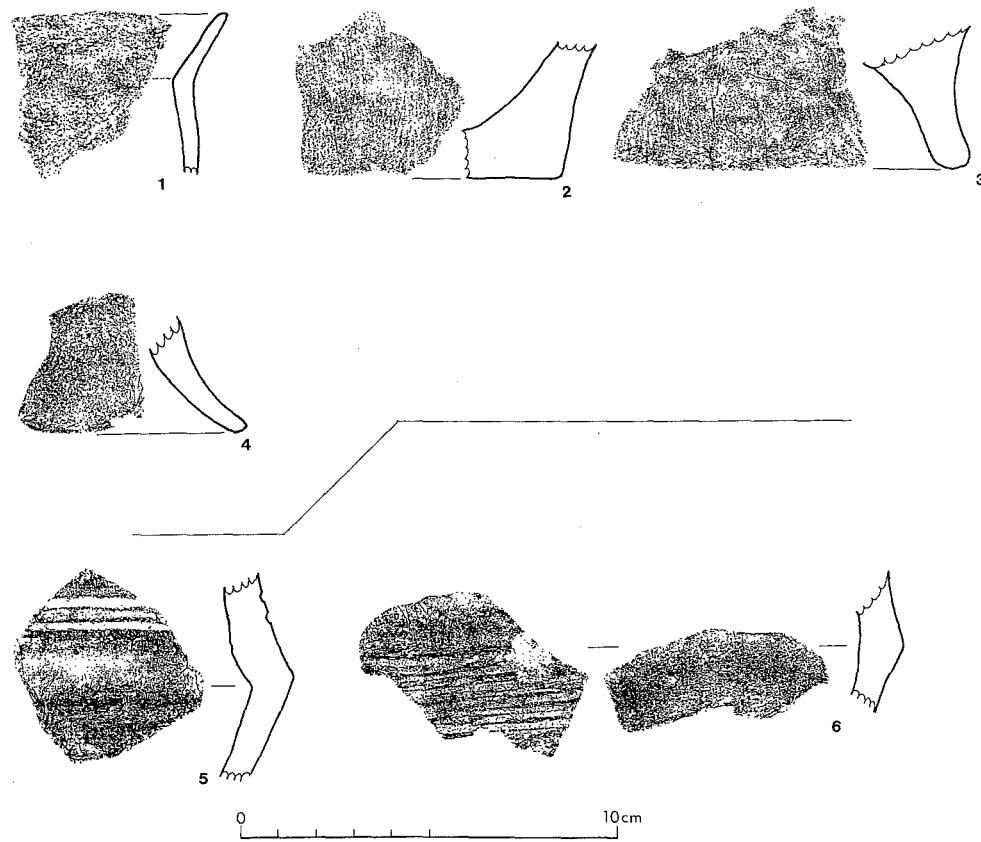
第44図 I—C・D区間畦畔部南拡張区1号住居跡遺物実測図(1～6：1/2、7～9：1/1)



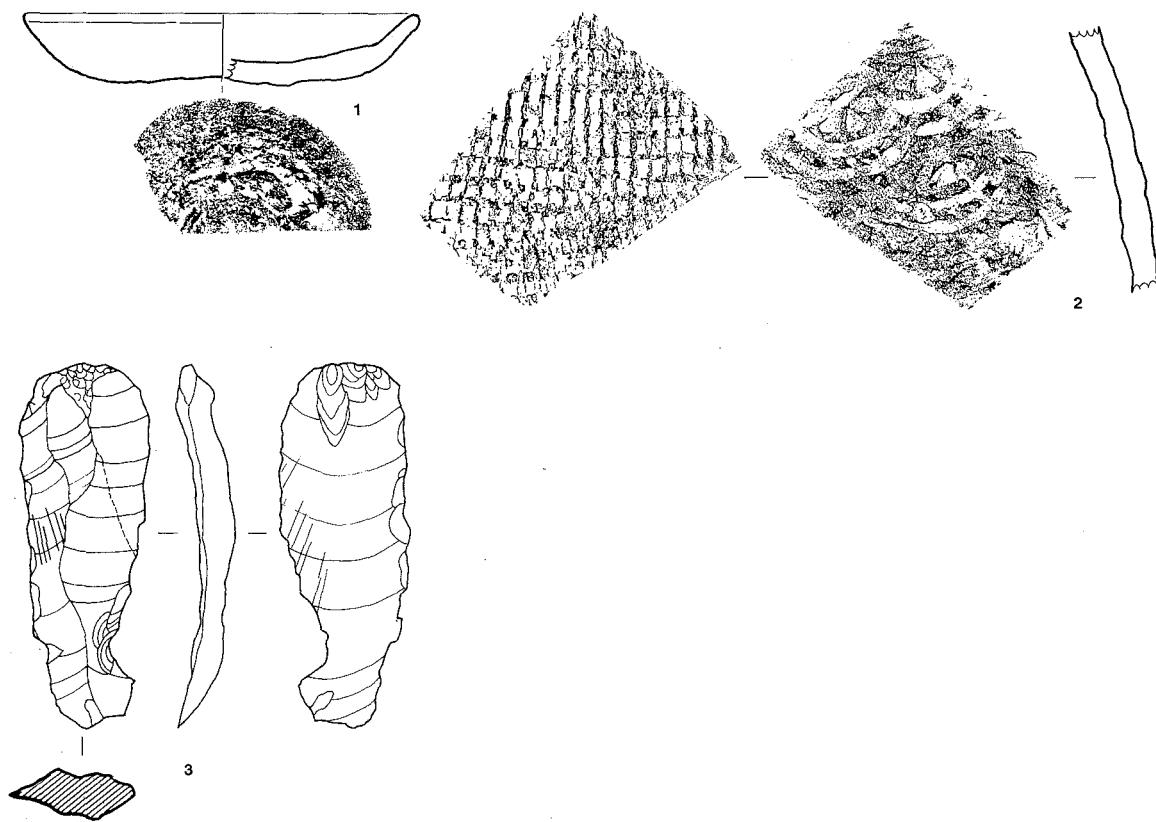
第45図 I—C・D区間畦畔部 1号住居跡床面遺物実測図(1/2)

搔き傷のような条線が長さ2cm程度に左上→右下方向に見える。口縁部内面は横方向のナデ。内面屈曲部直下の部位には刷毛目の痕跡が僅かに残る。 ϕ 1mm以下の砂粒を非常に多く含む。

当遺跡では弥生後期の甕は中九州の影響を受けた在地系の台付甕が多く認められるがこの甕は平底



第46図 I—C・D区間畦畔部遺物実測図(1～4：II層、5・6：IV層)(1/2)



第47図 I—C・D区間畦畔部南拡張区遺物実測図(1・2：1/2、3：1/1)

および器形より北部九州の影響を考えさせる。底部形態は平底であるが丸みを帯びて自立は不可能であり、全体のプロポーションからも当地域での古式土師導入のやや前の段階の所産と考える。同一類

型は北部九州では多いが長崎県では原ノ辻遺跡で出土している（芦辺町教育委員会 1993）。

【2号住居址断面図】(第63図) [A・B・C・D・E・F断面住居址埋土土層]

(1層) 暗褐色土層。 ϕ 5mm以下の小礫を非常に多く含む。しまり中。粘性中。火災住居の埋土であり、部分的に炭化物を集中的に含む。住居上屋構造の材と考えられる炭化木が埋もれている。

(2層) 茶褐色土層に黄褐色土層が混ざり合っている。 ϕ 5mm以下の小礫を非常に多く含む。しまり弱。粘性弱。

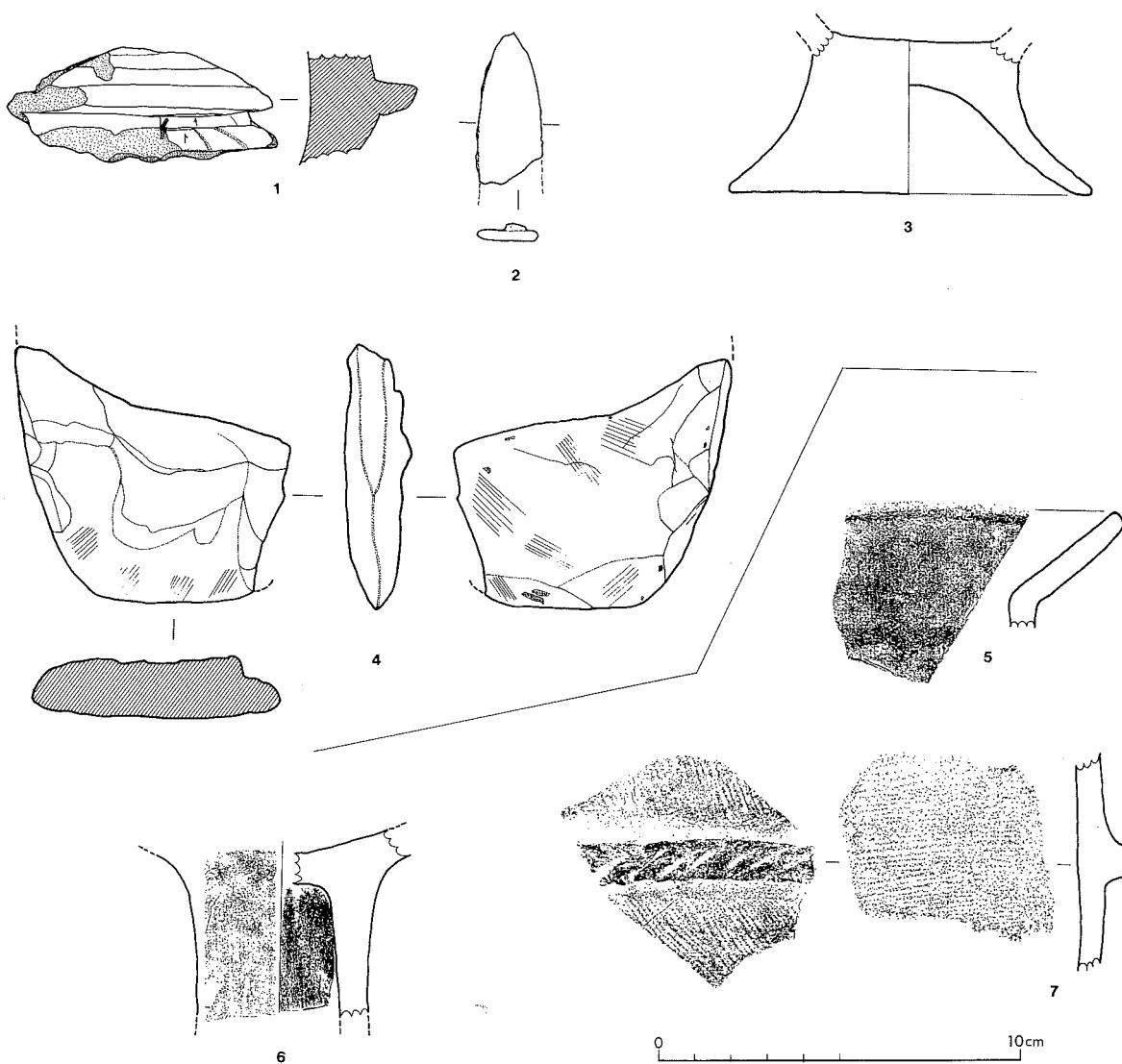
(スクリントーン部) 炭化材が埋まっておりその周囲に炭化物が密集している。

【炉跡断面図】

(1層) 暗黒褐色粘質土層。2層よりやや明るく、炭化物と焼土は2層より少ない。

(2層) 暗黒褐色粘質土層。焼土粒と細かい炭化物を含む。

(3層) 淡灰褐色粘質土層。



第48図 I—D区遺物実測図(1～4：I層、5～7：II層)(1/2)

【炭化柱G・H断面土層】・【炭化柱I・J断面土層】

(1層) 黒褐色土層。しまり中。粘性弱。 ϕ 20mm以下の黄褐色粒子を多く含み、 ϕ 5mm以下の炭化物を非常に多く含む。

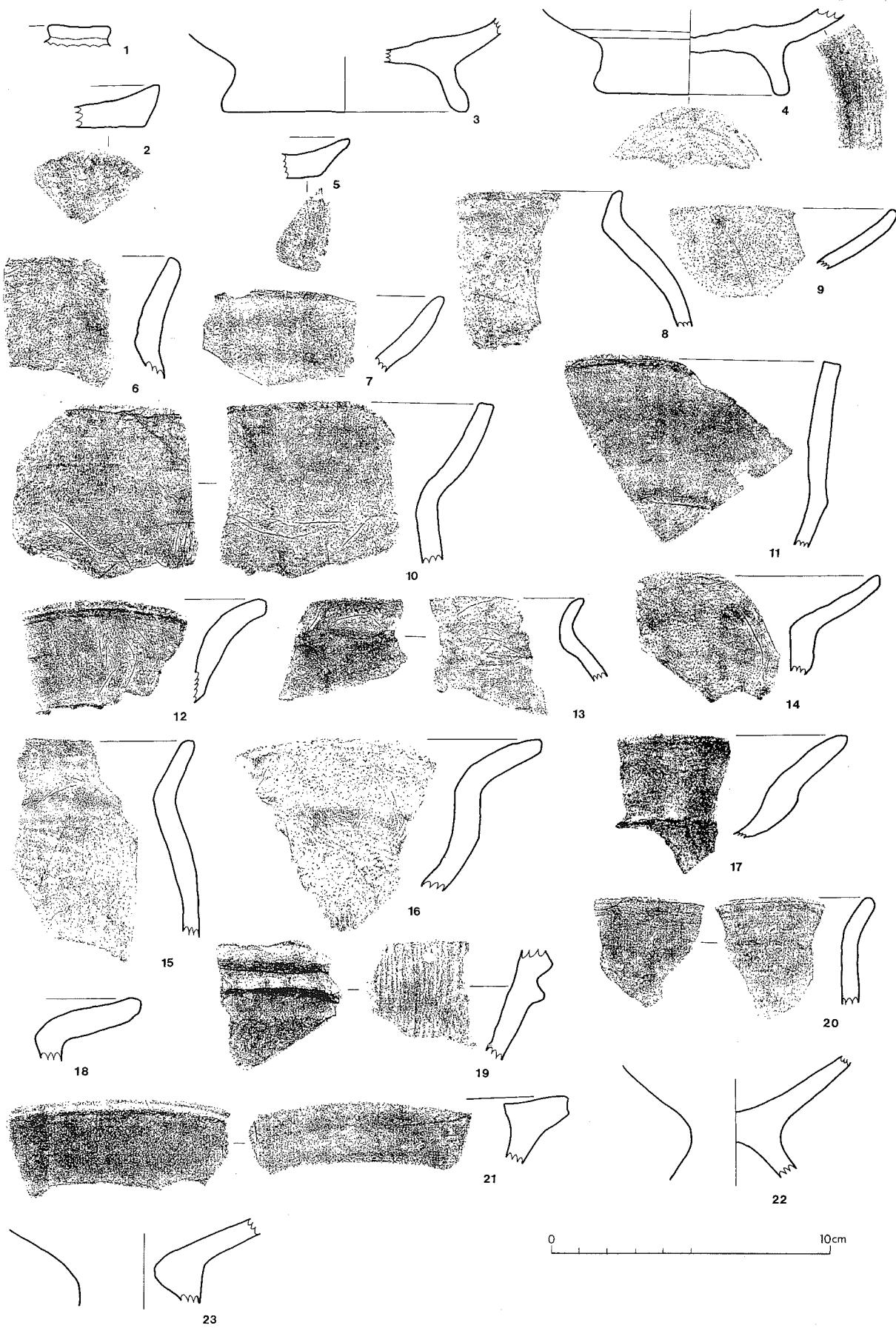
(2a層) 1層と3層と4層がブロック状に混じり合った土層。

- (2 b層) 2層よりやや色が薄い土層。
- (3層) 4層中に炭化物を多く含む土層。4層よりも堅く、貼床の可能性もあり。4層より黒っぽい。
- (4層) 灰色のシルト質粘土に淡黄色のシルトが混じっており、 $\phi 10\text{mm}$ 以下の黄色・白色・薄紫色の小礫を多く含む。しまり強。粘性中。
- (5層) 淡黄色シルト質砂層。黄褐色のブロックを少量含む。層の下の方に $\phi 30\text{mm}$ 程度の礫が非常に多い。しまり中。粘性弱。

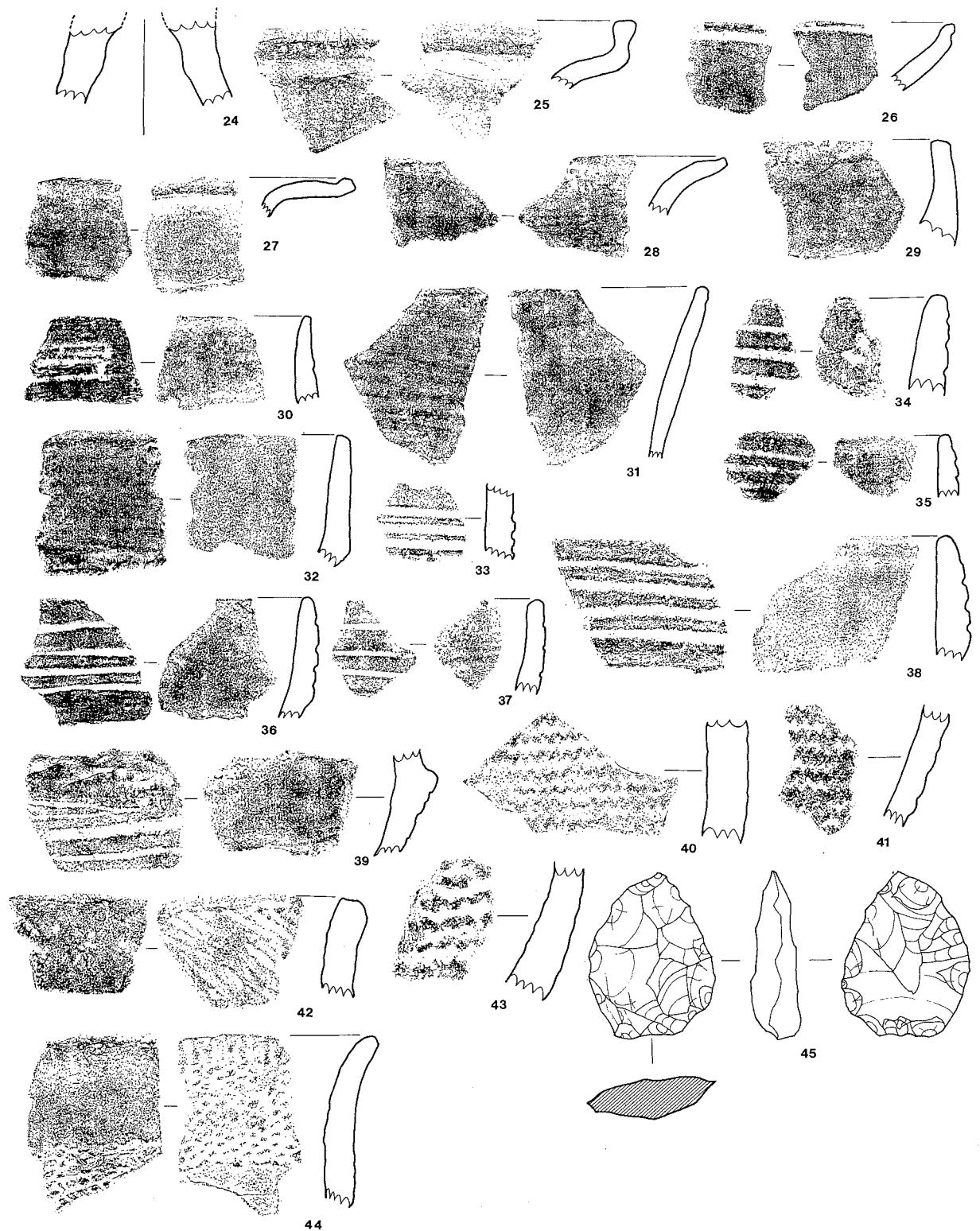
【2号住居址貼床土坑】(第67図) 住居址内の土坑埋土中から弥生土器の底部破片が出土した。内外面共に刷毛目痕が明瞭である。内面はクモの巣状ハケで2点の指押さえ痕が認められる。刷毛目工具は幅1.8cm程度。

【2号住居址埋土】(第64・65図) 1は古代末～中世初頭の土師質の壺。上半部で弱く外反する。口縁部内面が上下幅7mm程度に肥厚する。推定口径12.2cm・推定底径8.0cm・現存部高さ3.2cm。底部籠切り。2・3は同一個体であり小型の甕もしくは広口壺の口縁部。口縁部で短く外反する。4は弥生後期終末～古墳時代初頭の過渡期の台付甕の口頸部。頸部内面で明瞭な稜をもって外反し口縁部は内湾しながら立ち上がる。薄手で器厚5mm程度。内面外反部の稜の直下は薄手になっており古式土師に用いられるケズリ調整による可能性もある。5・6は比較的厚手の台付甕の台部および甕部下半である。5は推定台部径7.8cm・推定底径4.8cm・現存部高さ9.2cm。細砂粒を多く含むが、外面の調整は非常に丁寧である。5・6は共に外面調整は台部～甕の底部直上までは横方向の丁寧なナデ。外面底部直上以上は縦方向の丁寧なナデ。5・6は製作技法上の共通性が認められ同一時期のものと考える。7も同様に台付甕の台部。甕底部径は4.8cm。台部～甕底部付近までは5・6同様横方向のナデ。8は弥生後期中葉～後葉にかけての口頸部が発達する複合口縁壺。外面屈曲部以下には粗い刷毛目調整がなされナデによって消されている。さらにその上から細い刷毛目が施されその痕跡が明瞭に残る。屈曲部より上の口縁部は横方向のナデ。屈曲部直下の上下幅1・2cm中に左上→右下方向の短めの刷毛目が上下2段で施される。その下は上下幅1.0cm中に縦方向に、その下は上下幅1.0cm中に右→左の順で右下→左上方向に刷毛目が施される。この刷毛目は文様帶のように横方向に整然と施されておりあたかも装飾的である。内面は横方向の刷毛目。色調は鮮やかな橙色。胎土に $\phi 1\text{mm}$ 以下の砂粒と共に非常に多くの金雲母を含み搬入品と考えられる。2・5は繩文晚期前葉の土器であり共に条線が認められる。1・3・12は口縁部が内湾気味に立ち上がる弥生後期終末～古墳時代初頭の薄手のつくりの台付甕である。1・3は頸部内面屈曲部で稜を有する。共に口縁部内外面共にヨコナデ。3は推定口径23.5cm・胴部最大径19.5cm。外面頸部直下は上下方向・それ以下と内面頸部以下はすべて左上→右下方向の刷毛目調整がなされる。4は台付甕の台部であるが器表面の状態が悪く調整などは観察困難である。7は胎土が精良で金雲母をふくむ小型短頸壺の口頸部。内外面共に横方向のナデ。8は口縁部が肥厚する鉢もしくは無頸壺の口縁部。内外面ナデ調整。色調橙色。9は小型の複合口縁壺の頸部である。細砂粒を多く含み内外面共にヨコナデ。10・11は土師質の皿で製作技法は酷似している。どちらも底部籠切りで底面との境に明瞭な稜をもたず皿上半部で外反気味に立ち上がり口唇部は丸みを帯びる。内外面共に横方向のナデであるが底部内面にどちらも指による調整痕が残る。10は推定口径10.1cm・推定底径6.8cm・器高1.6cm。11は推定口径10.0cm・推定底径6.2cm・器高2.0cm。

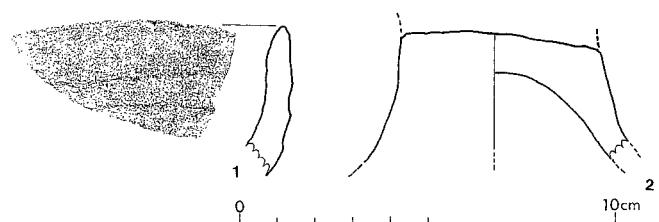
【III層掘り込み長方形土坑】(出土遺物)(第59図) D区の2号住居址の南で、隅丸長方形の土坑が検出された。2号住居址に伴う炭化材が土坑の埋土の上面から出土している。2号住居址が消失する前に、この隅丸長方形の土坑が埋没している。長軸の方向はN16°W、長軸100～110cm×短軸60～70cmで、確認面からの深さは38cmである。埋土は分層できなかった。壁はほぼ垂直に壁は立ち上がる。



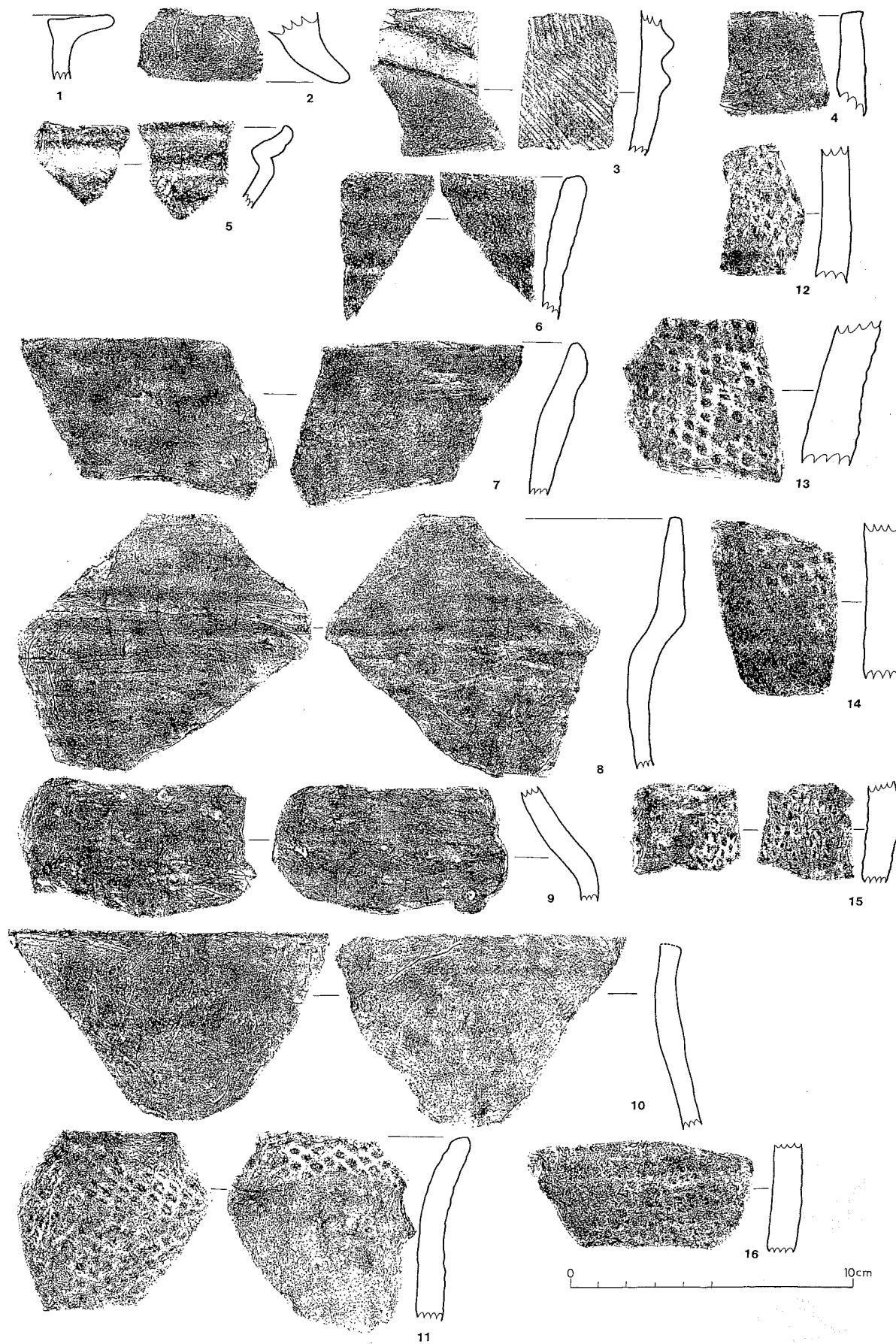
第49図 I-D区III層遺物実測図①(1/2)



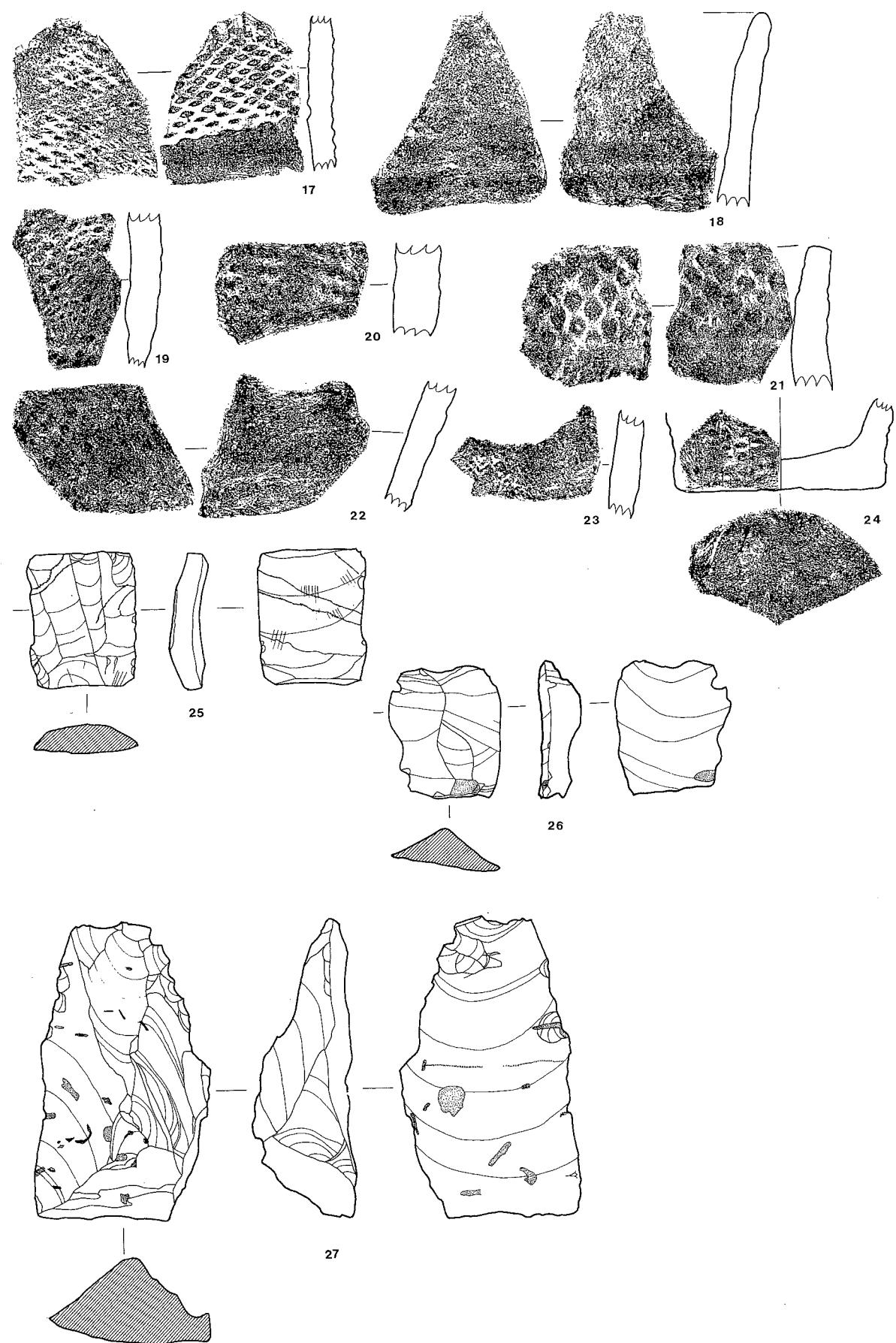
第50図 I—D区III層遺物実測図②(24~44:1/2、45:1/1)



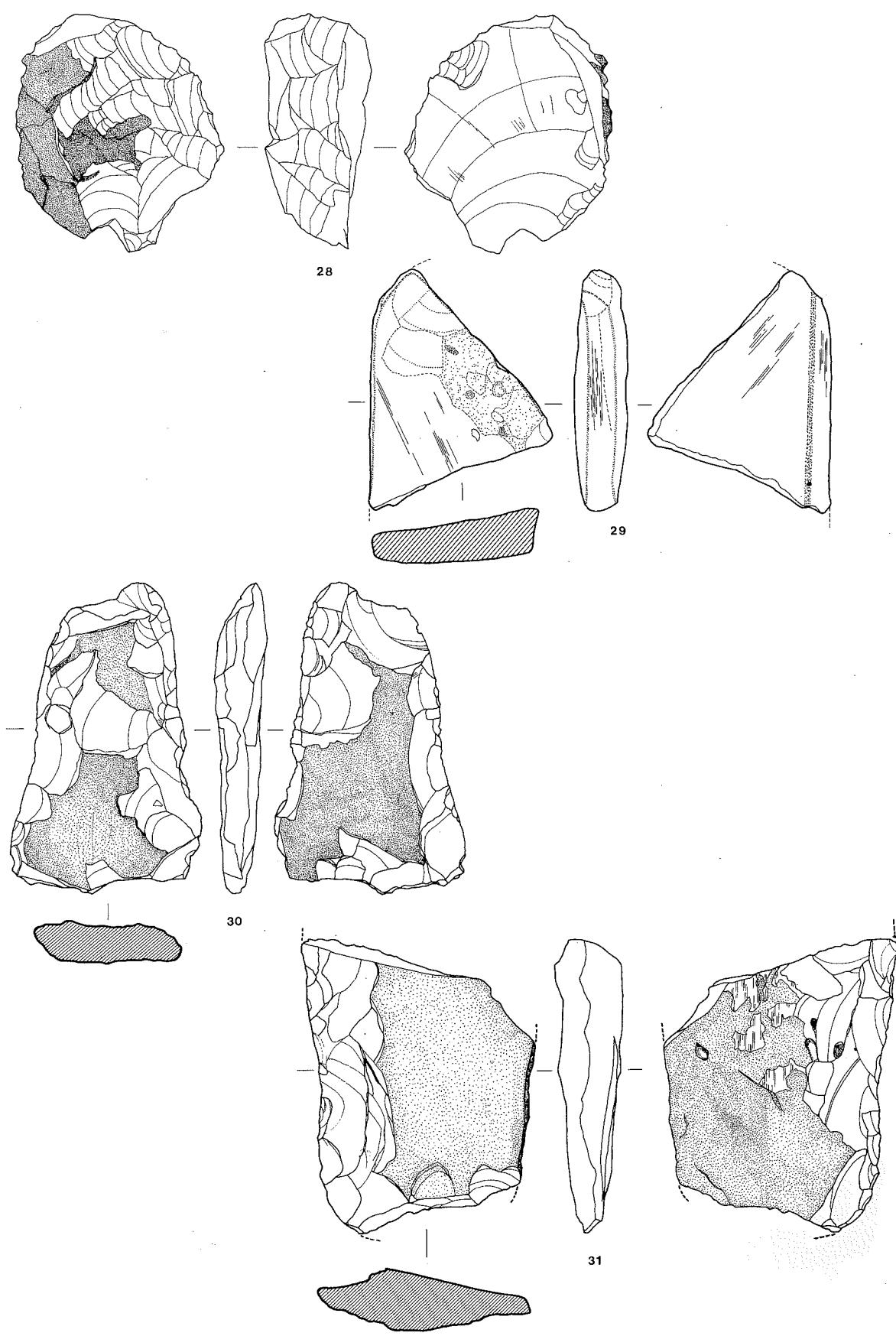
第51図 I—D区III層遺物実測図③(1/2)



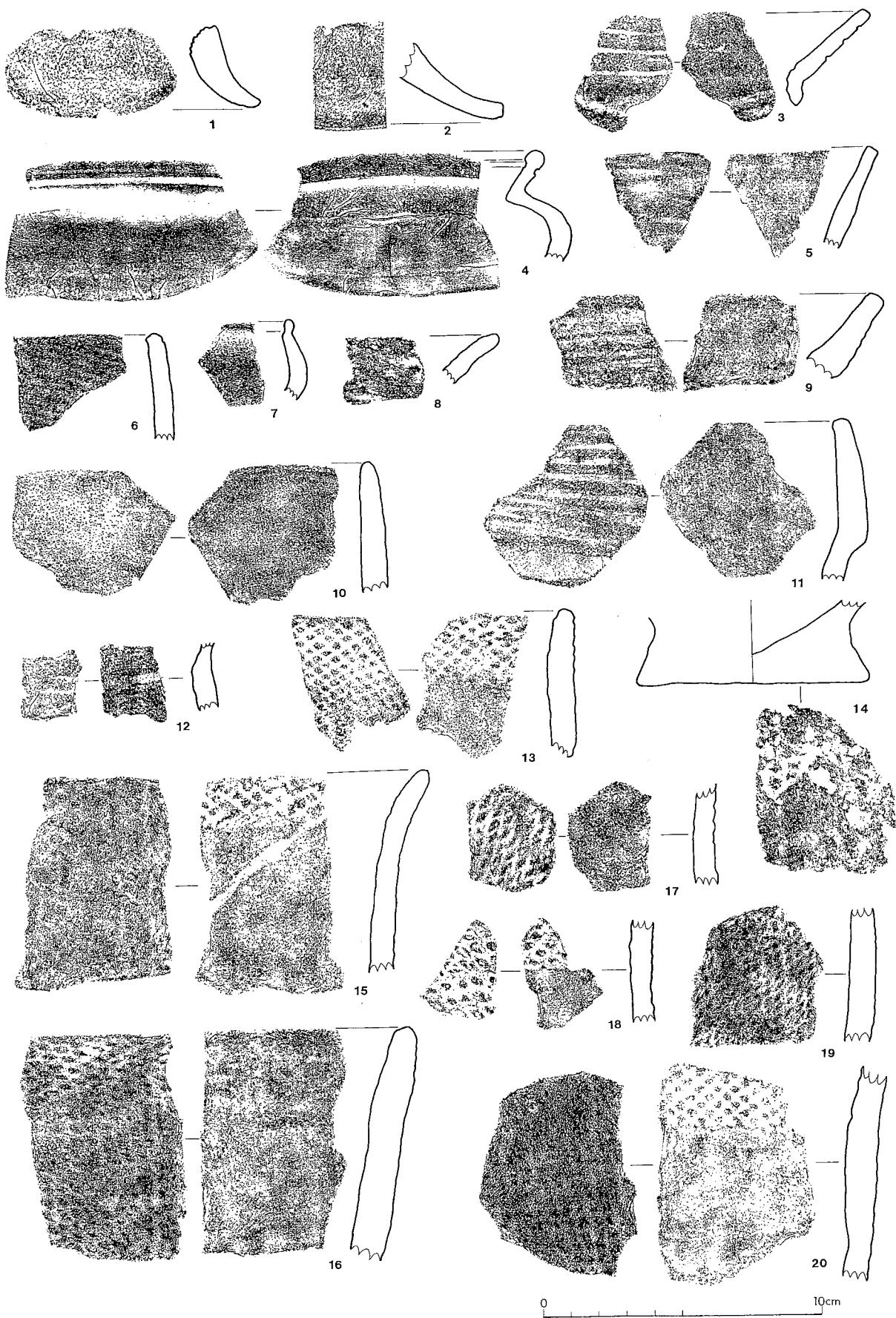
第52図 I—D区IV層遺物実測図①(1/2)



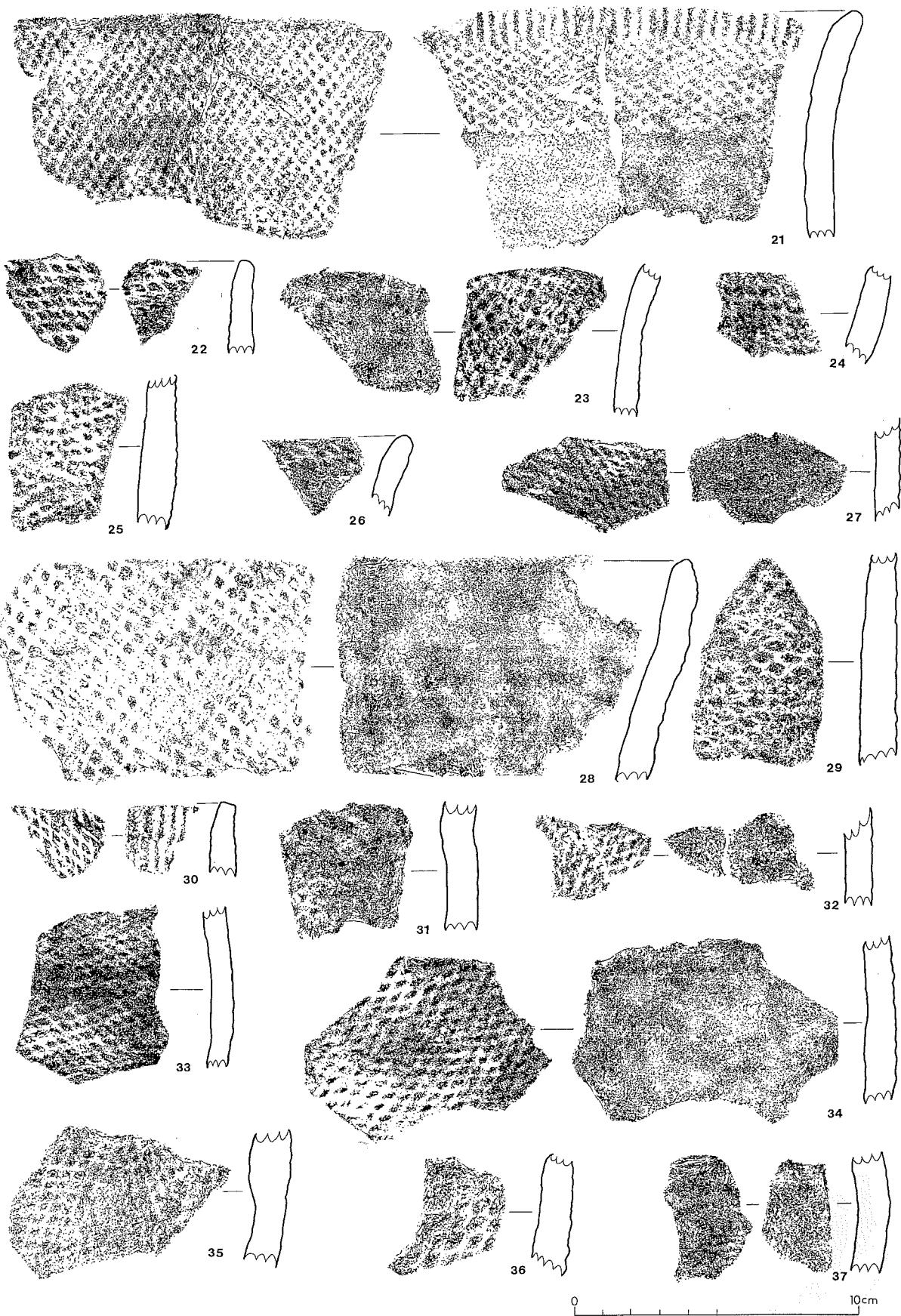
第53図 I—D区IV層遺物実測図②(17~24:1/2、25~27:1/1)



第54図 I—D区IV層遺物実測図③(28:1/1、29~31:1/2)



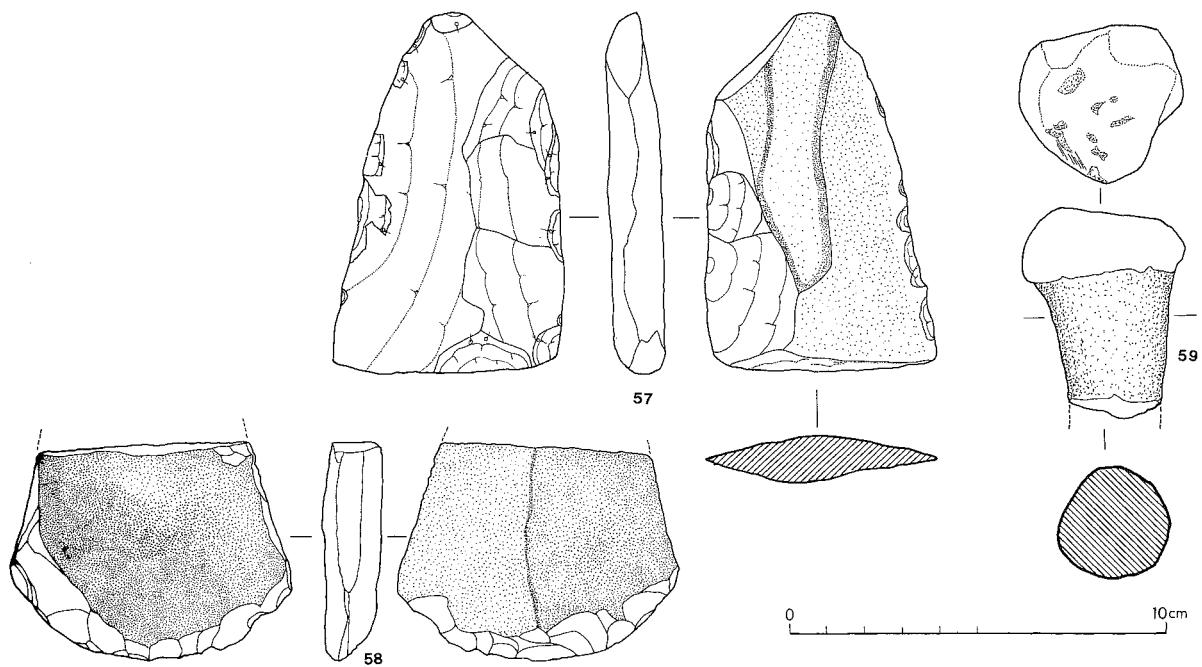
第55図 I—D区V層遺物実測図①



第56図 I-D区V層遺物実測図②(1/2)



第57図 I—D区V層遺物実測図③(54:4/5、他:2/5)



第58図 I—D区V層遺物実測図④(1/2)

性格不明。出土遺物は数点図示したが遺構の埋没時期を決定することはできなかった。

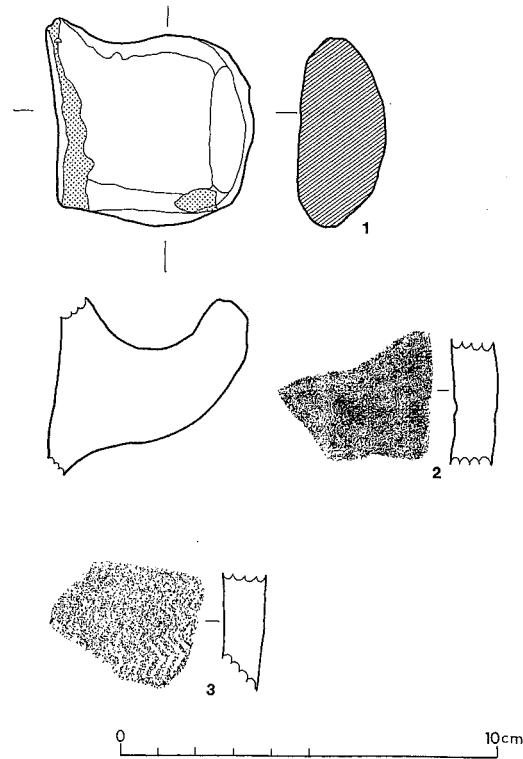
【出土遺物】(第59・60図) 第59図1は古墳時代の甌・鍋に付される比較的幅広の把手である。角閃石を非常に多く含む。第59図2は縦円文・3は山形文が縦位に施される縄文早期押型文土器。

第60図1は櫛描による6条の平行沈線が施される甌の肩部。現存部では上下方向に2つの無文帯を介して3単位の平行沈線文が認められる。内面にも同様の原体で平行沈線が引かれた形跡がある。外面は横方向のナデ。第60図2は台付甌の台部。外反しながら下端部へつながる。台部内面上半は横方向のナデ、下半は縦方向のナデ。台部外面は横方向のナデ。

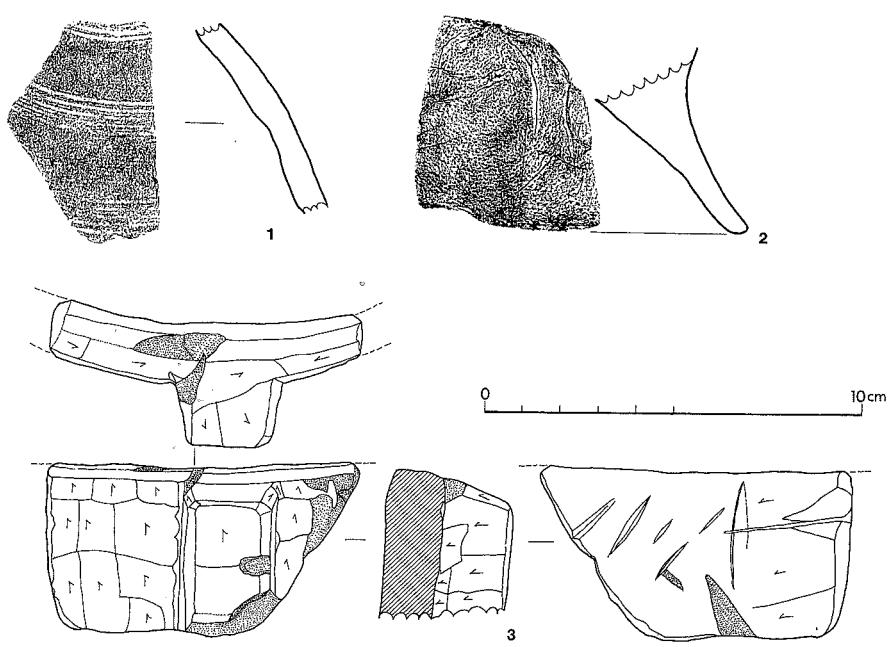
【I層】(第48図) 3は台付甌の台部。外反しながら下外方に開く。内外面共に横方向のナデ。台部の上半部は粘土紐の接合部で破損しており製作手順が観察できる。

【II層】(第48図) 5は布留系新段階の甌の口縁部。口縁部は内湾気味に開き口唇部は平坦に作られる。外面は最終調整は横方向のナデ。外面屈曲部に内面の刷毛目に用いられた原体が押圧される。内面は横方向の微細な線状痕が残る刷毛目。6は弥生後期終末～古墳時代初頭の高環の中空の脚柱部。外面は縦方向の線状痕が認められる。脚柱部内面は微細な板目状の痕跡が縦方向に残る。7は断面長方形の突帯が施される体部破片。突帯上に1.2個/cmで刷毛目工具による押圧刺突が施される。内外面共に刷毛目調整。

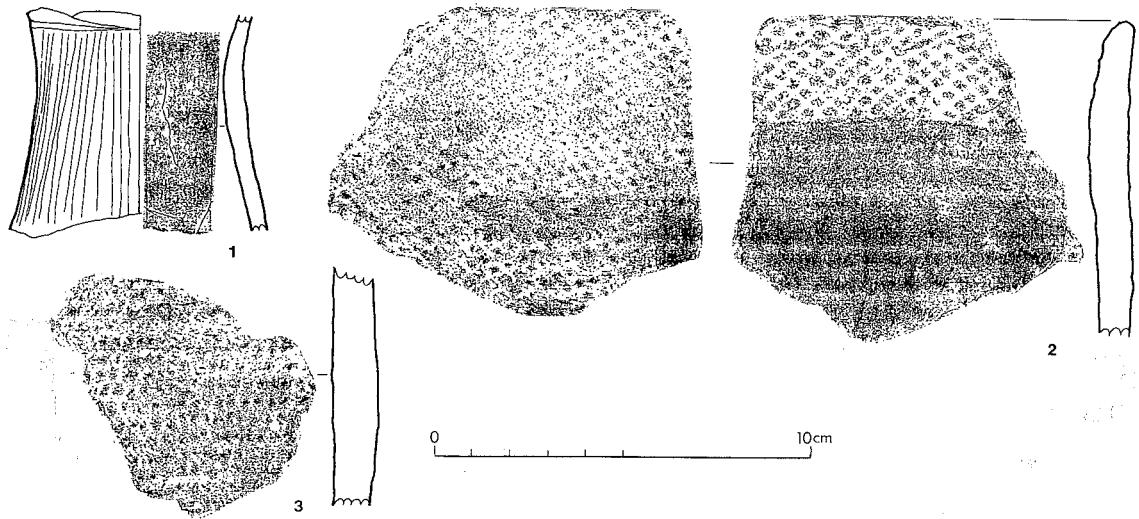
【III層】(第49・50・51図) 当層では縄文早期・後期終末～晩期前葉・弥生後期後葉～古墳時代前期・古代の遺物が出
土している。3・4は同一個体で高台を有する古代の土師質土器。内外面共に横方向のナデ。6は緩やかに外反する甌の口頸部。7は内湾気味に開く布留系甌の口縁部。口唇外端部を若干外側につまみ出す。8は土師器の小形の甌または甌の口縁部。口縁部内外面共にヨコナデ。外面の頸部屈曲部以下



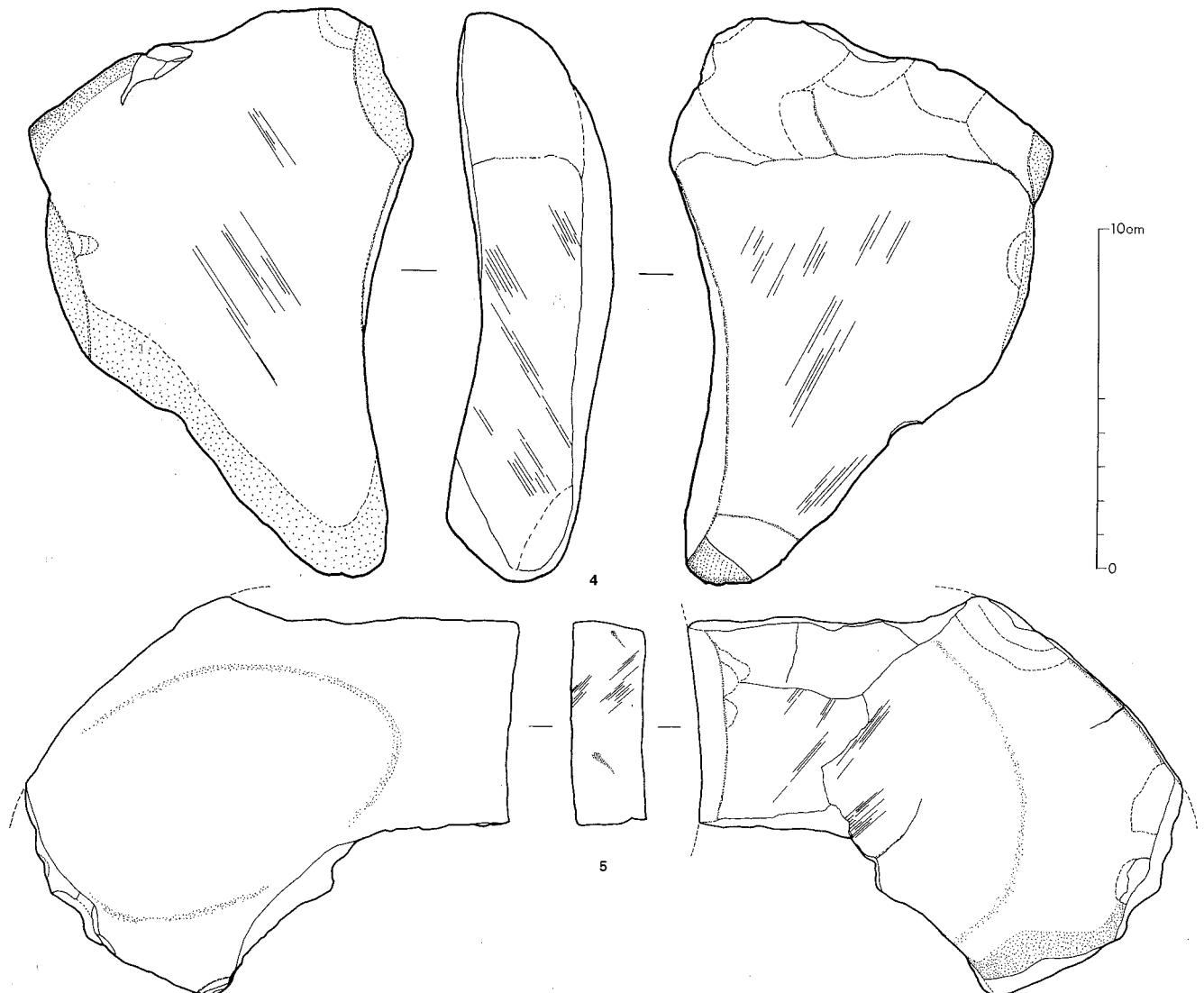
第59図 I—D区Ⅲ層長方形遺構関連遺物実測図①(1/2)



第60図 I—D区Ⅲ層長方形遺構関連遺物実測図②(1/2)

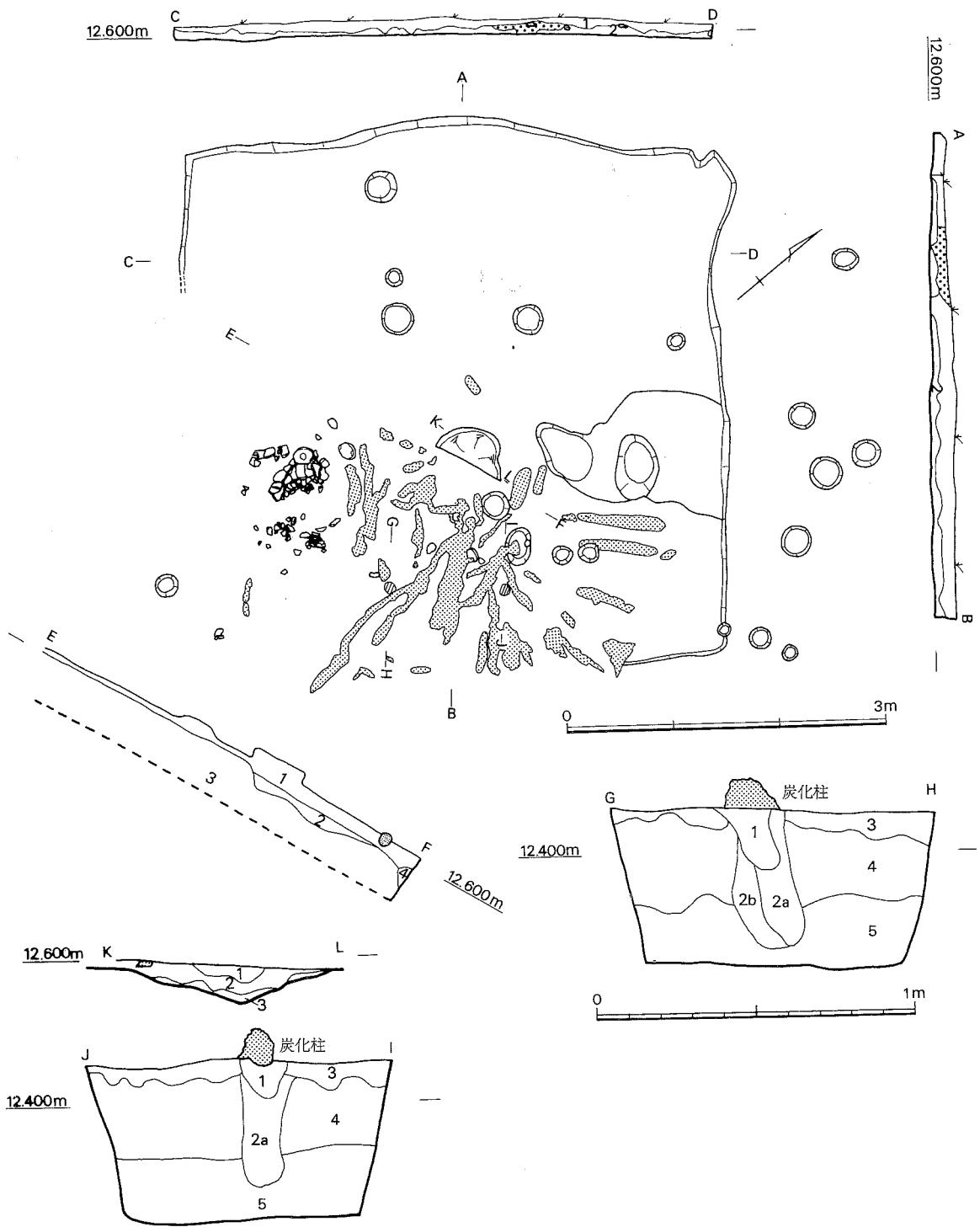


第61図 I-D区南西部III・V層遺物実測図①(1/2)



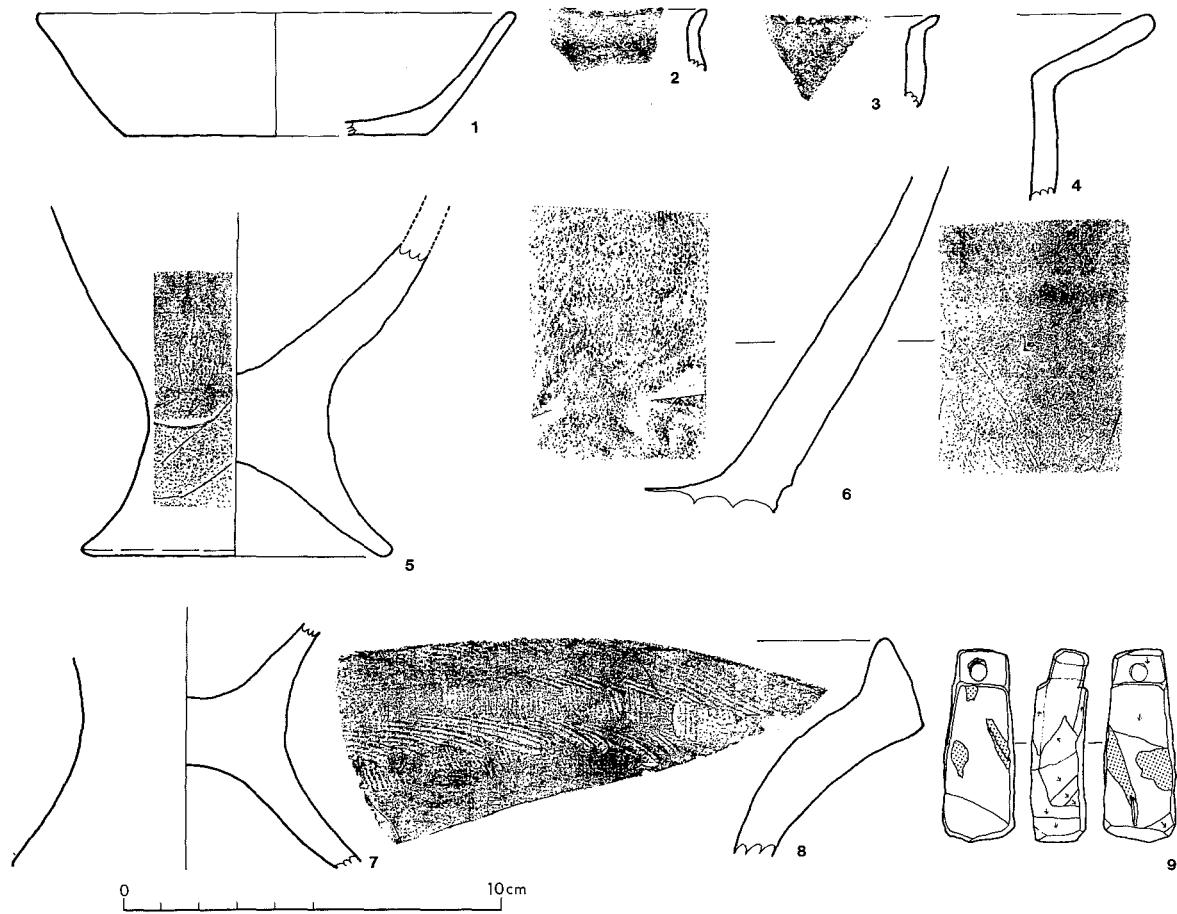
第62図 I-D区南西部III・V層遺物実測図②(1/2)

は縦方向のハケメの後ナデ。色調橙色。9は内湾しながらひろがる甕の口縁部。器表面は風化し調整などは不明。10は布留式新段階の甕口縁部。内外面共にヨコナデ。11は壊部中位で稜をもって屈曲する弥生後期終末～古墳時代初頭布留式期の高壊。屈曲部やや上位に穿孔が認められる。内外面共に横方向のナデ。12は古式土師の外反しひろがる壺頸部。口唇部は平坦に作られ、口唇外端部は若干外側に張り出す。内外面共に横方向のナデ。13は頸部で外反する甕の口頸部。14は弥生後期終末期の（台



第63図 I—D拡張区2号住居跡実測図

付) 甕の口縁部。口縁部は内湾気味に開き、縁部内面は明瞭な稜の屈曲部がある。器厚は5mm程度と比較的薄い。口縁部内面は右上→左下方向のナデによる線状痕が認められる。15も古式土師の口縁部内外面共にヨコナデ。縁部屈曲部以下の外面は縦方向のナデ。内面は右上→左下方向のナデ。16と17は弥生後期終末期～古墳時代初頭の高坏。肩部で内湾し縁部で大きく外反する。内外面共に横方向のナデ。色調橙色。17は縁部内外面で段を持つ器形。口縁部内外面共に横方向のナデ。外面段部以下は縦方向の線状痕あり。内面段部以下は横方向のナデ。色調橙色。18は弥生後期前葉の甕口縁部か。口縁部内外面共にヨコナデ。19は弥生後期の壺体部。断面三角形の突帯が2条付される。内面は縦方向の刷毛目。20は古式土師甕の口縁部。口縁部内外面共にヨコナデ。縁部以下は縦方向のナデ。21は

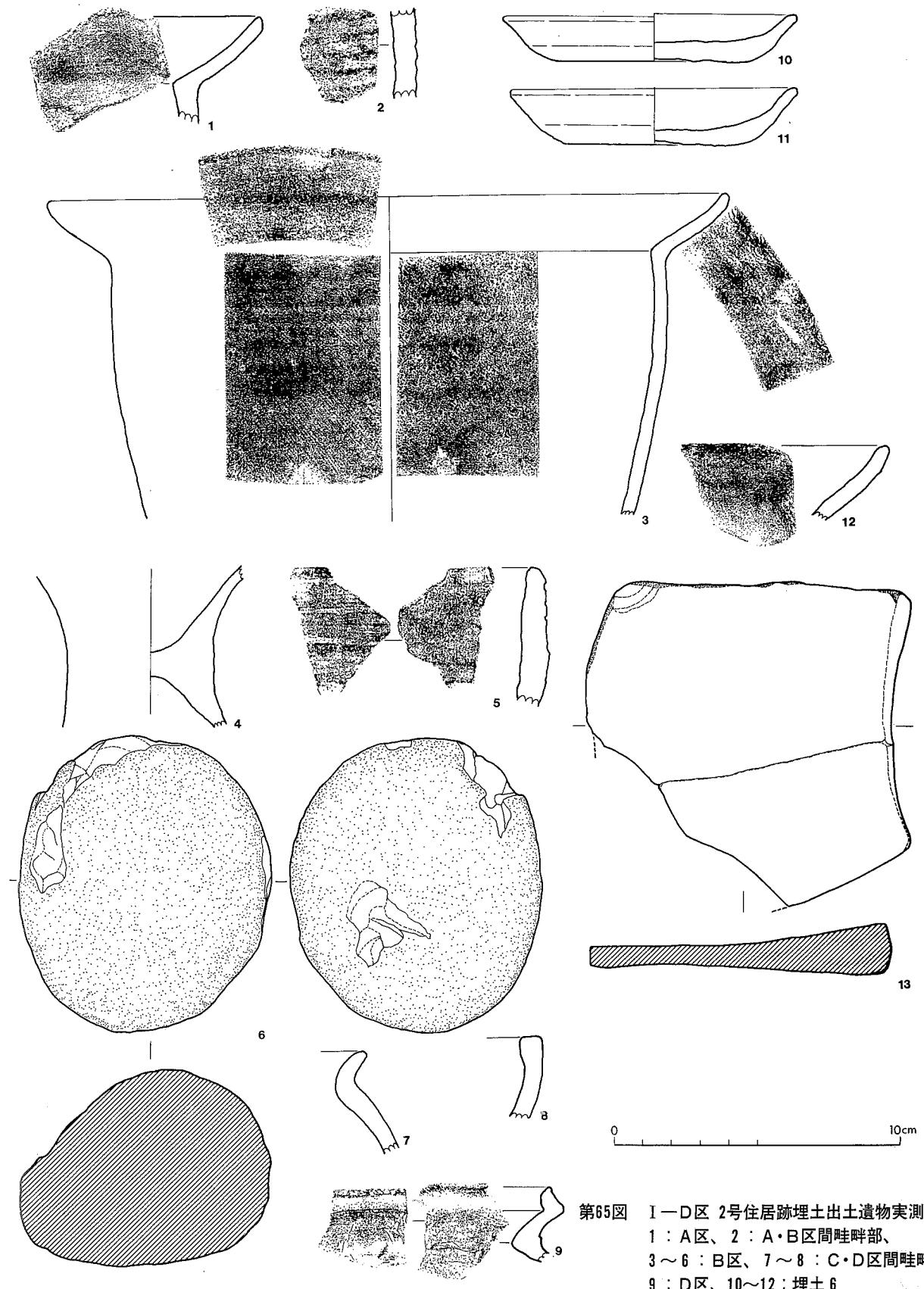


第64図 I—D区 2号住居跡関連遺物実測図①(1/2)

弥生中期の肥後地方からの搬入品と考えられる高環の口縁部。口唇部が肥厚し断面三角形状となる。頸部は外傾し直線的に立ち上がり、口唇外端部で直立し平坦な口唇部へと続く。口唇内端部は内側へ張り出す。頸部の器厚は6mm程度。口唇上面部・口縁部内外面共に横方向のナデ。23は脚部を有する土器で高環と考えるが上半の環部の底面から脚部の中空部に向けての穿孔が認められる。

第50図24は高環の脚部。外面は刷毛目の後にナデ。内面は横方向のナデ。25は弥生後期の複合口縁壺の口頸部。細砂粒の混入は多いが焼成良好であり内外面共に横方向の丁寧なナデ。

第50図26～28・30～39までは縄文晚期前葉の資料である。25・26・27は浅鉢の口頸部。25は体部から緩やかに外反しながらひろがり、頸部で直立する。内外面共に横方向のナデ。角閃石を含む。27は薄手のつくりで内外面共に最終調整はミガキ。29は時期不明の口縁部破片。30は深鉢口縁部。口縁部外面は深い条線が3～4条残されている。31は深鉢の口縁部。外面は横方向の粗い調整の後にナデで器表面の凹凸を消す。32は口縁部で直立する深鉢の口縁部。胎土に角閃石を多く含む。33～39は口縁部に平行沈線文が施される深鉢のタガ状口縁。37・38は外上方に口縁部が開く器形で新しい様相を示す。40～44は縄文早期押型文土器である。40・41は高さに比べて幅の狭い山形押型文が施されるもので同一個体。42は内外面共にR L单節縄文を横方向に回転して施文する。口縁部で弱く外反する器形。43は連珠文が施された体部破片。44は外面口頸部が無文部でそれ以下に橢円押型文が横位に施される。口縁部内面は縦方向の原体条痕(2.4個/cm)と橢円押型文を上下2段で施す。外面頸部と内面施文部より下の現存部位は横方向のナデである。第51図1は土師質の环。内外面共に横方向のナデ。2は台付甕の外反しながら下端部へ向かう台部。細砂粒を多く含む。色調橙色。



第65図 I—D区 2号住居跡埋土出土遺物実測図②
 1 : A区、2 : A・B区間畦畔部、
 3～6 : B区、7～8 : C・D区間畦畔部、
 9 : D区、10～12 : 埋土 6
 13 : 1号土壙埋土

【IV層】(第52・53図) 当層では主に縄文早期押型文土器と縄文晚期前葉の土器が出土している。第52図1は弥生中期の甕口縁部。口縁部内外面・口唇部共に横方向のナデ。口縁部屈曲部は緩やかであり稜を有しない。口唇内端部は内側に丸みをもって張り出す。金雲母を含み肥後地方からの搬入品か。

2は小型の台付甕台部。3は2条の断面三角形の突帯が付される壺体部。外面横方向のナデ・縦方向の刷毛目。4は時期不明の口縁部破片。口唇部は平坦に作られ口唇外端部がやや張り出す。5は弥生後期の複合口縁壺口頸部。器表面は脆く調整などの観察は困難である。第52図7～10は縄文晚期前葉の土器である。7は体部で屈曲し緩やかに外反しながら立ち上がる厚手の深鉢の口縁部。内外面共に最終調整はナデであるが内面はその前段階の粗い調整による砂粒の移動が観察される。8は深鉢の無文・外傾化したタガ状の口縁部である。口縁帶下端部は外面では明瞭な稜をもつが内面では稜をもたずに屈曲する。外面口縁部は板目工具による横方向の丁寧なナデ。頸部上半のナデも同様の原体によるがやや粗雑である。頸部下半以下は縦方向のナデ。内面は横方向のナデである。9は深鉢の体部の屈曲部である。外反しながら立ち上がるようである。内外面共に横方向のナデ。10は口頸部に非常に細い沈線で斜交文が描かれる深鉢である。長崎県内には類例を見ないが熊本県菊地郡七城町大久保遺跡の遺物包含層で同様の深鉢片が出土している。(1994『大久保遺跡』熊本県文化財調査報告第143集第78図12) 角閃石を多く含む。第52図6・11～24は縄文早期押型文土器である。6は文様不明であるが23の山形押型文を除いて全て楕円押型文が施される。6は緩やかに外反しながら立ち上がる口縁部。15は口縁部内面にも楕円文が施される。11は緩やかに外反しながら立ち上がる口頸部。施文は外面口縁部の最上段は原体の横回転であるが2段目は縦及び斜め方向の回転による。内面は横回転の楕円文のみが施される。17は外面に横回転の楕円文施文。内面は長さ3.3cm以上の原体を横回転し、比較的深さのある楕円文を施した後に縦の原体条痕文が施される。18は外面に楕円文が施されるが内面は不明。21は長径が8mm程度と大きめの楕円文が内外面に施される。23は外面に幅が狭い山形文が施される。24は当遺跡で押型文施文が認められる唯一の底部破片である。平底で若干外反気味に立ち上がる。底部圧痕認められず。横回転の楕円押型文が底面ぎりぎりまで施されている。

【V層】(55・56・57図) 当層では縄文早期押型文土器が最も多く、縄文晚期前葉～中葉・弥生時代の土器が出土している。1・2は弥生時代の台付甕の台部。内外面共に横方向のナデ。3～12・14は縄文晚期前葉および中葉の土器である。3は島原市畠中遺跡出土の土器群と同一時期と思われ、頸部で急激に外反する深鉢の波状の口縁部。波状口縁に沿って幅2mmの沈線が3条施され、頸部内面屈曲部やや上に凹線が認められる。器厚は4mm程度の薄手のつくりである。4は縄文晚期中葉黒川式期の扁球形の体部で口頸部が外傾する浅鉢である。長崎県では佐世保市宮の本遺跡・深江町山ノ寺梶木遺跡などで出土しており広範囲に分布する類型といえる。口縁部直下内外面に1条づつ沈線が施される。内外面共にミガキ。5・6・8は深鉢の口縁部。5は口唇部を平坦に仕上げ薄手である。7は頸部で緩やかに外反する浅鉢の口縁部。内外面共に器表面が剥落している。9は深鉢のタガ状の口縁部。内湾気味に外上方に開く。外面には調整による横方向の条線が残る。10は深鉢の口縁部。砂粒・角閃石を多く含み、調整は内外面共に横方向のナデ。11は深鉢のタガ状口縁部。口縁部には数条の横方向の条線が残る。屈曲部の口縁部下端は外面では稜をもつが内面では稜をもたない。12は深鉢の頸部で2条の凹線が沈線が認められる。14は底部付近で内側に抉れる器形のもの。底部外面横方向のナデ。

13・15～53は縄文早期の楕円文・山形文・格子目文押型文が施される土器である。13・15～39は楕円押型文が施される。13は内外面に横回転で楕円文を施す。15は外反気味に立ち上がる器形であるが外面および口縁部内面に横回転で楕円文を施す。16は直線状に開く口縁部に楕円文が横回転・斜め回転で施す。胎土に角閃石を含む。20は外面および口縁部内面に楕円文が施される。21は比較的大きな破片で外反しながら立ち上がる器形。外面は楕円文、内面は原体条痕+楕円文が施される。22は内外面共に楕円文。26は外反気味に立ち上がり横回転で楕円文が施される。28は体部が外傾し口頸部でやや開きながら直立する。30は外面は縦回転の楕円文、内面は縦方向の原体条痕が確認できる。40～41・

43・46・48は山形押型文、44～45・47・49～53は格子目押型文が施される。45は緩やかに外反する口縁部破片。

【III・IV層南西部】(第61図) 1は古式土師の高環脚部か。外反気味に立ち上がる。器厚は5mm程度と薄く胎土も精良である。色調内外面共に鮮やかな橙色。脚部外面は縦方向の丁寧なヘラナデ。2・3は橢円押型文が施されるもの。2は外反気味に立ち上がる口頸部で内外面共に橢円文が施され、内面は上下2段横走施文される。口唇部近くの傾斜した部分に上下幅6mm程度に、その下に上下幅20mmで横方向に施文される。

『I—D北拡張区』

【サブトレンチ出土】(第68図) 1・2共に弥生後期の土器。1は頸部に断面三角形の突帯を有する壺。2は口唇部を平坦に仕上げる甕の口縁部。

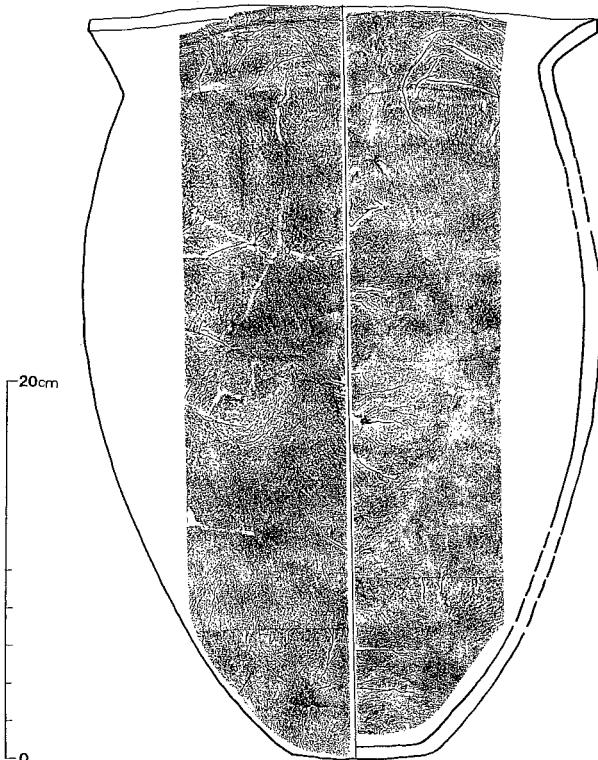
【清掃土】(第68図) 1は土師質の壺。推定口径10.8cm・推定底径・6.8cm・器高2.2cm。底部籠切り。内外面共に横方向のナデ。3は弥生時代の土器で赤色顔料が塗られた器種不明の外反しながら開く口縁部。4は外面に橢円押型文が施された縄文早期の土器。

【I層】(第68図) 1は時期・器種不明である。頸部で直角に屈曲する。2は櫛描重弧文が施される免田式系の長頸壺の体部である。櫛目は11条確認でき細く浅いものであるので免田式の中でも新しい段階から終末期のものと考えられる。3は土師質の短頸甕の口頸部外面は横方向のナデ。4は断面三角形の突帯が付される弥生時代壺の体部。5・6は台付甕の台部。5は色調は明褐灰色で6よりも調整が丁寧で胎土は精良である。7は刻目突帯文が1.2個/cmで口縁部直下に付される深鉢。内外面共に横方向のナデ。

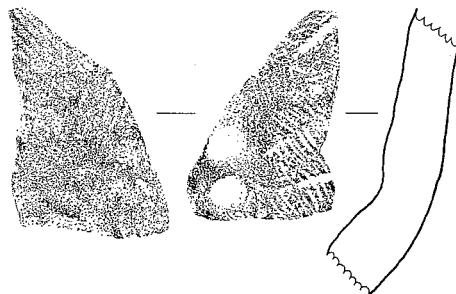
【II層】(第68図) 1は甕の外反する口縁部。口唇部が平坦に仕上げられる。口縁内外面共に縦方向のナデ痕が認められる。2は断面三角形の突帯が付される甕または壺の体部。突帯の頂部は丸く作られる。内面に縦方向の刷毛目痕有り。3は弥生時代の台付甕の台部。4は手捏ねで製作されたミニチュア土器の底部。5は強く外反する広口壺の口頸部。口唇部は平坦に仕上げられる。内外面共に横方向の丁寧なナデ。6は小型の複合口縁壺の口頸部。内外面共に横方向のナデ。7は縄文晩期前葉～中葉の浅鉢の口頸部。器厚が5mm程度と薄く内外面共ミガキ。5は角閃石を多く含む。

『I—F区』

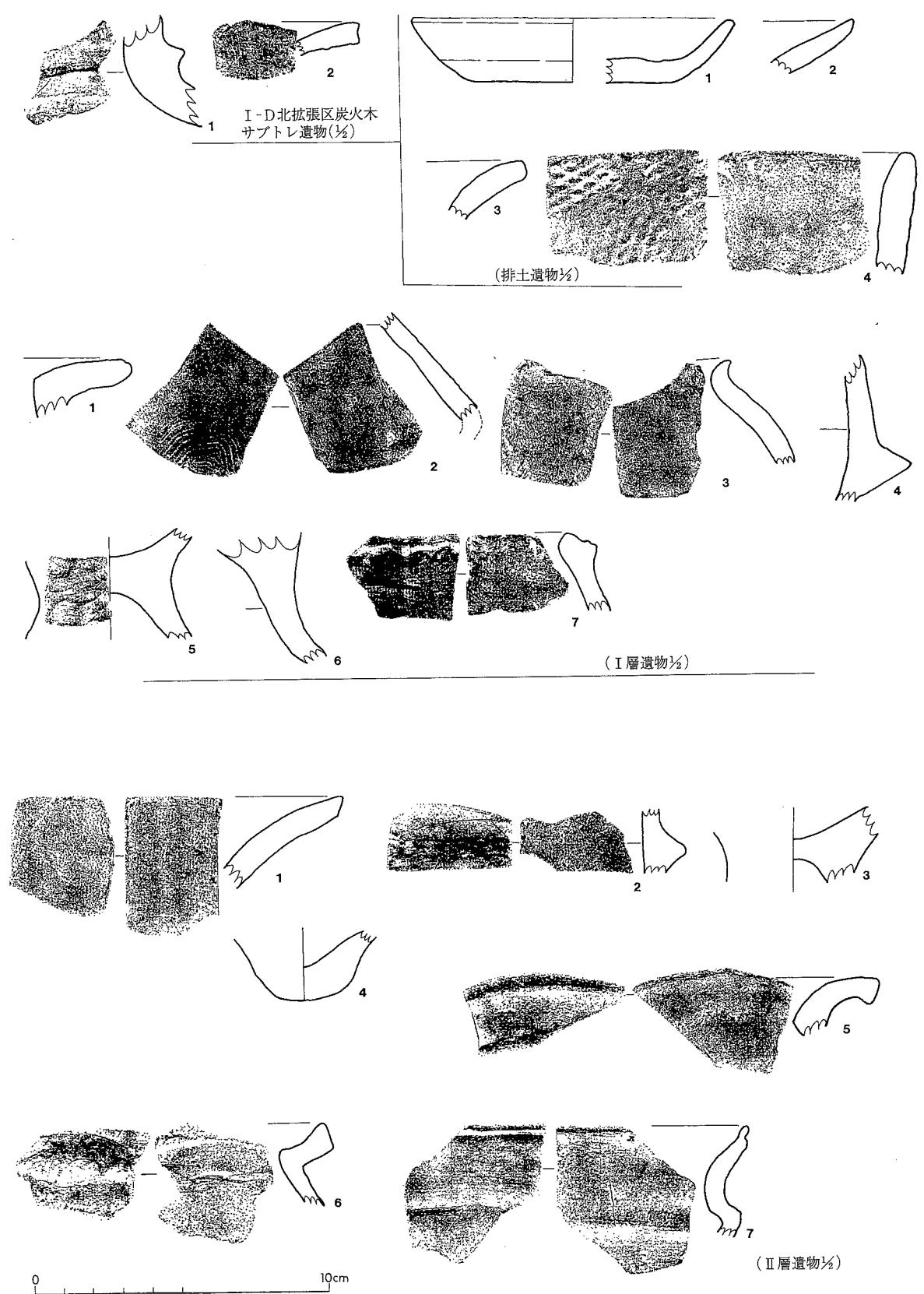
【I—F区 柱穴群】(第70図) 当区では、直径10～20cmの土坑が15個検出された。掘立柱建物跡や柱穴列として認定できるものではなく、土坑14から完形の中世土師質土器が出土しているのが目立つのみである。A区の柱穴群と同一層に掘り込まれており、同一時期であろう。



第66図 I—D区 2号住居跡床面出土遺物実測図(1/4)



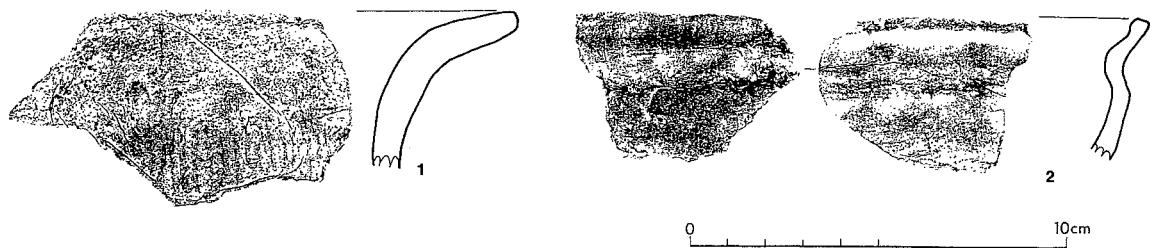
第67図 I—D区 2号住居跡貼床土壙遺物実測図(1/2)



第68図 I-D区北拡張区出土遺物実測図

『I-G区』

[I-G区 柱穴群] (第71図) G区では、10個の土坑と現代の池状の掘り込み構造が検出された。当区でも建物跡・柱穴列としてはとらえられなかった。A区・F区の柱穴群と同一層に掘り込まれて



第69図 I-G区 I層遺物実測図(1/2)

おり、同一時期であろう。池状の掘り込み遺構は小礫を多数投げ入れて埋められている。

【I層】(第69図) 古代の外面刷毛目・内面箒削りの丸底になる甕である。口縁部外面横方向のナデ・頸部以下は縦方向の刷毛目の後縦方向のナデ。角閃石を非常に多く含む。当遺跡周辺では有明町松尾遺跡・大野原七反畑遺跡で同時代の遺物が出土している(長崎県教育委員会1988、有明町教育委員会 1993)。2は縄文晚期前葉の浅鉢である。内外面共にミガキ。胴部の最大径は稜をもって屈曲する。口唇内端部は内側に突出する。

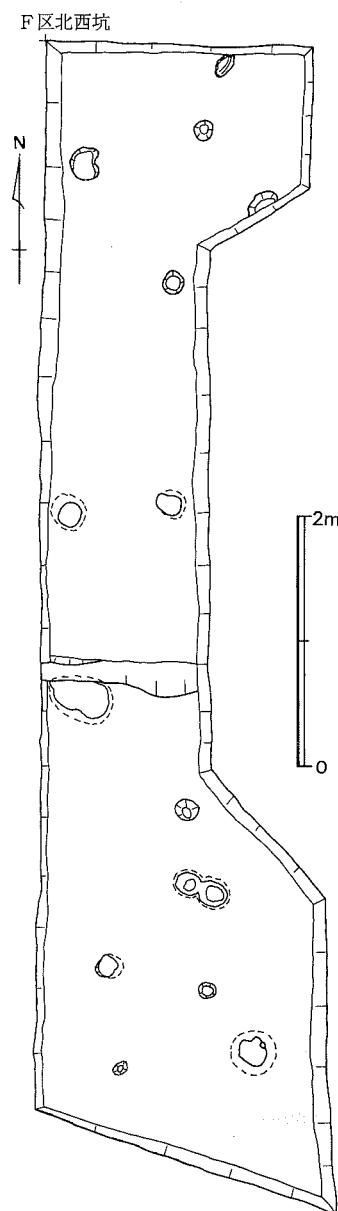
『I-I区』

I-I区堅穴状遺構および炉状遺構(第73図) 堅穴状遺構は町道前田線に沿う当該調査区で検出した。第IV層(赤褐色混礫土層)からの掘りこまれた遺構である。検出した全体の形状は径4m程度の半円形で、半分程度が用水路の下になっているため定かでないが部分的に段差をもちながら全体として深い皿状になり周囲に柱穴状のピットを配している。底は第VII層(灰色混砂礫土:地山)に達し、「皿」の中央部に方形の石組遺構をもっている。この遺構を構成する礫に焼灼の痕跡はなく炉跡とは認めがたく炉をもった堅穴住居跡とは認めがたい。

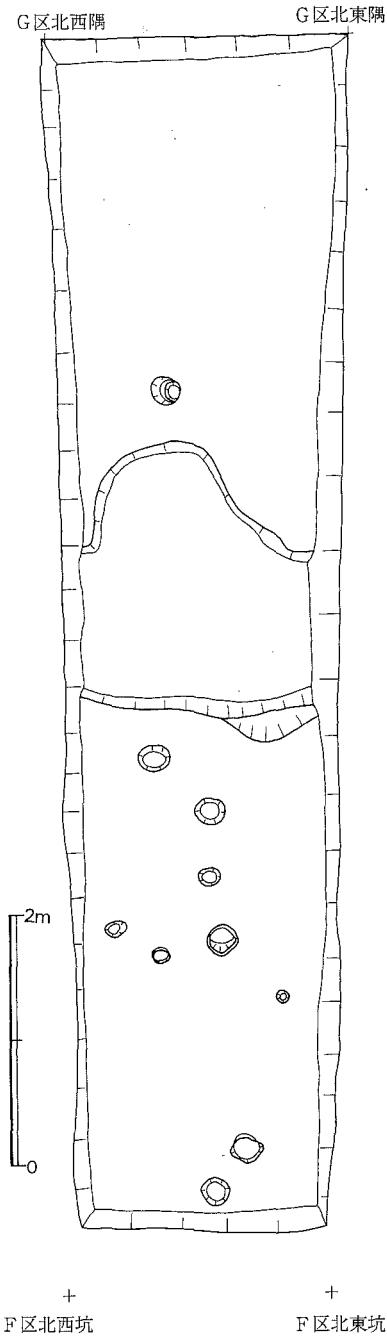
【堅穴状遺構出土遺物】(第74図) 1は布留式期の畿内系の高坏脚部。内面で稜をもって屈曲し直線的に下端部へ続く。内面屈曲部以上はケズリ痕が明瞭。屈曲部以下の部位は横方向のナデ。外面は横方向の丁寧なナデ。2・3・6は古代の甕の口頸部。2と3は埋土中であるが6は遺構床面から出土した。2は屈曲部内面で若干稜を有するが他は頸部で丸みをもって外反し口唇部も丸く仕上げられる。2は口縁部内面は横方向の刷毛目+ナデで角閃石を含む。3は口縁部内面は横方向のナデ・頸部は横方向の刷毛目+ナデ・肩部は左上→右下方向のケズリ。口縁部外面は横方向のナデ頸部以下は縦方向の刷毛目。6は遺構床面からの出土である。口頸部内外面共に横方向のナデ。肩部内面に左上→右下のケズリ痕が明瞭に残る。外面肩部以下は縦方向の刷毛目。4・5は縄文早期の楕円押型文が施される体部破片である。

『I-M・N区間』(第75図)

【I-M区V層の集石遺構】(第76図) 径50cm深さ20cmほどの円形堅穴に小ぶりの礫を集積した遺構である。礫群は元来堅穴上に集積したものと考えられ、板蓋などの腐敗によって堅穴内に落下したと考えられる。礫群に焼灼などの痕跡はない。小型の集石土壙墓の可能性も考えられるが、確証はない。



第70図 I-F区柱穴分布
状況実測図



第71図 I—G区柱穴分布状況実測図

【III層】(第77図) 当層では小型の複合口縁壺の口頸部が出土している。短い口縁部は内湾気味に立ち上がる。細砂粒を多く含み内外面共に横方向のナデ。色調は内外面共に橙色。I—N区I層でも同一個体破片が出土している。

『I—N区』

【I層】(第78図) 1～3は中世の土師質の皿である。すべて底部糸切り。1は口径7.6cm・底径6.2cm・器高1.1cm。2は推定口径7.6cm・推定底径6.0cm・器高1.6cm。3は推定口径8.4cm・推定底径7.4cm・器高1.2cm。4は古式土師の鉢の口縁部か。口縁部外面は横方向のナデ。体部外面は縦方向のケズリ痕が認められる。体部内面は縦方向のナデ。

【III層】(第78図) 5は中世の土師質の皿である。底部糸切り。5は推定口径7.2cm・推定底径7.2cm・器高1.2cm。6は縄文晩期前葉の深鉢の口縁部。口縁部外面には明瞭な貝殻条痕が残る。内面は横方向のナデ。7は橢円押型文が施される体部破片。

【IV層】(第78図) 8は弥生後期後半の甕の口縁部か。外反気味に開き口唇部を平坦に仕上げる。内外面共にナデ。口唇部が調整によって凹状になる。9はI—M・N区III層で出土している小型複合口縁壺の同一個体である。10～13は縄文早期の押型文土器の体部破片。10は橢円文が11～13は山形文が施される。

『I—P・Q区間畦畔部』

【II層】(第81図) 当層では中世土師質土器が1点のみ図示できた。口径7.4cm・底径6.8cm・器高1.8cm。底部から外反し体部中位で外傾し口縁部へとつづく。底部糸切り。内外面共にナデ。内面底に指頭痕あり。

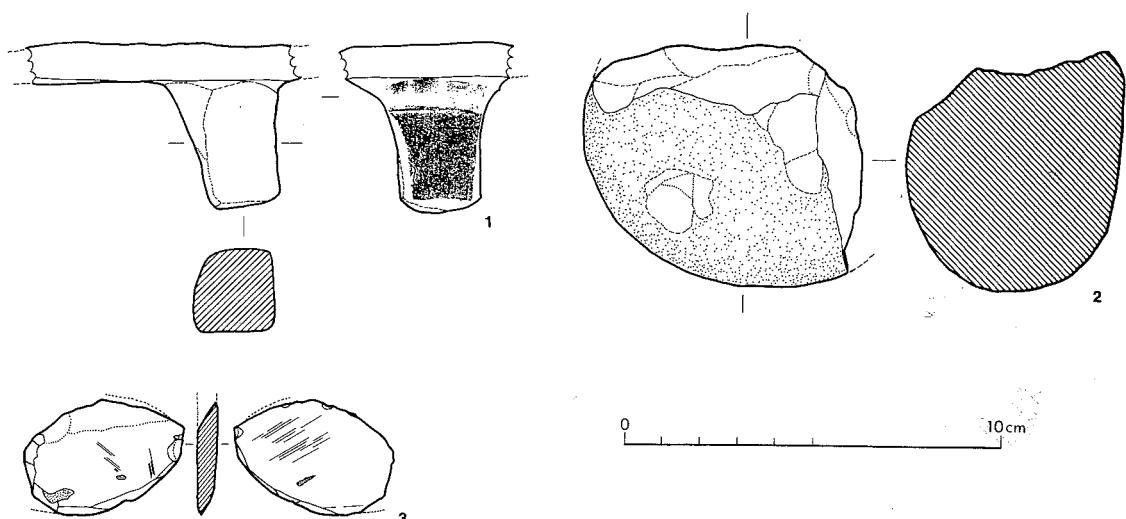
【III層】(第82図) 1は弥生後期終末～古墳時代初頭にかけての薄手のつくりの台付甕の口頸部。頸部内面で明瞭な稜を有して屈曲する。口縁部は内湾気味に立ち上がる。2は縄文晩期前葉後の深鉢口縁部。外面は粗いナデであるが内面は丁寧なナデもししくはミガキで器表面は緻密である。

『I—Q区』

【II層】(第83図) 1は弥生後期の複合口縁壺の口頸部。外面は横方向のナデ。口縁部は外反気味に直立し口唇部は丸みをもって肥厚する。2は4条の平行沈線がめぐる器種不明の土器片である。

【III層】(第84図) 1は古代の黒色土器Bである。底部から内湾し、頸部で器厚がやや薄くなり、一見外反気味に立ち上がる。推定口径17.6cm・推定高台径7.6cm・器高6.2cm。

内面底部付近に押出痕が残る。本来の黒色は口縁部付近に一部残るだけである。外面は成形時の水平方向の稜の上から不定方向のナデ調整、高台内はナデ。内面はナデ。絹雲母を非常に多く含む。2は古代末の土師質皿。推定口径9.0cm・推定底径6.0cm。3は古墳時代前期布留式新段階の甕の口頸部。推定口径17.0cm・現存部高さ1.2cm。口唇部平坦に仕上げられ肥厚し内外方向に突出する。口頸部外面は横方向のナデ。肩部に左上→右下方向の刷毛目痕が認められる。5は時期不明の大型の鉢か。外面



第72図 I-1区 I・III層遺物実測図(1・2: I層、3: III層)(1/2)

は横方向の粗いナデ。内面は横方向の丁寧なナデ。6は胎土の様子から考えて古墳時代以降の土師質の甕の口縁部か。内外面に一連のものと考えられる指頭圧痕が認められる。内外面共に横方向のナデ。7・8は縄文晚期前葉～中葉の底部破片。推定底径は7が9.7cm・8が9.2cm。7は内外面共に器表面に3mm低度の窪みが多数認められる。底部外面は横方向の粗いナデ。8は内外面共にヘラによるナデで緻密な器表面となる。9～11は縄文晚期前葉～中葉の土器。9は頸部で緩やかに外反する器形であり内外面共に横方向のヘラミガキ。10は頸部内外面で稜をもって屈曲する。内外面共に丁寧なミガキ。細砂粒を多く含むが調整で外面器表にはほとんど目につかない。11は器種不明であるが口縁部で屈曲する。内外面共に横方向のナデであるが光沢が失われているだけでヘラミガキだった可能性もある。

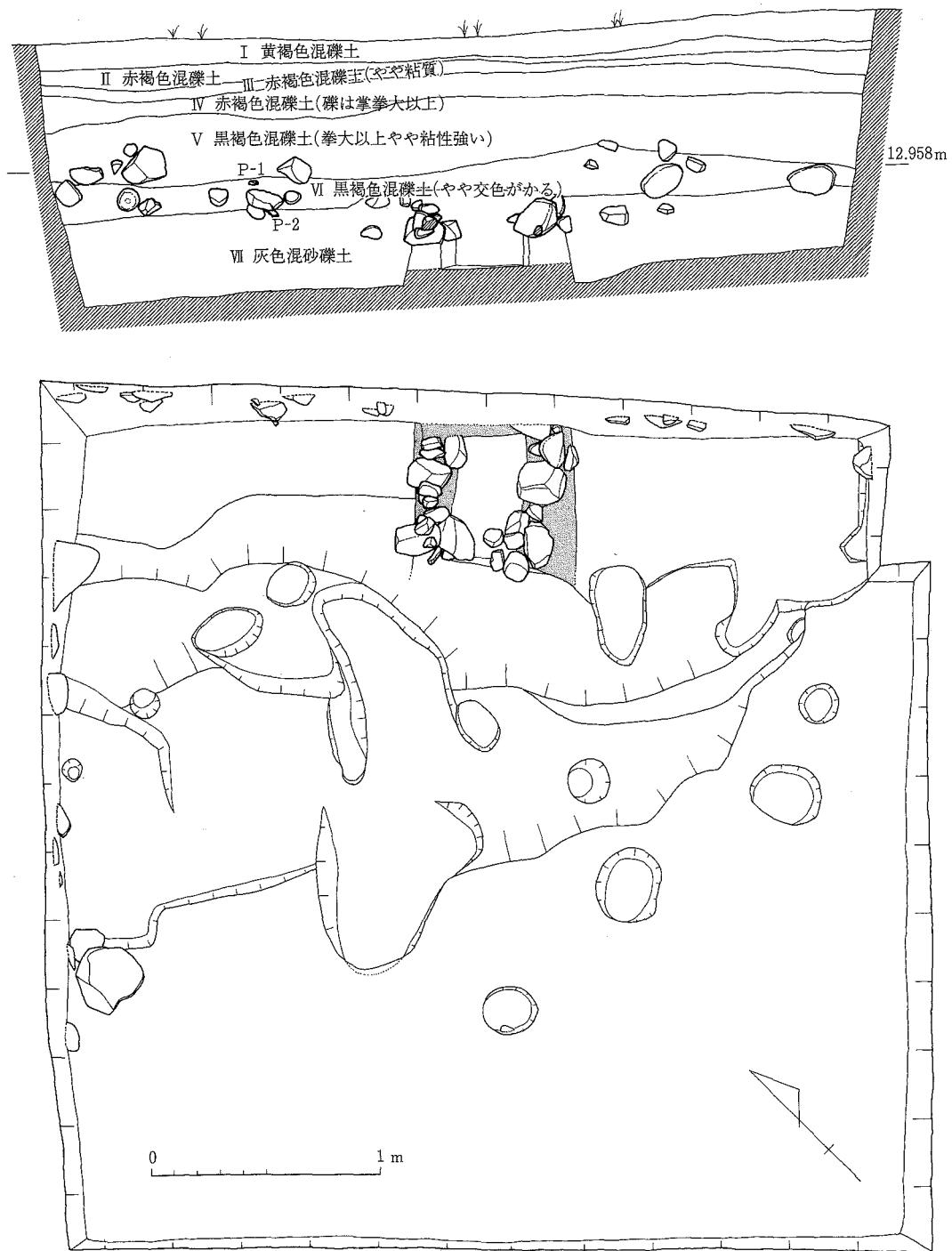
12～15はすべて楕円文が施される縄文早期の押型文土器である。12は内外面で文様構成が異なる稀な例である。外面に楕円文を縦回転で施し、内面に山形文を横方向に施す。13は外反気味に立ち上がる口縁部。14は楕円文であるがむしろ菱形に見える。15は外面が縦方向の楕円文・内面が横方向の楕円文である。

【III層掘り込み埋設土器】(第86図) 1～4は中世土師質土器である。土坑は確認できなかったが4枚が重ねられた状態で検出した。すべて底部糸切りである。1は口径14.4cm・底径9.8cm・器高3.2cmの壺。底部から外反気味にひろがりその上で内湾気味に立ち上がる。内外面共に横方向のナデ。当遺跡出土の中世の土器中では最大のものである。2は口径8.0cm・底径6.4cm・器高1.4cmの皿。口縁部が外反気味となる。内外面共に横方向のナデ。3は口径9.0cm・底径7.2cm・器高1.4cmの皿。底部から外反気味にひろがりその上で直線的になる。内外面ナデ。4は口径9.2cm・底径8.0cm・器高1.2cmの皿。底部が段々になっている。内外面ナデ。

【IV層】(第87図) 1は弥生後期終末～古墳時代初頭の台付甕の口頸部。口縁部はやや内湾気味に開く。頸部内面の屈曲部は稜をなす。内外面共に横方向のナデ。細砂粒を多く含む。2も同時期の畿内系高壺の低く開く脚部。脚柱部外面は横方向のナデ。低く開く部分も横方向のナデであるが下端部付近は縦方向のナデ。脚柱部内面は棒状の工具で下→上方向に刺突し中空としている。据部内面は横方向の刷毛目痕が認められる。3は縄文晚期前葉の口縁部が外傾する深鉢のタガ状の口縁部。口縁部外面に板目状のナデ痕あり。4は内外面共に横回転で楕円押型文が施される。

【V層】(第87図) 6は縄文晚期前葉の深鉢の口縁部。外面は横方向の条痕が認められる。7・8は外面に楕円押型文が施される体部破片。

【北壁断面】(第87図) 12は外面に横回転で楕円文が施される体部片である。内面は横方向のナデ。



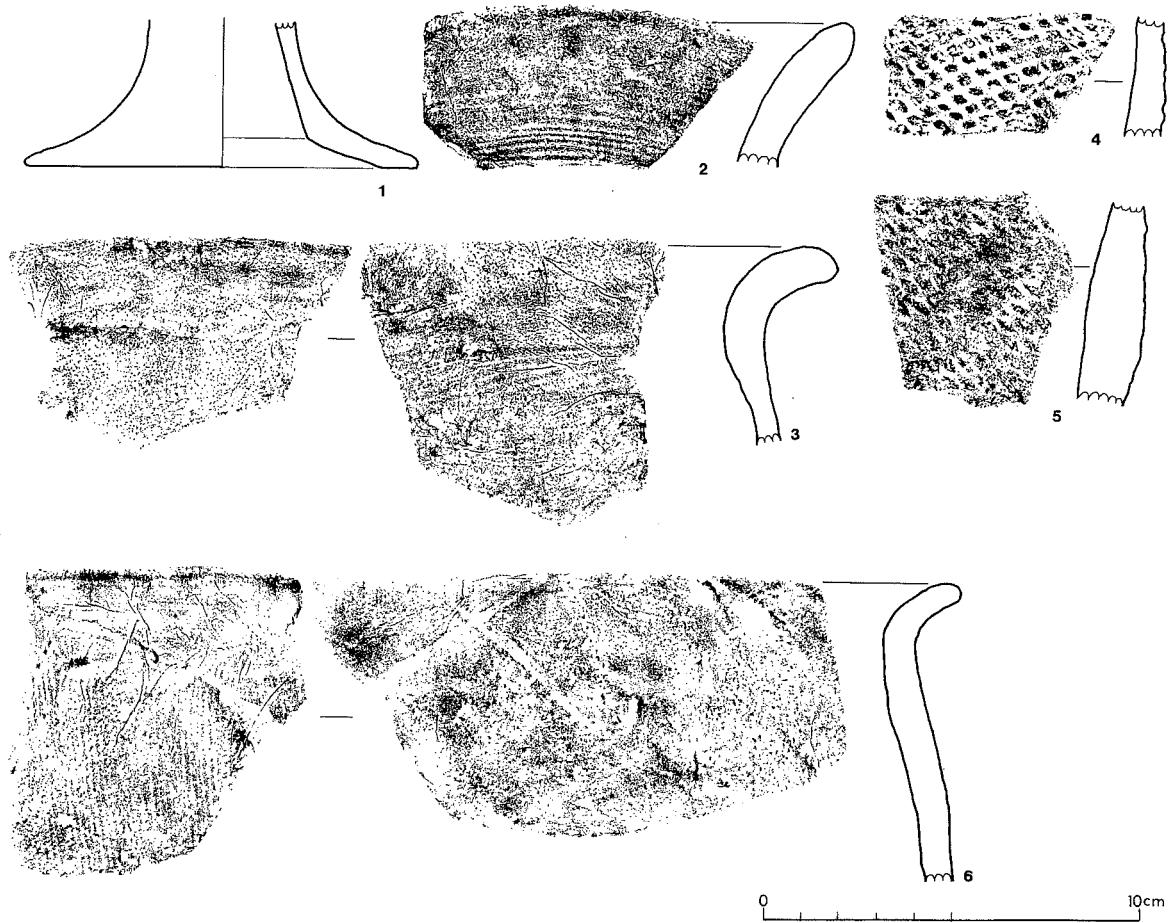
第73図 I—1区堅穴状遺構実測図

『I—Q・R区間畦畔部』

I—Q・R区間畦畔部の遺構（第88図） 径1m程度にわたって人頭大の礫を配置した遺構である。全体の半分程度は道路の下になっているが礫には焼灼による剥離があり地面にも固化が見られることから屋外炉と考えられる。時期は特定できない。

【III層】（第89図） 1は弥生後期終末期の広口壺または甕の口縁部か。外反しながらひろがる。口唇部は肥厚し平坦に仕上げ、口唇内外端部が上下に突出する。口縁部内面は横方向のナデ。器厚5mm程度と薄く金雲母を含む。2も同一時期と考えられる無頸壺または丸底の鉢と考える。内外面共に口

縁部から体部上半まで左上→右下方向の刷毛目痕が認められる。3も同時期の複合口縁部と考える。口縁部は外反気味に直立する。口縁部外面は横方向のナデ。頸部は左上→右下方向のナデ。口縁部内面は横方向のナデ。



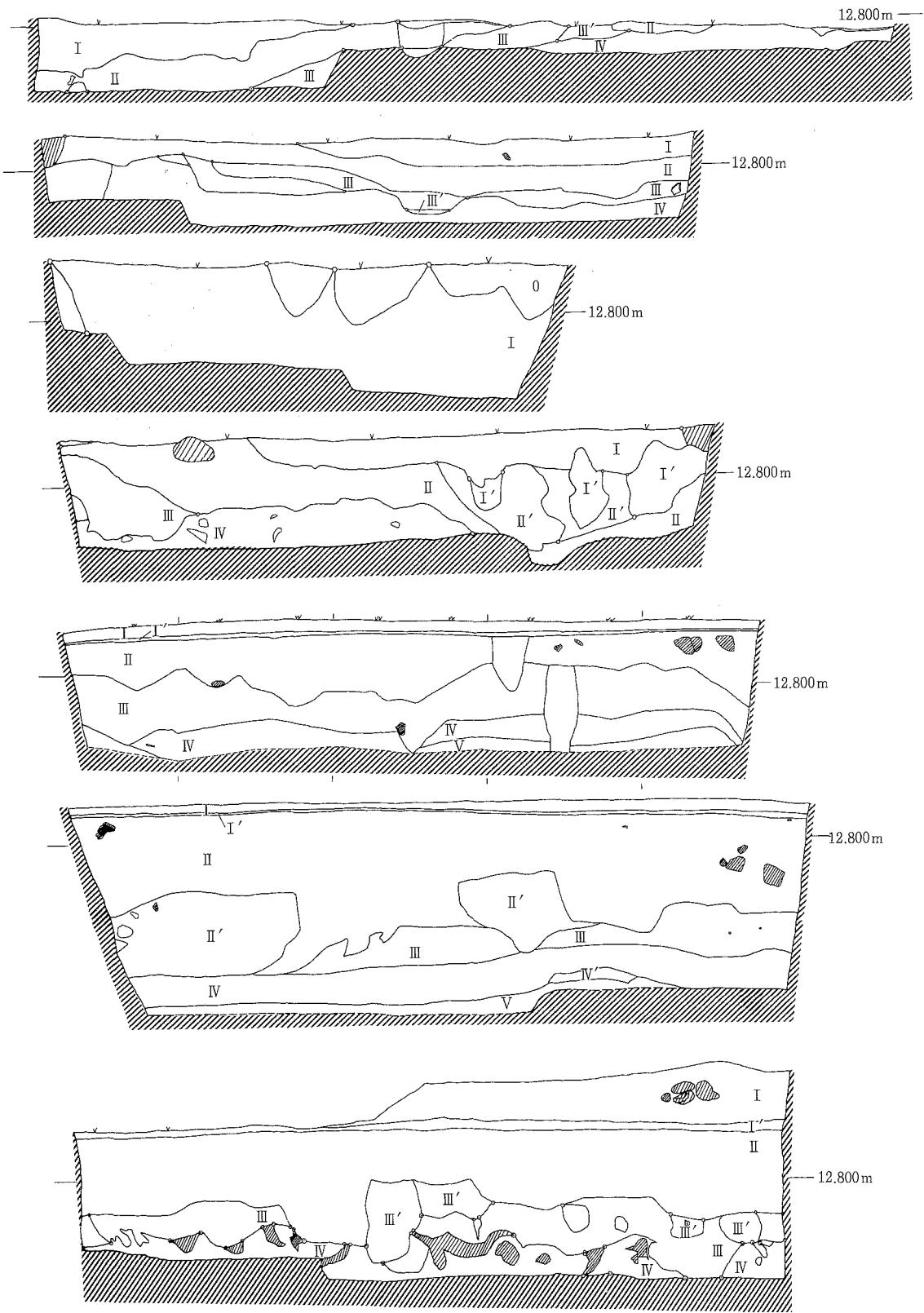
第74図 I-1区竪穴状遺構関連遺物実測図(1/2)

【炉跡】(第89図) I-Q・R間で炉跡と考えられる遺構が検出された。図示できた出土遺物は1点のみである。第97図4は弥生後期の断面三角形の突帯が付される壺の肩部。

『I-R区』

【II層】(第90図) 2は弥生後期終末前後の広口壺または鉢。胴部で丸みを帯びて張り出し底部へつづく。口頸部は内外面共に横方向のナデ。内面屈曲部以下には刷毛目痕が残る。3は古代～中世の土師質土器。内湾気味に立ち上がる。内外面共に横方向のナデ。4は壺の口縁部。時期は弥生後期か。口縁部外面は横方向のナデ。5は台付甕の台部。内外面共に横方向のナデ。

【IV層】(第91図) 1は内外面に細い刷毛目痕が内外面に残る壺の口縁部。2は口縁部が内湾気味に立ち上がり口唇部が内側に肥厚する壺。内外面ナデ。3は弥生後期終末～古墳時代初頭の薄手の台付甕の口頸部。4も同時期の広口壺の口縁部か。口唇部が肥厚し、調整によって弱い凹状に仕上げられる。5は小型の複合口縁壺の口頸部。内外面共に横方向のナデ。6・8は縄文晩期前葉の深鉢口縁部。6は外面に横方向の条線が認められる。8は幅4mm程度の比較的幅広の平行沈線が5条残る深鉢の口縁部。タガ状またはタガ状口縁が退化し頸部で外反する器形と考える。7・9～11は縄文早期の押型文土器。7は無文または器表面の摩滅で文様が消えたもの。口縁部内面の文様は認められない。口縁部は緩やかに外反する。9は内外面に橢円文が施されるが外面は左上→右下回転の施文。内面は横回転の施文。10・11は橢円文が外面に施される体部破片である。



第75図 I—O・P・Q・R・S区北壁実測図

『I—S区』

【II層】(第93図) 1・2は台付甕の台部。1・2両方共台部内外面ナデ。

【III層】(第93図) 3は鉢の口縁部か。外面は不明であるが内面は口縁部は横方向のナデ。胴部は

左上←→右下方向の刷毛目による微細な条線が認められる。4は古式土師口縁部か。口唇部が肥厚し平坦に仕上げられる。内外面共に横方向のナデ。5は弥生後期～古墳時代初頭の透かしを有する器台の一部。先の鋭い工具で施された断面三角形の沈線が3条残る。6は口縁部の3条の横走凹線間に細線羽状文が施される浅鉢口縁部で縄文後期後葉の三万田式期のものと考えられる。口縁部は平坦に仕上げられ内面にはヘラミガキの痕跡が認められる。7は山形の沈線文が2条と横走沈線が1条認められる体部破片である。8は縄文晚期前葉の深鉢の口縁部付近。内面横方向のナデ。9は縄文早期の橢円押型文が施される。口頸部で緩やかに外反し胴部で膨らみをもつ器形で、田村式期の新しい段階併行か。屈曲部を境に上下で施文方向が異なる。屈曲部以上は縦回転・以下は横回転による施文である。11はフイゴの羽口である。縦方向の割れ面は平坦で接合面と考えられる。

【IV層】(第94図) 1は中世の東播系の捏ね鉢の口縁部。口唇部は肥厚し下方に突出し自然釉が付着している。2は断面三角形の突帯が2条付される壺の胴部。突帯付近は横方向のナデ。3は時期不明の深鉢口縁部である。内外面の器表面に $\phi 1\text{ mm}$ 以下の窪みが多数観察される。5～13は縄文早期の押型文土器である。5～12は橢円押型文が施される。5・6は内外面に横回転で橢円文が施されるもの。7は外面及び口唇部に橢円文が施される。内面は無文。口唇部・口縁部外面付近は横回転・胴部は左上←→右下回転で施文される。9は緩やかに外反する器形で内外面に橢円文が施される。12は外面のみに橢円文が施される。13は緩やかに外反する器形で外面に山形文・内面に縦方向の原体条痕+山形文。外面口縁部は横回転・胴部は横回転と左上←→右下回転の施文、内面は横回転で上下2段に施される。

『I-S・T区間畦畔部』

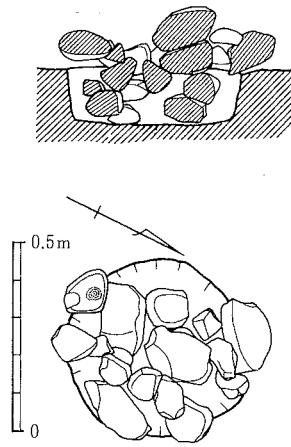
【II層】(第95図) 1は1.7個/cmで刻目が施される断面三角形の突帯が付される体部破片。刻目は先端の平たい工具で丁寧に等間隔で施される。内外面共に横方向のナデ。2は弥生後期の鼓形の器台の上端部か。第97図9と同一個体と思われる。3は外反しながら開く高壺の口縁部か。色調橙色。細砂粒を非常に多く含む。

【III層】(第95図) 4は弥生中期の甕口縁部か。口唇部の外側への張り出し部に上→下に焼成前の穿孔がなされている。

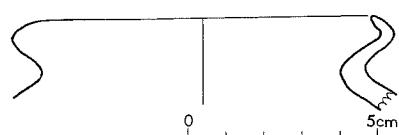
『I-T区』

【II層】(第97図) 1は胴部に断面三角形の突帯が3条付される壺の体部破片。内外面共にナデ。

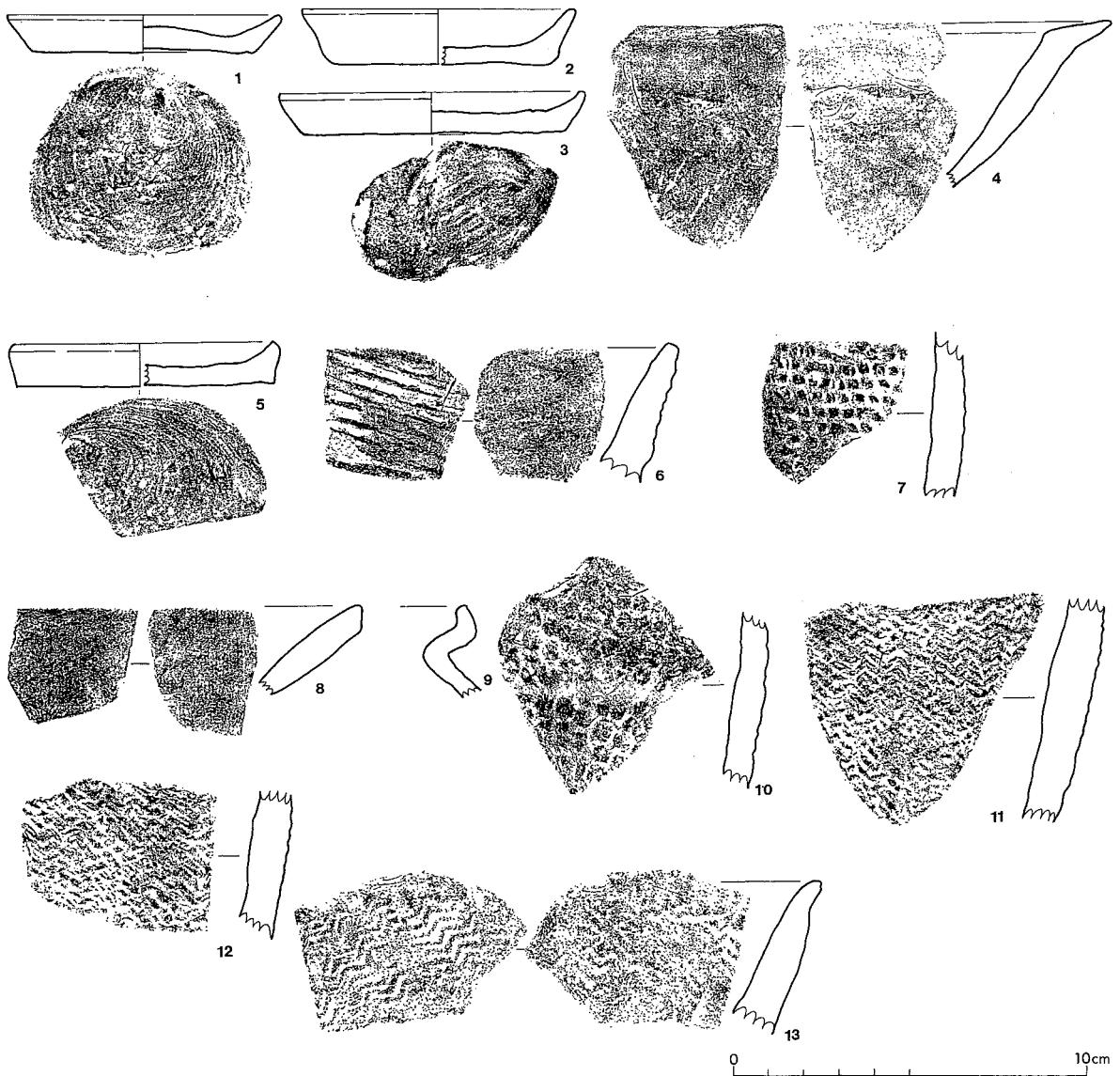
【III層】(第97図) 当層では弥生後期後葉～古墳時代初頭の資料が出土した。2は在地系の高壺の緩やかに外反する口縁部である。内面現存部下端に屈曲部が若干残存しており、壺部中位付近で屈曲する器形である。外面は横および左上←→右下方向の刷毛目の後に縦方向のナデ。内面は横方向のナデ。3は畿内系の高壺の口縁部か。口唇外端部が下方向に突出する。器厚5mm程度と薄手である。内外面共に縦方向の擦痕が多く認められるがその前段階のヘラによる調整も縦方向である。色調は鮮やかな橙色。4は器厚4mm程度の薄手の短頸壺である。口縁部外面はヨコナデ。肩部内面の



第76図 I-M区V層集石
遺構実測図



第77図 I-M・N区間畦畔部III層遺物
実測図(1/2)



第78図 I—N区遺物実測図(1/2)

ケズリ痕は認められない。5・6・8は複合口縁壺の口頸部であり口縁部が外反気味に直立する。5は屈曲部外面は明瞭な稜を有する。3点すべて口縁部内外面はヨコナデ。7は高壺の低く開く脚部である。外面横方向のナデ。9は第105図3と同一個体の鼓形の器台の上端部と思われる。上端部が肥厚し内外面に突出し調整によって凹状に仕上げられる。砂粒を多く含む。10は2.5個/cmの刻目が施された断面三角形の突帯が付される体部破片。突帯の上下はヨコナデであるが下端部付近は左上→右下方向の刷毛目の後にナデ。11は形状の異なる断面三角形の突帯が2条付される甕体部。上の突帯のほうが幅広であり、長径と短径がほぼ等しい刻目が1.6個/cmで施される。13は高壺の中実の脚柱部である。下から上へ向かって ϕ 1 cm程度の刺突を深さ1cmで施す。14は時期不明の深鉢口縁部。内外とも器表面の摩滅が著しく調整不明。15は複合口縁壺の口縁部である。16は布留系の甕口縁部。内湾気味に開き口唇部は平坦に仕上げられ内側に弱く突出する。口縁部外面は横方向の刷毛目の後ナデ、頸部には縦方向の刷毛目痕が残る。内面は横方向のナデ。17は鉢または甕の口縁部。口唇部は凹状に仕上げられ内側に突出する。18は縄文晩期前葉の浅鉢の口縁部。微細な白色の砂粒を非常に多く含む。19は橢円押型文が施される体部破片である。

【西壁III層】(第97図) 20は甕の口頸部。外面横方向のナデ。口頸部内面は横方向のナデであるが肩部以下は左上→右下の刷毛目の後に横方向のナデ。21は丸底のミニチュア土器。口縁部を欠損し

ている。

【IV層】(第99・100図) 当層では古式土師がまとまって出土しており、柳田編年(1991)では土師器II b式期・井上編年(1991)では古墳前期2式期・蒲原編年(1991)では土師本村1式期に相当しよう。古式土師の可能性が高いものから取り上げる(1~3・5・6・8・9・14)。1は畿内系の小型丸底鉢である。口径12.6cm・胴部最大径11.2cm・器高6.2cm。内外面共に横方向の丁寧なナデ。ケズリの痕跡は観察されない。色調橙色。外面は頸部で緩やかに外反するが内面では稜をもつ。

器厚は2~3mm程度と非常に薄く特に肩部付近が薄いつくりとなる。色調橙色。2は非常に丁寧なつくりの畿内系小型広口壺である。器厚3mm程度の非常に薄手のつくりである。推定口径13.4cm・推定頸部径6.0cm・推定胴部最大径14.6cm・現存部高さ12.6cm。頸部から上は直線的に開くが中位付近で若干内湾する。口頸部外面は非常に丁寧ナデが横方向に施され、左上←→右下方向のナデも認められる。

肩部外面は縦および左上←→右下方向の微細な刷毛目その後横方向のヘラミガキ。口頸部内面は頸部下端に横方向の短い微

細な刷毛目が認められ、他は横方向の丁

寧なナデ。肩部内面は横方向のナデであ

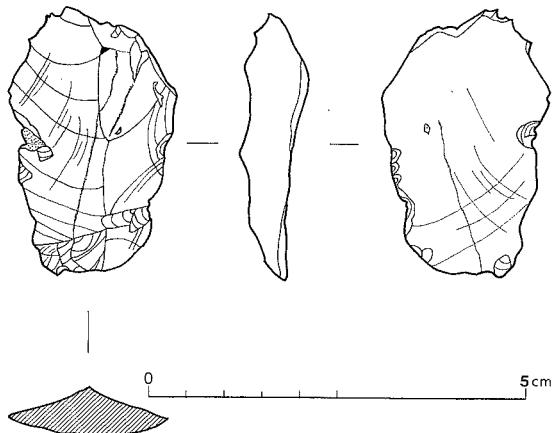
るが頸部との境目付

近は指によるナデの

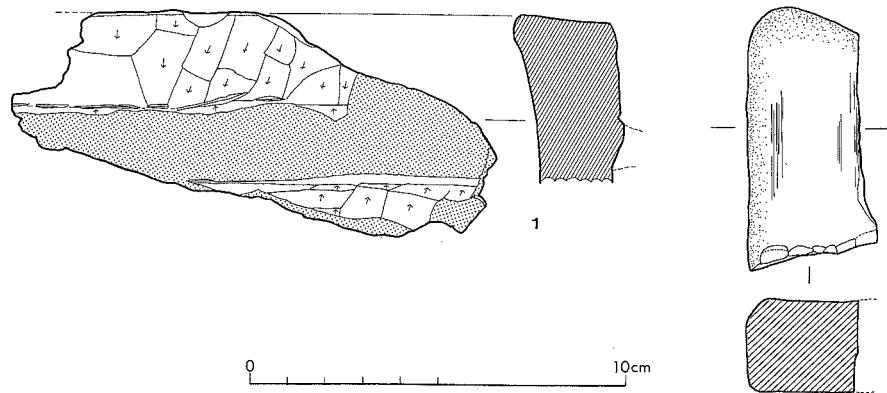
痕跡が放射状に残り、

上下幅1.5~2.0cmの

粘土で張り付けの痕

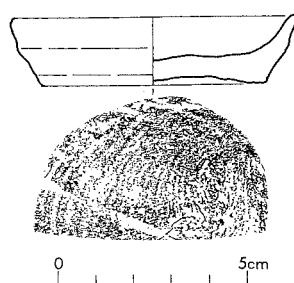


第79図 I-O区IV層遺物実測図(1/1)

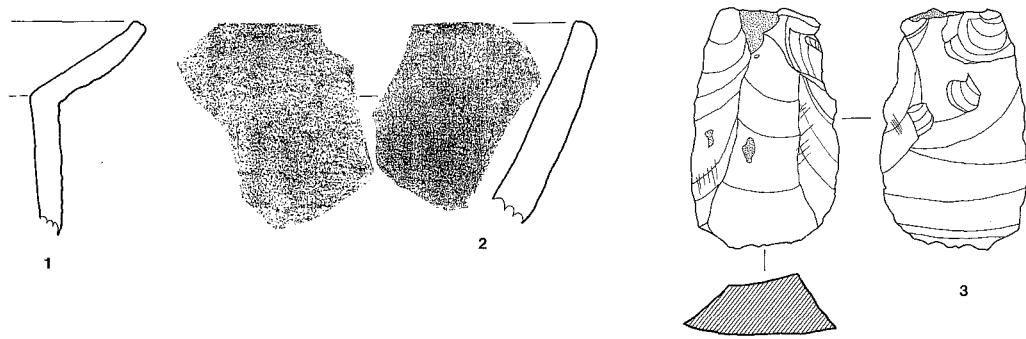


第80図 I-P区III層遺物実測図(1/2)

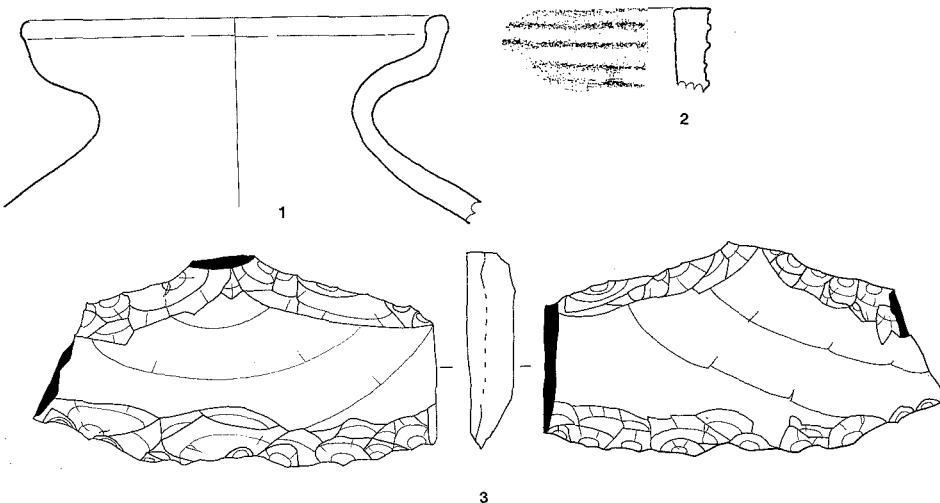
跡が残る。色調橙色。3は浅い鉢で器厚3mm程度の薄手のつくりである。推定口径13.8cm・残存高2.8cm。内外面共にナデ。色調橙色。8は4mm程度の非常に薄手の古式土師の甕の口頸部。推定口径17.0cm・推定頸部径11.0cm・残存高5.2cm。胴部径に対して頸部径が小さいようである。頸部で急激に外反し内湾気味に立ち上がり内面の調整によって口唇内端部が肥厚する。口唇部は平坦に仕上げられる。口頸部横方向のナデ。肩部左上←→右下方向のナデ。口縁部内面は横または左下←→右上方向のナデ。肩部内面は横方向のケズリ+放射状の指押さえ+横方向のナデである。φ1mm以下の砂粒を非常に多く含む。9は台付甕の口頸部か。屈曲する頸部内面は稜を有する。頸部外面で外反し内湾しながら立ち上がり口縁部は丸みをもって肥厚する。φ1mm程度の砂粒を多く含み器表面に露出している。14は甕口縁部。口唇部が平坦に仕上げられ内端部が突出する。内外面共に横方向のナデ。以上が古墳時代前期の土器と考える。4は1条の突帯が巡る器種不明の土器である。断面台形状の突帯のつくりが、弥生後期の有明海周辺で出土する鼓形の器台の上下端部の凹状の仕上げに酷似している。5・6も3と同様に浅い鉢である。内外面ナデ。7は古代の甕の口頸部か。外面



第81図 I-P・Q区間畦畔部
II層遺物実測図(1/2)



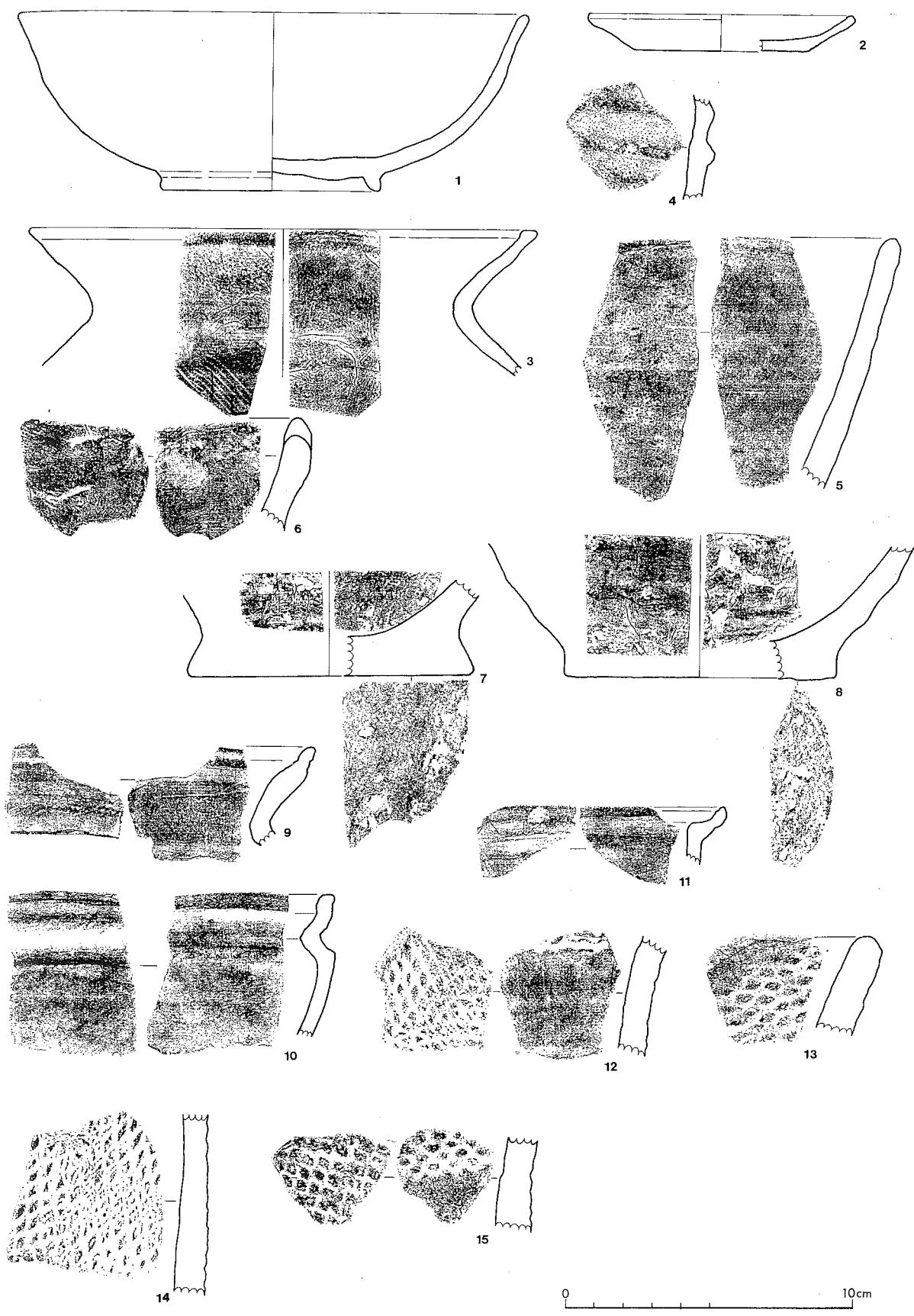
第82図 I—P・Q区間畦畔部III層遺物実測図(1～2：1/2、3：1/1)



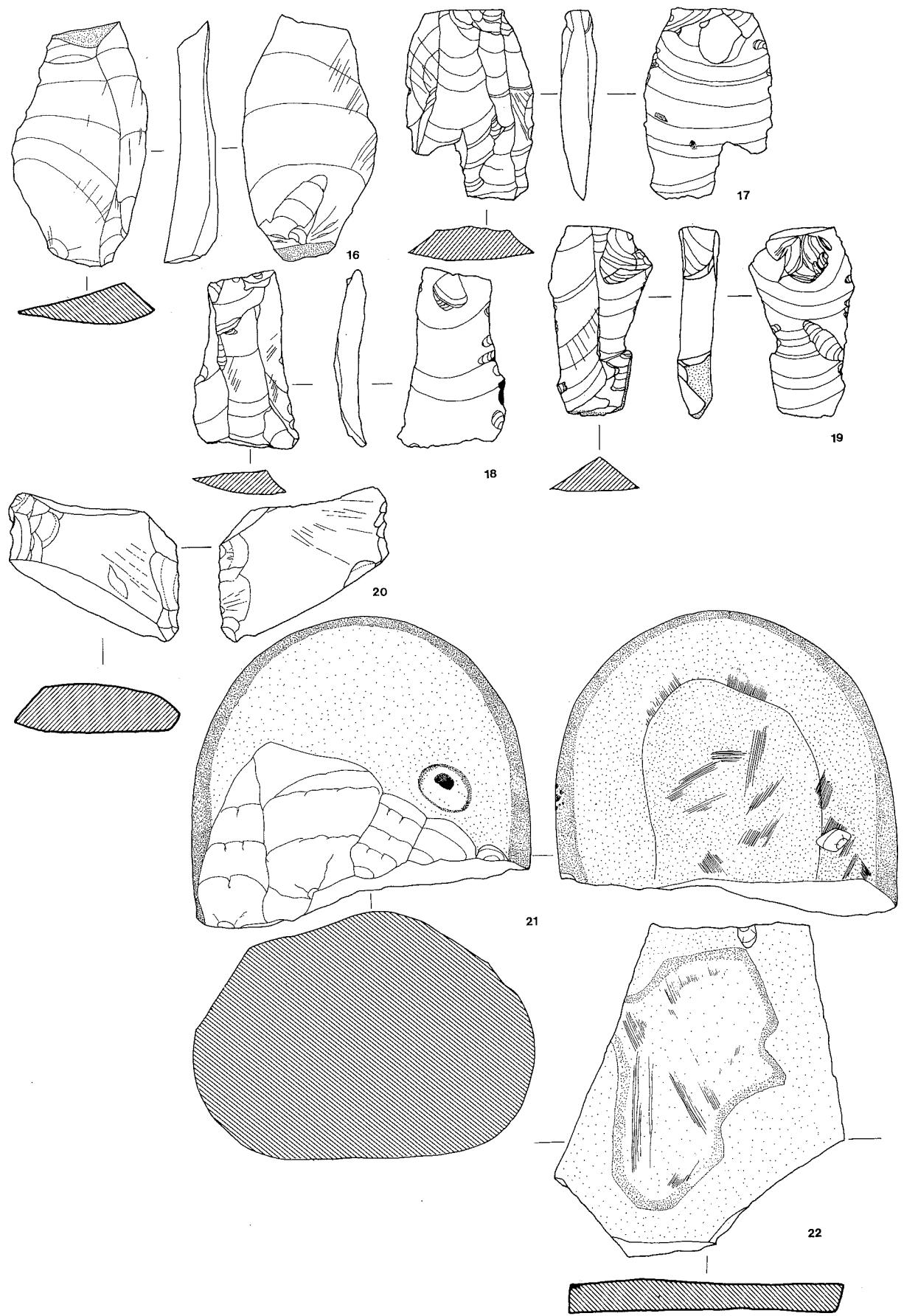
第83図 I—Q区II層遺物実測図(1～2：1/2、3：1/1)

は頸部で丸みをもって外反する。口縁部は外反しながら開くが、口唇部付近でやや内湾気味となる。口唇部は丸く仕上げられる。最大径は胴部中位以下となる。頸部内面の屈曲部は肩部のケズリによつて内方に突出し稜をなす。口頸部外面は横方向のナデ。肩部以下は縦方向の幅広の刷毛目の後に横方向のナデ。口縁部内面は横方向のナデ。肩部以下は幅広の刷毛目が羽状に施される。色調橙色。10・11は弥生後期の壺の体部か。断面同形の突帯が3条付される。内外面共に横方向のナデ。12は器種不明。上下幅4mmの端面に2mm幅の沈線が施される。外面は丁寧なナデだが内面の調整は粗雑である。13は器種不明。内外面に刷毛目痕が残る。16～18はいずれも縄文晩期前葉と思われる。16・17は円盤状の底部。底部圧痕は認められず。18は浅鉢口縁部。口縁部外面に6mmの幅広の沈線が施される。19～21は縄文早期の押型文土器。19は口縁部で緩やかに外反する。外面口縁部は横回転・それ以下は左上→右下回転で山形押型文が施文される。内面は縦方向の原体条痕+横回転で山形文が施文される。21は直線的に外傾する口縁部で橢円文が施される。

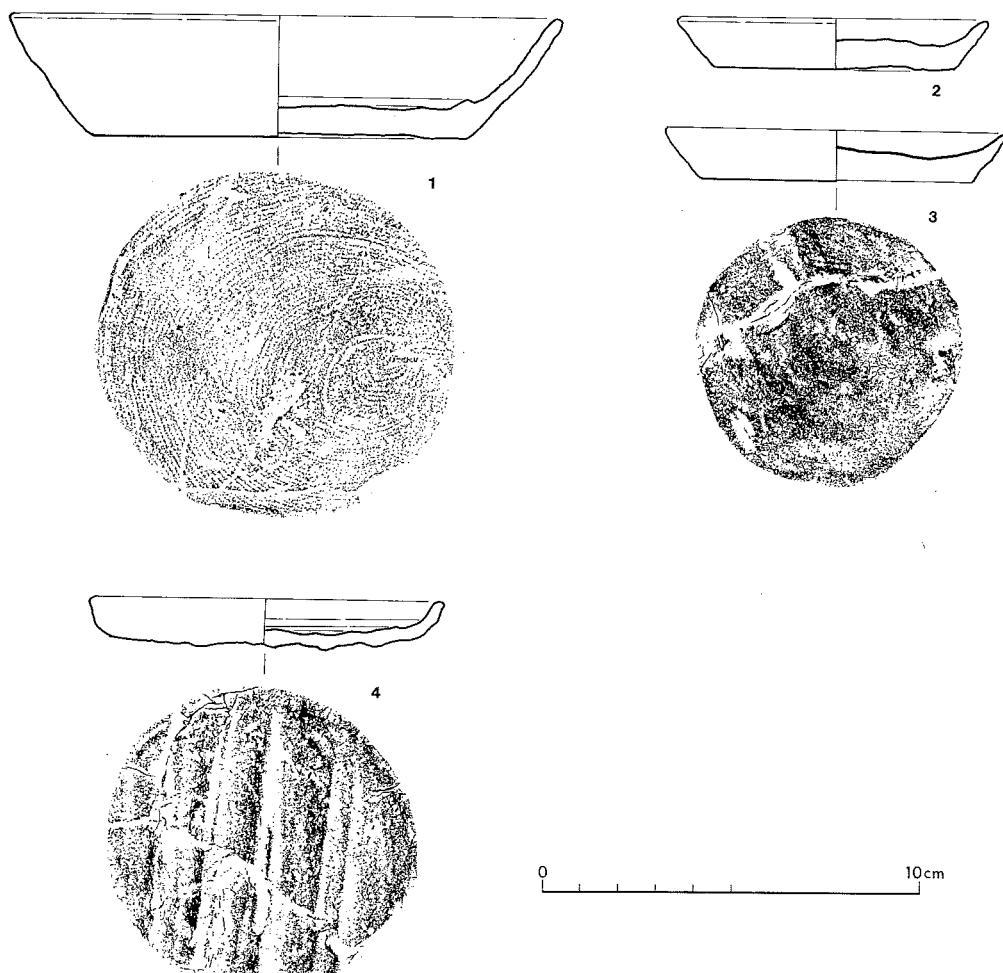
【V層】(第102図) 1は頸部で急激に外反する甕の口頸部。2は弥生中期の甕の口縁部。口唇部は内側で内湾し外端部へ続く。口唇内端部は内側に丸みをもって突出する。内外面共に横方向の丁寧なナデ。3は壺の肩部と考えるが刷毛目状の細く浅い横線が8条認められる。より上方には細く深い線がクロスしたものが見られるが文様であるか不明である。粘土帯接合内傾。4は弥生後期の複合口縁壺の口縁部。内外面共に横方向のナデ。5は内湾し立ち上がる鉢である。口唇部は丸みをもって肥厚する。内面は横および縦方向のナデ。6～8は縄文晩期前葉の深鉢口縁部。6は横方向の条線が浅く残る。7はタガ状の口縁部。4条の沈線の間隔が異なる。8は肩部で屈曲する器形か。口頸部が緩く外反する。内外面共に横方向の丁寧なナデ。金雲母を含む。9～10は橢円文が施される。9は口縁部で若干外反気味となる。



第84図 I—Q区III層遺物実測図①(1/2)



第85図 I—Q区III層遺物実測図②(16~19:1/1、20~22:1/2)



第86図 I—Q区埋設土器（中世）実測図(1/2)

『I—T・U区間畦畔部』

【I—U区1号集石遺構】(第108図) 長径1m短径70cm、深さ20cm程度の楕円形土壙に小礫を集積した遺構である。礫群は元来土壙上に集石していたものが落下したと考えられる。第109図の土器が土壙の一隅から出土した。この遺構は出土土器から弥生後期の土壙墓と考えられ、土器は副葬品と考えられる。

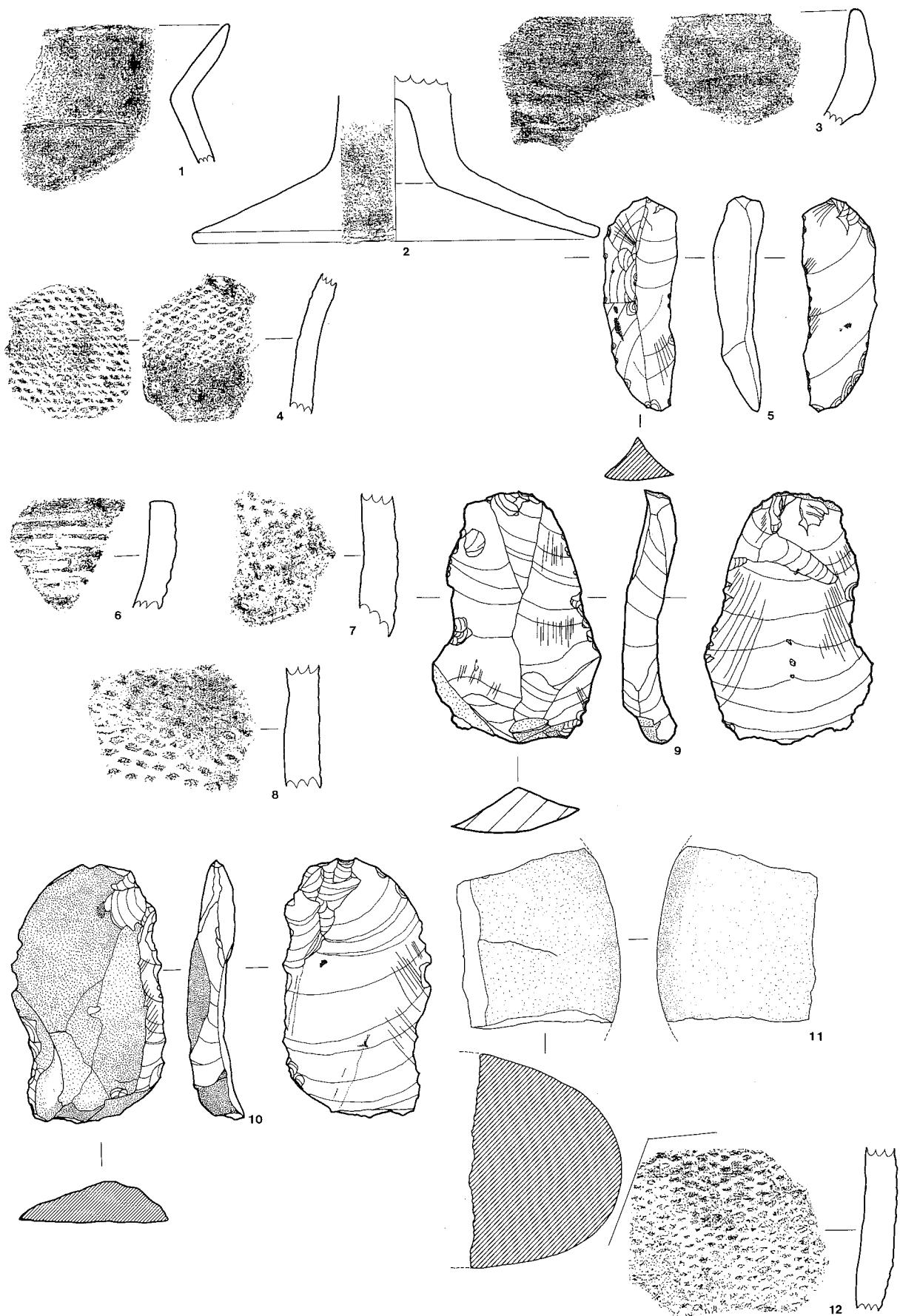
【I層】(第103図) 1は古代の黒色土器Bである。外面口縁部直下は薄手となり口唇部が肥厚する。2は小型壺の肩部か。肩部に沈線状の凹線が認められる。

【II層】(第103図) 3は籠状の工具を用いて1.7個/cmの割合で刻目を施される断面三角形の突帯が1条残る。突帯の上下は横方向のナデ。突帯より下は縦方向の刷毛目状の痕跡が認められる。内面は縦方向の刷毛目状の痕跡残る。4は高壺の脚柱部で下部で低く開く器形。脚柱部は中実であるが下方から上方に向けて ϕ 1cmの刺突を深さ1cm程施す。外面は縦方向の刷毛目の後ナデ。

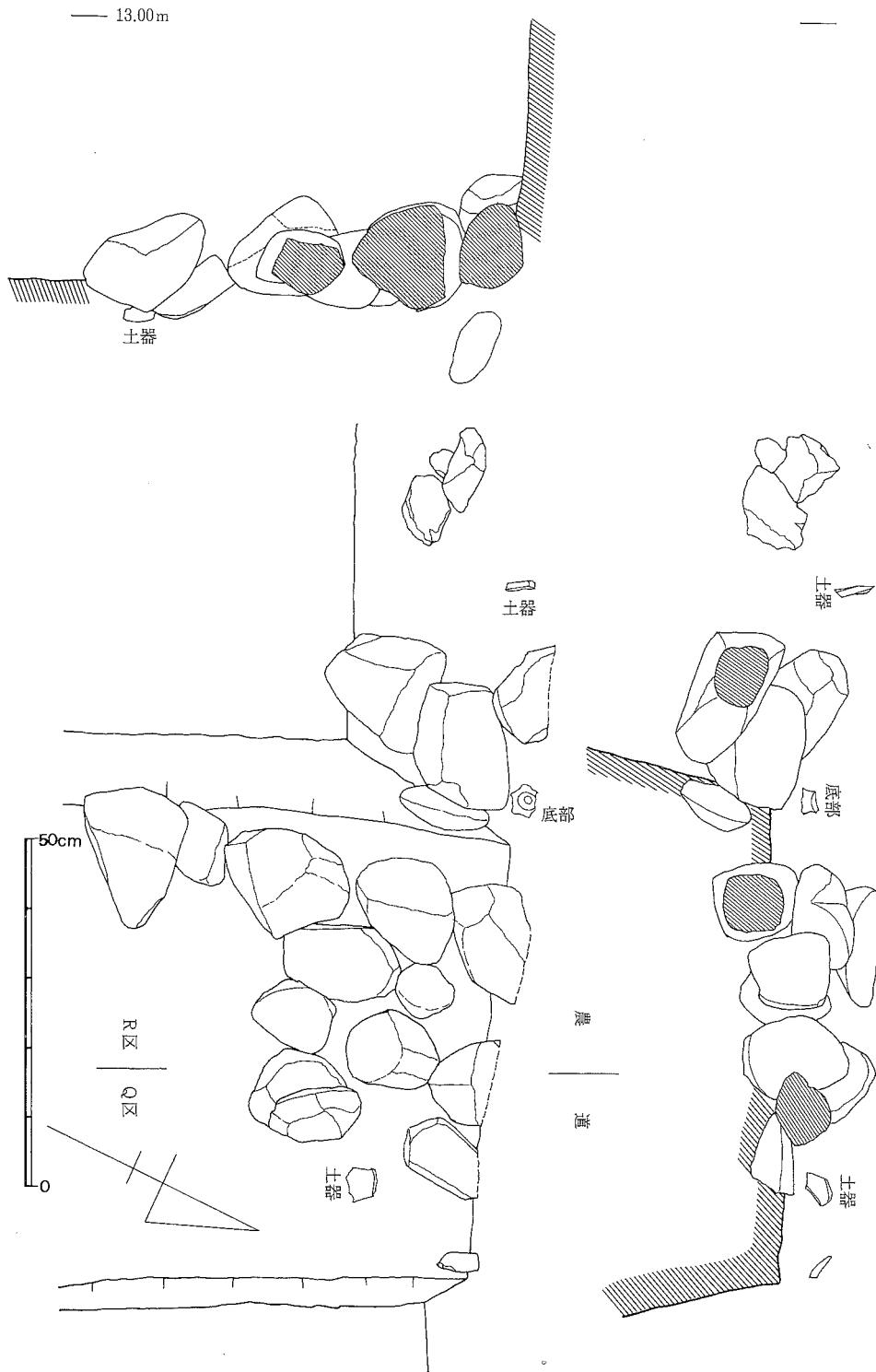
【III層】(第103図) 7は弥生後期前葉～中葉である。屈曲部内面は稜を有する。口縁部は外反しながらひらき口唇部は丸く仕上げられる。口頸部内外面共に横方向のナデ内外面共に縦方向の細い刷毛目が施されるが外面は横方向のナデおよび摩滅によって明瞭ではない。

『I—U区』

【I—U区2号集石遺構】(第109図) 1号集石遺構から1.5m程度離れた位置で検出した。1号同様に土壙上面を礫で覆った遺構である。土壙上面の長径約1m、同短径70cm、土壙底面の長径60cm、同短径40cm、深さ約45cmで人頭大から拳大の礫多数を集積しており土壙底に一部が落下していた。礫



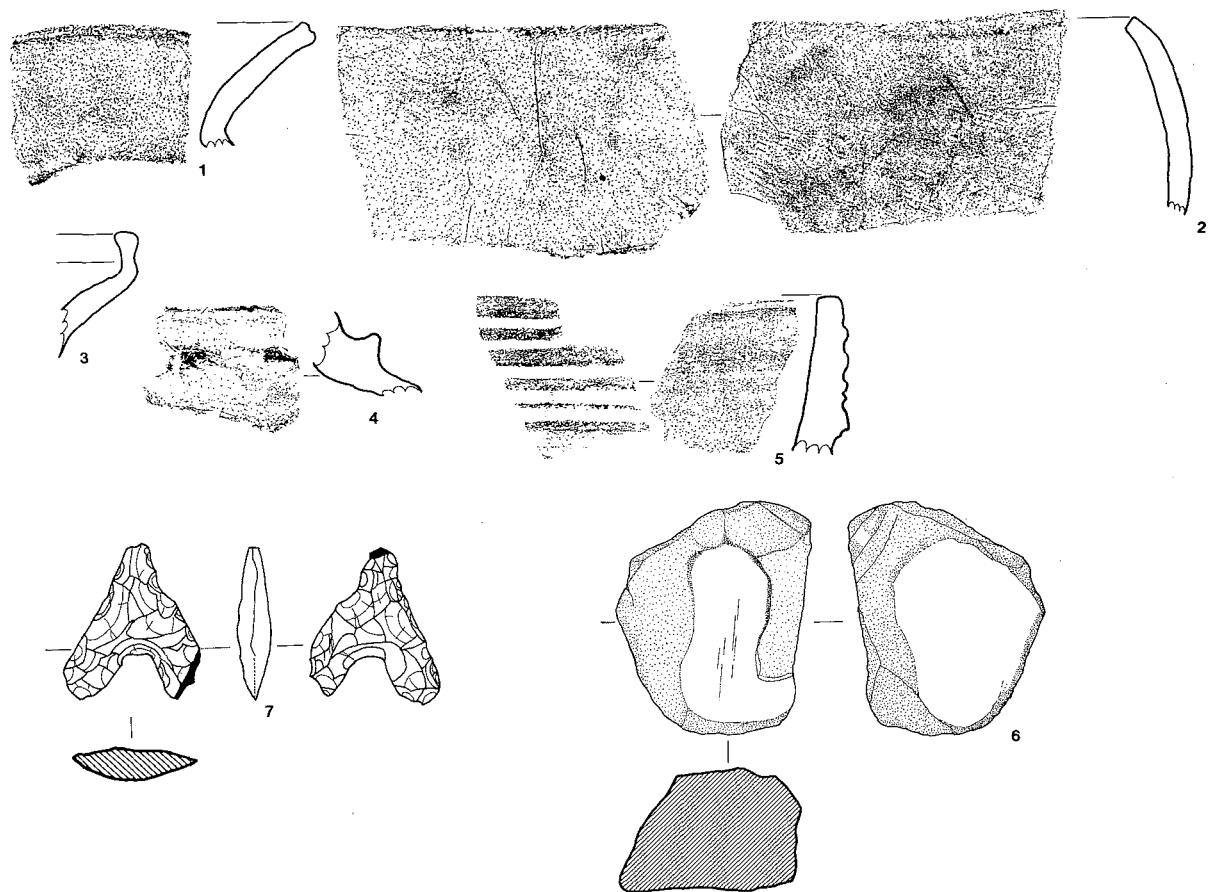
第87図 I—Q区遺物実測図(1～5：IV層、6～11：V層、12：北壁断面、5・9・101/1、他：1/2)



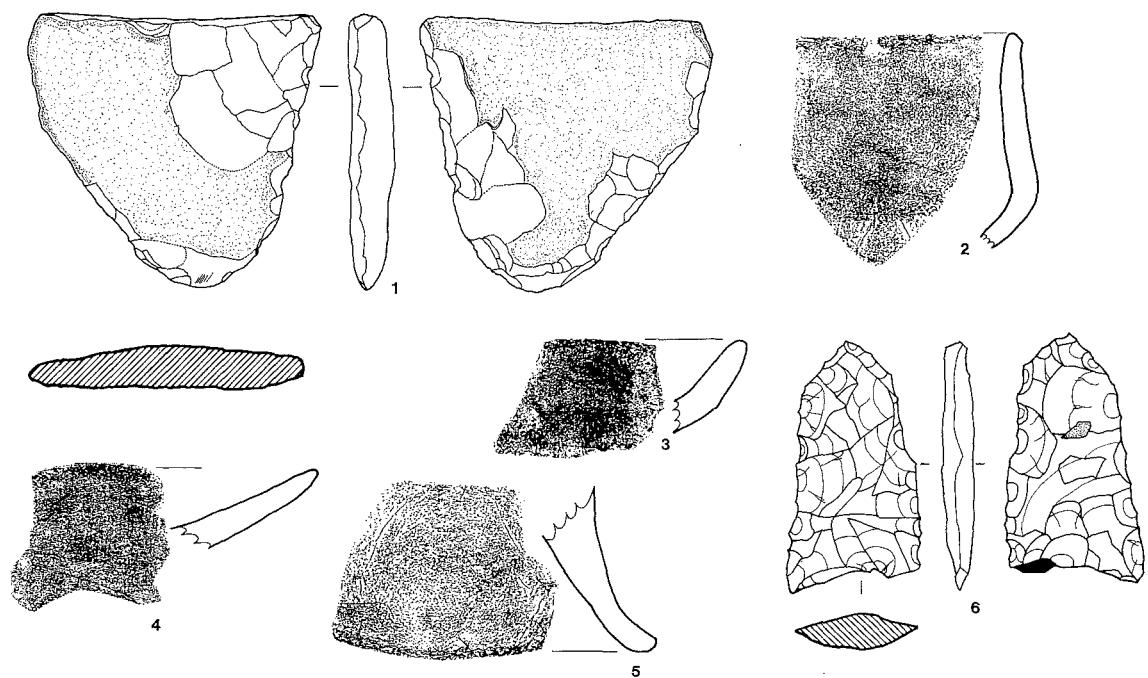
第88図 I—Q・R区間畦畔部集石遺構実測図

群は元来土壙を覆っていたと考えられる。土壙上面の辺縁から弥生後期土器片が出土した。1号集石遺構と同様土壙墓と考えられ、土器は土壙上面に供えられた副葬品と考えられる。

【III層】(第104図) 当層では弥生時代・縄文晚期前葉・縄文早期の土器が出土している。1は弥生時代の高坏の口縁部か。内面は左上→右下方向に刷毛目。2は弥生中期～後期の甕の口縁部。口縁部はほぼ横方向に開き口唇部は丸みを有する。口縁部内外共に横方向のナデ。多量の角閃石と金雲母を含む。3は台付甕の台部。外面横方向のナデ。4は頸部屈曲部に断面三角形の突帯が付される甕または壺である。内外面共に横方向の丁寧なナデ。5は底部の器厚が4mmの薄手の平底で若干上げ底で

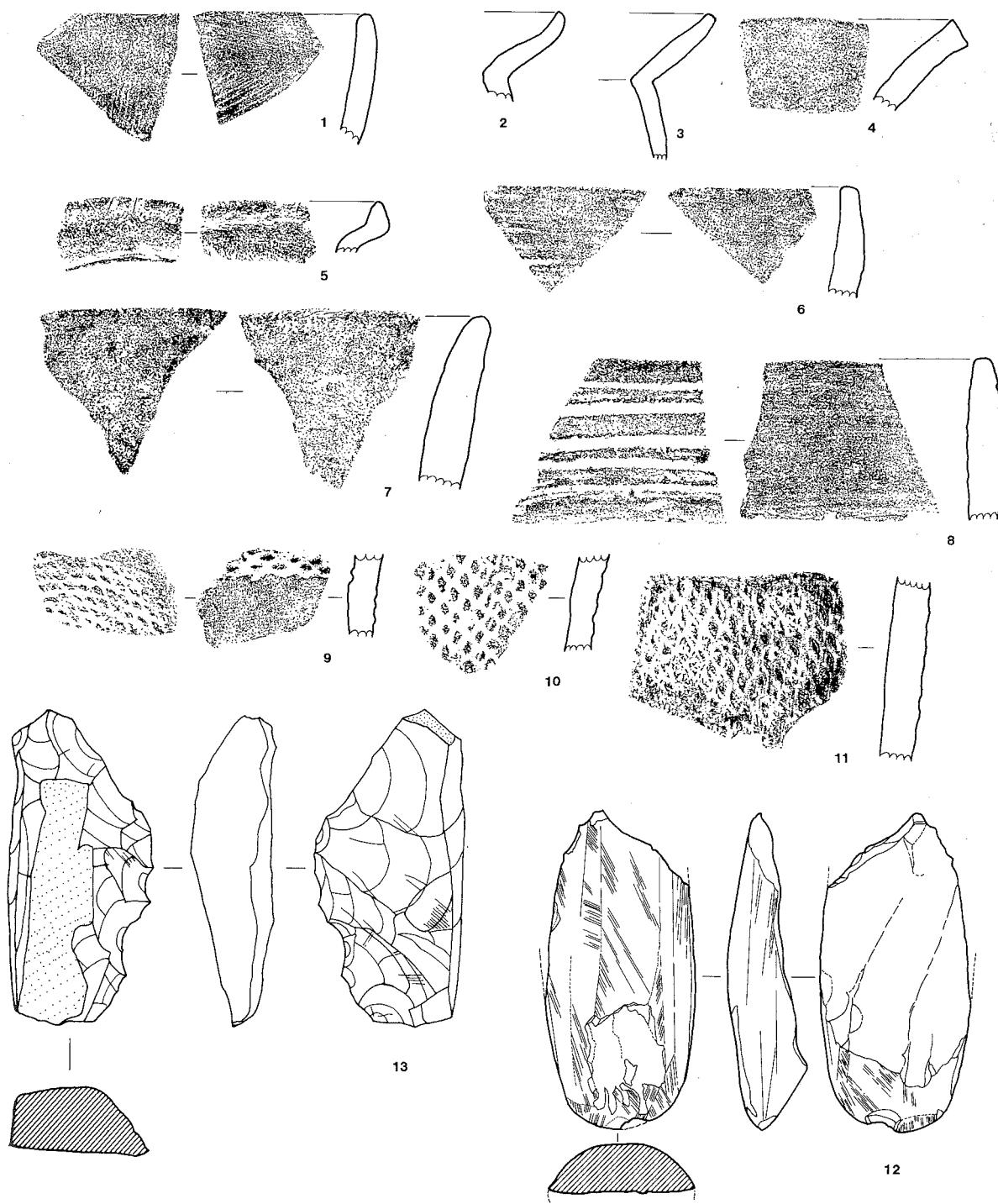


第89図 I—Q·R区間畦畔部遺物実測図(1～3：III層、4：炉跡、5～7：表面採集)(1：1/1、その他：1/2)



第90図 I—R区遺物実測図(1：I層、2～6：II層、1～5：1/2、6：1/1)

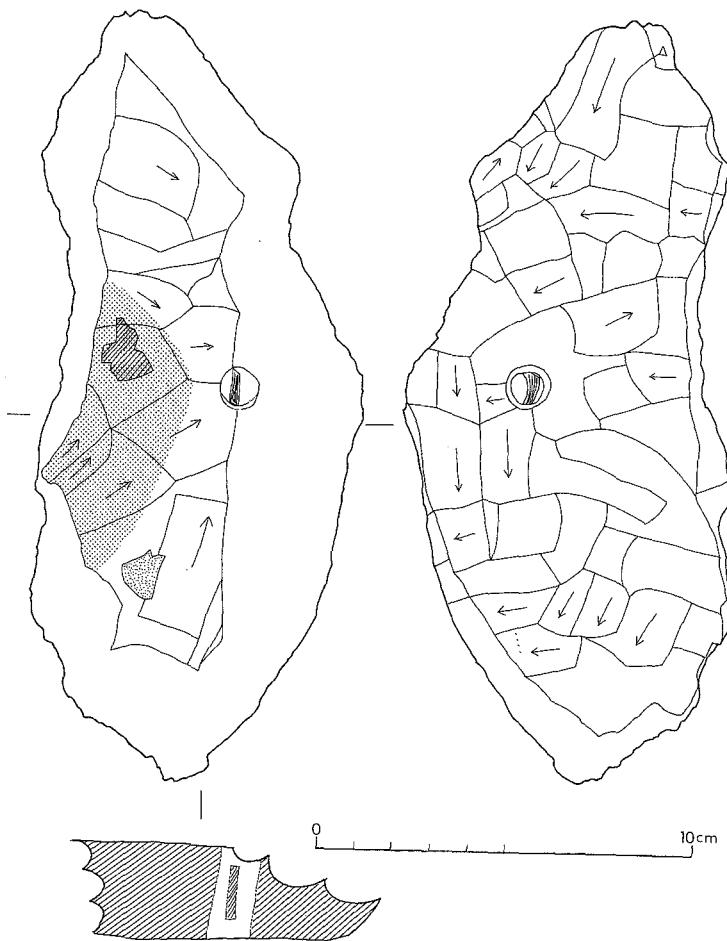
ある。底部から外反しながら開いていく。6は縄文晚期前葉の浅鉢の頸部破片である。7は1.5個/cmで刻目が施される突帯が付される体部破片である。8・9・10は縄文晚期前葉の土器である。8・9は共に口縁部に平行沈線が施された口縁部破片。10は ϕ 1.2cmの焼成後穿孔が認められる深鉢の頸部



第91図 I—R区層IV遺物実測図(1~12:1/2、13:1/1)

破片。内外面共に横方向のナデ。11~21は縄文早期押型文土器である。11~16は外面に楕円文が施される土器である。16のみ内面にも楕円文の施文が認められる。17は外面に楕円文が施されるが内面は山形文が施される。18~20は外面に山形文が施文される。19の口縁部は円筒状の傾きであり、20は口縁部でやや外反する。21は格子目文が外面に施される

【IV層】(第107図) 1は2個/cmで刻目が施される断面四角形の突帯が付される弥生土器の体部破片。内外面共に横方向のナデ。2は突帯が2条付される弥生土器の体部破片。上段の突帯は2.3個/cmで刻目が付される断面台形状。下段の突帯は刻目のない断面三角形状となる。3は縄文晩期前葉の深鉢口縁部か。口唇部を平坦に仕上げる。外面は横方向のナデ調整がなされるが凹凸のある器表面とな



第92図 I—R区V層遺物実測図(1/2)

および縦方向の刷毛目。2は自立可能な平底である。底部径7.6cm・現存部最大径19.6cm・現存部高さ10.0cm。外面縦方向の刷毛目・内面は縦方向のナデ。 ϕ 2mm以下主に ϕ 1mm程度の砂粒を非常に多く含む。3は刻目が施されるM字突帯が付される壺の肩部破片である。1と胎土・焼成・調整などは良く似ている。上段と下段の突帯では刻みの形態が異なり施文原体の違いに起因する。上段は刻目の底が平坦で先端が平らな原体が、下段は底が狭く先が薄くなる籠状の原体が用いられたと考える。

『I—U・V区間畦畔部』

【III層】(第115図) 1は外面に楕円押型文が施される口縁部破片。内面は横方向のナデ。3は内外面に原体の異なる山形押型文が横回転で施文される。

【V層】(第115図) 2は外面に楕円押型文が施文される口縁部破片。角閃石を非常に多く含む。

『I—V区』

【II層】(第116図) 1は弥生土器の口縁部破片である。口唇部は丸みを帯びて肥厚する。

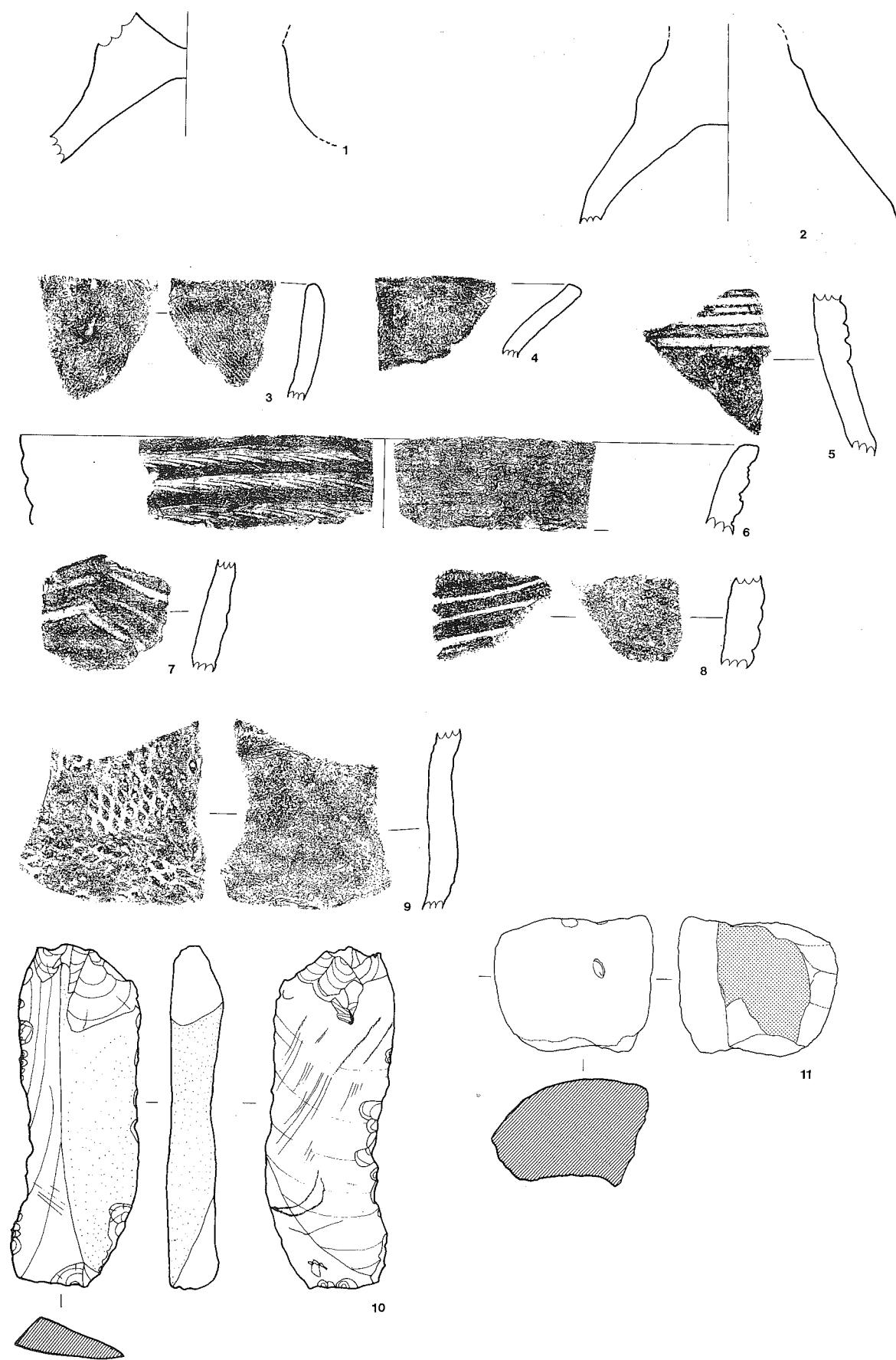
【III層】(第116・112図) 当層出土の土器は2の1個体を除いて全て縄文早期押型文土器である。2は縄文晚期前葉の深鉢の口縁部破片。内外面共に横方向のナデ。3～17は楕円押型文が施文される。3・4・9・16は口縁部で緩やかに外反する器形である。楕円文はバリエーションが豊かで7は菱形または平行四辺形・11は円形・12は穀粒形・17は楕円文の1つ1つが明瞭でなく横のものと繋がったりする。18～22は山形押型文である。18と21と22は文様が良く似ており同一個体の可能性がある。18は内外面に横回転の山形文が施文され緩やかに外反する口縁部である。22は平底となる底部破片。23は外面は左上←→右下方向の回転・内面は横回転で、24は外面に格子目文が施文される。

る。4～6は押型文土器。4は外反気味の口縁部外面に縦回転で山形文を施文し内面は原体条痕+横回転の山形文が施文される。5は外反気味の口縁部外面に楕円文が施文される。6は縦回転で山形文が施文される。

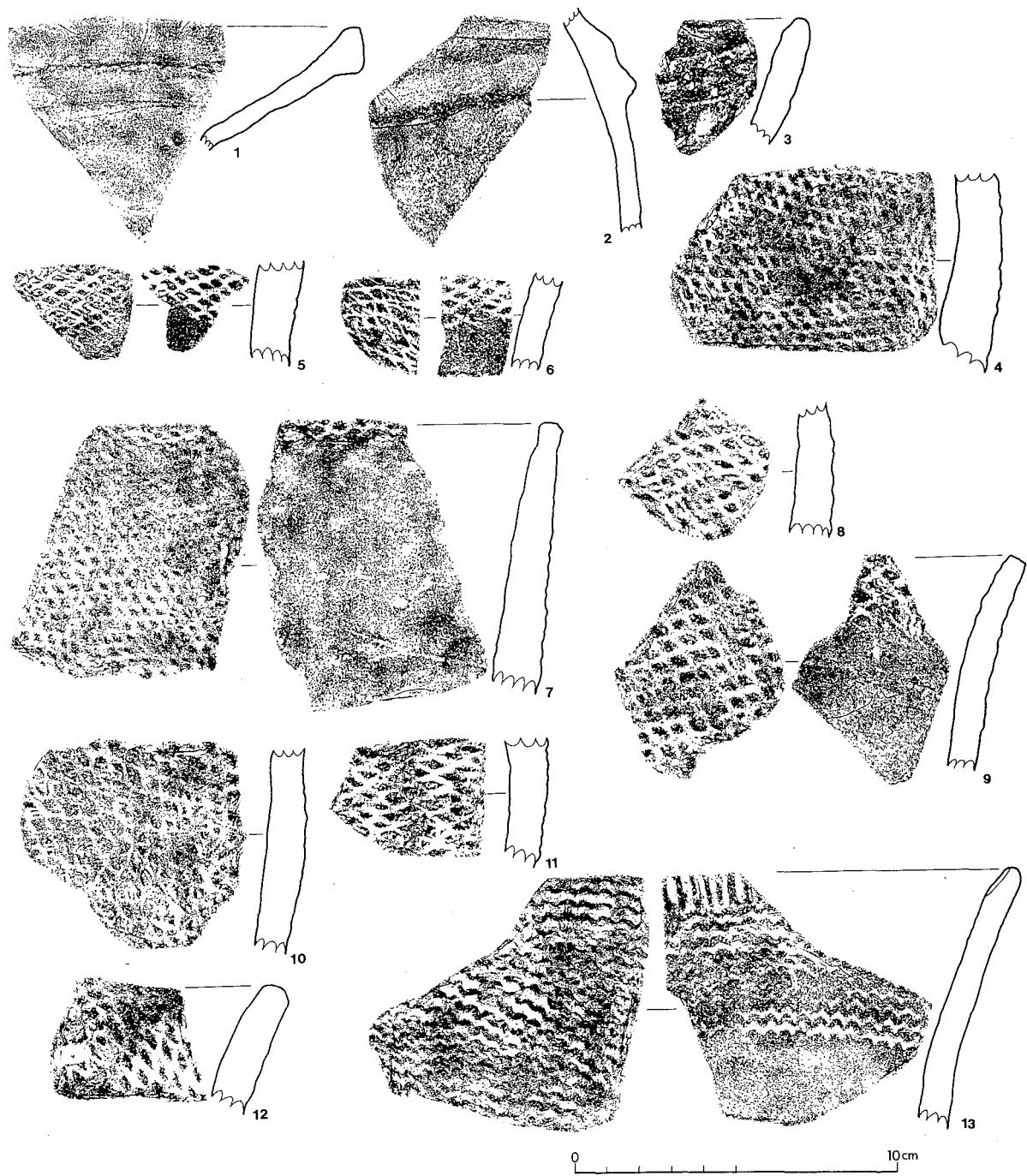
【1号集石遺構遺物】(第109図)

1は弥生後期の甕の上半部で2とは別個体と考える。推定口径22.6cm・推定胴部最大径23.6cm・現存部高さ17.6cm。胴部中位やや上に最大径があり頸部で外反し口縁部は外反気味に開く。口唇部は細いが丸みを帯びる。頸部屈曲部内面は明瞭ではないが稜を有する。内外面共に刷毛目痕が非常に明瞭である。口頸部内外面は横方向の丁寧なナデ。外面頸部～胴部最大部までは左上←→右下方の刷毛目。胴部は外面胴部最大部付近に縦方向のケズリが認められその上から縦方向の刷毛目痕が残る。

肩部以下の内面は左下←→右上方向



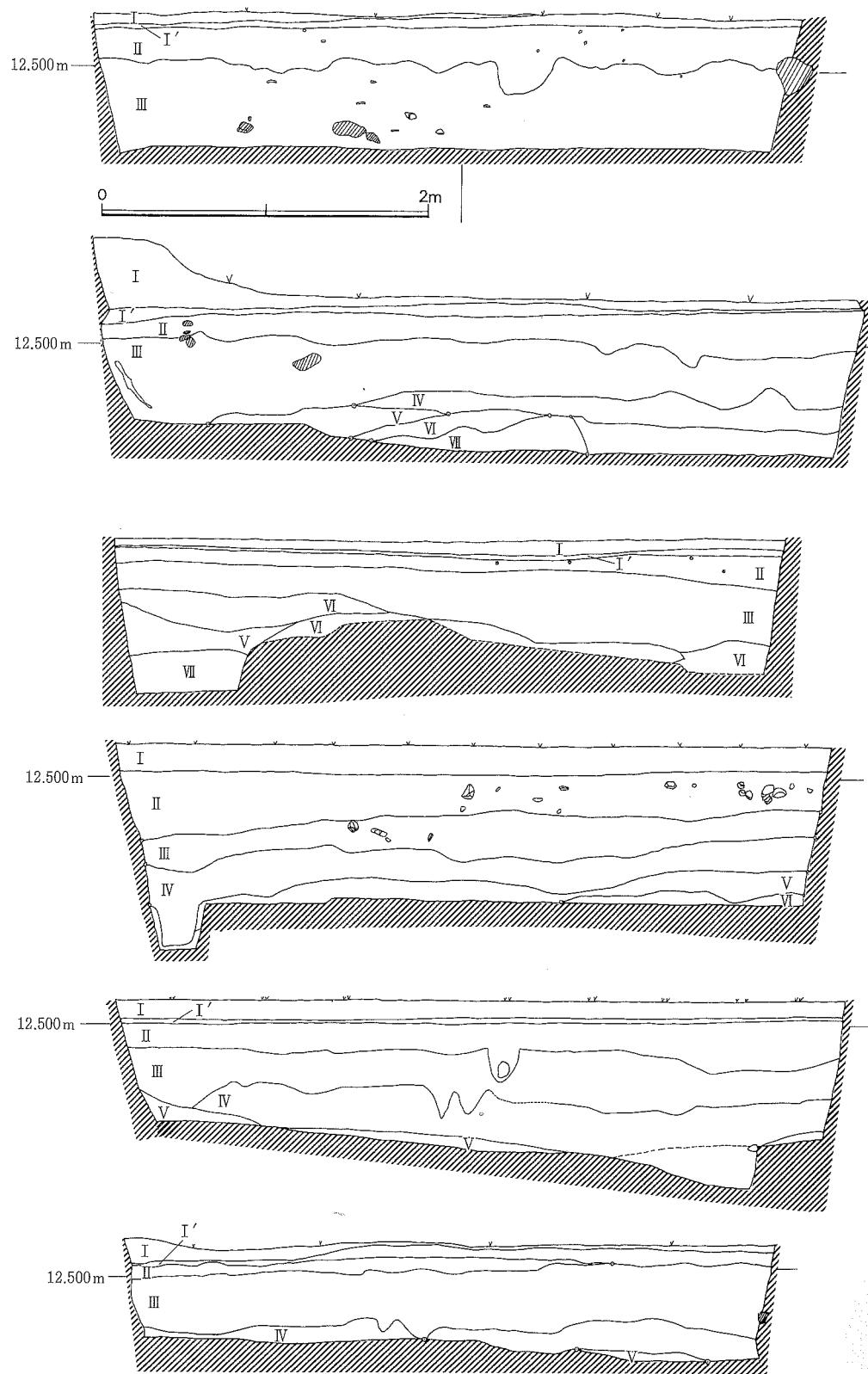
第93図 I—S区層遺物実測図(1~2:II層、3~11:III層、1~9・11:1/2、10:1/1)



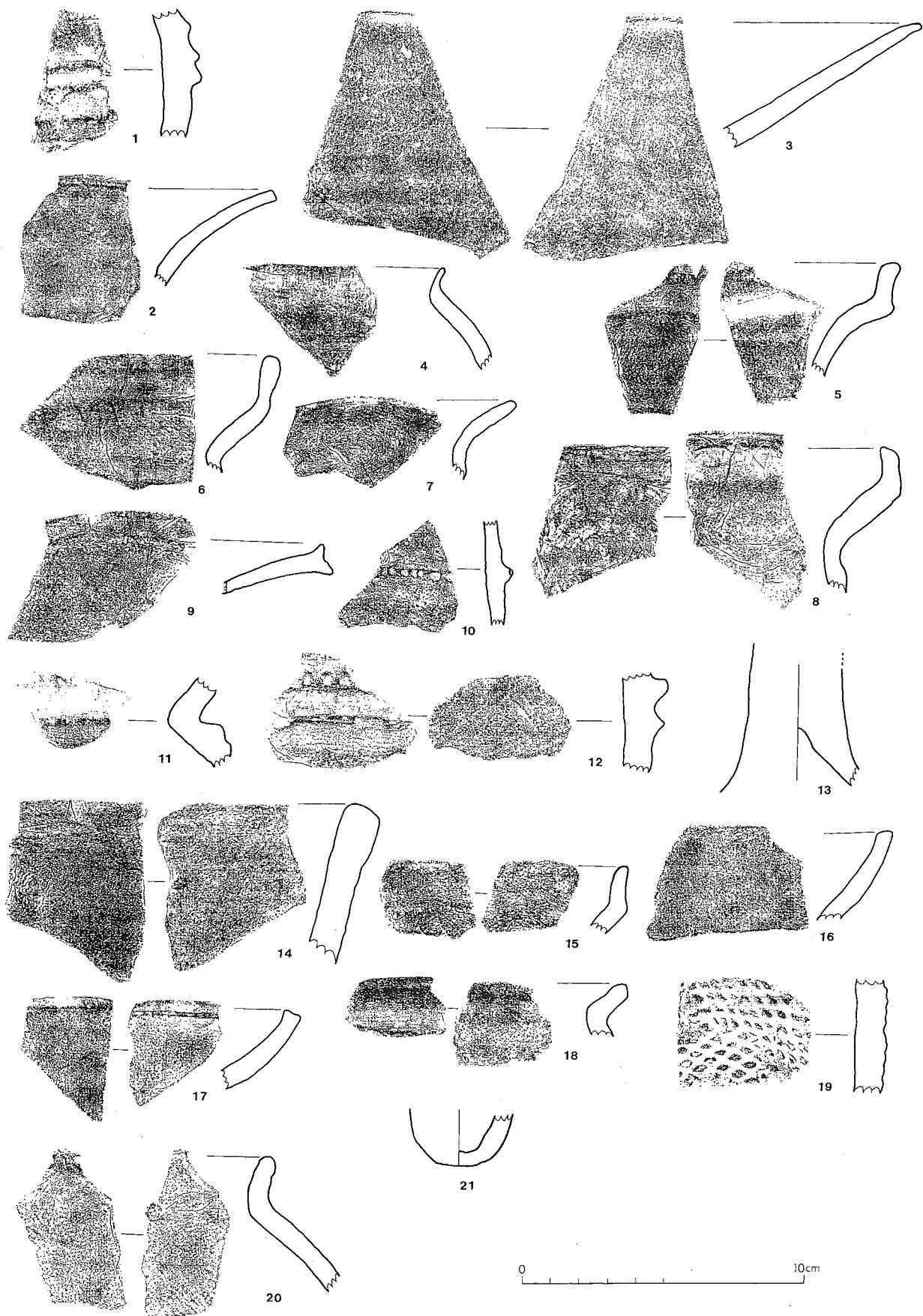
第94図 I—S区IV層遺物実測図(1/2)



第95図 I—S・T区間畦畔部遺物実測図(1/2)(1～3：II層、4：III層)



第96図 I—T・V・W・Y区北壁断面図



第97図 I—T区遺物実測図(1/2)(1:II層、2~19:III層、20~21:西壁III層)

【IV層】(第113図) 当層出土遺物はすべて押型文土器である。1・3・4は楕円文が施される。1・3は口縁部で緩やかに外反するものであり内面は1が縦方向の原体条痕+楕円文、3が横回転の楕円文。2の外面はほとんどが剥落しているが、一部に横方向の山形文がまた内面は縦方向の原体条痕+山形文とも思える押型文が施文される。

『I—V・W区間畦畔部』

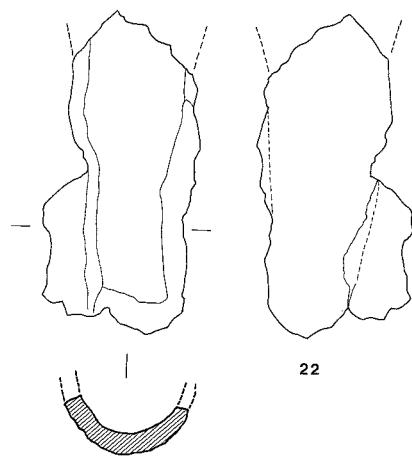
【I—V・W区間畦畔部の集石遺構】(第114図) 位置的にはI—Uの1・2号集石遺構に近接して検出した。遺構の半分程度は道路下にあり全容を確認できないが、I—U区の集石遺構と同様に土壌を多数の礫で覆った遺構である。土壌上面の径は60cm、底面の径50cm、深さ15cm程度であり、弥生後期の土器片を確認した。土壌墓と考えられる遺構でI—U区の遺構とともに小規模の土壌墓群を構成しているものと考えられる。

【II層】(第116図) 1は弥生後期終末～古墳時代前期初頭期の壊部中位付近で屈曲する高壊の口縁部。 $\phi 1\text{ mm}$ いかの砂粒を非常に多く含む。色調橙色。

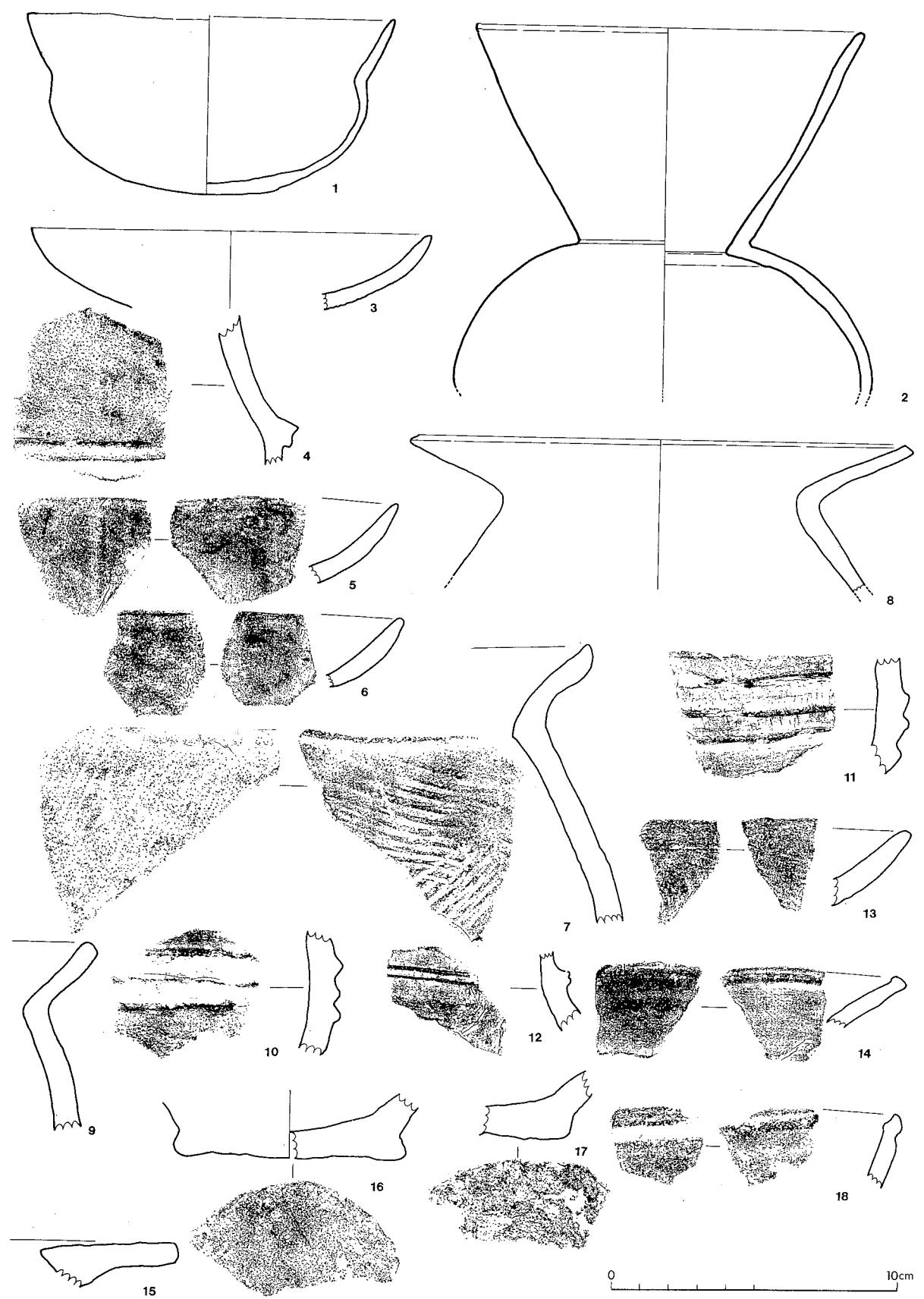
『I—W区』

【III層】(第118・119図) 1～5は土師質土器である。1・4は壊・2は皿・5は碗形の土器である。8は頸部で緩やかに外反する時期不明の口頸部破片。口縁部内外面は横方向の丁寧なナデ。外面頸部以下には縦方向の笠ナデの痕跡が明瞭に残る。頸部内面は調整によって肩部付近の器厚を薄くし屈曲部が稜を持つ。6・9～11・13・15～21は弥生土器である。6は高壊の口縁部で口唇部は平坦に仕上げられる。9は薄手の台付甕の口頸部。内面で稜をもって屈曲する。10・11は器種不明の口縁部。10の外面は縦方向の刷毛目痕が残る。11は内外面共に横方向の丁寧なナデ。10・11共に口唇部の断面形は凹状で11は肥厚し内端部・外端部共に突出する。13・15は口縁部が横方向に開く甕の口縁部。13の口唇部は丸みを帯びる。15も口唇部は丸みを帯びるが上面は平坦となり内側に若干突出する。17は台付甕の台部である。細砂粒を非常に多く含み外面は横方向の丁寧なナデ。16は器種不明であるが縦方向の暗文が認められ丁寧に作られた土器である。18～21は突帯が付されるもの。18は断面三角形の突帯が付され縦方向の刷毛目が残る。19は頂部が丸みを帯びた断面三角形の突帯に1.3個/cmで刻目が施される。20は2個/cmで刻目が施される断面台形状の突帯が付される。外面に縦方向の刷毛目痕が残る。21は1.3個/cmで刻目が施される稜を有しない突帯が付される。左上→右下方向の刷毛目痕が残る。砂粒を非常に多く含む。14は古代の土師器甕。頸部で丸みを帯びて外反し口唇部も丸みを帯びる。口縁部内外面は横方向の丁寧なナデ。外面肩部以下は縦方向の刷毛目痕が残る。内面肩部には左上→右下方向のケズリ痕が明瞭である。22は時期不明の壺の口縁部。口縁部で短く外反し内面に1条の沈線が施される。24は縄文晩期前葉の深鉢の口縁部。23・25～28は押型文土器。23は外面に楕円押型文が施文される緩やかに外反する口縁部。25は連珠文が外面に施文される。26は外面に楕円文が内面に原体条痕のみが施される。27は外面に山形文が28は外面装飾は不明であるが内面に縦方向の原体条痕+楕円文が施される口縁部。7・12は時期・器種不明。12は幅1～2mmの断面三角形の横走沈線が5条残る。

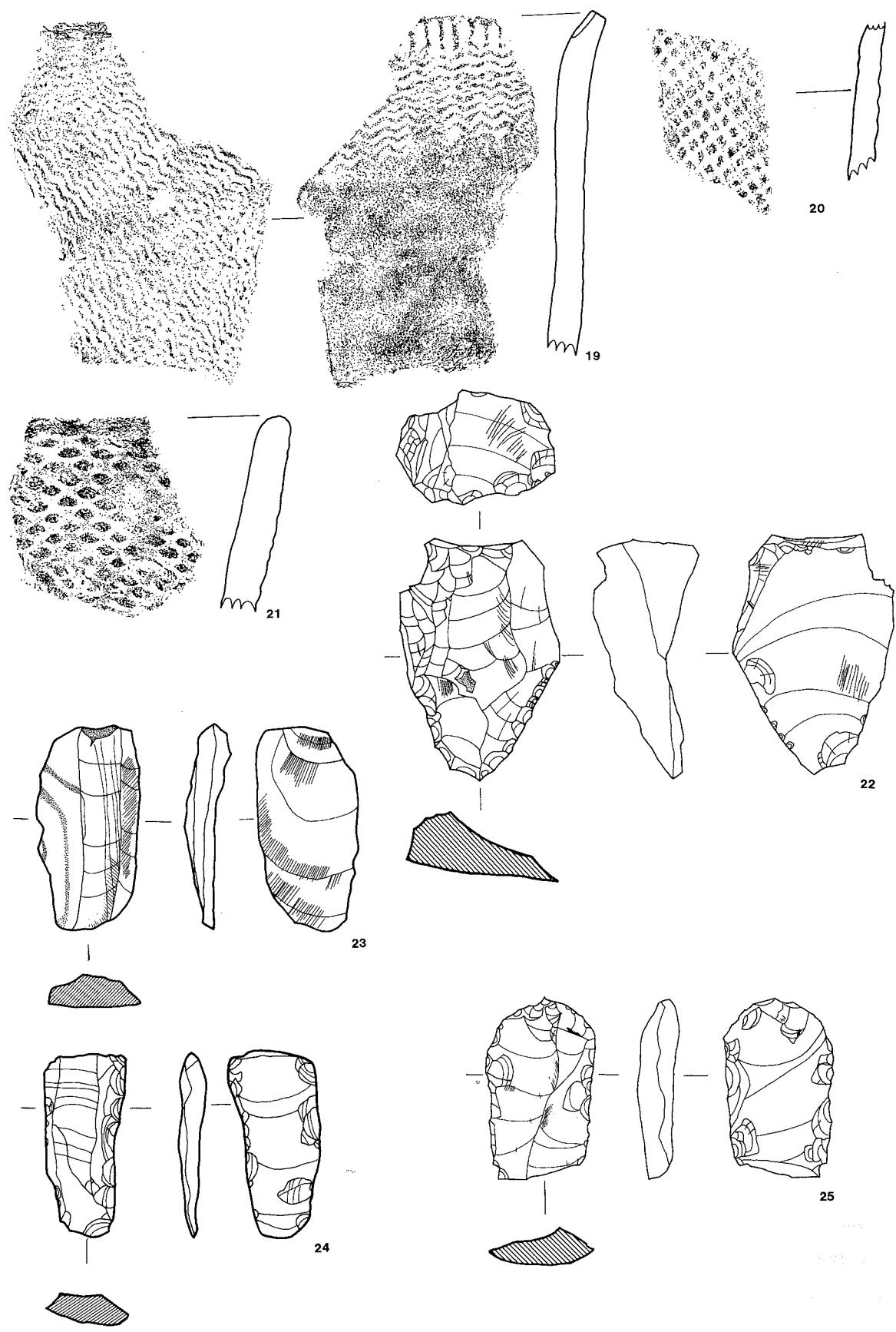
【IV層】(第121図) 1は2条の突帯が付される弥生土器で $\phi 3\text{ mm}$ 以下主に $\phi 1\text{ mm}$ 程度の石英粒を非常に多く含む。突帯上の刻目の有無は器表面の摩滅のために不明。2は外面に縦回転で内面に横回転で山形押型文が施文される。



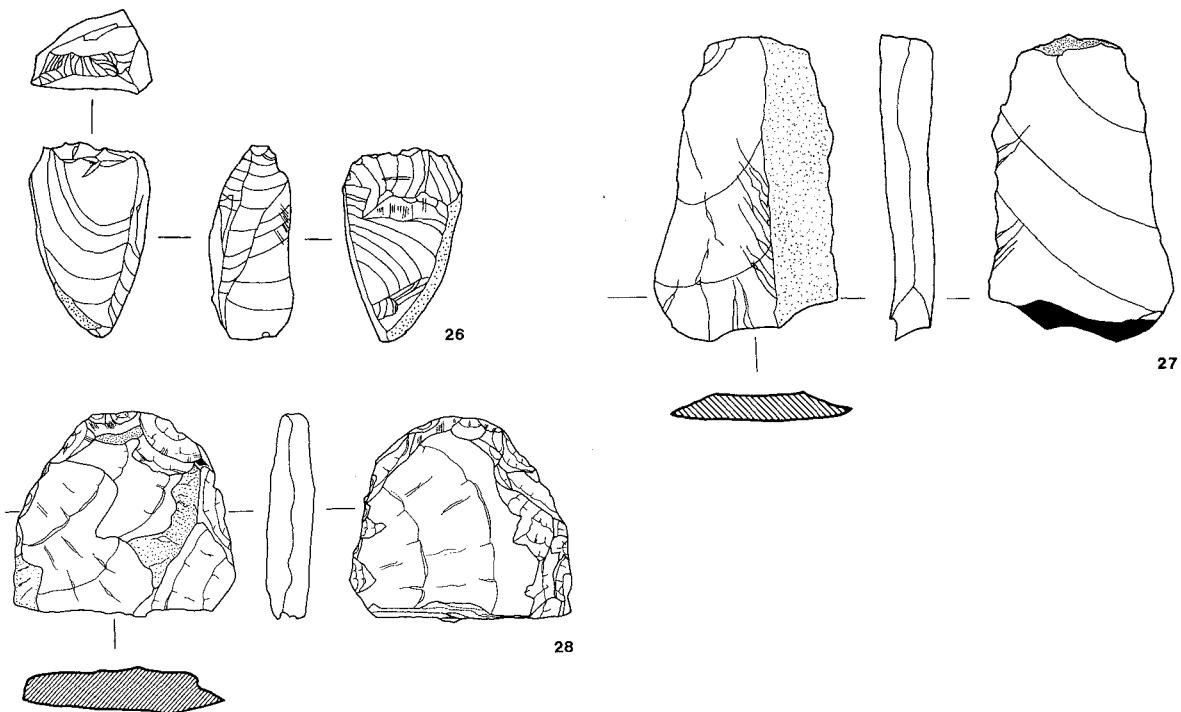
第98図 I—T区III層遺物実測図(1/1)



第99図 I-T区IV層遺物実測図①(1/2)



第100図 I—T区IV層遺物実測図②(19~21:1/2、22~25:1/1)



第101図 I-T区IV層遺物実測図③(26・27:1/1、28:1/2)

【V層】(第121図) 3は古墳時代前期初頭の畿内系有段高坏の屈曲部。内外面共に横方向ナデ。色調は明橙色。5も同時期の甕の口縁部か。内湾しながら開き口唇部が平坦に仕上げられる。内面は横方向のナデ。5は縄文晩期前葉の浅鉢口縁部か。6~9は全て厚手で橢円押型文が外面に施文される体部片。

『I-W・X区間畦畔部』

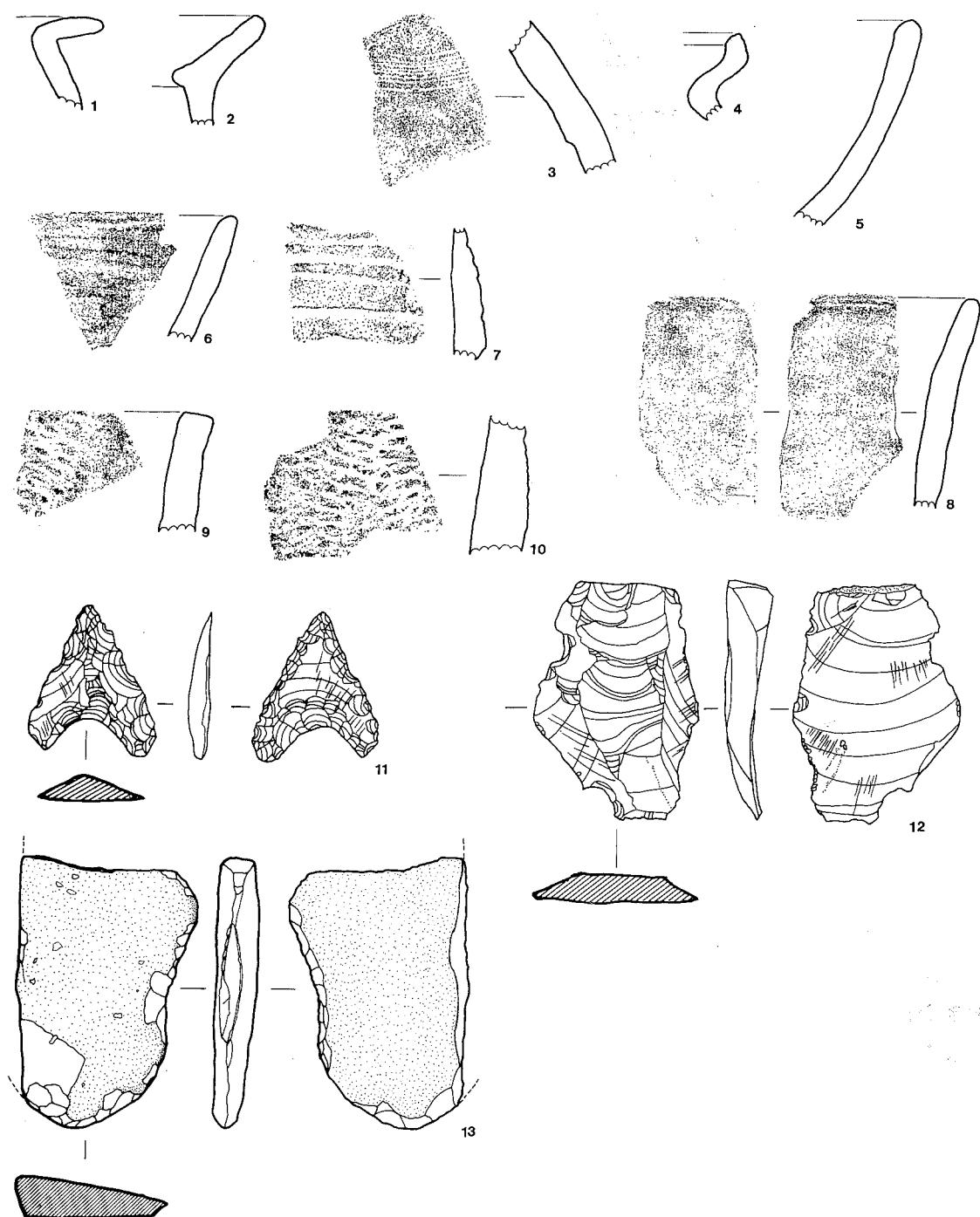
【II層】(第122図) 1は高坏の口縁部か。口唇部が肥厚し凹状を呈し内外方に突出する。内外面共に横方向の丁寧なナデ。2は推定底径が7.0cmの底部破片。胎土は比較的精良である。3は弥生時代の甕の口縁部。口縁部は横方向に開く。口縁部内外面共に横方向のナデ。4は外面に橢円押型文が施される体部破片。5は内外面共に山形押型文が施される体部破片。

【III層】(第123図) 1は外面に大きめの橢円文が施される体部片。口頸部で外反し胴部は円筒形。2は横方向に細長い橢円文が綾杉状に並び、橢円文とも山形文ともとらえられる文様モチーフである。

『I-X区』

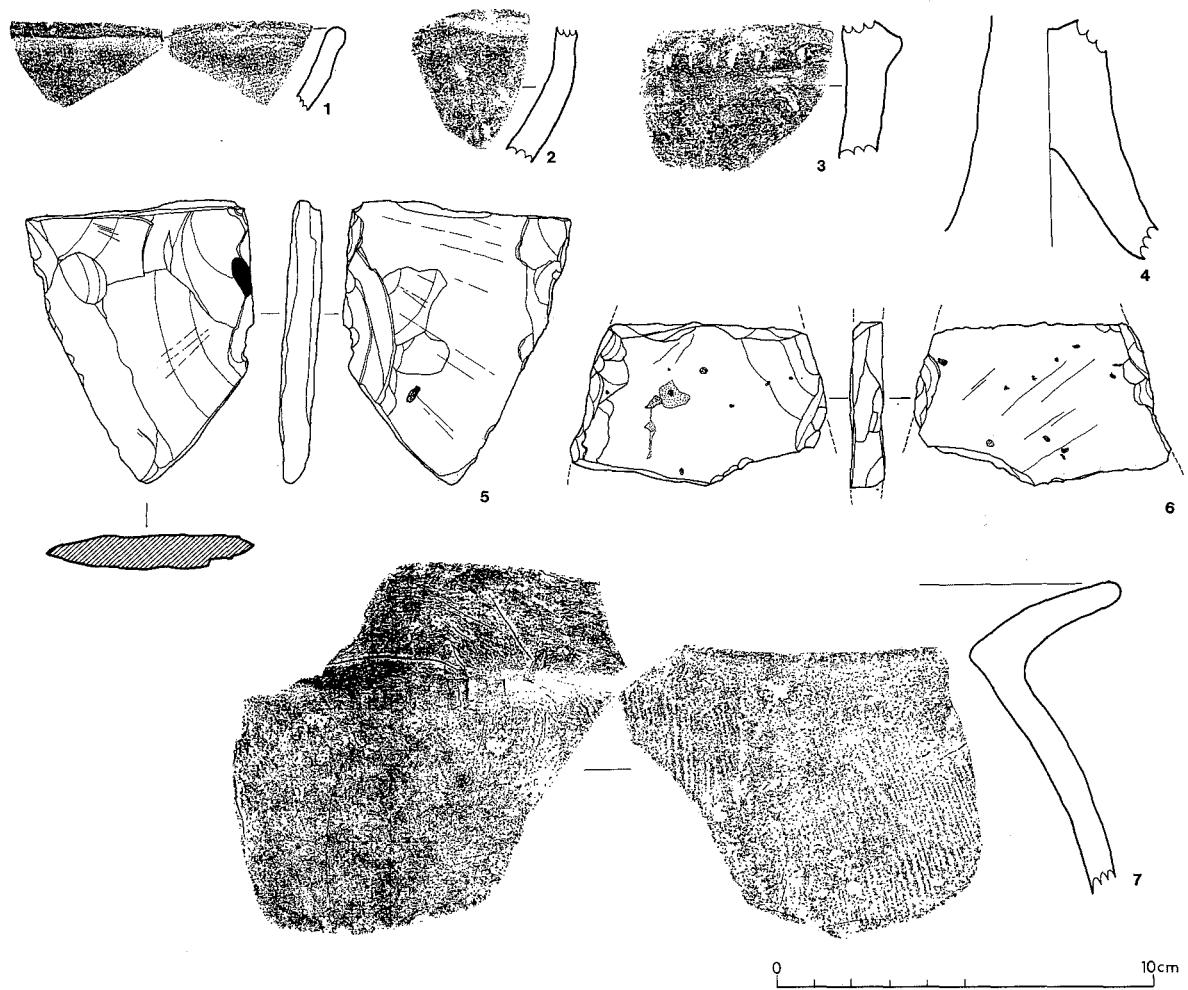
【I-X区集石遺構】(新129図) 一部は道路敷きの下になっているため全体的な形状は不明であるが、長橢円形の土壙を伴った集石遺構である。土壙は現状、上面で最大50cm程度で長さは不明、深さ30cm程度を測る。集石は径10cm程度以下の礫で一部土壙基内に落ちこんでいる。時期を特定できる資料がなく礫元来焼けていることからして炉のような遺構であろうか。

【III層】(第124図) 1と5は弥生時代の底部と高坏の脚柱部である。1は内外面に刷毛目痕が残り胎土は精良である。5は内側に絞り痕が見られ中空構造である。2・3・4は頸部で丸みをもって外反し口唇部も丸みを帯びる古代の土師質の甕(2・3)と鉢(4)である。3は推定口径22.6cm・推定胴部径23.6cm・現存部高さ10.8cmである。2・3は口頸部内外面は横方向の丁寧なナデ。肩部以下は縦方向の刷毛目。内面肩部付近は左下→右上方向にケズリが施された痕跡が認められる。2はφ3mm以下の砂粒を非常に多く含む。色調は明るい橙色。3は角閃石を多く含み粘土帶は内傾接合である。4は古代の浅い鉢であるが口頸部内外面は横方向の丁寧なナデ。外面肩部以下には横または斜め方向の刷毛目。肩部内面は右→左方向のケズリが施された痕跡が認められる。角閃石を多く含み色調は明るい橙色。



第102図 I—T区V層遺物実測図(1~10・13:1/2、11・12:1/1)

【IV層】(第125図) 1・2・4・6~8は弥生時代~古墳時代前期初頭の土器である。1は壺の口縁部か。内外面共に横方向の丁寧なナデ。2は広口壺の口縁部。口唇部断面は凹状を呈し内端部が内側に突出する。内面は横方向のナデ。4は古墳時代初頭の高坏の口縁部である。坏部中位で有段となり緩やかに外反しながら開く。 $\phi 1\text{ mm}$ 以下の砂粒を非常に多く含む。6は $1.7\text{ 個}/\text{cm}$ で刻目が施される、頂部が丸みを帯びた断面三角形の突帯が付されその上位に横走沈線が1条認められる体部破片。7は断面四角形の突帯が付される壺の肩部破片。 $\phi 1\text{ mm}$ 以下の砂粒を非常に多く含む。外面は横方向のナデ。8は $1.8\text{ 個}/\text{cm}$ で刻目が施される突帯が付される体部破片である。突帯は2条残るが2条共に刻目が付されるかどうかは不明である。3・5は古代の頸部で丸みをもって外反する甕の口縁部。3は口唇部を平坦に仕上げ肩部内面はケズリにより器厚が薄い。5は口唇部を丸く仕上げ肩部内面はケズ



第103図 I—T・U区畦畔部遺物実測図(1/2)(1・2:I層、3~6:II層、7:III層)

りにより器厚が薄い。10~18は押型文土器である。10~17は楕円文が施される。10・11は内面にも楕円文が施され同一個体と思われる。12・13・17は同一個体であり口縁部で緩やかに外反する。比較的大きめの楕円文が外面に施され、内面には縦方向の原体条痕と連珠文が施される。16も口縁部で緩やかに外反する器形で外面は縦回転の山形文・内面は原体条痕+横回転の山形文が施文される。18は格子目文が外面に施される。

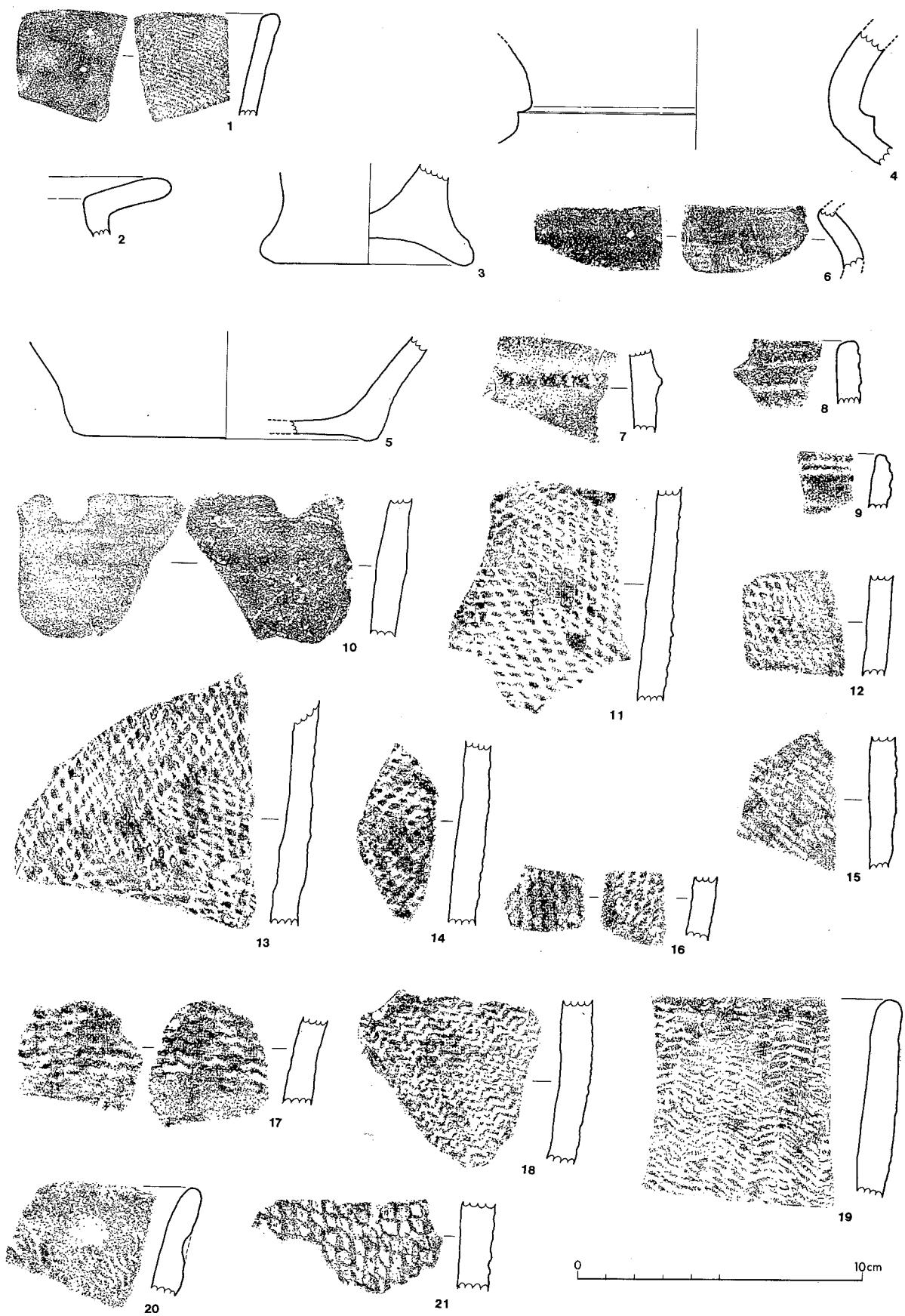
【V層】(第128図) 資料化できた土器は2点とも押型文土器である。1は穀粒状の楕円文が内外面に横方向に施文される。口縁部で緩やかに外反するようである。2は外面は左上→右下回転で、内面は横回転で山形文が施文され口縁部で緩やかに外反する。

『I—X・Y区間畦畔部』

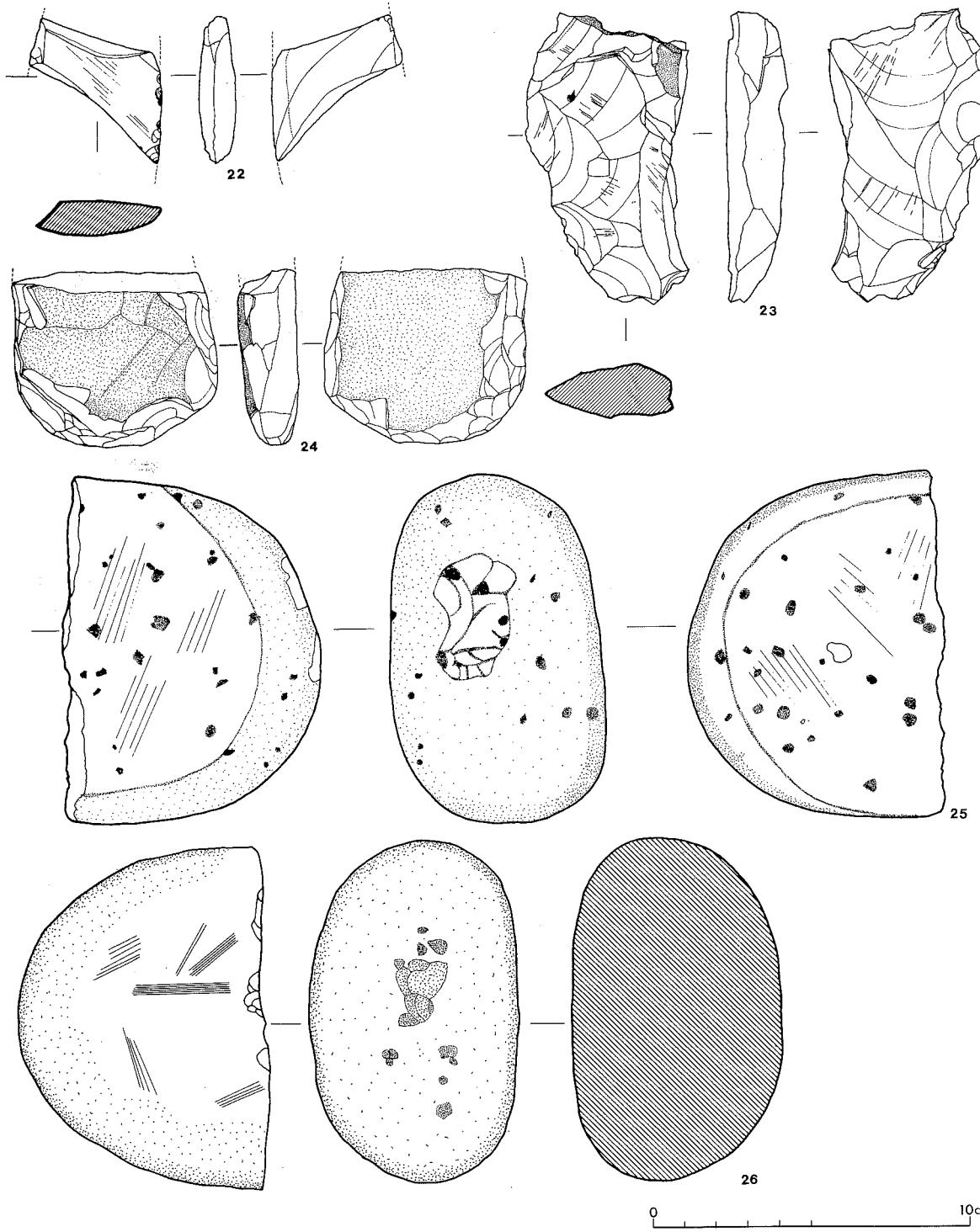
【III層】(第126図) 1は古墳時代前期の畿内系の精製の器台の浅い壺状の上半部である。外面は横方向の丁寧なナデ。2は弥生後期終末～古墳時代前期の高壺の低く開く脚部。外面は縦方向および左下→右上方向の刷毛目痕の後に横方向のナデ。内面は左上→右下方向の刷毛目の後に下端部付近は横方向のナデ。3は弥生後期終末前後の口縁部が外傾する複合口縁壺。外面は横方向の丁寧なナデ。φ0.5mm以下の細砂粒を非常に多く含む。

『I—Y区』

【III層】(第131・132図) 当層では8世紀前半の須恵器および土師器・弥生後期の土器が出土している。須恵器は部位別の破片数から数量算定すると蓋2点・壺身1点・甕2点が出土している。土師質の土器は壺身2点・甕6点である。1は須恵器蓋であり推定口径14.8cm・現存部高さ1.8cm。口縁を



第104図 I-U区III層遺物実測図①(1/2)

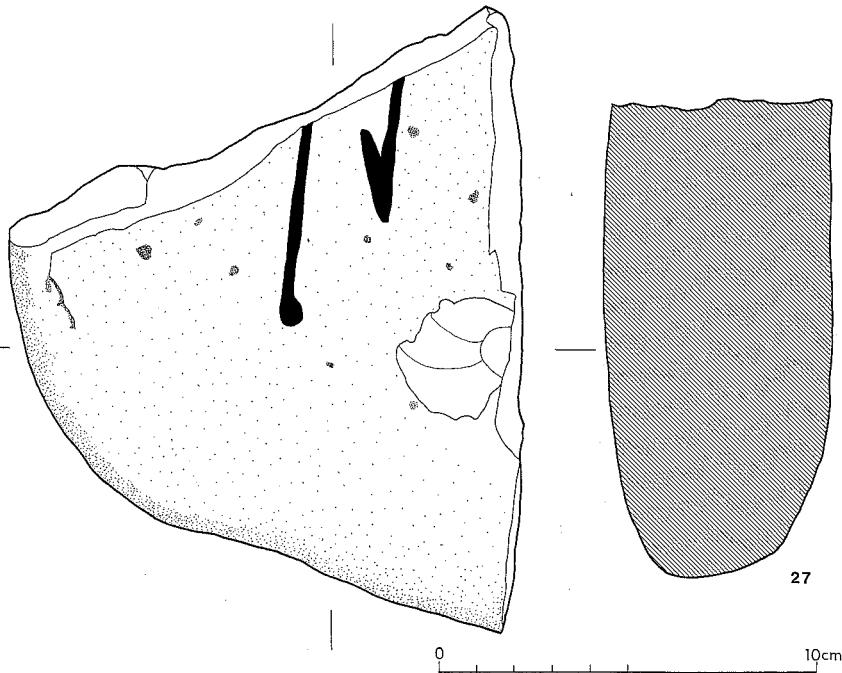


第105図 I-U区III層遺物実測図②(1/2)

下方に直角に折り曲げ先端部を細丸く仕上げる。つまみの有無は不明である。内外面共にナデ調整がなされる。3も須恵器蓋であり器形は1と良く似ている。推定口径16.4cm・現存部高さ2.0cm。口縁を下方に折り曲げ先端部を丸く仕上げる。口縁部の外面に1条の凹線があり上方の粘土の垂れ下がりが認められる。4は須恵器の高台付きの壊身の下半部である。推定底部径10.6cm・現存部最大径15.0cm・現存部高さ5.0cmである。高台は下端部で横方向に突出する形状となる。底部から丸みを帯びて上方に立ち上がり、中位付近でやや外反する。 ϕ 1mm以下の砂粒を非常に多く含む。2・5は甕の肩部破片である。共に外面に格子目・内面に青海波の叩き目が残る。6は須恵器を模した、受部を有するほぼ

完形の土師質の壊身である。口縁部から底部まで残るが受部のかえりは欠損している。底部から若干内湾気味に立ち上がり、肩部で内傾して受部を形成し口縁部は短く直立する。推定口径10.4cm・推定最大径13.2cm・推定底径9.0cm・器高6.4cmである。7は土師質の高台のない壊身であるが、6のような器種に対応する蓋の可能性もある。内面は縦方向のケズリが認められる。

9・10・13~15・第144図3
は甕の口縁部である。9は

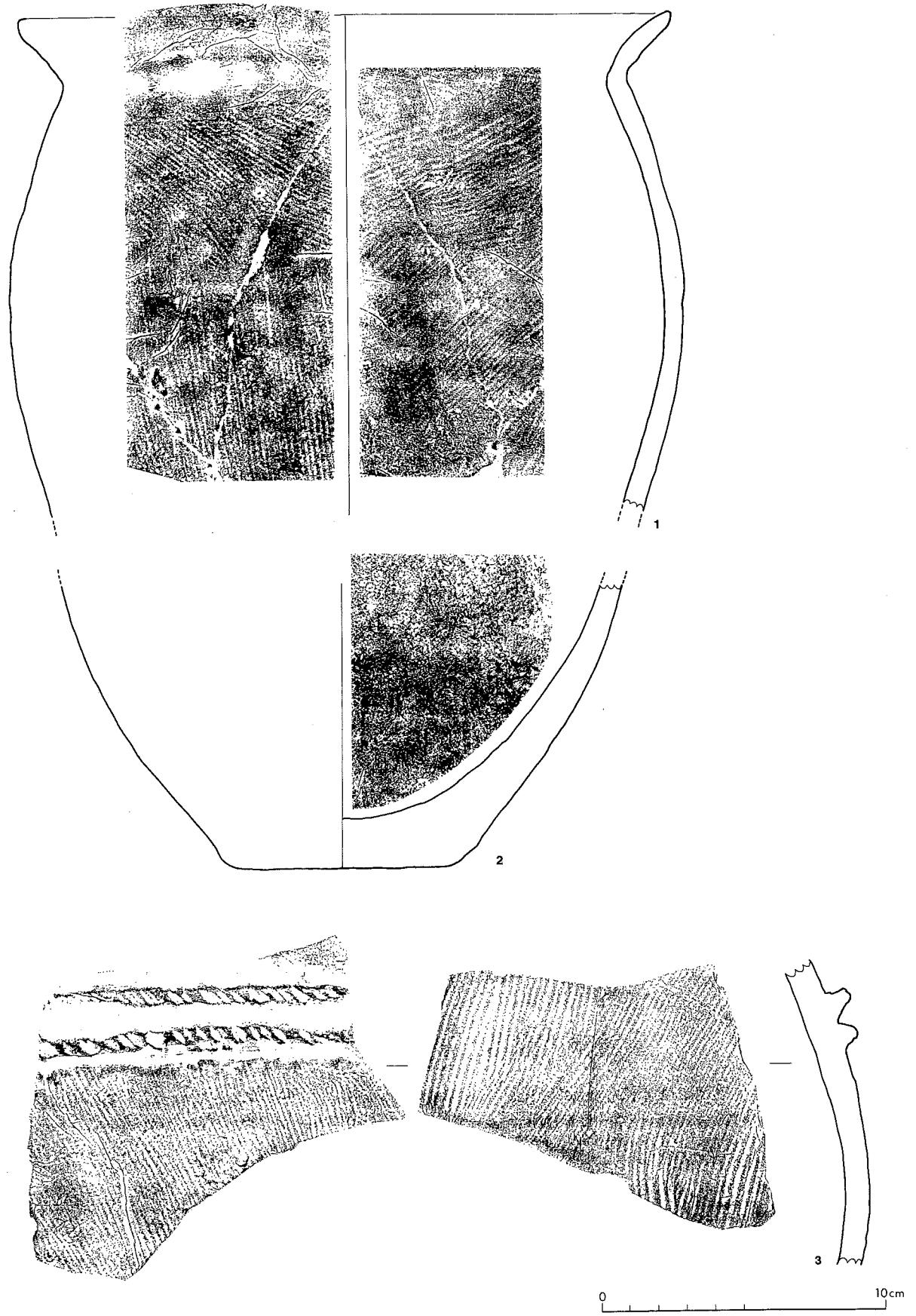


第106図 I-U区III層遺物実測図③(1/2)

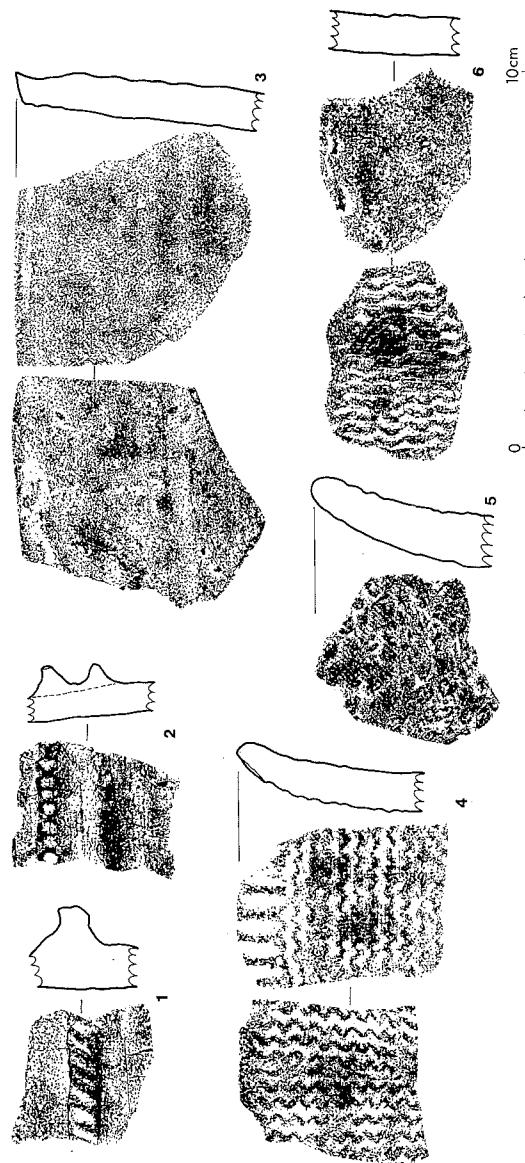
第133図4と同一個体である。頸部で丸みをもって外反し口唇部は丸みをもって肥厚する。外面は横方向のナデ。口縁部内面は横方向のナデ。内面の頸部の一部および肩部には削りの痕跡が残る。 $\phi 1\text{ mm}$ 以下の砂粒を非常に多く含む。10は丸みをもって外反する口縁部であるが、器表面の摩滅のため器面調整は不明である。13は外反する口縁部破片である。口縁部内面は横方向のナデ。内面の頸部屈曲部以下に左下→右上方向へのケズリがなされる。14は頸部で丸みをもって外反する甕口縁部。口縁部内外面共に横方向のナデ。頸部以下にはケズリ痕は見られないが器厚が薄くなっている。 $\phi 1\text{ mm}$ 以下の砂粒を非常に多く含む。15は口頸部が緩やかに外反する甕の口頸部で他に比して薄手である。口頸部外面は横方向のナデ。肩部以下には縦方向の微細な刷毛目痕が残る。内面は口縁部が横方向のナデ。頸部以下は縦方向のケズリの痕跡がある。 $\phi 1\text{ mm}$ 以下の砂粒を非常に多く含む。第133図3も丸みをもって外反する口縁部。口縁部外面は横方向のナデ。内面頸部以下は横方向の刷毛目。弥生土器の破片が5点図化された。8は後期終末期の複合口縁甕の口頸部。屈曲部外面は突帯状に張り出す。外面および口縁部内面は横方向のナデ。頸部内面は左下→右上方向のナデ。 $\phi 1\text{ mm}$ 以下の砂粒を非常に多く含む。11は広くひろがる高壊の中空構造の脚部であり $\phi 2\text{ mm}$ の刺突が縦に6個・左右2列に施される。12は台付甕の底部および台部破片。台部は横方向の丁寧なナデ。第133図1は器種不明の口縁部破片。口唇部は平坦に仕上げられる。外面は縦方向・内面は横方向の刷毛目痕が明瞭に残る。第133図2は断面三角形の突帯が付される体部破片。突帯の上下は横方向のナデ。その下には縦方向の微細な刷毛目調整がなされる。北有馬町今福遺跡に類例があり、報告では搬入品の可能性が指摘されている(宮崎1986)。

【IV層】(第134図) 1は中世の東播系の須恵質の鉢である。口唇部が肥厚し凹状になる。2は布留系の甕の口頸部である。頸部で急激に外反して内湾気味に立ち上がり口唇部は内端部が内方に突出し平坦に仕上げられる。

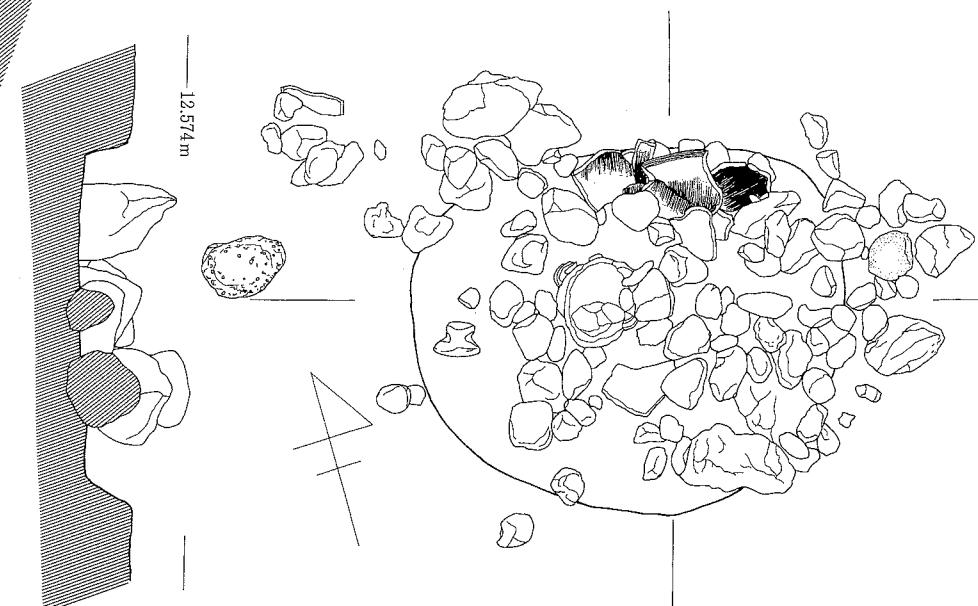
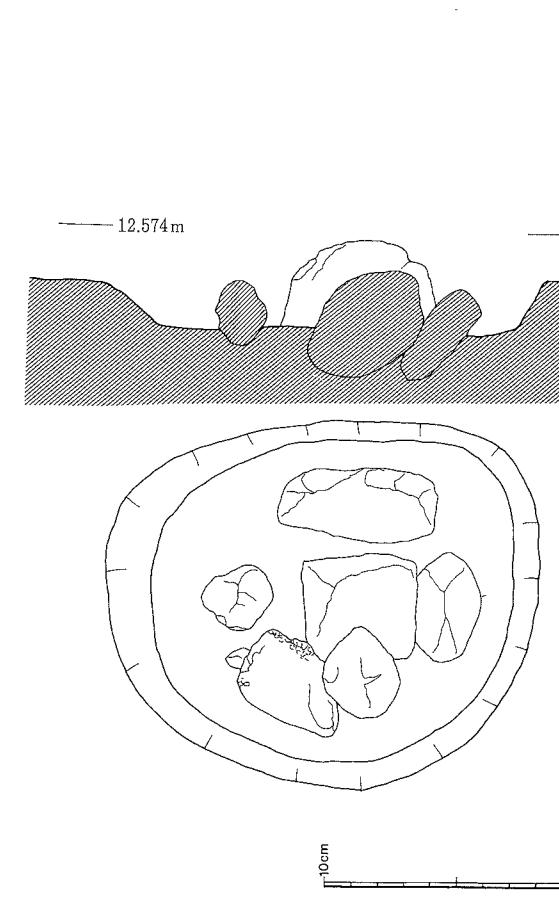
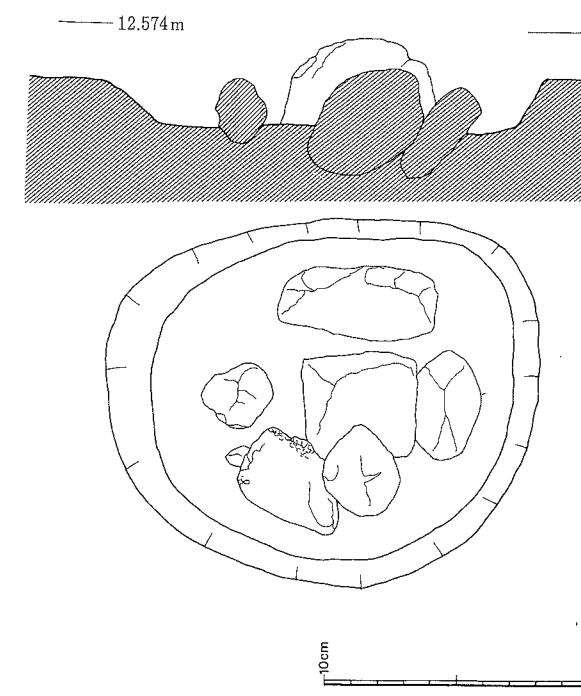
【V層】(第135図) 1・2は8世紀前半の須恵器の蓋。3も8世紀前半の須恵質土器の口縁部で口唇部は凹状に仕上げられ下端部が突出する。4は丸みをもって外反する甕の口縁部。内外面共に横方向のナデ。5は弥生後期終末期の複合口縁甕。内外面共に横方向のナデ。6は縄文早期の押型文土器。厚手で円筒状と考えられる器形で、外面に加えて口唇部にも異なる原体で楕円文が施文される。



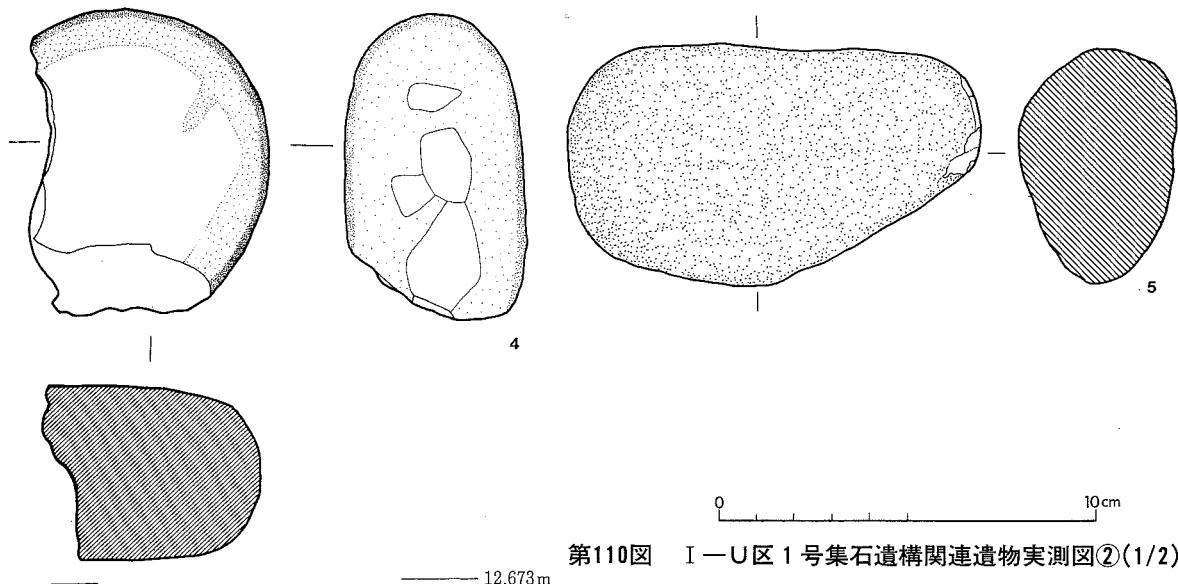
第107図 I-U区1号集石遺構関連遺物実測図①(1/2)



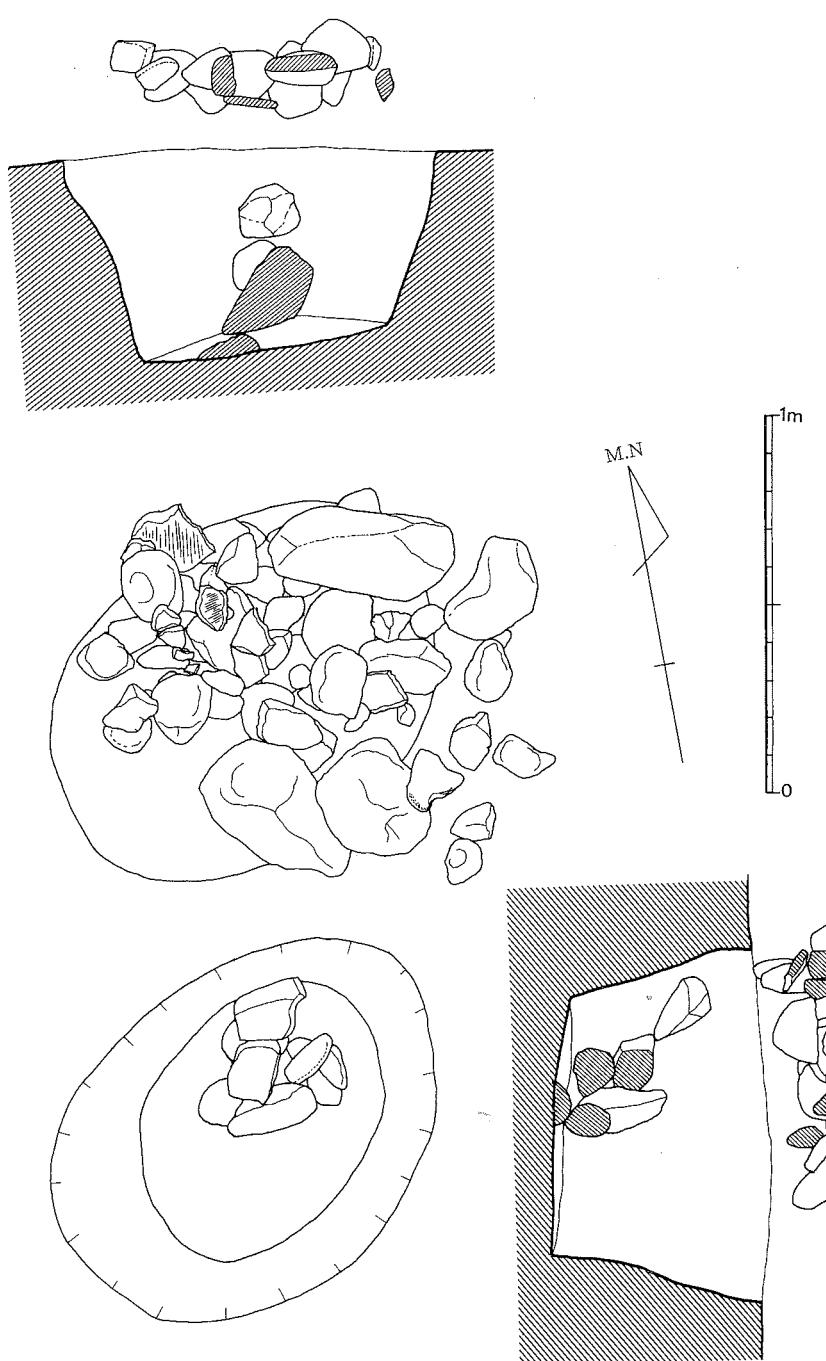
第108図 I-U区IV層遺物実測図(1/2)



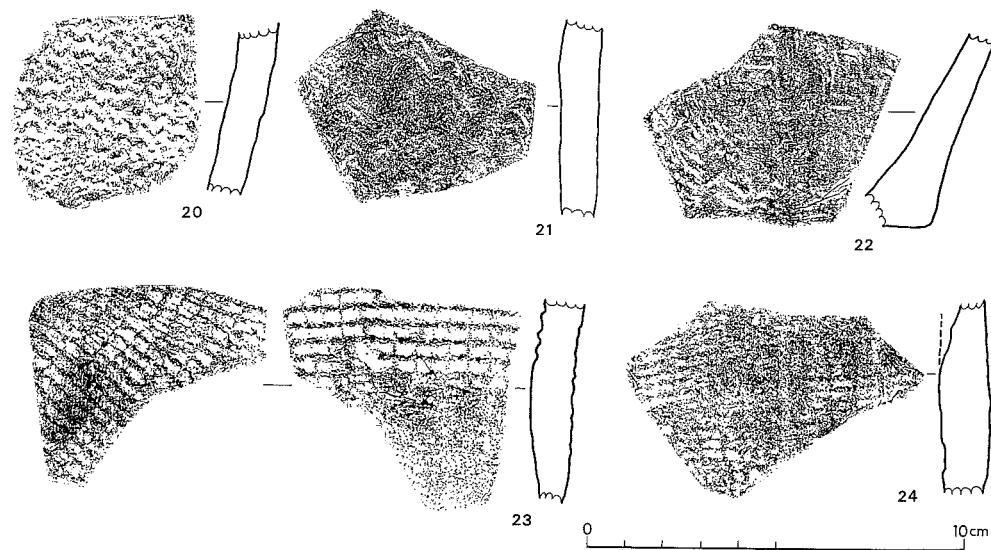
第109図 I-U区1号集石遺構実測図(1/2)



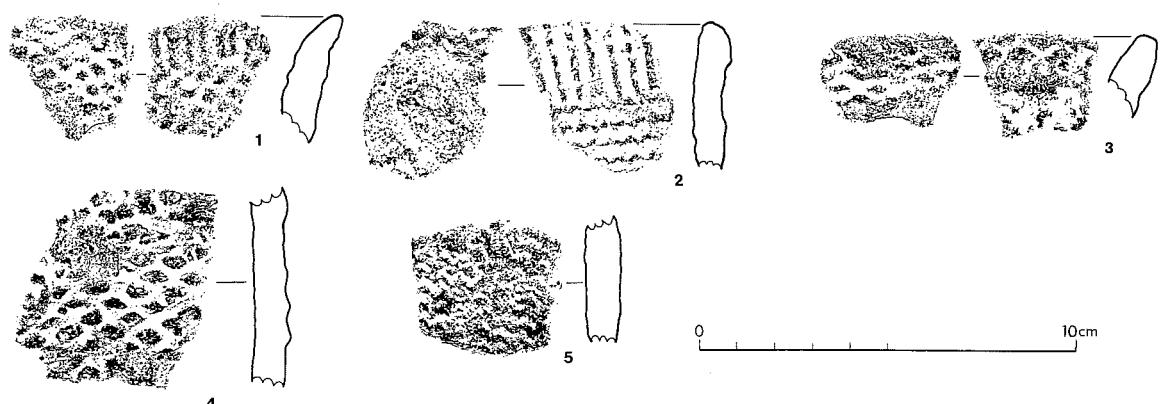
第110図 I-U区1号集石遺構関連遺物実測図②(1/2)



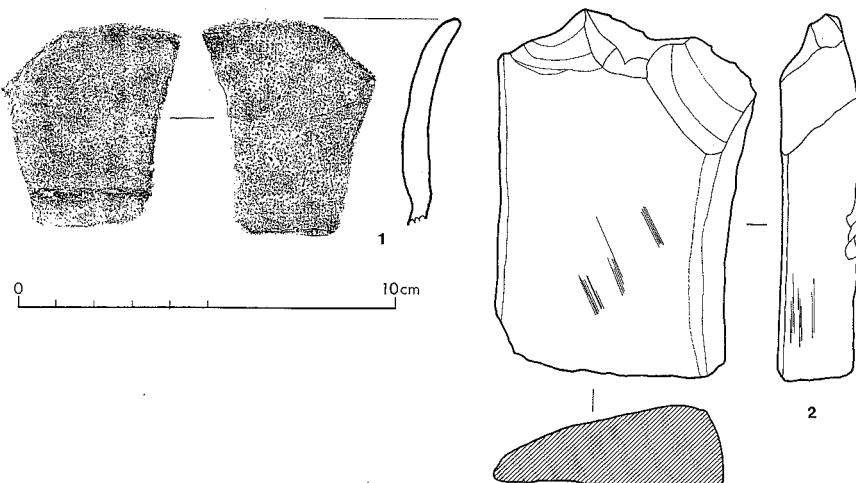
第111図 I-U区2号集石遺構実測図(1/2)



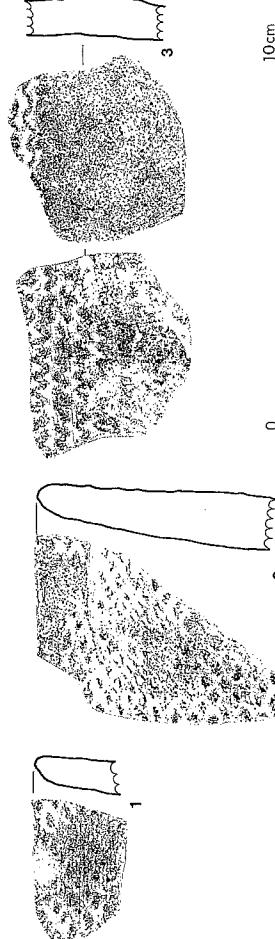
第112図 I—V区III層遺物実測図(1/2)



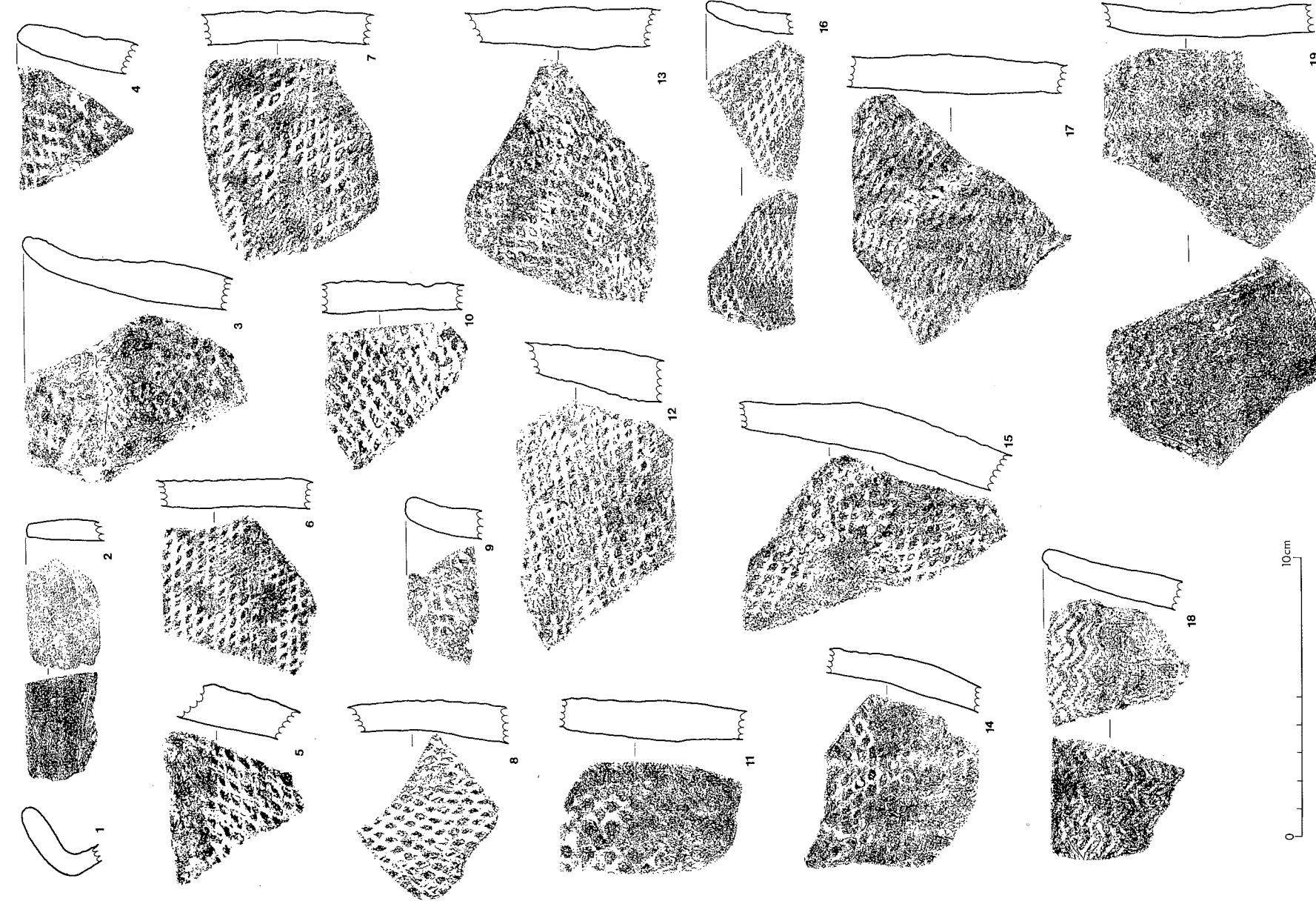
第113図 I—V区IV層遺物実測図(1/2)



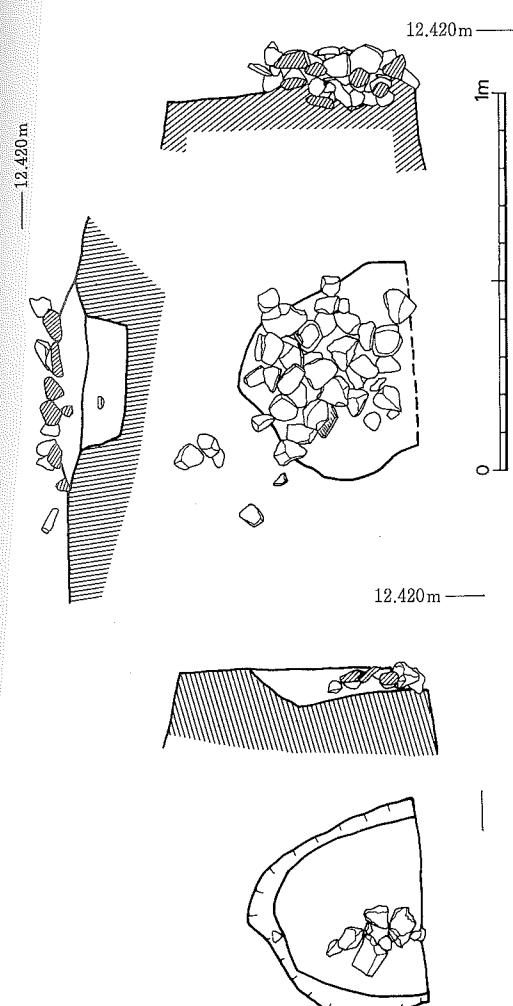
第114図 I—V・W区間畦畔部II層・集石遺構遺物実測図(1/2)



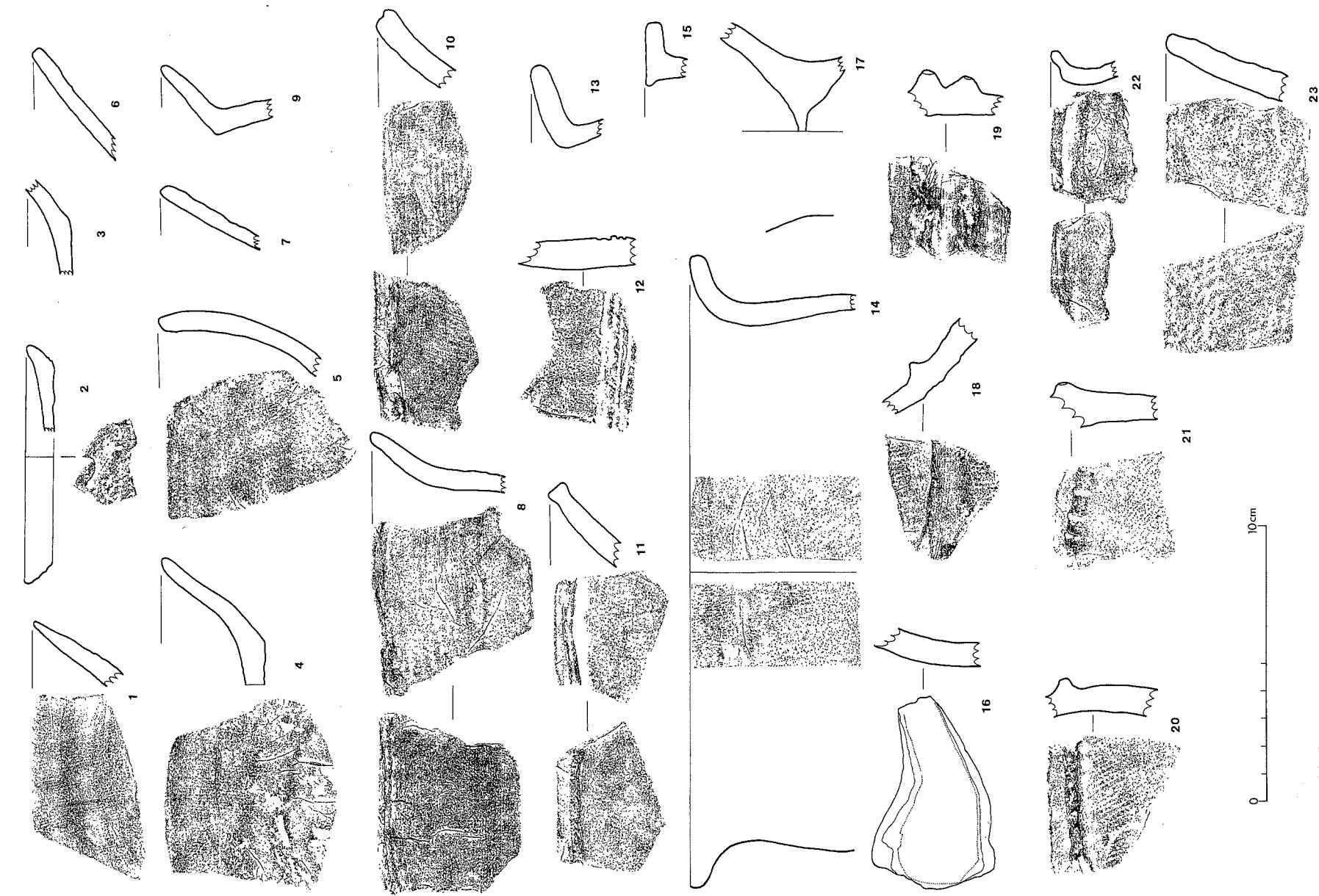
第115図 I—U・V区間壁部遺物実測図(1/2)(1・3：Ⅲ層、2：Ⅴ層)



第116図 I—V区遺物実測図①(1/2)(1：Ⅱ層、2～19：Ⅲ層)



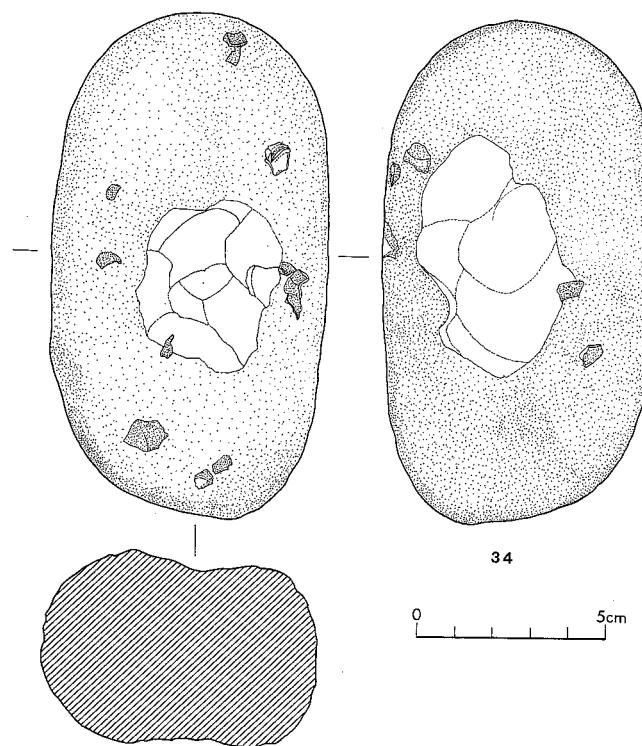
第117図 I—V・W区間畦畔部集石遺構実測図



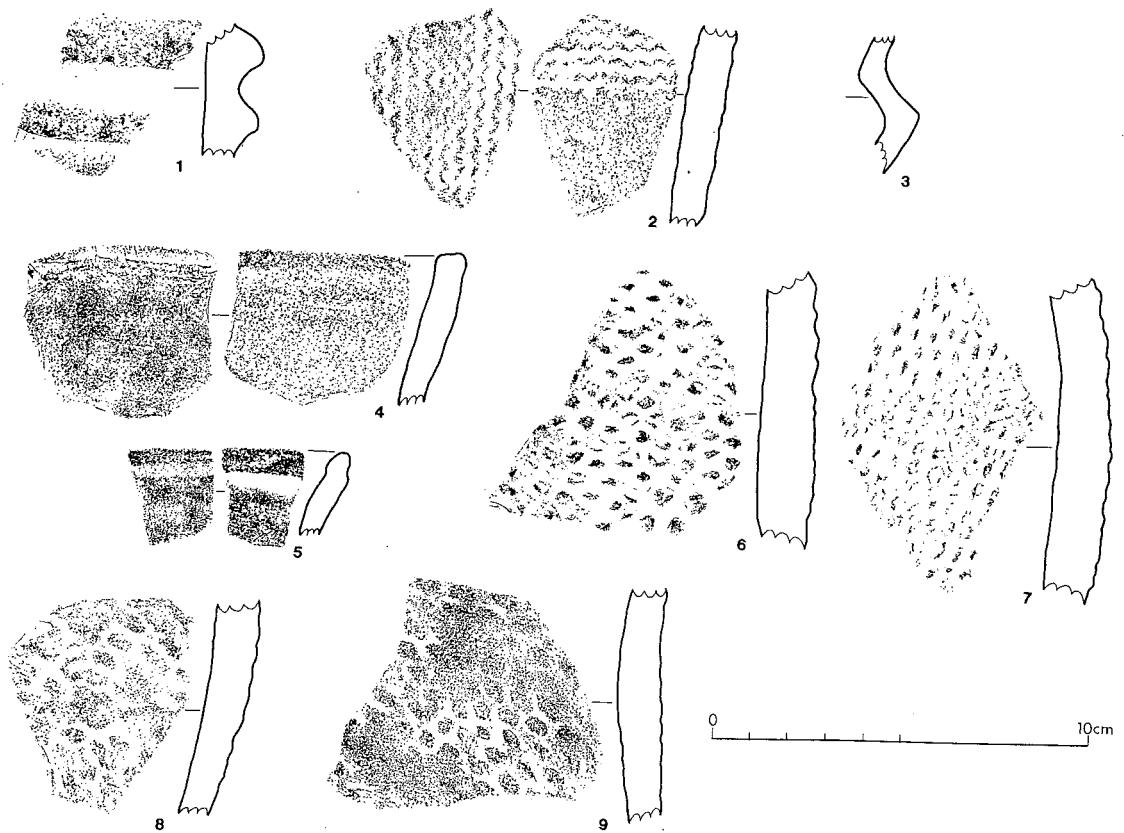
第118図 I—W区III層遺物実測図①(1/2)



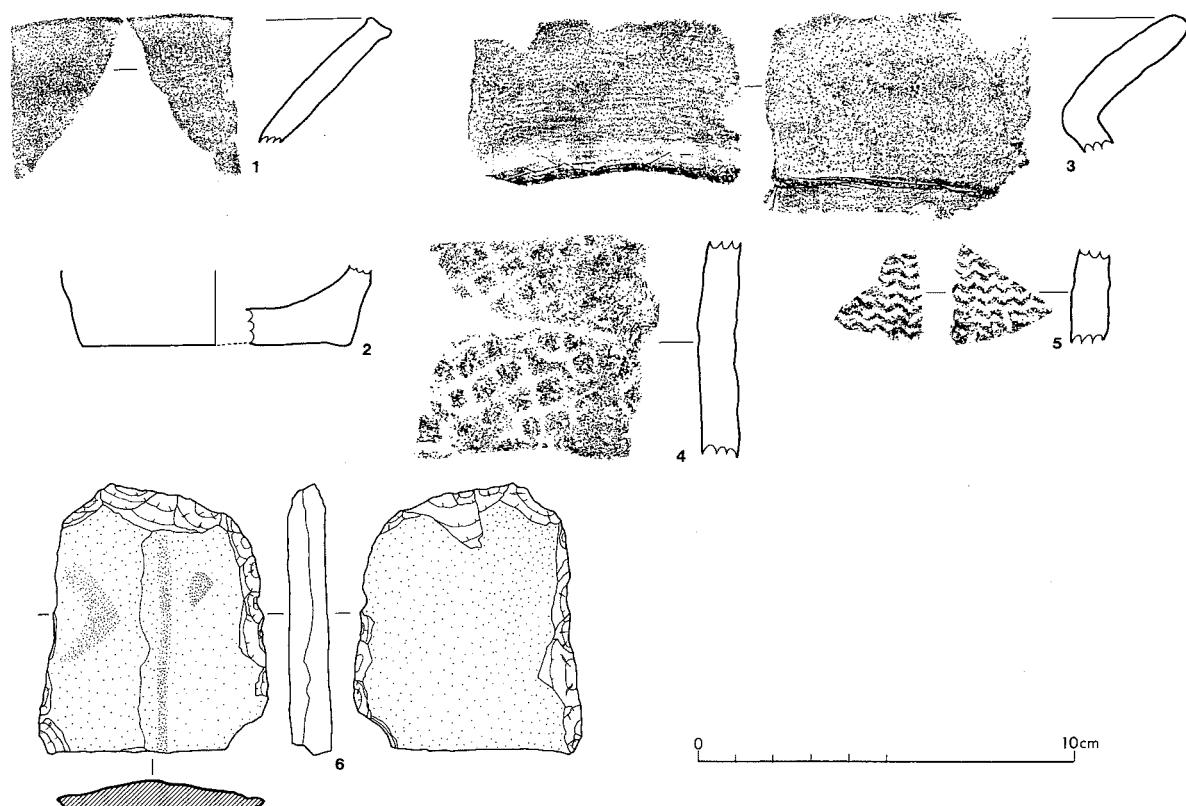
第119図 I-W区III層遺物実測図②(24~28・31~33:1/2、29~30:1/1)



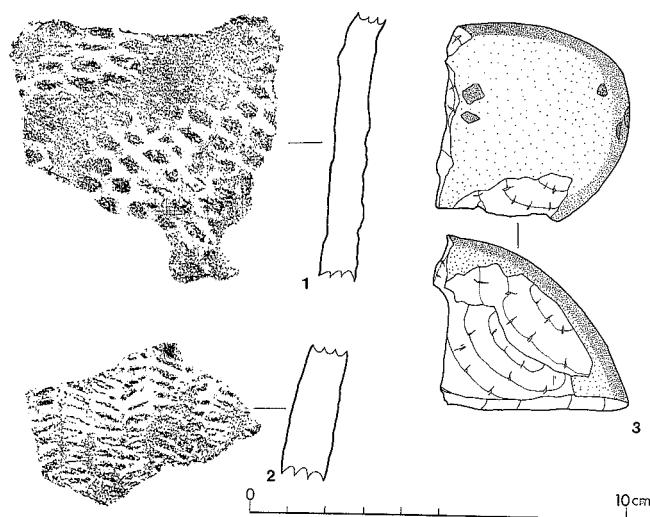
第120図 I-W区III層遺物実測図③(1/2)



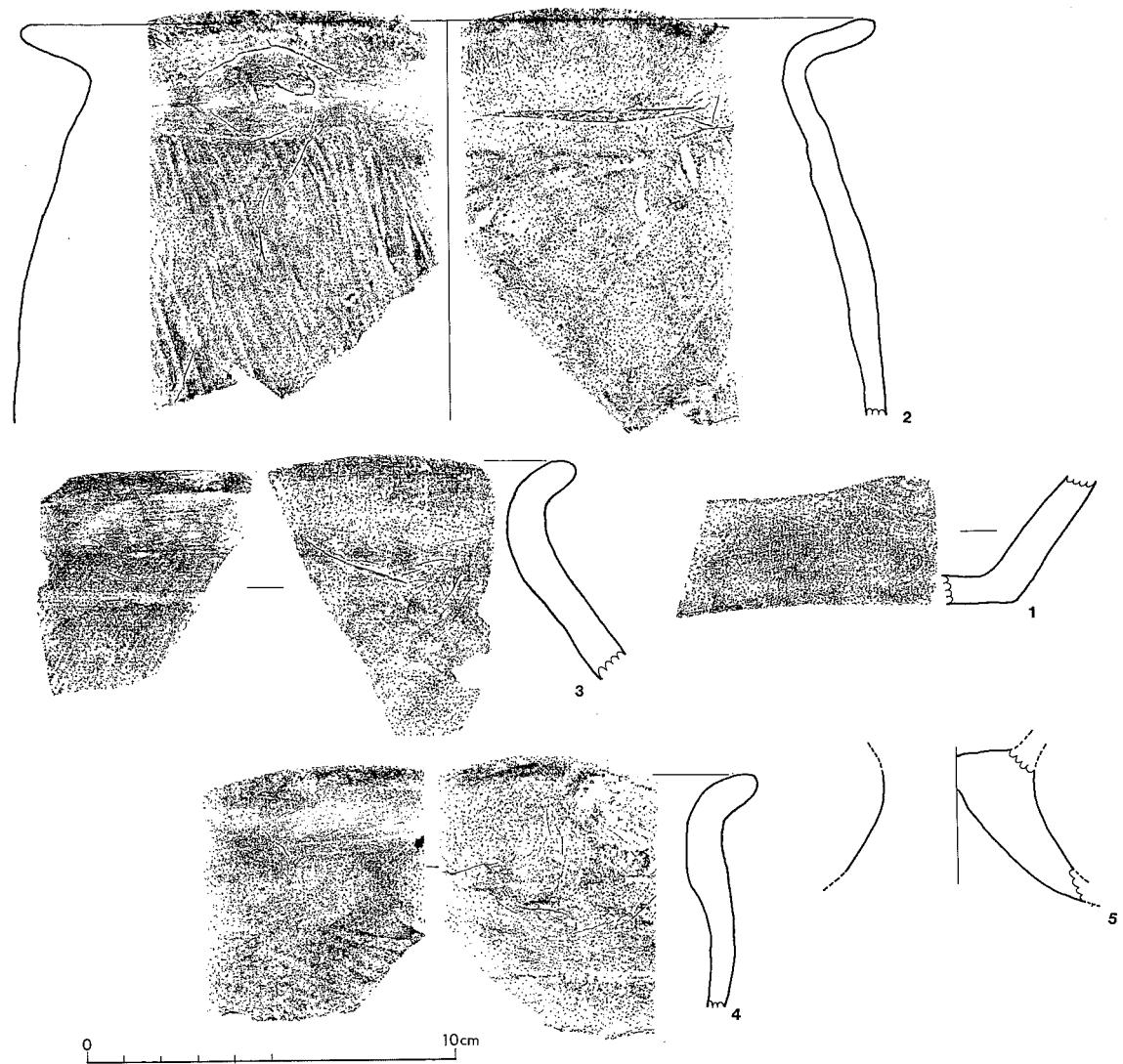
第121図 I-W区遺物実測図(1/2)(1～2：IV層、3～9：V層)



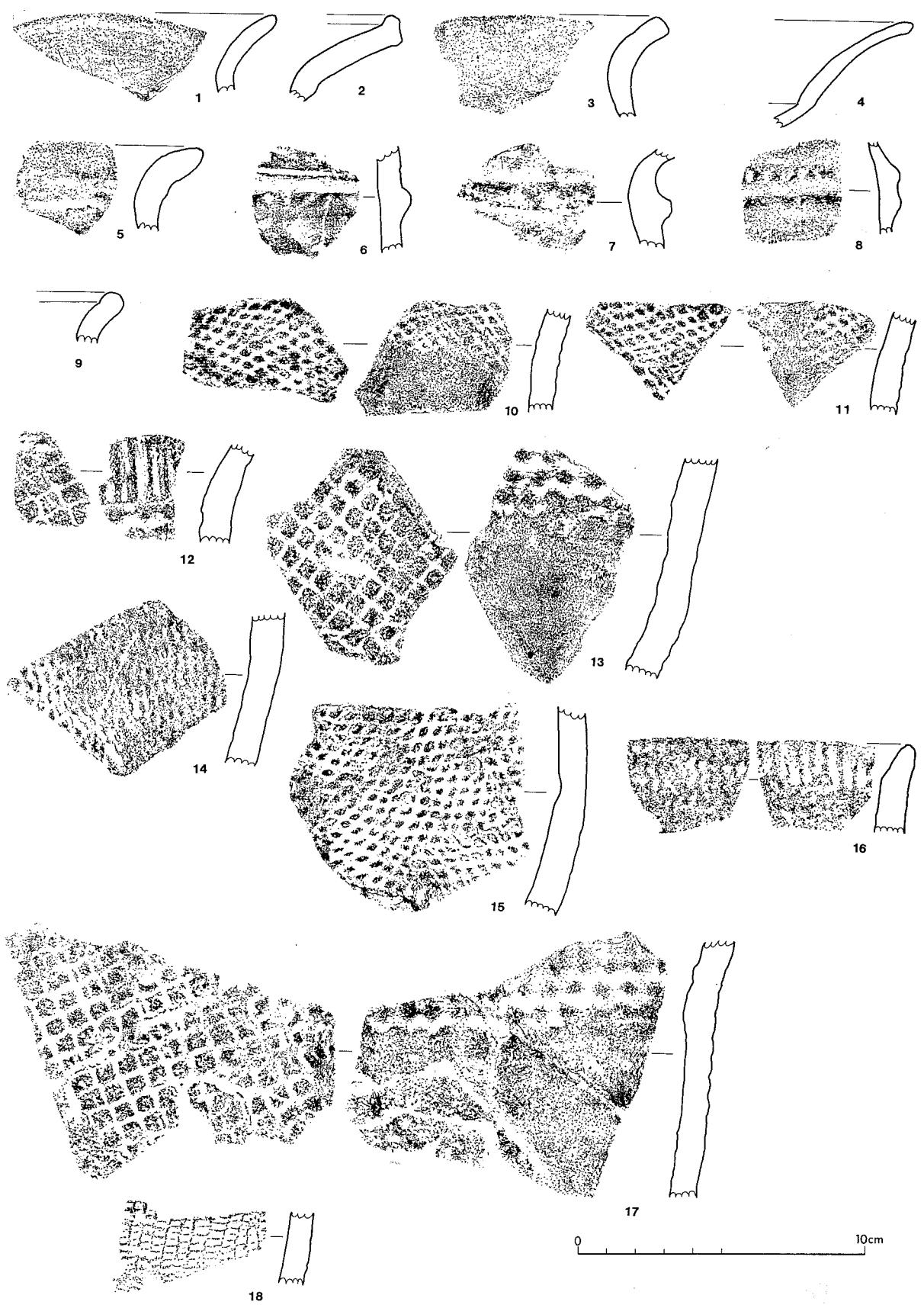
第122図 I—W・X区間畦畔部II層遺物実測図(1/2)



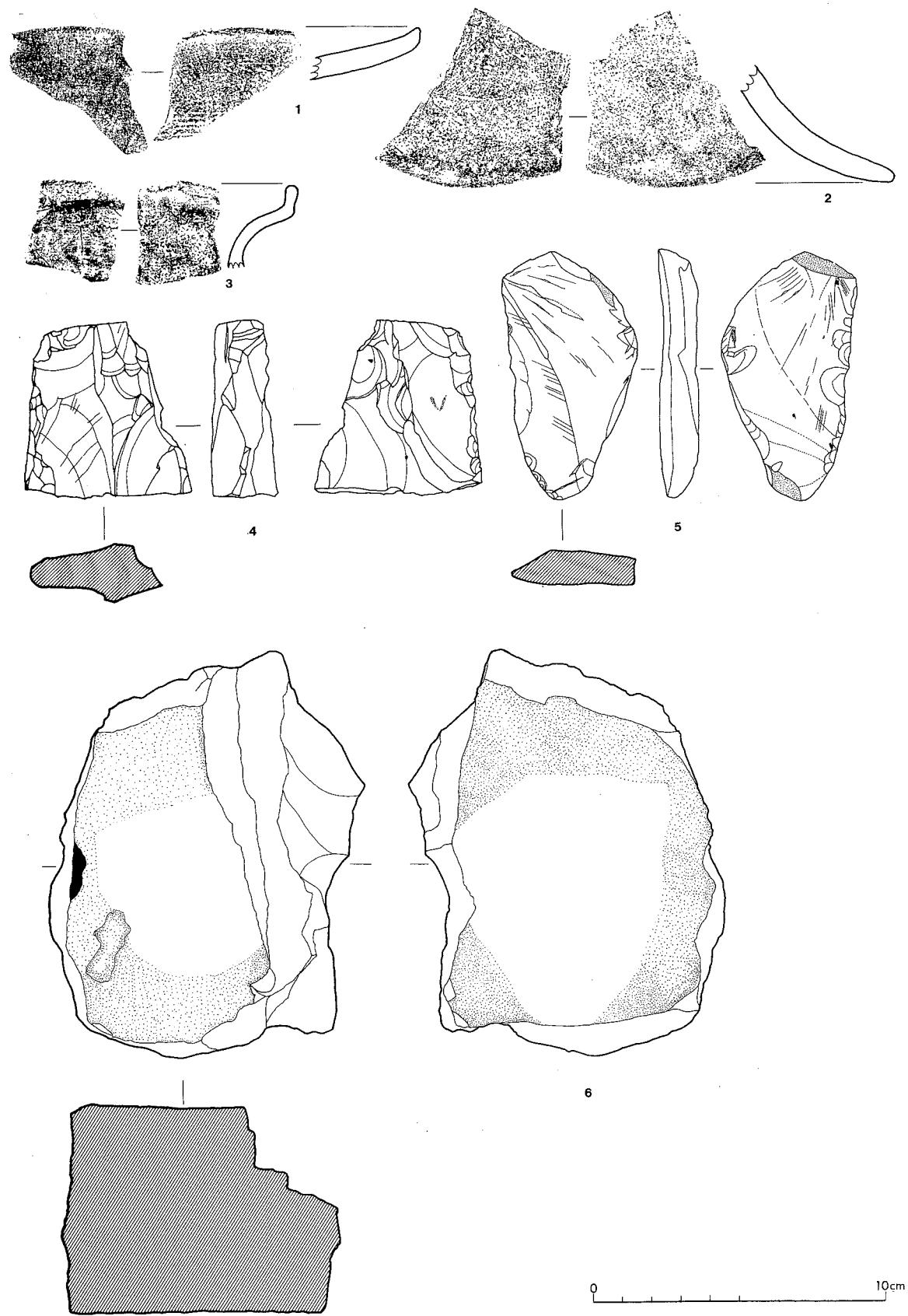
第123図 I—W・X区間畦畔部
III層遺物実測図(1/2)



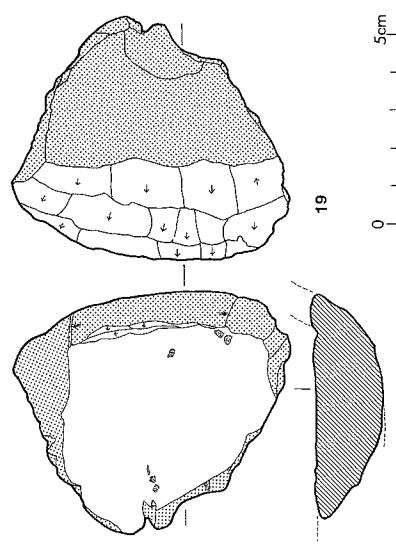
第124図 I-X区III層遺物実測図(1/2)



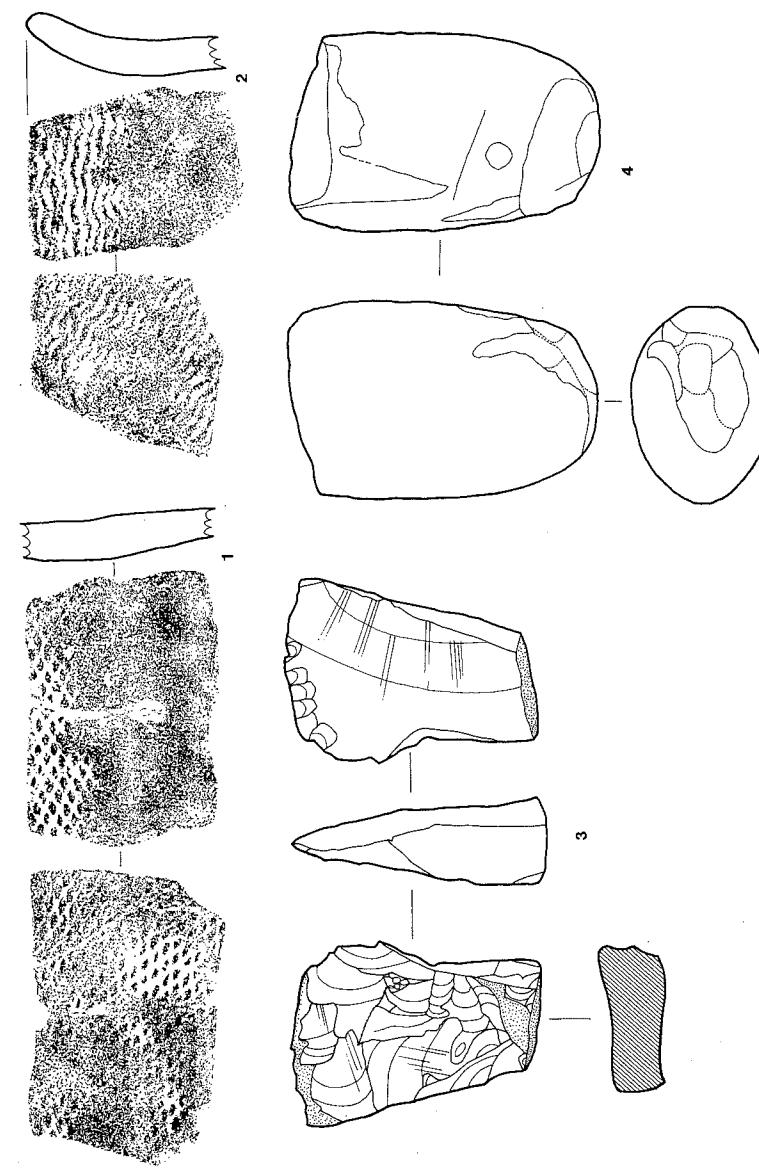
第125図 I-X区IV層遺物実測図①(1/2)



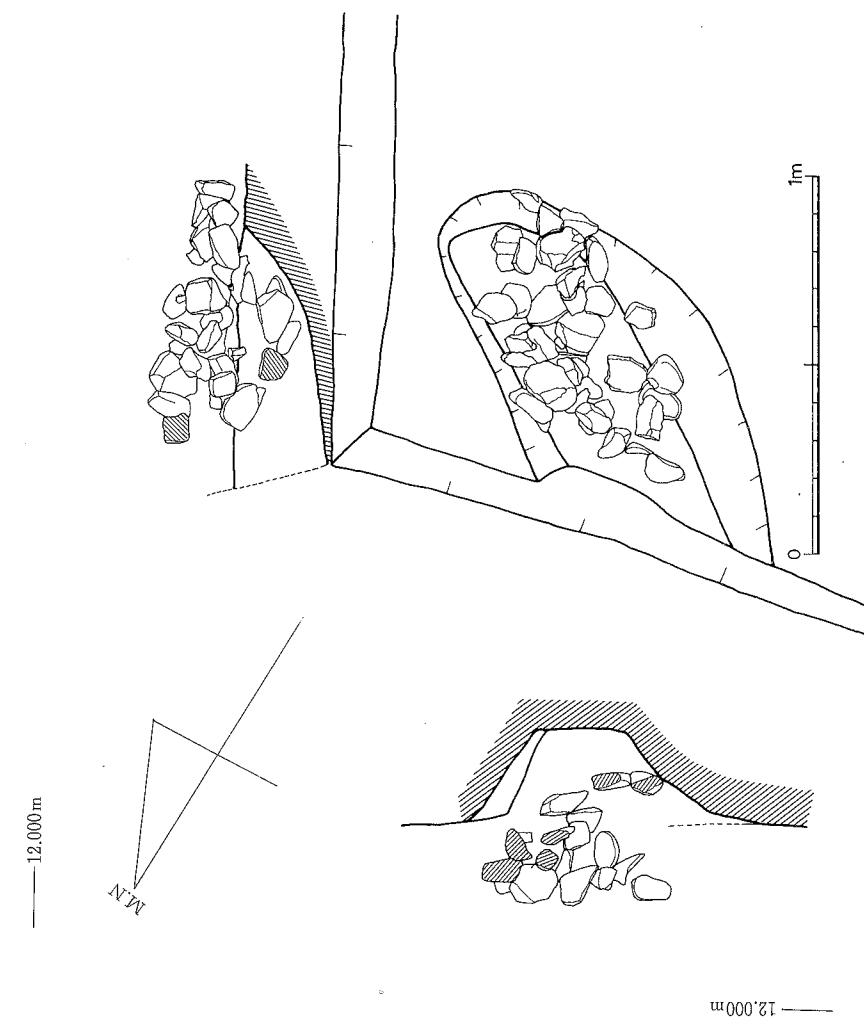
第126図 I-X・Y区間畦畔部III層遺物実測図(1/2)



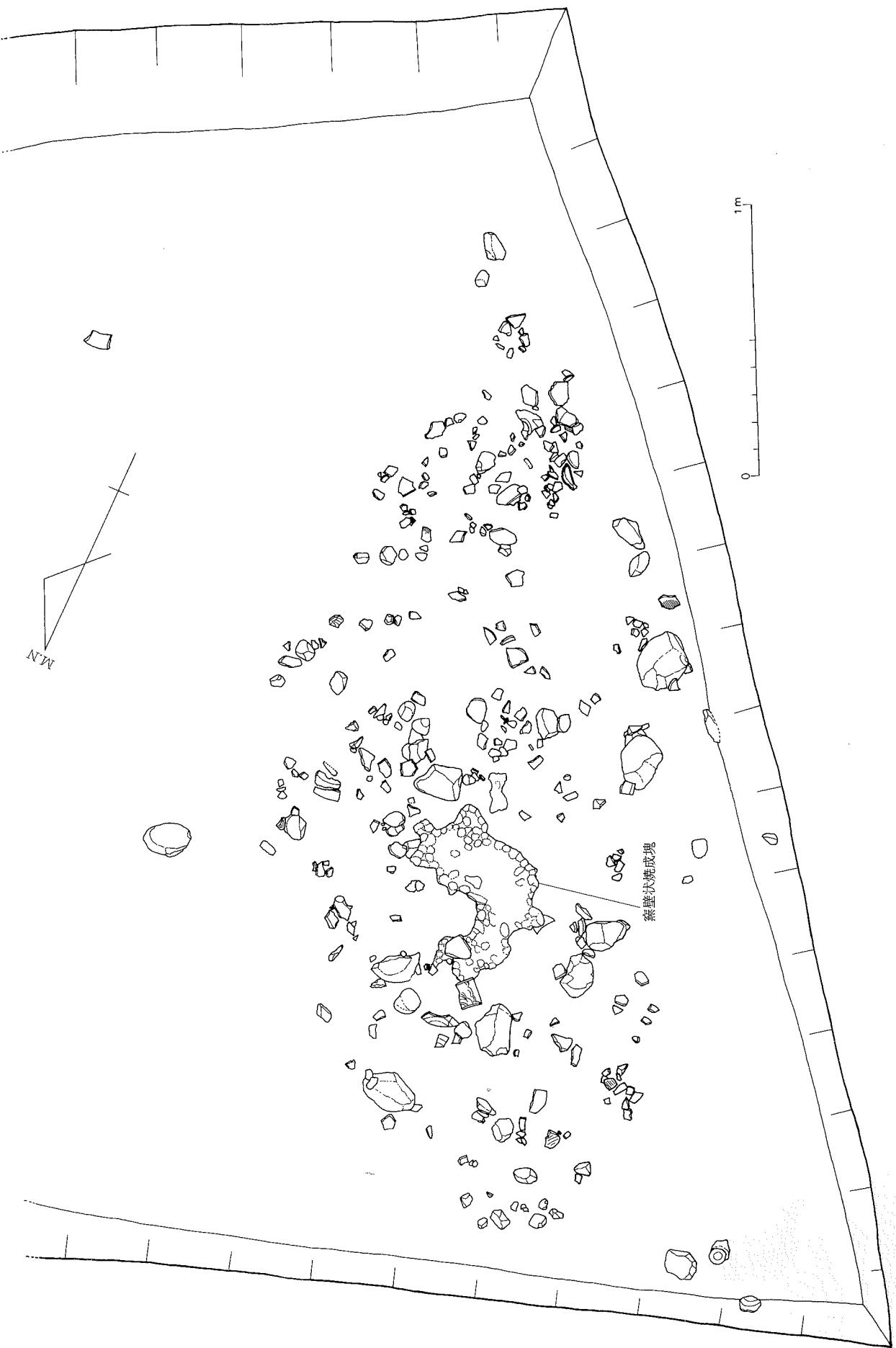
第127図 I—X区IV層遺物実測図②



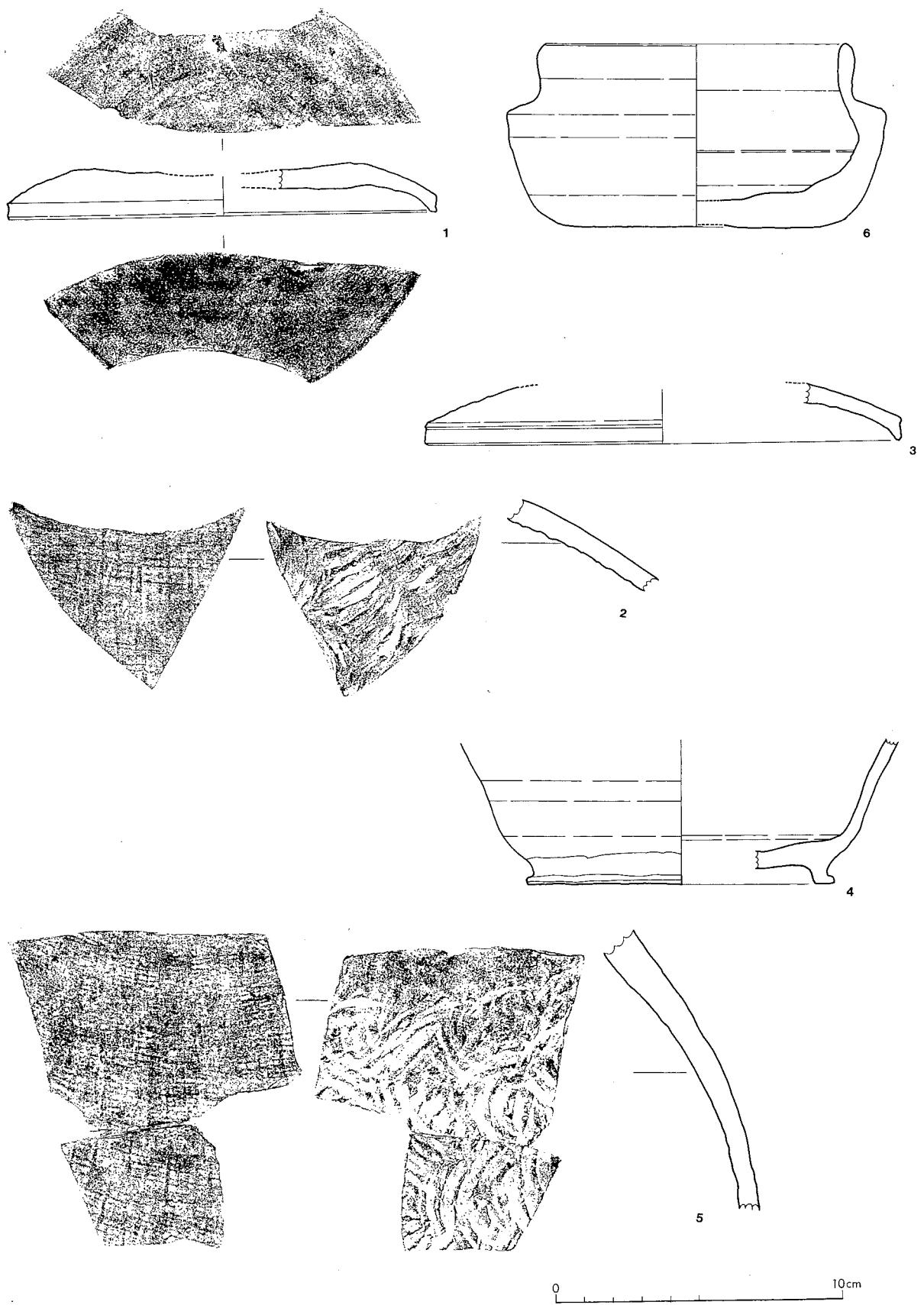
第128図 I—X区V層遺物実測図(1・2・4 : 1/2、3 : 1/1)



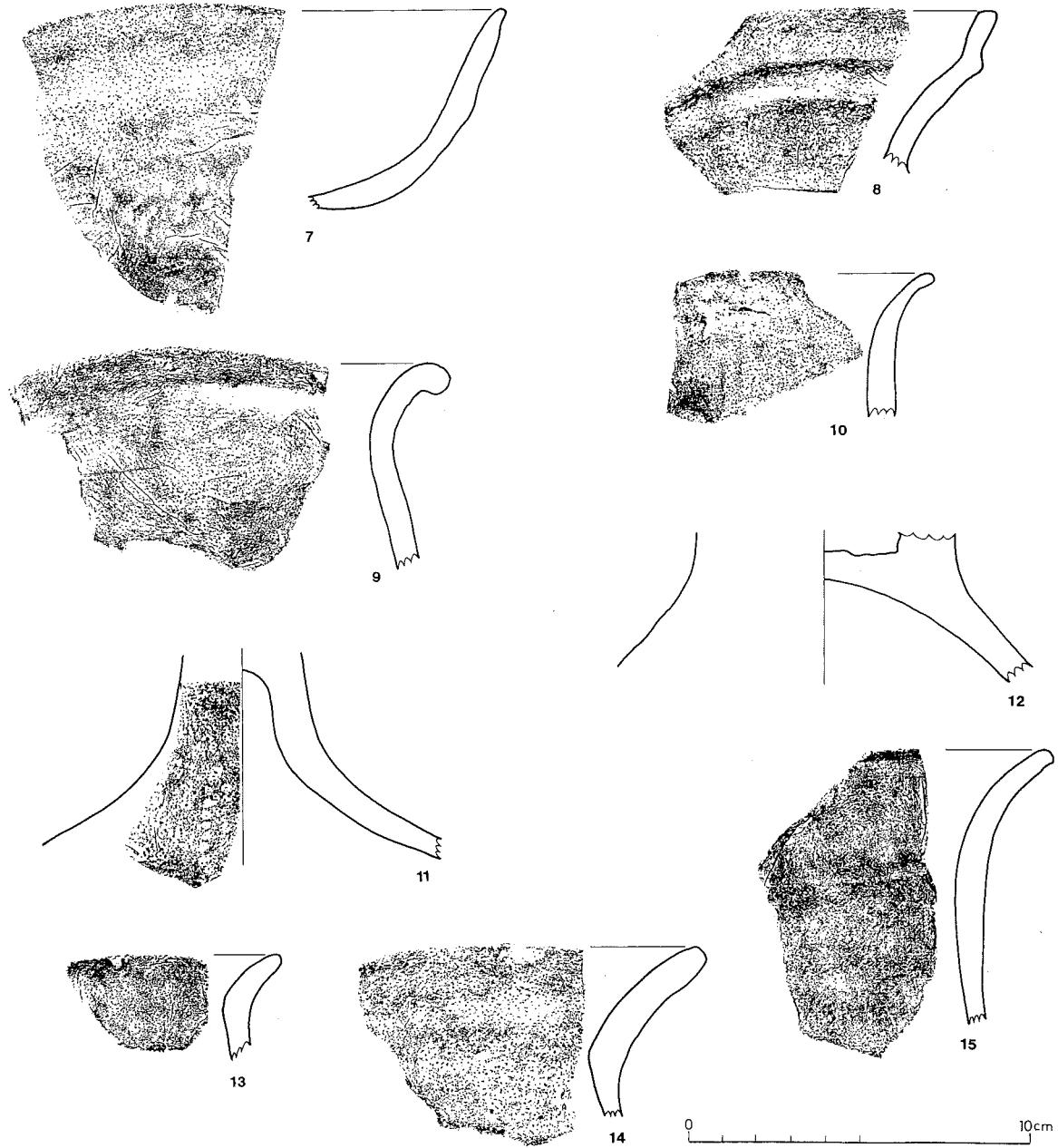
第129図 I—X区石組遺構実測図(1/20)



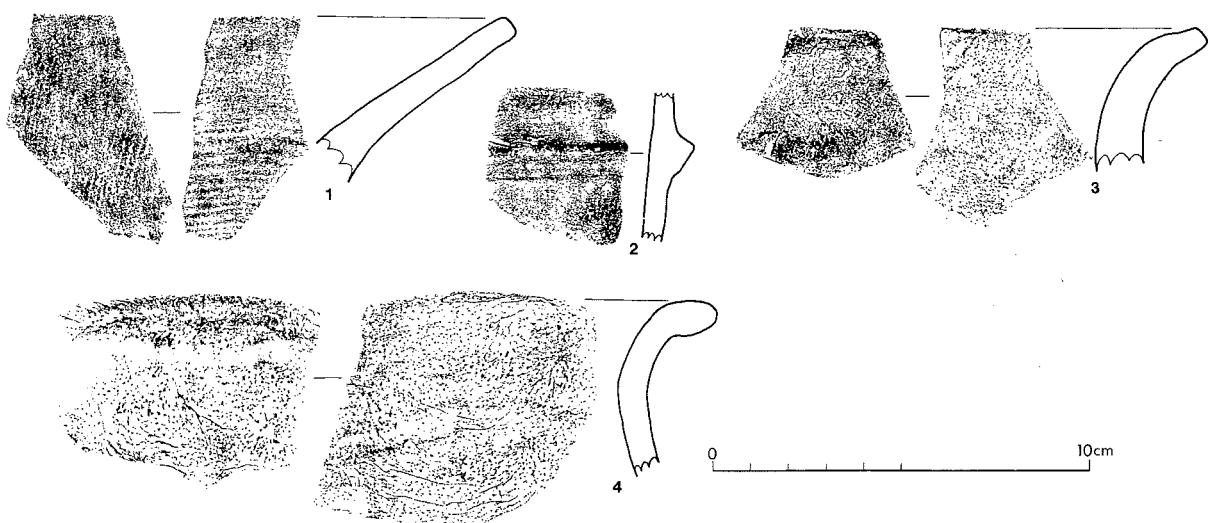
第130図 I—Y区III層上面遺物出土状況図



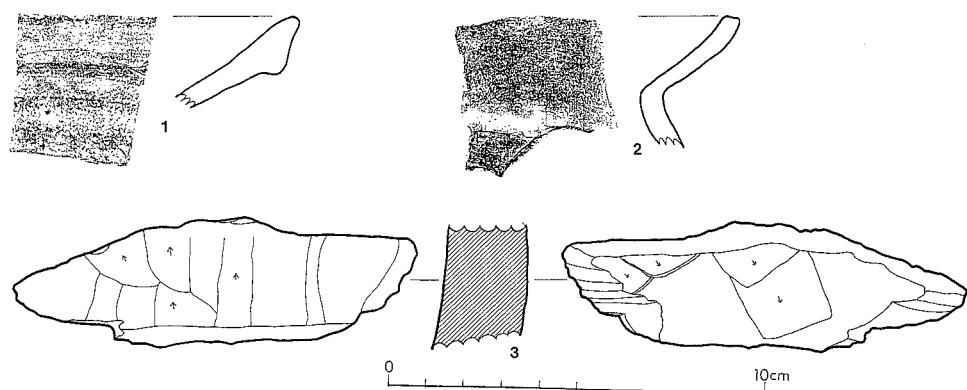
第131図 I—Y区III層遺物実測図①(1/2)



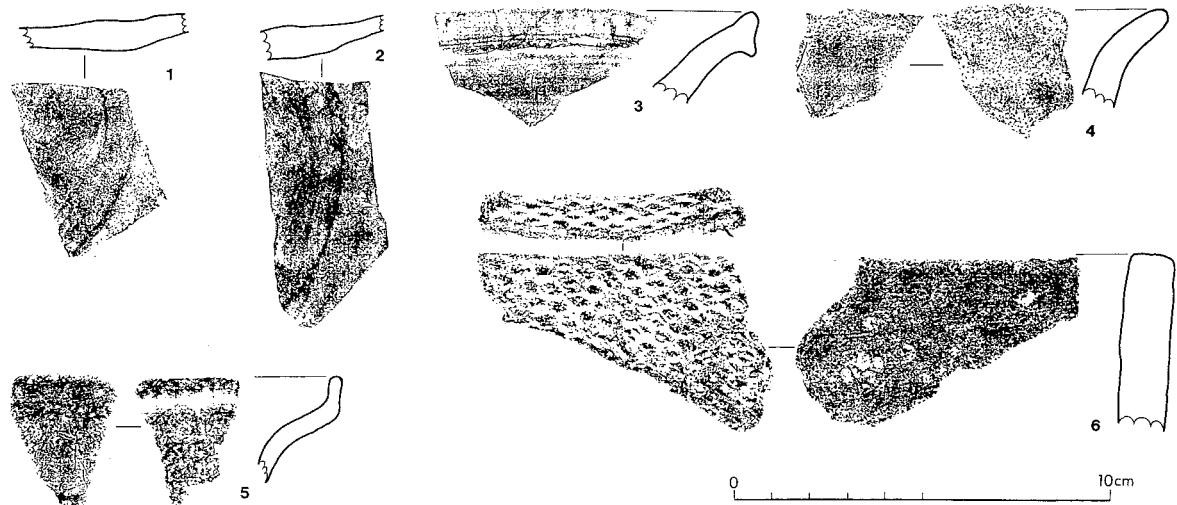
第132図 I—Y区III層遺物実測図②(1/2)



第133図 I—Y区III層遺物実測図(1/2)



第134図 I—Y区IV層遺物実測図(1/2)



第135図 I—Y区V層遺物実測図(1/2)

I 区の石器

【I-A区 I層の石器】(第16図) 8は良質の滑石製石鍋の口縁部片で口唇は平らにまとめ、やや内傾している。

【I-A区域 II層の土製品】(第17図) 9は土製羽口で縦に割れている。復元外径は約9cm、同内径は3cm程度である。

【I-B区II層の石器】(第25図) 54は滑石製石鍋の胴部片である。外面の削りは良好で「鍔」は断面逆台形に整えている。55は安山岩製の小型敲石の破片で側縁に使用痕がある。56は黒曜石製の剝片で下辺に微細な使用痕がある。

【I-B区南西部II層ピット関連石器】(第27図) 3は黒曜石製剝片で側縁に微細な使用痕がある。

【I-B区III層の石器】(第29図) 13は敲石である。側縁の一部に敲打の痕跡があり、側縁を除いた平面部には丁寧な研磨痕跡が見られる。

【I-C区II層の石器・鉄製品①・②】(第32・33図) 10~13は黒曜石製の縦長剝片である。いずれもB面上方からの剝離が見られ、側縁に微細な使用痕がある。14は黒曜石の不整形剝片を利用した搔器で片側に二次加工がある。15~17は安山岩製の剝片を利用した搔器で側縁に粗い二次加工がある。18は袋状の鉄製品である。内径は1cm強を測り柄に装着する部分であるが上部が欠損していて旧状は不明である。17は石鍋の破片である。二次加工品と考えられ、一孔をもつが製品の旧状は不明である。

【I-C区III層の石器③・④・⑤】(第36・37・38図) 60は滑石製品で損傷が激しいが旧状は円筒形と考えられ、上端部分に傘状の作り出しがあり、下端近くに一孔を穿っている。61は黒曜石製の不整形剝片を利用した搔器で一側に粗い二次加工がある。62は安山岩製搔器であり、両側縁に粗い二次加工がある。63は大型の安山岩の不整形剝片を利用した搔器であり一側に粗い二次加工がある。64は薄手の安山岩剝片を利用した石器片で一側に微細な二次加工があり、扁平打製石斧の可能性がある。65~66は良質の玄武岩を利用した扁平打製石斧で65は上半部分、66は刃部であり一部研磨痕が見られる。67・68も良質の玄武岩製扁平打製石斧で、67は小型の完形品、68は上半部分を欠損している。

【I-C区IV層の石器②】(第40図) 24は黒曜石の幅広剝片を利用した使用痕のある剝片で片側に微細な使用痕がある。25・26は黒曜石の縦長剝片を利用した使用痕のある剝片で両側に微細な使用痕がある。27は厚手の安山岩製の一側を使用した剝片である。28は良質の安山岩製敲石で側縁に粗い敲打痕が見られ、平面部分には研磨痕がある。

【I-C区V層の石器】(第41図) 10は幅広の黒曜石剝片製の使用痕ある剝片で下辺に微細な使用痕がある。11は扁平打製石斧の刃部である。12は良好な黒曜石製の剝片の一側に微細な使用痕が観察される。

【I-C区VI層の石器】(第42図) 1は良質な安山岩の粗大剝片の一側を刃部に利用している。2は黒曜石製で下辺に微細な使用痕がある。2は厚手良質の玄武岩製の扁平打製石斧未成品であろう。7・8は黒曜石の良好な剝片の両側に微細な使用痕をもつ。9は黒曜石製の不整形石核で上辺の自然面を打面にした剝離痕がある。

【I-C・D区間畦畔部南拡張区の石器】(第47図) 3は黒曜石の良好な縦長剝片であるが両側縁に微細な使用痕が見られる。

【I-D-I層の石器・鉄器】(第48図) 1は良質の滑石を利用した石鍋の胴部片である。やや薄めの鍔が外方に張り出し、胴部は内側に湾曲している。2は薄手の鉄器片である。上端はやや丸みを帯びているが下半が欠損していて全体の形状は不明である。4は良質の蛇紋岩を利用した磨製石斧の刃部である。やや薄手であるが全体的によく研磨され、側縁は丸みを帯びており旧状は大型品であつ

たと推定される。弥生時代の石斧に見られる形状であるが I 層の出土資料であり推定に止まる。

【I—D 区 III 層の石器】(第50図) 45は良質の黒曜石製の尖頭器であり全体的に丸みを帯びやや厚みがある。この区のIII層も新旧遺物が混在していて本資料の時期を特定できないが、良好な押型文土器が出土していてこの時期の可能性がある。

【I—D 区 IV 層の石器】(第53・54図) 第53図25～27は黒曜石の縦長剝片である。25・26は一端が折り取られているが、それ以上の二次加工は認められない。27は厚手の剥離されたままの縦長剝片で二次加工はない。第54図28は黒曜石製の石核で一部自然面を残している。半割した自然礫の剥離面を打面として剥離を行っている。29は磨製石斧の一部であると考えられる。一部自然面をのこしているが全体的によく研磨されている。第54図30・31は良質の玄武岩を用いた扁平打製石斧である。30は小型で一部自然面をのこしている。31は刃部の大半と上半部を欠損している。

【I—D 区 V 層の石器】(第57・58図) 第57図54は半端を欠損した黒曜石の剝片で一側に微細な使用痕がある。56はノミ状の磨製片刃石斧と考えられる。刃部を有する下端部分を欠損しているが全体によく研磨され方柱状に整えられている。55は二孔を穿った片刃の石包丁片で逆台形の形状になっている。第58図57・58は扁平打製石斧である。57は刃部を有する下半部を欠損し、58は刃部のみを残している。59は玄武岩製の円柱状石製品で上部はやや太く一部研磨され、下端は欠損しており旧状全体を知りえないが陽根状石製品の可能性がある。

【I—D 区 III 層長方形遺構の石器】(第60図) 3は石鍋の口縁部で断面台形の「つまみ」があり、口唇はやや平らに整えられている。

【I—D 区 南西部 III・IV 層の石器】(第62図) 4は粗めの砂岩製砥石片で、上下は自然面を残しているが中央部の一面は研磨による凹みがあり他面は平らな研磨面が残っている。5も粗めの砂岩製石製品であるが両面に丸い凹面が見られ、石皿とするのが妥当と考えられる。

【I—D 区 2号住居跡埋土出土の石器】(第64・65図) 第64図9は方柱状の滑石製品である。上端はやや薄く削りこまれた「つまみ」があり一孔がある。第65図6は円礫を敲打に用いた敲石で、主に側縁に激しい敲打の痕跡が残っている。13は両面が研磨に使用された砥石である。研ぎ減りによって薄くなっている。

【I—I 区 I・II 層の遺物】(第72図) 1は方柱状高脚つきの瓦器である。やや軟質で脚の外面に不明瞭であるが陰刻の施文がある。旧状全体は不明であるが四脚の容器であろう。2は敲石である。3は石包丁の破片と考えられ薄く整えられ下辺に刃部が砥ぎだされている。

【I—O 区 IV 層の石器】(第79図) 黒曜石製の縦長剝片で両側縁に微細な使用痕がある。

【I—P 区 III 層の石器】(第80図) 1は滑石製石鍋の口縁部である。やや内側に湾曲し口唇は平らに整えられている。断面逆台形の鍔がめぐっていたらしいが欠損している。2は安山岩製品で断面は方形に研磨されているが旧状は不明である。

【I—P・Q 区 間畦畔部 III 層の石器】(第82図) 3は良好な黒曜石製剝片であるが二次加工は認められない。

【I—Q 区 III 層の石器】(第83・85図) 第83図3は良質の玄武岩製横型石匙である。良好な横剝ぎの剝片が使用されているが両端とつまみを欠損している。第85図16～19は黒曜石製縦長剝片である。18・19の両側縁には微細な使用痕がある。20は良質の安山岩製石器であるが両端を欠損していて旧状は不明である。21は大型円礫の表面が研磨された資料である。22は薄い砥石の破片である。

【I—Q 区 IV・V 層の石器】(第87図) 5・9・10は黒曜石製縦長剝片である。いずれも側縁に微細な使用痕がある。11は敲石の破片である。

【I-Q・R区間畦畔部の石器】(第89図) 6は砂岩製砥石片、7はやや粗雑な黒曜石製石鏃、ともに表面採集遺物である。

【I-R区I・II層の石器】(第90図) 1はI層出土の扁平打製石斧の刃部破片である。良質の玄武岩を利用している。6はII層出土の安山岩製の大型石鏃である。I・II層とも不安定な土層であり時代特定が困難であるが6は縄文晩期の可能性が高い。

【I-R区IV層の石器】(第91図) 13は良質の安山岩製サイドスクレーパーである。やや厚手の素材の一側に二次加工が見られる。12は小型の磨製石斧片で蛇紋岩製、精緻な研磨が見られるが破損が著しい。

【I-R区V層の石器】(第92図) 滑石製石鍋の底部片で一孔があり偏平な鉄片が銹着している。底部への穿孔と鉄片挿入の意味は不明である。

【I-S区II・III層の石器】(第93図) 10は良好な黒曜石製縦長剝片である。両側に微細な使用痕がある。11は土製羽口片である。

【I-T区IV層の石器】(第100・101図) 第100図22~25、第101図27は縦長剝片である。22・24・25には側縁に微細な二次加工がある。第101図26は小型の石核である。第101図28は扁平打製石斧の頭部分である。

【I-T区V層の石器】(第102図) 11は良質の黒曜石製石鏃、12は使用痕のある剝片、13は扁平打製石斧である。

【I-T・U区間畦畔部II層の石器】(第103図) 5・6ともに良質の安山岩製扁平打製石斧であるが欠損が著しい。

【I-U区III層の石器】(第105・106図) 第105図22は磨製石器の破片である。よく研磨されており磨製石剣の残欠かもしれない。23はサイドスクレーパーで一側に微細な二次加工がある。24は扁平打製石斧の刃部である。25・26は敲石であり側縁に敲打痕が、平面部に研磨痕がある。第106図は石皿片である。

【I-U区I号集石遺構関係の石器】(第110図) 4・5ともに小型の敲石で良質の安山岩礫を使用している。

【I-V・W区間畦畔部集石遺構の石器】(第114図) 2は砥石片である。破損しているがよく研磨されている。

【I-W区III層の石器】(第119・120図) 第119図29・30とともに使用痕をもつ剝片である。31は安山岩製剝片の下際に顕著な使用痕を有する。32・33・第120図34はともに敲石である。

【I-W・X区間畦畔部II層の石器】(第122図) 6は扁平打製石斧片である。

【I-W・X区間畦畔部III層の石器】(第123図) 3は敲石の破片である。

【I-X区IV層の石器】(第127図) 19は滑石製石鍋破片の底部でススの付着が著しい。

【I-X区V層の石器】(第128図) 3は安山岩製で使用痕のある剝片、4は小型の敲石である。

【I-X・Y区間畦畔部III層の石器】(第126図) 4は安山岩製サイドスクレーパーで一側に微細な二次加工がある。5は黒曜石製で使用痕のある剝片である。6は砂岩製厚手の砥石である。

【I-Y区IV層の石器】(第134図) 3は滑石製石鍋の胴部破片である。やや器面に摩耗がある。

第2節 II区の遺構と遺物

『II—B区』

【II層】(第141図) 1は土師質の壺。内外面共に横方向のナデ。2～5は弥生土器。2は口縁部で短く外反する小型壺。外面口縁部～肩部は横方向のナデ。3は弥生後期終末期の台付甕の口頸部。口縁部は内湾気味に立ち上がり、器厚は薄手で器表面が摩滅している。4は1.7個/cmで刻目が施される突帯が1条付される壺の肩部。5は1.3個/cmで刻目が施される突帯が2条付される弥生後期の体部破片。突帯間に刷毛目状の斜線が認められる。6は縄文晚期の板目による条線が見られる深鉢の肩部片。

【III層】(第142・143・144図) 当層では主に弥生中期・後期の遺物が多い。1～7は甕の口縁部または体部破片。1は弥生後期終末期の薄手の台付甕の口頸部。2も後期終末期前後の口頸部。口縁部内外面共に横方向のナデ。内面肩部以下は縦方向の刷毛目の後にナデ。 ϕ 1mm程度の砂粒を多く含む。3は甕の肩部破片であるが外面は縦方向・内面は横方向の刷毛目の後にナデ。4は内湾気味に口縁部が開く。内外面共に横方向のナデ調整であり、 ϕ 1mm程度の砂粒が非常に多く含まれ器表面にも目立つ。5・6・7は中期の甕口縁部。5は口縁部は肥厚しながら横に開く。内外面共に横方向のナデ。6は短い口縁部が横に開き、口唇内端部が内側に突出する。7も6同様口唇内端部が内側に突出するが口縁部が横に長く開く。口縁部内外面共に横方向のナデ。8～20は16を除いて全て壺の破片と考えられる。8は頸部下部で1状の突帯が付される。外面は縦方向の刷毛目の後にナデ。9は底部に近い体部下半である。内外面に縦方向の刷毛目痕が明瞭に残る。10・11は頂部が丸い突帯、12・13・14は断面三角形の突帯、17は刻目突帯、19・20は「コ」の字形の突帯が付される。10は頸部内面で稜をもって屈曲する。13・14は同一個体であり壺の肩部に頂部の鋭利な突帯が付される。17は上下の突帯に籠状工具で刻目が施されるが、その間隔は一定ではない。19・20は同一個体であり「コ」の字形の突帯が付される大型の弥生中期後半～後期前半の北部九州系の甕棺の体部破片。器厚は4～5mmと薄く胎土も精良である。外面は縦方向の刷毛目+横方向のナデ。16は台付甕の台部か。 ϕ 2mm以下の砂粒を非常に多く含む。18は外面に赤色顔料が認められる壺の底部破片。底部径は5.4cm。底部内面は指おさえの跡が残る。外面は横方向のナデ。

第143図21・24は縄文晚期後葉の土器。21深鉢の底部で底径8.0cm。24は口縁部直下に0.9cmで刻目が施される断面三角形の突帯が施される深鉢の口縁部。器厚1.2cm程度と厚手である。刻目は縦径・横径共に0.9cm程度である。22は時期不明の底部破片。外面の縦方向に刷毛目状の痕跡が残る。23は外面に橢円押型文が施される底部付近の破片である。

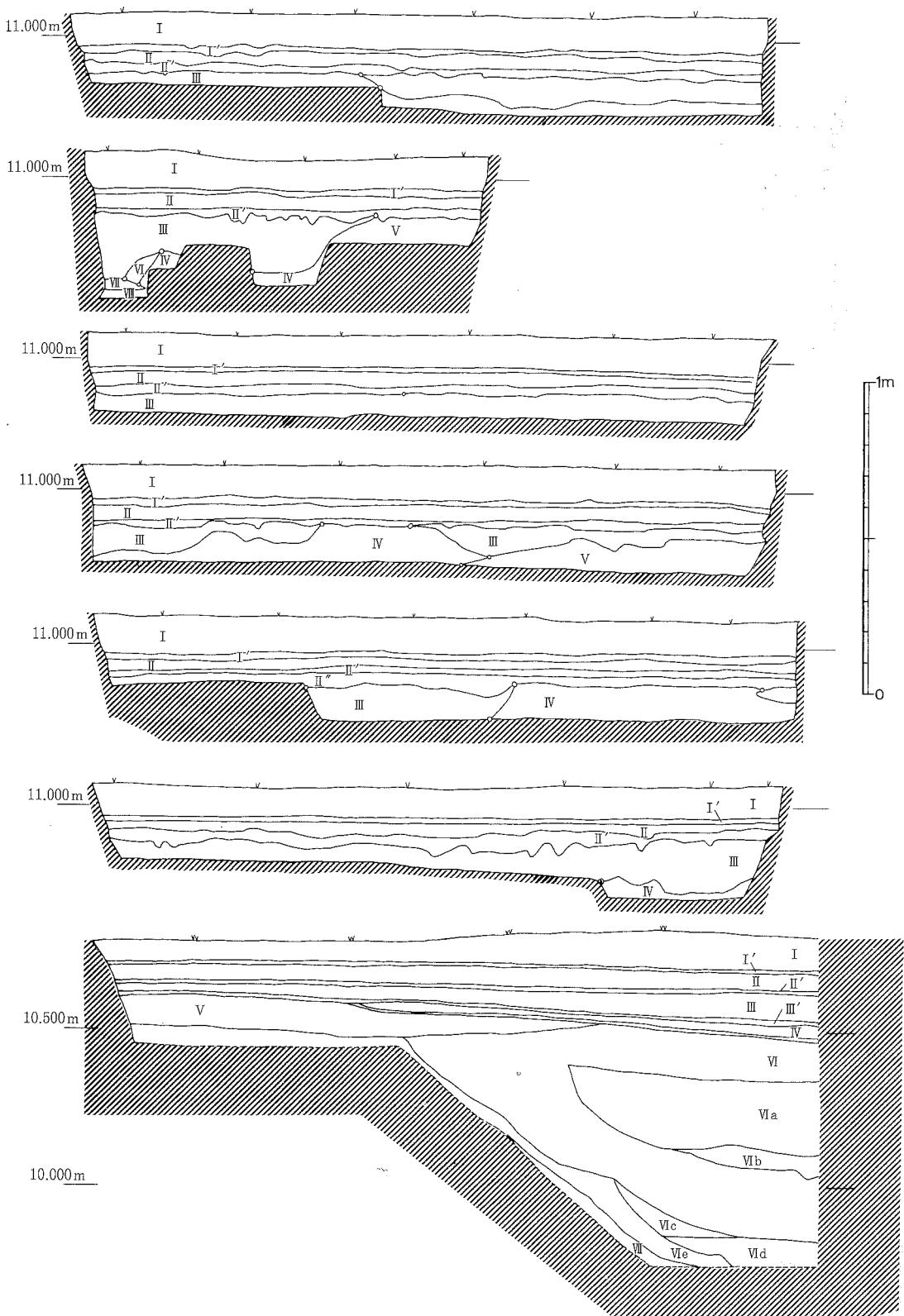
第144図1・2は台付甕の台部。共に外反しながら下端部へ続く。内外面横方向のナデ調整で ϕ 1mm程度の砂粒を非常に多く含む。3は縄文後期後葉の有文の鉢の口縁部破片か。口縁部に2状の平行沈線が施される。

『II—B・C区間畦畔部』

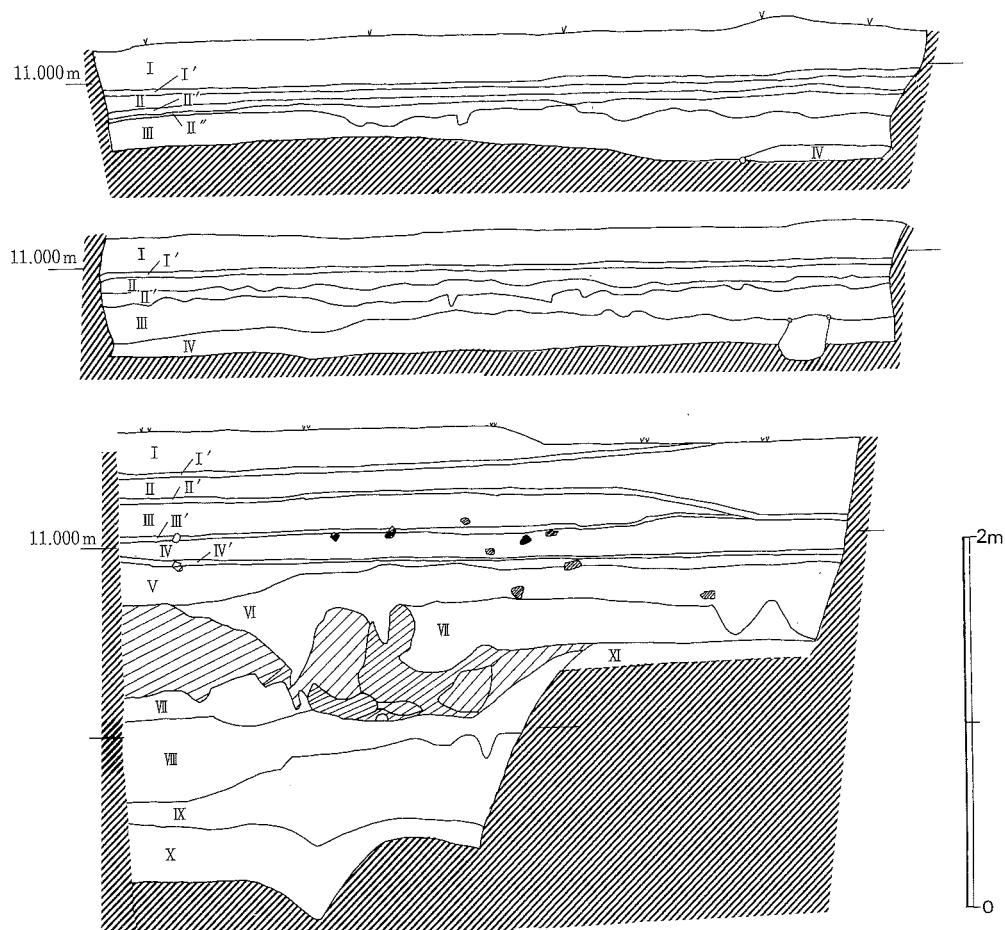
【I層】(第145図) 1は弥生時代の台付甕の台部。底部付近で急に横方向へ開く。台部径9.4cm・台部高3.5cm。外面は横方向を基本とした粗雑なナデ。 ϕ 1mmの砂粒を非常に多く含む。2は甕の口頸部である。口縁部は横に外反しながら開き、屈曲部内面に稜を有する。内外面共に横方向の丁寧なナデ。

『II—B・D区間畦畔部』

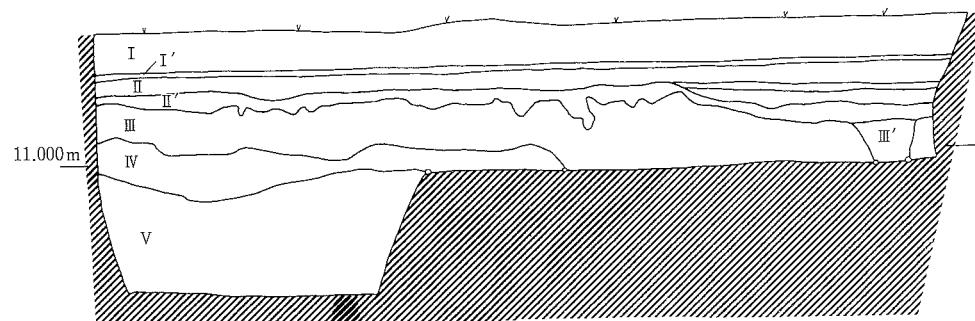
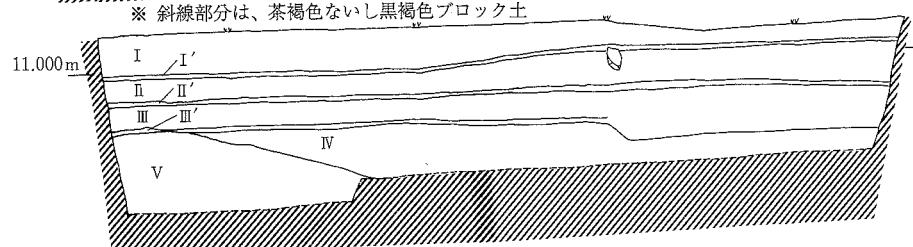
【II層】(第146図) 4は口縁部内面で屈曲し口縁先端部が若干下に垂れ気味となる器形である。北部九州系の中期末頃のものか。肩部に断面三角形の突帯が付される。5は断面三角形の突帯が3条残る壺の体部。外面は横方向のナデ。



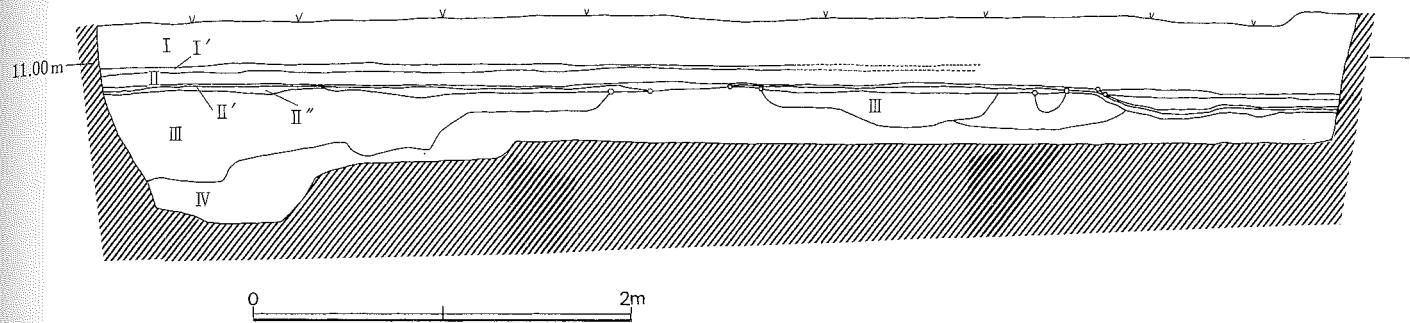
第136図 II—B・D・E・G・H・I・K区東壁断面図(1/2)(註: 'は鉄分の沈殿した黄色帶)



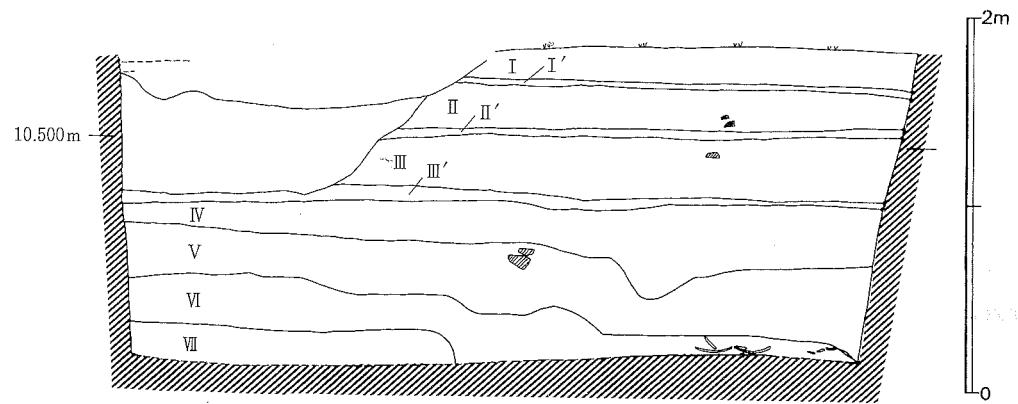
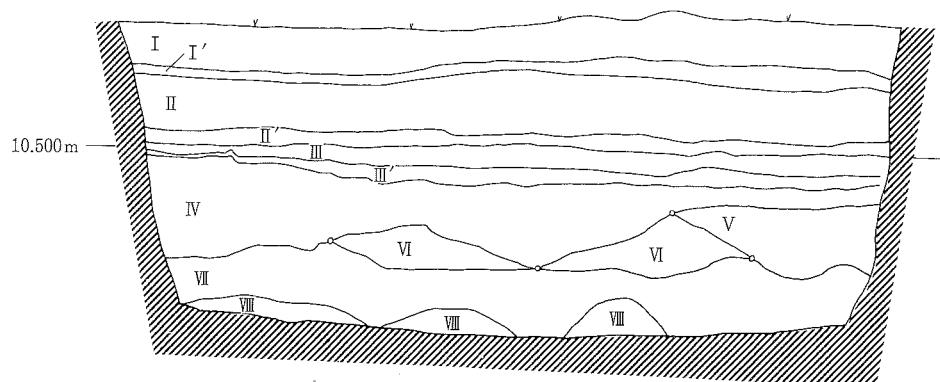
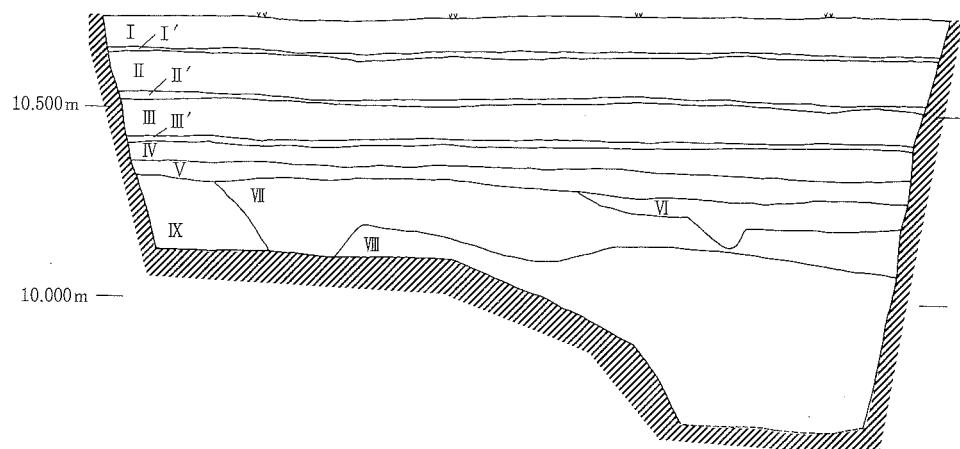
※ 斜線部分は、茶褐色ないし黒褐色ブロック土



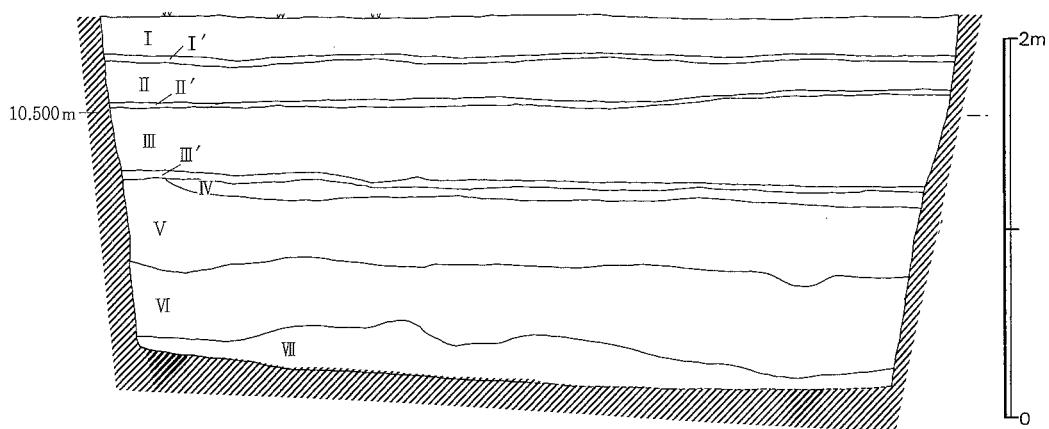
第137図 II—L・M・O・P・Q区東壁断面図(註: 'は鉄分の沈殿した黄色帶)



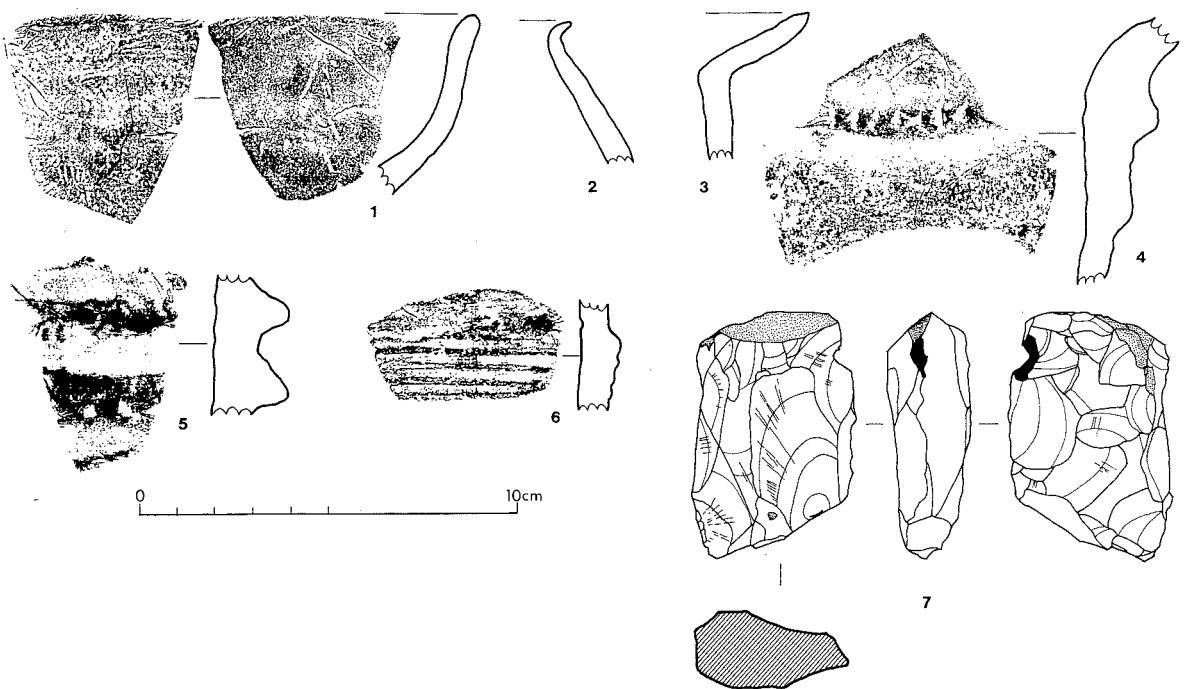
第138図 II-R区東壁断面図



第139図 II-S・T・V区東壁断面図(註: 'は鉄分の沈殿した黄色帶)



第140図 II-X区東壁断面図(註: 'は鉄分の沈殿した黄色帯)

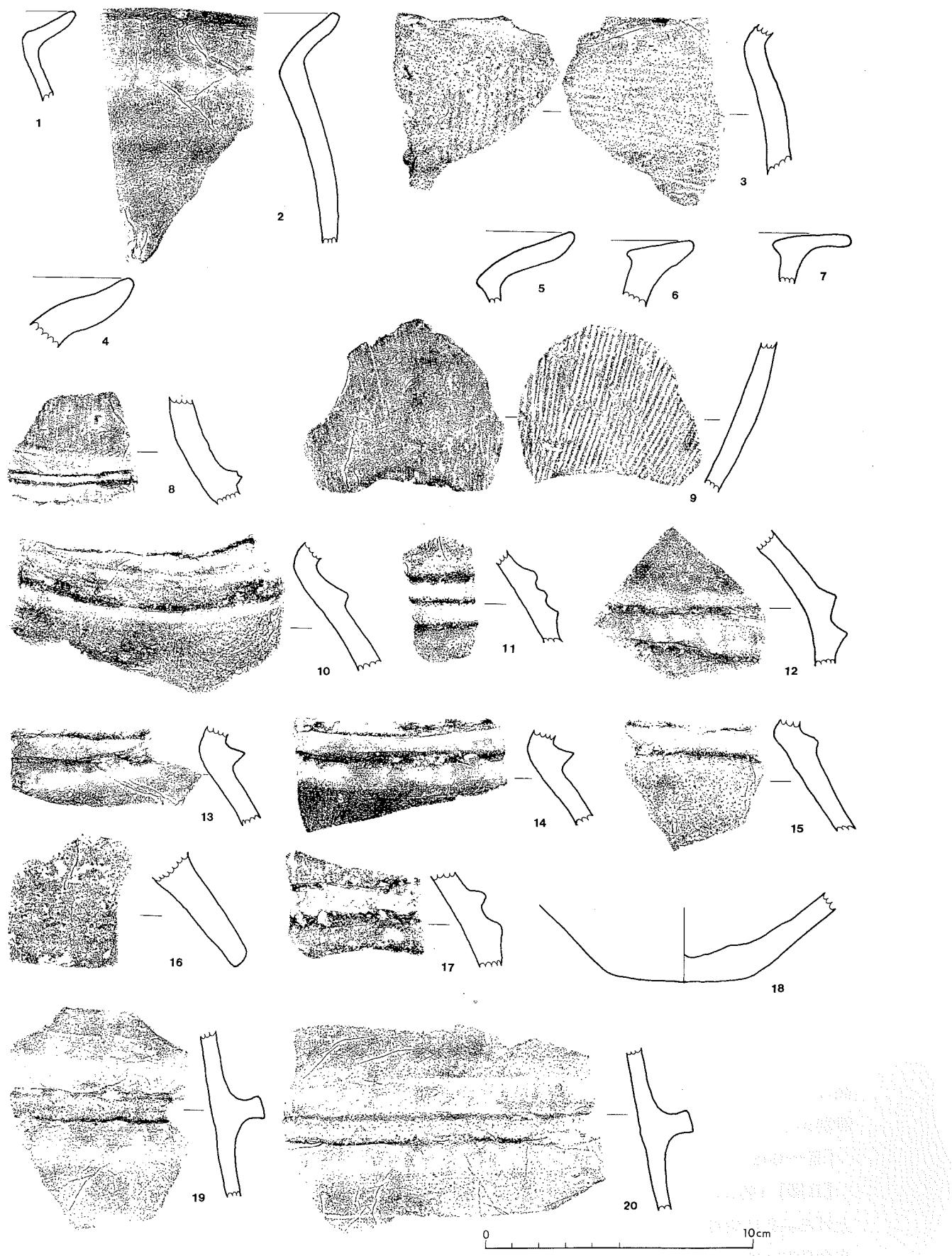


第141図 II-B区 II層遺物実測図(1/2)

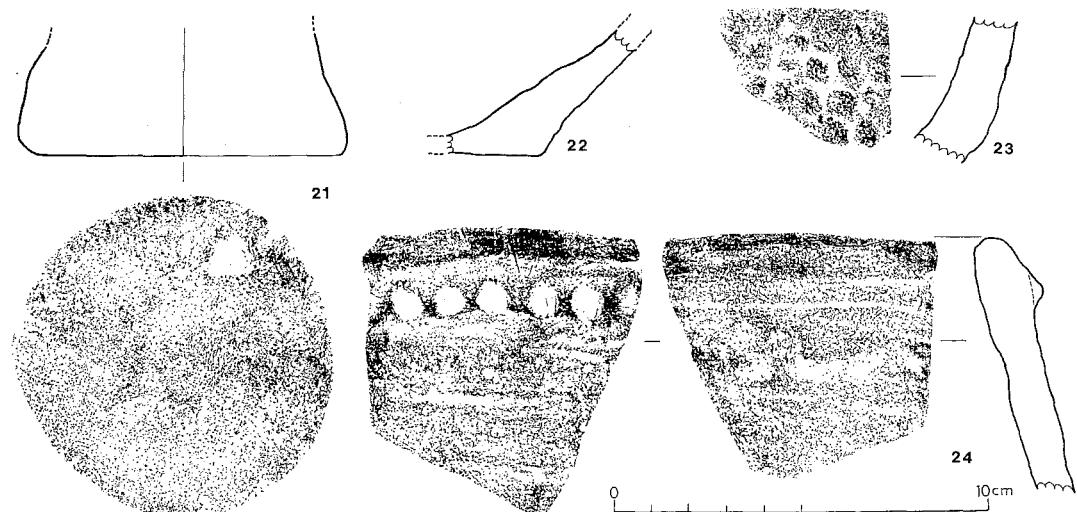
【III層】(第146図) 1～3は甕の口頸部。1は弥生後期終末期～古墳時代前期初頭の甕の上半部である。体部上半に最大径を有する。口唇部は丸く仕上げられる。推定口径23.2cm・推定胴部最大径24.0cm・現存部高さ12.6cm。口頸部内外面共に横方向のナデ。肩部以下は内外面共に縦方向の刷毛目の後にナデ。2は頸部内面で稜を有し外反する甕の口頸部。口縁部内外面共に横方向のナデ。内面肩部は左上←→右下方向の刷毛目痕が残る。 ϕ 1mm程度の砂粒を非常に多く含む。3はほぼ真横に開く口縁部を有する甕。内外面共に横方向のナデ。6・7は台付甕の台部および下半部。6は台部径9.0cm・底部径7.4cm・台部高さ3.6cm・現存部高さ18.7cm。内面体部下半に縦方向の明瞭なケズリ痕が認められる。外面は縦方向の刷毛目である。外面は底部に近づくにつれて調整が粗雑となり ϕ 2mm以下の砂粒が数多く器表面に露出している。7は底部径7.8cm・底部径6.0cm・台部高さ1.8cm。内外面共に横方向のナデ。

『II-D区』

【II層】(第147図) 1は肩部に頂部の丸い突帯が付される甕の口縁部。口縁部内面で屈曲し口縁先端部が若干垂れ下がる。北部九州系の中期末頃のものか。内外面共に横方向のナデ。



第142図 II—B区III層遺物実測図①(1/2)



第143図 II—B区III層遺物実測図②(1/2)

【III層】(第147図) 2は古墳時代前期の甕で口唇部は平坦に仕上げられる。口縁部内外面は横方向のナデ。頸部は横方向の刷毛目痕が残る。肩部内面はケズリの後に左上→右下方向の刷毛目調整。3は頸部屈曲部内面が内側に突出する。4は砂粒を非常に多く含む甕の口頸部。口縁部外面は横方向のナデであるが砂粒の移動跡も見られる。5は推定口径26.6cmの甕の口頸部である。やや外反気味に口縁部が開く。砂粒を非常に多く含む。口縁部内外面共に横方向のナデ。6は肩部に頂部の丸い突帯が付される甕の口縁部。口縁部内面で屈曲し口縁先端部が若干垂れ下がる。北部九州系の中前期末頃のものか。内外面共に横方向のナデ。内面の頸部以下などの調整が丁寧ではないところは ϕ 1mm程度の砂粒が非常に多く器表面に露出している。7は胎土が非常に精良であり砂粒がほとんど含まれない。口縁部は横方向に開く。口唇内端部が内側に突出するようである。8は壺の底部破片か。推定底径5.6cm。

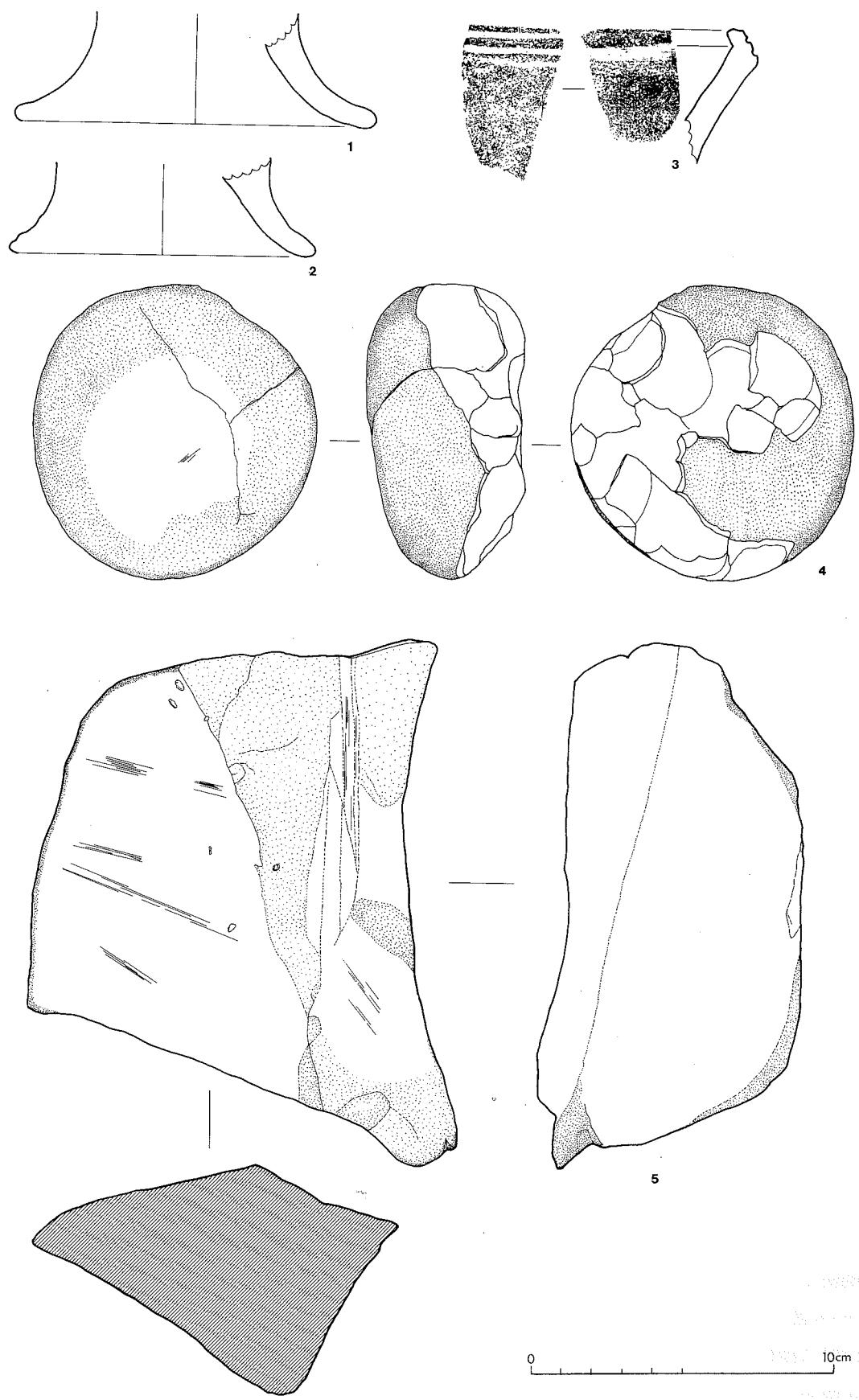
『II—E区』

当区では土坑のすぐそばからほぼ完形の高坏が出土した。碗形の坏部と細目の脚柱部を経て低く開きながら接地し1.5cm程の幅の接地面を有する高坏である。似たような器形は長崎県・他県にも認められるが全く同じ器形の類例は見当たらない。脚部の接地部の面積が大きいこと・脚柱部が割合細いこと・屈曲部に稜を有しない点が特徴的である。坏部の内外器表面には ϕ 1~2mmの砂粒が非常に多く露出している。脚部下半外面は比較的丁寧な横方向のナデ調整がなされ器表面に砂粒はあまり露出しない。脚部下半内面は横方向のケズリの後に横・縦方向のナデ調整。器表面の観察から雲仙普賢岳の石英安山岩の風化土を素地に用いたと思われ在地製作の土器と考える。ここでは坏部の形態から弥生後期終末期～古墳時代前期の在地生産の高坏としておく。

【第IV層(赤褐色混礫土層)集石遺構】(第148図) 長径約240cm×短径約130cm、深さ約70cmの楕円形土壙で、土壙底に4ヵ所細く浅い溝状の掘りこみを検出した。土壙上面ではほぼ中央部で弥生後期の高坏(第149図)が発見された。土壙墓の可能性が強く高坏は副葬品と考えられる。遺構上面に拳大の礫群があるが遺構との関係は定かでない。

『II—G区』

【II層】(第150図) 1は8世紀前半の須恵器蓋。口縁を下方に垂直に短く折り曲げ先端部を丸く仕上げる。2は突帯が付され外面に赤色顔料の残存が認められる弥生時代の壺の体部である。3も外面に赤色顔料が明瞭に残存する弥生時代の壺の体部下半である。2と同一個体であるかは不明。内面に縦方向の刷毛目痕あり。外面の最終調整は縦方向のヘラナデ。

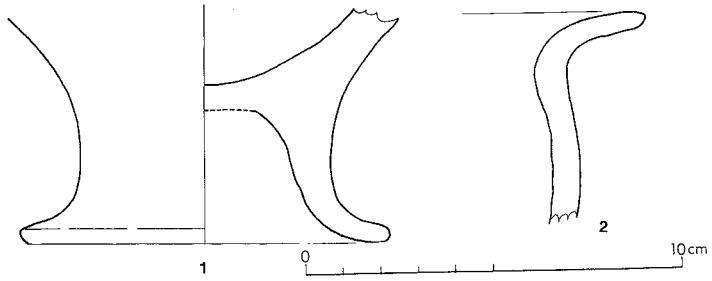


第144図 II—B区III層遺物実測図③(1/2)

『II-H区』

【II-H区甕棺墓】(第154図)

試掘調査時点で発見されていた遺構で第IV層から切りこまれた長径2.6m、短径1.9m程度のやや歪つな土壙に埋設された弥生後期の单甕棺(第155図)である。土壙は2段になっており、一旦浅い作業孔を開けた後、地山に埋設孔を穿つたらしい。甕棺は約35°の角度で埋設されている。口縁部近くに小円礫があり、消失しているが板蓋であった可能性がある。



第145図 II-B・C区間畦畔部I層遺物実測図(1/2)

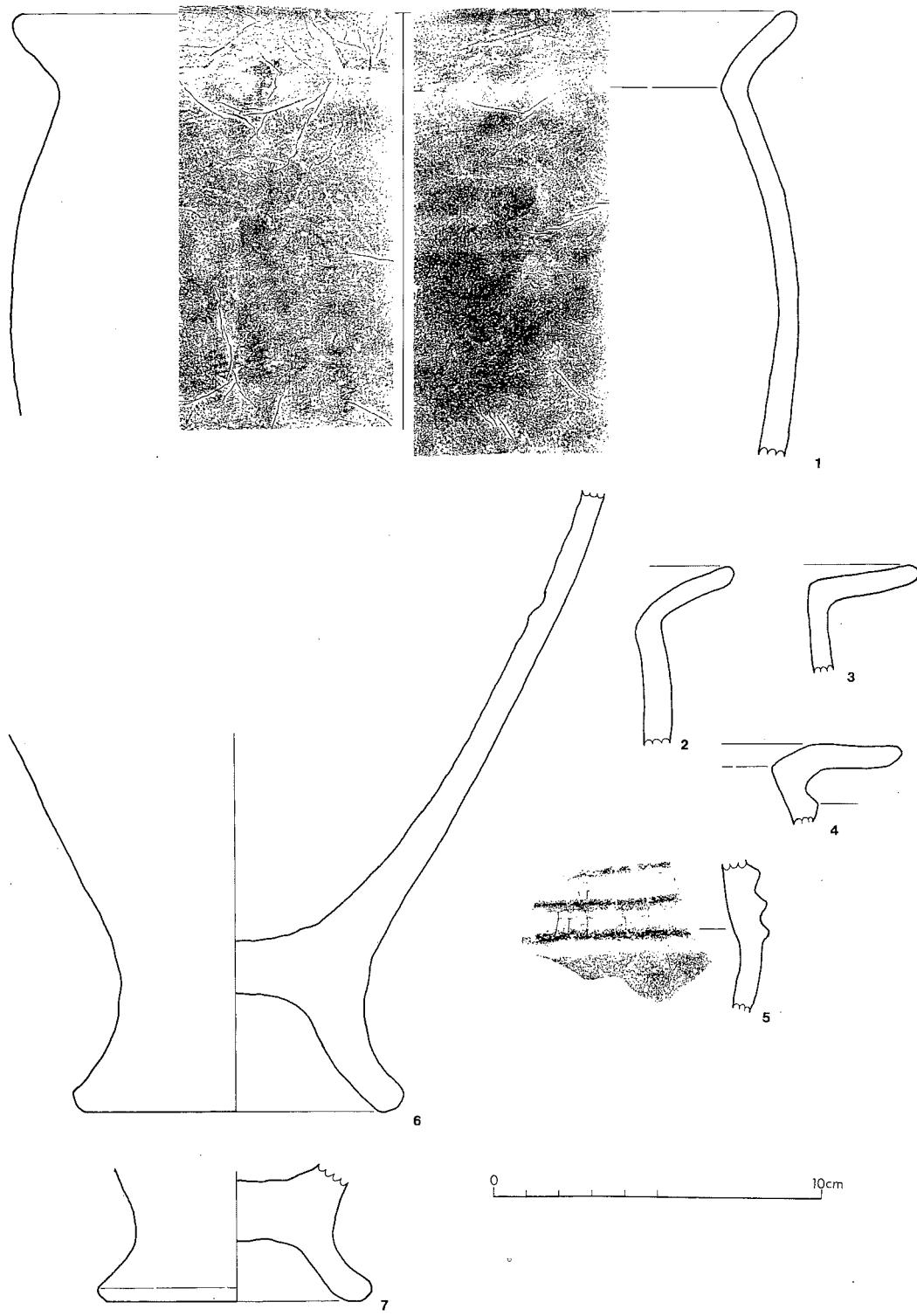
【III層】(第152図) 1は古墳時代前期の布留式期の在地系の甕の口縁部。胎土の観察から4の台部と同一個体の可能性が高く台付甕となる。頸部内面で稜をもって外反し、外傾しながら開き口唇部直下で内湾しながら立ち上がる。口唇部は丸みをもって仕上げられる。外面は横方向のナデ調整がなされるが器表面には ϕ 2mm以下の砂粒の露出が非常に多い。肩部内面はケズリの後に左下→右上方向のナデまたは微細な刷毛目調整がなされる。4は1に対応する弥生時代台付甕の台部。台部径7.4cm・底部高さ2.1cm・底部径6.2cm。2は頸部内面で稜をもって外反する甕の口縁部であり口唇部は丸く仕上げられる。この土器も1同様にナデ調整がなされるが器表面に砂粒の露出が目立つ。3は突帯が1条残り外面に赤色顔料が認められる弥生時代の壺の体部破片である。内面は左下→右上・横・縦方向の刷毛目痕が認められる。第141図2・3と同一個体であるかは不明。

【IV層】(第153図) 1は弥生後期終末～古墳時代前期の在地系の鉢の口縁部。外面口縁部は微細な刷毛目痕が縦・斜め方向に残り、体部はやや太めの刷毛目痕が縦方向に残る。2は断面三角形の突帯が付される坪の肩部。 ϕ 1mm以下の砂粒の露出が外面では目立つ。

【甕棺】(第155図) 160は口縁部の一部を欠くが完形の甕棺である。自立不可能である小さめの底部から丸みをもって立ち上がり、胴部中位やや下に断面台形状の突帯が1状巡り、頸部にも断面三角形の突帯が1条巡り、外反気味に口縁部が立ち上がる。口唇部は平坦に仕上げられる。外面は全面に縦方向の刷毛目調整がなされるが、体部の底部近くと突帯の上下は横方向のナデが最終調整となる。口縁部内面は横・頸部以下の内面は横および斜め方向の刷毛目痕が残る。胴部中位に黒斑が両側二対に認められる。口径35.6cm(器高の約1/2)・頸部径34.2cm・胴部最大径48.4cm・胴部突帯径48.8cm・底部径9.6cm・器高69.6cm・口縁部の高さ5.2cm・胴部突帯の高さ30.4cm(器高の約3/7)・口唇部器厚1.7cm程度。北有馬町今福遺跡の1号甕棺とは土器の大きさ・器高・胴部径の比率などで異なるが、類似点として器形・突帯の位置と形状・口径・底部径・器高の比率がほぼ1:0.28:2となることがあげられ同一時期と見て差し支えないであろう。今福1号甕棺は口径31.8cm・胴部突帯径43.6cm・器高43.6cmと報告されている。この甕棺は報告者によって橋口達也のK IV b式に比定されている。橋口は甕棺の編年に加えて、副葬品として出土した舶載青銅器を用いて絶対年代についても論じており、IV b期に後期前半「1世紀半ば」という年代を与えており(橋口1979、宮崎1986)。

『II-K区』

【II層】(第157図) 1は高坏の中空の脚柱部である。坏部と脚柱部の接合面から破損しており製作手順が観察できる。脚柱部内面にしづりが見られる。2は台付甕の台部。外面は縦方向の刷毛目の後に横方向のナデ。3は口唇部が丸く仕上げられる甕の口頸部。



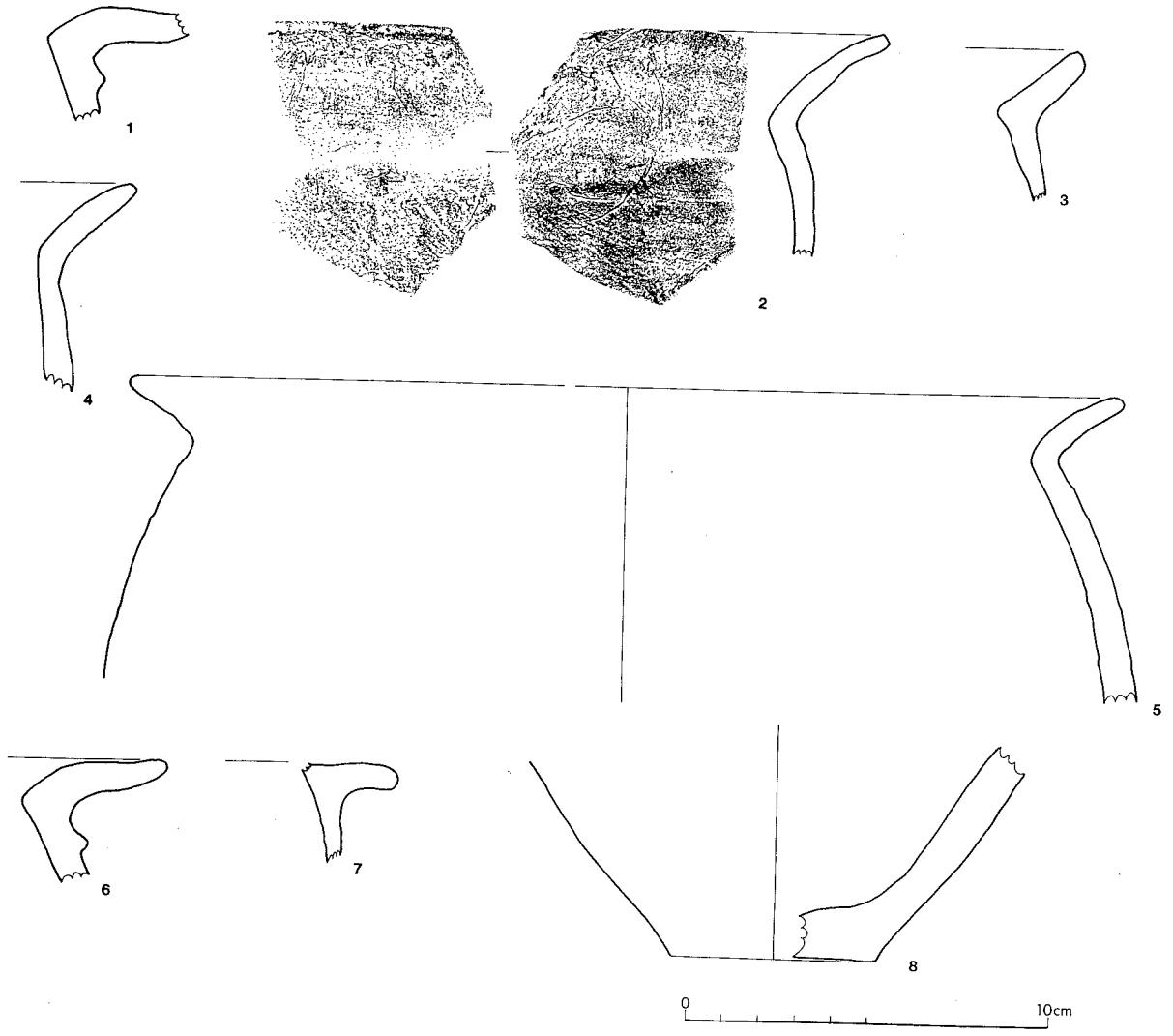
第146図 II-B・D区間畦畔部遺物実測図(1/2)(4・5:II層、1~3・6・7:III層)

『II-K・L区間畦畔部』

【III層】(第158図) 1は広口壺口縁部。口唇はやや凹状を呈す。2は台付壺の台部。内外面共ナデ。

『II-K・O区間畦畔部』

【I層】(第159図) 1・2は共に内外面に赤色顔料が塗布される壺の口縁部。1は頸部直下に断面三角形の突帯が付される。内外面共に横方向のナデ。2は内面肩部に横方向の刷毛目痕が残るが、外面にも若干認められる。



第147図 II—D区遺物実測図(1/2)(1:II層、2~8:III層)

【V層】(第159図) 4は弥生後期終末～古墳時代前期の小型壺の口頸部か。口縁部が短く外反し胴部中位付近に最大径がくる。細砂粒を非常に多く含むが、内外面共に横方向の丁寧なナデ調整がなされ砂粒は器表面では目立たない。

『II—L区』

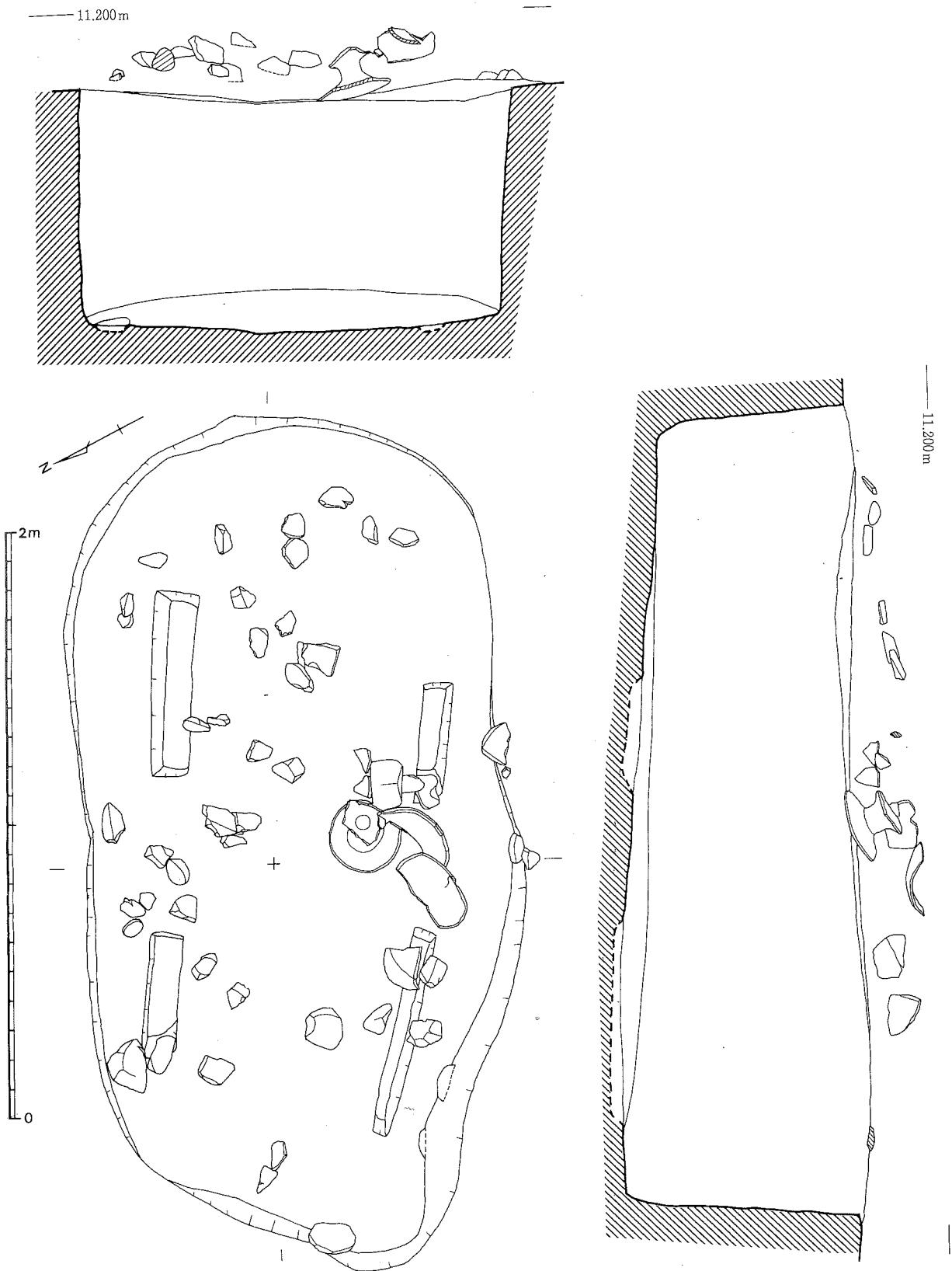
【II—L区IV層の集石遺構】(第161図) IV C 4面から切りこまれた長径約65cm、短径約40cm、深さ約50cmの不整円形土壙である。拳大前後の礫が上面に集積され一部は土壙内に落ちこんでおり、刷毛のある弥生式土器片1片が出土した。土壙墓の可能性がある。

【II層】(第160図) 1・2・3はすべて突帯が付される体部破片である。1・2の突帯は断面三角形であるが3は突帯頂部が摩滅しており断面形不明。3のみ赤色顔料が塗布される。

【集石土坑関連】(第162図) 1は「コ」の字形の突帯が付される弥生中期後半～後期前半の体部破片。突帯頂部は凹状を呈する。2は断面三角形の突帯が2条付される。外面は横方向のナデであり、 $\phi 2\text{ mm}$ 程度の石英粒を非常に多く含む。

『II—L・P区間畦畔部』

【II層】(第163図) 1は弥生時代壺の口縁部。口縁部内面は稜を有する。内外面共に横方向のナデ。2・3は突帯が付される体部破片。共に突帯頂部が摩滅しており突帯断面形は不明であるが三角



第148図 II-E区IV層集石遺構実測図

形であると思われる。2は $\phi 2\text{mm}$ 以下の砂粒を非常に多く含む。

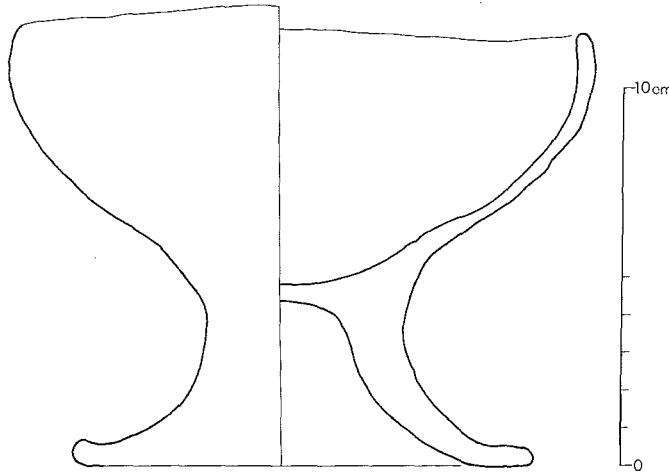
【IV層】(第163図) 4は弥生時代の壺の体部下半および底部。底部下面は器表面が剥落している。底部近くの体部には縦方向の刷毛目痕が残り、内面はナデ。5・7は台付甕の台部。5は台部径8.4cm・台部高さ3.2cm・底部径5.4cmである。微細な砂粒を非常に多く含む。外面は基本的に横方向のナデ。7は推定台部径7.8・推定底部径6.0cm。台部下端の接地部の幅が1.2cm程度と比較的広くがっしりとした作りである。6は突帯が付され内外面に赤色顔料が塗布される頸部破片である。

『II-N・R区間畦畔部』

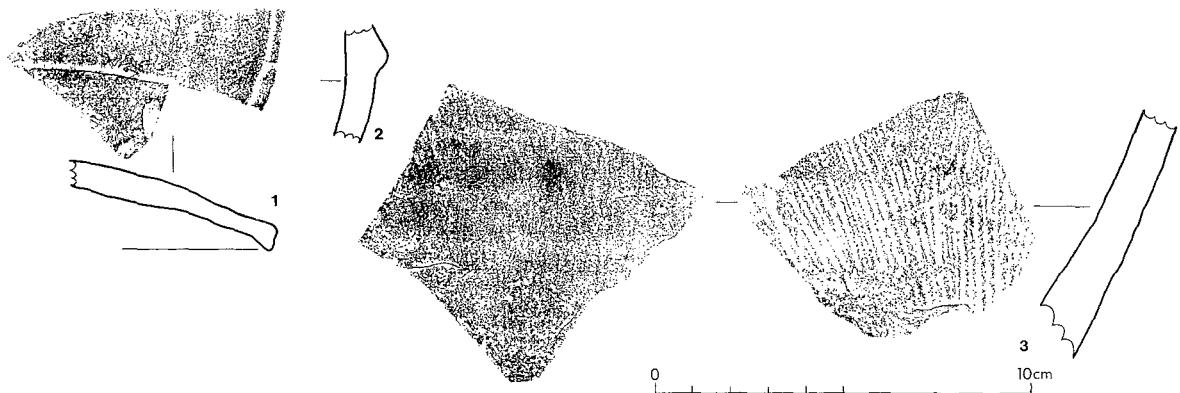
【堅穴埋土遺物】(第164図) 弥生後期初頭頃の甕口縁部破片が出土している。口縁部は真横に開き、口唇部は丸みをもって肥厚する。口縁部内面は調整によって凹状を呈する。内外面共に横方向のナデ。 $\phi 1\text{mm}$ 弱の石英粒が非常に多く含まれる

『II-O区』

【IV層】(第165図) 1は弥生後期終末～古墳時代前期初頭の器厚4～5mmの薄手の台付甕の上半部。内面屈曲部は稜を有し、口縁部は内湾しながら開き口唇部は平坦に仕上げられる。口径23.6cm・頸部径20.0cm・胴部最大径23.2cm・現存部高さ15.0cm。器表面の摩滅によって調整は一部のみしか観察できないが口縁部外面は横方向のナデ。胴部外面に一部縦方向の刷毛目痕が残る。2は甕の肥厚する口縁部。頸部が内側に突出する。3は横方向に口縁部が開く甕の口縁部。口唇部は丸みをもって仕上げられる。口縁部内外面共に横方向のナデ。 $\phi 1\text{mm}$ 以下の石英粒を多く含む。4は頂部が丸い断面三角形の突帯が2条される体部破片。外面の突帯上下は横方向のナデ。内面は縦方向の刷毛目。5は弥生後期終末～古墳時代前期の大型の高坏の中空構造の脚柱部。赤色顔料の痕跡が僅かに残存し、底部径は6.3cmである。6～10は台付甕の台部である。台部高には違いが認められるが、外反しながら下端部へつづく器形・細砂粒を多く含むこと・橙色の色調は同じである。6・7・9の台部内面は丁寧な横方向のナデが巡る。6は底径5.5cm程度。7は台部径10.0cm・台部高3.0cm・底径6.0cm。8は台部径10.0cm・台部高2.8cm・底径5.8cm。9は底径6.0cm。10は台部径11.6cm・底径6.4cm程度。

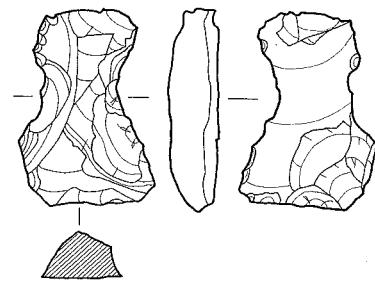


第149図 II-E区土壌墓副葬高坏実測図(1/2)

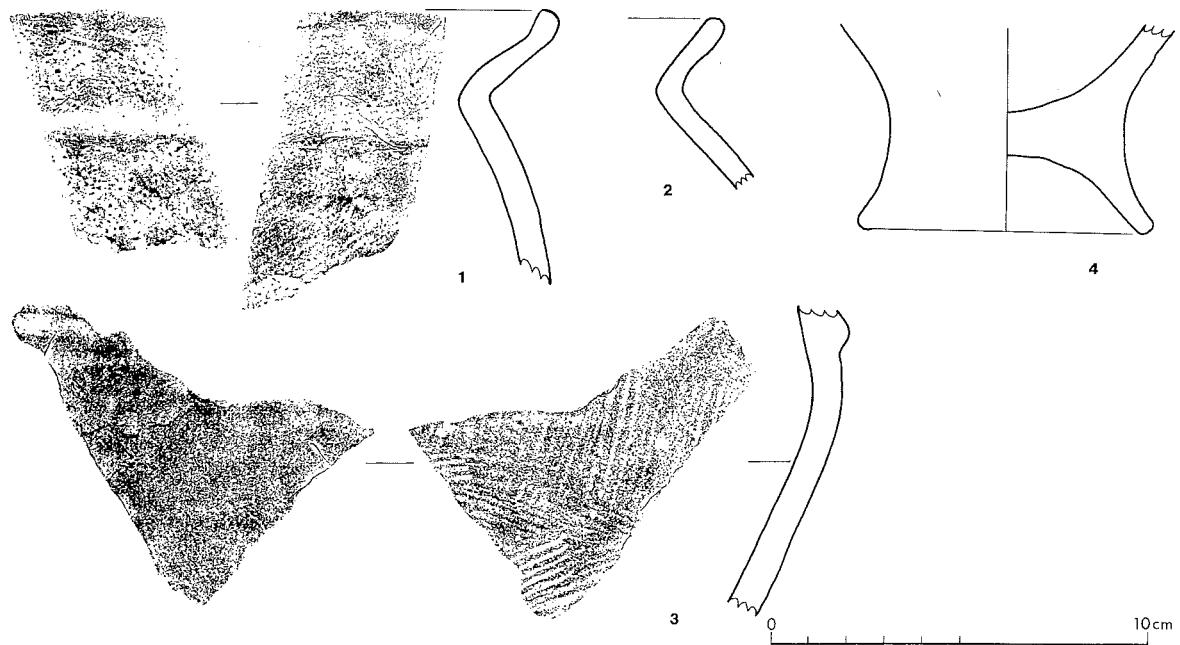


第150図 II-G区II層遺物実測図

【II-0区V層 台付甕一括出土】(第167図) 当層では弥生後期終末～古墳時代前期の台付甕1点と古代のものと思われる土師質の甕の口頸部破片1点が出土した。1と2は同一個体と思われる。1は口径18.2cm・頸部径16.2cm・胴部最大径18.0cm・現存部高さ10.0cmである。2は台部径8.6cm・底径6.4cm・台部高3.2cm・現存部高さ17.8cmである。内外面共に丁寧なナデが施され、薄手の土器である。3は口縁部外面はヨコナデ、頸部外面に叩き痕が認められる。内面の頸部以下は斜め方向の短い刷毛目痕が残る。色調は明るい橙色。



第151図 II-G・K区間畦畔部遺物実測図(1/1)



第152図 II-H区III層遺物実測図(1/2)

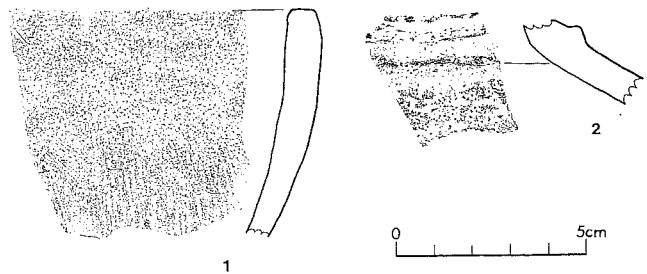
『II-O・P区間畦畔部』

【IV層】(第168図) 1は碗形の薄手の鉢。口縁部内面は横方向のナデ。推定口径8.6cm・推定胴部最大径9.4cm・現存部高さ5.4cm。2は3と同一個体で弥生後期終末～古墳時代前期初頭の台付甕の口頸部か。5と同一個体の可能性あり。推定口径16.5cm・推定胴部最大径16.0cm・推定頸部径16.2cm・現存部高さ11.2cm。頸部で緩やかに外反するが、頸部内面に明瞭な稜を有する。口頸部内外面共に横方向のナデ。外面肩部以下には縦方向のケズリ+微細な線状痕が残るナデ。内面肩部付近は左下→右上方向のナデ。細砂粒を多く含むが器面調整によってあまり目立たない。5は台付甕台部であり2・3と対応する可能性あり。推定台径9.4cm・台部高3.2cm・推定底部径5.4cm。4は薄手の甕の口縁部。肩部外面には縦方向の刷毛目痕が残るが、肩部内面には左上→右下方向の刷毛目の後に、その上から左下→右上方向の刷毛目が施されている。6は弥生後期の複合口縁壺の口縁部。頸部で外反しながら開き口縁部で短く内傾する。7は外面にφ9mm程度の連珠文が横回転で、内面には縦方向の原体条痕+横回転の連珠文が施される押型文土器の口縁部。口頸部で緩やかに外反する。角閃石を含む。

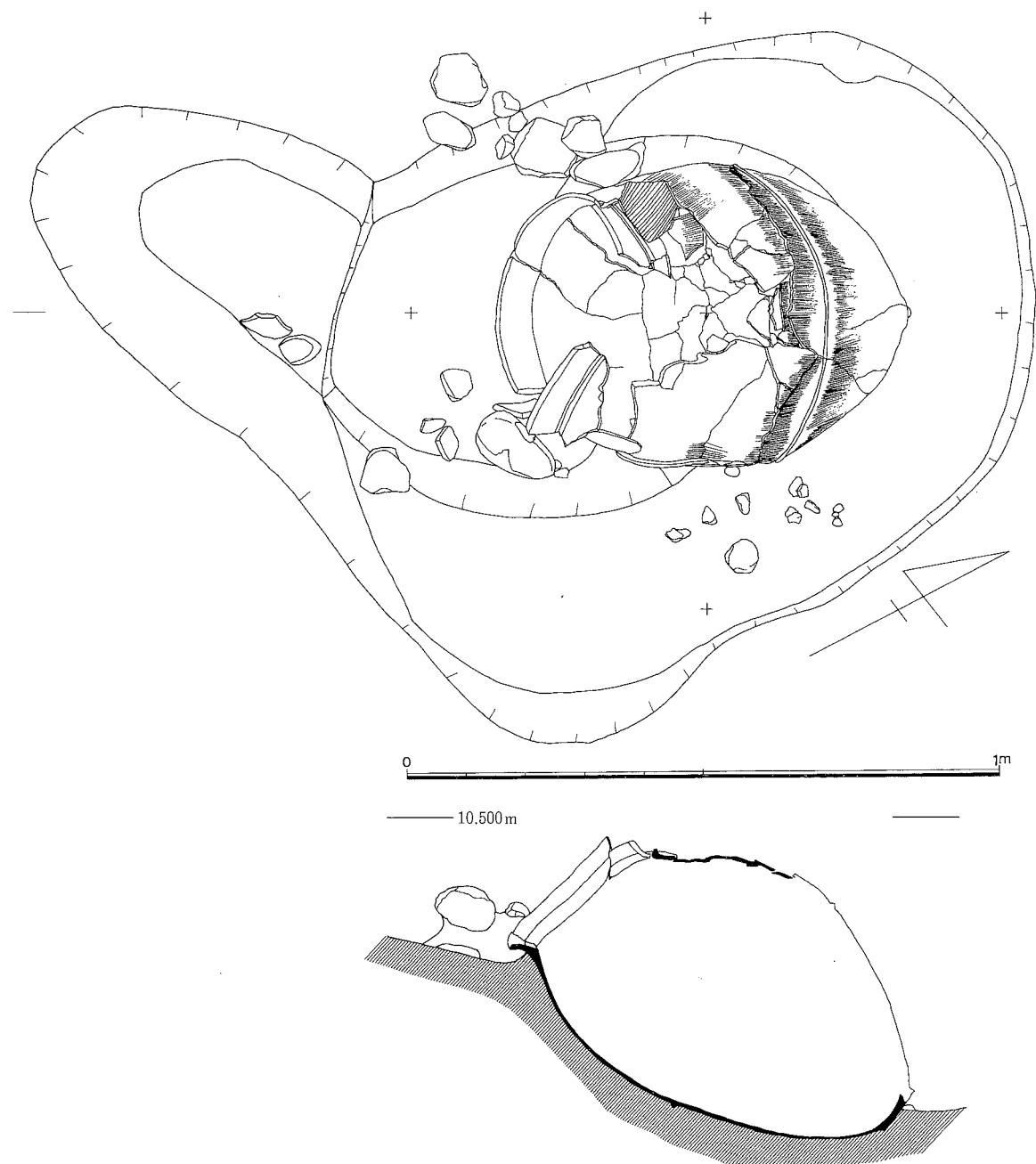
『II-P区』

【IV層】(第171図) 1は頸部で外反する甕の口縁部破片。口唇部は丸く仕上げられる。φ1mm程度の砂粒を非常に多く含む。2は弥生中期中葉～後葉の中九州の黒髪式系の甕の口縁部である。頸部内

面が突出し口縁部内面が内湾する。金雲母を含み、搬入品の可能性がある。3は頂部が凹状を呈する突帯が肩部に付される甕。外面は横方向の丁寧なナデ。4は口縁先端部が垂れ下がり気味の弥生中期末頃の甕口縁部。口唇部が丸みをもって肥厚する。 ϕ 1 mm程度の石英粒を多く含む。5は断面三角形の突帯が2条残る体部破片。角閃石を含む。6は低い突帯が付される壺の頸部。突帯より上位に縦方向の刷毛目痕が残る。7は縄文晩期後葉の鉢の口頸部。肩部で急激に屈曲し外反気味に内傾する。口縁部直下に沈線状の横走線が認められる。内外面共に横方向のナデ。胎土には角閃石を非常に多く含む。



第153図 II-H区IV層遺物実測図(1/2)



第154図 II-H区甕棺墓出土状況実測図

【溝関連遺物】(第172図) 当区では自然の溝の窪みから、拳大の礫と弥生時代の遺物が多数出土した。1は台付甕の台部。台径7.4cm・台部高さ2.8cm・底部径5.0cm。内外面共に横方向のナデ。石英・角閃石を含む。2は断面三角形の突帯が付され外面に赤色顔料が塗布される甕の体部である。

『II-P・Q区間畦畔部』

【I層】(第173図) 1は断面三角形の突帯を付された甕の肩部である。外面は横方向のナデ。 ϕ 1mm程度の砂粒を非常に多く含む。

【II層】(第173図) 2は古代の土師質の甕の丸く外反する口縁部。口唇部は丸みを帯びる。石英・角閃石を含む。

『II-P・T区間』

【III層】(第174図) 1は突帯が頸部に付され、口縁部が横に開く甕。突帯断面形は頂部が摩滅しているため不明。内外面に赤色顔料が塗布される。2は断面三角形の突帯が3条残る甕の肩部破片。突帯間は横方向のナデ。 ϕ 1mm程度の砂粒を含む。

【IV層】(第174図) 3は口縁部が横方向に開き先端部が若干垂れ下がる甕の口縁部。頸部に突帯または横走沈線が施される。調整によって口縁部内面がやや内側に突出する。内外面共に横方向のナデ。

『II-Q・U区間畦畔部』

【遺物】(第175図) 1・2・3は同一個体と考えられる「コ」の字形の突帯が付される甕の体部である。幅6mm程度の突帯頂部には、刷毛目原体によると思われる施文具で1.0個/cmで刻みが施される。外面の突帯上下は横方向のナデ。外面は縦方向の刷毛目である。内面は左下→右上方向の刷毛目痕跡が残る。石英・角閃石を含む。色調橙色。

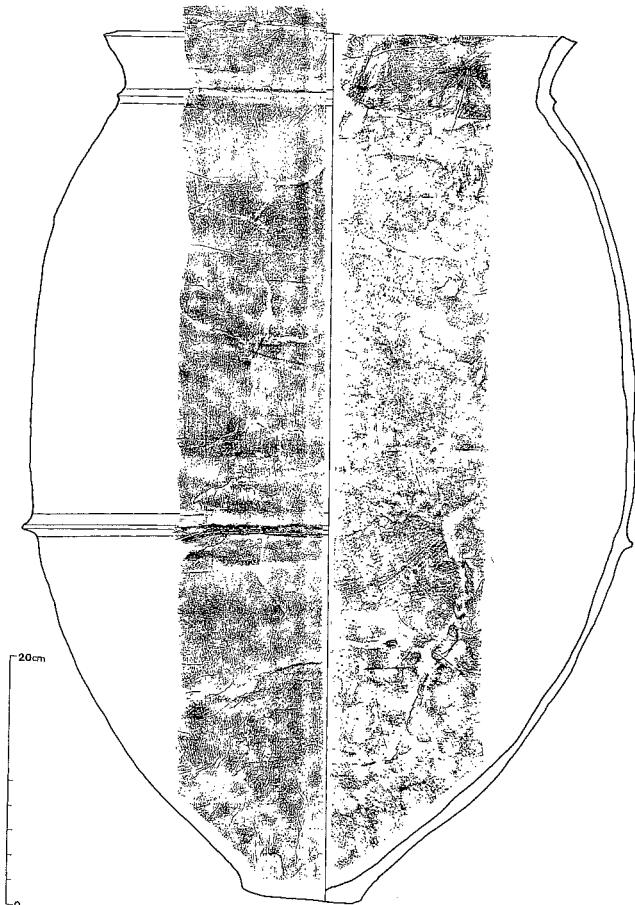
『II-R区』

【II-R区 壓穴状遺構】

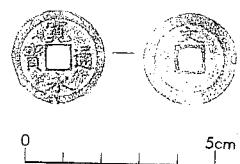
【壓穴遺物】(第176図) 台付甕の台部1点のみ図示された。台径6.2cm・台部高2.2cm・底部径4.6cmである。 ϕ 1mm以下の石英粒や砂粒を多く含む。器表面が摩滅した部分は砂粒が露出している。

『II-T区』

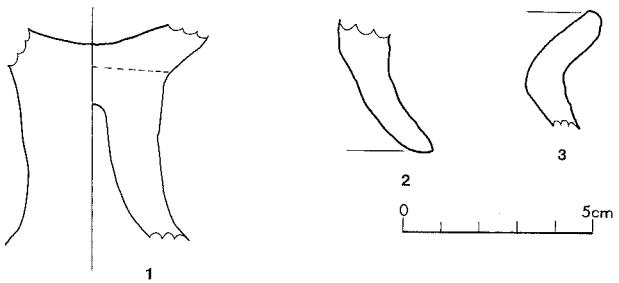
【III層】(第177図) 1は弥生土器の甕の



第155図 II-H区甕棺実測図(1/6)



第156図 II-J区 III層
遺物実測図(1/2)



第157図 II-K区 II層遺物実測図(1/2)

口縁部。口縁部は若干外反気味に開き、頸部で僅かに内側に突出する。内外面共に横方向のナデ。角閃石を非常に多く含む。

【IV層】(第177図) 2は中世の土師質土器である。底径5.4cm・現存部高さ1.8cm。底部糸切り。2は須恵器の蓋受けのある壊身である。外面は薄めの青灰色であるが、断面および内面は肌色である。蓋受けは外反気味に直立する。

『II-T・U区間畦畔部』

【II層】(第178図) 断面三角形の突帯が2条残る壺の体部が出土した。突帯の上下は横方向のナデ。 ϕ 1mm程度の砂粒を多く含む。

『II-T・W区間畦畔部』

【III層】(第179図) 古代の土師質の甕の口頸部が出土した。石英・角閃石・ ϕ 1mm以下の砂粒を多く含む。外面は横方向のナデ。

『II-U区』

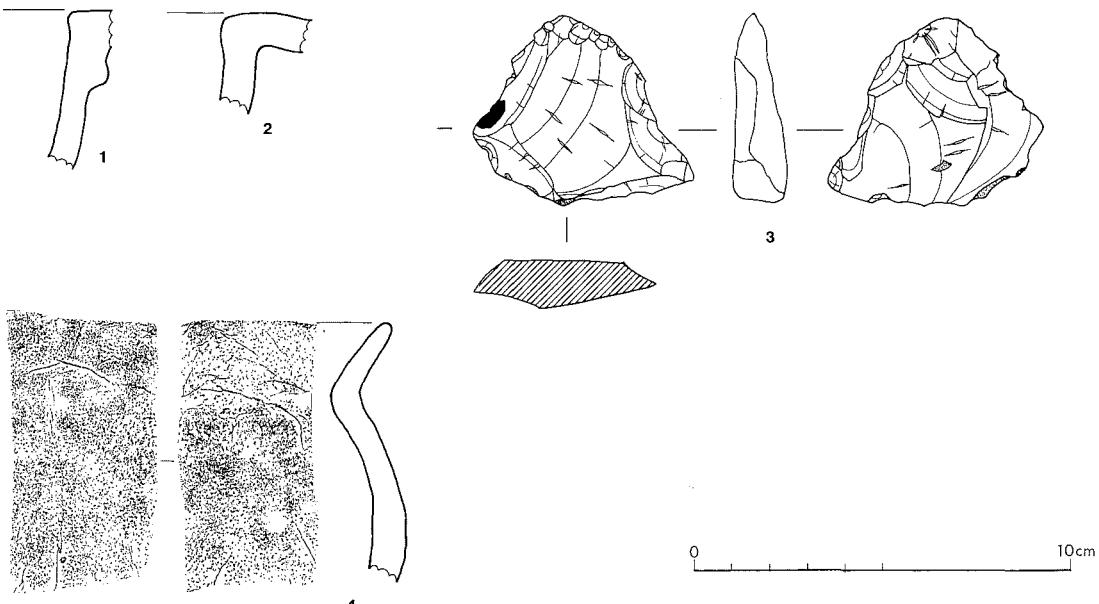
【V層】(第180図) 弥生時代の壺の底部片が出土している。平底から内湾気味に立ち上がる。推定底径6.0cm・現存部高さ5.6cm。外面は横方向のナデ。細砂粒を多く含む。内面の色調は鮮やかな橙色。

『II-V区』

【III層】(第181図) 2は古代～中世の煮沸具の口縁部。口頸部外面に炭化物が付着している。内外面共に横方向のナデ。

『II-V・W・X・Y区間畦畔部』

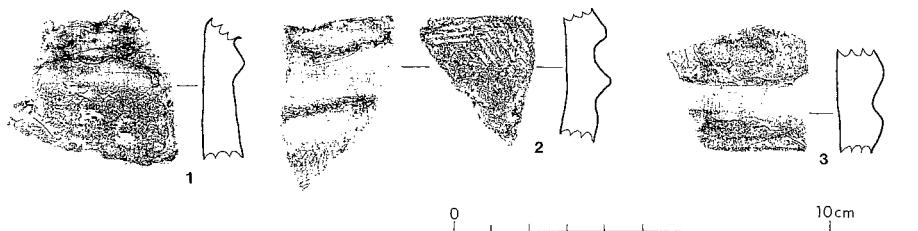
【VI層上面】(第183図～193図) 当層出土の遺物は『考察』にて取り上げる。



第158図 II-K・L区間畦畔部III層遺物実測図(1/2)

『II-W区』

【III層】(第196図) 1は肩部に断面「M」字状の突帯が付される甕。頸部で急激に外反する。 ϕ 2mm程度の砂粒を非常に多く含む。



第160図 II-L区II層遺物実測図(1/2)

に外反する器形。1は内外面共に横方向の板目状のナデ痕が認められる。4は第198図3と同一個体である。口縁部は内外面共に横方向のナデ。頸部外面は左上→右下方向や縦方向のヘラナデ。細砂粒を多く含む。5は砲弾形を呈する深鉢の口縁部。口唇部は丸く仕上げられる。角閃石を含む。2は弥

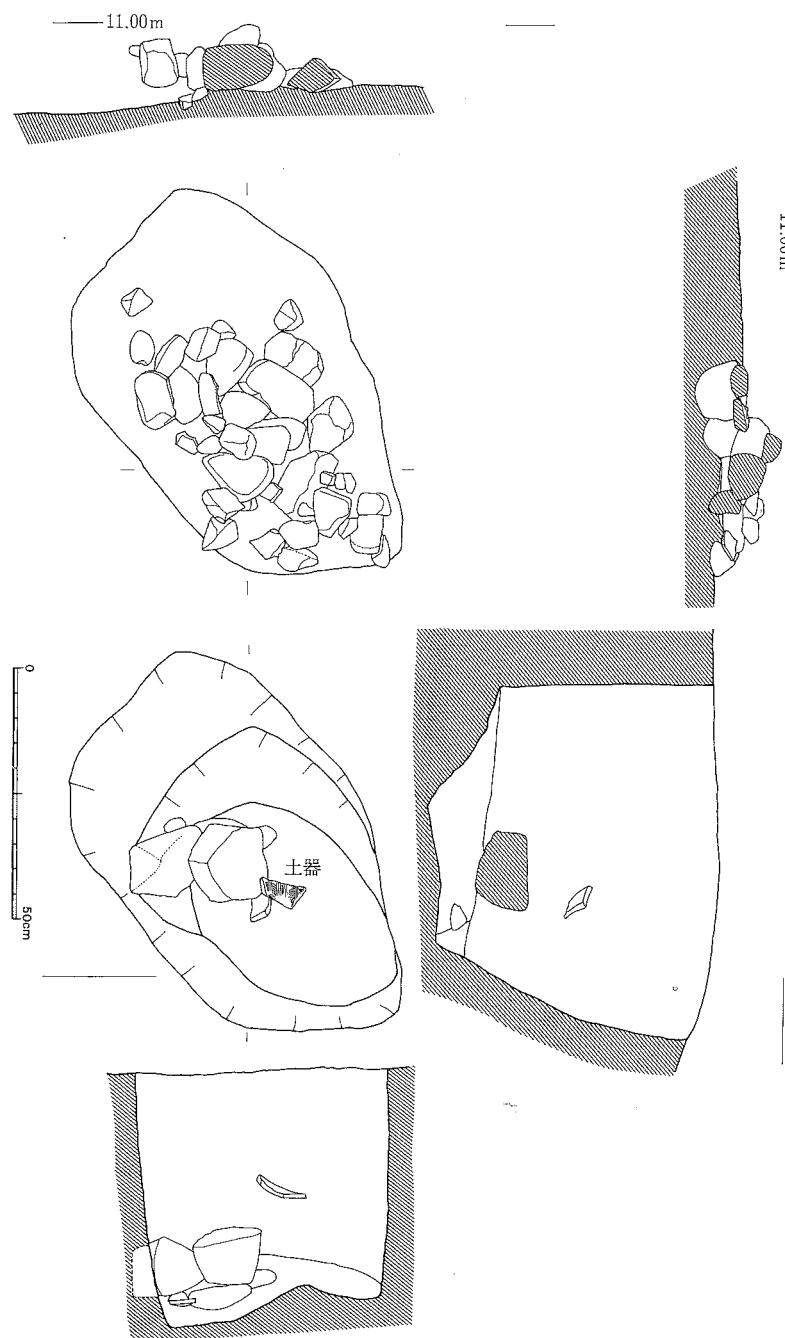
【IV層】
(第197図) 1・
4・5は縄文晚期
前葉の深鉢の口縁
部である。1・4
は口頸部で緩やか

生次代中期の口縁部が横方向
に開く壺。頸部で内側に突出
し、口縁部内(上)面が湾曲
する。口唇部は丸く仕上げら
れる。口頸部は内外面共に横
方向のナデ。肩部は縦方向の
刷毛目の後に横方向のナデ。
角閃石を非常に多く含む。3
は断面三角形の突帯が2条残
る壺の体部破片である。突帯
の上下は横方向のナデ。内面
は横及び縦方向の刷毛目痕が
残る。φ1mm程度の砂粒を多
く含む。

【V層】(第198図) 1・2・
3は縄文晚期前葉の深鉢の口
縁部である。1・3・4は口
頸部で緩やかに外反するもの
である。1は外面は横方向の
ナデ。内面は磨かれたような
緻密な器表面である。3は第
197図4と同一個体である。4
の口唇部は外側につまみ出
したように短く外反する。内外
面共に横方向のナデ。金雲
母・角閃石を含む。

『II-X区』

【II-X区IV層下面(黒褐色
混礫)の集石遺構】(第201図)
長径70cm短径40cm程度の浅い
土壙を伴う集石遺構で、人頭

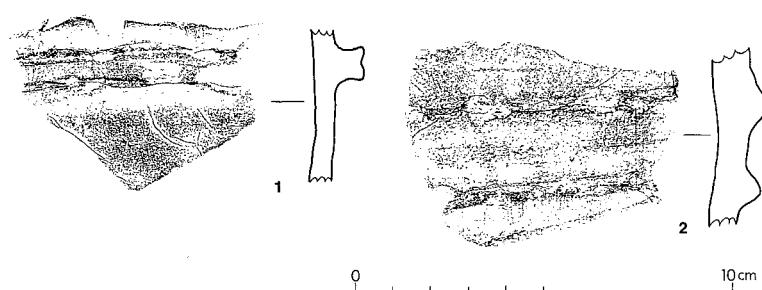


第161図 II-L区II層面集石遺構実測図

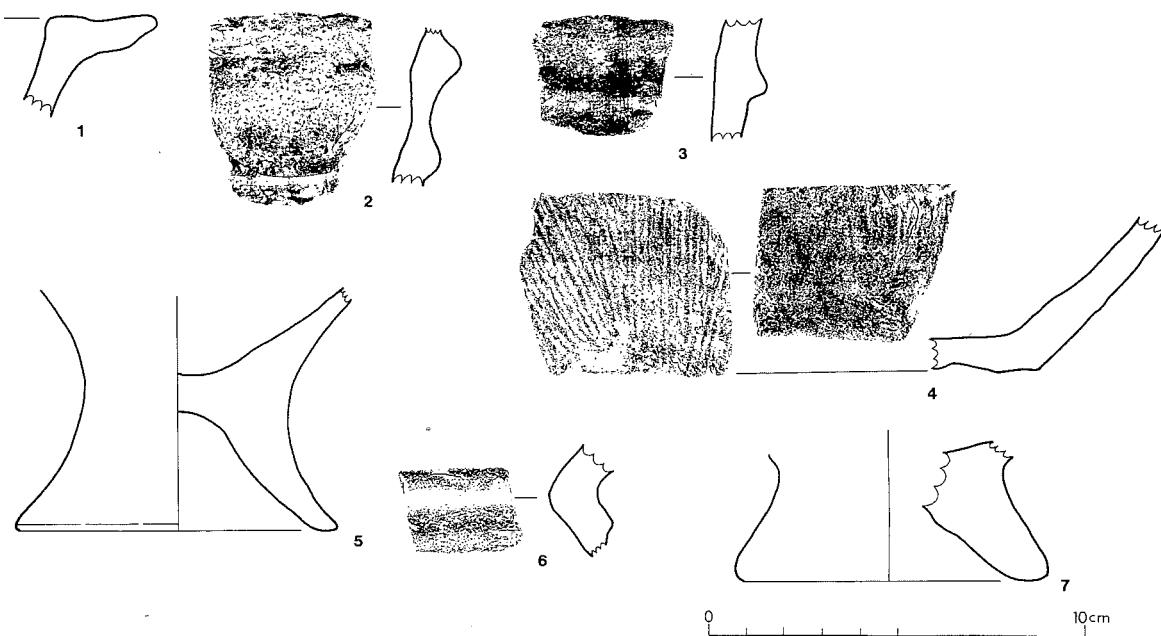
大の礫6個と拳大の礫多数をもつ遺構である。土壤底面から縄文晩期前半の土器片1点が出土した。礫群は焼灼による赤変が見られ、人頭大の礫は焼灼による表面の剥離が著しい。屋外炉と考えられる。

【IV層】(第199図) 1は時期不明の平底。推定底径7.2cm・現存部高さ1.4cm。内外面・底下面はすべて丁寧なナデ。

【V層】(第200図) 1は弥生中期の肥後系の甕口頸部。推定口径23.0cm・現存部高さ4.5cm。頸部内面が内側にやや突出する。内外面共に横方向の丁寧なナデ。



第162図 II-L区集石遺構関連遺物実測図(1/2)



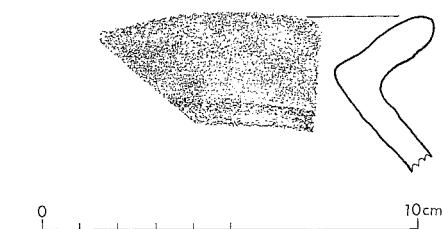
第163図 II-L・P区間遺物実測図(1/2)(1～3：II層、4～7：IV層)

『II-Z区』

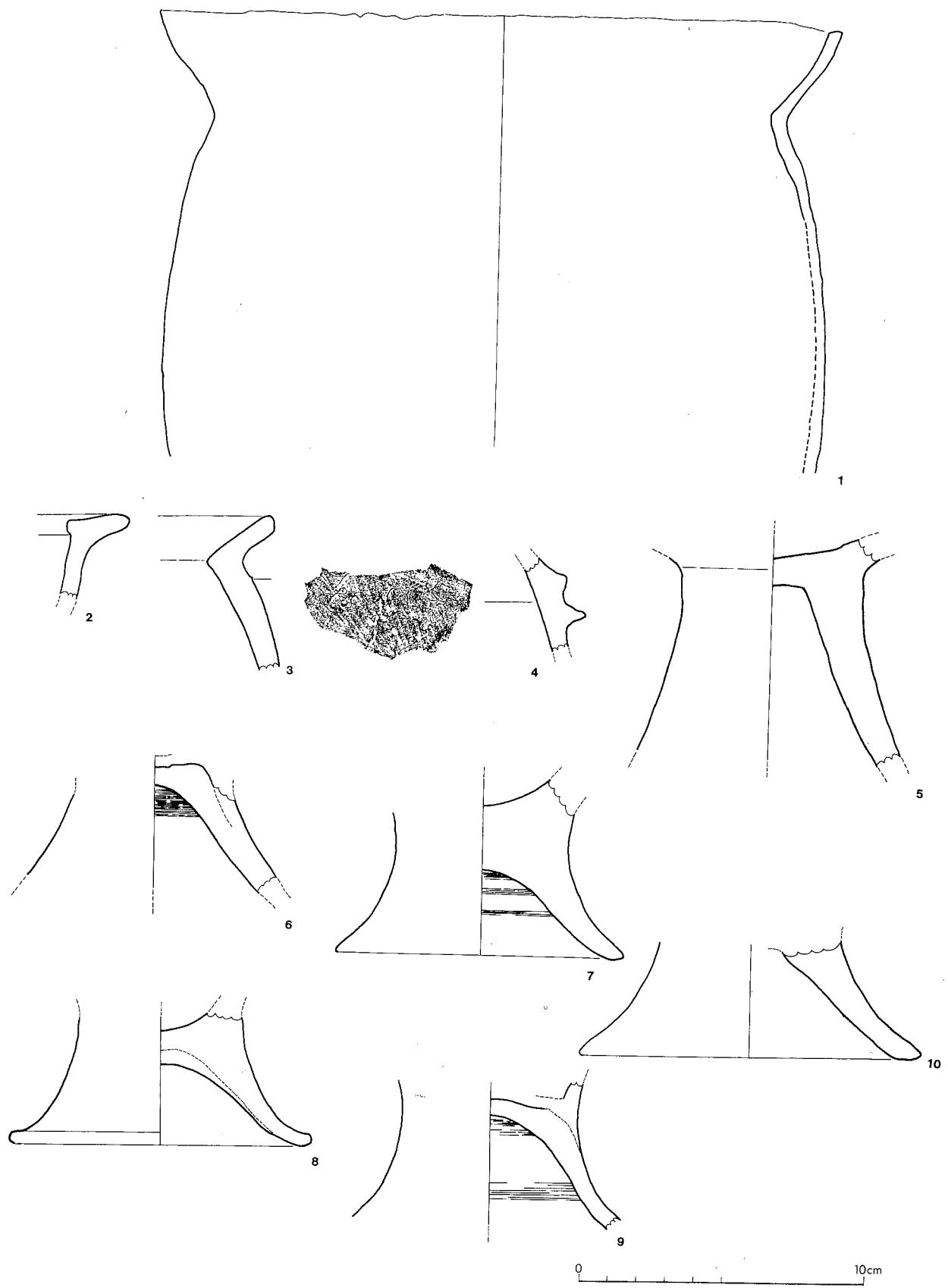
【IV層】(第205図) 2・3は同一個体と思われる弥生中期の甕の口縁部。頸部内面がやや内側に突出する。器表面は摩滅が激しく調整の観察が困難であるが、頸部外面の横方向のナデ痕のみ確認できる。

【V層】(第205図) 6は弥生後期の甕口頸部。内面の口頸部の屈曲部の面取り部が特徴的である。内外面横方向の丁寧なナデ。石英・角閃石を含む。7は内外面共に赤色顔料が塗布された体部破片である。断面三角形の突堤が1条残る。外面は縦方向の刷毛目痕・内面は左上→右下方向の刷毛目痕が確認できる。

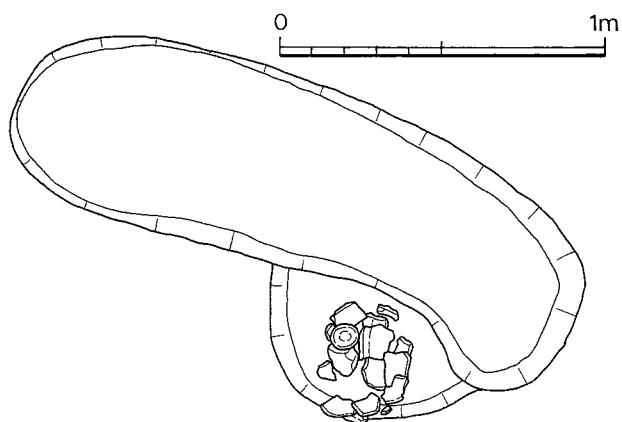
【II-V・W・X・Y区間畦畔部VI層屋外炉状遺構】(第183図) 人頭大の礫数箇を半円形に配し、周辺に柱穴状ピットのある遺構である。礫群は焼灼によって変色し熱による剥離が著しく床面は硬化している。縄文晩期前半～半ばの土器(第187図)数個体分と片刃のノミ形石器1点、黒曜石剝片1点が出土した。屋外炉と考えられる。



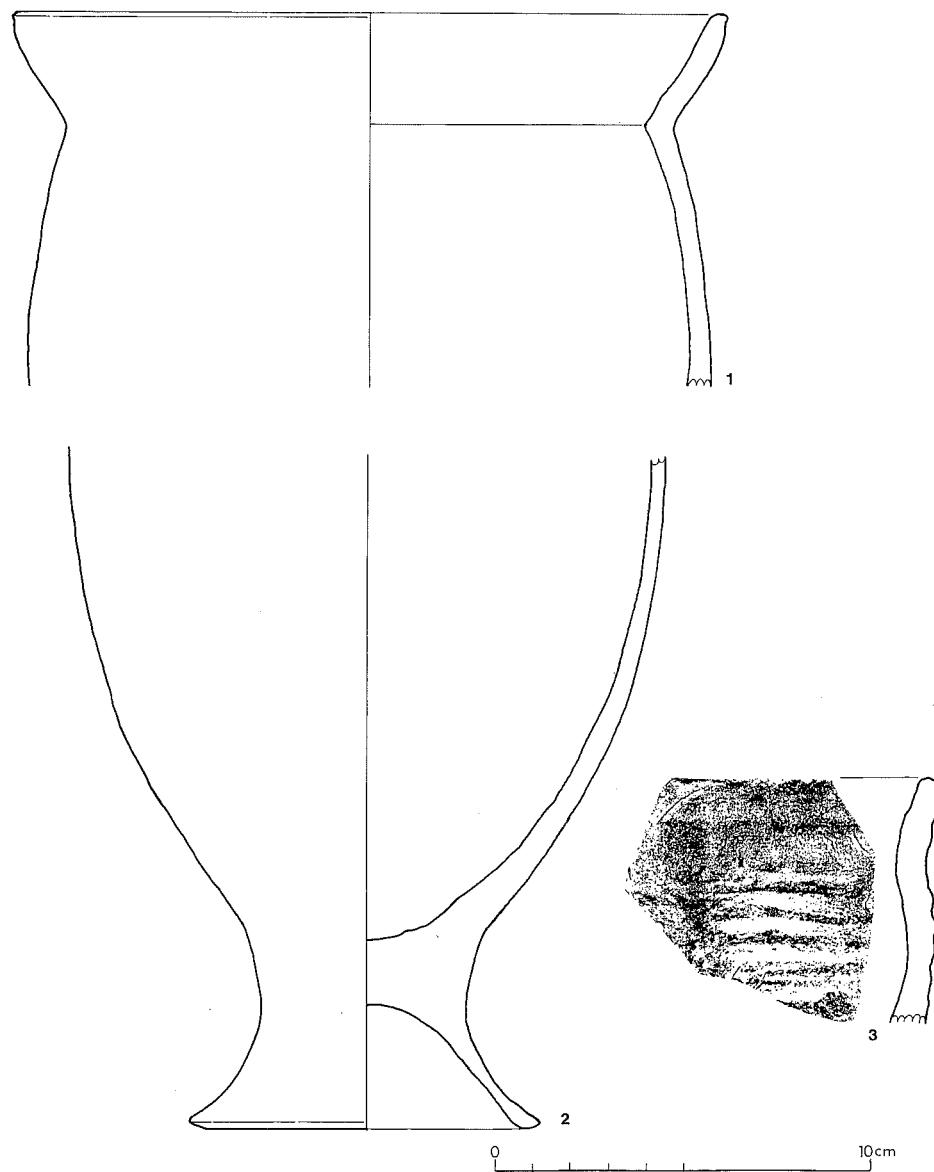
第164図 II-N・R区間畦畔部竪穴埋土遺物実測図(1/2)



第165図 II-O区IV層遺物実測図(1/2)



第166図 II-O区弥生土器出土状況実測図



第167図 II-O区V層遺物実測図(1/2)

II区の石器

【II-B区II層の石器】(第141図) 7は粗質でやや肉厚の黒曜石製剝片である。

【II-B区III層の石器】(第144図) 4は敲石で径10cmほどの安山岩礫を用いている。片面が激しい敲打によって剝離している。5は良質の砂岩製砥石で2面に砥ぎ面がある。

【II-G・K区間畦畔部の石器】(第151図) やや肉厚、良質の黒曜石製石器で抉り加工があるが完形品で器種は不明。

【II-K・O区間畦畔部I層の石器】(第159図) 4は黒曜石製剝片で1側に微細な二次加工がある。

【II-O・S区間畦畔部II層の石器】(第169図) 不整形の剝片で1側に微細な二次加工がある。

【II-P区IV層の鉄器】(第171図) 8は袋状の鉄器で下半部分が欠損している。鉄斧と考えられるが攢乱層出土のため時期を特定できない。

【II-T区IV層の石器】(第177図) 4は黒曜石製の尖頭器の尖端部分であるが攢乱層出土で時期を特定できない。

【II-V区III層の石器】(第181図) 3は粗質の縦長剝片で両側辺に微細な二次加工がある。4は黒曜石製の不整形石核で剝離方向は一定しない。

【II-V区IV層の石器】(第182図) 1は安山岩製搔器片である。薄手剝片の片側から細かい二次加工を施している。2は薄手の玄武岩を用いた扁平打製石斧で方形に整えている。刃部に一部損傷があるが使用痕が見られる。4は小型の扁平打製石斧で橢円形に整えている。3は偏平な安山岩礫を用いた敲石で側縁の一部に敲打痕がある。

【II-V区VI層の石器】(第194図) 29は縄文晚期の炉状遺構から出土した黒曜石製剝片で一側に微細な使用痕がある。30～31は黒曜石製の縦長剝片である。32は縄文晚期の炉状遺構から出土した蛇紋岩製のノミ状片刃石斧で下端の刃部が片刃に整えられ上端も片刃に仕上げられている。33は扁平打製石斧で玄武岩の自然面を多く残し、刃部に細かい使用痕がある。34は敲石で薄く割れている。

【II-V・W区間畦畔部IV層の石器】(第195図) 薄い安山岩の剝片を用いた横型石匙でつまみの両側に抉り加工がある。

【II-W区III層の石器】(第196図) 2は黒曜石の縦長剝片で一側に微細な使用痕がある。3は安山岩製の搔器と考えられる。両側に細かい二次加工が見られる。

【II-W区V層の石器】(第198図) 5は黒曜石の剝片である。

【II-X区IV層の石器】(第199図) 2は黒曜石製の良好な縦長剝片で両側縁に微細な使用痕がある。3は緻密な安山岩製尖頭器であるが上下が折損している。

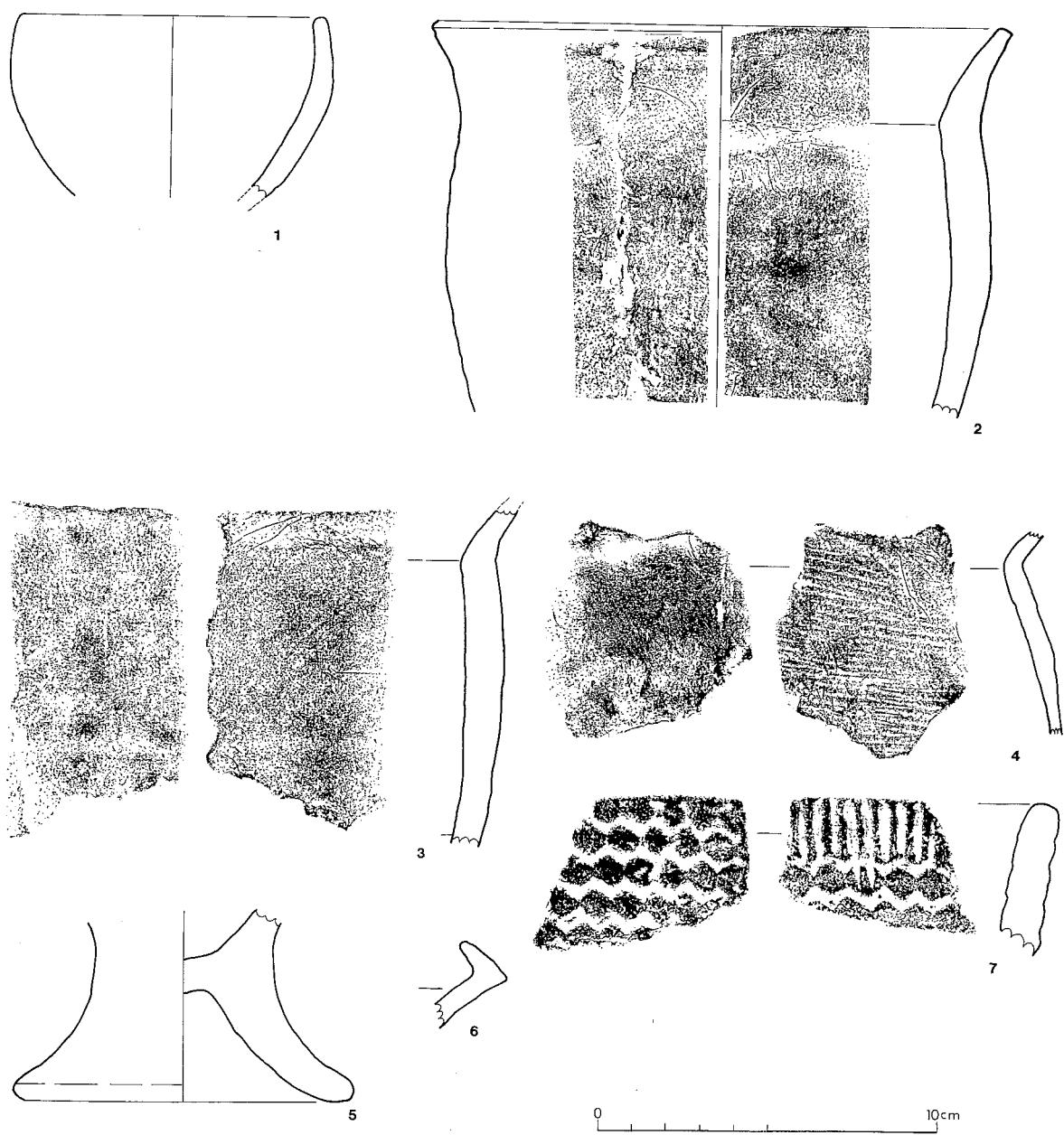
【II-X区V層の石器】(第200図) 2は玄武岩製、3は安山岩製の扁平打製石斧で1は粗い研磨痕がある。

【II-X・Y区間畦畔部の石器】(第202図) 1は黒曜石製石核で上辺からの剝離が見られる。2は緻密な安山岩を素材にした石包丁片でよく研磨されている。3は安山岩製搔器である。

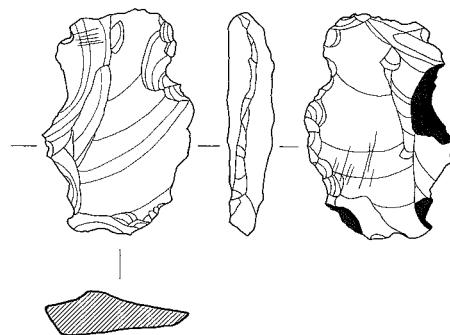
【II-X・Z区間畦畔部の石器】(第203図) やや不整形な黒曜石剝片で片側に微細な二次加工がある。

【II-Y区の石器 1：II層、2～6：IV層】(第204図) 1は黒曜石の剝片、下辺に微細な使用痕がある。2は砥石片。3は小型の搔器。4は黒曜石製の石鏃。5は黒曜石製の剝片。6は安山岩製縦型石匙で下端を欠損している。

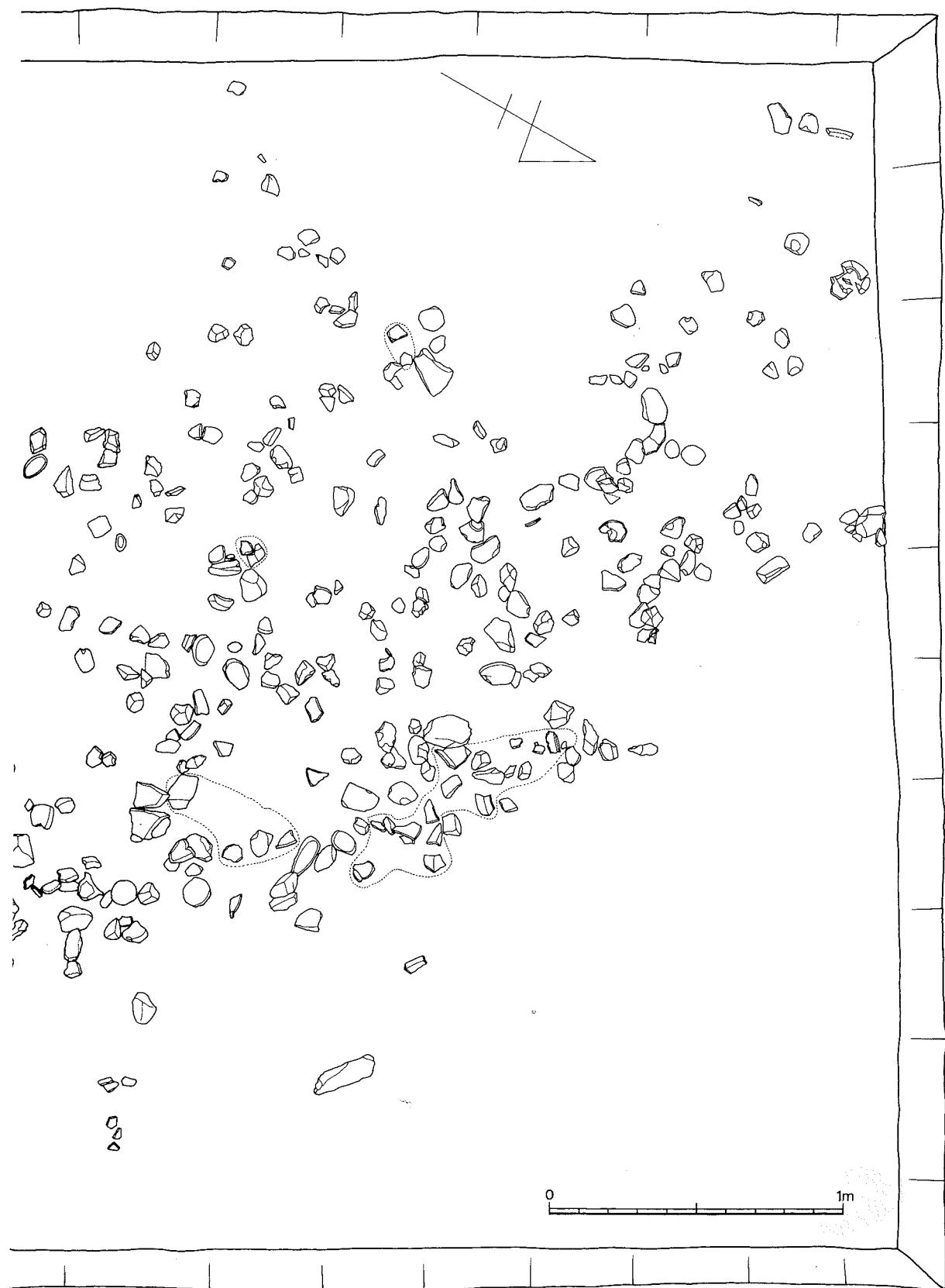
【II-Z区の石器 1：II層、4・5：IV層】(第205図) 1は粗質の黒曜石製剝片で下辺に微細な使用痕がある。4は石包丁片で刃部はよく研磨されている。5は黒曜石製剝片で片側に微細な二次加工がある。



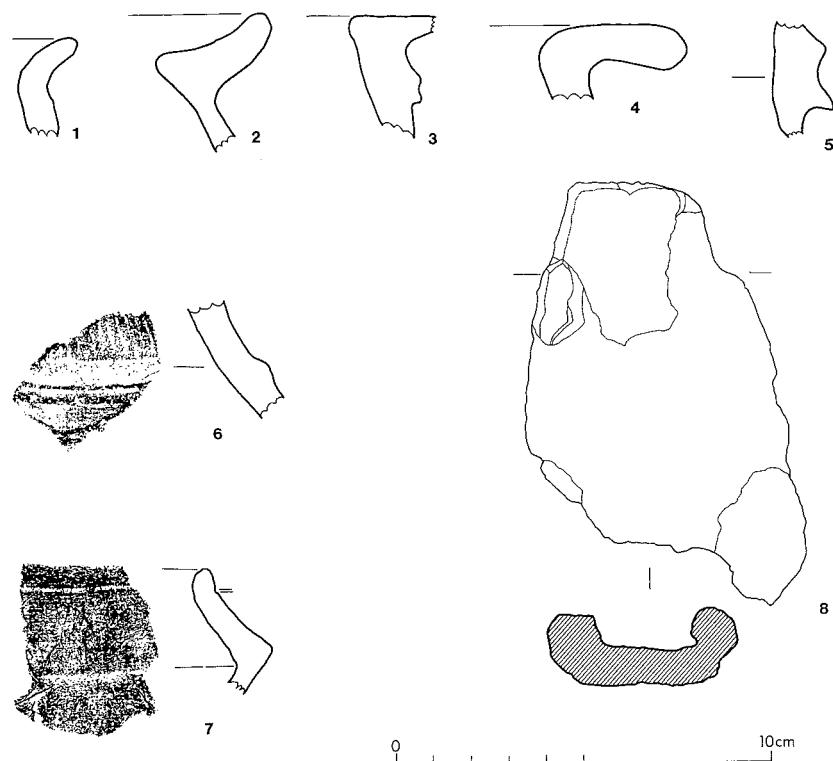
第168図 II-O・P区間畦畔部IV層遺物実測図(1/2)



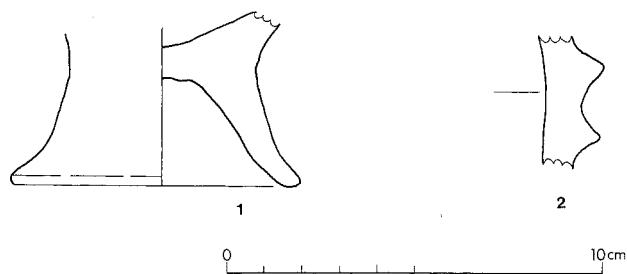
第169図 II-O・S区間畦畔部II層遺物実測図(1/1)



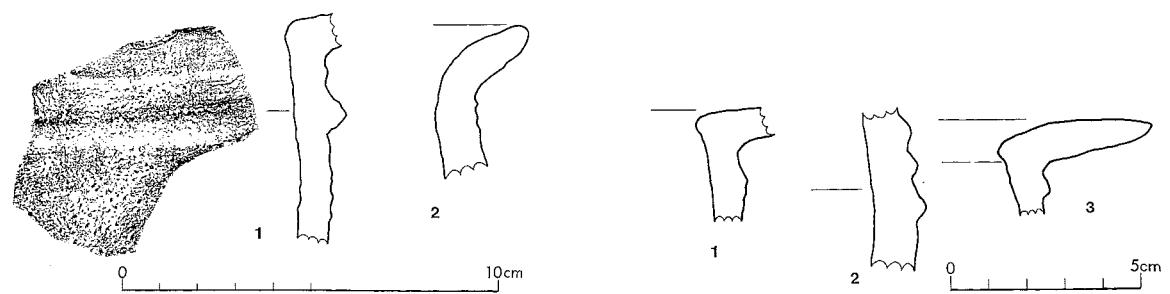
第170図 II-P区IV層遺物出土状況図(1/2)



第171図 II-P区IV層遺物実測図(1/2)

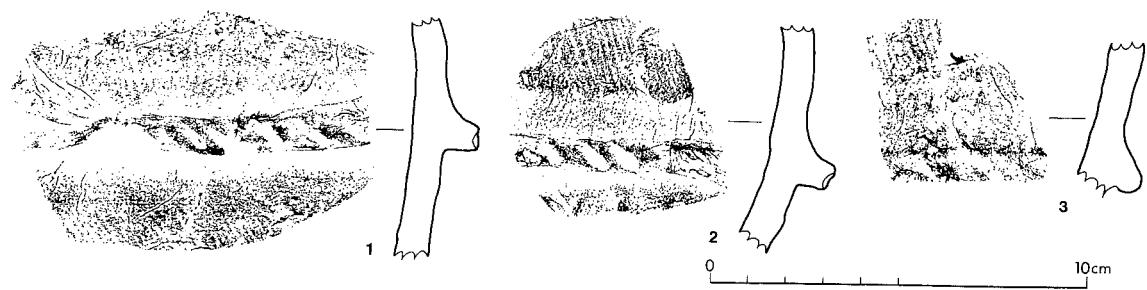


第172図 II-P区溝関連遺物実測図(1/2)

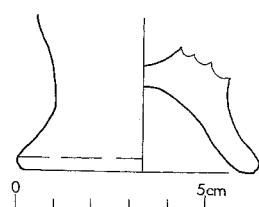


第173図 II-P・Q区間畦畔部遺物実測図(1/2)
(1: I層、2: II層)

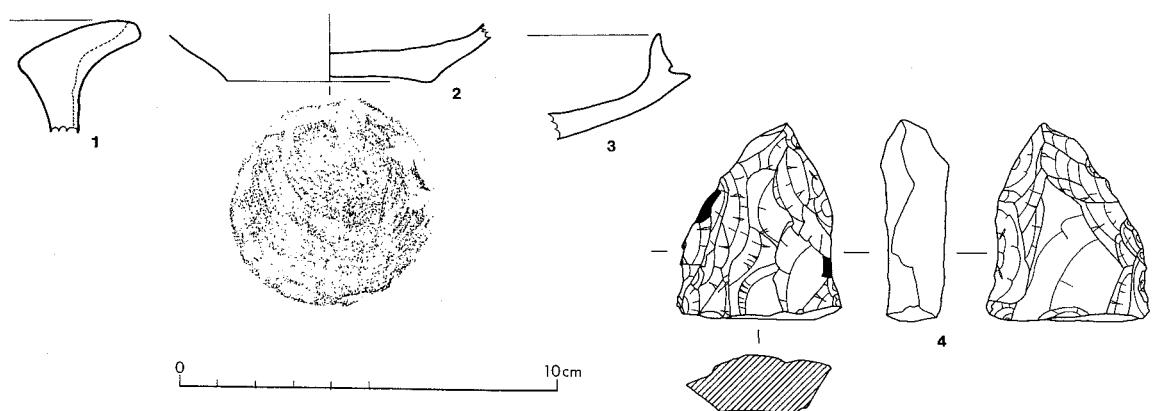
第174図 II-P・T区間畦畔部遺物実測図(1/2)
(1・2: III層、3: IV層)



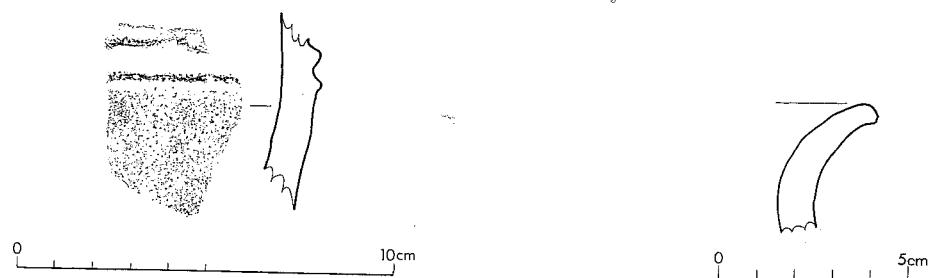
第175図 II—Q・U区間畦畔部IV層遺物実測図(1/2)



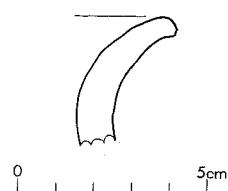
第176図 II—R区住居跡遺物実測図(1/2)



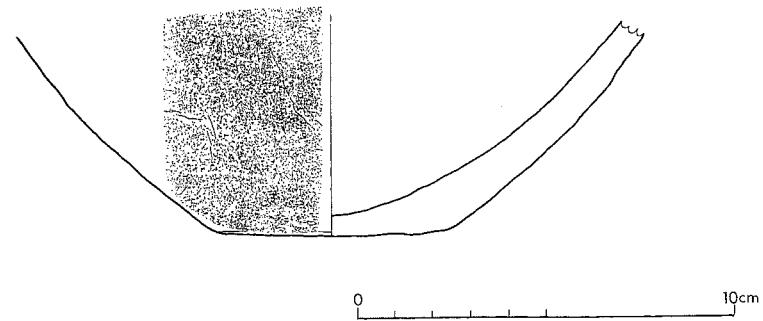
第177図 II—T区遺物実測図(1/2)(1:III層、2~4:IV層)



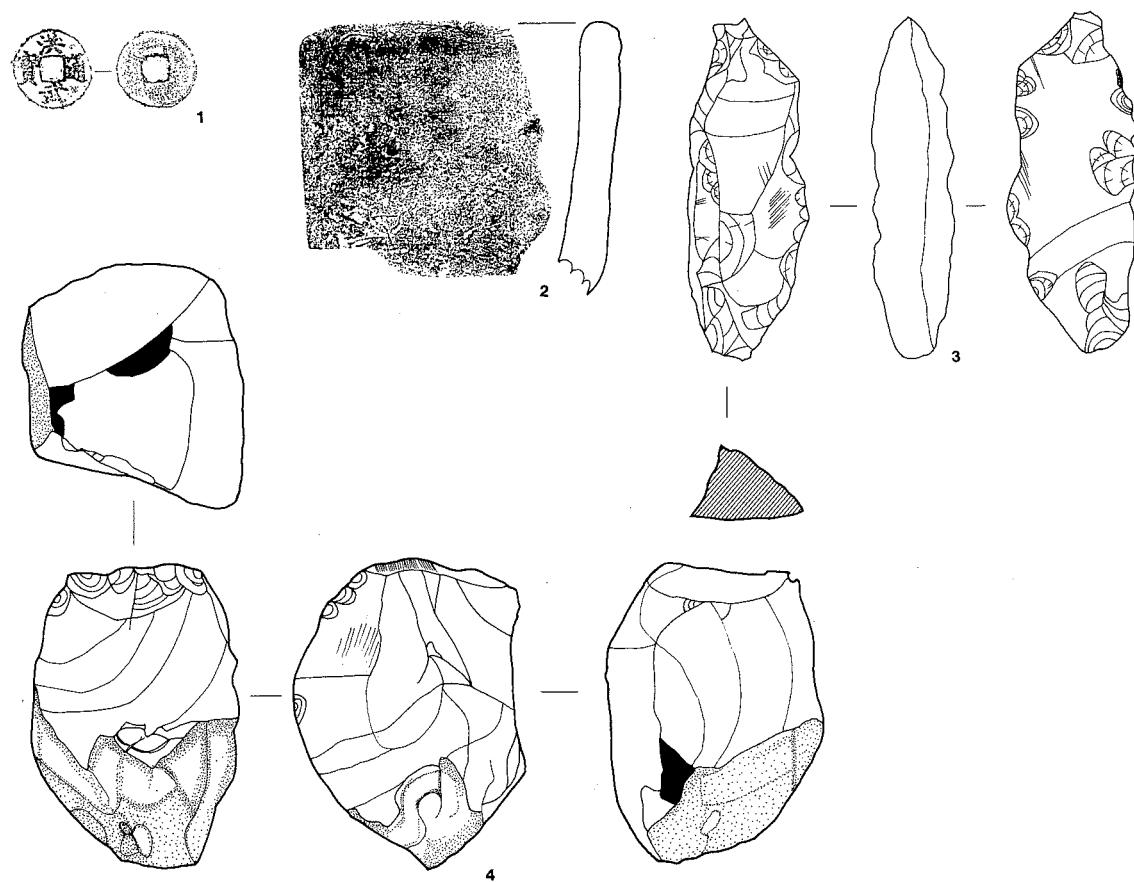
第178図 II—T・U間畦畔部
II層遺物実測図(1/2)



第179図 II—T・W区間畦畔部
III層遺物実測図(1/2)

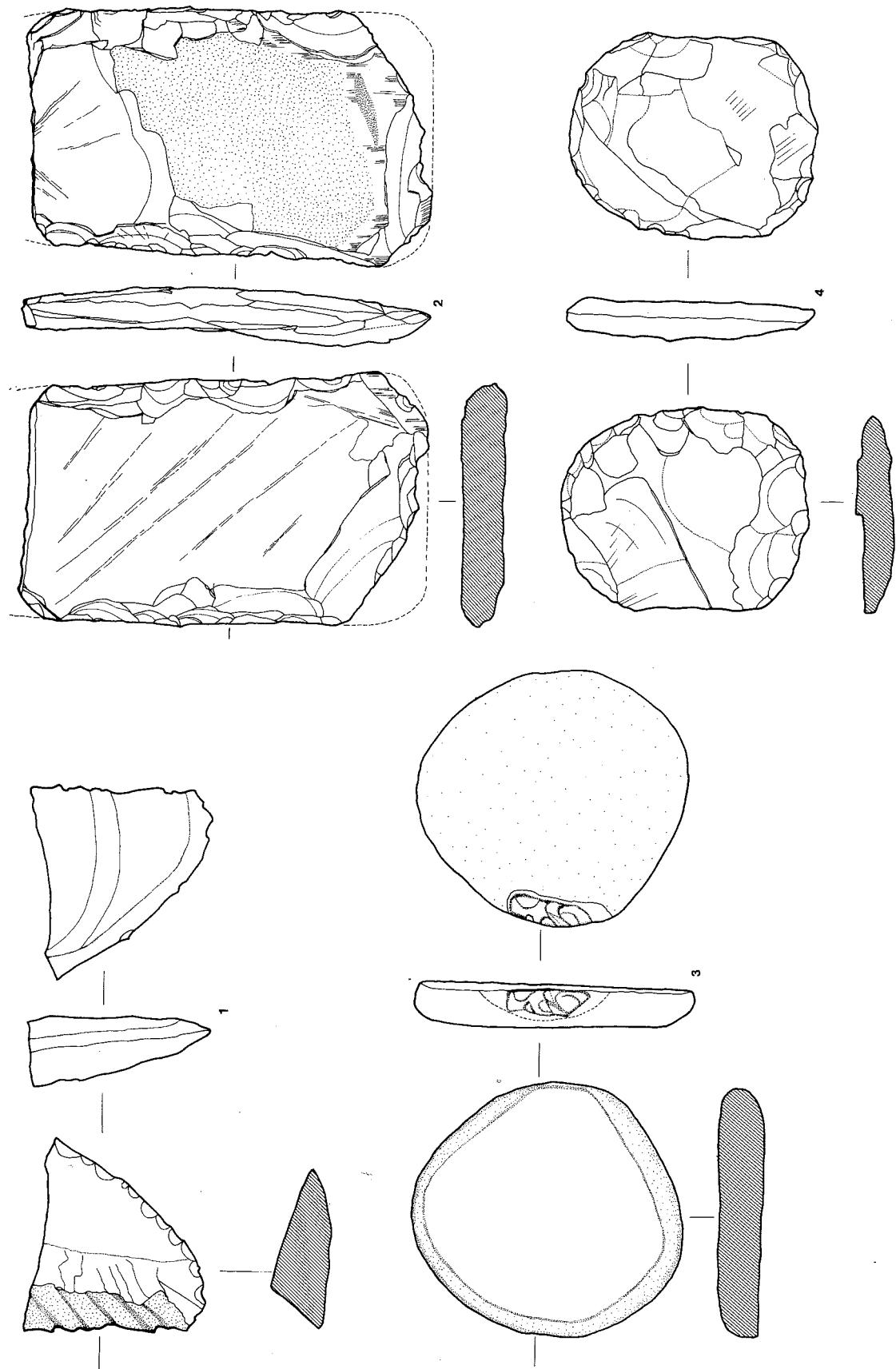


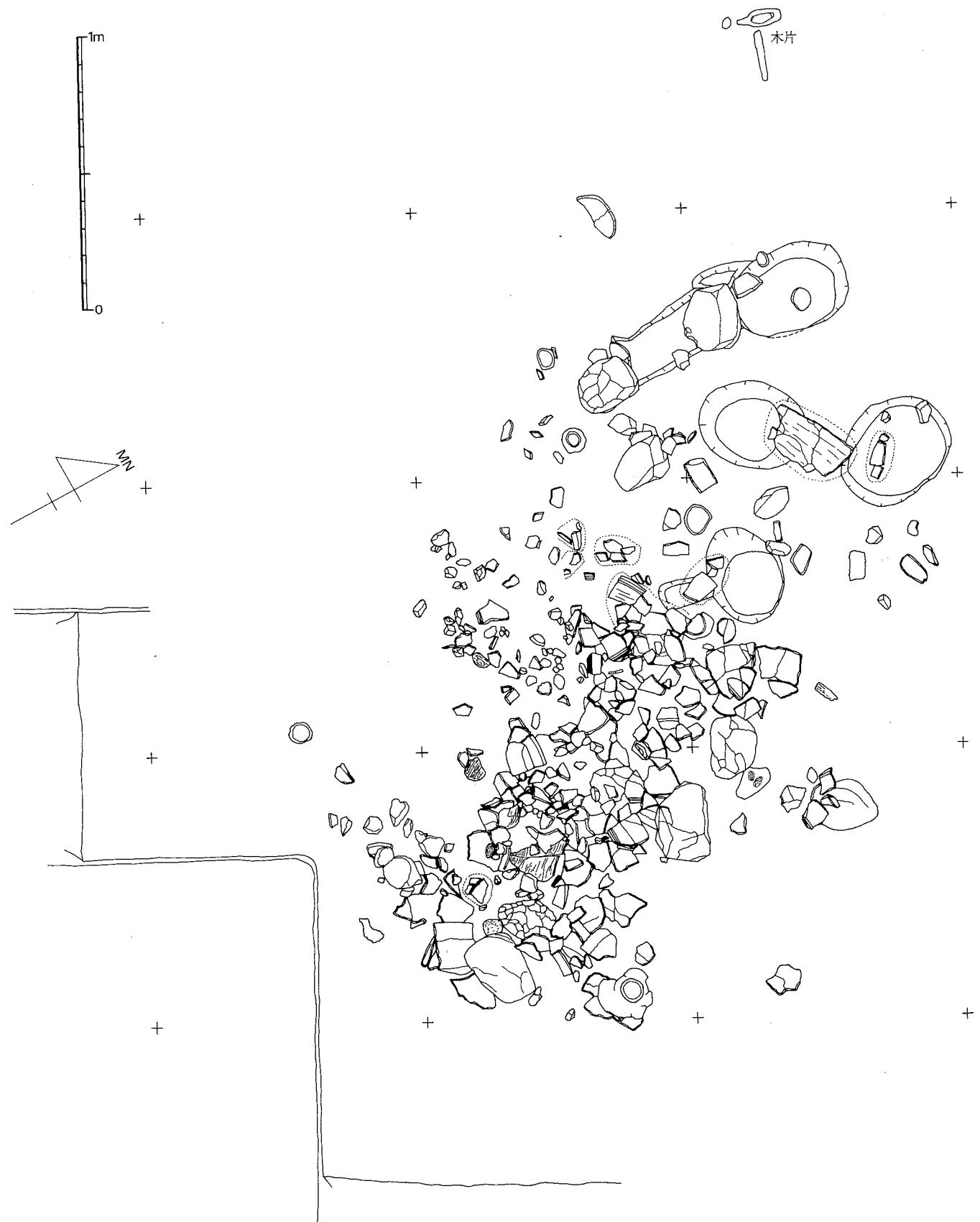
第180図 II—U区V層遺物実測図(1/2)



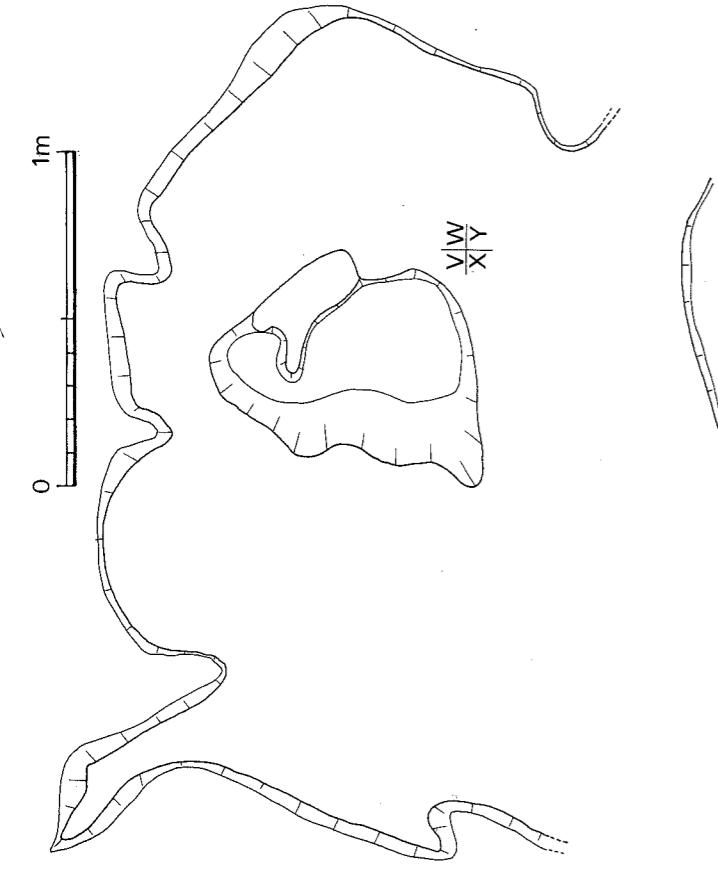
第181図 II—V区III層遺物実測図(1～2:1/2、3～4:1/1)

第182図 II-V区IV層遺物実測図(1 : 1/1、2~4 : 1/2)

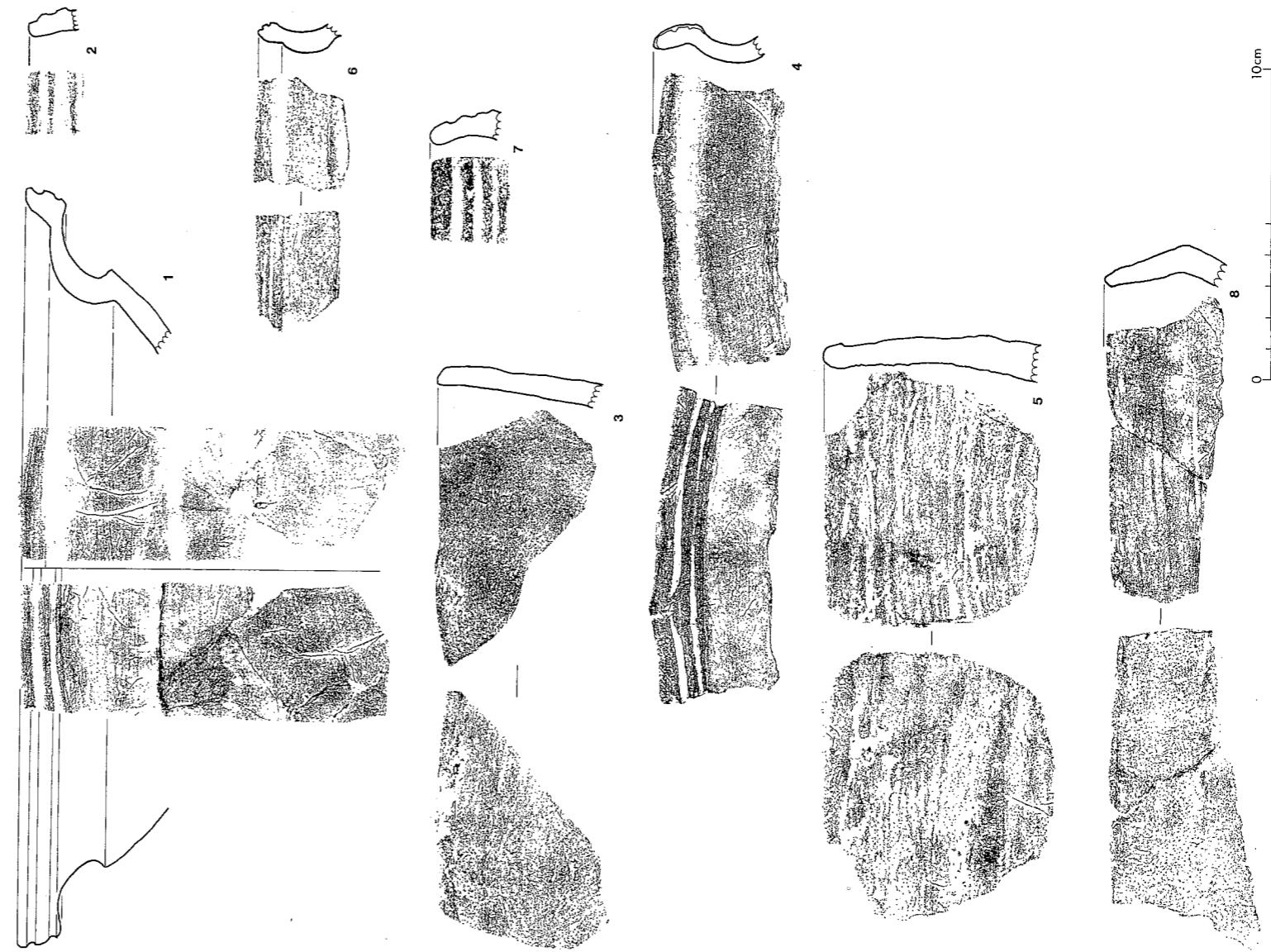




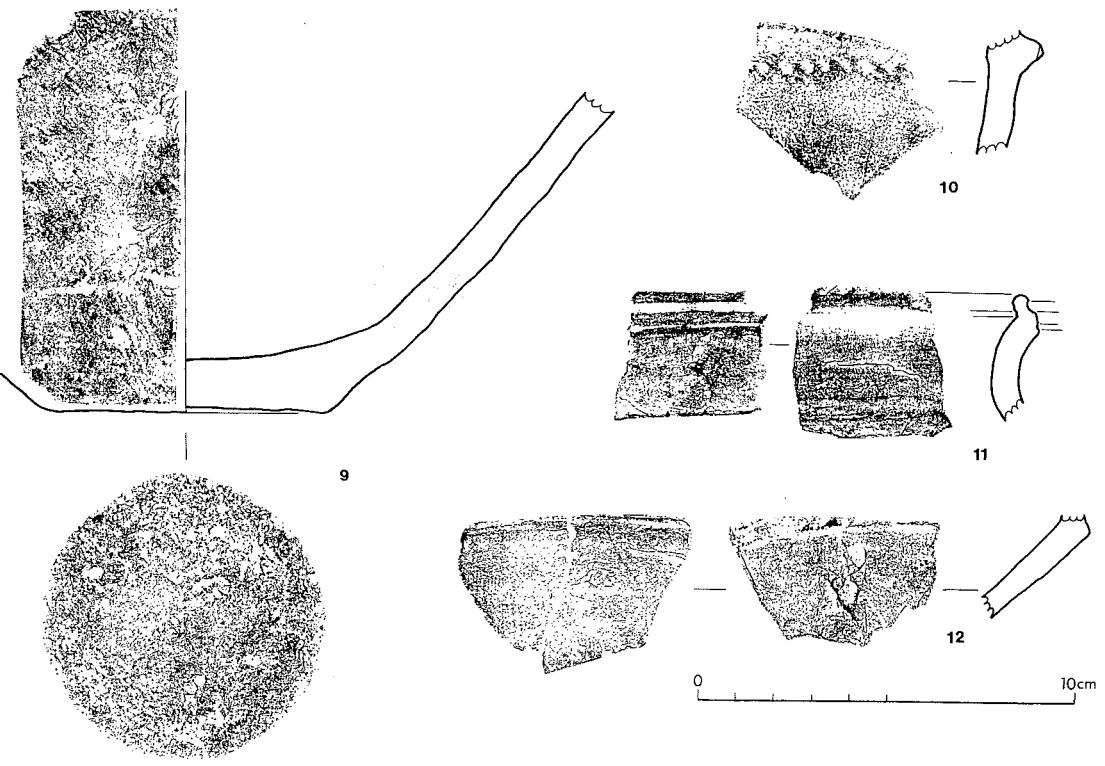
第183図 II-V・W・X・Y区VI層上面縄文時代遺構遺物出土状況図(1/20)



第184図 II—V・W・X・Y区VI層上面焼跡状遺構面範囲図



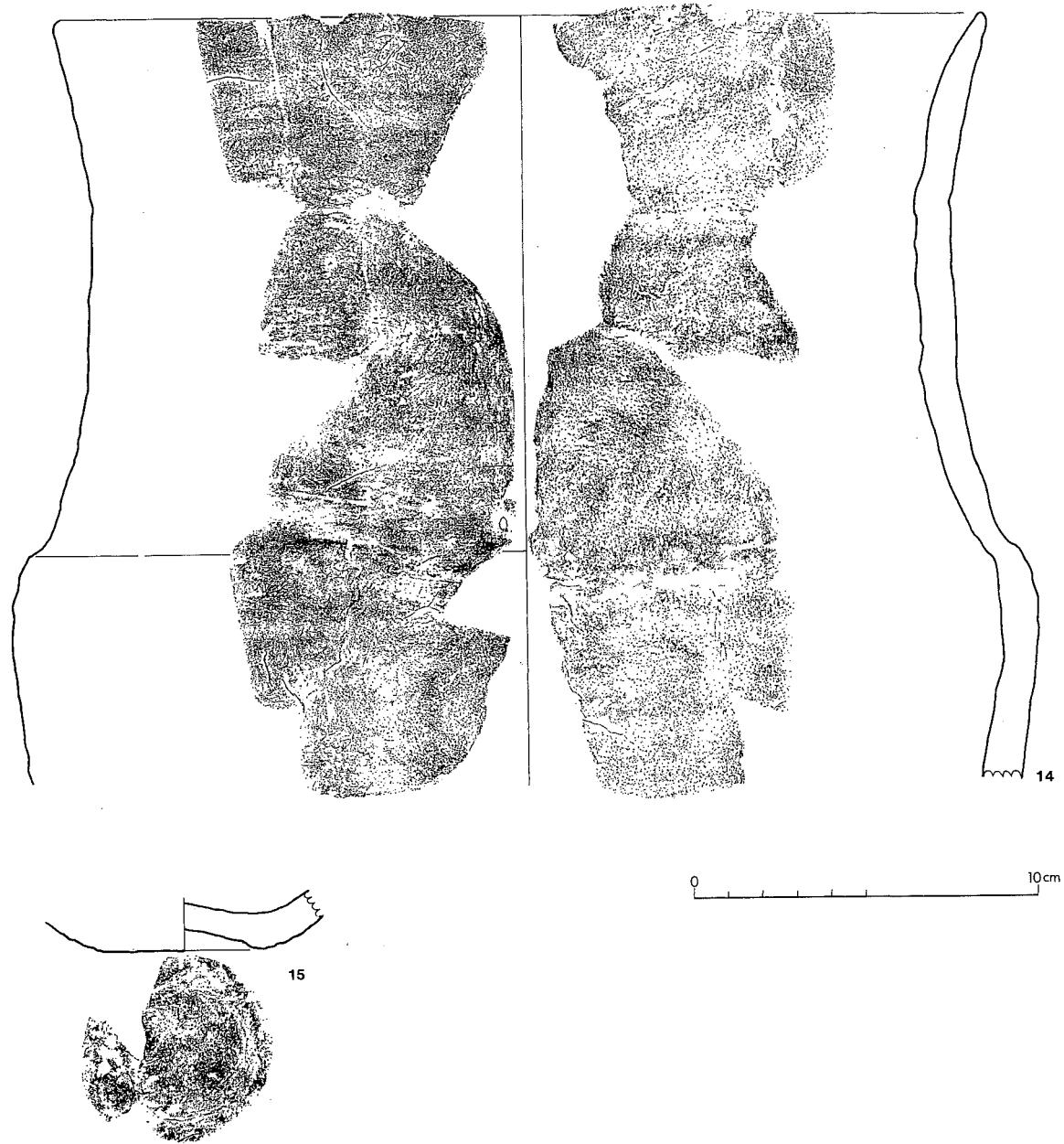
第185図 II—V区VI層遺物実測図①(1/2)



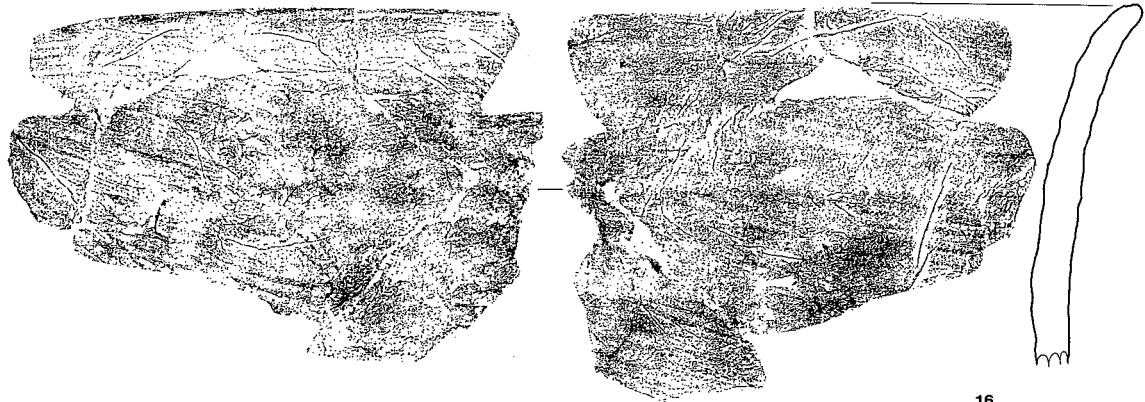
第186図 II-V区VI層遺物実測図②(1/2)



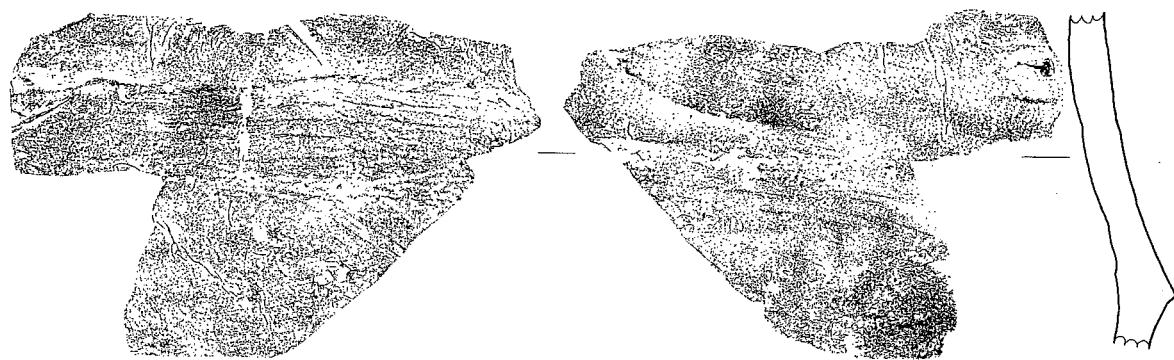
第187図 II-V区VI層遺物実測図③(1/6)



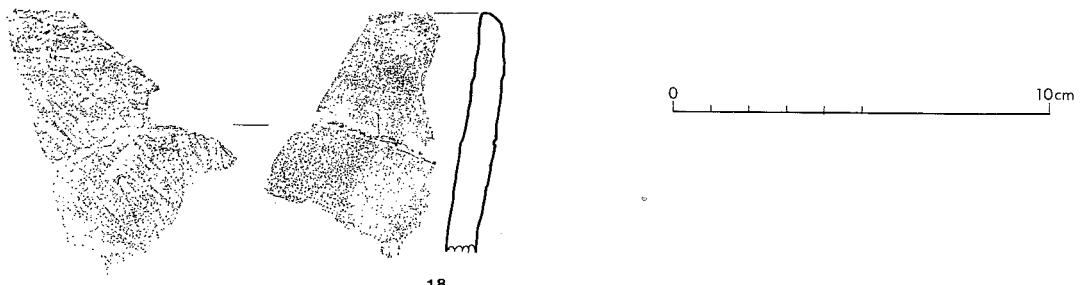
第188図 II-V区VI層遺物実測図④(1/2)



16



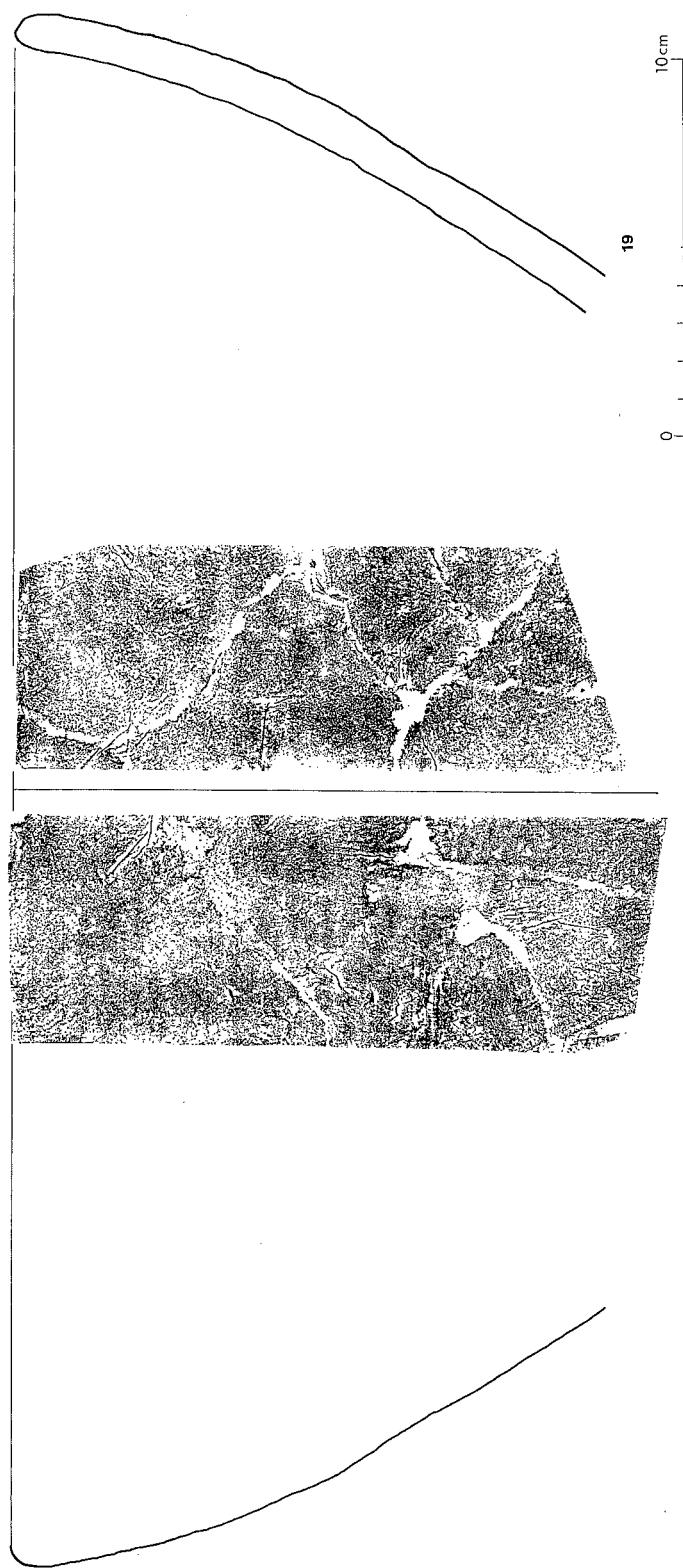
17

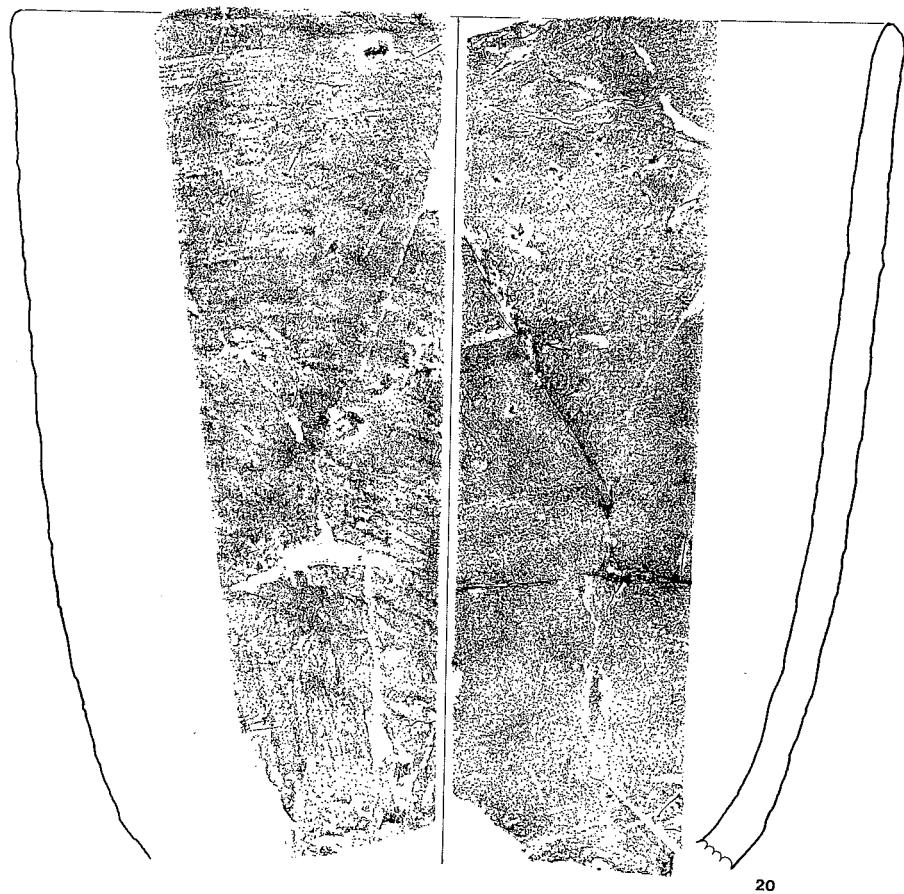


18

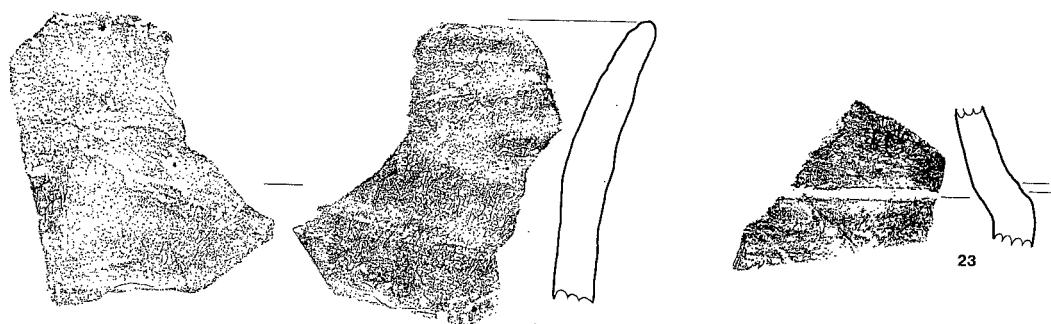
第189図 II-V区VI層遺物実測図⑤(1/2)

第190図 II-V区VI層遺物実測図⑥(1/2)

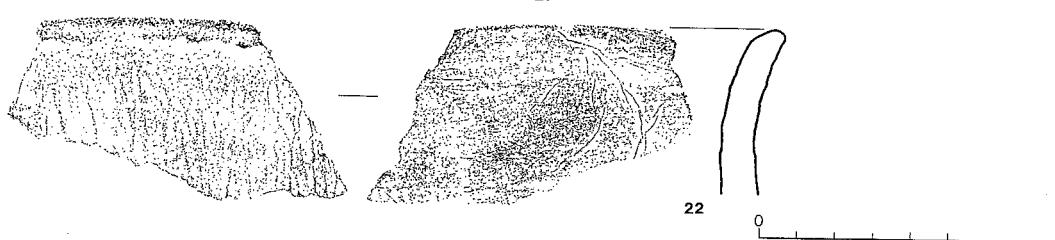




20



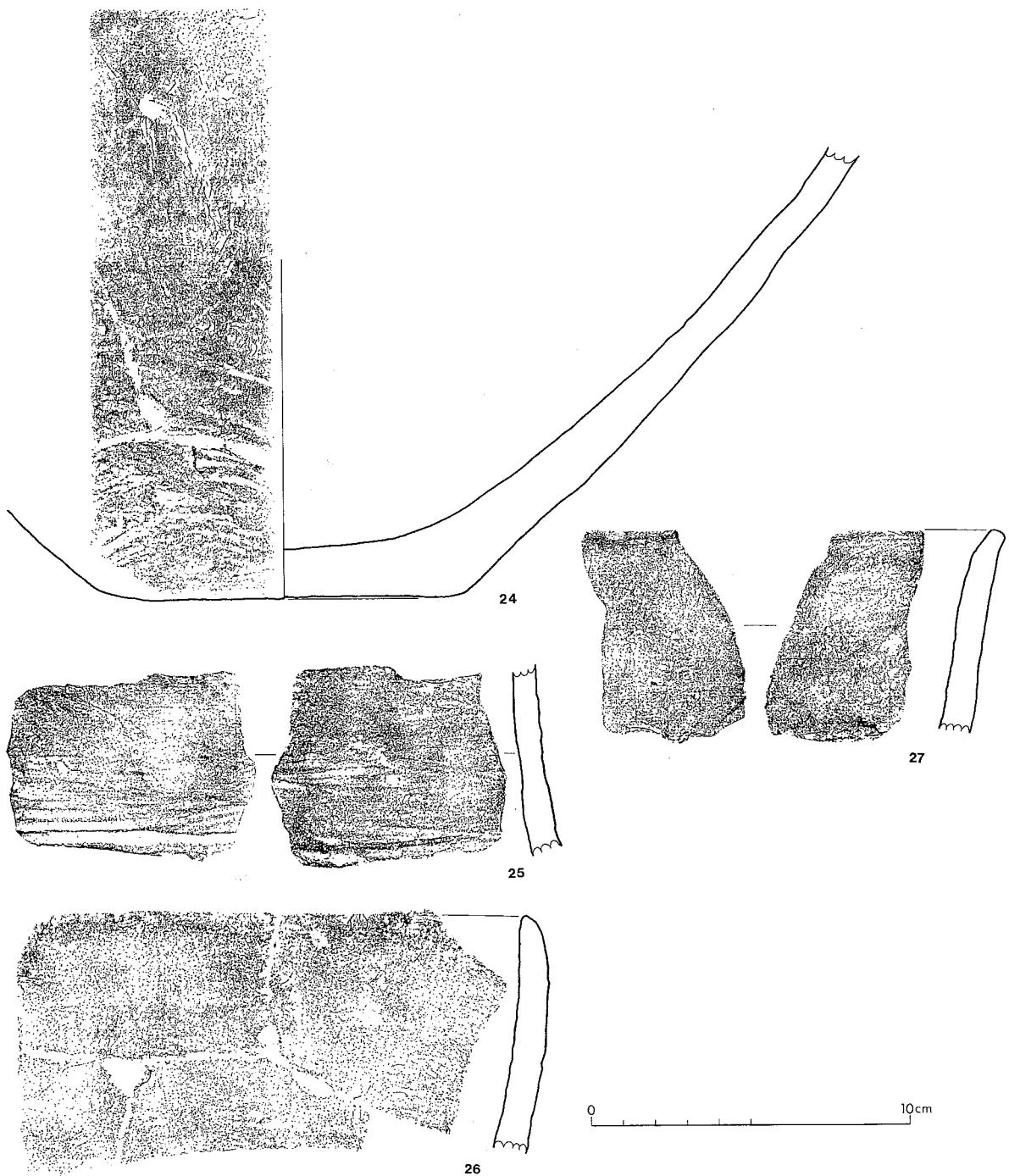
21



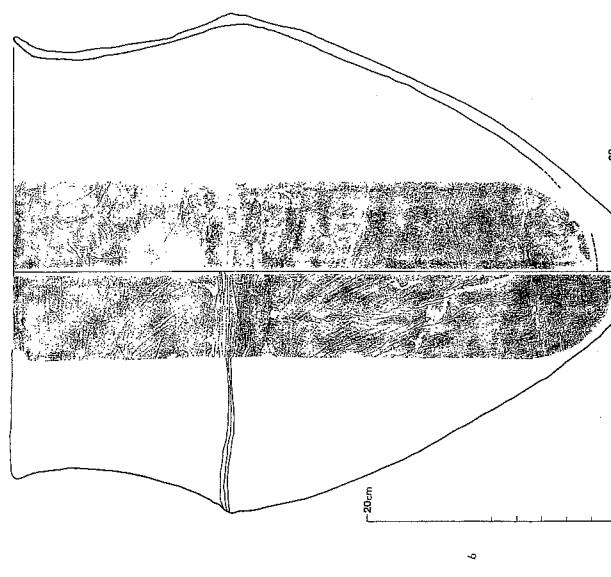
22

0 10cm

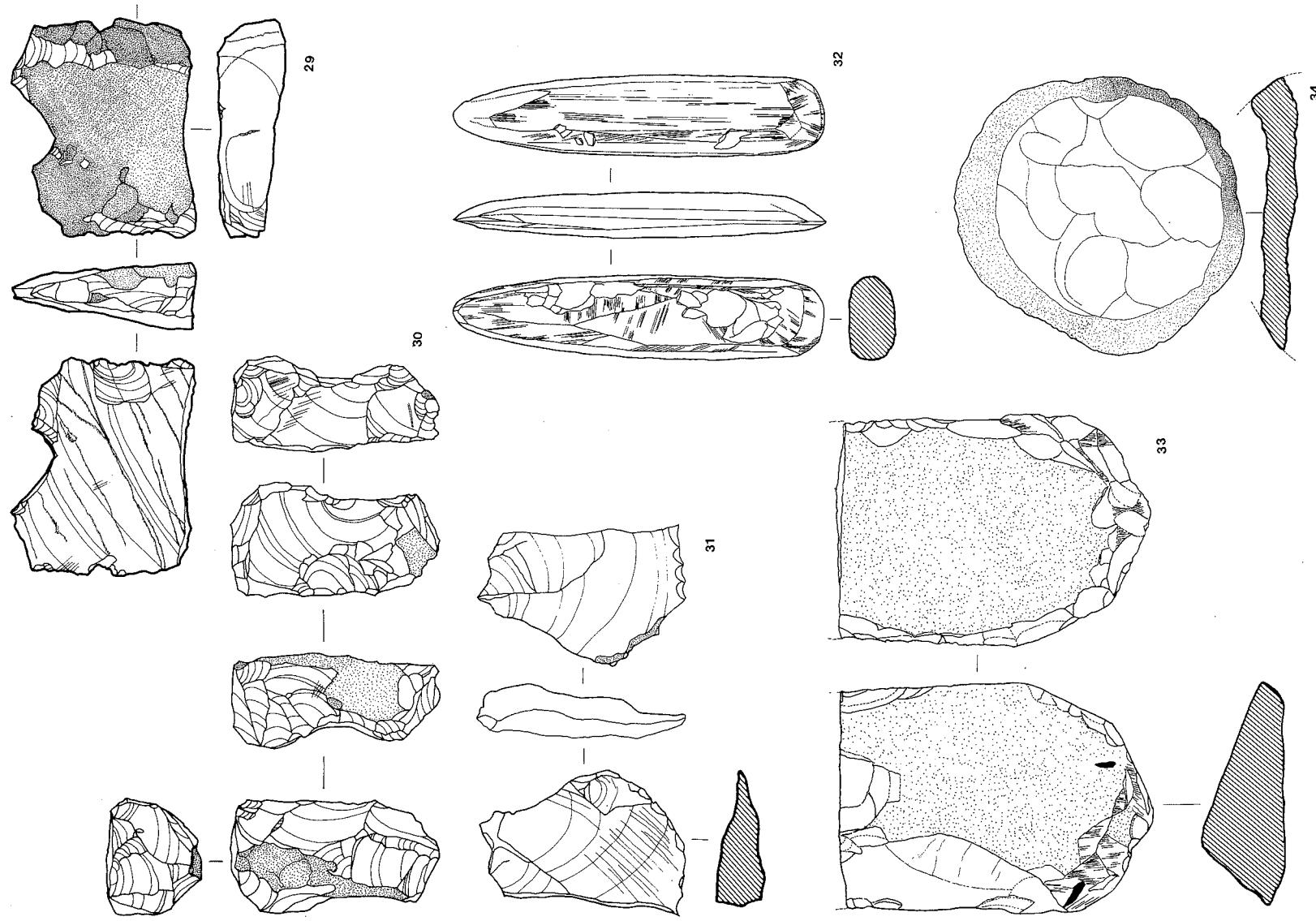
第191図 II-V区VI層遺物実測図⑦(1/2)



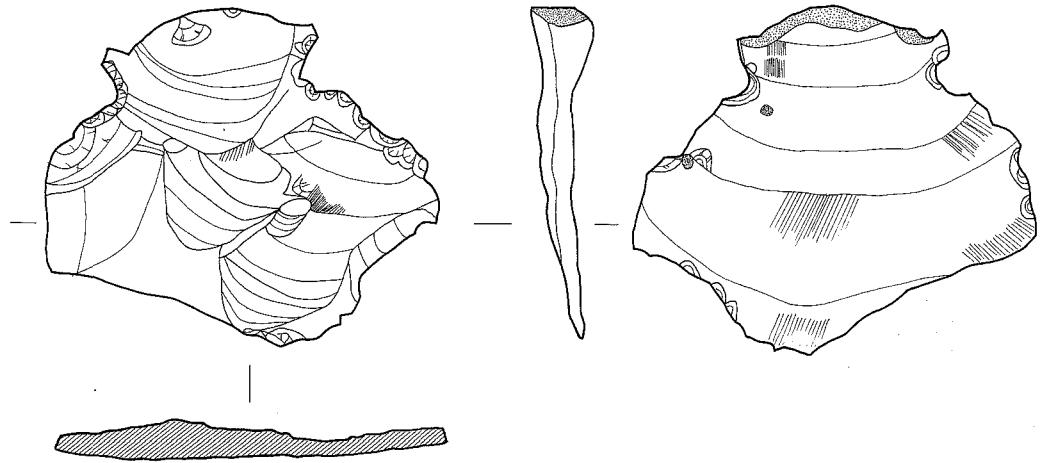
第192図 II-V区VI層遺物実測図⑧(1/2)



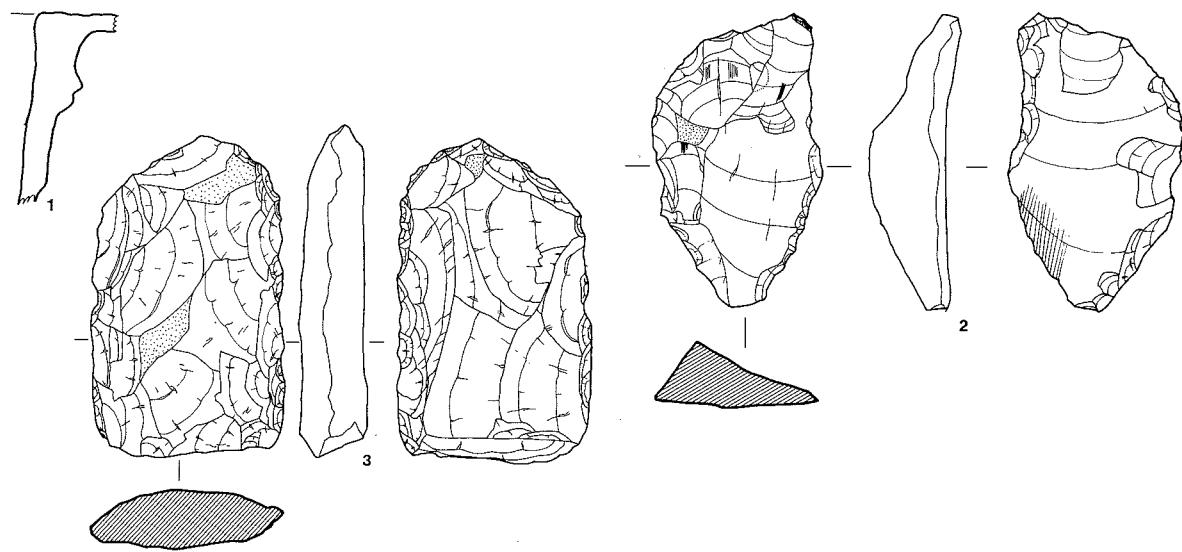
第193図 II-V区VI層遺物実測図⑨(1/2)



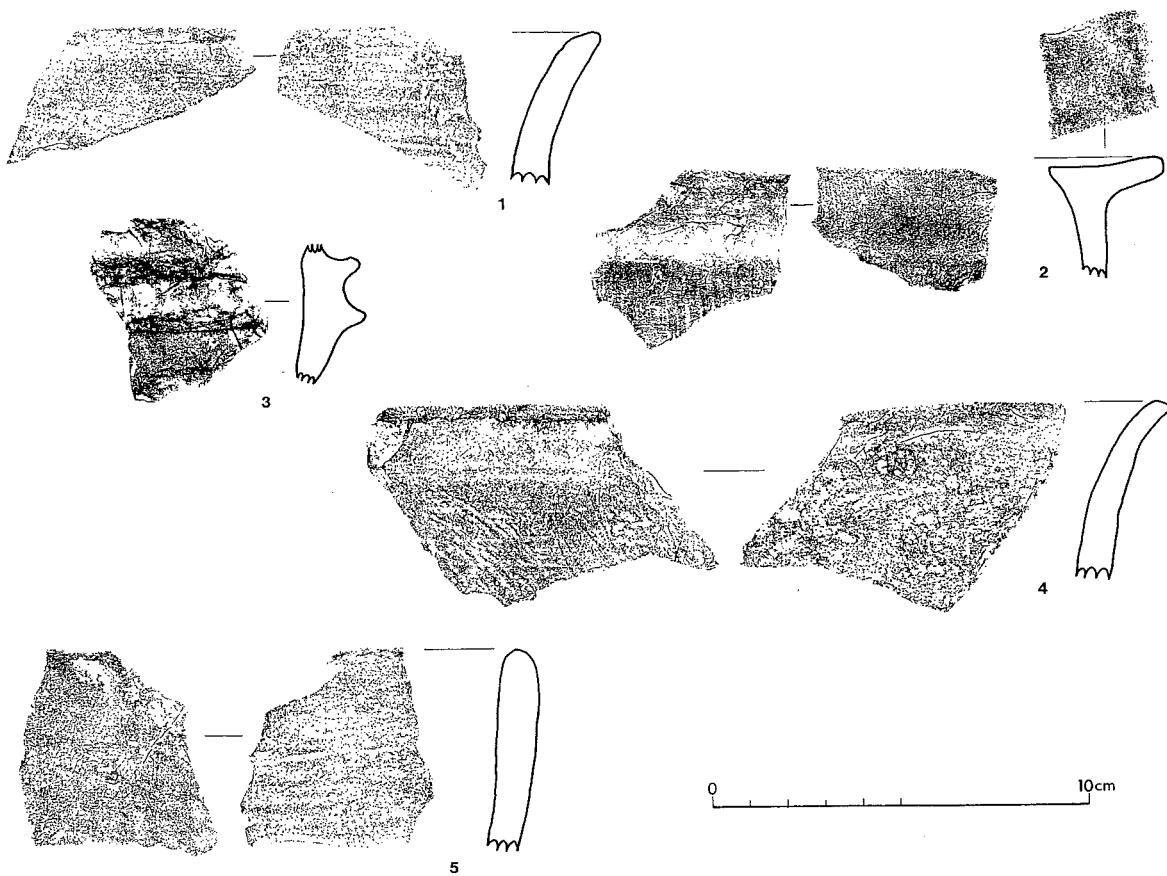
第194図 II-V区VI層遺物実測図⑩(28~30:1/1、31~33:1/2)



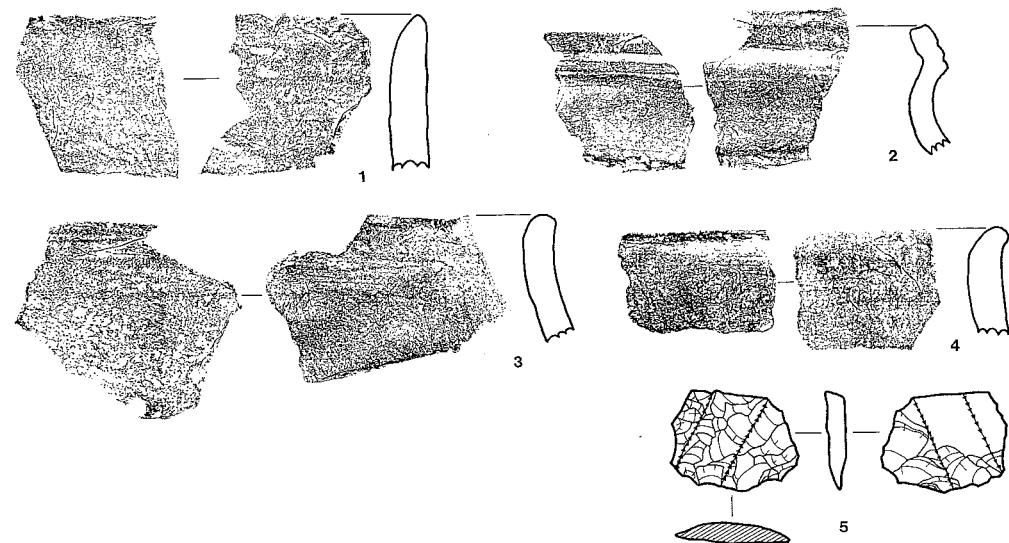
第195図 II-V・W区間畦畔部IV層遺物実測図(1/1)



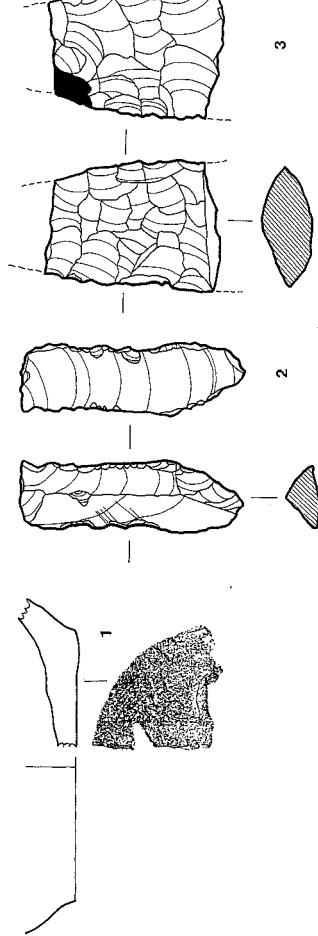
第196図 II-W区III層遺物実測図(1・3:1/2、2:1/1)



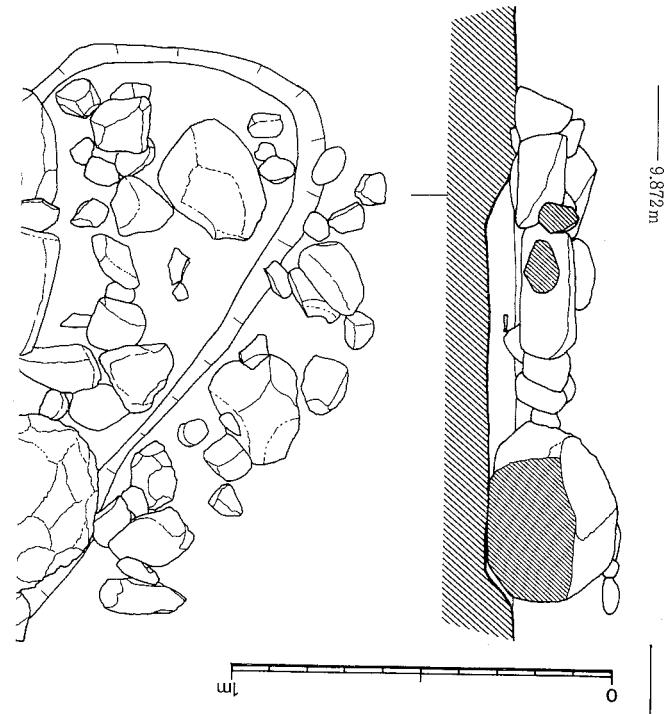
第197図 II—W区IV層遺物実測図(1/2)



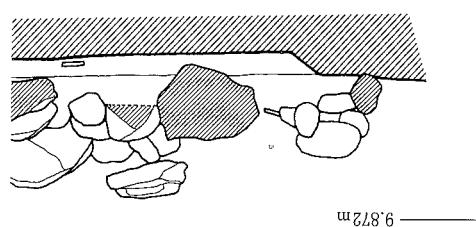
第198図 II—W区V層遺物実測図(1～4：1/2、5：1/1)

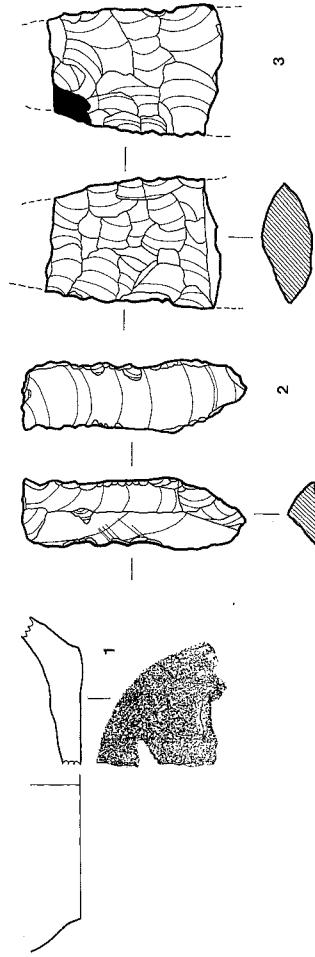


第199図 II-X区IV層遺物実測図(1 : 1/2、2・3 : 1/1)

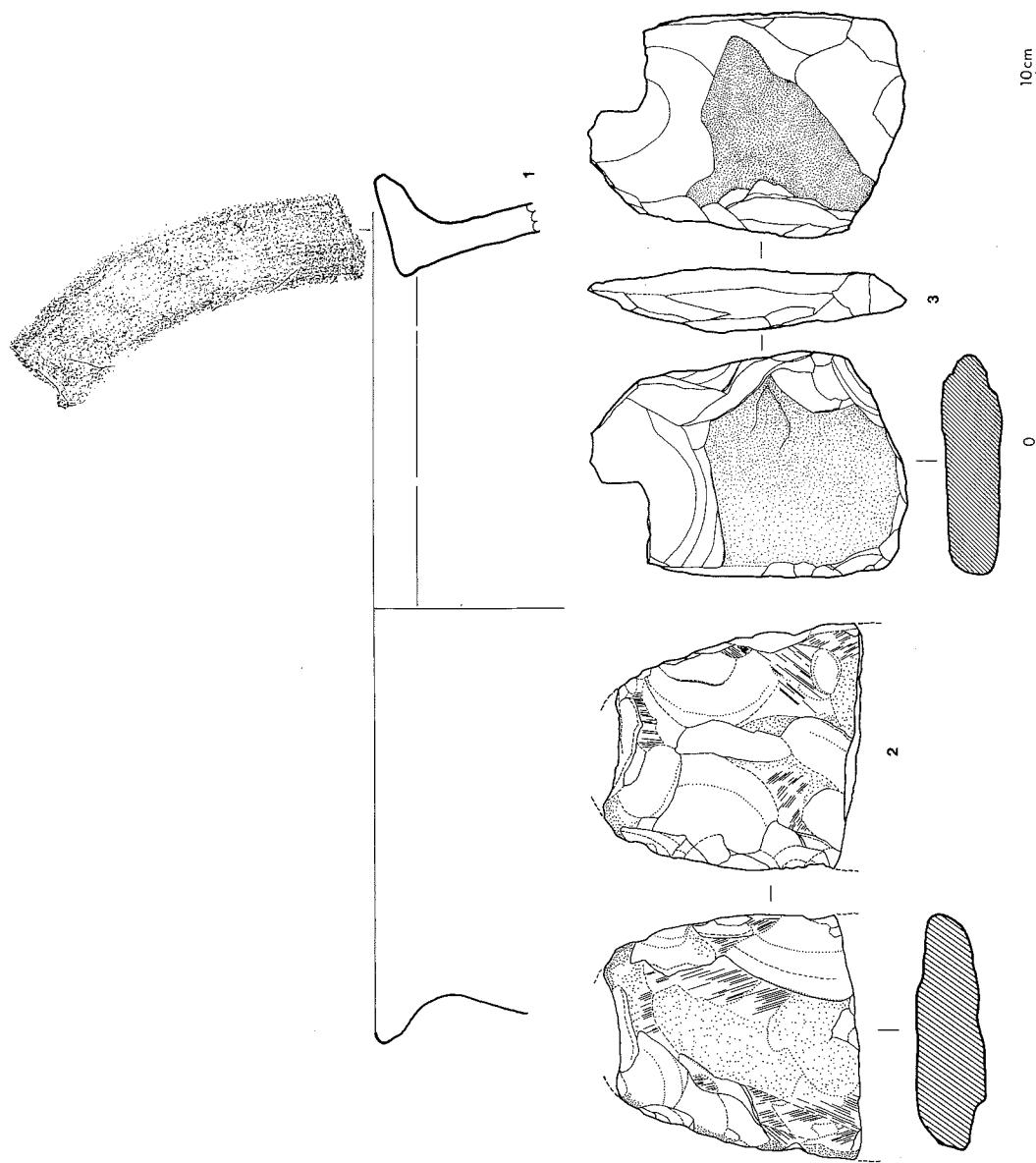


第201図 II-X区IV層下面遺構遺物出土状況図

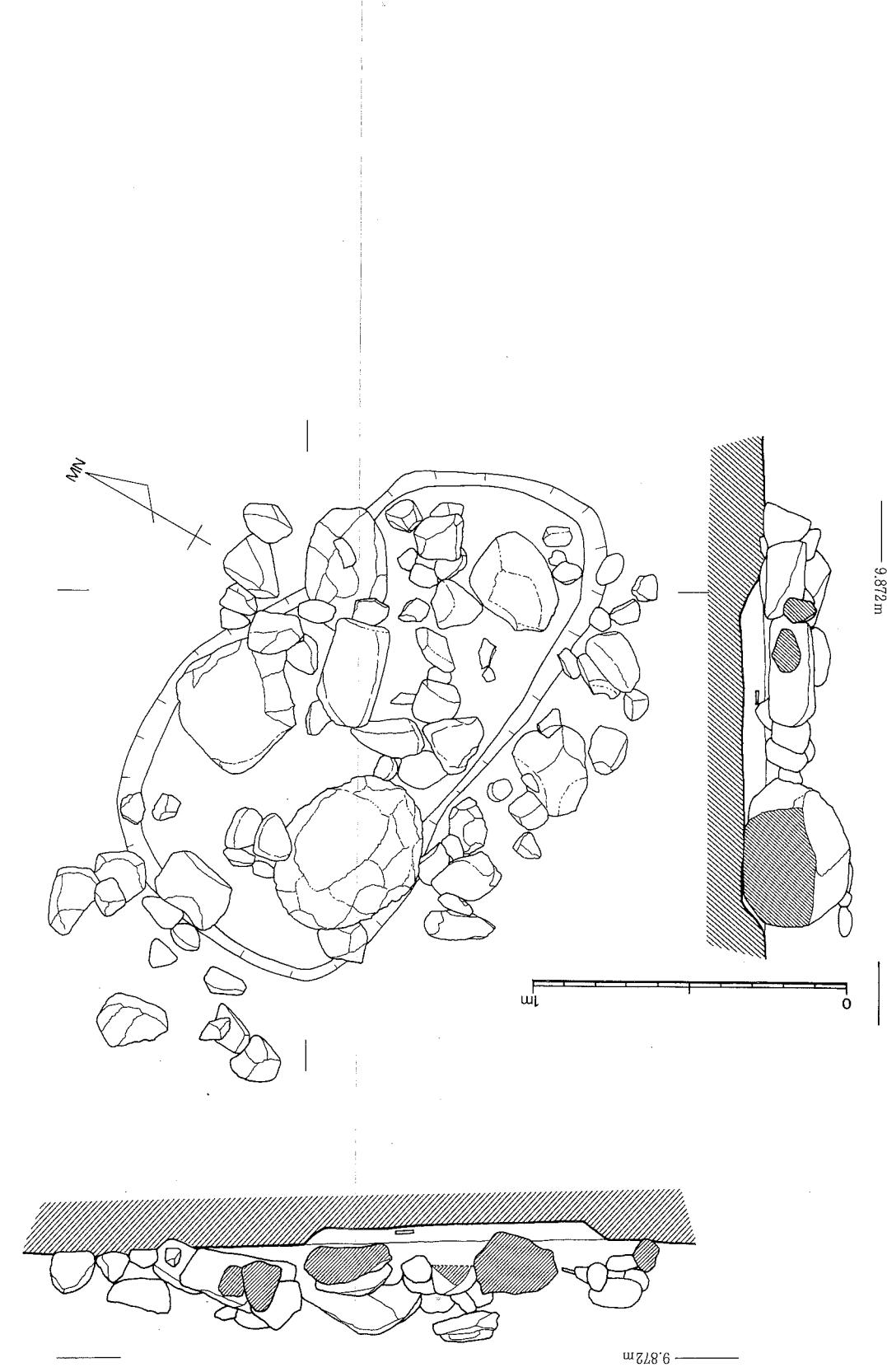




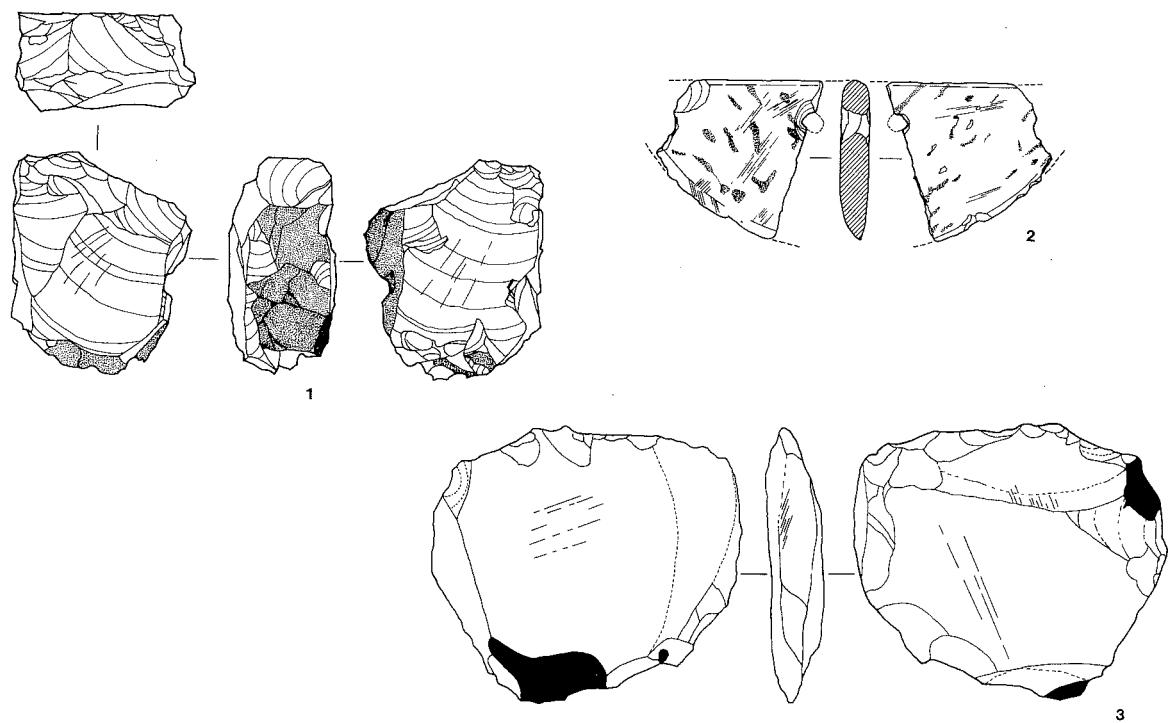
第199圖 II—X區IV層遺物實測圖(1 : 1/2、2•3 : 1/1)



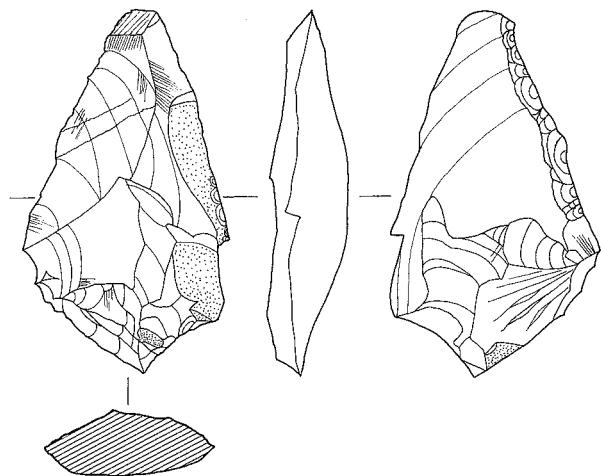
第200圖 II—X區V層遺物實測圖(1/2)



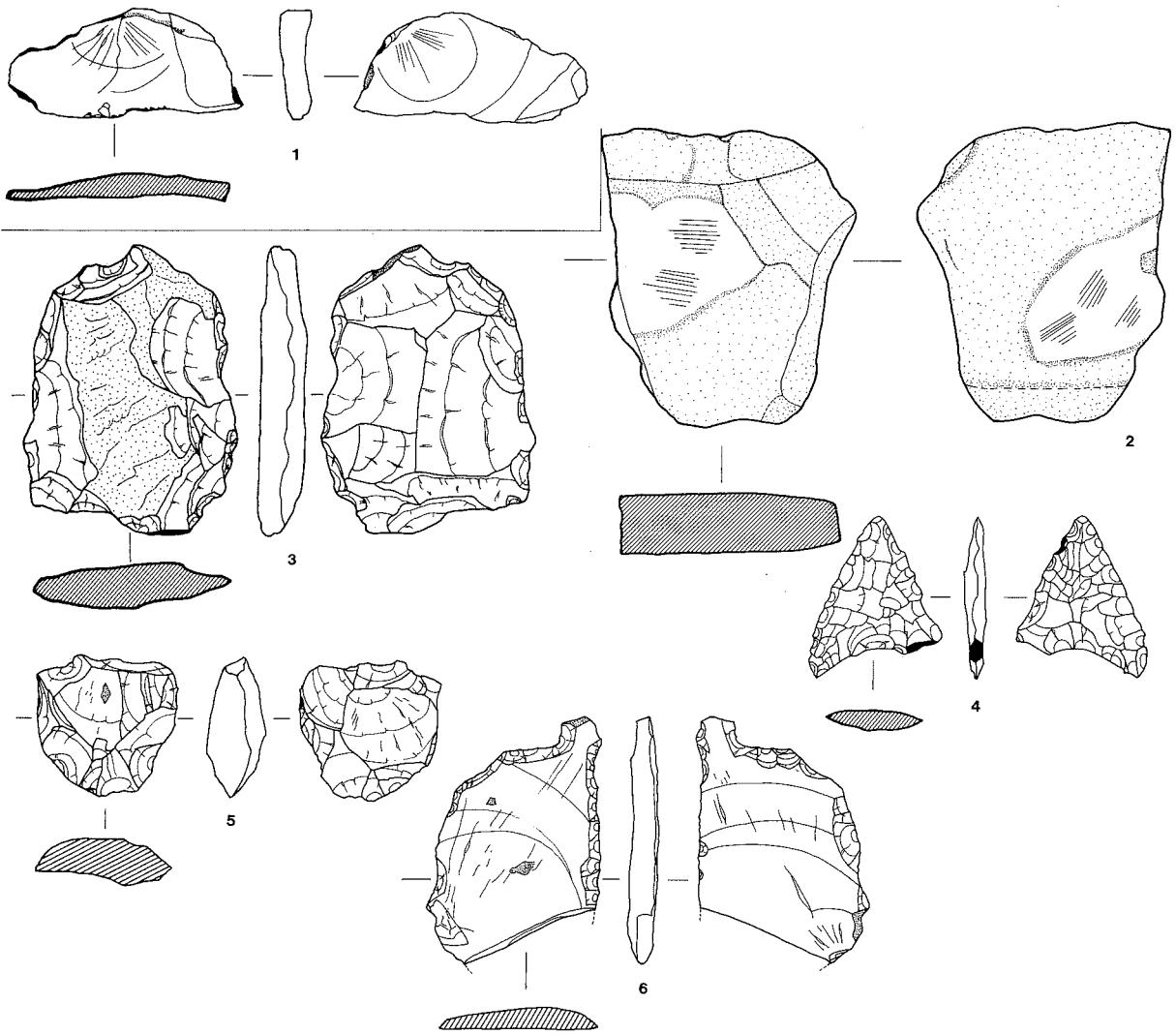
第201圖 II—X區IV層下面遺物出土狀況圖



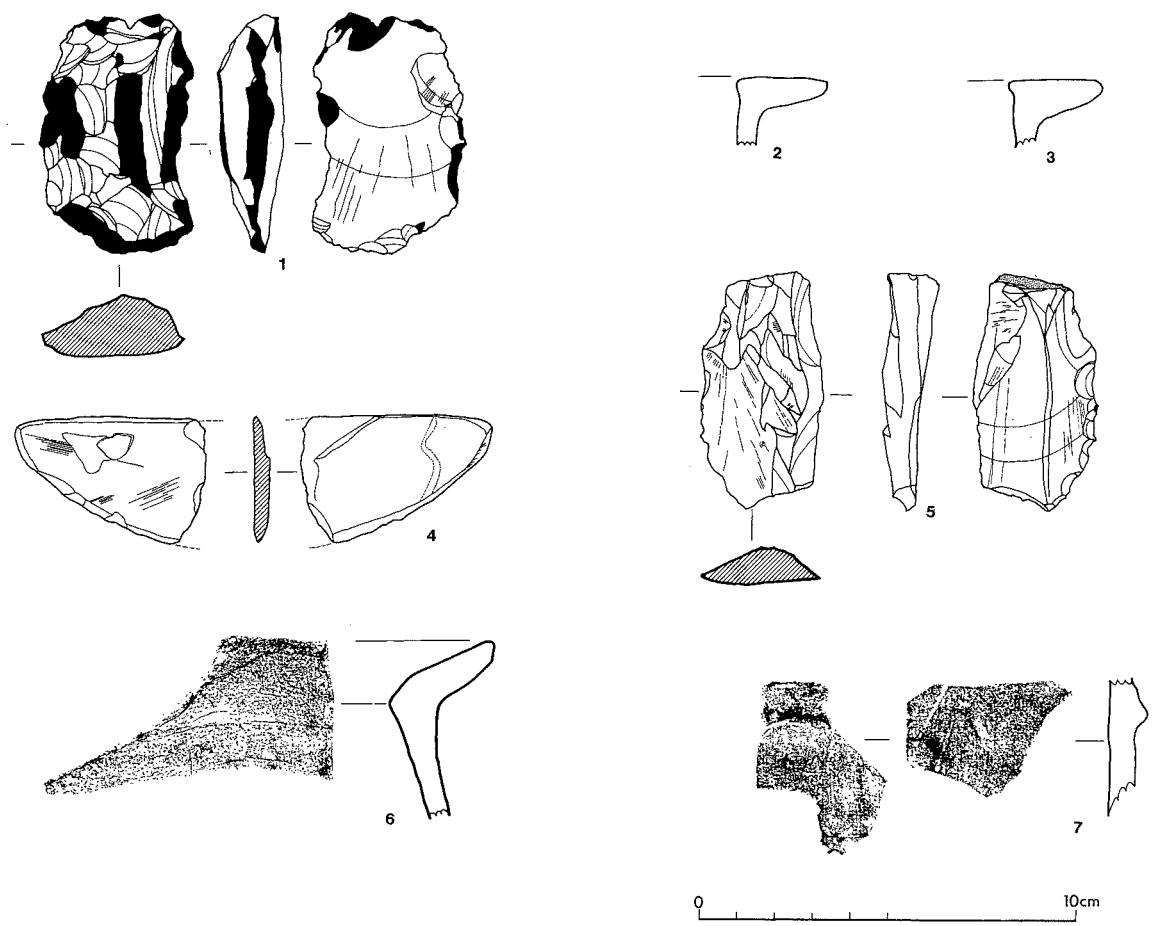
第202図 II-X・Y区間畦畔部遺物実測図(2:1/2、1・3:1/1)



第203図 II-X・Z区間畦畔部IV層遺物実測図(1/1)



第204図 II-Y区遺物実測図(1:III層、2~6:IV層、1~3・5・6:1/2、4:1/1)



第205図 II-Z区遺物実測図(1/2)(1:II層、2~5:IV層、6・7:V層)

ま　と　め

縄文早期の島原半島と陣の内遺跡

最後の氷河期が約15,000年前に終わって温暖期になると、氷河は解けて後退し海面の上昇が始まり陸地の後退が始まった。いわゆる海進現象であり、そのピークは縄文前期でありその後じょじょに海退が進み現在の海面に近づいてゆく。島原半島においても縄文早期は今よりもかなり低い位置に海岸線があったと考えられる。縄文早期遺跡は島原半島において約50カ所が確認されているが、半島の北東部に集中分布していて、分布状態は前代の旧石器時代に似通っている。吾妻町弘法原遺跡・国見町百花台遺跡・島原市礎石原遺跡などが代表的であるが、この地域の高燥山麓地域200～250mの標高域に立地するものが多い。縄文早期押型文土器の時期には、石鎌・石槍など狩猟用具のほか、石皿・凹石・敲石など植物加工用具が共通した石器として見られ、山の幸を主要な食料として求めた人々の姿がある。一方、有明町一野遺跡や島原市畠中遺跡では南九州系の早期前半の円筒形土器が出土し、早期後半塞ノ神式土器系統の土器が百花台遺跡や礎石原遺跡で出土するなど南九州の影響が見られる。塞ノ神式土器は山陰地方にまで分布していて、当時南九州の影響が広汎に及んでいたことを物語っている。また縄文早期押型文土器は、陣の内遺跡など現在の海岸線近い遺跡で発見例がある。明確な包含層をもった遺跡が今の時点ではなく、明確な石器を伴っていないので低地の押型文土器文化がどのようなものであったか定かにできないが陣の内遺跡ではある程度まとまった数量の土器が出土していて、島原半島の押型文土器文化が一様なものでなかったことは推測できる。

縄文晚期の島原半島と陣の内遺跡

島原半島における縄文晚期前半には、礎石原遺跡・百花台遺跡などに大規模遺跡が標高250m前後の高燥山麓地域に出現する。礎石原遺跡では幼児甕棺や方形の石組遺構が確認されており前代(縄文後期)に盛行した剝片鎌・石錘などが減少して扁平打製石斧が多量に製作使用されている。この石器は耕作用具(石鎌)と考えられる石器で生産形態がこの時期大きく変化したことを物語る。ただこれらの遺跡の立地からして水田耕作を考えることは困難であるが、畑作による陸稻やアワ・ヒエなどの栽培が行われた可能性は考えられる。陣の内遺跡では晚期前半の炉跡が検出され片刃の石ノミが1点が出土している。また時期を特定できないものの扁平打製石斧がある程度まとまって出土しており畑作が行われた可能性を考えておく必要がある。

陣の内遺跡の石器と石材

陣の内遺跡で使用された石器の数は少なく、石材も黒曜石・蛇紋岩・安山岩・結晶片岩などに限られている。これらはいずれも島原半島に産しない石材であり、肉眼観察ではあるが石鎌などに利用された黒曜石は佐賀県伊万里市の腰岳産、ノミ形の片刃石器や磨製石斧に利用された蛇紋岩は長崎県西彼杵郡の長崎(西彼杵)变成岩類と考えられ、明瞭な石器として見られないものの少数の搬入が認められる結晶片岩も同地産と考えられる。また比較的数がまとまって出土した敲石類に利用された安山岩円礎の産地は特定できないものの最短位置に長崎県北高来郡唐比の海岸がある。

島原半島は火山地帯(島原火山体)であるが石器に加工できる石材に乏しく地場産の石材に乏しい。半島北部には百花台遺跡(国見町)・筏遺跡(有明町)・大野原遺跡(同)など縄文時代の大規模遺跡が多く、多数の石器が出土しているが黒曜石・蛇紋岩・結晶片岩など共通した素材が利用されており、石鎌などの剝片石器には伊万里市腰岳産黒曜石が・磨製石斧などには長崎变成岩類の蛇紋岩が、石錘・十字形石器には結晶片岩が利用された例が多く見られる。石材自体や石核が見られることからして伝統的に半島以外に石材を求める姿がある。

「島原半島における縄文時代後期終末～晚期初頭の土器研究

——瑞穂町陣の内遺跡II—VI層出土土器の編年的位置——」

[II—V・W・X・Y区]

陣の内遺跡2次調査において、縄文時代後期終末～晚期初頭の良好な一括資料が得られた。II区V・W・X・Y区にまたがり、VI層上面の硬化した面（生活面または遺構床面）より出土し、土器片・石器類・焼礫などの遺物を取り上げると炉跡状の窪みが認められた。この同時性の極めて高い資料は島原半島の当該期の編年および生活様式の研究に貴重な土器群と言えよう。

【御領式および直後型式の研究史】

1967年に坪井清足によって熊本県下益城郡城南町の御領貝塚の出土資料が分類・報告されている（坪井 1967）。ほとんどの土器が籠で器表面を研磨されるが、その程度によって精製土器と粗製土器に分け、器形および文様との組み合わせから浅鉢形土器をA・B・C・Dの4類に、深鉢形土器をE・F・G・Hの4類に細分している。

浅鉢形土器A（皿形の土器）・B（く字形口縁をもつ碗形土器。）C（皿形の体部に強く外反し、端部が立ち上がった口縁をもつ土器）D（頸部が短く、内傾あるいは、わずかに外反する鉢形土器。深鉢形土器E：口縁に1～3条の凹線をめぐらし、頸部下端に段状の界線をめぐらしたものや線のないもの）F（口縁部に何らの文様ももたないもののうち、外反する口縁をもつもの）G（口縁部素文のもののうち、く字形口縁をもつもの）H（外面に条痕を残す浅鉢形土器）

坪井によって、御領式と認定された土器の、口縁部の数0量による個体算定によると全体の個体数は485個となり細別器種それぞれの比率は次のようになる。

〔浅鉢形土器〕：〔深鉢形土器〕=24%：76%

浅鉢形土器A（6個体・1.2%）B（42個体・8.7%）C（40個体・8.2%）D（30個体・6.2%）

深鉢形土器E（99個体・20.4%）F（215個体・44.3%）G（38個体・7.8%）H（15個体・3.1%）

比較的早い段階で坪井によって良好な資料での検討と土器組成が明らかにされたことで御領式土器の型式内容と位置付けが認識された。

この時期には弥生文化の生成という重要な問題に対しての、日本考古学協会および九州各地の研究者の発掘・研究活動により、縄文晚期の大まかな編年関係が明らかになりつつあった。賀川光夫は「それぞれの型式名を冠することの煩雑さを避けて、ここに晚期I、II、IIIの三時期をあてて統一することにした。」と述べ、それぞれの時期に対応する型式名として、細分は可能であるがI式は大石式、II式は黒川式・礫石原式、III式は山ノ寺式・原山式をあてている。I式の大石式には後期御領式の強い影響を認めている。（賀川1969）

山崎純男・島津義昭は九州を地理的環境によって4地域にわけ、突帯文土器出現以前を晚期前半、以降を晚期後半とし、地域ごとの土器型式および地域相互の関係を論じている。前半期・後半期をそれぞれ3期に分け、晚期全体を6期に区分している。長崎県はI地域の北部九州（筑前・肥前の北半・豊前）、II地域の中部九州（筑後・肥前の南半・肥後・豊後・日向の北半）に含まれる。縄文晚期前半期前葉の土器型式として、I地域では広田式、II地域では天城式・大石式があげられている。（山崎・島津 1981）

広田遺跡0区の調査を担当した小池史哲は、縄文後期末～晚期前半の器種を型式学的に浅鉢4種類・深鉢5種類・椀2種類・注口土器の12種類に分類し、さらに各器種内で細分している。深鉢の細別器種の変遷をもとに4期に区分し、I期を後期末御領式並行期、II期を古いタイプの大石式期、III

期を熊本の古閑式・大分の浦久保式にやや先行する段階、IV期を古閑式・浦久保式・鹿児島の入佐式期に対比している。

天城遺跡の報告を担当した清田純一は、1997年に長崎県考古学会において熊本県の縄文後期後葉～晩期後葉までの編年案を発表している（この編年案については発表資料を入手したのみであり、筆者自身必ずしも清田の意図するところを理解できている訳ではない）。晩期をI～VII期に分けており、後期後葉の御領式と晩期II期の古閑式の間に天城1式・2式・3式（晩期I式）をおいて理解している。

当該期の纏まった資料が少ない長崎県域の中で、島原半島とりわけその北部の有明海沿岸部では比較的良好な出土資料に恵まれてきたが、必ずしも十分に検討された訳ではない。御領式期よりやや時期は下るが唯一、古門雅高による南串山町国崎遺跡の報告・検討があるのみである（古門 1995）。

島原半島の主な出土例としては国見町篠遺跡（古田 1974）、有明町中田遺跡（古田 1977）があげられよう。古田の業績は比較的早い時期においての熱心な発掘・発表・啓蒙活動など評価されようが、遺物の出土状況および型式学的特徴などの詳しい記述の不足は如何ともしがたく、彼の熱意が必ずしも十分に反映された報告であるとは言えない。今後は出土状態の良好な新資料の追加を期待すると共に、古田の発掘資料の再検討が求められよう。古田によって細分の可能性が指摘された中田遺跡出土資料は、古門雅高によって「御領式に後続する型式の土器群」に比定されている（古門 1995）。

安楽勉は長崎県下の縄文晩期主要遺跡の出土資料を抽出し編年表を作成している（安楽 1990）。御領式期を後期終末に、晩期をI～Vの5期に分け、晩期初頭（I期）と前半（II期）に長崎市深堀遺跡出土土器をあげている。II期は他県では福岡県広田遺跡のIV期土器群および熊本県天城遺跡出土の土器があげられている。晩期中頃（III期）には黒川式があてられている。当該期の県内の良好な出土例および報告の不足により、安楽の編年表の土器は单一遺跡の一括出土例によるものではない。県内の異なる地域の土器が、あたかも一つの土器型式として器種構成をなしているように見え、読み取る側の注意が必要となる。しかし県内の晩期の編年研究の指標を与えたことは評価されよう。

1995年に古門は南串山町国崎遺跡の報告の中で、島原半島の縄文晩期前半の土器の変遷について述べており、礫石原式を黒川式にほぼ併行する土器ととらえ、有明町中田遺跡出土（御領式に後続する型式の段階）→島原市畠中遺跡出土土器→島原市礫石原遺跡出土土器（黒川式段階）という変遷を追っている。国崎では上下2層から当該期の土器群が得られており、上層出土土器を黒川式併行の礫石原式の範疇ととらえ、下層出土土器を中田出土土器と畠中遺跡出土土器の2段階に比定している。さらに下層出土の器厚が薄く丁寧に研磨され胴部と底部の境に段を有し、他に類例を見ない碗（ワン）形土器を「国崎タイプ」と命名している。

「陣の内遺跡II-V・W・X・Y区VI層上面出土土器」（第176～185図）

図版では29点の土器片が示されているが、若干上層（IV・V層）のものなどを除くと、破片数では13点となり、口縁部破片で算定すると全体で9個体となる。深鉢形土器5点（56%）・鉢形土器1点（11%）・浅鉢形土器3点（33%）である。そのうち混入の可能性が少ないと想定される。そのうち混入の可能性が少ないと想定される。（1・13・19・20・追加資料1点）

「深鉢形土器（I類）」

[I類A] 所謂タガ状口縁を有する器形。[13・追加資料]

13は幅2～5mm程度の断面半円形の沈線が口縁部に3条と肩部の最大部のやや上位に1条の凹線が施される大型の完形品である。口縁部は内傾する。上方から見るといびつな土器で、口縁部形状が橢円形を呈する。器厚が6mm程度と薄手の土器であり、肩部の最大径がやや上位に位置することも特徴的

である。口縁部長径38.0cm・短径34.0cm、肩部径47.0cm、底径9.0cm。器高57.5cmとなり肩部までの高さ38.0cm：口頸部高さ19.5cm=66（%）：34（%）。外面調整は頸部は横方向の板目状の痕跡が見られるが最終調整は縦方向のヘラナデ。肩部は横方向のナデ。胴部は横方向と縦方向の板目状の痕跡が明瞭に残り、その上に縦方向のナデが施される。底部直上付近は横方向のナデ。内面調整は全面に横方向のナデ痕が残るが、胴部上半には一部縦方向のナデ痕も認められる。

追加資料は13に比べて小型の深鉢であり、15はこの土器の底部破片と考えられる。底部はやや上げ底となる。胴部下半のほとんどを欠損する。口縁部に幅3mm程度の断面半円形の沈線が3条と肩部最大部のやや上位に1条の沈線が施される。口縁部は内傾する。口径(24.5cm)と頸部径がほぼ等しく、口縁屈曲部(27.0cm)と肩部屈曲部径がほぼ等しく最大径となる。底径5.2cm、現存部高さは20.0cmとなる。角閃石・雲母を含む。内外面共に横方向の丁寧なナデが最終調整として行われているが、その前段階の粗いナデ痕が一部に確認される。肩部付近は器表面の状態が良好であり、ミガキを施されたように緻密である。

[I類B] 肩部で屈曲し口頸部で緩やかに外反する器形。[27・28]

27は口唇部を平坦に仕上げられる深鉢の口縁部である。口縁部内外面共に横方向のナデ。器厚は頸部で8mm程度。

28は大型の完形品である。内外面共に幅1.5mm程度の板目状の調整痕が明瞭に残っており、肩部の最大部のやや上位に調整工具による幅4mm程度の沈線が1条施される。口径35.2cm・頸部径34.4cm・肩部最大径41.0cm・底径8.0cmとなる。器高48.0cmであり、肩部までの高さ31.2cm：口頸部の高さ16.8cm=65（%）：35（%）となりI類Aの13とほぼ同じ割合の高さに肩部最大径が位置する。I類A13のタガ状口縁の口縁部を外して考えると、口径／器高=0.72～0.73、最大径／器高=0.85、口径／最大径=0.85～0.86となり全体のプロポーションが良く似ている。胴部下半で13が直線的に底部から立ち上がり、28は内湾気味に立ち上がるところが異なる。外面全面と内面口頸部は幅1.5mm程度の工具によって刷毛目状の痕跡を残す粗い調整が行われ、その後別の工具によって丁寧なナデが行われる。部位ごとに調整方向が異なり、口縁部は横方向、頸部は横方向と左上→右下、肩部付近は横方向、胴部は縦方向、内面口頸部は横方向となる。口縁部と胴部下半の底部近くのみ刷毛目状痕跡が残らない。特に外面底部近くは器表面が滑沢であり、念入りに調整されている。内面肩部以下は基本的に横方向のナデであるが、一部縦方向も認められる。

[I類C] 底部から口縁部へスムーズに移行し砲弾形を呈する器形。[20]

20は砲弾形を呈する小型の深鉢である。底部から若干内湾しながら開き、胴部下半から上は直線的に外傾する。図版では円筒形に近い形で示されているが、実際にはもう少し口縁部が開き気味になるとを考えられる。外面は板目状痕跡を残す粗い調整の後にナデが行われる。口縁部～体部上半は横方向、体部下半～底部付近のみ縦方向の調整となる。最終調整に用いられる工具は土器上半と下半で異なり、上半では微細な擦過痕を残し、下半は籠状工具痕が残る滑沢な器表面であり、粗雑なミガキと呼ぶべきかもしれない。内面は全面にわたって横方向の丁寧なナデ調整。

「鉢形土器（II類）」[19]

19は推定口径41cmの大型鉢となり、底部から内湾気味に開き口縁部へ移行する。口縁部から3～4cm程下に2個一対の補修孔が焼成後に穿たれている。内外面共に横方向のナデ。一部に棒状の工具による沈線状の痕跡が残る。体部下半は最終調整で籠状工具が用いられる。金雲母・角閃石を含む。頸部で器厚10mm程度と厚手である。

「浅鉢形土器（III類）」[1・4・8]

図190-1・4は頸部と肩部で屈曲する浅鉢。1は肩部の稜が強調される。口縁部破片は一部のみ残るが、突起や凹点は認められない。口縁部に幅3mm程度の平行沈線が2条施される。内外面共に横方向の丁寧なヘラミガキ。細砂粒を多く含む。

4は口唇部に低い山形突起を有し、口縁部に幅3mm程度の沈線が2条施される。1条は口縁部形に沿ってめぐり、突起の下では途切れる。頸部は内外面共に横方向の丁寧なヘラミガキ。角閃石を多く含む。

図190-8は口頸部が直立する浅鉢であり、やや新しい形態と思われる。内外面共に横方向のナデ。

【その他】

9は鉢の底部で底径7.6cm。外面は縦方向の板目状痕がのこる。内面は丁寧なナデ。19と同一個体の可能性はあるが、内面の調整は9の方がより丁寧である。25はI類A or Bの頸部。[上層出土土器] 3はV層出土の屈曲しない深鉢口縁部。5はIV層出土の深鉢の口縁部。外面は横方向のナデ。内面は原体不明の条線が横方向に施される。角閃石を含む。21・22はIV・V層の出土のI類Bである。16・17は同一個体で上層のV層出土の土器である。I類Bに分類されるがVI層出土の同類と比較すると肩部の屈曲部の稜がシャープに強調されており、やや新しい形態と考える。内外面共に板目状の微細な擦過痕が良く残る。内面はケズリの後に板目工具による横方向のナデ。外面口頸部は横方向および斜め方向の微細な板目痕が残る。粘土紐は内傾接合である。

「陣の内遺跡II-V・W・X・Y区VI層出土土器群の位置付け」

II区V・W・X・Y VI層出土土器群は個体数は9個体と少ないが一括出土であり特に1・13・19・20・28・追加資料の6個体が同時性が高いと考えられる。非常に堅いVI層上面は明らかに生活面であり、土坑も数基検出されており遺構床面の可能性も考えられる。土器のまわりには最大で長径30cm程の焼けた礫が数点検出され、石器も数点出土している。密集した土器の下からは炉跡と考えられる窪みが検出されている。火を用いた行為が行われたことは間違いないが、土器の遺棄または廃棄との同時性の確認はできない。発掘時から住居址を疑って壁面を丹念に観察していたが、堅穴状の落ち込みを確認することはできなかった。復元率の高い大型深鉢A(13)・B(28)と大型鉢(19)が出土していることから土器棺であるかもしれないが、多くの破片がVI層上面に散らばって出土しており、その可能性は高くないと考える。

編年的位置について考えるとき、当該期の土器群の出土遺跡が多く、研究の先進地域であり、地理的にも比較的近い熊本県を参考にするのが妥当であろう。1997年の清田純一の編年案では御領式の後に、天城1式・2式・3式をあてており（清田 1997）、それぞれ富田紘一の上南部III期・IV期・V期に対応する。筆者は熊本県の編年については、資料を実見した訳でもなく、詳しく検討し理解していないが、主に型式学的分類や埋甕の組み合わせが編年案に反映されているものと考える。層位的に十分に検討されている例は出土数の割りには少ないようである。型式・層位の優先の問題については明確な答えは持ち合わせていないが、同一時期に古い様相を示す土器と新しい様相を示す土器が存在することも有り得ると考えている。よって我々は型式学的に理解が可能なまでに細分すると共に、遺構床面出土や土器棺や層位的に纏まった一括性の高い資料を見極め抽出して、編年および先史時代社会の生活様式の復元に用いられるべきと考える。一括性の見極めが重要な問題となる。御領式に後続する数型式は、一見型式内容に大きな変化が見られず、時期差および地域差と考えられる属性要素の変化が細別器種ごとに多く明らかにされているわけではない。それ故一括性の高い土器群の定量的分析が必要とされよう。

陣の内遺跡の一括出土土器群については、I類A（13・追加資料）のタガ状口縁が急激に内傾する点、深鉢（13・28・追加資料）の肩部屈曲部が緩やかな稜を有し上位に1条の沈線が施される点、黒色磨研の浅鉢（1）の口縁部幅が広い点はやや古い様相であると考え、19・20の屈曲しない無文の大型鉢および小型深鉢の出現はやや新しい様相と考えるが同時期の所産としておきたい。大型深鉢の最大径が肩部にあり、最大径が器高中位付近よりも上位にあることが特徴的である。御領式に後続する段階の土器群であろうが、清田編年の天城1・2式に対比できるものとしておく。

また南串山町国崎遺跡4層出土土器群については、報告者の古門は型式学的に細分されることから2型式（期）の土器からなるものと考えているが、一括性が高い出土状態であるようなので、同一時期の土器群と考え、型式学的に古相と新相を示すものが同一時期の土器群に含まれていると考えたい。清田編年の天城3式に対比されよう。

研究史でも概観したように、島原半島の縄文晩期の土器研究は比較的良好な出土土器群があるにもかかわらず低調である。学史に名を残す土器型式および遺跡が多いのは事実である。しかし礫石原式・山ノ寺式・原山式などはどれも型式内容がはっきりとせず、少数の発表資料と共に「型式名」のみが独り歩きしているのが実状であり、研究者によっては使用しないことも多い。使用する研究者の理解もまちまちである。これらの型式名については出土資料の検討によっての再設定や、出土状態が良好で量的に十分な新資料による新しい型式の設定が求められよう。それまでは礫石原式・山ノ寺式・原山式は、型式というよりもむしろ「～式期」というように用いて、島原半島の縄文晩期のある段階を示す用語として理解されるべきではないか。

古くは賀川によって、最近は清田によって提唱されているが、晩期を数時期に分けて、「晩期1・2・3…期」と設定し、新しい段階の資料の検出時には、各期を細分することで理解できるであろう。編年研究を含めた土器型式の理解が先史時代社会の様相の理解への近道のひとつではあることは変わりはない。九州全域での晩期編年の進行具合は地域によって異なり、先進地域の編年案・資料との比較・検討による各地域ごとの編年の確立が望まれる。一括性の重要性を指摘してきたが、出土状態の良好な資料の発見を待つ一方で、研究者による地道な研究活動が望まれよう。

『参考文献』

【縄文時代】

- 安樂 勉 1990 「白井川遺跡（II）」 東彼杵町文化財調査報告書第4集 pp.72-76
乙益重隆 1965 「縄文文化の発展と地域性10九州西北部」「日本の考古学II縄文時代」 pp.250-267
賀川光夫 1965 「縄文文化の発展と地域性11九州東南部」「日本の考古学II縄文時代」 pp.268-284
賀川光夫 1969 「縄文晩期文化 九州」「新版 考古学講座3」 pp.385-403
河北 肇 1986 「伊坂上原遺跡・石仏遺跡」熊本県文化財調査報告 第78集 pp.105-164
清田純一 1997年度長崎県考古学会発表要旨
小池史哲 1980 「広田遺跡0区」「二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告」 福岡県教育委員会 pp.1-138
小池史哲 1982 「福岡県二丈町広田遺跡の縄文土器・晩期初頭広田式の設定・」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 pp.127-146
坂本嘉弘 1994 「埋甕から甕棺へ・九州縄文埋甕考・」古文化談叢第32集 pp.1-28
島津義昭・清田純一 1980 「天城遺跡—熊本県菊池市大字赤星字天城—出土縄文土器の報告」『古保山・古閑・天城』熊本県文化財調査報告第47 熊本県教育委員会
坪井清足 1967 「熊本県御領貝塚」「石器時代第8号」pp.45-52

- 富田紘一 1986 「西山南麓の未紹介遺跡」「戸坂遺跡発掘調査報告書」熊本市教育委員会 pp.131-153
- 富田紘一 1996 「縄文時代」「新熊本市史」 pp.29-353
- 古門雅高 1995 「国崎遺跡II」南串山町文化財調査報告書第3集
- 古田正隆 1974 「筏遺跡・縄文後・晩期の埋葬遺跡・」百人委員会埋蔵文化財報告書 第4集
- 古田正隆 1977 「中田遺跡図録・御領式（筏5・6類）の単純遺跡・」百人委員会埋蔵文化財報告 第8集
- 村川逸朗・安楽勉 1994 「畠中遺跡」島原市埋蔵文化財調査報告書第九集島原市教育委員会宮内克巳
1981 「三万田式土器の研究」「古文化談叢第8集」 pp.251-270
- 山崎純男・島津義昭 1981 「晩期の土器—九州の土器」「縄文文化の研究4」 pp.249-261
- 吉田正一 1994 「大久保遺跡」 熊本県教育委員会 熊本県文化財調査報告第143集
- 【弥生時代～古墳時代】
- 石野博信 1990 『日本原始古代住居の研究』 吉川弘文館
- 井上裕弘 1991 「北部九州における古墳出現前後の土器群観その背景」児嶋隆人先生喜寿記念論集『古文化論叢』 pp.315-372
- 蒲原宏行 1991 「古墳時代初頭前後の土器編年—佐賀平野の場合一」『佐賀県立博物館 美術館調査研究書第16集』 pp.2-42
- 宮崎貴夫 1985 「西ノ角遺跡出土の土器について」『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集 pp.82-102
- 宮崎貴夫 1986 「今福遺跡3」 長崎県文化財調査報告書第84集
- 柳田康雄 1987 「九州地方の弥生土器 2 高三瀬式と西陣式土器」『弥生文化の研究4』 pp.34-44
- 柳田康雄 1991 「土師器の編年 2 九州」『古墳時代の研究6』 pp.34-47
- 米田敏幸 1991 「土師器の編年 2 九州」『古墳時代の研究6』 pp.19-33

写真図版



陣の内遺跡遠景（南から、上方の山は多良岳）



I-B区西壁土層



I区発掘風景

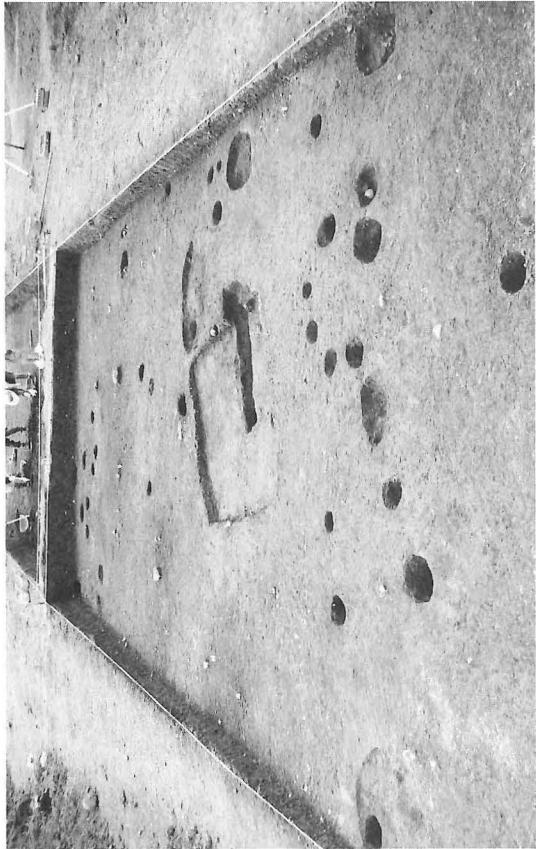


I-B区南壁土層

写真図版10 土層・遺構



I-R区東壁土層



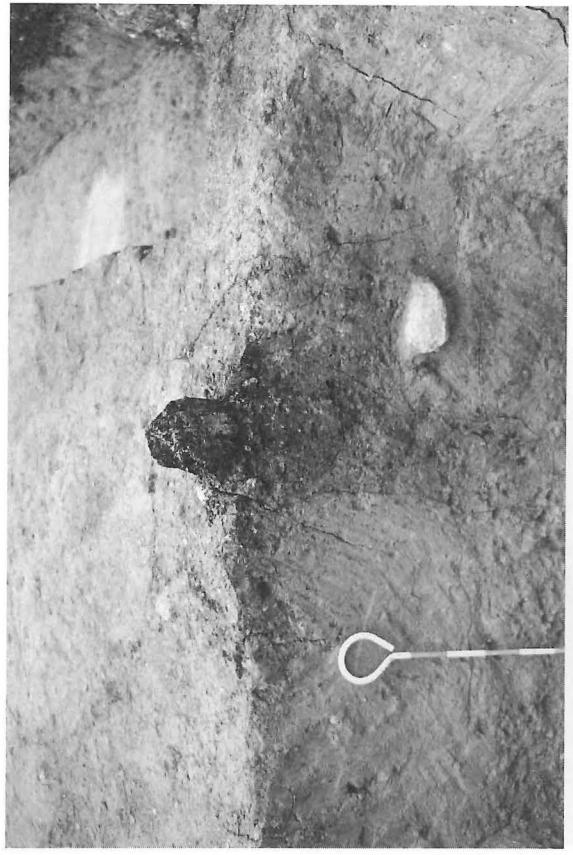
I-A区II層面柱穴群（中央方形部分は試掘壙跡）



I-M区東壁土層



I-D区焼失住居遺構



I-D区焼失住居跡住根



I-D区1号住居跡(左下)と2号住居跡(中央隅丸方形部分)



I-D区1号住居跡(左下円形部分)と2号住居跡(中央隅丸方形部)

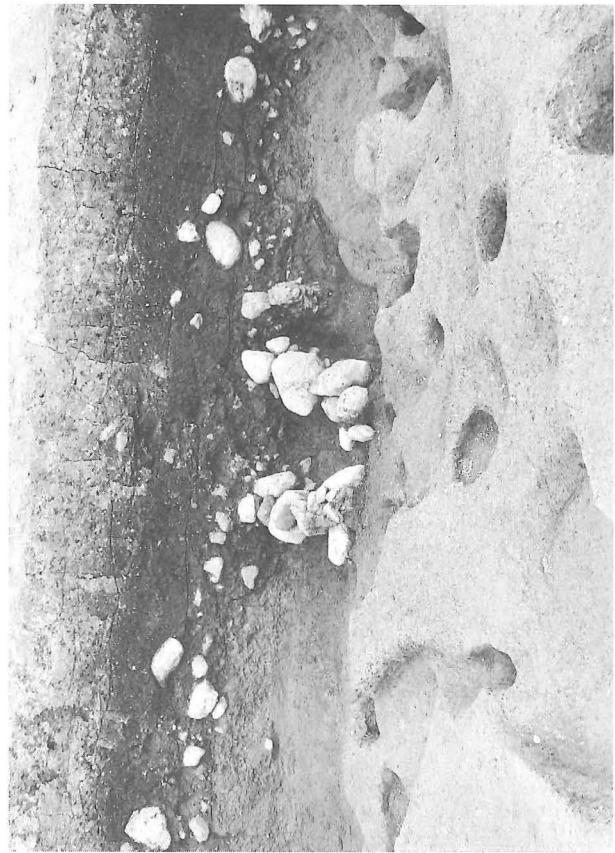
写真図版12 住居跡状遺構・集石遺構



I-H区住居跡状遺構と方形炉状遺構（北側から）



I-U区1号集石遺構（手前）と2号集石遺構（向こう側）



I-H区住居跡状遺構と方形炉状遺構（西側から）

I-Q・R区間屋外炉跡

写真図版13 U・X区の集石遺構



I-U区集石遺構



I-X区屋外炉遺構



I-Y区遺物出土状況



I-Y区遺物出土状況

写真図版14 Q・R区の遺物出土状況



I—R区IV層遺物出土状況



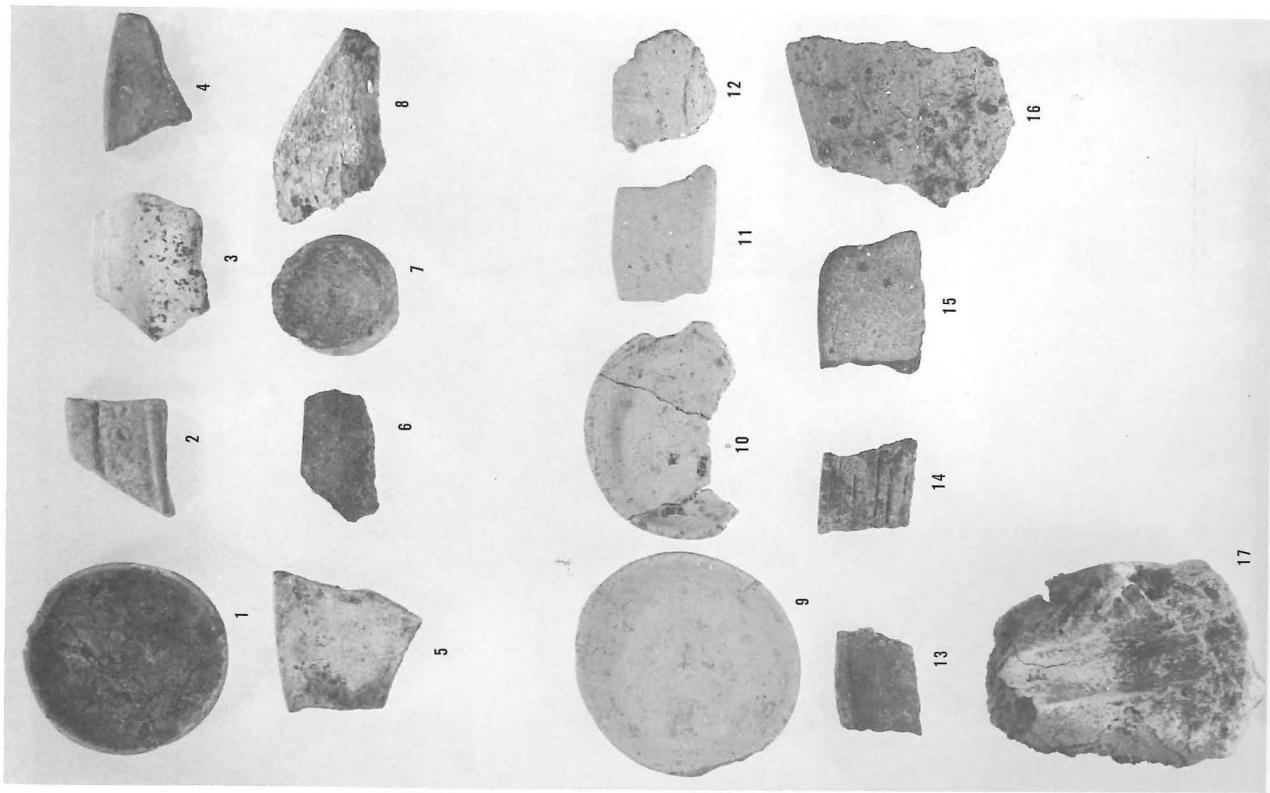
I—Q区III層遺物出土状況



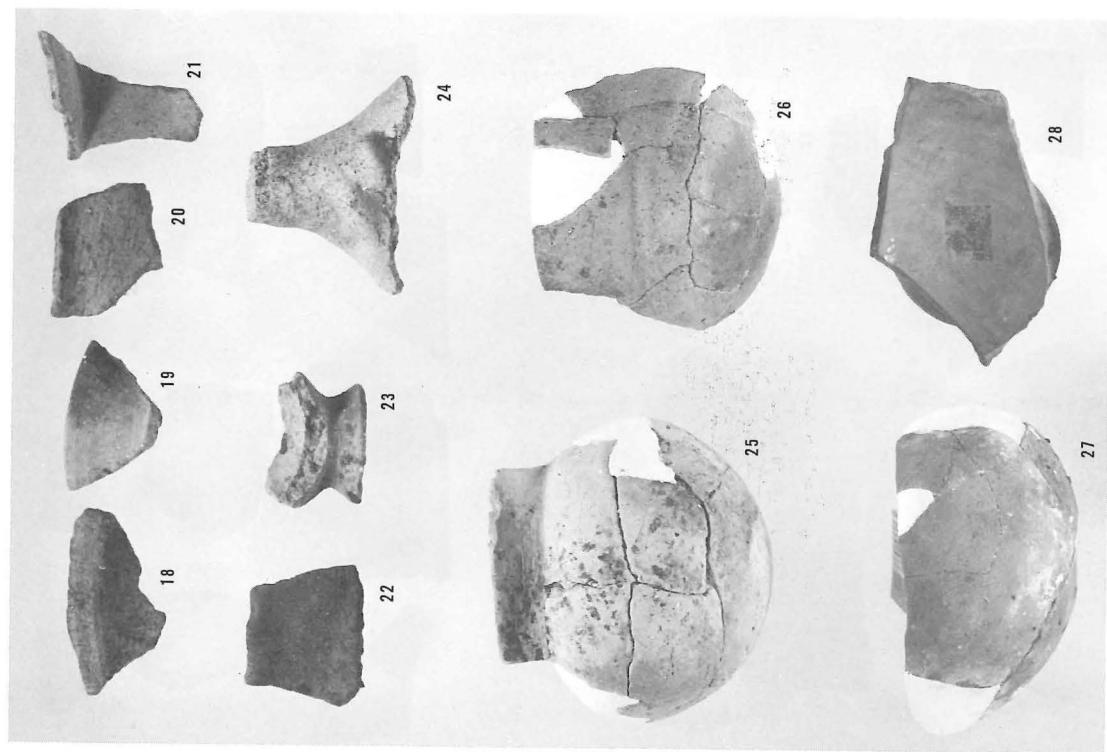
I—R区IV層遺物出土状況



I—R区IV層遺物出土状況

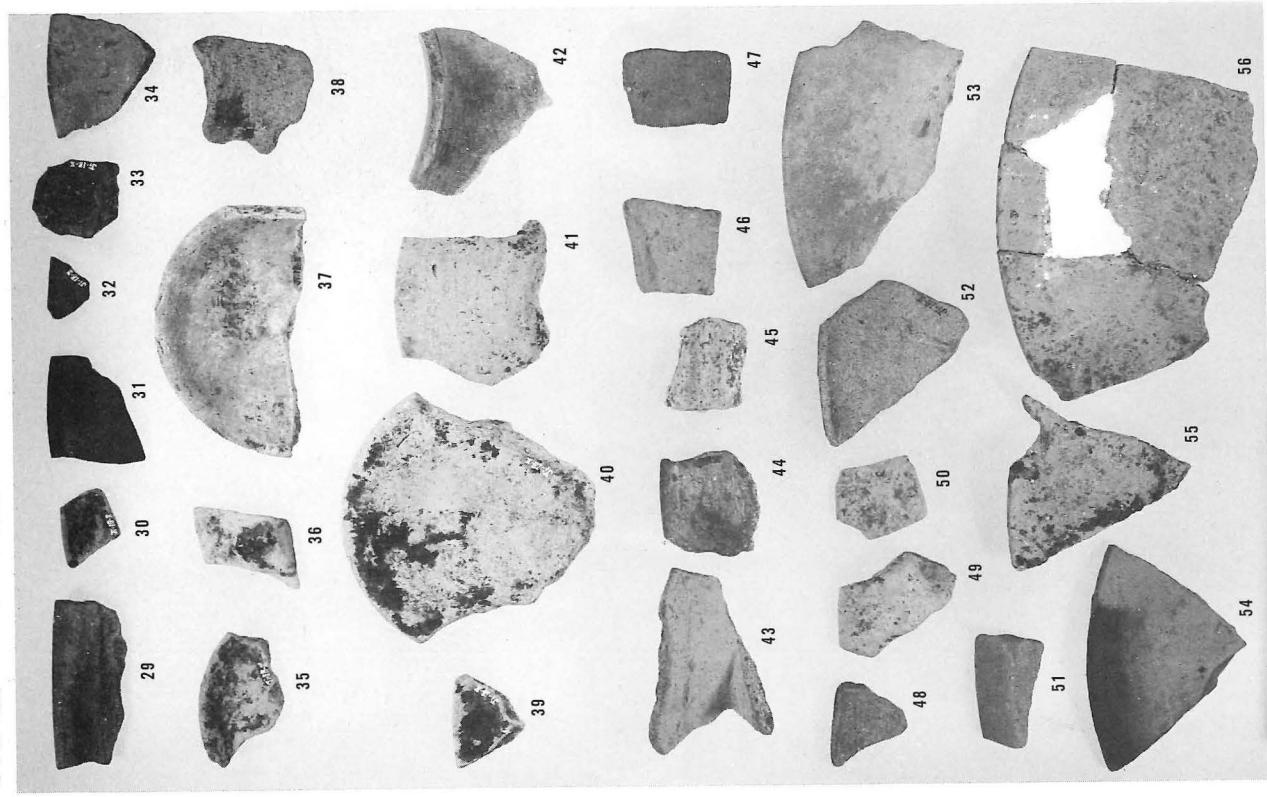


I-A-I・II層 I層 (1~8)
II層 (9~17)

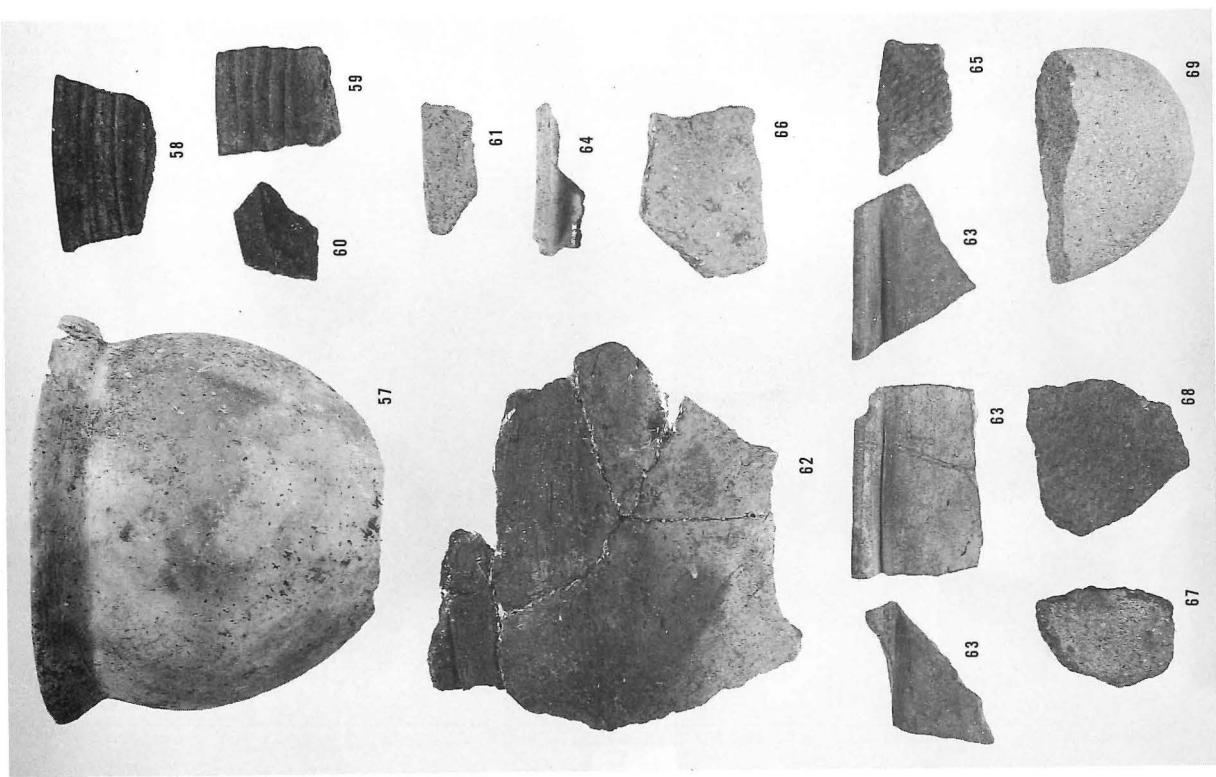


I-A・B区間珪質部II層の遺物

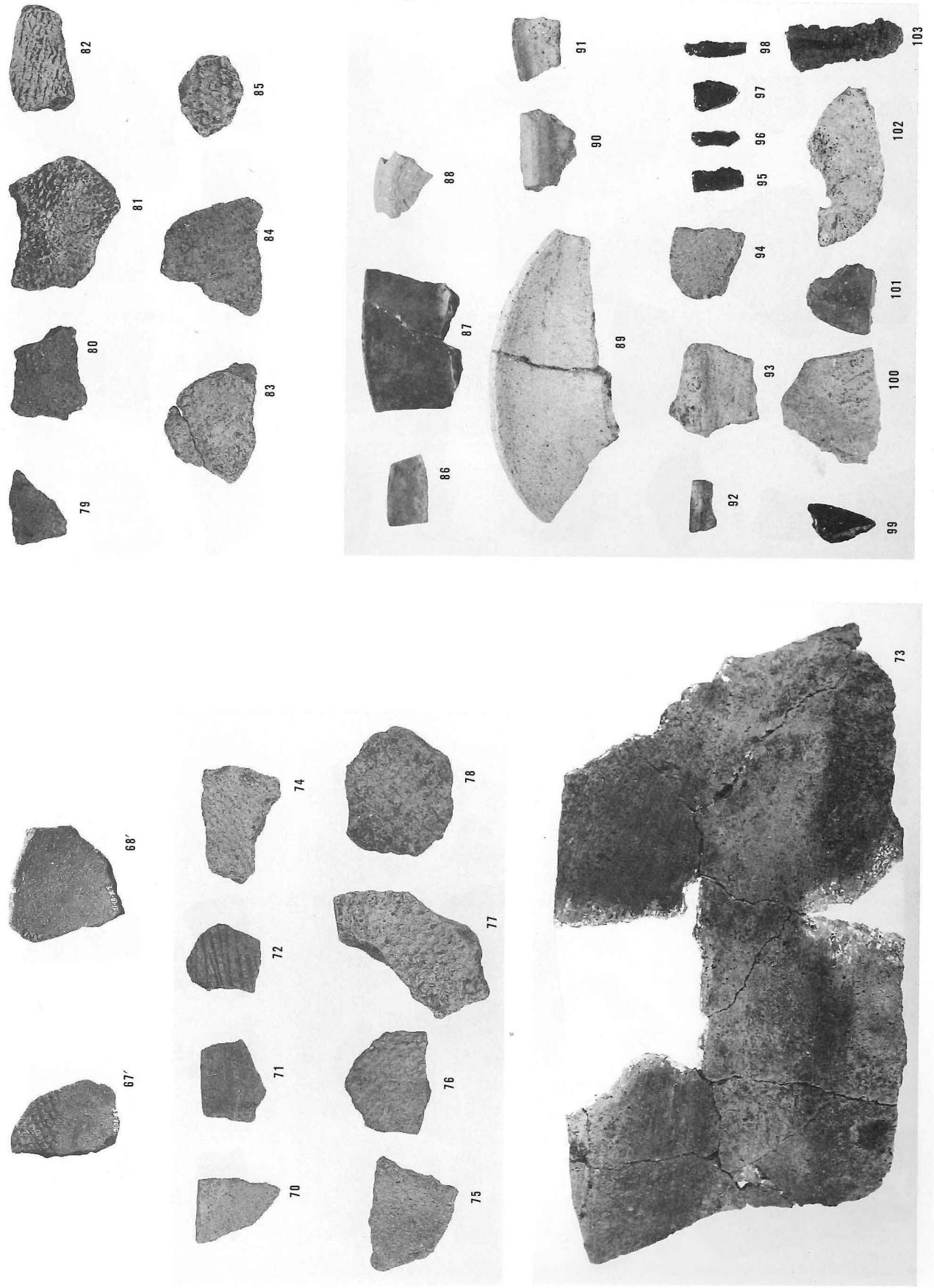
写真図版16 I区の遺物(2)



I-B-II



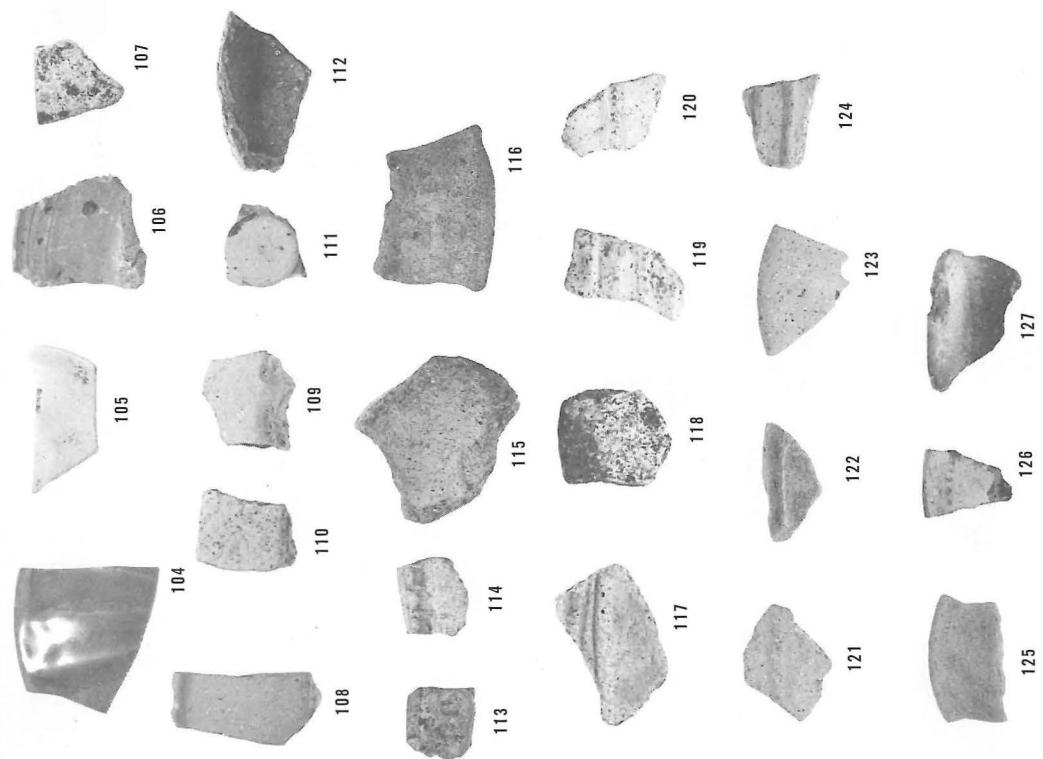
I-B-III



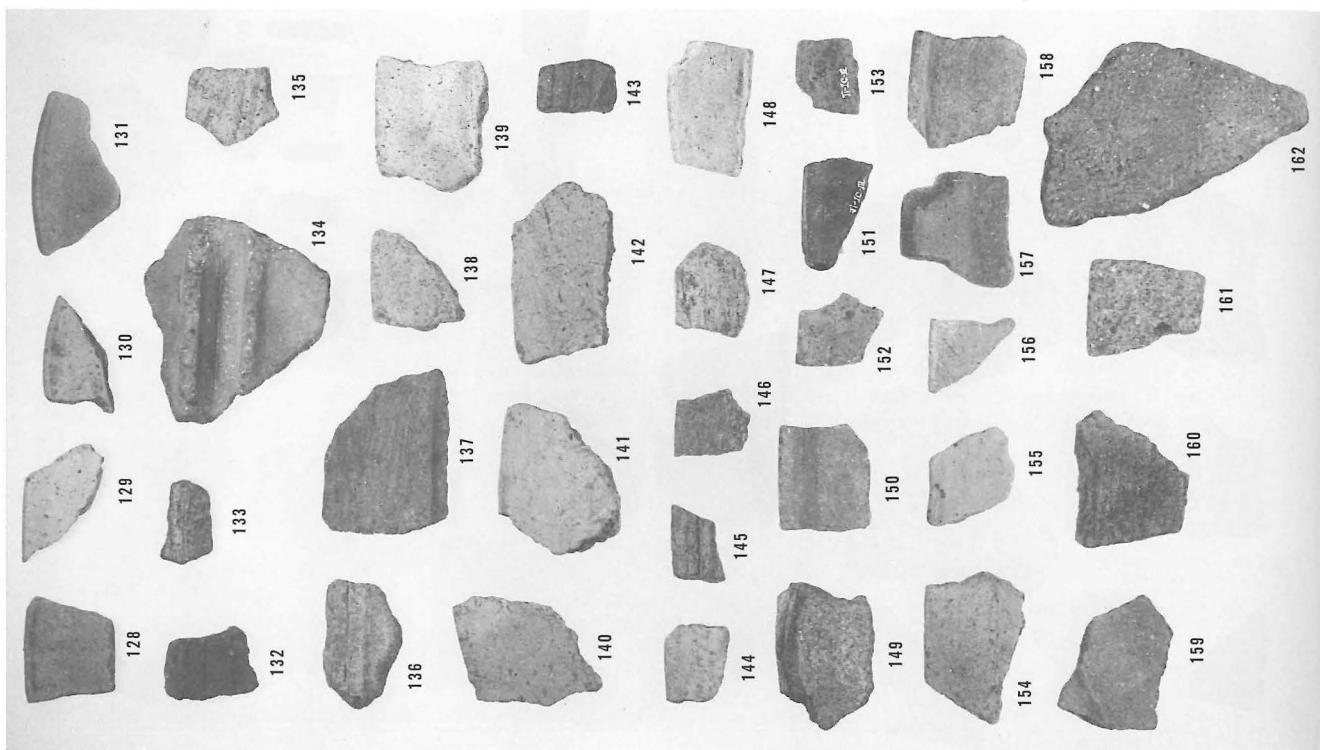
I-B区-III層 (67', 68')
I-B区-IV層 (70~78)

I-B区-V層 (79~85)
I-C区-II層 (86~103)

写真図版18 I区の遺物(4)

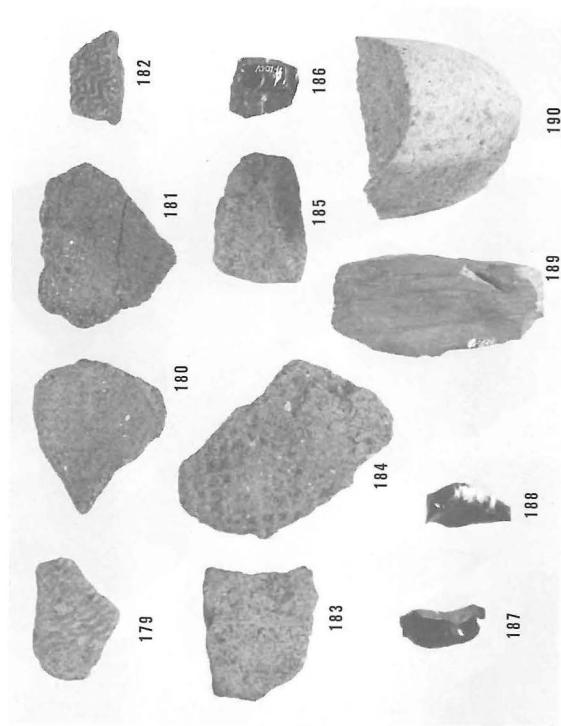
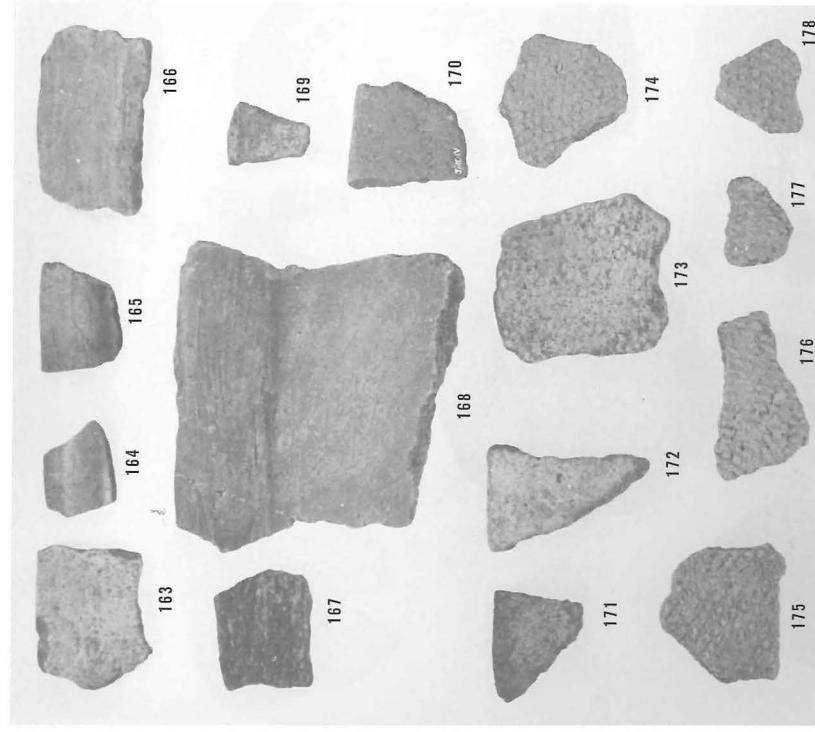


I—C区—III層



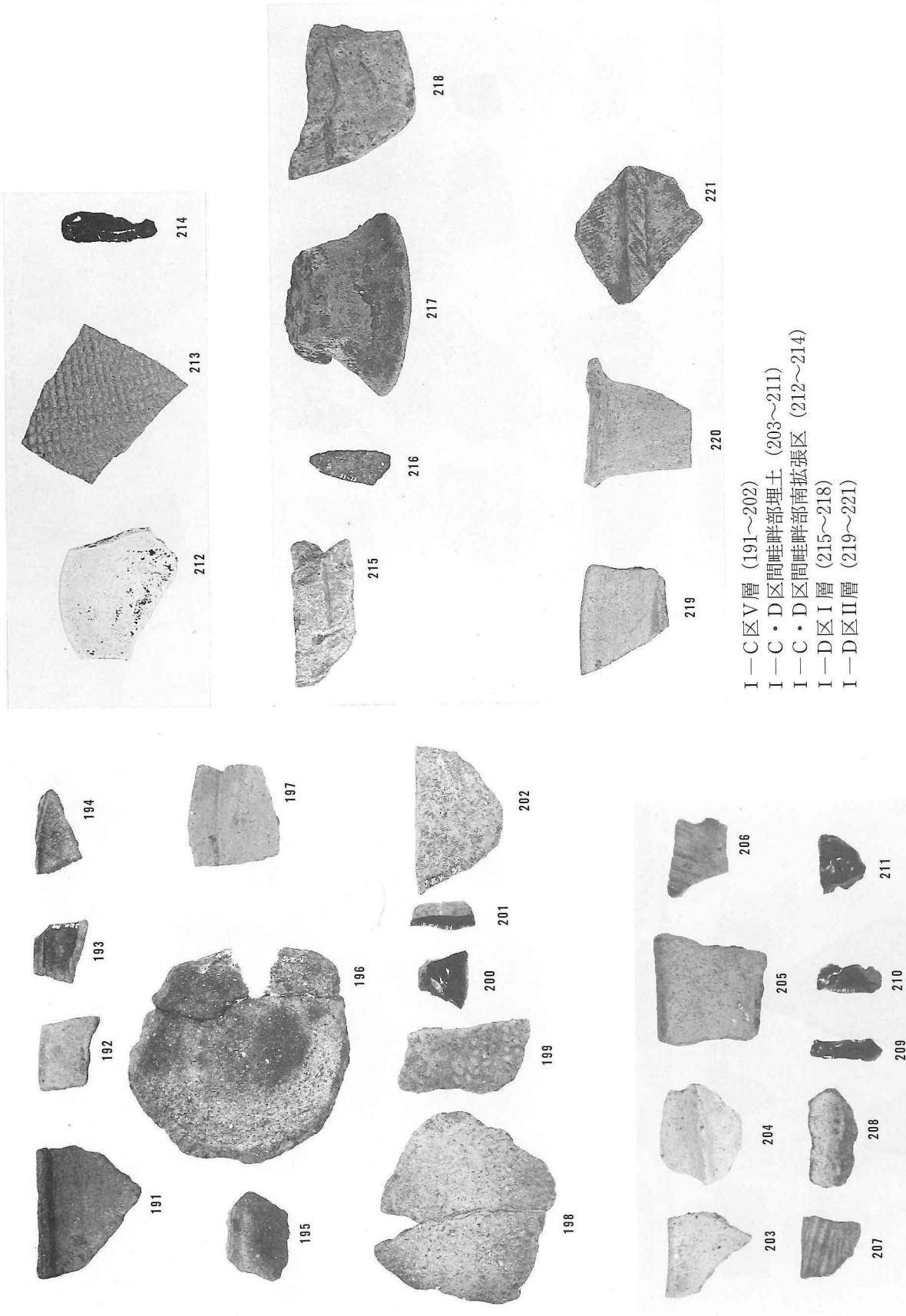
I—C区III層

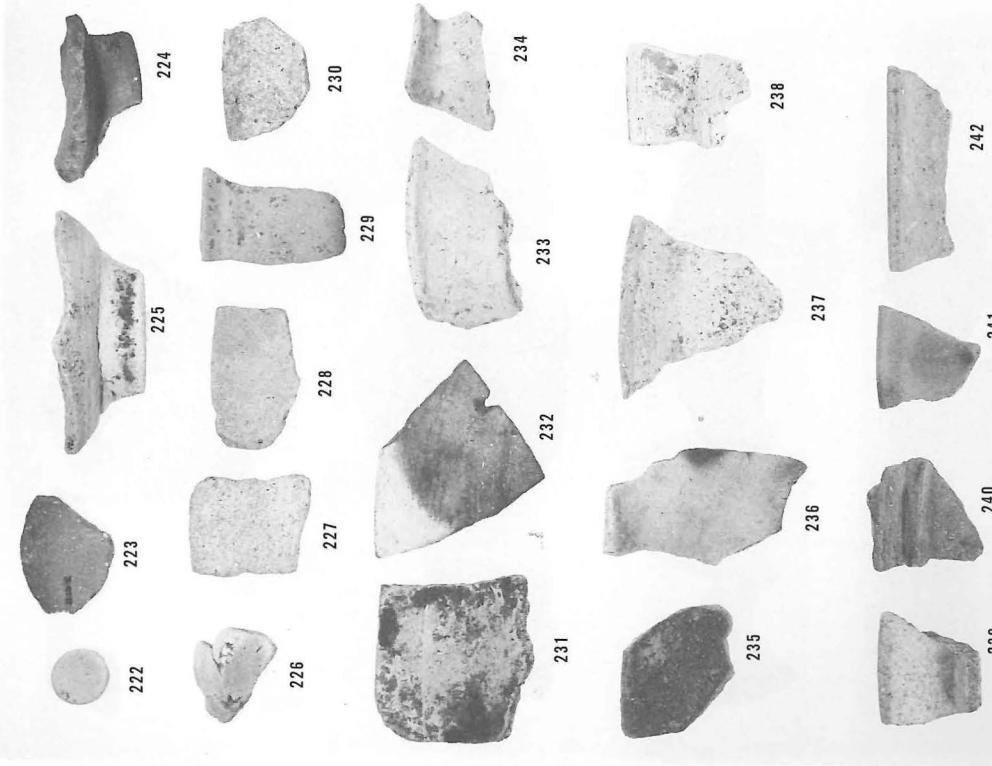
I—C区III層②



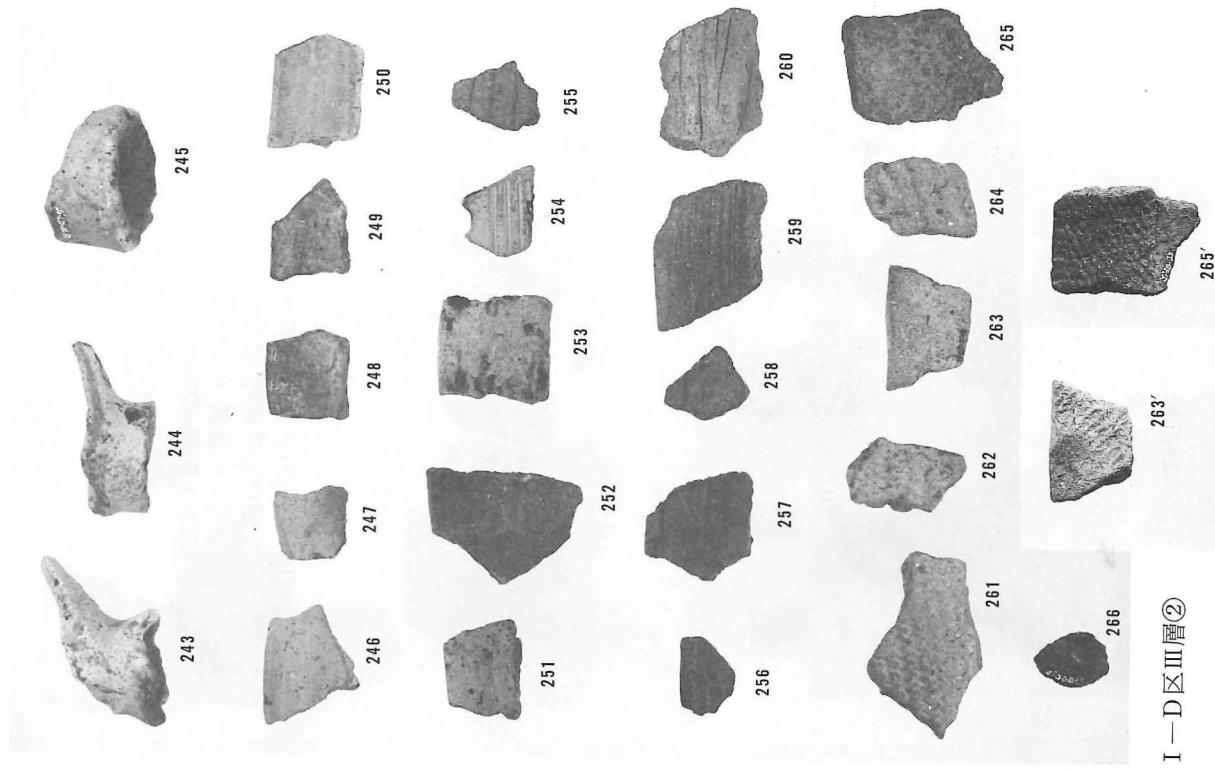
I—C区IV層 (163~190)

写真図版20 I区の遺物(6)



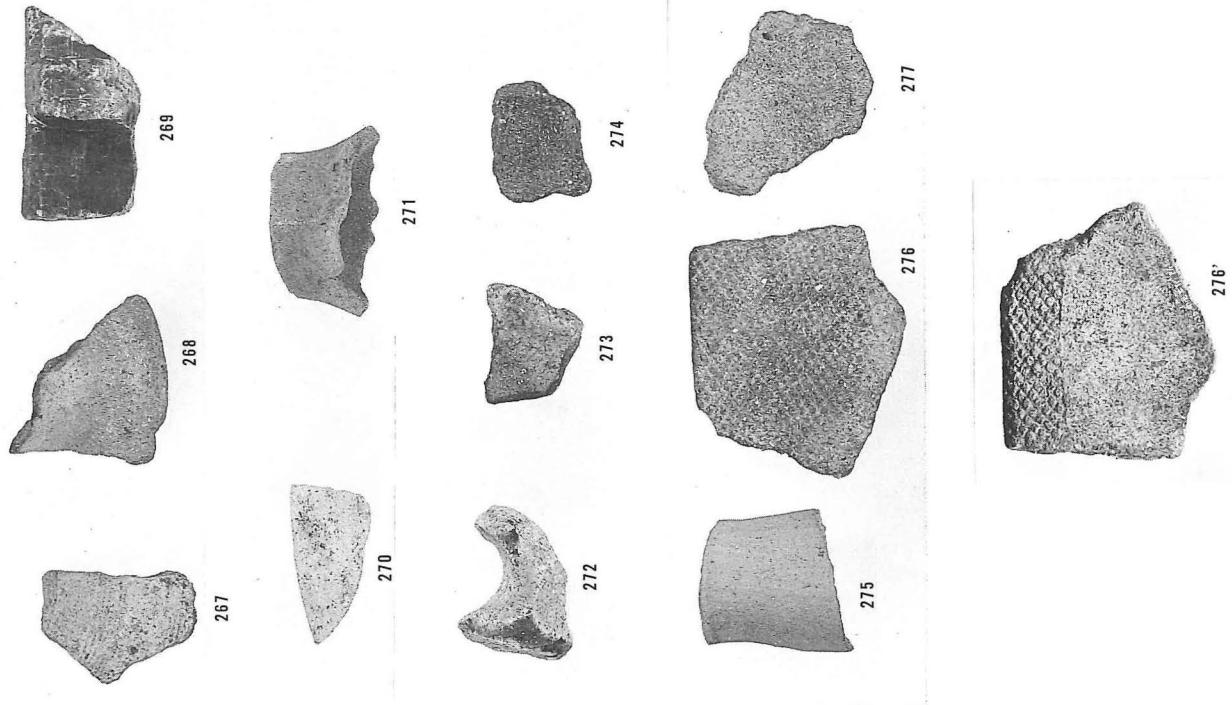
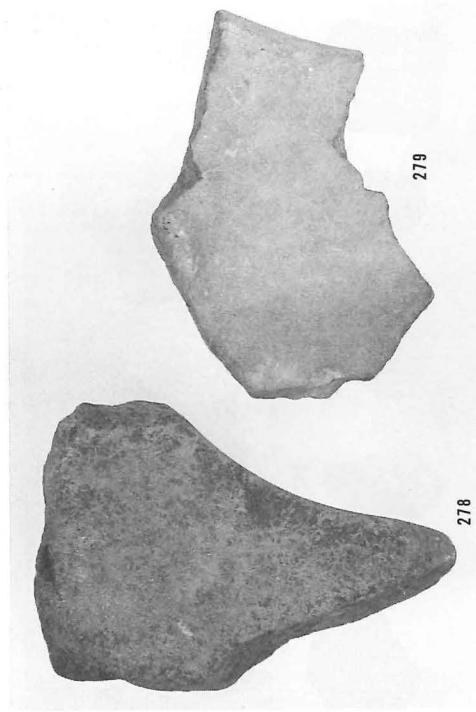


I-D区III層①



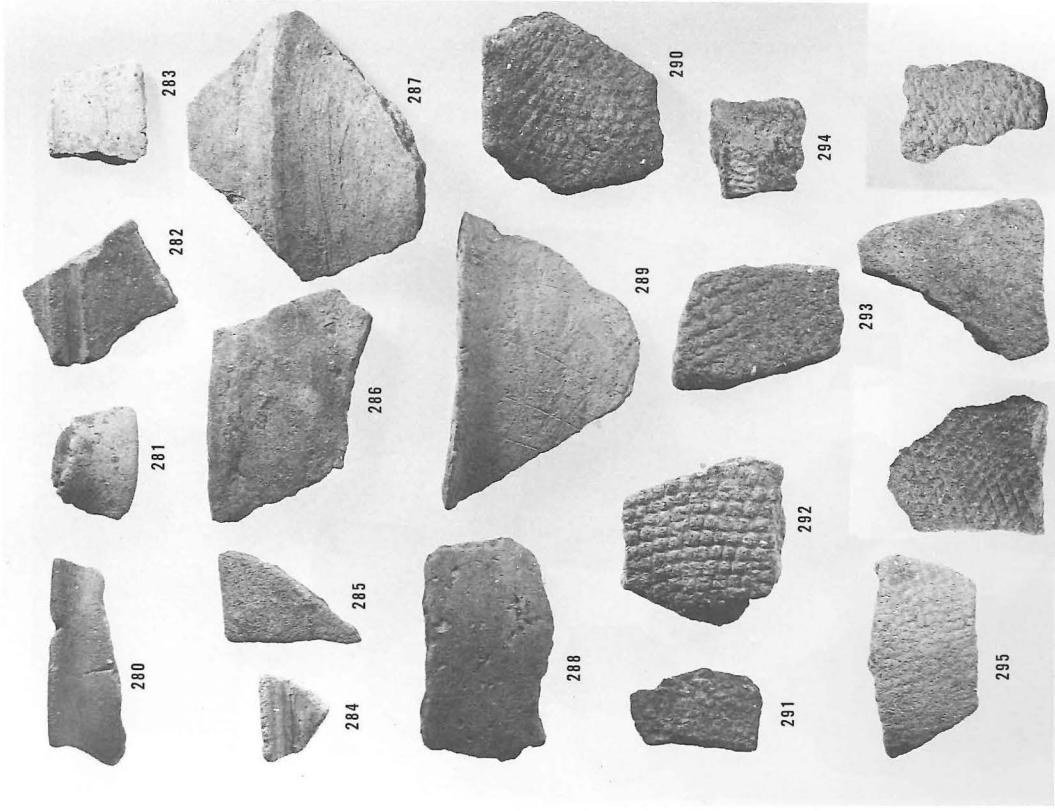
I-D区III層②

写真図版22 I区の遺物(8)

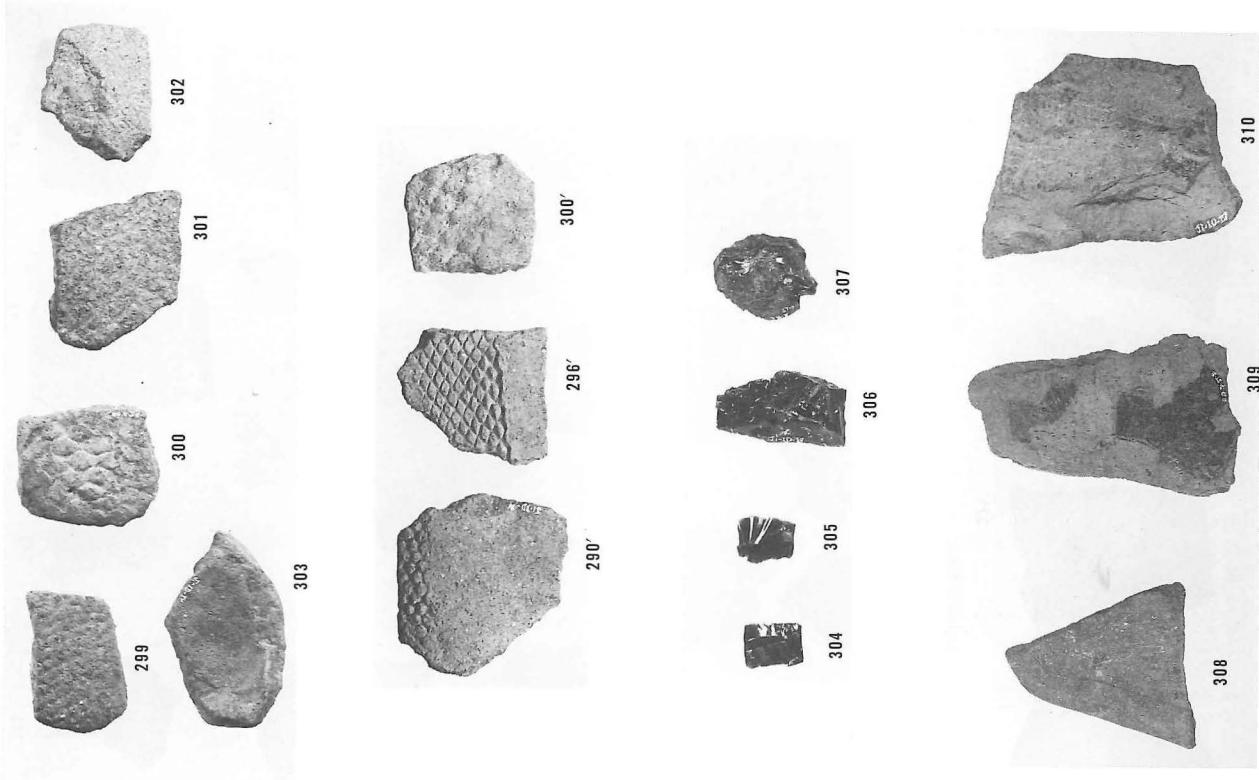


I-D区III層 長方形ピット (267~269)
遺構関連遺物 (270~271)
長方形遺構 (272~274)
I-D区南西部III・IV層 (276~279)

写真図版23 I区の遺物(9)

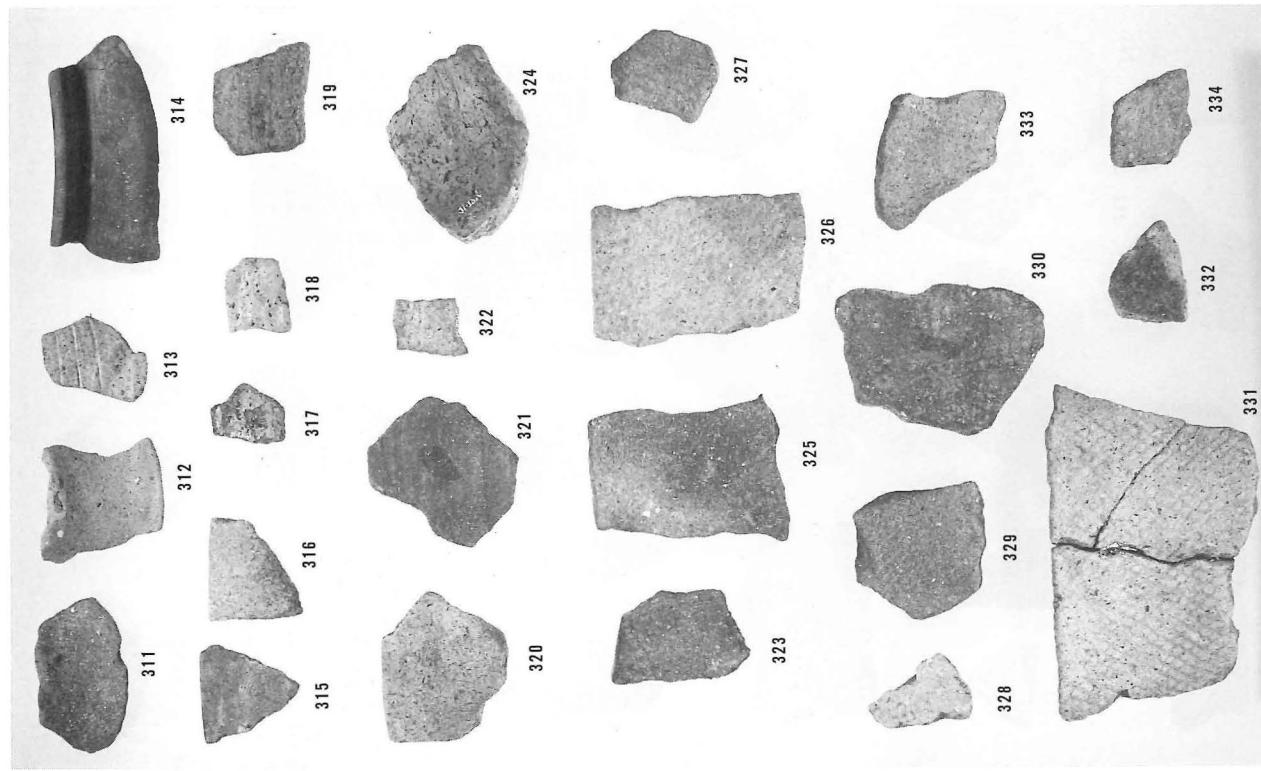


I-D区IV層①

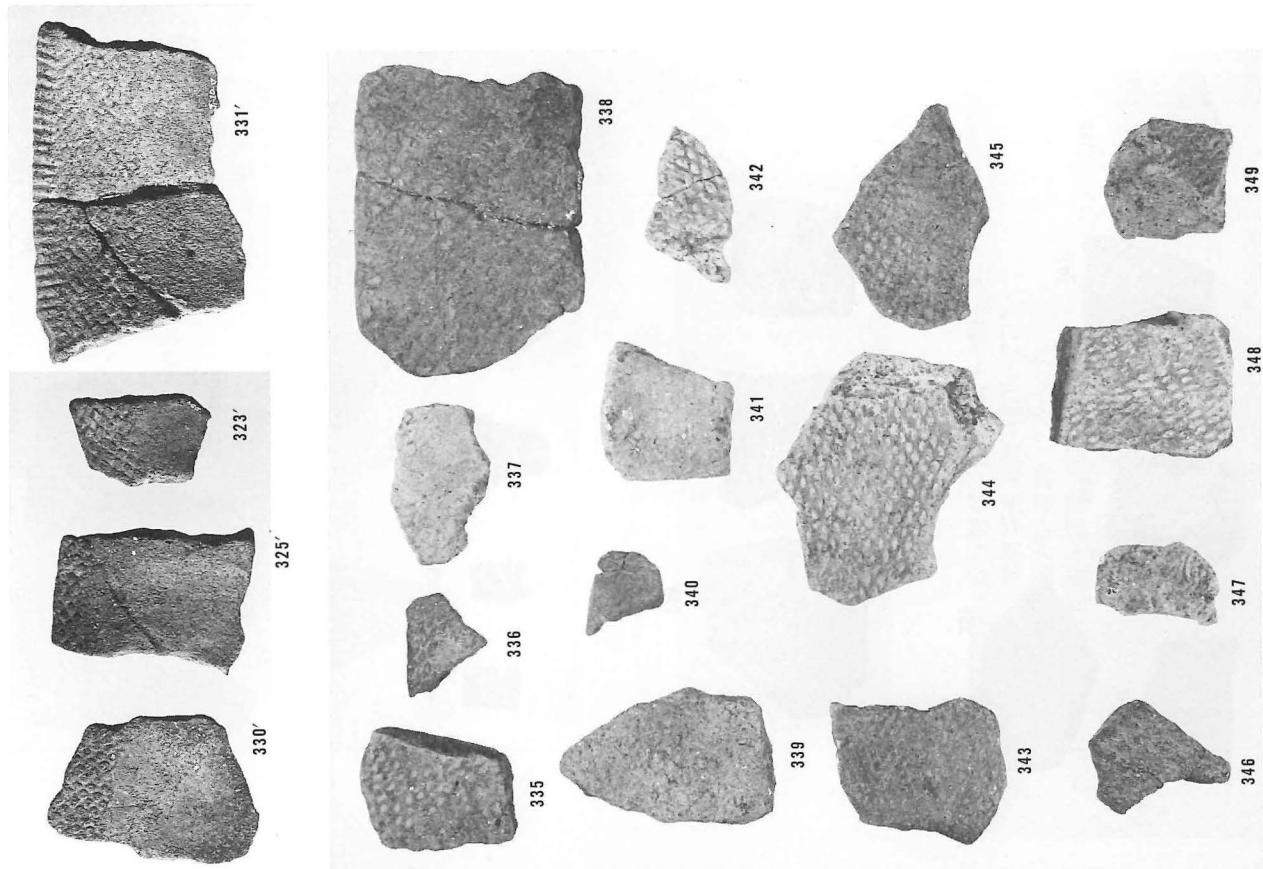


I-D区IV層②

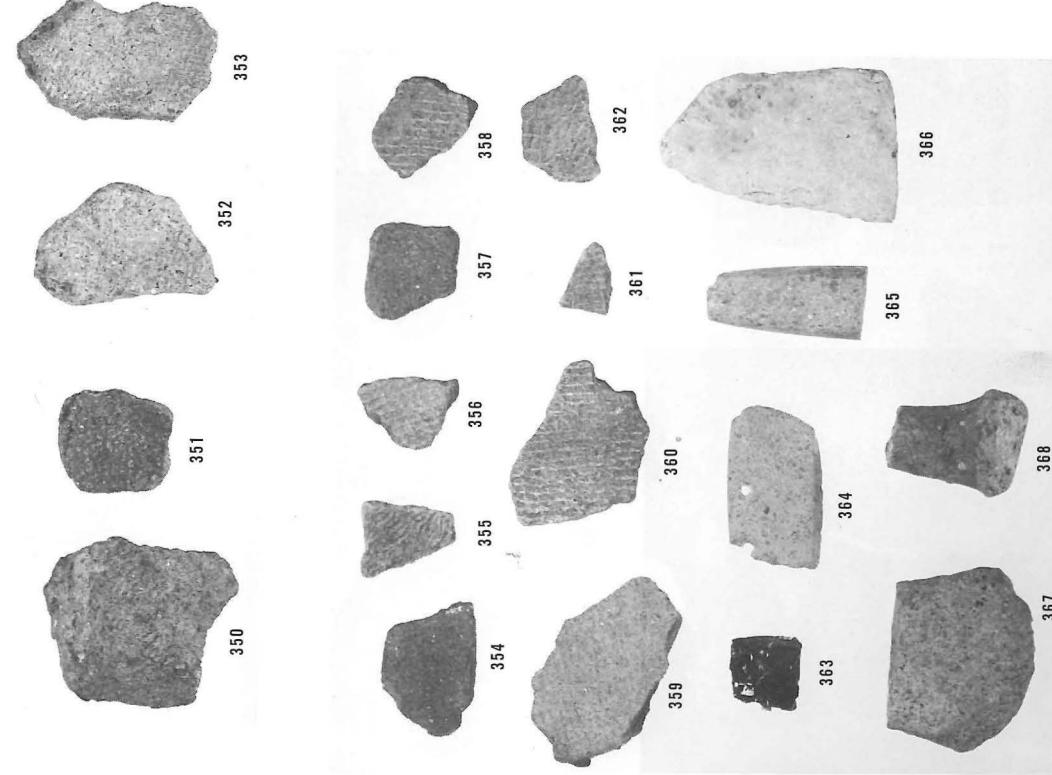
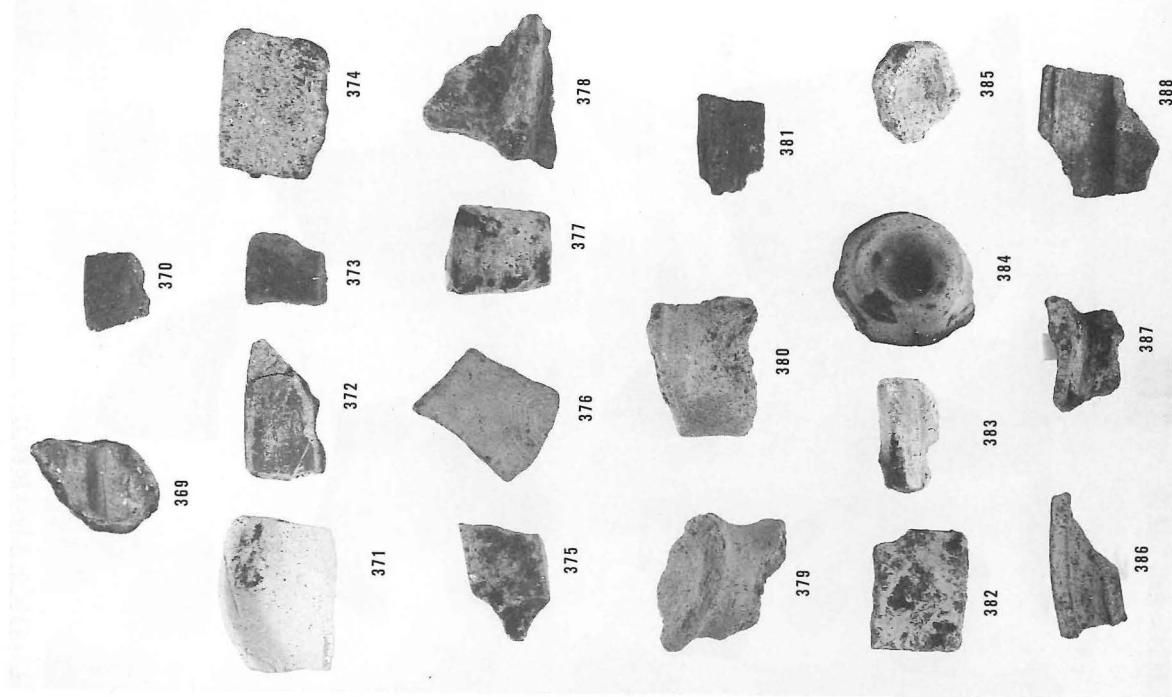
写真図版24 I区の遺物(10)



I-D区V層①



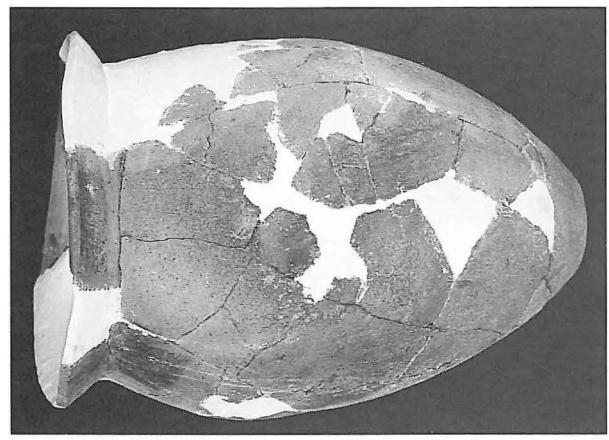
I-D区V層②



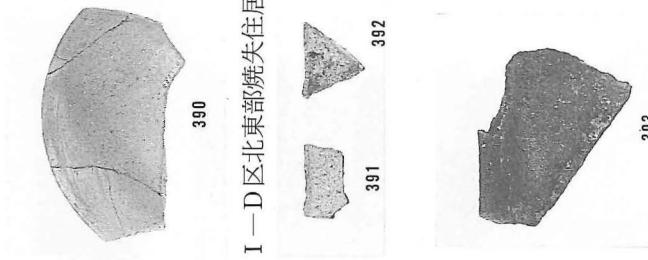
I-D区V層③ (350~368)

I-D区焼失住居跡拡張区 (369・370)
I-D区北排土 (371~374)
I-D区北拡張区 (375~381)
I-D区北拡張区II層 (382~388)

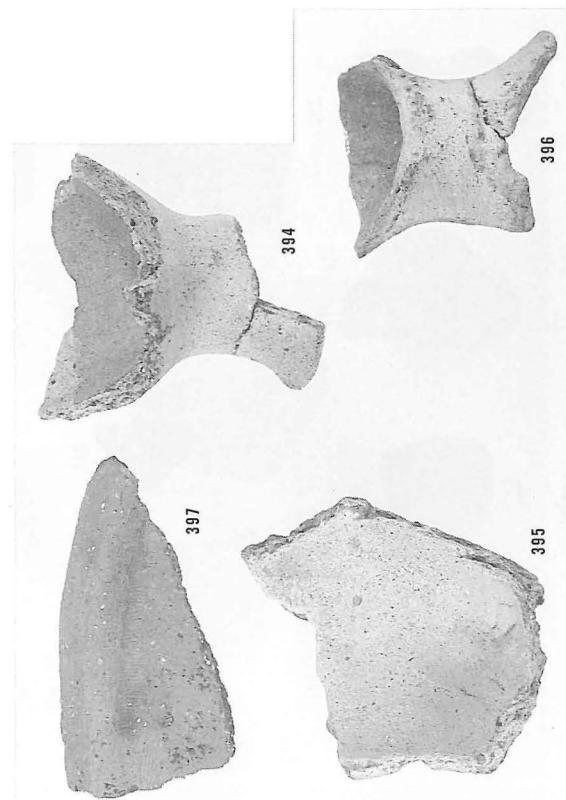
写真図版26 I区の遺物(1)



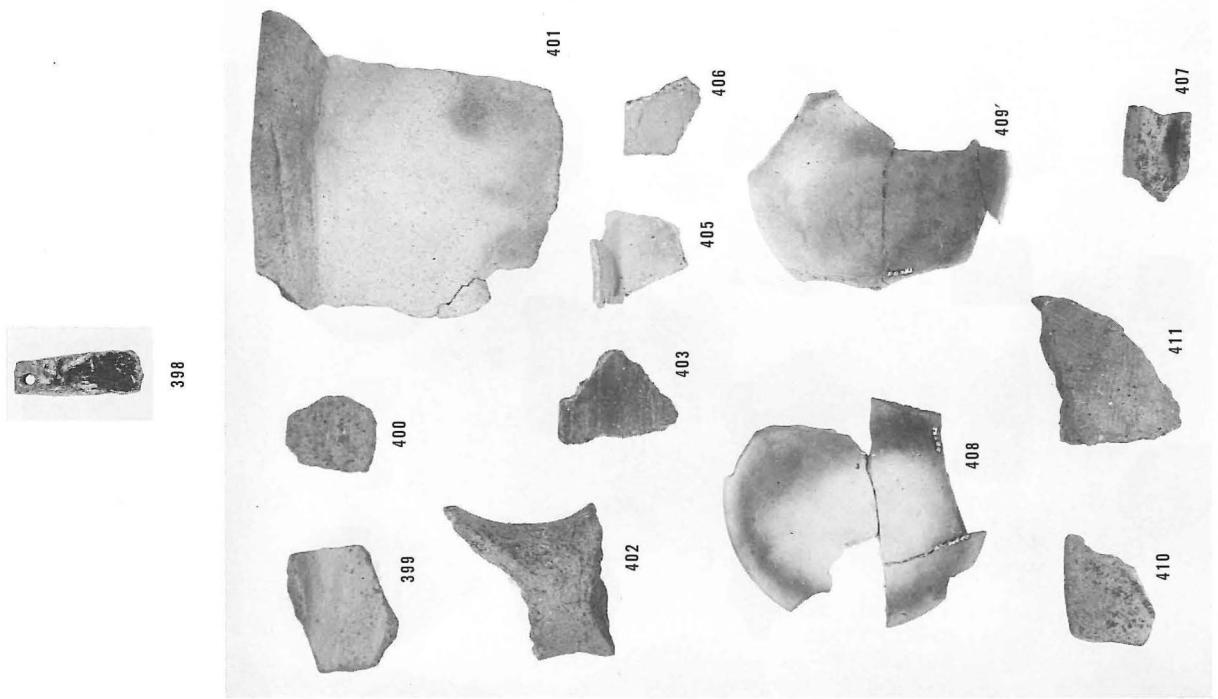
I-D区2号住居跡床面



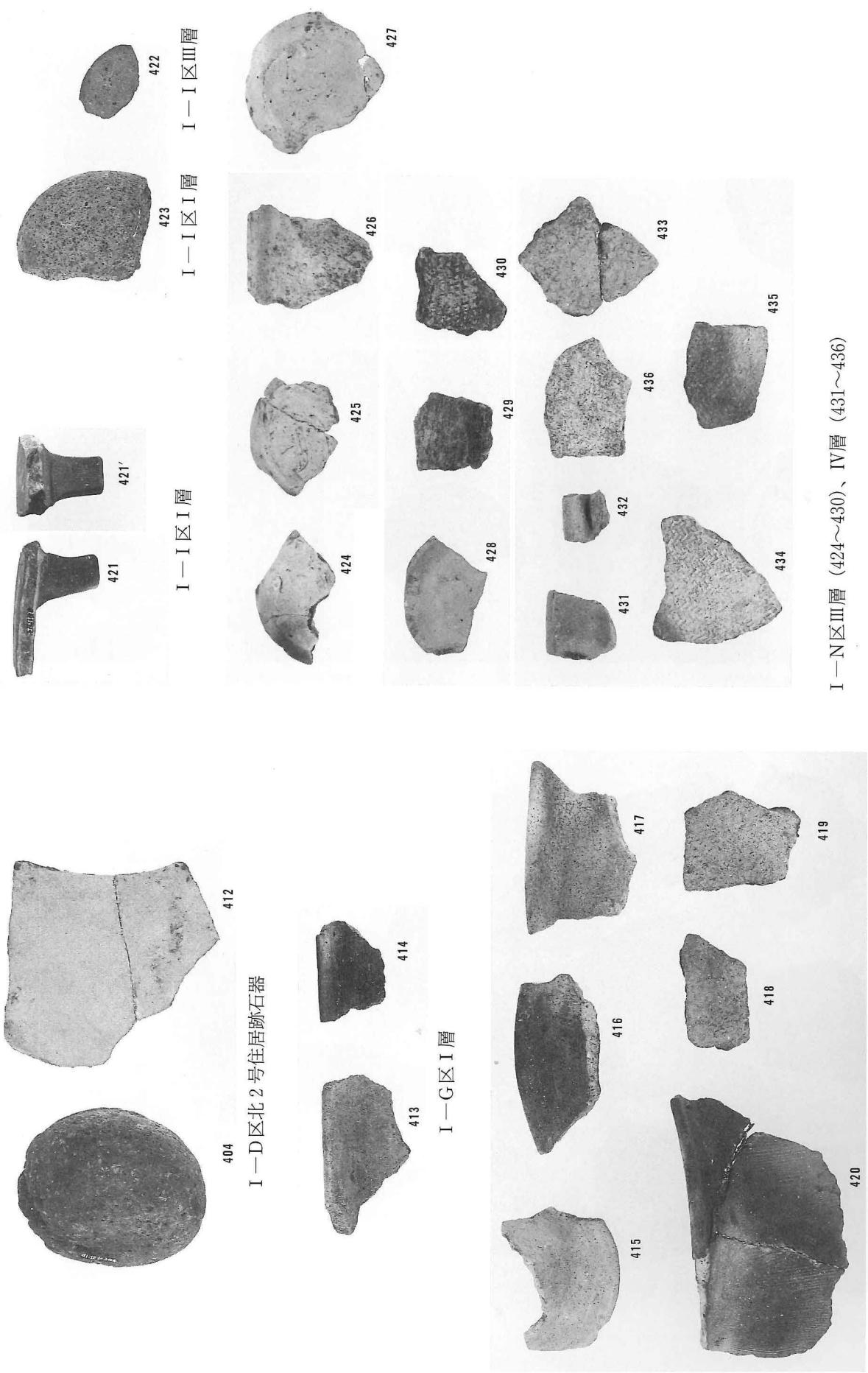
I-D区北東部焼失住居



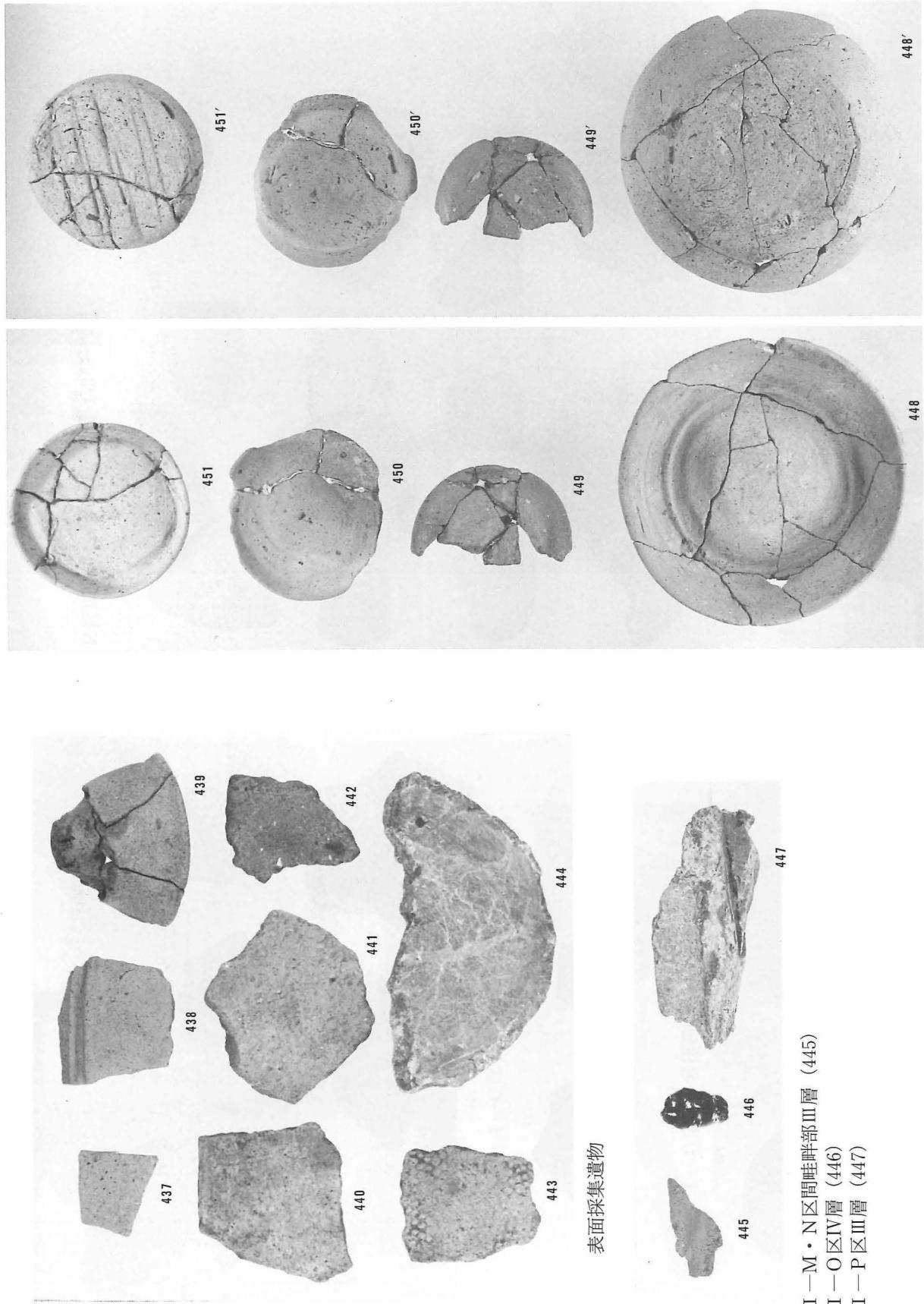
I-D区北2号住居跡① (391~398)



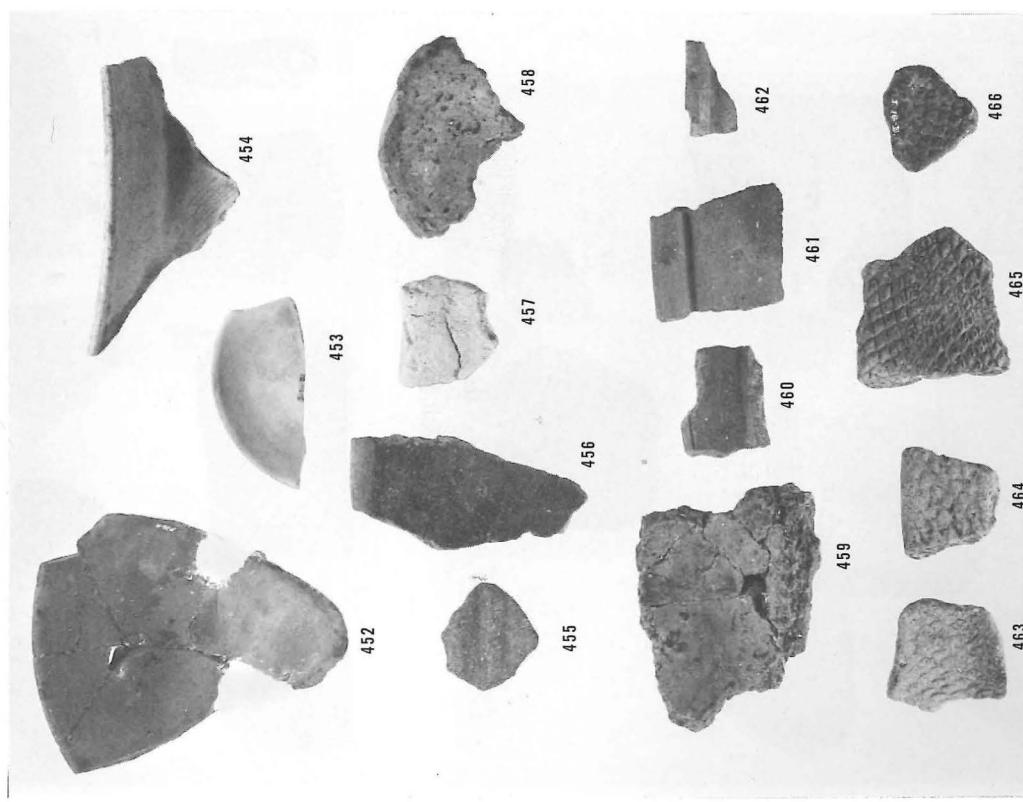
I-D区北2号住居跡①



写真図版28 I区の遺物(14)

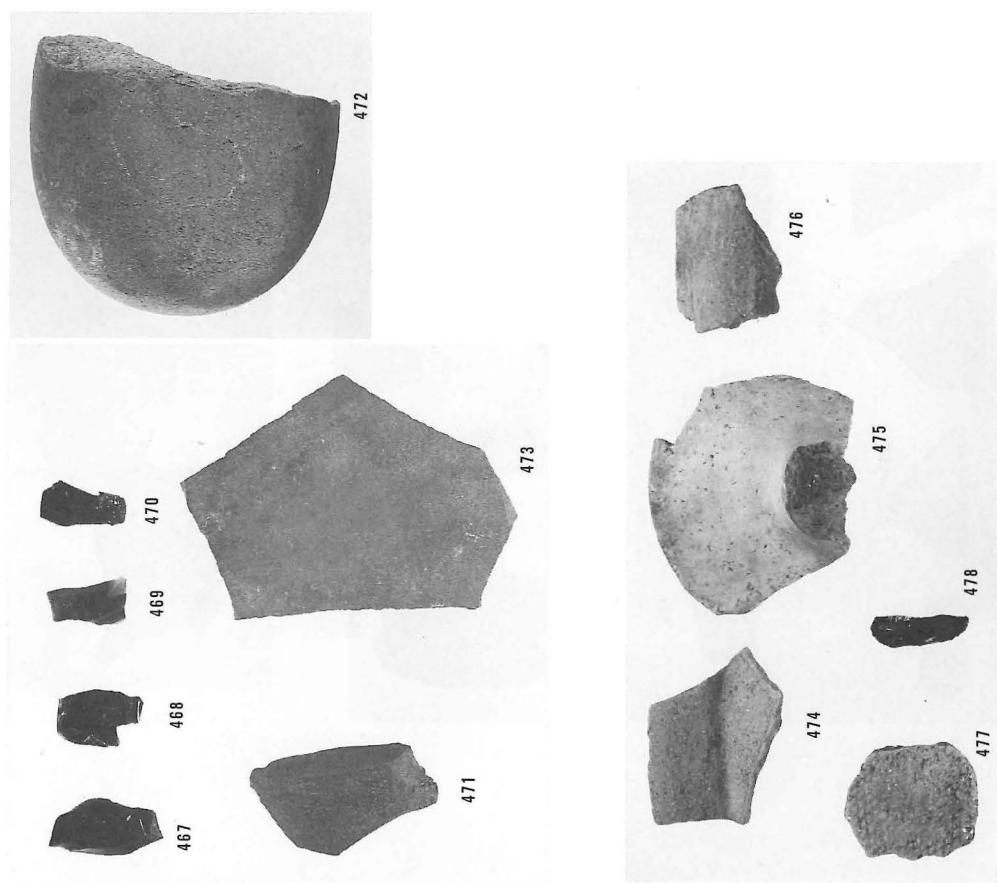


I—M・N区間壁脚部III層 (445)
I—O区IV層 (446)
I—P区III層 (447)

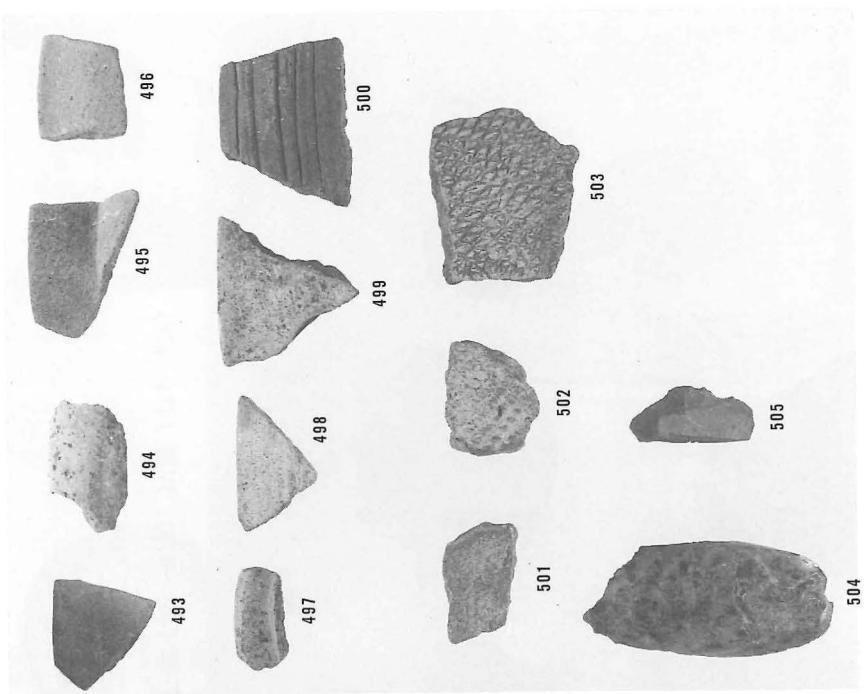
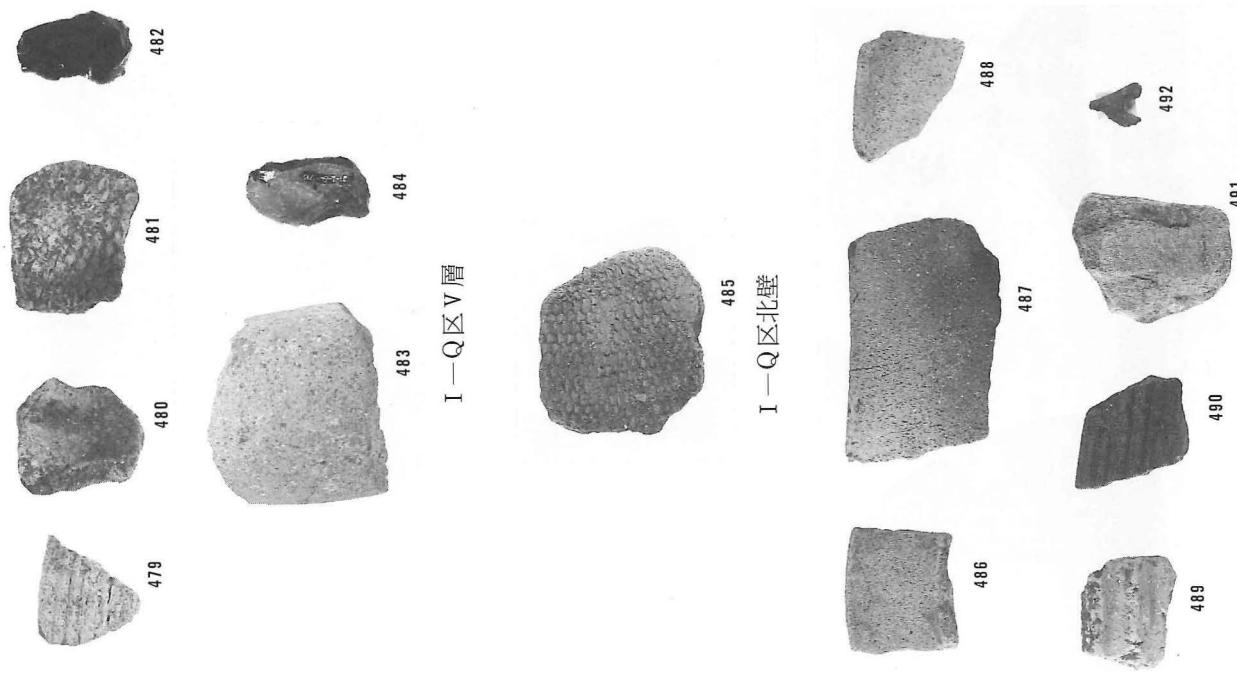


I—Q区III層

I—Q区III層石器 (467～473)、IV層 (474～478)



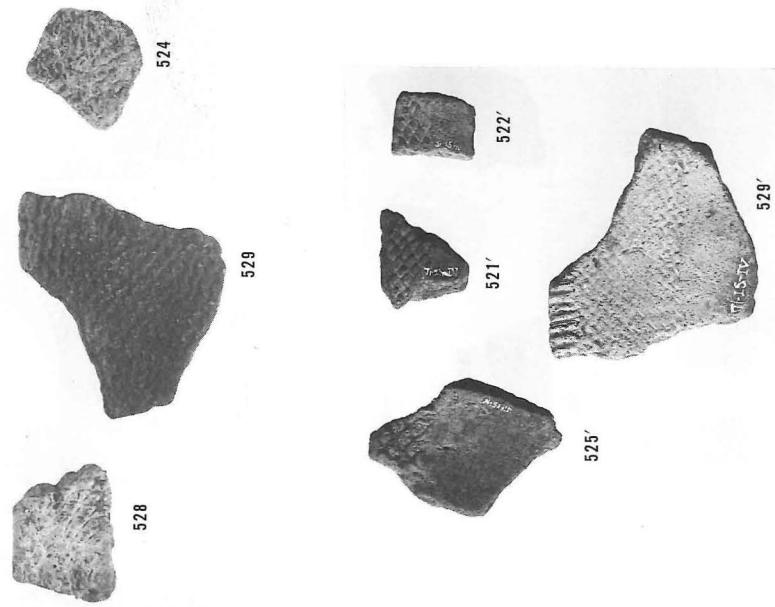
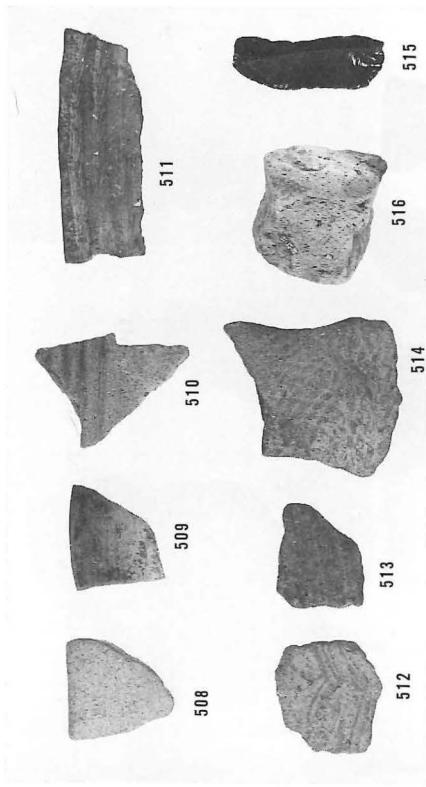
写真図版30 I区の遺物(16)



I-R区IV層 (493～505)、I-S区II層 (506・507)

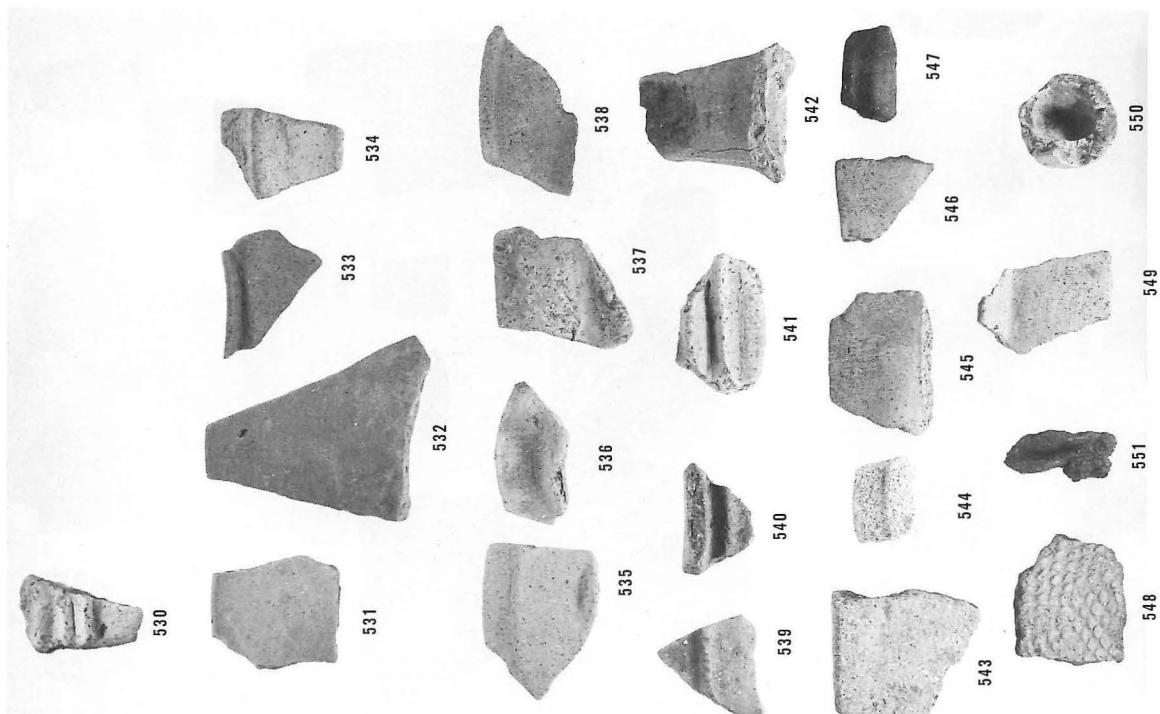
I-Q・R区間壁部III層 (486～488)、炉跡 (489)、表面採集 (490～492)

写真図版31 I区の遺物(1)



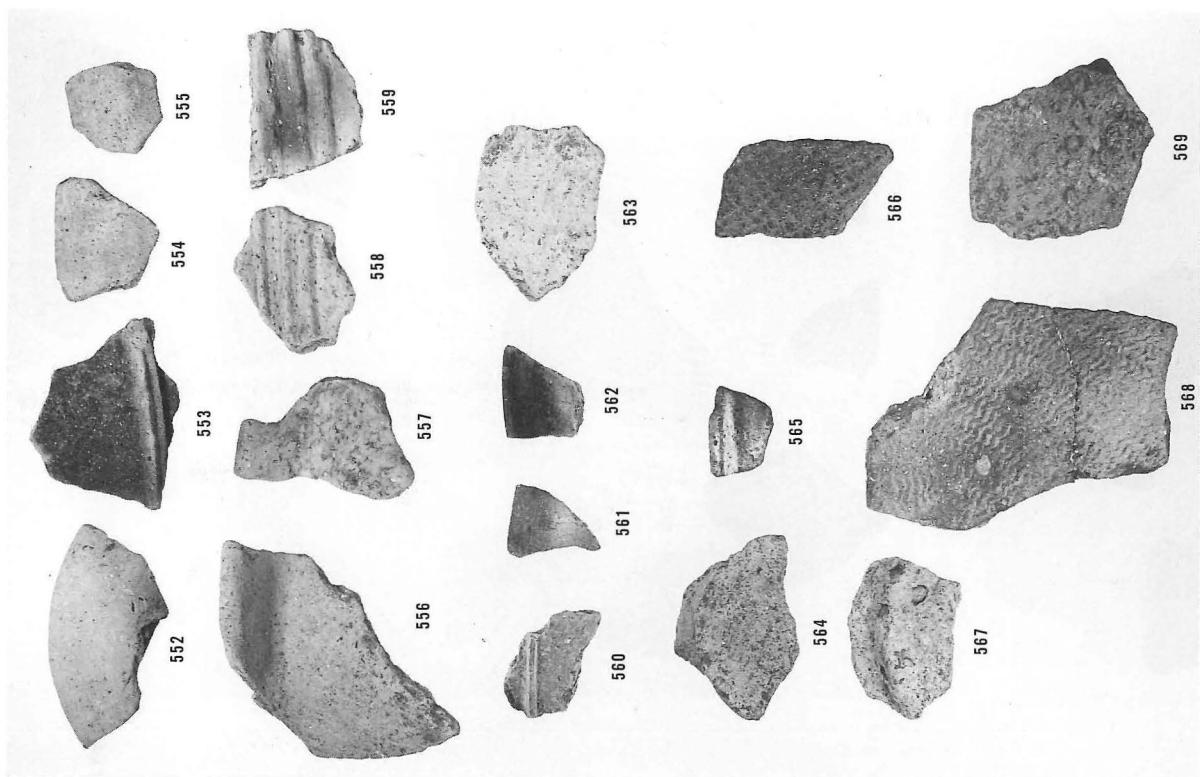
I-S区IV層

写真図版32 I区の遺物(18)



I—T区II層 (530)、III層 (531～551)

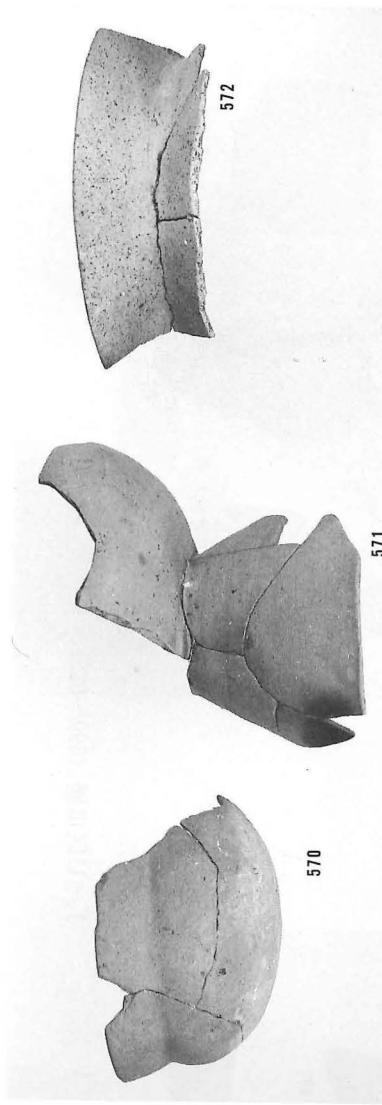
I—T区IV層 (552～569)



写真図版33 I区の遺物(1)



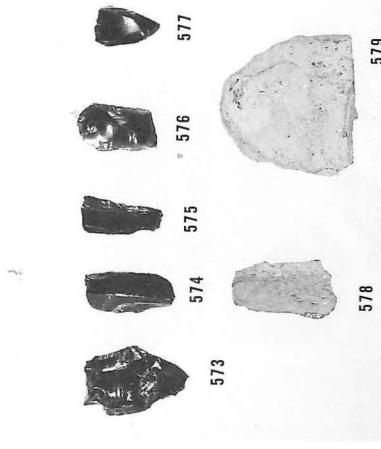
I-T区IV層 (568 裏面)
570



571

572

570



579

578

577

584

585

586

587

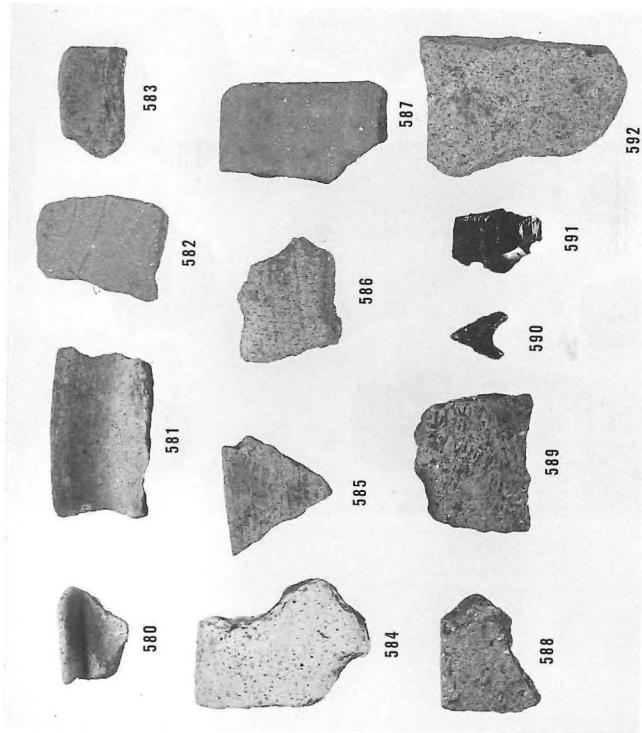
588

589

590

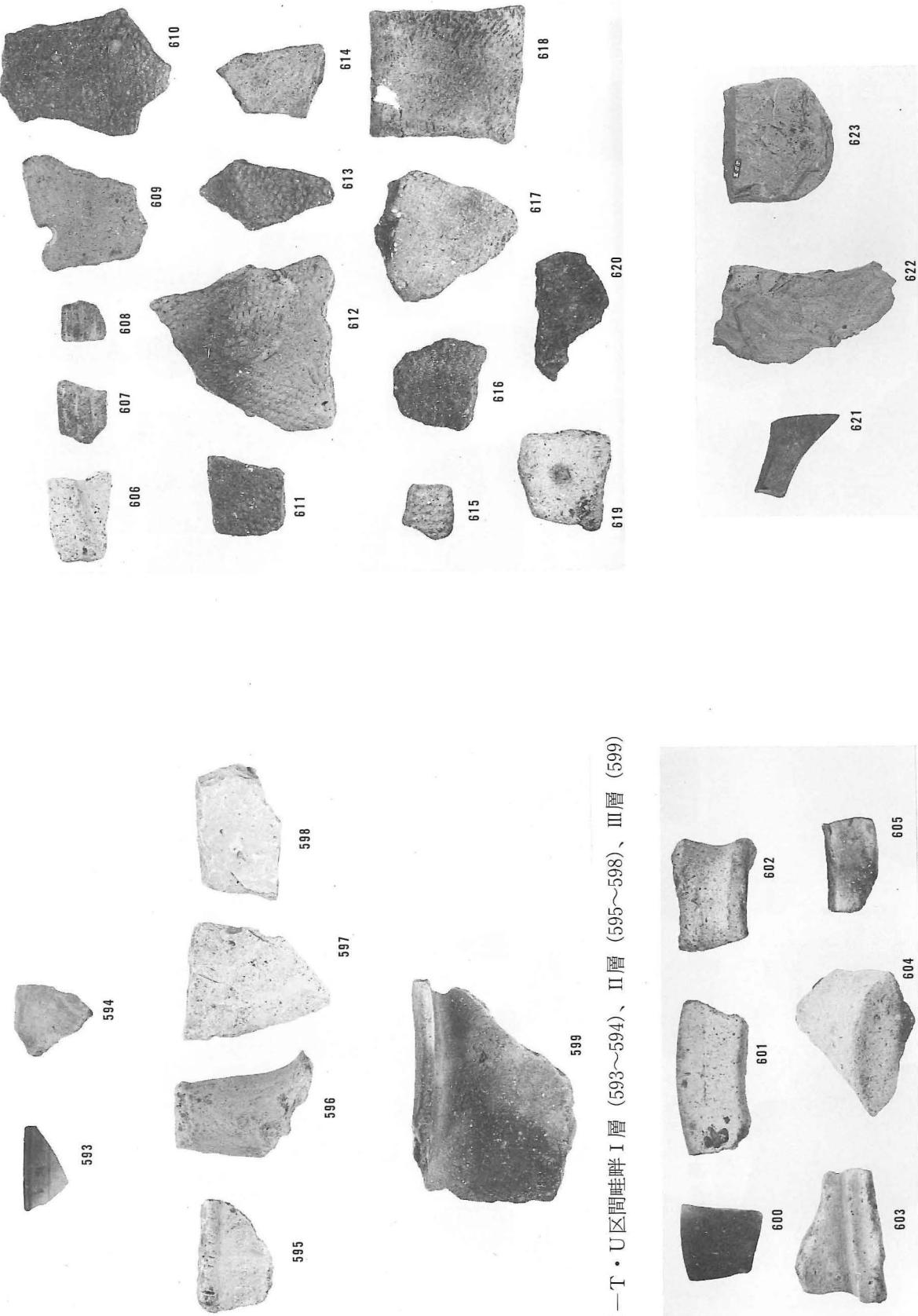
591

592



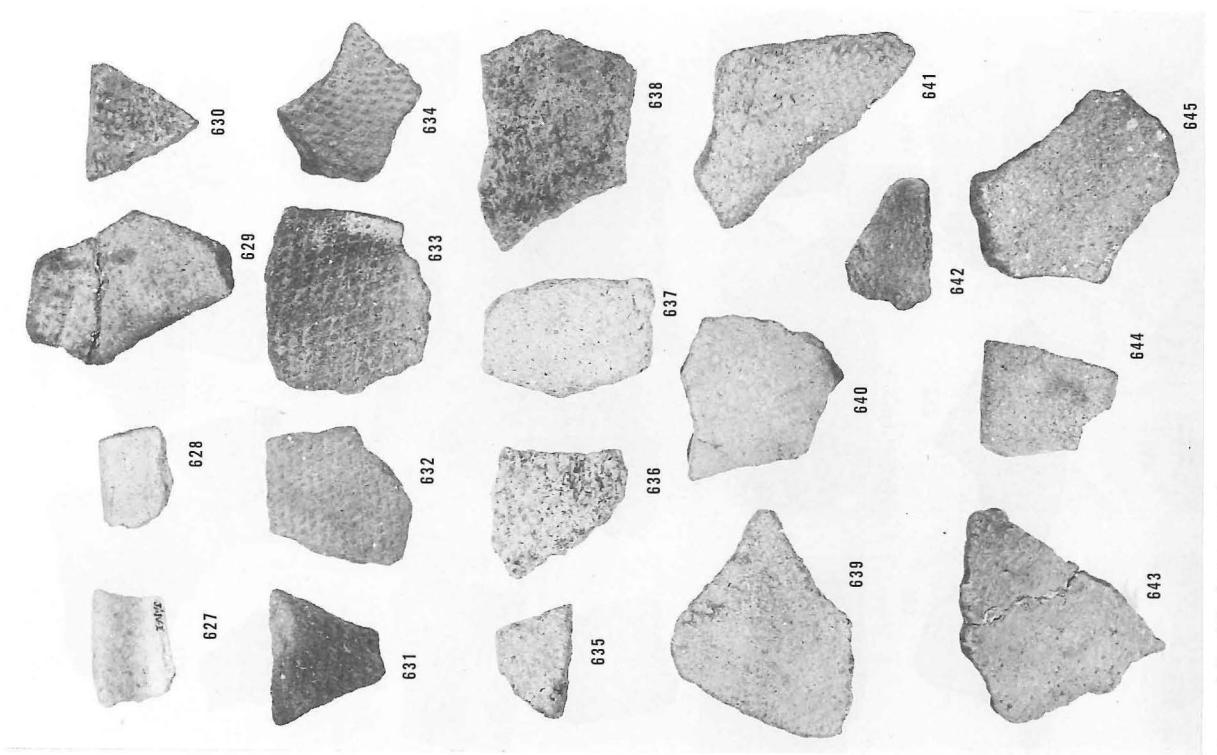
I-T区IV層 (570~592)

写真図版34 I区の遺物(20)

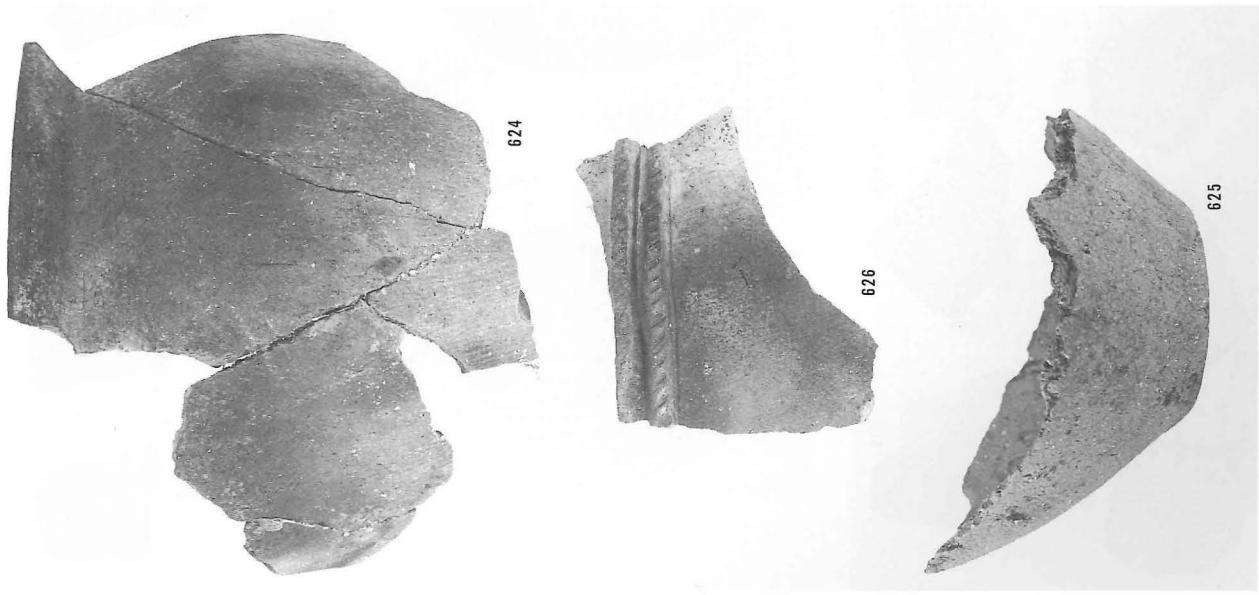


I—T・U区間壁畔I層 (593~594)、II層 (595~598)、III層 (599)

I—U区間壁畔 (599~622)

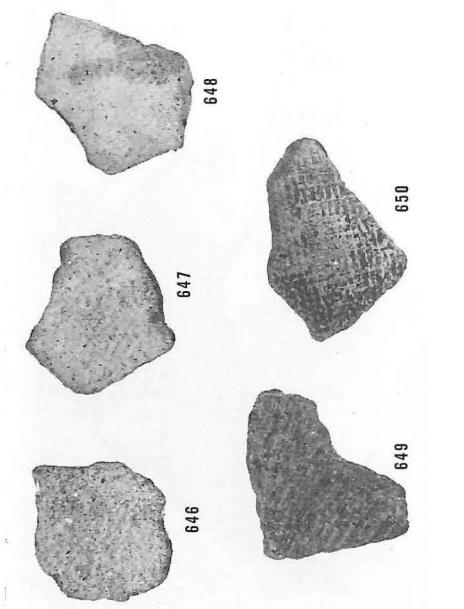


I-V区II層 (627~645)

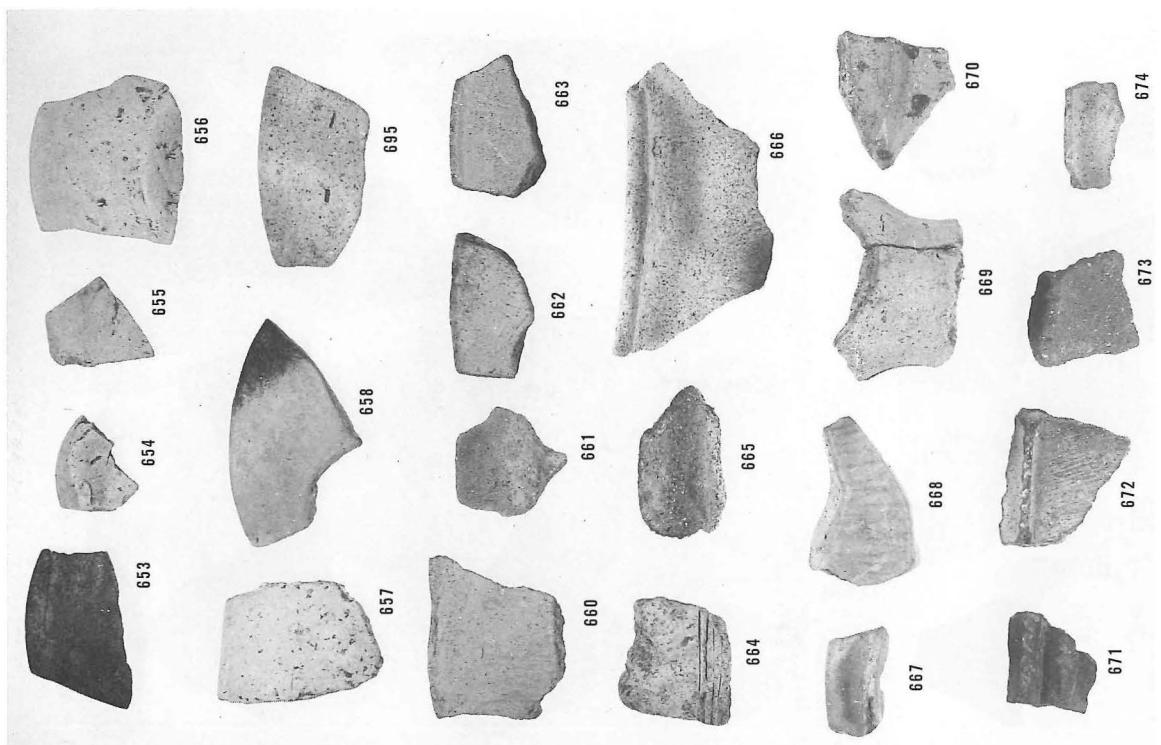


[I-U区] 1号集石遺構 (624~626)

写真図版36 1区の遺物(2)



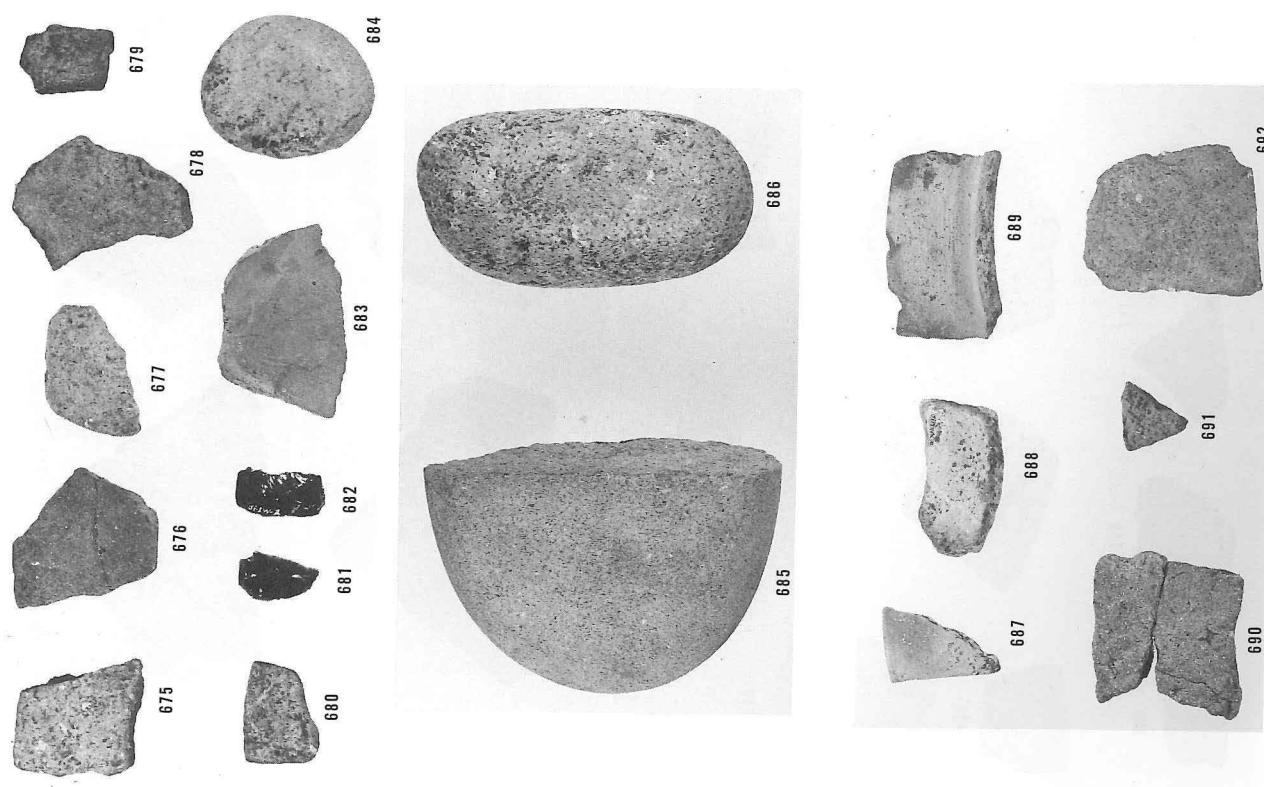
I—V区III層



I—W区III層①

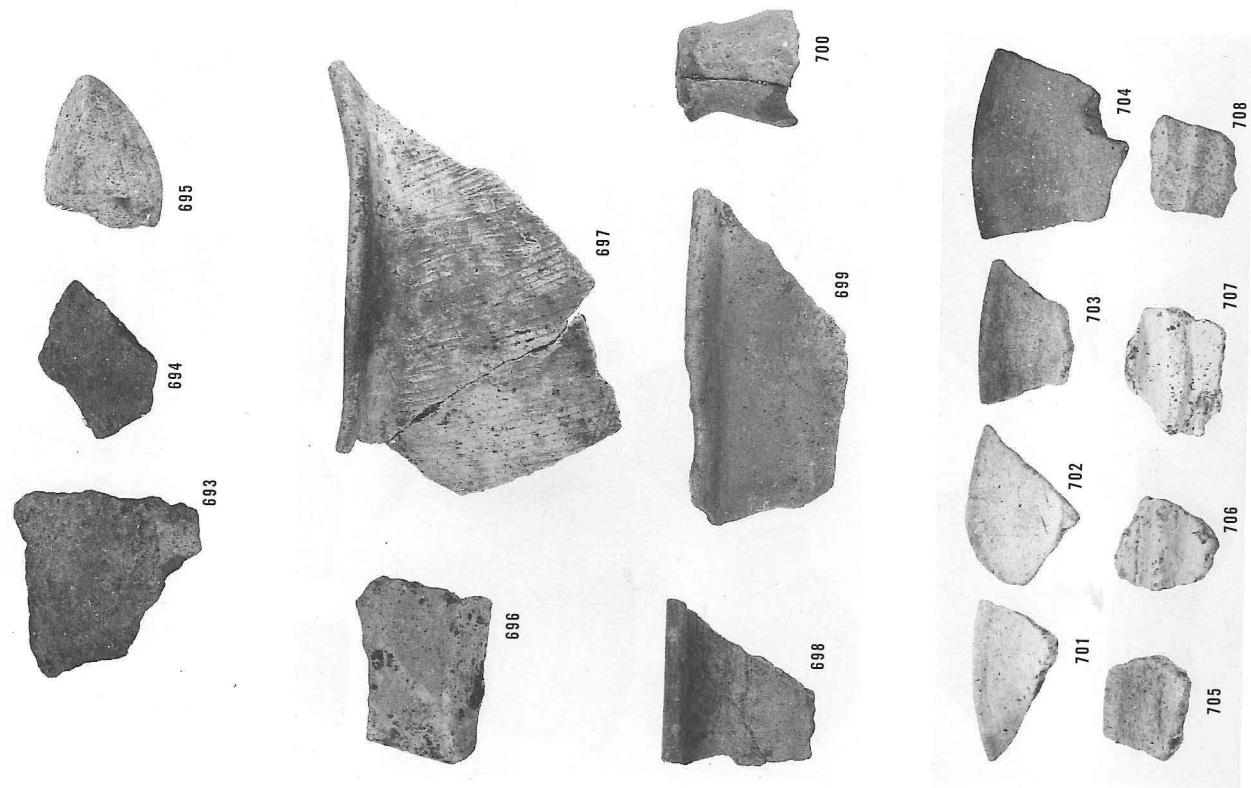
[I—V・W区間壁群部] (651・652)

写真図版37 I区の遺物(23)

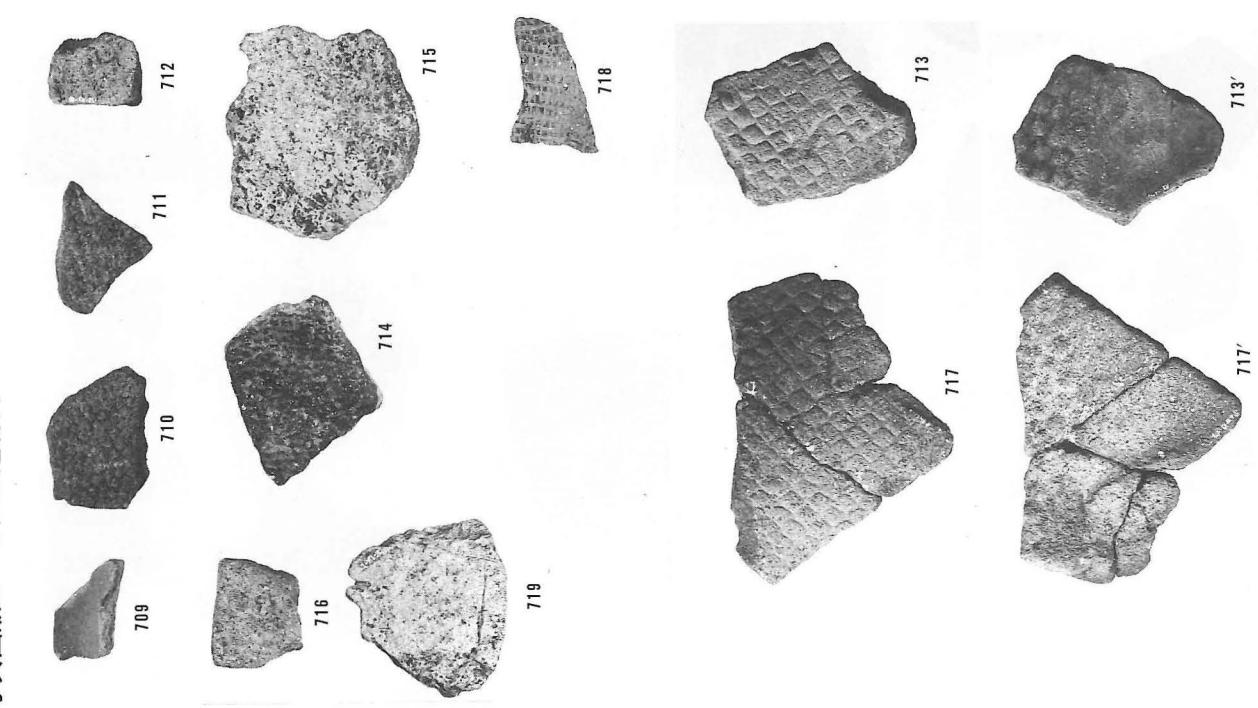


I-W区III層② (675~686) I-W・X区間畦畔部II層 (687~692)

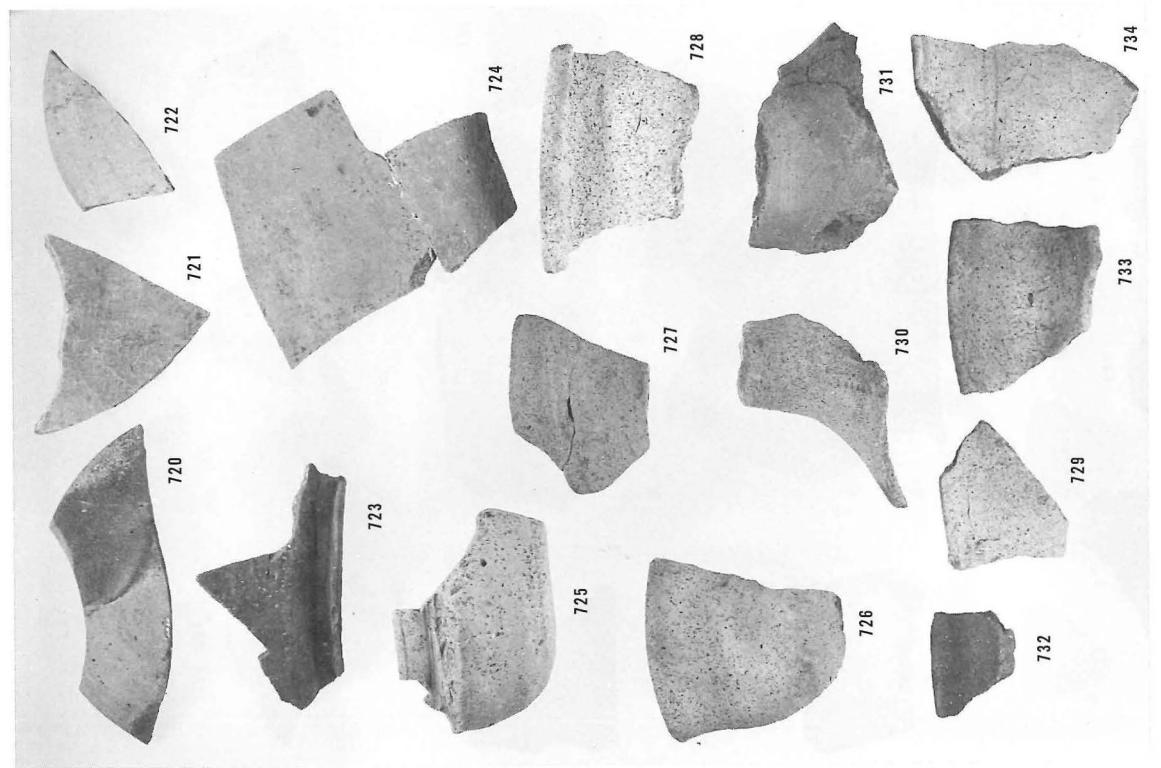
[I-W・X区間畦畔部] III層 (693~695)、[I-X区] III層 (696~700)、
W層 (701~708)



写真図版38 I 区の遺物(24)

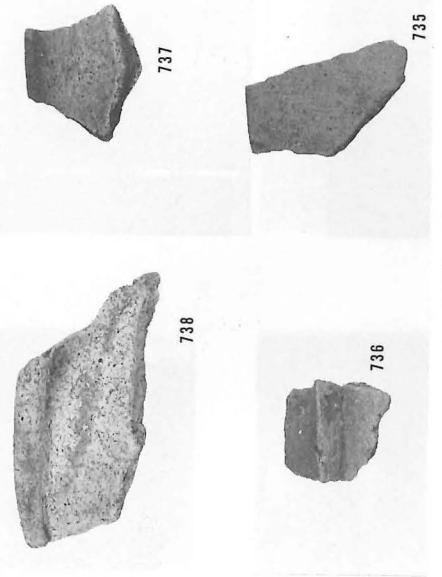


I-X区IV層 (709~719)

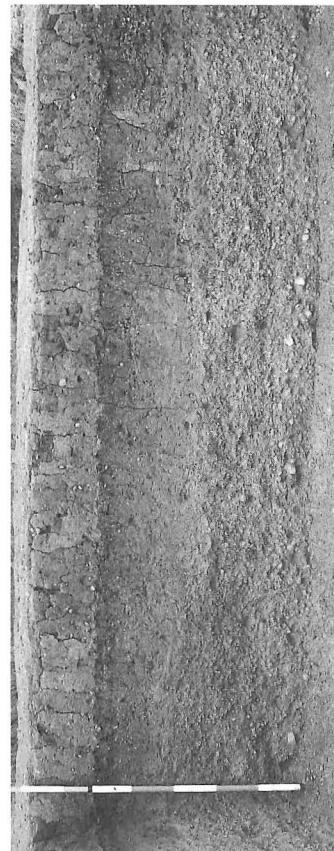
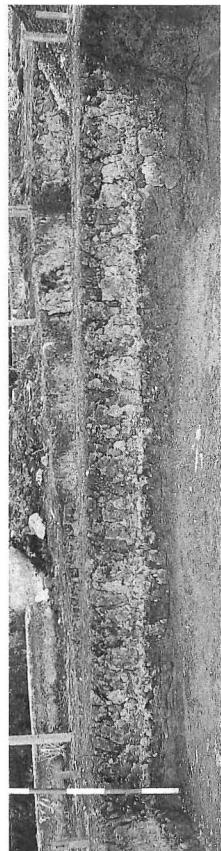


I-Y区III層 (720~734)

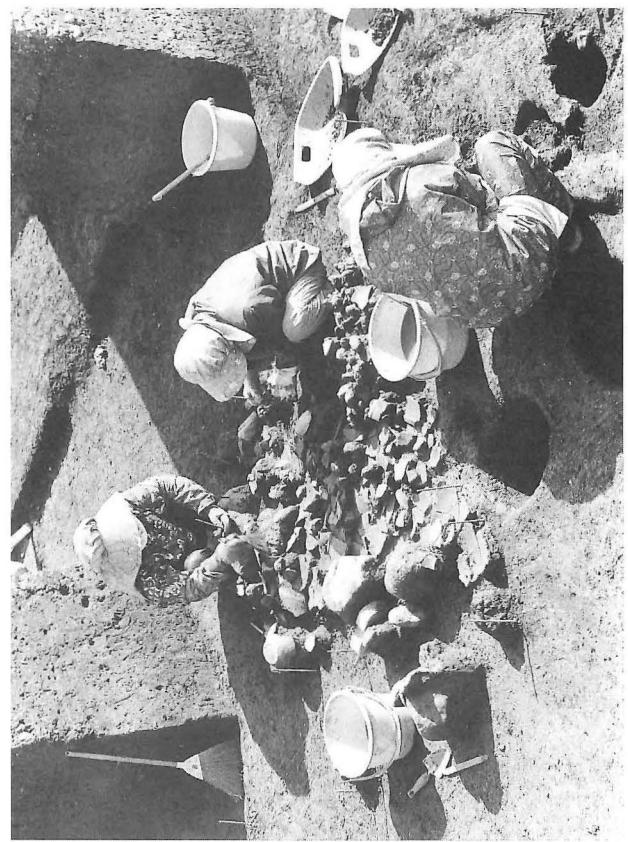
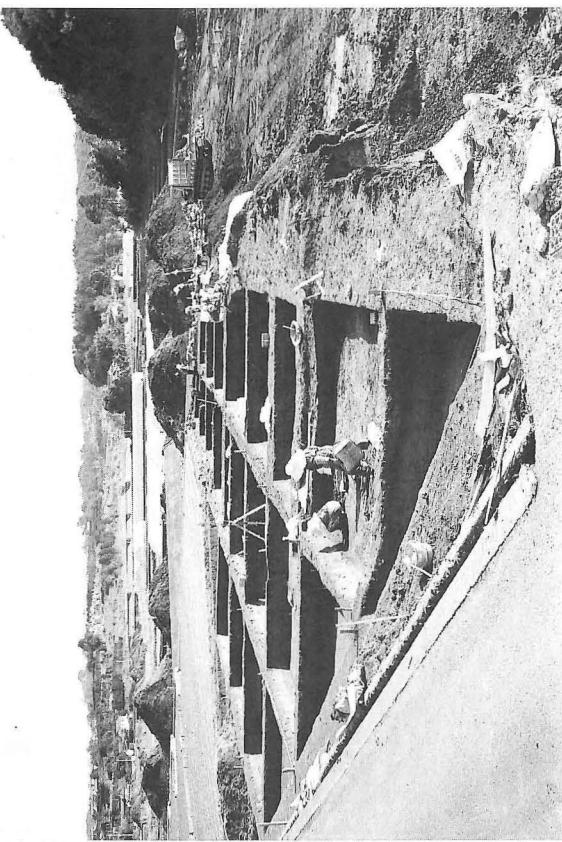
写真図版39 I区の遺物(1)



写真図版40 II区の遺跡と土層(1)



(上から) II-I 区北壁
II-L 区北壁
II-P 区北壁



(上) 隣内遺跡II区全景 (下) 同調査風景

写真図版41 土層(2)



(上から) II-K区東壁
II-O区東壁



(上から) II-V区東壁
II-X区東壁

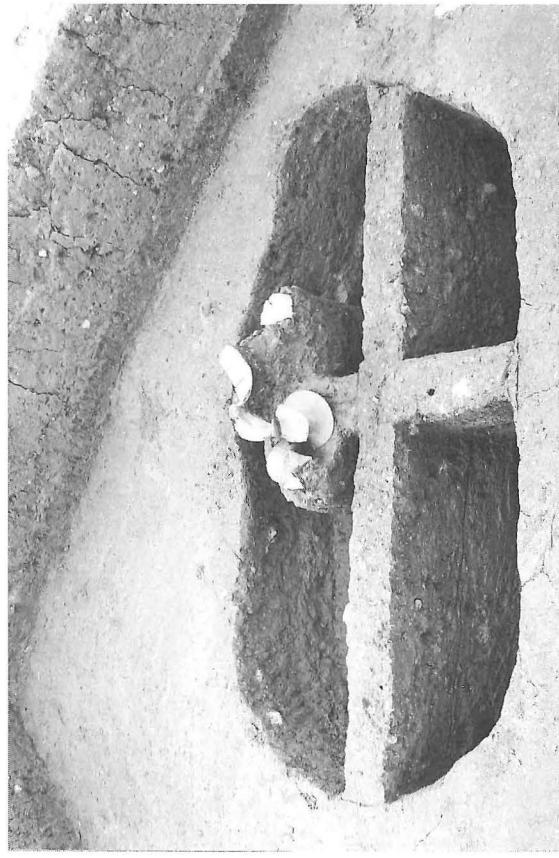
写真図版42 遺構(1)



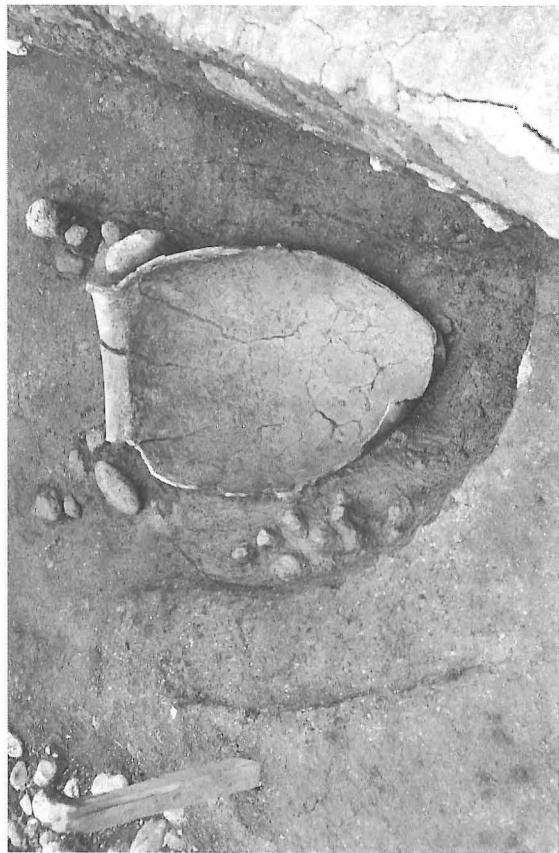
II-E区集石土壤検出状況



II-H区甕棺出土状況



II-E区集石土壤と恭獻土器



II-H区甕棺と土壤

写真図版43 遺構(2)



II—区層鐵斧出土状況



II—H区甕棺と口縁部付近の櫛群

写真図版44 遺構(3)



II-V・W・X・Y区間灰状遺構

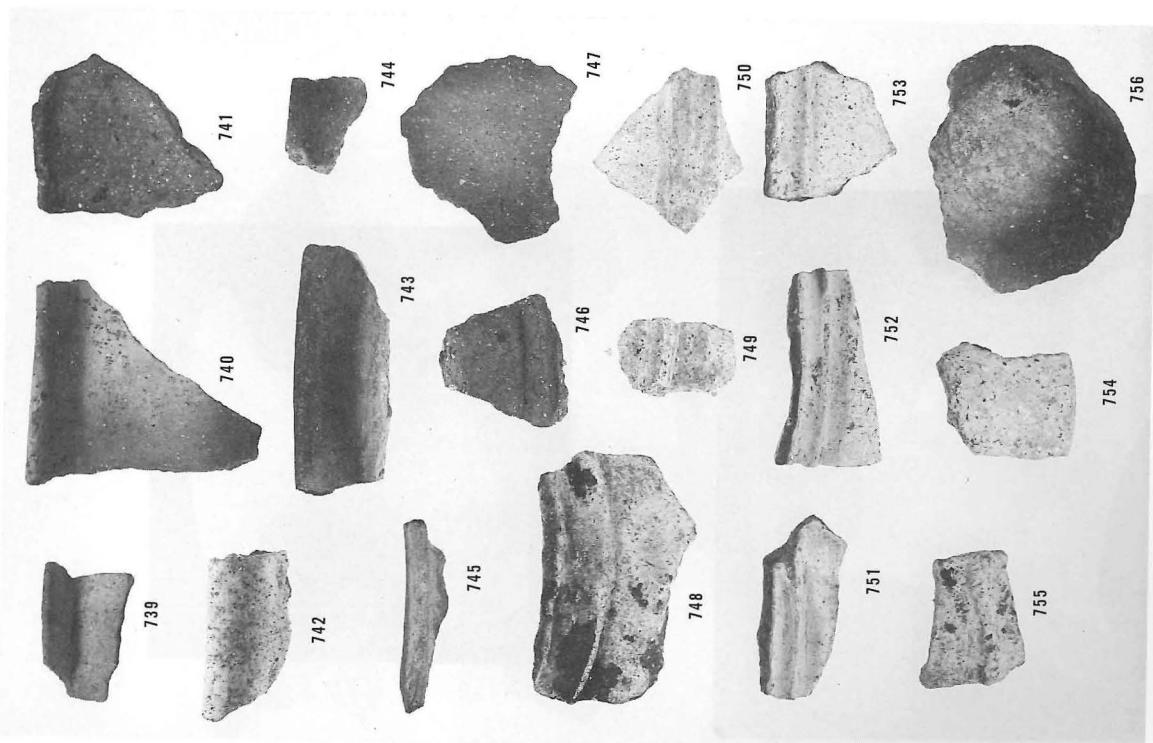


II-V・W・X・Y区間灰状遺構の遺物出土状況②

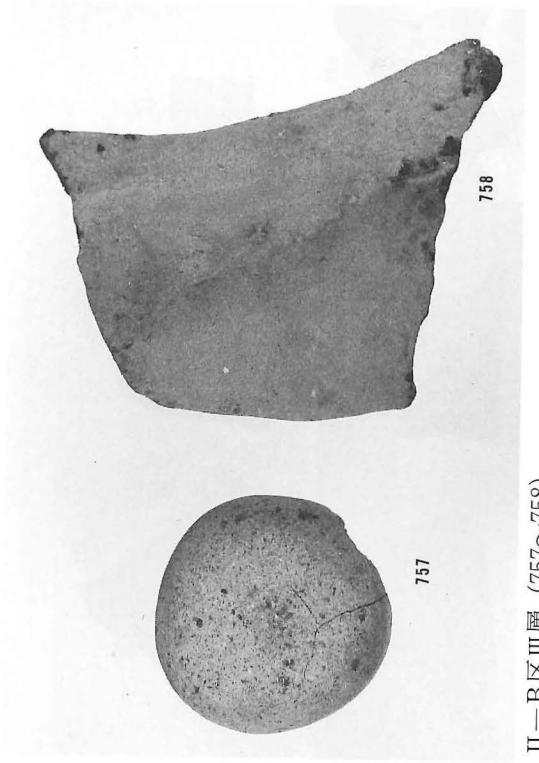


II-V・W・X・Y区間灰状遺構の遺物出土状況①

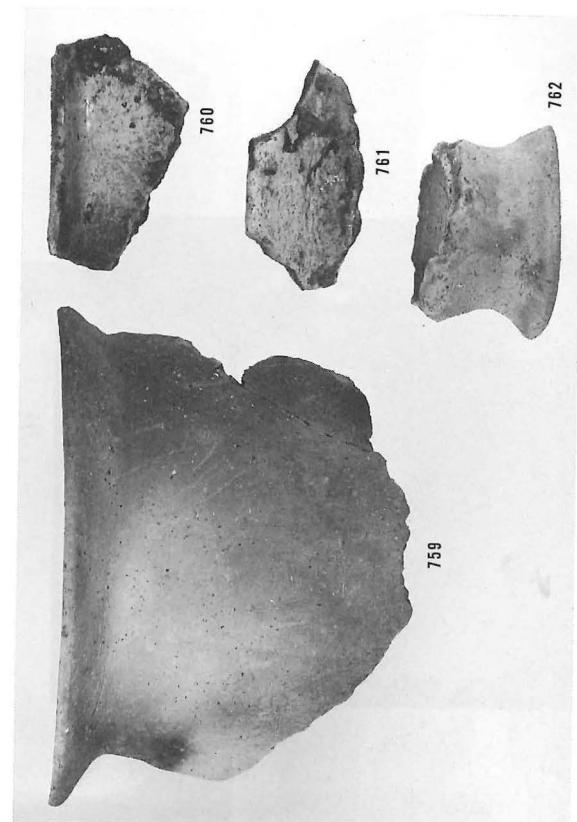
写真図版45 II区の遺物(1)



II-B区III層遺物①

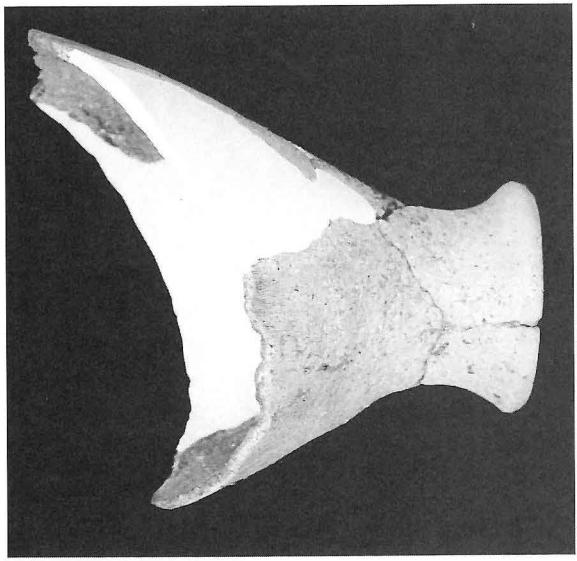


II-B区III層 (757~758)

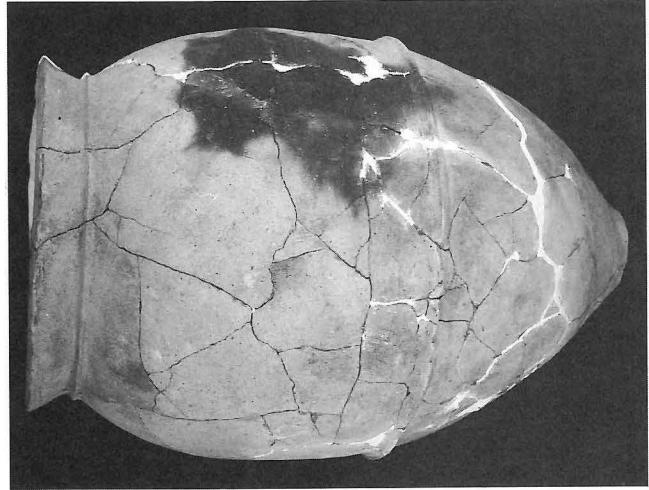


II-B・D区間畦畔部III層 (759~762)

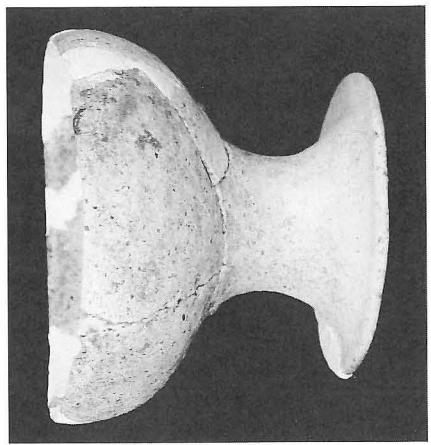
写真図版46 II区の遺物(2)



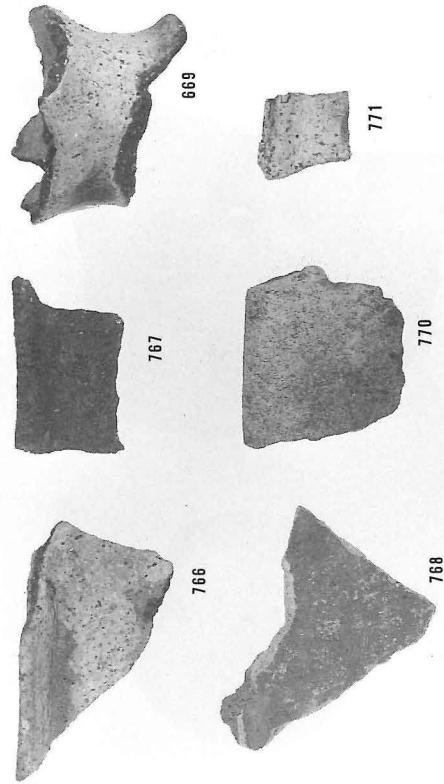
763



765

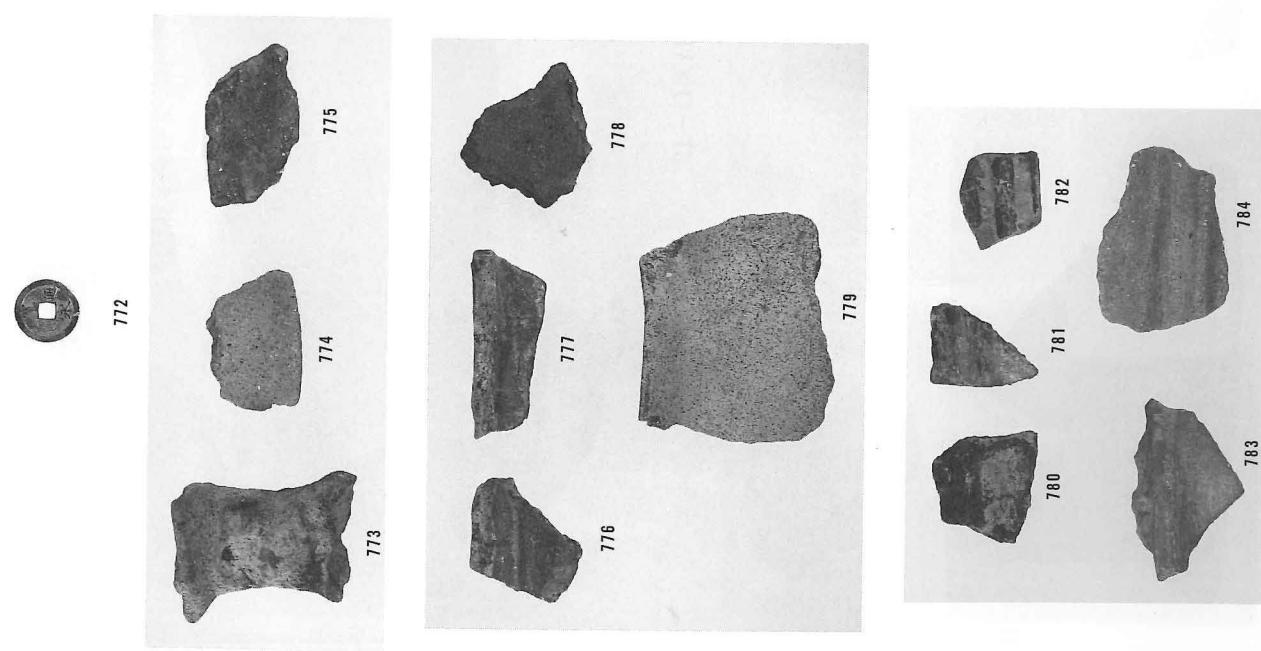


764



(上) II-B・D区III層 (現高19.4cm)、
(下) II-E区集石土壤恭献土器 (高さ12.2cm)

(上) II-H区甕棺 (高さ69.4~76.5cm) (下) II-H区III層 (766~771)



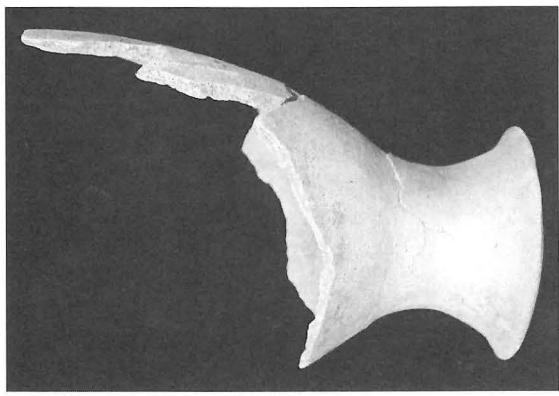
[II-J区] III層 (772)、[II-K区] II層 (773~775)、[II-K・O区間桂畔部] 土層 (776~778)、
V層 (779)、[II-L区] II層 (780~782)、集石遺構 (783~784)

[II-L・P区間桂畔部] IV層 (785・786)、[II-O区] IV層 (787~796)
※787の口径19.0cm

写真図版48 II区の遺物(4)

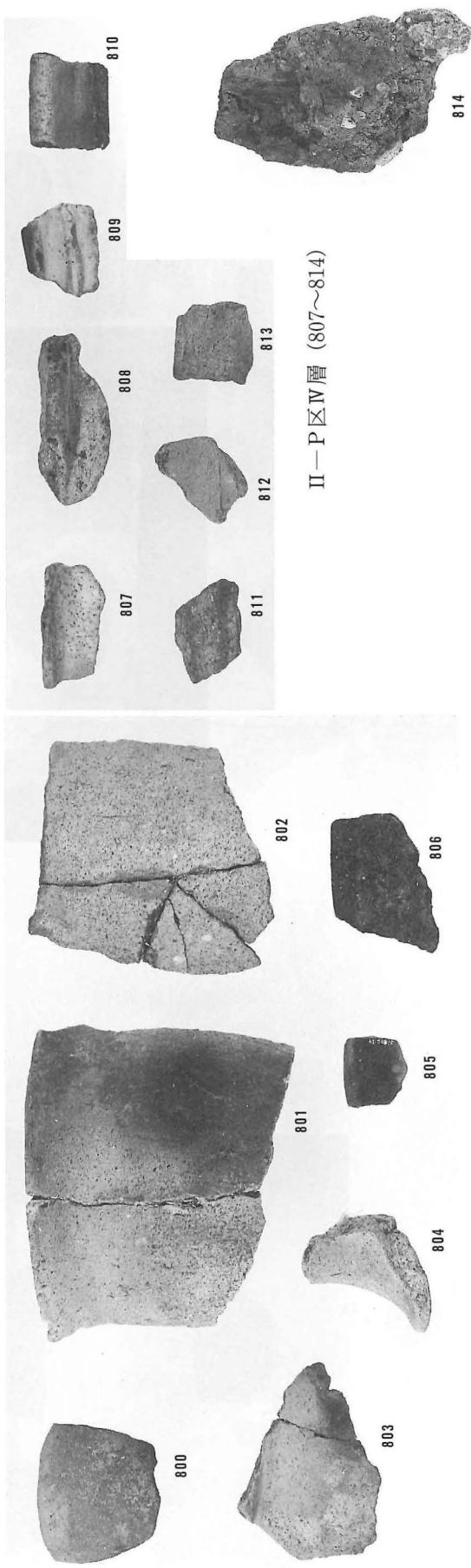


II—O区VI層 (797~799)



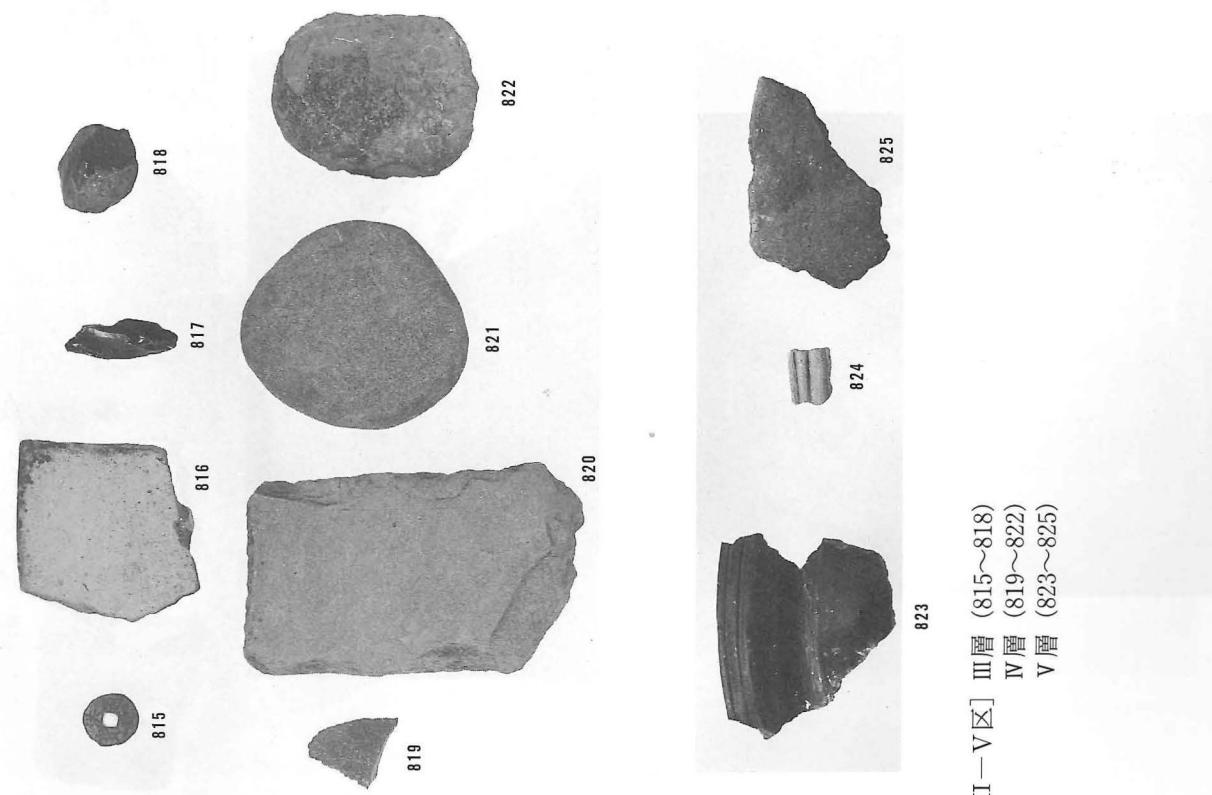
798

II—O・P区間壁脚部IV層 (800~806)



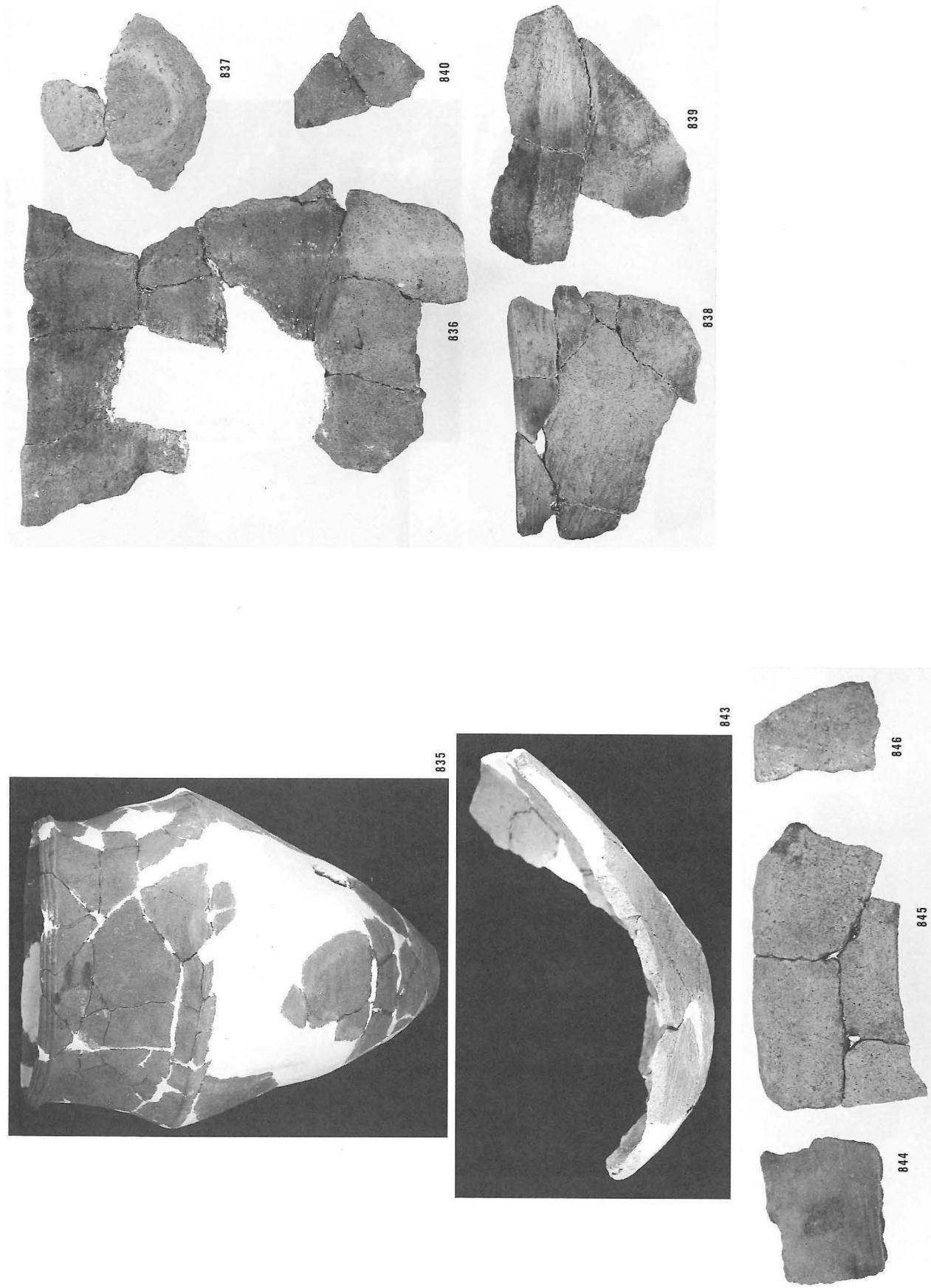
II—P区IV層 (807~814)

写真図版49 II区の遺物(5)

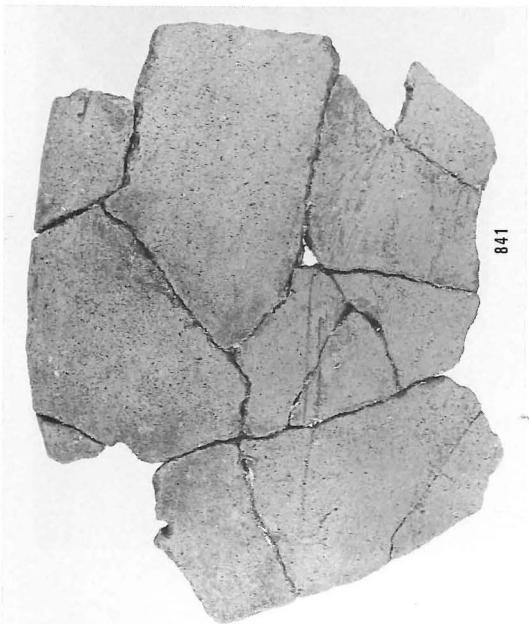
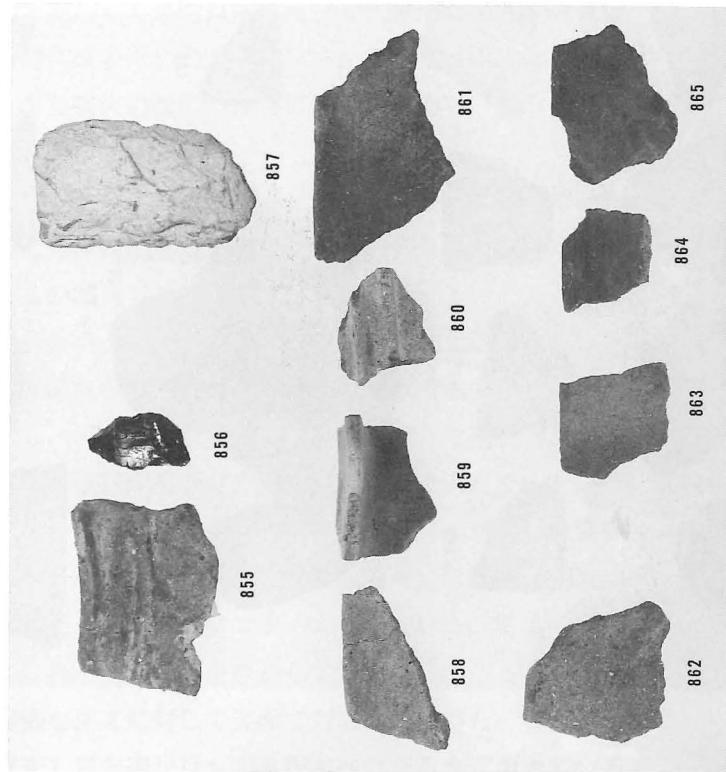
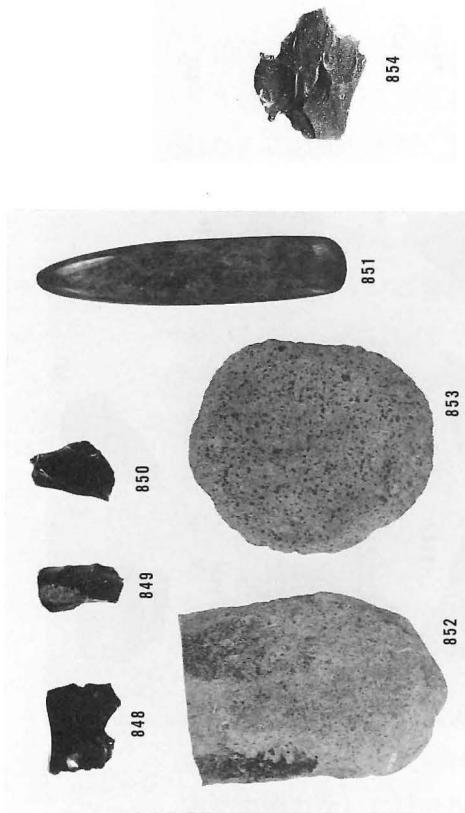


[II—V区] III層 (815~818)
IV層 (819~822)
V層 (823~825)

II—V区VI層 (826~847) ※847の高さ48.3cm

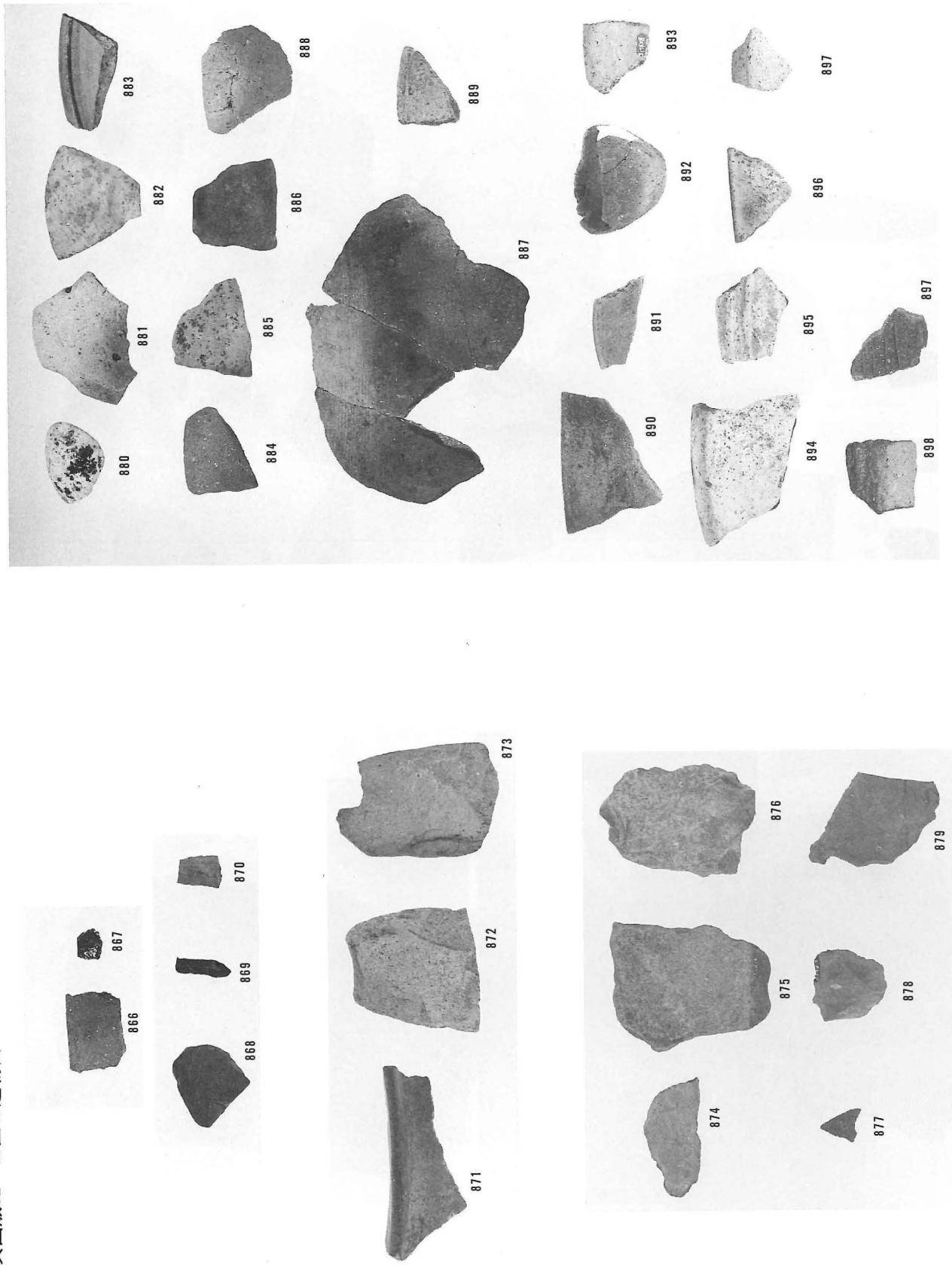


II-V区VI層 (835の高さ57.8cm、843の底径11.0cm)



[II-V区] VI層石器 (848~853)、[II-V・W区間畔部] VI層 (854)
 [II-W区] III層 (855~857)、W層 (858~861)、V層 (862~865)

写真図版52 II区の遺物(8)



[II-W区] V層 (866・867)、[II-X区] IV層 (868～870)、V層 (871～873)
[II-Y区] III層 (874)、IV層 (875～879)

II区表面採集遺物 (880～899)

あとがき

1996（平成8）年10月から開始した長崎県瑞穂町陣ノ内遺跡の発掘調査は翌年2月完了、引き続き報告書作成のためのデスクワークが同年5月まで実施された。この間9カ月、朝な夕な噴火の沈静した普賢岳と有明海を、その彼方に多良岳を眺めながらの月日が過ぎた。

発掘調査は晩秋から厳冬にかけて、焚き火に手をかざしながらの毎日であったが地元の方々にご奮闘いただき終了することができた。皆さんのおおらかな笑いとジョークに励まされての調査であったと考えている。

デスクワークは町教育委員会の一室において実施されたが地元の前田ちい・園田美鈴・相内すみ子・酒井美穂・酒井 恵・池浦和恵・本田加代美さんにお手伝いいただいた。ここでも、明るい笑顔とジョークで不慣れな遺物実測や拓本とり、図面のトレース、土器復元作業などの諸作業に堪えていただいた。一通りの技術も習得いただけたかと考えている。今回調査報告書が瑞穂町教育委員会で刊行されることになったが、町教育委員会職員の方々には繁雑な調査事務を終始積極的に進めていただき、調査を陰で支えていただいた。特に文化財担当の鈴木 稔氏には公私にわたって調査を推進していただいた。さらに昭和堂印刷の原口正人氏には面倒な注文に対して笑顔で対応いただいた。これらの方々の協力なしには発掘調査も報告書刊行もできなかっただろうと考えている。

最後になったが、この調査とともに従事いただいた永嶋 豊君は初めて行政調査を経験されたわけであるが、卓抜した対応能力を發揮し最後まで奮闘された。同君はこの春、第二の故郷ともいべき東北に赴任された。短い期間であったが多大の協力に感謝するとともに、青森の地で考古学の研鑽と調査に邁進されることを祈っている。

1998年3月 (正林)

報告書抄録

ふりがな	じんのうちいせき							
書名	陣ノ内遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	瑞穂町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	正林 護・永嶋 豊							
編集機関	瑞穂町教育委員会							
所在地	859-1216 長崎県南高来郡瑞穂町辛1060 電話0957-77-3156							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 . / "	東経 . / "	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号							
じん うちいせき 陣ノ内遺跡	みなみたかきぐんみず ほちょう 南高来郡瑞穂町	42363	85-23	32 50 45	130 13 20	19960226 19960402 09961014 19970219	本調査 324m ² 本調査 1255m ²	中山間地 総合整備
なつみねみようあざまえだ 夏峰名字前田	乙203ほか							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
陣ノ内遺跡	遺物包含地	弥生時代	弥生甕棺 集石遺構	弥生時代の 土器・石器				

瑞穂町文化財調査報告書 第3集

陣ノ内遺跡

1998年3月

発行 瑞穂町教育委員会
〒859-1206 長崎県南高来郡瑞穂町西郷辛1060
TEL 0957-77-2125

印刷 株式会社 昭和堂印刷
〒854-0036 長崎県諫早市長野町1007-2
TEL 0957-22-6000